

仮想の水

- Waterland of Inworld -



uota noel

published by relaxin'

第1章の主な登場人物

1. 島の人々

オルター	うたた寝書店リブロールの店主
ノルシー	ジャズ喫茶エバンヌの話好きな主人
ミリル	リブロールのお店番
コピ	島に詳しい子供
ダルビー	定期船の船長
ロスファ	消息のわからなくなる人
トラピ	大道芸の手品師
ノーキョ	島の自然を生かす先生
スロウ	工作好きな船上生活者
ネモネ	おいしい水を探しカバと旅する人
ナミナ	親子で小さな楽団をもつトラピさんの友達
エモカ	長時間発酵の酵母パンをつくる人
ユーヨア	骨董品の蒐集家

2. 古いノートの中の人々

ノート	メインランドから島に来て記録を書き残した人
ジギ婆	ノート氏にゆるりと消える島のことを教えた人
運転手	耳が遠くゆっくり話す老人



第1話 ことのはじまり*

わたしがこの地を訪れたのはかれこれ50年も前のことになりましょうか。それはもう見渡す限り水浸しと言っていいような島で、とても人の暮らせるようなところではありませんでした。岩礁の多くはユイロー（湯色）と呼ばれる水草におおわれ、島の北端にぽつりとあった灯台だけがかりうじて人のいた気配を残していました。苔の住処となってしまった灯台の他には先住者たちが生活した跡を残すものは何も見あたらず、まるで時の淀みの中に取り残されてしまったようなところでした。汽水の沼地に横たわる流木からぷつりぷつりと湧き出る小さな泡だけが、流れ去った時間の記憶を残しているようでした。

国の書誌省から発行されていた南部シミリーナ地方の文献によると、ミドリ鮫の現れる時期にはこのあたりで漁をするものも多くいたようで、手こぎの船が灯台のぼんやりした明かりだけを頼りに、波間を流木のように揺れている様子が見られたそうです。ミドリ鮫漁以外にこの地について書かれたものはなく、広い海にぽつりと浮かぶ島の姿は、まるで群れから取り残されてあてもなく漂う大きなクジラのように見えたかもしれません。

私が、そんな辺境の島に興味をもったのは、このあたりをよく知るといふ煙草屋のジギ婆さんから聞かされた話にはじまります。それは風もなくねっとりとした空気に包まれた夏の夕べのことでした。私は学校帰りに木材置き場の裏の藪のあたりで、夕暮れ時になると星空のように輝く空虫を探しをしていました。いまでもあの日に見た夕焼けの色は忘れられません。私の横で夕日をじっと眺めていた婆さんが、突然思い立ったように大きく唸り声をあげたかと思うと、絞り出すような声で話をはじめました。

「いいか、これだけはだれにも話してはならんぞ。それは、おまえさんの知らないずっとずっと遠くの小さな島で起きることさ。そこではな、誰もが寝静まったころあいを見計らってな、見たこともない大きな時間がゆるりと動くさ。ゆるりとな。それは間近で目にしたものにはかわからない光景だそうじゃ。でもな、一度それを見てしまうと、もうそこからは戻ってはこられないぞ。いつか迎えがきたらよおく考えることじゃ」

カゴの中にいる空虫を一心に覗き込みながら話すジギ婆さんの姿は普段とは別人のように見えました。作り話とも、うわさともつかないような気味の悪い話だったので、子供心に婆さんはなにか悪いものにとりつかれてしまったのではないかと思ったものでした。時間がゆるりと動く？

そんな話はだれからも聞いたことがありません。おかしいことを考えつく婆さんだなど思いながら、また雨期の合間の空虫採りに夢中になってしまいました。そして日が沈むまでのわずかの時間のあいだに、その奇妙な話は記憶の欠片となってしまう、ふたつに割れて見えたあの夕日の燃え上がる色だけが深く脳裏に刻まれることになりました。

それから18年余りの歳月が流れ、私は有名地方紙として名の知られたゲール新聞社で校正主任を任されるようになっていました。こどものころにはどこでもみかけたあの空虫もめったに目にもすることもなくなり、町の中心部にはたくさんのお店が軒を連ね、地方から運び込まれてくる手工芸品や農産物を求める買い物客で賑わっていました。この日もこの地方の初夏に特有の絹のようになめらかな風が吹いていました。観光にもちょうどいい季節で、新聞社でも長めの休暇を取る人が多くなる時期です。

やわらかい陽射が差し込む編集部で仕事の手を休め、私はアシスタントのケルミ嬢から旅行土産にいただいたカルミーナティを楽しんでいました。独特の渋みから好みがわかるお茶ですが、彼女は私が好きなことを誰かから聞いていたのでしょう。自分のお土産もそっちのけで探してくれたそうです。彼女のそんなやさしい気持ちが編集部をいつも明るくしてくれます。私は久しぶりに口にしたそのお茶を楽しみながら、積み上げられた資料の山を整理していました。

そのとき偶然目をやった古いサイドテーブルの上に色あせた封筒があることに気づきました。いつも仕事用として愛用していたテーブルなので見慣れない手紙があること自体が不思議ではありませんでした。ずいぶん古い封筒だなと思いながら宛先を見ると前の編集長宛に書かれたものでした。偶然目にしたこの一通の手紙が長く忘れ去られていた記憶を呼び覚ますことになるとは、そのときは思いもしませんでした。

週末に締め切りの仕事もひと段落し書類の片づけをしていたときでした。窓から一筋の風が吹き込んだかと思うと、あの古い封筒が私の足元にひらひらと舞いながら落ちてきました。仕事の書類かもしれないと手にしてみると青いインクで描かれた文字が今でも乾いていないように水を含んでいることに気がきました。古い封筒に乾いていないインク。編集長宛に書かれた手紙ではありましたが、どうにも気になってしまい、手元にあったペーパーナイフで封を開けてみることにしました。中の便箋もかなり古いもののようなのですが、インクは表書きと同様に湿り気を残すものでした。二つ折りにされた便箋をゆっくりと開いてみると、宛名もないメモ書きのような1枚の紙が入っていました。

それは艫を波に取られて不思議な島に迷い込んだという男からの売り込み情報でした。そこに書かれていたのは、星も流れ落ちてしまいそうなほどにねっとりとした霧の夜に、目の前にあった島が蜃気楼のようにゆっくり揺れながら消えていったと書かれていました。殴り書きのような筆跡からするとかなり慌てていたのかもしれませんが。くすんだ封書の消印を見ると24年も前に書かれたものでした。差出人の名前はカミール・ヤイハブと読めました。カミール... そう、カミールは忘れもしないあのジギ婆さんの亡くなったご主人の名前でした。

私は、その手紙を見た瞬間に、もう居てもたってもいられなくなりました。そこにあった島がゆるりと消えてしまう.....時間がゆるりと動く.....ゆるりと.....忘れていたジギ婆さんの話が鮮明に蘇ってきました。ふたつの話のなにかが繋がっていくという思いがふつつつとわき上が

りました。そのころにはあのジギ婆さんも亡くなっていましたから、当時の話を確認するすべもありません。それがあの話しと同じ場所でおきたことなのかどうかさえもわかりませんでした。島への思いは抑えられないほどに大きくなっていきました。

その翌日から急き立てられるようにやり残していた仕事の片付けを始め、1週間後には長期の休暇申請を出して、手紙に書かれていた場所を訪れることを心に決めていました。ちょうど町の統合話が持ち上がっていたころでもあったので、編集長からの引き止めもありましたけど、私のまだ見ぬ地への思いは抑えようがないほどにふくらんでいました。あのころは、寝る間もないほどの仕事を抱えていたので、少し町から離れたいという気持ちがあったのかもしれませんが。そこに出かければ自分の知らない何かに出会うことができるかもしれない。

突然目の前に現れた24年前に書かれた手紙。それは自分にとってとても大切な何かを伝えようとしているのではないだろうか。待ち焦がれていたものにやっと出会える、何の根拠もない期待だったと思います。ゆるりと動くなにかは私の心をつかんだまま離れず、思いがけず知らない土地へと引き寄せられていきました。そして、ひと夏の滞在という家主との約束で部屋の片づけをして住みなれたアパートの鍵を手に街をあとにしました。

第2話 残されたノート

「これが、橋のたもとに浮かんでいた瓶から見つけられたノートの書き出しだよ。実際には最後に書き足したのかもしれないけどね。ノートはこの島を目指してきた若者が後世に何かを伝えるために書き残したものだね。当時のことだから、一人ではさぞやたいへんな旅だったろう。ノートは68年前にここを訪れた人がみつけたものと伝えられているけど、書かれている内容からするとそのさらに50年から100年以上前のことだと思うよ。今から200年近く前かもしれないね」

「ひみつがいったい？　じっじぜんぶ見た？」

「少なくともここにあるものは隅々まで全部読んだよ。ただね、これは現物ではなくその一部を複写したのだから読み取れないところも多い。書き写すことさえできないところもたくさんあったらしいよ。ページの抜けもあるようだね。それを、書いた本人が持って行ってしまったのか、島のどこかに残っているのかもわからない。なにしろ200年近く前の話だし、そのころは島の住人なんて海鳥とミドリ鮫ぐらいなものだろうから。5年前に引越していった住人が島に残しておいたほうがいいだろうということでこの写しを店に置いていってくれたのだけれど、それでなければだれの目にも触れないまま忘れられたかもしれない」

「ノートさん、たすかってよかった」

「なんでも、嵐と大潮が重なって広場にまで水が入り、水かさがひざの高さほどになったときに橋のあたりに流れ着いたそうだよ。おそらくは島のどこかに隠してあったものが、増水のせいで土といっしょに流れ出してしまったのだろうね。そのノートを借りた人が写しとったのがこれだね。ノートそのものは、いつのときか行き先がわからなくなって、今はこの写しだけが島に残ってるというわけだね」

「じっじのたからもの」

「そうならいいがね。ときどき読み直してみても秘密を匂わせるようなものさえ見つけられなくてね。実際のところ単なる生活の記録として書いただけなのかもしれない。コピの言うように宝物でもみつかる楽しいけどね」

コピはノートの話が大好きだ。同じ話を何度も飽きずに聞いている。

「ノートの話はこれぐらいにして。今夜はお月様もきれいに見えそうだし、早めに店仕じまいして東浜のほうまで散歩でもしてみるかい？　ミリルさんも今日はどこかに出かけるような話をし

ていたな。月のきれいな日ぐらい早く帰ったらどうかと話したからね」

「おなかですいたからコピかえる。じっじもおふろでシワのおのぼし」

「こら、よけいなことはいわなくていい」

「あしたもくる」と言うと椅子を飛び降りた。

コピがこの島に来たのはいつごろだったか。ある日突然店先に現れて、いきなり何してるのと聞いてきた。あまりに唐突だったので、思わず本屋に見えないかと答えると、本があんまりない本屋さんだと物怖じもしないで言ったのを今でもよく覚えている。もともと当時は景気も悪くて本の収集も思うようにできていなかった。新しく越してきた人から読み終えた本を集めていたのが現実で、そう言われるのも仕方ないことだった。コピは見たままを言っただけだ。

結局その日は、本が船で運ばれてくる話や、島民が読んだ本を店において、またほかの人がもっていくというような話をしただけだったと思う。おかげで、コピがどういういきさつでこの島に来たのかは聞かず仕舞いになってしまった。なにかこの島への思いがあつて来たようだが詳しい事情はいまでもわからない。ここではそんなことを知ることさえあまり意味がなく、誰もそれぞれの過去について気にとめもしない。見知らぬ人がふらりと立ち寄って、顔見知りの方が突然いなくなる。いつものことだ。メインランドに住む人からするとちょっと奇妙な近所づきあいがここでの日常なのだ。でも、その気兼ねのないつきあいが町にはない良さだと思っている。戻りたいときにいつでも帰れる場所があるのは、それがどんなところであろうといいものだろう。

今日は湯船に入ると温まるユイローの葉をたくさん摘んできたから、灯台でゆっくり月見風呂でも楽しむことにしよう。

東の空には大きな赤い月が昇り始めていた。この島の月はユイローの花粉を含んだ大気のせいかととても赤く見える。この季節ならではの景色として昔から楽しみにする人も多い。

今夜はその赤い月を酒の肴にじっくりとノートを読み返してみるのもいい。これを書いた先人もきっと月明かりを頼りにノートを書き綴ったのだろう。

第3話 旅立ちの日*

***** ノート *****

誰一人として立ち入ることのなかった、現実とも幻とも判断できない島への一人旅は、アパートを出てすぐの角地にある、食料雑貨品店ハロウズで購入した数冊のノートとともに始まりました。このお店は数ヶ月前にできたばかりで、手製のものをはじめ、地元では日ごろ目にするもののない他所の生活道具も取り揃えられていたので、以前から気になっていたところでした。ノートもみたこともない皮の表紙で手漉きの紙を綴じ込んだ、ちょっとめずらしい装幀がされたものでした。もし私が消えてしまうことがあったら、その手がかりを残すものになるかもしれないという思いもあって、旅費の多くを購入費用に当ててしまいましたが、それは正しい判断だったと思います。なぜなら、あなたが今その記録を手にし、私が存在したことを証明するものとなったのですから。

近くにあるコーヒーハウスでいつものシナモンティーとパンをオーダーすると、店の常連客の一人がどちらへ？と話しかけてきました。

「いや、時間を探しにですね。この前話した例のあの島です」

「いよいよ出発ですか。見たこともないような時間がみつかるといいですね」

「どうでしょうか。あてのない旅なので」

「いや、きっとみつかるに違いない。こんないい日和の旅立ちなのですから心配には及びません。ましてや、東の空には透き通るような月まで浮かんでます。これは吉兆にちがいない。お土産話を楽しみに待ってますよ。そうだ、もし荷物にならなければこの携帯日時計を持って行ってやってください。磁石もついているので何かの役に立つかもしれない」

「ありがとう。ありがとう」

そして、シナモンティーを少し残して、私のあてのない時間探しの旅ははじまりました。たった1枚の地図を頼りに、南部共同鉄道と旧式の蒸気バスを乗り継いでまる2日。車中に一泊する長旅です。まだ、町が目覚める前だったので駅は人影もまばらで、眠そうな目をした駅員が改札の掃除していました。時刻表と列車を確認して寝台の車両へ乗り込みました。私のほかには数人の乗客がいただけでした。早朝から寝台夜行列車に乗るのですから、みんなかなり遠くまで出かけるのでしょう。私と同じところを目指す人もいるかしれないと思うと長旅も少し楽しみになりました。運転手が乗り込んでしばらくすると長い汽笛とともに列車はリアヌシティを後にしま

した。

視界から遠ざかる町並みを見ていると、なぜかしら会社の同僚や友達顔が次々に浮かんできました。新聞社に入社以来、一ヶ月もの休みを取ったことはなかったですから、なにか心に大きな空白ができるような気持ちだったのかもしれませんが。町が見えなくなってしまいそうなところにジギバあさんの顔も浮かんできました。じっと押し黙ったままこちらを見ていました。

婆ちゃん、行ってくるからね。しっかり見守ってておくれよ。きっとたくさんのお土産をもって帰ってくるから。

最初のうち車窓から見えていた家並みも徐々に少なくなり、一夜明けたころには森の間に転々と羊の放牧場が見えるだけで人影もまばらになっていました。心配していた天気の方は崩れることもなく、いい旅のはじまりになりました。気がつくときり合わせた乗客の姿もなく、眠り込んでいるうちにそれぞれの目的地で降りてしまったようです。一人になってからの時間は思った以上に長く、最後の駅までの一駅だけで半日ほどもかかり、はたしてたどり着くのだろうか心配になったほどです。到着を告げる汽笛が鳴ったときには、正直ほっとして胸をなでおろしました。

***** ノート *****

第4話 おくれて話す老人*

終点は老木の生い茂る無人駅で、赤く錆びついた小さなバスだけが私を待っていました。周辺には人の気配もなかったので、すぐに開いていたドアからバスに乗り込み、運転手に行き先を伝えました。

「終点のアター・リーフまでお願いします」

「.....」

「あの、このバスは共同鉄道の運営するものですね？」

「.....」

「えっと、これは岩礁のほうに行くバスでいいですね？」

「.....」

耳が遠くて聞こえないのか、運転手からの返事は返ってきませんでした。ただ、しきりに発車時間を気にしているようでした。バスの中ほどの席に座って、これから向かう先に見えていたきれいな雲を車窓から眺めながら出発時間を待ちました。

運転手に話しかけたことも忘れ、鞆から地図を出して方角を確認していたとき、

「わしが個人でやってるバスでさあ.....」

「行くところはいつも同じだ.....」

まるで今そこに戻って来たかのように、老齢の運転手は突然私に向かって話しだしました。田舎暮らしのせいでのんびりしてるのか、よく耳が聞こえなかったのか。変なずれを感じるお爺さんでした。

「そうさ、岩礁の方面へ行くだ」

その後、運転手からの言葉もなく、バスは発車予定時刻ぴったりに駅を出ました。次の列車が来るわけでもなかったのに、時間になるまで待っている必要があったのかどうか私には知る由もありませんでした。蒸気で走るバスはリアヌシティでは目にしなくなっていたこともあって、なつかしい乗り心地を楽しんでいるうちに、子供のころ母と買い物によく出かけたことを思い出しました。少し遠方まで出かけるときにはいつも名前を縫い付けたかばんを持たされたものです。実際、道に迷ってその名前だけを頼りに見知らぬ人に自宅まで送り届けてもらったことも何度かありました。母はその都度、私を叱ることなくよく帰ってきたとほめてくれました。内心は好きなどころに勝手にいってしまう子供のことが心配で仕方なかったのではないかと思います。遠出をするときにはいつも母のいたころのことを思い出します。

終点にはバス停とわかるものはなにもなく、うっそうとした木々に囲まれた小さな広場があるだけでした。バスが折り返すのも苦労するところだと思ったのですが、振り返るとそこにすでにバスの姿はなく、帰りの時刻も聞くこともないままに原っぱの真ん中に一人ぽつんと取り残されてしまいました。その先は交通手段もなかったのに、自分の足と地図だけを頼りに歩くことになりました。

バスを降りてからは人に会うこともなく、雑草に見え隠れしながら細く続く道だけが私の行く先を案内してくれました。途中、『迷い道注意』と書かれた小さな看板が道端にぽつんと立っていました。それはずいぶん昔に置かれたものらしく、鳥の休憩所にでもなっているのか上のほうは白く汚れ、行き先名のアターリーフ (ater leaf) という文字は、薄く擦れて読み取るのもやっとという状態でした。その場所は、地図にも書かれてなく、小さなサンゴ礁は染みか汚れのあとのようにも見えました。もちろん陸地の存在は確認できませんでした。上空には艶やかなエンジ色をした鳥が私を品定めするかのように円を描きながら飛んでいました。日差しも途切れがちな深い山あいを半日ほど歩いて、対岸に島があるだろうと思われる小さな入り江になんとかたどり着きました。リアヌシティから流れているエルダ川の河口と近いのかどうかもわかりませんでした。

羽のある鳥であれば島に渡るのも容易であろうに.....

何か知ることがあったら私に教えてほしい。

バスを降りたのは正午を少しまわったころでしたが、この海辺にたどり着いたときにはあたりはすっかり夕闇に包まれていました。目を凝らして波音の聞こえるほうを見ると岩場の目立つ小さな入江でした。南から渡ってくる甘い潮風。海に少し突き出すようにつくられた板張りのボート乗り場。赤い塗装がすっかりはがれ落ちた埃まみれの半ば朽ちた手漕ぎボート2艘が波に揺れていました。霞の先にかすかに見える影が島だとしても、とてもそこまでも渡れるような代物とも思えず、逆に島のほうが意志を持って人の出入りを拒んでいるようにさえ感じられました。低

く垂れ込めた雲のせいで、遠くを走る列車の音が幻聴のようにかすかに聞こえましたが、それ以外には草が風にさわさわと揺れるだけで、星も見えない漆黒の闇と静寂が私を包み込んでいました。

缶切り、髭剃り、インク瓶、蝋燭、スプーン、ナイフ、火おこし．．．思いつく限りの生活用品を詰め込んだザックは今にもひとつ残らず吐き出してしまいそうなほどに膨らんでいました。長い道のりでへとへとになっていた私は、荷物を下ろすとすぐに崩れかけた屋根の漁師小屋跡に近くにあった草を敷き詰めて寝床をつくりました。そして、横になるとすぐに疲れのせいか意識が朦朧としはじめ、周囲の様子もなにもわからないままに泥のように寝込んでしまいました。真夜中を過ぎたころに空腹感でうとうとしましたが、やさしく頬をなでる心地よい風に誘われ、深くいつまでも続く夢の世界にすぐに戻ってしまいました。夢の中ではあの緑鮫が現れて私を向かい入れてくれました。どこまでも永遠に続く無限の闇の先に落ちてしまうような、後にも先にもない一夜でした。

第5話 青い猫*

時間が止まるときに人は眠り、目覚めに新しい世界がはじまる。

朝の日差しに目を覚ますとあたりは深い霧におおわれ、遠くで長く響く海鳥の声がかすかに聞こえるだけでした。昨日漁師小屋に見えたところも、木々が折り重なっているだけで、人が手を入れて作られたものではありませんでした。岩礁も浜の一部でしかなく、多くは砂地が広がっている小さな浜でした。想像していた風景とのあまりの変わりように違うところに来てしまったような錯覚さえ覚えるほどでした。

早速コッヘルに携帯食として持参した飛び豆を入れ火を通し、少し塩味を付けて朝食を済ませました。昨夜みつけたボートのほうを見ると、残っていたのは1艘だけで残りの1艘は消えていました。深夜に乗る人もないでしょうから、波に流されてしまったのかもしれませんが。途中で見つけたらいっしょに島へ運んだほうがいいかもしれないと思いながらも、こちら側から島に渡る手立てがなくなるのが心配でもありました。みつけたらやはり一度戻ることにはしようと考えながら船に荷物を積み込みました。ボートは職人がつくったようなものではなく、筏よりはましという程度のものでしたから、まっすぐ座ることさえもむずかしく、座る横木も半分は折れ曲がっていました。床の隙間からは水草のようなものが見え隠れしていましたから、はたしてこれで島まで無事に渡れるのか心もとなく思いましたが、ほかに方法もないようなのでボートを沖に押し出し心を決めて乗り込みました。

透き通った水は少し冷たかったもののそれほど深くなく、場所によっては海の底に足が届くようなところも多くあったので、島までたどり着けないかもしれないという不安はすぐに消えました。1本の舵と破れかけた帆の小さな船はゆっくりと沖に向けてすべり出して行きました。中世の宗教画のような色合いの水底を眺めながら30分も進むと、昨日かすかに確認できた島影が見えてきました。よくよく見ると、思った以上に大きな島でしたが、高台と思っていたのは、木々の影が作ったもので、実際にはほとんど起伏のないところのようでした。島というよりも岩礁に近いといったほうがいいのかもかもしれません。島のまわりの水が飛び跳ねているように見えたのは、光る小さな魚が羽虫を捕食しているためでした。この魚を追いかけてミドリ鮫が集まるのかもしれないと考えると、ゆるりと動く世界にいよいよ足を踏み入れるという気持ちの高ぶりは抑えられなくなっていました。

光りの粒が水面をはねるとき、新しい時間が静かに幕を開く

***** ノート *****

ゆるりと動く時間.....ゆるりと動く..... ゆるり.....

ノートの写しを読み返しているうち

にちょっととうとうとしてしまった。満月が東の浜に登っている。ノートを書いた主がこの島に来た数百年前にも同じ月が見えただろうか。ユイローの葉をバスタブに浮かべ、岬に打ち寄せる波音を聞いているうちに睡魔が忍び寄ってくる。どうもユイローには催眠効果のある何かが含まれているようだ。多用しすぎるのもよくないかもしれない。コピのような子供にはあまりすすめられない薬草だ。ノーキョさんに話しておいたほうがいいかもしれない。

入口あたりでことんという音がしたので目を凝らしてみると、黒猫のインクが忍足で近づいてきた。気まぐれで姿を見せないことも多い子だけど、長く暮らす住人からは愛されている。インクのほうも自分に気に掛けてくれる人をわかっているようで、そういう人が来たときにはどこからともなく現れるようだ。消えた灯台守の生まれ変わりだと言う人までいるけど、たまたまここに住みついただけのことだろう。ここなら海がしけたあとには打ち上げられた海の幸がたらふく食べられる。猫の一人暮らしにはちょうどいい住み心地なのだと思う。

名前のない猫ではかわいそうだと思い、青みがかかった黒の毛がめずらしかったのでインクという名前をつけてやった。もちろん私の愛用するペル社のブルーブラックのインクをイメージしてつけた名前だ。今では島のみんなにもインクの愛称で可愛がられている。住人の仲間入りができうれしいだろう。身体を摺り寄せてくるので、今夜は朝までつきあってくれるのかなと聞いてみると、なにも聞こえないそぶりで燈火台のほうへ上って行ってしまった。まるで燈台守気取りのようだ。

その昔、この灯台を守る一人の男がいたという。今の住人の中にその男と実際にあったことのある人はいない。灯台の横にある石柱は彼のために立てられたとも言われるが、その真偽も定かではない。この島はあちらこちらに昔のできごとと結びつけたと思われる逸話が残っている。語り継がれるにはそれなりの理由もあったのだろう。この灯台は新しく建て直されて今は電気の灯火になっているけど、それ以前はオイルに火を灯す方式の赤いレンガの小さい灯台だった。そこに燈台守がいたとしても不思議な話ではない。彼が去ったと言われる東の方角には今夜も赤い月が上っている。

コピと話していたら遅くなってしまった。今日は月見の散歩はあきらめてこのままここで休むことにしよう。だれのものでもない灯台は、私が実質的に管理しているようなものなのでとがめられることもない。

第6話 お店番

灯台の朝は早い。朝日が上る早朝から南西のやわらかい潮風が吹いてくるので、おだやかな目覚めが迎えられる。窓から外に目を向けると水平線に薄い雲がかかっている。今日も透き通った空気でいっぱい1日になりそうだ。

昨日読みかけのままにしていたノートを引き出しに片付ける。大切なものをなくしては大変だ。島の歴史ともいえるこの写しは、島の中で一番見晴らしのいい場所にあるこの灯台に置いておくのがふさわしい。実際、ノートの主も、少し高台になっていて増水時の心配もないこの場所を好んだようだ。南方から流れ込む暖かな海流もあって、灯台に続く道には季節ごとにさまざまな草花が咲き乱れる。住人の散歩道としても親しまれているこの場所に保管しておくのがいい。

島はメインランドからは南方に位置している所以冬の一時期を除けば、年間を通じて過ごしやすい。この地のスピードの遅さに馴染んでしまい、観光のつもりがそのまま居つくことになってしまったという人も多くいる。メインランドから遠くさえなければ、もっとたくさんの方が住んでいてもなんら不思議ではないところだ。ただ、列車もなく、月に数度の船便しかないから今でも少数の住人が住むだけで、手つかずの自然があちらこちらに残っている。海で閉ざされていることも手伝って内陸とは異なった特異な自然環境がそのまま残されている。そして、乗り物を使うこともなくほとんど歩いて回れてしまうほどに島は小さい。

気がつくときンクが近づいてきた。ふらりと現れて、いたと思うといつのまにか消えてしまう。この子がいると寂しくなることもないし、かといってじゃまをするわけでもないのだから、灯台は私が一人の時間を過ごすのにちょうどいい書齋代わりになっている。そして、ここにいると不思議と気持ちが穏やかになる。できることなら住み着いてしまいたいけれど、みんなが楽しみに訪れるところと思うとそうもいかない。

「こん、こん。おはようございます。あら、インクもいたのね。おはよう。さては、二人でまた、ここで寝ちゃいましたね。いい夢が見られましたか」

「おはよう、ミリルさん。今日はいつになく早いですね」

「昨日少し早く帰らせてもらったので、今朝は早起きしてエモカさんのお店でパンを買ってきました。このパンは一ヶ月も発酵させてから焼いたものだからとてもおいしいそうですよ。最近この島でみつけた酵母で、発酵にとっても時間がかかるんだとか。でも、その分とてもおいしいパンになるんだそうです。よかったら少しいかがですか」

「それはいい。いままでのパンとどう違うのか試してみたいですね」

「では、このロールパンをおひとつどうぞ。きっとお気に召すと思いますよ。私もエモカさんのお店でいただいてきたんですけど、あまりのおいしさにびっくりですよ」

島にある食料品店というとエモカさんのお店だけで、もともと自家用に作って友達に配っていたのがあまりに評判がいいので、島の住民にもおすそ分けしているということらしい。エモカさんはお返しはいらないと言ってだれからも何も受け取らないから、お店とは言えないのかもしれない。そんなエモカさんのやさしさがうれしい。

「ほんとだ、これはおいしい。普通のパンよりずっとやわらかくて雲を食べているようだね。みんなが喜ぶのもわかりますね」

「そうなんです。ほんとうにふわふわしていて、食べるだけで幸せな気持ちになれます。よければもうひとついかがですか？ 遠慮なくどうぞ」袋の中には、2つ3つ入っているようだった。

「そんなにいただいてしまうと、ミリルさんの朝食がなくなってしまうから、また次の機会に私の分もお願いしていいですか。この発酵に時間のかかったというパンをお願いします」

「わかりました。じゃあ、一度家に戻りますね。10時にはお店に出られると思うので」

「そうだ、そろそろ今日あたりには船長の定期船も着きそうですね。お昼過ぎには私も行きます。新しい本が来る前でお客さんも少ないでしょうからミリルさんも午後からでいいですよ」

「あら、私が本屋さんにいるのが好きなのを知ってるのに。お気遣いは無用ですよ。では、また後ほど」

パンの包みを両手に持って、灯台を出て行くミリルさんの後ろ姿をインクがじっと見ている。そうか、インクも食べたかったのか。気がつかないでかわいそうなことをしたな。次にいただいたときにはお前にも残しておくよ。

今日は一ヶ月に一度の楽しい入荷日。天候さえよければ定期の船便で本が届く日になっている。このところ景気がいいせいかメインランドの市場がにぎわっているらしく、新しいもの、古いもの、さまざまな時代のものが入荷しやすくなっている。今回もめずらしい本ががたくさんあるといいのだが、それも船商人のダルビー船長の目利きにかかっている。船長の選書はいつもおもしろいので店をはじめて以来ずっと頼りつきりだ。これまで期待を裏切られたことが一度もなく感心するばかりだ。

店主の私のほうはというと、お店、お店と言いながら、実際には留守にすることが多く、どこか日当たりのいい場所をさがして本を読んでいることがほとんど。いつが定休日なのかもわからないとよく言われる。もちろん私が島にいる限り定休日はなくて、問題は本をいったいいつなら買えるのかということなのだろう。私のほうも、狭いこの島で本を勝手に持ち出すような住人もいないと思うからはっきりした返事もしないままにする。お客さんは仕方なしに、それぞれに店内の本を適当にみつろっては椅子に腰掛けてページをめくっているということになる。店で本の話をするのもいいし、中には本を顔にのせたまま昼寝をしている人もいるぐらいだから、私設図書館といったほうが言い得ているのかもしれない。仮に販売収入を得たところで、この島では使い道もない。

そんな本屋に、草花が好きだと言ってよく島に通っていた女性が訪ねて来てお店の留守番をさせてもらえないかと言ってきた。もともと売る気もないような店なので、お客さんも少ないということ伝えてはみたけど、それでもいいからということで聞いてくれない。私のほうもいいかげんなもので、お給料もなしでよいのであればどうぞ自由にとということでお店番が決まってしまった。それ以来ミリルさんのお店と思う人が多くいる。はじめてのお客さんが来るたびに、店に出てこない爺さんが店主だと説明するのもさぞやめんどうだろうと思うけど、それでも本屋にいるのは楽しいらしい。

待ち遠しい仕入の日は、私にとって月で唯一の本屋らしい仕事をする日になる。

第7話 リブロールの朝*

***** ノート *****

干潟のような土地の端に立つとすぐに、そこに似つかわしくない7メートルほどの小さな灯台があることに気付きました。だれもいないこの島にぼつりと佇む姿は、まるで孤高であることを楽しんでいるかのようにさえ見えました。ただ、この手積みレンガの灯台をつくるためにかつて人が足を踏み入れていたということは間違いありません。浅瀬の多い島の周辺でミドリ鮫漁が行われていたことを考えれば、灯台も安全な漁のために必要なものだったでしょう。本に書かれていたミドリ鮫のことが事実であったのだと考えると、人の気配も感じられるような気がして少し楽になりました。

灯台の建つあたりは海から2m程度の高さがありましたが、島の大部分は海拔のほとんどない土地で、人の住むことを許さないきびしい環境であることはすぐにわかりました。もし今日が潮の引く時期であるのなら、潮が満ちたときには間違いなく海に水没して島の姿は見えなくなってしまうでしょう。島と言うにはあまりにも低いその土地は、水平線との境もあいまいで、澄み渡った青空の中に溶け込んでしまいそうでした。

少し先のほうになにか動くものがあつたので目を凝らして見ると、それは昨日寝る前に見たもう一艘のボートでした。誰かが自分より先にこの島に渡っていたのか、それとも引き潮に流されてこの島に流れ着いたのか。メインランドの街から2日もの時間をかけてこんなところ来る人がいるとも思えませんが、あの入り江からこの島に渡る手だてはなくなったということを考えると、ここで誰かに会うことを祈らずにはられませんでした。

おーい、おーい...

広い空に浮かぶ雲はなにも答えることもなく先を急ぐように大きい空を横切って行きます。しばらく空を眺めていると、自分の立っているこの島のほうが流されているような錯覚を覚えめました。そして、地面の多くは草とも海草とも判別のつかないような植物で覆われていたため、一歩進むたびにずぼりずぼりと足先が地面に沈みました。不安定な足元を確かめながらゆっくりと灯台の見える内陸に向かって歩きました。とりあえず、この島の少しでも高いところに居場所を確保することを急ぎました。天候が崩れでもしたら小さな島は波に逆らうこともできず見渡す限りの海原に押し流されてしまうことでしょう。

世界の果てまで続く紺碧の空と海 その隙間にとぶとぶと漂うこの島

***** ノート *****

灯台に来たときには、いつもこのページに書かれている情景を思い出す。彼もきっとこの場所に立って海を見渡したことだろう。今と変わらないこの360度見渡せる水平線を眺めながら、だれも知らない島の神秘に畏敬の念を感じたかもしれない。潮の心配が無用だったことだけは救いだったことだろう。干潮で土地は広がって海に沈むことはなかったはずだ。灯台を出たところの道端にある石碑に書かれている文字は長年の風雨にさらされて読むことはできないが、きっとこの灯台にゆかりのあるなにかを後世に伝えようとしたに違いない。それはノートを書いた主を弔うために誰かの手によって書かれたものなのかもしれない。そう思うとこの場所が時間を超えて遠い昔へ一本の線につながっていくような不思議な心持ちになる。

灯台を出てすぐ東に向かうと左の海辺にメインランドで流行するジャズを聞かせてくれる喫茶店がある。私がこの島に来たばかりのころ、同じようにあてもなく一人で歩いていた人にぼったり出会った。1日中本を読んで暮らしたいという私と、ジャズを聴いて過ごしたいというノルシーさんはすぐに意気投合した。いつかみんなが好きなものを持ち寄って楽しく過ごせるような島にしたいとよく話したものだ。そんな二人も今では島でもっとも古参の住人になってしまった。店先で窓を磨いているのはノルシーさんだろう。朝までお店にいることも多いからもしかすると昨夜も寝てないのかもしれない。話好きで好奇心旺盛なノルシーさんのお店には客人が絶えない。週末はいつも朝方まで明かりがついている。カウンターに座った常連客と何かを話すわけでもなくジャズに耳を傾ける時間だけが静かに流れている。時折楽器を手にして弦をはじいてみる人もいるようだけど、演奏をするわけでもない。そして、鳥たちのさえずりが聞こえる時間になるとだれに声をかけるでもなくぽつりぽつりと席を立ちそれぞれの家路につく。

「ノルシーさん、おはよー！」

少し遠いとは思ったけど声をかけてみた。

「オルターさん！ 昨日は灯台に遅くまでランプがついてたねー！ あまり根を詰めないほうがいいんじゃない！」

ノルシーさんもこちらに気づいていたみたいだな。灯台とノルシーさんのお店の間をさえぎるものもないから、お互いの窓からよく見える。

ノルシーさんの店を左に見ながら、草花の咲く小道を海沿いに数分歩くと私の店「リブロール」に着く。古来から使われているグレン語で、「ゆっくりしたとか穏やかな生活」という意味だそう。島に最初に届いた本の中からもらった名前だ。しかし、本屋の店名なんてあってないようなものなので、今でも名前も知らない人も多いかもしれない。

店の近くまで行くとミリルさんがお店でだれかと話していた。こんな時間にだれかと思ったらコピだった。あの二人がこんな朝早くからお店で話しているのを見るのもめずらしい。とにかく

コピは朝にめっぽう弱くて、午前中に姿を見かけることはまずない。

「おはよう、コピ。今日は早いね」

「トリさんのめざまし！　きれいな本をどうぞ」

「きれいな本？」と言いながら本棚に目をやった。

「あ、この前入った、あの『青い扉』って本のことですよ。表紙と裏表紙しかなかった本。ページの少ない本なんてめずらしいねってお話をしたあの本です」

と机の上の開いて置いてある本をミリルさんが目で示す。

「ああ、あの絵本ね。おもしろい本だから見てごらん。ページがまったくなくてね。本と言っていいものなのかどうか。文字がないから絵本なのかな。船長の選んでくる本はいつもおもしろい。あの時も表と裏表紙しかない究極の本だって聞かないから、本ならせめて1ページはほしいと言うと、中身なんて読む側が考えるものだから、表紙だけあれば十分物語になるって聞かなかった。おもしろいことを言う人だよ」

「おそらにあるおまど。おひめさまとおじさまのおうち！」

「あら、コピちゃんすごい。そんなこと考えてたの？　私なんて『赤い扉』はあるのかなって思っただけよ。だめだわねー」

「じっじはおまど？」

「そうだな．．．。ある大潮の日にこの本が海の水を全部飲み込んで、島民を救うっていうのはどうかな？」

「あら、それも面白いですね。本当に、そういう役に立つ本だといいわ。本棚の一番上に飾っておこうかしら。島の守り神として毎日安全祈願をしないと。お店に来た人に話すのも楽しいかもしれないですね」

「おひめさまもたすかるの」
くりくりした目を輝かせる。

「あはは、こんなふうにそれぞれの話ができるのがこの本の面白いところかもしれないね。さて、今日は船が入ってくるまでここでゆっくり待たせてもらおうかな。ミリルさん、ちよっ

とおじゃましますよ。今日こそは船が棧橋に入ってくるのを期待しましょう。あのままじゃあ、まるで蜃気楼だからね」

「あら、おじゃまするなんて、ここはオルターさんのお店ですよ。どうぞ遠慮なく。ちょっと朝のお茶を入れてきますね。コピちゃんもよかったらどうぞ」

ミリルさんはティーポットにお湯を入れながら楽しそうに夏の唄を口ずさんだ。

第8話 定期船*

***** ノート *****

足を取られながらなんとかたどり着いた灯台は人ひとりがどうにか入れるほどの小さな建物でした。もともと泊り込むためにつくられたわけでもないでしょうから、一人寝られるスペースがあったことに感謝しなければいけないのかもしれませんが。気候もいい時期なので野天で寝起きしてもなにも困ることはありませんでした。水のなくなるような乾季がありはしないかということのほうが心配だったかもしれません。

2つの丸い小さな窓からはいつも変わらない潮騒のきらめきが見えます。時折、水平線の端に船の陰が見えることもありましたが、一向に近づいて来る気配もなく、それは絵に描かれた船でも見ているようでした。いつまでも同じ場所に見えていたかと思うと、ある日気がつくくと消えていたということもたびたびありました。どこから来る船かはわかりませんでした。長い航海の休憩場所にでもなっていたのでしょうか。いつも同じように通って行くものの、それらの船がこの島に立ち寄ることは一度たりともありませんでした。まるでこちらが見えていないようにさえ感じられました。

島での生活は食料探しからはじまりました。最初に試したのは小さな赤い実をつける草でした。雑草のような草に食べられる実がつくものかとも思いましたが、鳥たちがついぼんでいるのを何度か確かめてから口にしてみると、それはイチゴのようなちよつと甘酸っぱい味がしました。生まれて初めて味わったものでした。この実は天日干しにしておくくと干葡萄のような形になり、保存食としても食べらそうでした。名前もわからないので草葡萄という名前をつけ鳥たちとの食事を楽しむ生活が始まりました。

***** ノート *****

赤く錆びた船長の船が接岸したのはお昼を2時間ほどすぎたころだった。

「やっほーい。やっつuitaぜ！ 爺さん元気だったか？ おやおや、今日はたくさんのお客さんだ。お待たせしちまったようだな。とにかく島が見えてから長いこと長いこと。いつものことだけど、この島の周辺は特殊海域でいつまでたっても着きやしない。霧のせいもあって島影も見えたりみえなかったり、その上浅瀬だらけときちゃあ、進むものも進まないってもんだぜ。まったく、やっかいな島だな。きれいなお嬢さん元気だったかい。またちよつと休ませてもらうからな。まずはおいしいお茶でもいただくとするか」

どれだけ苦労してこの島に来ているかという話を恒例の挨拶のように船長は一気にまくし立てる。船の航路からこの島に入ったことはないけれど、とにかくとてもやっかいな島だという話

をいつも聞かされる。それは島から見ても同じで、見えてる距離と時間のずれは考えられないくらい大きい。空気がきれいで遠くまで見えるせいではとか、蜃気楼のようなものではないかということで、最後はいつもあいまいなままに話は終わってしまう。

「船長、今日のお茶はおいしいですよ。島でとれたばかりのお茶なんですよ」
ミリルさんが赤いホーローのポットでお茶を運んできた。

「おー、ありがたいねー。このお茶を飲むのを楽しみに来ているようなものだからな。長旅の疲れも取れるってもんだな。おれはお世辞は言わないからな」

「今日の荷物はちょっと大物だから。少し休んでから荷降ろしだ」

「あら、それは楽しみ。今度は世界一大きい本ですか？」

「まあ、見てのお楽しみだ」

「コピもてつだう」

「おお、コピにもお願いしないとな。とても一人じゃ無理ってもんだ」

船長はみんなを驚かせたいのかどんな本かをなかなか言わない。それだけ自信のある仕入をしてきたということか。最近メインランドで流行っているお店のことや気候がすぐれないことなどで船長の話はつきない。

「そういえば船長、この前の本はおもしろかった。船長の言ったページのいらないという意味が少しわかってきたよ」

「おうよ。あれは無限の物語をつむぐ本だ。読む人によってどんな話でもできてしまうんだからな。俺の言ったことに嘘はなかつただろ」

「オルターさんが海の水をぜんぶ飲み込んでくれる本じゃないかって言われるので、島の守り神にしようかと」

「おいおい、海がなくなったらちとらの仕事があがったりじゃないか。そりゃ困った本だ」

「うふふ、そうならないようにお祈りしましょうね」

「船長はあの本で何が読めたのかな？」

「俺はな、あの本が俺たちをどこかに案内してくれそうな気がしたんだ。そう思ったときに、この島のことを思い出したってことだな。この島ってよ、終わりじゃない気がするんだよな。なんていうか、どこかへの入り口なんじゃないかって」

「ほほう。そう思うかね？」

「俺はそう思ってる。でなけりゃ、こんな面倒な商売にもならないところに来ると思うか？」

みんな、船長がいつも本を届けてくれる理由が少しわかったような気がした。あのノートを書いた青年も同じようなことを感じていたのだろうか。『青い扉』の本はコピも言うようにどこかへの窓になっているというのがいいかもしれない。ただ、それは想像世界の話ではあるのだけれど。

「さてと、そろそろ荷降ろしとするか。悪いがみんなも手伝ってくれ」

「はい、コピちゃんもいっしょに行きましょう。オルターさんは待っていてくださいね」

「また、爺さん扱いだな」

「ええ、ええ、腰でも痛めて寝込まれると大変ですから。無理をされないように」

いつもながら入荷の日ほど楽しい日はない。今回の大きい荷物には何が入っているのか。船長が話すうんちくにも否応なく期待が高まる。

「あらー、これ本じゃないですね。コピちゃん気をつけてね」

船のほうからミリルさんの驚くような声が聞こえた。

第9話 印刷機

ミリルさんが驚いたのも当然だった。船長が持ってきた荷物はとんでもなく大きいものだったのだ。

「コピちゃん、荷物に足をはさまれないように気をつけてね」

「だいじょうぶ。せんちよおといっしょ」

「もう少しだ、ほらこのコロの上にゆっくり下ろせ。気をつけてな」

荷物の下にコロを置いてやっと店内に運び込まれた荷物は大きいだけでなく、重さも人2、3人分もありそうに見える。船長は何を持ってきたのだろう。

「よし、ここらでいいだろう。梱包を解くから爺さんも手伝ってくれ」

「また、しっかり梱包してきたものだね」

「そりゃあ、そうだろ。なかなか手に入らないからな」

最初、本棚かと思ったものは、開梱しはじめてみると機織り機のようにも見えた。

「これ、机じゃないですか？」ミリルさんが言った。

「ほら、これを取り付けてみる。その大きなねじの下に。そうだ、それでいい。それがつけばわかる人にはわかる」

「なーに、これ？」コピもさっぱりわからないみたいだ。

「ああ、歴史ものの印刷機だね、これは。それもかなりの骨董品だ」

「さすがお目が高い。爺さんの言うとおりで。かなり昔の印刷機だな。というか、おそらく活版印刷がはじまったころに作られたものだろう」

「えー、そんなに古いものなんですか？」

「そうともよ、こいつはなかなか手に入らないものだ。市場で知り合ったの骨董屋の納屋で偶然

みつけたんだ。その場で買い取った。誰かに買われる前にな。もちろん使うには古すぎると言いくるめて破格の値段でいただきよ」

「それを何でここの本屋に？」

「こんなでかいもの置くとことなんて俺のちっぽけな住処にあると思うか？　すぐに思いついたね。ここに置けばいいって」

「あら、今回は本の販売じゃないんですか？」

「そうとも言えるし、印刷機は本の素と考えれば本を売っているとも言えなくもない」

「すごいこじつけ……」ミリルさんが笑いながらこちらを見ている。

「それは冗談としてな、爺さんがいつも読みふけている例のノート、あれを印刷しておいたほうがいんじゃないかと思ったわけよ。あれには、こういう歴史ある印刷機が似合うだろ？」

船長の発想にはいつも驚かされる。あれを本にしようなんて思いもしなかった。

「それを、あの『青い扉に』綴じ込むんだ。そうすりゃ、世界最高の一冊ができるってわけだ。どうだ、おもしろくねえか？」

「それじゃあ、物語がひとつだけになっちゃいますよ？」

ミリルさんが怪訝な顔をした。

「それがひとつの話になるのかなんて誰にもわからないだろ？　あのノートも全部がそろっているわけじゃないしな」

そう言われてしまうと納得せざるを得ない。ノートのすべてなんてだれにもわからない。残りのページが見つからない限りは未完の本とも言える。

外で赤く錆びた運搬船が船長の話にうなづくように波に揺られてぎっしぎっしときしむ音を立てている。船長と話していると潮の流れに乗ってノートの作者の書いた物語に流れ込んで行くような気がしてきた。

「ノートを本にするだけじゃなくて、印刷機を使って島の新聞でも作ったらどうかとも思ったわけよ。この島の魅力をメインランドの人にも知ってもらいたいと思ってな。こんないいところは

どこの国に行ったってみつきりゃしないぜ。俺の知る限り最高の島だ。空気はいいし、見たこともない自然がたくさんあるし、時間も止まってしまふんじゃねえかと思うほどゆっくりだ。その上、住人がみんなとびっきりのお人好しばかりときちやあ言うことないだろう」

「島の新聞をつくれということかな？」

「チラシか手紙のようなものでもいいな。このところのメインランドは忙しすぎる。実際に来られなかったっていいじゃねえか。そんなところからもらう新聞でも手紙でも読んでりゃあいつときでも忙しい時間から離れられるだろ？」

そんなことは考えたこともなかった。自分たちで楽しむことだけを当たり前のように思っていたけど、神から与えられたこの島を独り占めにしてしまう理由なんてなにもない。ノートの主も仕事に忙殺された生活から離れるというのが旅の理由のひとつだったというようなことを書いていた。これもなにかの縁かもしれない。心はすぐに決まった。

「もちろん、そういうものをつくってれば、ノートの残りに関連した情報が入ってくる可能性もある。どうだ、いい考えだと思わないか？ 爺さんがくたばるまでにノートの謎も明らかになるってわけだ」

「おいおい、まだくたばるつもりはないよ」

「まあ、その後は俺が引退してここに来るから心配しないでいい」

「まあまあ、二人でなんの話をしているんですか。それで、これはどうやって使いましょうか？ よかったら私が印刷係を買って出てもいいですよ」

「おお、そりゃ心強いな。爺さん、話は決まった。次からは戻りの積荷もできるってことだな。売り上げの半分は店に落とすから心配しないでいい」
船長がにやりとしてこちらを見る。

「みんなの負担のことを考えただけで、商売なんて考えないよ。船長の話にはいつもうまく乗せられてしまうけれど、冥土の土産にちょうどいいかもしれないし」

「あら、オルターさんもお冗談を。そんな話ばかりしてないで早く印刷機の話聞きましょうよ。コピちゃんがもう興味深々ですよ」

今回も船長の思いもかけない掘り出し物で話がはずんだ。なんだかまた面白いことが始まりそ

うな気がしてきた。明日からは島を見る目も変わりそうだ。そして、持ち主だった人がメインランドに持っていったかもしれない残りのノートのパージもほんとうにみつかるかもしれない。

船長の説明と試し刷りは夕方まで続いた。黒い印刷インキが夜の帳と重なって仕入のあわただしい1日が暮れていった。

第10話 島便り +

船長の置いていった印刷機を使って、すぐにでもなにかを刷ってみたくてなかなか寝付けなかった。結局翌日も、大人気もなく朝早くから目が覚めた。これではまるで子供だと思いつつも、夜が明けるとすぐにだれもいないリブロールに行った。あらためて印刷機を眺めてみると、年月を経た木肌になんともいえない風格を感じる。最新の印刷機では見かけない独特の金属活字が味わい深い。この文字に惹かれたたくさんの人の手を渡ってきたのだろう。作業台の表面はつるつるで、インキのシミもあちらこちらにある。眺めているだけでも使い込まれた道具の温もりを感じる。ミリルさんが印刷係をやってくれるというのなら、船長が言うように島の新聞をつくるというのはいい考えかもしれない。

ホーローの赤色ポットでコーヒーを入れながら窓の外に目をやると、船長の船はまだすぐそこに見えた。もう10時間も前に棧橋を出たのに、いつものように外洋に出るのに手間取っている。こんな面倒な島に来てくれてほんとうにありがたい。もしかすると、この島を一番愛しているのは船長かもしれない。

「おはようございます」入り口のほうから声が聞こえた。

「あ、ミリルさん、おはよう。今日も早いですね」

「いえいえ、今日も特別ですよ。この印刷機が気になったので早く目が覚めちゃいました。オルターさんもですか？」

「ほんとうに思ったように印刷できるものかどうか早く試してみたくてね。今、灯台から持ってきた機械油を差していたところです」

「これだけ古いものだと、飾るだけの骨董品として保存されていたのかもしれないですものね。ほんとうに何百年も前の人と同じように使えたらすてきですけど」
ミリルさんも私に負けず劣らず好奇心が強い。

「こんな珍しいものを使わせてもらえるなんて、ほんとうに本屋冥利に尽きるね。これを納屋にしまい込んでしまっただけでは作った人に申し訳ないというものだ」

「メインランドの人に向けて新聞が出せるなんて考えただけでわくわくします」
ミリルさんもすっかりその気になってるようで、気がつくと操作方法の確認をはじめていた。

紙と鉛筆を持って、最近島で起こったことを思い起こしてみる。今週に入って、夏を告げるナ

ツヨビが数羽飛来してきたのはもうみんな知っているだろうか。エモカさんの長時間発酵のパンの話もいいのかもわからない。エモカさんの了解が得られれば、あのおいしさをみんなに教えてあげたい。こうしてみると、この小さな島にもいろいろな話題がありそうに思える。

ナツヨビは春の終わりのころになると南から渡ってくる。熱帯地方の鳥で白地に淡い水玉模様のあるとても珍しい鳥だ。ヒョウやキリン、牛のような模様ではなく、ほんとうに水玉の斑点なのだからおもしろい。この島に来るまで自然界にこんな模様の動物がいるとは思いつかなかった。水玉模様の動物はナツヨビに限らず他にもみられるから、この地域だけに生息する特異な種なのだろう。もし、水玉模様の動物を見ることがあったら、この島から渡って来たと思っていいかもしれない。

「昨日、コピちゃんが配達を担当してくれるって言ってましたよね」

「あれはいい考えだね。あの子は島の隅々までよく知ってるから、配達さんとしてはうってつけだ。はじめは島内に向けてつくってみるのもいいかもしれないし」

「コピちゃんはみんなに好かれているし、記事になるいろいろな情報も集めてくれそうすね」

「そうと決まったら、記念すべき第一号の記事をさっそく考えることにしましょう」

「そうだ、オルターさん、ちょっとお願いを聞いていただけますか」

「なんですか？」

「新聞になくしもの欄もつくってもらえないでしょうか？」

「なくしもの？」

「ええ。ずっと考えていたんですけど、この島って物がなくなることが多くないですか？」

「ああ、鳥のいたずらだね。しばらくするとちがうところでみつかることもあるけどね。それにしても多いことは間違いないですね」

「東浜に住んでいるお友達のないないさんは……あ、ロスファさんのことです。いつもないないってなにか探しています。ものがなくなるのを気にしていると、この島には住めないですけど…

...」

「島の掲示板に時々貼られている”探しもの”の張り紙を欄外記事のようにしてあげればいいのかな？」

「そうしていただければ。ないないさんのほかにも困ってる人いるみたいなんです」

ないないさんは物忘れをするような年とも思えないから、動物かなにかのいたずらだろうけど、これを毎号載せるのはさすがに気が引ける。きっと島の印象も悪くなってしまいうだろう。とりあえず島の中だけの限定の発行のときだけにしておいたほうがいいかもしれない。島の人なら、なくなることをいちいち気にするような人もいない。のんびりしすぎかもしれないけど、そういうところもこの島のいいところだ。

「わかりました。ちょっとどうしたらいいか考えてみましょう」

「よかった。それで、新聞の名前はもう決められました？」

「新聞というのも大げさだから、とりあえず”島便り”という名前にしておいたらどうでしょう。南のどこか遠くの島から届く季節の便り。のんびりとした島の生活をお届けします。というのはどうですか？」

「それいいかもしれないです。町の人たちもきっと遊びに来てみたくなりますね」

「お昼までにはなにか原稿を書いてみるので、午後からためしに印刷してもらっていいですか？文字は少なめにしますから」

「まかせてください。第一号のお手伝いをできるなんてがんばらないと。リブロールのお店番をされていてほんとうによかったです。きっと、島の人たちやメーンランドの人たちをつないでくれるすてきな新聞になりますよ」

「それは私をかいかぶりすぎかもしれないですよ。とにかくひとつ作ってみたいことにはね」

そのとき、海の上をナツヨビが2羽すーっと横切った。もしかすると、彼らの島に私たちが住まわせてもらっているのかもしれない。ふとそんなことを思った。



第11話 なくしもの

ごとん、ごとん。ぎーぎー。

ごとん、ごとん。ぎーぎー。

思った以上にきれいに刷れている。数百年前の印刷機とは思えない仕上がりだ。とくにインキの瑞々しさがすばらしい。島で採った夕暮草の顔料がこの印刷機にあっているのだろうか。

「ないないさん、なくしものの記事はこんな感じでいいでしょうか？」

ミリルさんに呼ばれて来ていたロスファさんに尋ねてみる。

「ええ、ええ、もうこんな風にしてもらって何とお礼していいやら。ほんとにほんとに」

最近島に来たばかりのロスファさんは、とにかく遠慮深い人だ。先に住んでいる人に迷惑をかけないようになんでも自分でやろうと一生懸命にがんばっている。それなのにこの島はないないさんにやさしくないようだ。

「ないないさん、島はいい人ばかりですから、心配しないで大丈夫ですよ」

面倒見のいいミリルさんがやさしく声をかける。

「ええ、ええ、とてもとても助かってます。もう、わからないことだらけな上になくしものばかりで。ご迷惑ばかりおかけして」

「とりあえず、枕だけでだいじょうぶですか？ もし他にもあれば……」

なくしものがたくさんあると聞いていたので一応確認してみた。

「いえいえ、もう枕さえみつければ、あとは自分でなんとか探し出しますので。心配しないでください。きっと風でどこかに飛ばされているに違いありませんから」

刷り上がったものを見ながら、ないないさんは何度も何度も頷いている。

「島便りという名前好きです。これをメインランドの人が見れば、きっとすぐに旅支度をはじめでしようね。ほんとに、ほんとに。ここに書かれている水玉模様の鳥がいることすら知らない

人も多い」

ないないさんも新聞を気に入ってくれたようだ。

「じゃあ、さがしものがあるので、このあたりで失礼させていただきます。ほんとに、ほんとに、ありがとうございます。枕はみつからなければ、それはそれでなんとでもしますので。お気持ちだけでありがたいことです」

ほんの10分ほどいっただけで、またなくしもの探しに出かけてしまった。あんなに一日中さがしものをしていたんじゃあこの島のゆったりした時間なんて楽しめないのではないかと心配になってしまう。

「ミリルさん、これなかなかいい出来ですね。とても年代ものの印刷機で刷ったものとは思えない仕上がりですよ」

「私は言われたとおりにやっただけなので、印刷機のおかげですね。この印刷機は島になくてはならないものになりそうですよ。コピちゃん、どう思う？」

「なくてはならないもの？ なくてもなるもの？ コピにはよくわからない」

「あはは、ないと困るものだから、ないといけないものだな」

椅子の上にハンカチが置いてあるのに気づいた。ないないさんが汗を拭いていたハンカチだ。ないないさんはものわすれをよくする人かもしれないと思った。無意識のうちに枕をどこかに置いてきてしまったのかもしれない。

「ないないさん、今度はハンカチがないないって探してるかもしれないな」

「え？」

ミリルさんが不思議そうにこちらを見るので、椅子の上を指差すと、すぐに気づいて笑いをこらえていた。

「コピはもうくぼるの？」

「もう少しまってね。インクが乾いたらお願いするわね。それより、乾くまで発行記念のお茶パーティーはいかが？ 草屋さんでおいしいハーブティーをいただいてきましたよ」

「それはいいね。ひと仕事した後のお茶は格別です」

「コピにもおちやちようだい」

「はいはい、配達さん。たくさん飲んでいってくださいな。みんなに幸せを届けてあげてね」

新聞発行をした数日後の赤い満月の日に、ないないさんその人の行方を尋ねる島便りを出すことになるとは、このときは思いもしなかった。枕がみつかったという連絡を最後にその姿を見かけなくなってしまった。島を突然出て行く人はたくさんいるけど、食べかけのパイをテーブルに置いたままで消えてしまった人はいない。地面が少し揺れたときだったので、大潮に流されてしまったのではという人もいたけれど、それにしては食事途中の台所は不自然だ。みんなで探したけれど、その消息を知るものはなにもみつからなかった。メインランドのほうに戻ったのであればいいのだけど。

第12話 別々の名前*+

今日は印刷の後片付けですっかり遅くなってしまった。夕ご飯を薪ストーブでつくりはじめると、いつものように青猫のインクが臭いをかぎつけて擦り寄ってきた。

「インク、コピが戻ってくるまでもう少しつきあってくれるかな。今日はいい仕事をしてきたよ。ほら、この新聞だ」

インクはいつものようにこちらを見ないで、ストーブの横で丸くなっている。そこにはインク用のアルミの餌入れがおいてある。お腹がすいているのかと思いミルクを入れてやるとすぐに飛び起きた。今日は好物の魚がみつけれなかったのかもしれない。

「くばってきた！」元気のいい声がしたと思ったら、コピが勢いよく駆け込んできた。

「お疲れ様、コピ。みんな喜んでくれたかい？」

「うん。もう、ナツヨビがきたのって。コピはもうみた。いえをつくってた」

「ほお、巣の場所もみつけたのかい？」

「はんとうのさきのほう。きょねんとおなじナツヨビ」

「同じナツヨビ？」

「うん、なまえある」

鳥を一羽一羽見わけて、全部に名前をつけるなんて特異な才能を持った子だ。まるでこの島の申し子のような。

「きょうはインクもちがうよ」

「え？ インクはいつも同じだが。どこか違うのかな？」

「いろんなインクがいるよ。きょうは赤インク。赤インクはおばあさん」

なんともおもしろい子だ。その日によってインクに別の名前をつけているようだ。7色のインクがいるという。今日もいつもと同じ青い猫インクだけど、名前は赤インクらしい。毛の色と名

前は一致しない。

「コピ、スープでも飲んでいくかい？ お客さんがね、採れたての野菜でつくったものだからとお裾分けしてくれた。野菜に詳しい人だからきっとおいしいよ。よかつたらいっしょに晩御飯にしよう」

「はいたつさんのごほうび！」

今夜はコピとインクでにぎやかな夕食になった。食後はコピにせがまれてまたノートの続きを読んで聞かせることになった。

*** ノート ***

3日目もとてもさわやかな朝を迎えることができました。澄み渡った空には水平線から無数の入道雲が天に向かって伸びています。どこまでも続く海を見ていると、この世界を独り占めしているような気にさえなります。季節が違うせいか文献にあったミドリ鮫の姿もなく、時折カモメに似た水色の鳥が海の上を横切っていくだけです。彼らが渡り鳥なのかどうかさえもわかりませんが、今のところこの鳥だけがこの島の住人ということのようです。天敵のいそうにないこの島は繁殖にちょうどいい場所なのでしょう。

出発のときにいただいた携帯用の日時計を出して、地面に置いてみました。着いて3日目の今日からこの島の記録がはじまることとなります。ゆるりと動く時間をみつけるために役立つ記録になるかどうかはわかりませんが、季節か気温、そんなものと関係しているのではないかと思います。日時、気温、天候などを記録していくうちに時間がゆるりと動く予見をできるのではないのでしょうか。

今日は、6月20日。天候は晴れ。風は南西で、湿度は低め。空はどこまでも青く。

鳥は無理にしても、魚は捕食することも可能かもしれない。魚がいるのだから餌もどこかにあるだろう……

「コピ？」

「……」

「おや、寝たのかな？ 今日配達さんで疲れたからね。たくさんの人に喜んでもらえてよかったね」

毛布を一枚掛けてやると、寝返りを打って寝息を立て始めた。そばでインクは毛づくろいをしている。今夜も夕焼けできれいに空が染まっている。



第13話 時間のはじまり *

***** ノート *****

日時計を置いて5日目。

今日も南からの風が続く。夏に向かっているせいか空の色が日に日に深くなっている。

日時計で毎日記録をしなければじめてから、少しずつこの島の生活になじんできたように思います。なにもないこの島では町にいたときとは比べ物にならないほど1日の時間が長く感じられます。リアヌシティで仕事をしていた先週のことさえも何年も前のことだったように思えるほどです。朝日が上るのを見ること、鳥が餌をついばむ様子を眺めること、風に揺れる草花の音に耳を傾けること、太陽の日を浴びながらたっぷりと昼寝をすること、夜空の星を数えること、どれもがこの島での大切な生活です。それらが、日時計のゆっくり進む影ともに島の記録として刻まれていきます。この穏やかで、誰にも動かさそうにない時間の流れがほんとうに大きく揺れるような日がくるとはとても想像できません。うっかりすると、このままこの島に来た目的さえ忘れてしまいそうです。

日時計の針の先で小さな虫が休んでいます。彼にとっては時間が流れようが流れまいがどうでもよい話。日が昇り、日が落ちること以外にとりたたて考えることもないようです。まわりに気を配ることもなくずっと前足で顔をぬぐっています。ここの動物は天敵が少ないせいか人の姿にまったく驚くこともなく自分の時間と生活を楽しんでいるようです。もし仮に時間が反転して、太陽が上ると落ちるのが逆になっても大きな問題がないようにさえ思えます。ふと、今まで何のために休みも取らないで働き続けてきたのだろうという考えが頭をよぎります。もしかすると時の音に耳を寄せることを忘れてしまっていたのかもしれない。この島には時計もなければ、時報もありません。それなのに、風に乗って流れる時間の音が聞こえるような気がするのです。街にはないほんとうの時間が今始まったように思います。

日時計は、手ごろな石の上において、磁石が壊れてもわかるように正午が真南になる方向に固定しました。そしてその先に小さな木の苗を植えました。石とこの木が時の刻みをいつまでも教えてくれることでしょう。いつまでも、この島がある限り。

***** ノート *****

彼の生きた時代にはまだ時計は一般家庭まで行き届いていなかったのだろうか。今では当たり前になっている時計がなければ、生活は日の出、日の入りに合わせていかざるを得なかっただろう。もっともそういう生活が一番健康的とも言える。自然に逆らって生活することはそれなり

の負担を強いられているに違いない。この島にはほとんど電燈もないから、夜になれば月明かりと少しのランプだけが頼りの生活になる。ノートの時代とそれほど変わらないのかもしれない。そして、夜明けとともに1日がはじまる。夜が明けても起きる以外にとりたててやらなければならないこともない。当時も今も人々はなにかをすることを探そうとする。探さなくても何かに追い立てられるように家を出て行くに違いない。そして日が落ちた後までも、それに意味があるようになにかをやり続ける。彼らは何に向かっているのだろうか。

窓からリブロールのほうを眺めると、たくさんの星を散りばめた夜空が広がる。星は夜になったから輝く、それだけのことだ。

そのとき、草の間を何かが動いたような気がした。気になって近づいてみた。

「あ、インク、いつの間にお出かけしていたんだ？ もう遅いから中に入っていないさい」

ミヤアとひと声鳴いたと思うと、また灯台を離れて行ってしまった。一瞬星が流れたように感じて空に目を向けたときにインクを見失ってしまった。こんな夜に出歩くこともないだろうに。

彼女には彼女の生活もあるのかもしれない。こちらは、明日もあるし、そろそろベッドに入ることにしよう。

「じっじ、ノートが見つかってよかった……」

「コピ？ 起きてたのかい？」

「……」

寝言だった。コピもノートのことが気になっているようだ。また、続きを読んであげよう。島のことに詳しいコピなら何か思い当たることもあるかもしれない。

第14話 跳魚釣り

「おはようございます。慣れた手つきですね」

「いやいや、まだほんとはじめてばかりで。知り合いの船乗りの人に竿をゆずってもらったので暇つぶしにでもなればと思ひましてね」

「時間つぶしという割には、1、2、3、4……もう7匹もいる。これなんという魚ですか？」

「跳魚です。いつもだとうちはいかないから。ほんとにたまたまです。羽虫を捕食するときに跳ねるので島の人みんな跳魚と呼んでます」

「餌は羽虫を？」

「あ、これは羽虫に似せてるだけです。虫を鳥の羽でつくって、水面の少し上をふわふわさせておくれ」

「そうなんですね、鳥の羽さえあれば釣れるということなんだ」

「まあ、少しそれらしく見えるように細工はしますけど。たいした手間はかからないですよ」

今朝は朝から天気がよくて、以前船長からもらった竿を持ってチャルド川に来ていた。チャルド川は湧き水の出る池から海に流れ込んでいる小さな小川で、川といっても小さい島なので塩分を少し含んだ汽水になっている。

今日は羽虫が多いせいか、跳魚の食いつきが思いのほかいい。さっきからナツヨビがおこぼれを狙って上のほうを旋回しながらこちらの様子を伺っている。

跳魚は身がやわらかく、少し干して酢漬にするととてもおいしいので、知り合いに届けてあげると喜ばれる。マリネのようにして食べる人もいるらしい。島の周辺には大きな魚もいるようだけど、私にはここで跳魚に相手をしてもらうのがちょうどいいようだ。老人と海ならぬ老人と川というところか。今日は、草屋の先生においしいスープをいただいたお返しになればと思い朝早くから釣りに精を出している。

「今朝は、お散歩ですか？」　トラピさんはまだ30代だろうから、早起きするというような年でもない。

「僕は、もともと大道芸をやっていたので、家の中にずっといると身体がなまってしまって」

「大道芸はパントマイムのようなことを？」

「いやいや、手品ですね。なんでも隠してしまう。よくある手品です。」ないないさんはもしかするとトラピさんが隠したのかもしれないとありもしない考えが頭をよぎった。いやいや、そんなわけではない。

「見ててくださいね。このハンカチを」

そう言うと真っ白なハンカチをポケットから出して、私の手の上に乗せた。

「いいですか、ハンカチを丸めて」

と言うと、トラピさんは自分の手で私の手を覆った。

「はい、これでハンカチは消えてしまいました。手をゆっくり開いてみてください」

「ほー、まったくわからなかった。これは見事だ。どこに行ってしまったんだろう」

「これはほんとうに簡単な手品ですよ。種も仕掛けもありますから」

「人を隠してしまうこともできるんですか？」思わず口をついて出た。

「場合によってはやりますけど、それなりの仕掛けは必要ですね」

「そうですね。そんなに簡単にできるわけでもないですよ。うんうん、それはそうだな」

「また、みんなの集まったときにいろいろ見せてください。この島にはたいした娯楽もないですからね」

「もちろん機会がありましたら喜んでやらさせていただきます。それより……」

と竿の先を指差すのでそちらをみると、竿の先がびくびく動いて羽が見えなくなった。

「あー残念、逃げられてしまいましたね」

タイミングが少し遅れてうまくあわせられなかった。

「釣りの邪魔をしちゃってますね」トラピさんは頭をかきながら申し訳なさそうに言った。

「それより、少し持っていかれませんか。遠慮はなしですよ。島の名物も知らないとなると隣人

としてほっておくわけにはいきませんからね」川に入れてあった魚籠を引き上げすすめてみる。

「ほんとにいいんですか？ やっぱり早起きするといいことがあるなあ」と魚籠を覗き込んでいる。

うれしそうな顔を見ていると、こちらも思わず笑ってしまう。2、3匹を手にしたと思うとあっという間に手品のようにどこかに消えてしまった。

トラピさんはしばらく料理の話などをしたところで、もう少し散歩してくると言ってリブロールのほうに姿を消した。気がつくとナツヨビもいつのまにかいなくなっていた。着の身着のままこの島に来たというトラピさん。荷物らしいものもほとんどないのだそう。ものがなくなる人もいるし、何も持ってこない人もいる。どこまでもモノと縁のない島だと思う。でも、モノに縛られない幸せはやってみた人にしかわからない。それが本当の自由というものだろう。

さて、お土産の跳魚も釣れたから、草屋さんに行って印刷用のインキのことを相談しよう。あそこなら、きっとこの島ならではのインキがあるはずだ。

第15話 海に見えるインキ

北島と南島の間であって北島がよく見える場所に草屋はある。ほんとうはアグリズという名前らしいのだけれど、みんなは草屋とか葉っぱ屋とかいう名で呼んでいる、だれも本屋をリブロールと呼ばないのと同じだ。そもそも、島に店の看板らしいものはほとんどない。だれも商売しようなんて思わないのだから当たり前といえば当たり前。売り買いのない支え合いの生活としてつながっているだけの話だ。

もともと理科の先生をしていたというアグリさんの趣味が高じて島のめずらしい草花を集めたというお店だ。草花の種子はもちろん、植物を材料にした何でも屋さんといったところで、アグリさんは島の自然についても詳しい。島一番の物知りとしても知られている。そんなこともあってみんなからは先生と呼ばれている。

「こんにちは。ノーキョさんはいますか？」

「はい、ちょっと手を洗いますのでお待ちください」奥のほうからから声が聞こえた。なにか作業をしていたのかもしれない。

「これは、これは、オルターさん。なにかありましたか？」手をタオルで拭きながらノーキョさんが奥から顔を出した。

「お仕事のところすみません。昨日いただいたおいしい野菜スープのお礼にと思って、獲れたての跳魚を持って伺いました。大漁だったものものですから」

「それはわざわざすみません。今日は釣りをお楽しみでしたか。いい天気になりましたからね」

「いつもいただいてばかりなので、たまにはお返しもしないと。お口にあうかどうかわかりませんが、今釣ったばかりです」

「おお、これは新鮮ですね。まだ、黄色い筋がくっきり見える」さすがに、生物の先生だけあって魚にも詳しい。跳魚は横腹にある黄色い線が鮮度を見る目安になることをご存知だ。

「また、いろんな種が増えているみたいですが。これはみんな野菜の種ですか？」

「野菜ですね。今撒けばおいしい野菜がたくさん収穫できますよ」

「それはいいですね、ノーキョさんの選んだ野菜ならおいしいに違いない。リブロールの横に植

えてみます」

「ああ、オルターさんはそれには及びませんよ。うちの畑にたくさん植えてありますから、いくらでもお分けしますよ」

「いやいや、それでは申し訳ない。そんなことしてたら商売にならない」

「その代わりにというわけではないですが、本屋さんをいつも書齋代わりに使わせていただきますから気になさらないでください」

結局また物々交換のような話になってしまう。この島ではお金の価値さえもあいまいで、自分がほしいものがあれば誰かのほしいものをあげるといいうのが生活のルールになっている。金銭のともなわない助け合いというところだろうか。

「ぜひぜひ、そうしてください。と言っても店主の私はほとんど留守でミリルさんにまかせっぴりですが」

「ああ、ミリルさんにはいつもおいしいお茶いただいています。あそこでお茶を飲みながら資料整理するととてもはかどって。海からの風がとても心地いいですからね」

「昼下がりのうたた寝の場所と決め込んでいる人もいるみたいですよ。もう、本屋かどうかも疑わしいですね」ミリルさんからいつも言われていることをそのまま話した。

「それぞれ、ほんとうにうたた寝には最高で、私もよくうとうととしています。でもそういう時間がまたいいですよ。そんな本屋がひとつぐらいあってもいいじゃないですか」

「ありがとうございます。じゃあ、これからもうたた寝のできる本屋ということでいくことにしましょう。うたた寝屋ですね」

「うたた寝屋いいですね。本に困まれてうたた寝なんて、もうほかになにもいりません」

「今日は、そんなうたた寝屋からお尋ねしたいことがありまして」

「あらたまって、なんですか？ 私にわかることでしたら。ただ、女性のことはからっきしだめですよ」

「ははは、私も若い頃から女性にはまったく縁がないですからご心配なく。実は先日古い印刷機

が手に入ったので、島の新聞とか例のノートを印刷しようという話をしてしましてね。それにちょうどいい印刷用のインキがないかものかと」

「あ、昨日コピちゃんが届けてくれた島便り、ありがとうございます。とってもいい話なので私もなにかお手伝いできないかと思っていたところなんですよ」

そう言うと、奥の棚からまだ何も書かれてないラベルの張られた壘を持ってきた。

「えっとこれこれ、実はちょうどいいインキがあるんです。海辺でよく見るナミギワ草から作ったものなのですが、とても深みのあるブルーで、乾いてもまるで印刷したばかりのようにみずみずしい発色なんです。ぜひ、これを使ってください。メーンランドの人もきっと驚くと思いますよ。こんなきれいなインキはなかなか見たことないでしょうから。この壘に入ったのがそうなんですけど見てみてください。このインキで本でも作れば世界にふたつとないものができますよ」

「ほお、これはいい。この島の海の色そのものですね。ナミギワ草からこういう青い顔料が採れるんですね。今日、持ち帰ることはできますか？」

「もちろんです。昨日コピちゃんが来たときに預けようと思っていたぐらいですから。どうぞ遠慮なくお持ちください。あの新聞をたくさんの人に読んでもらうお手伝いができれば私もインキをつくった甲斐があるというものですよ」ノーキョさんは楽しそうに話してくれる。ほんとうに誰かに使ってもらうことがうれしいのだろう。

「ありがたい。では、早速帰って試してみることにします。あれ、これ海の香りがする。してますよね？」

「あ、わかりましたか？ それもこのインキのおもしろいところなんです。海の香りのするインキなんてなかなかないですよ。もう、一度読んだら忘れられないですよ。女性の香水みたいに。あはは」

「うーん、これはすばらしい。ほんとうに相談しにきてよかった。みんな喜んでくれそうだ。ありがとうございます。紙もノーキョさんにいただいたものだし、何から何まで。ほんとうに助かってます」

「紙漉きこそ一番の趣味ですから、捨てるほどありますよ。また印刷機を見に伺いますね。新聞はほんとうに楽しみにしていますからがんばってください」

思いがけないお土産をもらった。気がつくと、リブロールへ戻るまでずっとインキの香りがかいでいた。きっとこのインキを使った新聞を読むときは目の前にこの青い海が広がることだろう。海の見える新聞.....これはいいかもしれない。

お店に戻るとミリルさんが、いつものように留守番をしてくれていた。

「おはようございます。大漁でしたか？」ミリルさんにはなんでも見透かされている。

「あれ、トラピさんも」

「トラピさんはミステリー小説が好きなんだそうですよ。密室ものなんですよね」

「オルターさん、おじゃましています。」すっかりくつろいだ様子だ。ミリルさんの人見知りしない性格がいつもたくさんの人を集めてくる。

「おやおや、早速のご来店ありがとうございます。いい本ありましたか？」

「ミリルさんに島の話をいろいろ聞いてました。なんだか島そのものがミステリーみたいで」

「歴史伝承みたいなものかもしれないですけど、この島にもいろいろあったみたいですね」

「なんだか、はじめて住んでみたいと思うところに出会ったような気がしてます」

「あるのは青い空と海だけ。それだけなんですけど、それで十分なところですよ。なにも持たないトラピさんには向いてるかもしれない。小説ほどにはおもしろくないかもしれないですけど、古いことを調べる楽しみもありますし」

「そうなんですよね。何もなくてに惹かれているのかも」

しばらくすると、インキの入った壇からナミギワ草の香りがリブロールに広がっていった。

「今日もいいお天気」ミリルさんが海のほうを見ながらつぶやいた。

「ほんとに」トラピさんが遠い空を見ながら答えた。

第16話 乾かない文字

「実は僕、もともと旅芸人をやりたかったんです。定住が性に合わないみたいで」

「旅する奇術師さんですね。なんだか素敵な話。いろいろな街に行かれたんですか？」

「同じところには1週間から1ヶ月ぐらいです。街の大きさにもよりますが、小さいところだと一週間もすればみんな手品も見飽きてしまいますから」

「そういうものなんですね」

「いつまた会えるかわからないのってよくないですか。偶然の再会を待っている楽しみですね」

ミリルさんはいろいろな世界を見てきたトラピさんの話に興味津々で聞き入っている。この島に居つてしまうと外から来た人との話が唯一外界とつながる機会になるので、若いミリルさんはいきおい話もはずんでしまうのだろう。

「あ、コピちゃんも来たのね。こちら旅する奇術師のトラピさんよ」

「はじめまして、コピちゃん」

「こんにちは、トラピちゃん」

「コピちゃん、トラピさんだよ。お兄さんだからね」と私が言うと、

「コピもお姉さん！」ちょっと不満そうな口ぶりで言った。

「あはは、お姉さんだよねー。よろしくね！」トラピさんもコピを好きになってくれたみたいでよかった。

「昨日、東の海にいた」とコピが言った。

「あれ、昨日会ってた？」

「コピちゃんは、ほんとうに島のことをよく知ってるんですよ。ね？」

「コピは配達さん。なんでも知ってる」

「みんなに幸せ運んでくれてるのよね」とミリルさんが言うと、コピの自慢げな顔を見てみんな笑顔になった。

トラピさんとひとしきり話した後に、早速 ナミギワ草の青いインキでの印刷を試してみることにした。記事はあらかじめ書いておいた赤い月のことだ。

「ミリルさん、これをお願いしていいですか？」

「あら、もう原稿できているんですね。さすがはオルターさん、やるのが早いですね」

「じっじ、がんばった！」

「ははは、コピも配達さんががんばったからね。じっじもやらないと。これからミリルさんもがんばってくれるんだよ」

「がんばりますよ。次に船長が来るまでに立派な新聞をつくっておかないと。あー、この香りだったんですね。さっきから、何の香りかと思ってたの」

「このインキ、島の香りがしませんか？」と誰ということなく聞いてみると、「言われてみると」とインキ瓶を手にしたトラピさんが匂いを嗅いだ。

「自然の香水ですね」とミリルさんがうなづく。

「ノーキョさんのところの自家製ですよ。コピちゃんとミリルさんによろしくって言われてましたよ」

「ノーキョさんはインキも作れるんですか。なんでもできちゃう人ですね」

早速、ミリルさんがインキをセットして試し刷りをはじめた。この時期によく見られる赤い月のことを書いた新聞が次々に刷られていく。真っ白な紙に新しい息吹が吹き込まれていくように見ていて楽しい。きっとこれを見ればノーキョさんも喜んでくれるだろう。コピも刷られたものをテーブルに運んで乾かす手伝いをしている。みんなでいっしょに何かやるのは楽しいものだ。

「この新聞は定期的に発行しているんですか？」本屋だと思っていたら印刷をはじめたのだから、事情を知らないトラピさんが不思議に思うのももったいなことだ。

「正式には出していません。まだ、テスト印刷中で。島をもっと知ってもらうために、新聞とか島からの定期便りを出そうという話なんですよ」

「それはいい話ですね。僕にもできることがあったら声をかけて下さい」

「ありがとう。それにしても、ほんとうにきれいな青だ。ノーキョさんの言ってたとおりだな。ほら、最初に刷ったものもこんなにきれいだし。このインクの文字はいつまでも乾かないようだね」

「オルターさん、私これと同じような色の文字をみたことがあるような気がします。たしか州立古書文庫だったような」文字をじっと見ていたトラピさんが言った。

「それはリアヌシティの図書館？」

「えっと、そうだったかな？僕はいつも同じところにはいないので、レトルシティのほうだった気がします。そこはとくに古い文献ばかり集めているところなんですけどね。この島のこと知ったところで見たような気がします。もしかしてこのインキ、昔はこの島の名産品のようなものだったかもしれないですよ。ミドリ鮫のように」

「じっじ、ノートに手紙のインキ出た！」

「あ、そうだね。今書かれたばかりのような文字だったってあったよね。きっとこのインキで書かれたんだわ。コピちゃん、すごい！」

「ふーむ……たしかに」

「トラピさん、それは本でした？」ミリルさんが興奮した様子で聞いた。

「どうだったかな。メモのようなものだったかもしれないですね」

「もしかしてそれ、あの手紙そのものだったかもしれないですよ。オルターさん、そう思いませんか？」

「でも、このインキで書かれたものはリアヌシティのほうに行けばたくさんあるかもしれないですから。僕の話はあまり当てにならないかもしれない」トラピさんも少し困惑している。

「トラピさん、もう何十年も謎だらけのノートのことですから、ほんのちょっとした情報でもいいんですよ。これで、新聞をメインランドに届ける楽しみが増えるというものだね。だれかが気づいてくれるかもしれない」

「じっじ、コピの配達さん？」

「コピちゃん、メインランドは遠いから船長にお願いするのよ。コピちゃんには、この島の配達さんをやってもらわないと」ミリルさんがやさしく説明した。

「島の配達さんはコピ！」と言いながらうれしそうに飛び跳ねた。

ノートの主の見た手紙が今もメインランドに残っていたなら、なんと幸運なことだろう。一度でいいから見てみたいという思いが募る。ノートの主をこの島に呼んだ手紙にすべての始まりがあるとすると、島のルーツにたどり着くようなものだろう。それはとてもロマンチックな話だ。

そうしているうちに赤い月のことを書いた新聞が店の床を覆い尽くしていった。

「これだけ刷れば十分だな。テスト印刷だし。みなさん、このままここにいますか？」

「僕はもう少し本を見させてもらいます。ミリルさんにも島の話をもう少し聞きたいし」

「じゃあ、私は灯台で少しノートを読み返してきます」

「コピも行く」

テスト印刷したものは乾いたらまとめておいてもらうお願いをしてリブロールを後にした。

第17話 きまぐれな友達*

1時間もノートを読んでいたのだろうか。少しうとうとしかけたときに、トラピさんの声が戸口から聞こえた。

「ここが灯台なんだね」

「あ、いらっしやい。ミリルさんはリブロールに？」

「ええ、お店の留守番をされるそうです」

「じっじのお休み場所だよ」と案内してきたコピが説明した。

「あはは、コピちゃんはなんでも知ってるんだな」トラピさんがこちらを見ながら笑っている。

「この子とは長いつきあいで、どこから来たのかも知らないままに、今ではまるで孫とおじいちゃんの関係ですよ」

「子供が一人で暮らせるなんて、島のみなさんに守られているんですね」

「両親の居所でもわかれば連絡してあげたいんですが、それもわからないままに数年たってしまいました」

「コピはここが好き！」

「というようなわけで」

「オルターさんは、どうしてこちらに？」

「ああ、それはまた時間のあるときにゆっくり。ただ、まちがないのは、ノルシーさんと私が今はこの島の最古参ということですね」

「そうなんですか」トラピさんが机に目を向けたまま答える。

「ここは、オルターさんの寝床兼書斎なんですか」

「ノートの主もここから生活をはじめたようで、そこに対するこだわりかもしれません。ほんとうはこの灯台は誰の物でもないんですが」

その後、少しノートのお話を説明した。コピも聞くのを楽しみにしているので、少し読んでみることにした。

***** ノート *****

朝早くまで雨が降り、薄曇りの夜明けに日時計の針は薄くあいまい。針がますます短くなり本格的な夏の到来を予感させる。

植物の記録をするために島を散策しました。新緑の時期ということもあって草花がところ狭しと咲き乱れています。とくに小さな白い花が印象的でした。雨あがりのせいもあって、ふだんよりも生き生きとして見えます。

雨の日は一人でいることのお不安を感じなくないですが、不思議なものでこの島の生活が長くなると、お不安どころか雨がやさしい自然の恵みのように思えてくるのですから不思議です。その恵みを受けて草花が空に向けて恩返しのお気持ちを精一杯表しているように感じられるのです。

島を南のほうに行くと木立の集まった場所があります。それは海に浮かぶ島には似つかわしくないちょっとした林になってます。陸地から突然切り離されたようにさえ思える不思議な景観です。どうしてここにこんな林ができたのか、いつか理由を明らかにできるといいのですが。

島に来て一ヶ月ほどになります。未だに誰一人として会いません。流れつきたボートはそのまま、私の後に誰かが島に渡ってきた気配もありません。根を食べられる植物も見つけましたし、手製の石のかまどでひと通りの料理もできるようになりました。持参したなべを使って石でおこした火で煮炊きすることも慣れてきました。

ちょうど料理ができて火からなべを下ろそうとしていたとき、小さな動物が木の間を横切りました。ねずみのようにも見えましたが、カワウソのような動物だったかもしれません。こちらを襲ってくる様子もなかったので、あとずさりしながらとりあえずその場を離れました。

しばらくして戻ったときにはなべの横に置いてあった魚が消えていました。このときはじめてこの島に自分以外の生き物がいることを確信しました。こんな穏やかな島なので人に危害を加えるような動物はいないと思いますが、その姿を見るまでは安心して寝ることはかなわないかもしれません。

***** ノート *****

「この生き物について書かれているのはこれが最初で最後。その後には、その動物を呼んでいるらしい名前しか出てこないです。”きまぐれ”というのがその動物をさしているようなんです。その間のノートがないからはつきりはわからないんですが、たぶん間違いないですよ」

「この島に最初からいる動物なんているんでしょうか？ 今、そういう動物は島にいるんですか？」トラピさんも興味があるようだ。

「この島独特の哺乳類で斑点のある島もぐらはいますよ。鳥だと水玉模様のナツヨビのようなものも。でも、どちらも人になつくようなことはないですから、もしかしたら、船から落ちて流れ着いたか、だれかが連れてきたのかもしれないですね。繁殖は無理だったのかもしれない。いずれにしても、動物でも友達がいれば島の暮らしも楽しいでしょうからね。彼はその”きまぐれ”がいたことでいろいろ救われたんじゃないでしょうか」

「当時、動物を飼うなんて習慣があったのかな」トラピさんがつぶやく。

「一人でいたら、なにか友達がほしくならないですか？ トラピさんはそんなことはないですか？」

「僕は結構平気ですよ。行く先々で出会いがあればそれで十分」

「でも、その人もいなかったら？」

「そうか、それはちょっと考えてしまうかな。そう思うと、なつくかどうかの問題ではなく、友達だと思えること自体が必要だったのかもしれないですね」

「自分が友達だと思える人が一人でもいることは幸せかもしれないですね」

第18話 豚の素性

夏の日差しも少しずつ強くなってきた。最初のナツヨビが来てもう少しで一ヶ月になる。

今日は久しぶりにエバンヌでノルシーさんの入れたお茶をいただいている。ここが島で最北の場所になる。最北と言っても最南端との距離は500mもないから、何も変わるものはない。もともとの島がメーンランドの南に位置している温暖な場所なので、冬の一時期を除けば、北といってもそれほど寒いわけでもない。

話好きなノルシーさんのところには島の情報が集まるので、ときどき遊びに来ると楽しい。今日もおもしろい話が待っていた。

「最近豚を連れた人と会わなかった？」ノルシーさんが食器を洗う手を止めて、唐突に話しはじめた。

「豚ですか？」

「そうそう、普通に豚」ノルシーさんが笑っている。

「でも、ちょっと小ぶりの豚かな」と言うのと両手で犬ぐらいの大きさを作ってみせた。

この島には養豚をはじめそうな人はいないから、最近来た人なのかもしれない。

「なんでもね、ここ最近島のあちこちで見かけるみたいよ。この狭い島で豚牧場でもはじめるつもりなのかな？」

「豚の牧場？」

「ない？」こちらの顔を覗き込むように見ている。ノルシーさんはなんでも受け入れられる人なので、ときどきこちらが呆気にとられるようなことを言う。

「どうでしょう……そんな島？」

ノルシーさんのお店は、お昼まではお客さんがほとんどいない。もっともジャズのお店だからそれは当然のことで、夕方近くからお客さんが入り始める。お店の名前のエバンヌは昔知り合ったピアニストの名前から取ったと聞いた。使い込まれたアップライト・ピアノの音がこの島唯一の音楽というところ。普段ピアノを弾くのはノルシーさんだけだから、ノルシーさんが話し出してしまうと、潮騒の音だけが唯一のBGMになる。そんなのんびりしたお店だ。

「あれ、もしかしてトリュフ？ トリュフがとれるのかな？」

「トリュフって、トリュフ？」と思わず聞き返してしまった。

「そうそう、あのトリュフ。豚は嗅ぎ分ける力があるんだよね？ たぶんトリュフを探してるんじゃないかな」

「トリュフねえ。この島で採れるのかな？ 採れたとしても、あれは都会のお金持ちが好きなものだよ」それが理由でこの島に来る人が多くなるのもどうなんだろうと思う。

「お金の匂いがするものにいい話はないし……」

「手に入りにくければいさかいのもとにもなるけど、たくさんあればそんなことにもならないでしょ」

「たくさんある？ 匂う？」と聞くと、

「匂うね。トリュフ狩り名人の気配……」と、鼻に指を当てたノルシーさんは、探偵気取りだ。

「養豚場かトリュフ……」

「ちょっと待って、もしかすると飼い豚かもしれない。豚と散歩してるだけかも」

「飼い豚って……それにしても人けのないところを歩いてない？ 広場あたりでは見かけたこともないし」

「散歩ってそういうものでしょ。違う？」

エバンヌの店内には、カメラの好きなノルシーさんが撮った島の草花の写真がフレームに入れられてところ狭しと飾ってある。観光で来た人が最初にこの店を訪れるというのもよくわかる。島を知りたい人にはちよどいい情報が集まっている。

「今度、豚名人見かけたら聞いてみよう。オルターさんもそうしてよ」

「トリュフ名人でしょ？ その豚はなんですか？ って聞くの？」

「そうそう、豚の素姓は調べておかないと」

「素性ね」

勝手なことをとりとめもなく話しているうちに、すっかり日が登った。小さな窓から日が差し込んでカウンターテーブルのコーヒーカップを柔らかく照らしている。

私はカバンから紙と鉛筆を取り出し、島の出来事を書き始める。気がつくと、島便りのために島のことを書くのが習慣になっていた。ノルシーさんはお客のいることも構わず、お店の掃除をはじめた。もともと私を客とも思ってないのだろうけど。こういう気のおけない関係が落ち着く場所をつくる。みんながエバンヌに集まるのもそういうことだろう。いつか島便りで、エバンヌの紹介もしないといけないと思った。

第19話 時間のカタチ

エバンヌを出て東浜のほうに向かってしていると、海辺にロスファさんのような人影が見えた。はっきりはしなかったけれど、行方がわからなくなったロスファさんに違いない。

ロスファさんはまだこの島のどこかにいるのかもしれないと思い、急いで家を訪ねてみたものの疾走したときと何も変わった様子がない。

気になって、すぐにリブロールに戻った。

「ミリルさん、こんにちは。いつもご苦労様です。突然だけど最近ロスファさんの情報、なにか入ってますか？」

「新聞のなくしものコーナーの話ですか？」

「コーナーというか、ロスファさんその人の行方なんだけどね」

「ああ、ロスファさん、うーん残念ですけどまだないですね。元気だといいいんですけど」

「そうですか……」

「なにかありましたか？」

「いやその、そろそろなにか情報入ったかなと思っただけです」自分の見間違いだったかもしれないと思い、そのことを口にするのをとどめた。なぜか言ってはいけない気がした。

「もう、この島にはいないのかもしれないですね。ものがなくなることに疲れてしまったんでしょうか？」

「そうですね。こんなにも時間は無頓着で、ものに執着しない人ばかりじゃ、ロスファさんみたいな人にとっては暮らしにくいのかもしれないね」

「慣れるととてもいいところなのに、残念です」

忙しくて、すべてが時間通りに進まないといけない町に暮らしていた人にとっては、こういう生活に馴染むのも簡単ではないのかもしれない。

考えてみると、この島にはほとんど時計がない。湿地に誰かが捨てた時計があるけど、それが

忙しさの象徴だったかのように、ずっと針が止まったまま放置されている。錆びて朽ちていくのを見てると湿地が時間を飲み込んでいるようにも思える。あの何もない湿地がこの島の生活をもっとも雄弁に伝えているのかもしれない。

リブロールにも時計はあるものの、それは形だけで、いつでも動いたり止まったりしながら勝手な時間を刻んでいる。だれも時計の時間なんてあてにしていない。普通よりもずっとゆっくりとしたコチコチという刻みが子守唄のように聞こえるぐらいだ。

船長から飾り物としてもらったものだけれど、骨董品でもないのにまちがった時間を刻む時計を持ってくるのが船長らしい。きっと、なにか船長のこだわりがあるのだろう。何も言わないで勝手に置いて行ってしまったから理由は聞いてない。

この島にも時計のある生活があったのだろうか。時間を形にした時計。もしあったのなら、そのころの人たちはメーンランドに戻ってしまったのだろうか。時間を形にしたときに人の生き方は変わってしまったのかもしれないと思う。今は止まった時計と遅れて時間を刻む時計が島のモニュメントのように置かれているだけだ。

「ロスファさんは、腕時計をしていました？」ちょっと気になってミリルさんに聞いてみる。

「いつでも忙しそうに腕時計を見てましたね。そう言えば、その腕時計もなくなったって言ったような……」

「そうですか」

「なくても生活に困ることなんてないんですけどね、この島では」

時の流れを手に入れようとしたことにはたして意味があったのかと思いを巡らせていると、掛け時計が6時を告げた。

「そろそろお昼をしにしましょうか。船長の時計はまだ6時ですけどね」ミリルさんが笑いながらお弁当を開いた。

第20話 ハトの手紙

中央広場の陽だまりでぽたぽたと過ごしていると、初夏の日差しが心地いい。椅子を倒して目を閉じるとまぶたの裏に太陽の影が見える。おおらかな自然を独り占めできるときだ。耳に届くのは風の音と草のさわさわと揺れる音だけ。

「じっじ、戻った！」

「おや？ お帰り。どこかに行ってたのかい？」目を開けるとコピが覗き込むようにしてこちらを見ていた。

「トラピちゃんと橋の堰見てきた」くりくりした目でこちらを見る。

「ノートの入ってた記憶の堰かい？」

目を閉じるとまた草の音が聞こえてきた。

「トラピさんが見てみたいって言われたので、コピちゃんに案内してもらったのよね。」ミリルさんも一緒に行ったようだ。

「コピの案内さん！」

「案内さんお疲れさま。それで、トラピさんは？」

「他も見るって」と言うなり、リブロールのほうに走って行ってしまった。いつでも子供は元気だ。

堰の場所は、チャルド川の中流にある橋の下あたりになる。知らない人が見ると、川の淀みに浮かんでいるただの空き瓶のように見える。実際そうなのだけれど、あそこでノートが見つかったという証に堰が浮かべられている。言われなければわからないということではあるけど、この島ではあれでもちょっとしたモニュメントになっている。堰は激みにとらわれたまま流れない。

「ハトの手紙来てた。赤2号さん到着！」戻ってきたコピがミリルさんに手紙ロールを渡した。

メインランドとの連絡手段が船長の船しかないのは不便だということで、ハトポステルを置くことにしたのはいつだったろうか。あのときは名案だと思ったものだけど、メインランドで手紙のやり取りをする人もいないので、めったにハトの姿を見かけることもない。

コピはハトが飛んでくるのを見て取りに行ってくれたのだろう。メーンランドのハトポステルほうでもほとんど手紙の入らないポストはあまり気に留めてくれていないだろう。届くだけでもありがたいと思わないといけない。

「あら、めずらしい。お手紙ですよ」ミリルさんが指先を小さくしてロール状に丸められた手紙を伸ばす。

「だれからですか？」思い当たる人もいないから、差出人が誰か気になる。

「えっと、水公社ってところからみたいですよ。水をもらいたいって書いてあります」ミリルさんが困惑したような顔をしてこちらを見る。

「水を？ 水なんてどこにもあるのに」町のほうは水まで探すようになってきているのかと想像してみる。夏を前にした乾期で水不足にでもなっているのだろうか？ それにしてもこんなに遠いところの水じゃあ役にも立たないだろうに。

「水おいしいよ」コピが横でコップで水を飲む仕草をした。

島のどこでも自然の水を飲むことができるだから、水に恵まれているのは間違いないかもしれない。軽い病であれば、この水を飲んでるだけで治ってしまうということもよくある。

「もらえるなら、お返事くださいって書いてありますね」

「ミリルさん、ちょっとみせてもらっていいですか？」

小さな手紙を見ると、ミリルさんが言ったこと意外に何も書かれていなかった。もっともハト手紙自体が小さいものだから、それ以上書く余白もないのだけど。

ハトポステルのハトは赤い洋服を着せられていて、まちがって撃たれないための目印になっている。島の住人さんのところにはハト手紙用の鳥小屋が置かれている。ハトの鳴き声が手紙が届いた合図になっている。リブロールに来るハトは2代目のベテランで、最初のハトは大雨の中を飛んで行ったきり戻ってこなかった。ハトにとってもメーンランドとの往復は楽な仕事ではないのだろう。

「ミズコウシヤ ボルトン……名前なのかな？」

「ボルトンさん？」ミリルさんが、人の名前のように言う。

「会社の名前かもしれないですね。でも、水ならいくらでもあるのはわかっているのに、こんな手紙を書いてくるなんて丁寧な人ですね」

「コピ、水あげるよ」

「そうよね。水なんてだれのものでもないし。みんなで飲めばいいのよね」ミリルさんもコピに賛成のようだ。

「どうぞ、って書いておきますね」ミリルさんが引き出しから小さな巻紙を出して適当な長さに切っている。

この島で水を汲んでどうしようというのだろう。

ミリルさんはテーブルに座って文面を声に出しながら書いた。

「オルターって書いておきますね」

紙を小さく巻くとコピの肩に止まっていたハトの右足の筒に手紙をそっと入れた。

「よろしくね！」とコピが言うと、それがわかったかのように、風に翼をあわせて北に向けてまっすぐに飛び立った。

「ハトの配達さんも大変だね。メインランドは遠いから。がんばってね」ずっとハトの方角を見たままでミリルさんがつぶやく。

「おなかすく？」コピがおなかを押さえながらミリルさんを見た。

第21話 ミドリの海*

ハトを見送った後、3人でメインランドに向けた島便りの積み出しの準備をした。そろそろ船長の船が来るころなので用意を済ませておかないといけない。メインランド向けの新聞なんて簡単に言ったもののいざ用意するとなると、慣れないこともあって結構な時間もかかる。印刷されたものを油紙で包んでしばるのもなかなか手のかかる作業だ。

1時間ほどもかけて準備が終わって一休みをしているとトラピさんが湿地から戻ってきた。

「ありがとうございます。この小さな島にもいろいろなところがありますね」

「いかがでした？」ミリルさんが尋ねる。

「あの塚にノートが入ってたんですね。よく水が入らなかったものですね」
ちょっと古い塚選んで置いたこともあってみんなから聞かれる。現物と誤解されてしまうのだ。

「あれは、代わりのものを置いてあるだけで」いつもと同じ返事をする。

「そうなんですか」トラピさんは納得したように何度か小さく頷いた。

「実物には多少水も入り込んでいたみたいで、読めないところもかなりあるんです」

「じっじは読むの上手。いつも読んでくれる」コピがうれしそうに言う。

「あそこの場所がこの島の発祥の地ということになりますね。メモリアル・ボトルというところでしょうか」個人的な思いが強いのもかもしれないけど、実際あのノートの主がこの島の実質的な開拓者となったことは間違いない。

「ほんとうですね。あそこにあった塚に何百年も前のノートが入っていたと思うといろいろな感じるものがあるなあ……」橋のほうを振り向くようにしてトラピさんが言った。

「また、あのノートの続きを読ませていただけませんか」

「いつでもいいですよ。灯台の引き出しに入れてあるので。だれでも見られるようになってますから」

「コピは読んでもらう」とうれしそうにトラピさんのほうを見る。

「コピちゃんも、ノートさんのファンなんだよね」みんなはノートを書いた主のことをノートさんと呼んでいる。

トラピさんが灯台のほうに向かうと、コピもそのあとをちょこちょこことついて行った。

***** ノート *****

深夜に海のほうが騒がしいので、窓から覗いて見ると、赤い月に照らされた海が波立って見えました。

そのとき、ミドリ鮫の群れが島の近くまで来ていることに気がつきました。この群れを追って漁師が来ていたと思うと、今島にこうしていることの喜びは言葉にできないほどのものでした。興奮のあまりしばらくは動くこともできずに海を見ていたと思います。島が消えたのを見た漁師も、あのミドリ鮫を追いかけてきたのです。

急いでボートを海に出して、鮫たちのほうに漕ぎ出しました。数えられないほどの鮫を間近で見ると恐ろしくもありましたが、闇の中でエメラルドのように輝く美しい鮫を見ているうちに恐怖心は消え去ってしまいました。

鮫の渦の中に入ると、人ひとり分の隙間もないその数に圧倒されました。それは海が緑色に染まるほどの数でした。島の周囲を覆いつくすほどでしたから、数百、数千もいたかもしれません。鮫は人の大きさほどもありましたが、するどい歯があるようにも見えなかったので、人を襲う鮫ではないことはすぐにわかりました。もしかするとこの島に彼らが好む海草のようなものがあるのかもしれません。それとも繁殖の場所なのでしょうか。緑の海草が彼らを保護色にしているのか、海草の色に染まってしまったのか、それも私にはわかりませんでした。

ミドリ鮫の群遊の中で夜明けを待っていると、一匹の鮫がボートにぶつかってきて、逃げるまもなく海に落とされてしまいました。もともと泳ぎは得意でなかったこともあって、鮫の群れにもまれていたうちに気を失ってしまいました。意識が遠のく中、鮫がお爺さんのことを話しているように見えました。

みんな.....知ってる.....元気。会いたいかな.....ぶくぶく、ぶくぶく.....

なにも、どこも、だれもない.....ぶくぶく、ぶくぶく.....

それは最初にして最後のとても不思議な体験でした。幻聴と思うには、あまりにはつきりした

言葉だったのです。

気がつくと、夜も明けてすっかりあたりは明るくなっていました。私は一人浜辺に打ち上げられていました。ときおり波が足先を撫でるのを感じ、命が助かったことに心から感謝しました。起き上がってみると少し先にボートも見えました。もしかすると鯨が助けてくれたのかもしれないと思うと、知らず知らずに涙がこぼれ落ちました。そして、この島への思いが一層強くなっていくのがわかりました。

自然はたくさんのやさしさにあふれている。人が心を開くとき、誘われ、迎えられる。そこでは、一人でいる世界ではなくなり、生かされていることに気づく。

あれほど海を覆い尽くしていた鯨の群れが嘘のように消え去って、朝日が採れたての果実のように瑞々しくきらめく穏やかな夜明けでした。鯨の残したものはないかとあたりを探してみましたが、浜辺はいつもと変わらず、昨日の乱舞を思い起こさせるものは何もありませんでした。ぼんやり昨夜の余韻に浸っていると、突然あの手紙のことを思い出しました。時間がゆるりと動いたのは、ミドリ鯨の現れた夜ではなかったのか。

そう思ったとたん何か変わったものがあるのではないかと、何かに取りつかれたようになって海岸線を隅から隅まで探し回りました。何日探したでしょうか。それでも何かが起きた痕跡をみつけることはできませんでした。二度とないチャンスだったかもしれないと思うと、意識をなくしてしまったことが悔やまれてなりません。

鯨が現れた日をあらためて思い返してみると、赤い満月の上った夜で、雨の降った翌日でした。季節は初夏。これが次の日を予想する材料になるのかどうかはわかりませんが、またミドリ鯨が来てくれることを祈って、今夜は床につくことにします。

***** ノート *****

「鯨いっぱい」コピが最初に口を開いた。

「そうなんだ。なにも起こらなかったんですね」トラピさんもちょっと納得がいかないようだ。

「それもわからないままですよ。なにかが起こったのかどうか」あとからいっしょに来たミリルさんもトラピの気持ちを察して残念そうに言った。

「コピはミドリ鯨見た」

「え？」思いがけない言葉に3人があっけにと取られてコピの顔を見ると、「ときどき島に来る」と不思議なことじゃないよとでもいうようにコピが言った。みんなの気持ちが理解できないのかきよとんとしている。

「コピちゃん、見たことあるの？」

「うん」

「今でも来ている……」トラピさんが興奮を隠せないようだ。

「でも、少しだけ」

「少しだけ……でも、来ているのかい？」思わず、3人そろって海のほうを見てしまった。ミリルさんとトラピさんはしばらくだまったままで、それぞれにこれまでに見た島の風景に鮫がいなかったか思い返しているようだった。

「まだ、しばらく謎解きは続きそうだな」トラピさんが独り言のように言った。

しかし、コピはこの島のことをほんとうによく知っている。というより、この子にしか見えな
いものがあるようにさえ思える。いずれにしても、この島に今でもミドリ鮫が来ているのであ
れば、その日にこそ時間がゆるりと動くのかもしれない。

第22話 かすむ目

4人でミドリ鮫のことをひとしきり話すと、それぞれ午後の休憩を楽しむために家に戻って行った。午後はゆっくりするというのもこの島の決まりなのだ。みんなが帰ってしまった後、しばらくベッドの上に横になったままミドリ鮫のことを考えた。

窓の外のは、地球を包む大きな布のように見える海が、何事にも動じないと言いたげにぺったりと地表に張り付いている。そして、生き物のように大きく呼吸をし、ぬらりぬらりと揺れている。この海のどこかにあのミドリ鮫がいるのだろうか。この島を取り囲んでしまうほどのミドリ鮫の群れは、さぞや幻想的な情景だっただろう。

海面のきらめきが鮫の姿を隠そうとしているようにも思える。自然は人間の営みなどまったく意に介さない。

窓からは、いつものようにやわらかな日差しが差し込んでいる。一瞬、机の上のノートを太陽が覗き見しているような気がした。風がいたずらで持って行ってしまうといけないので、引き出しの中に片付けた。こんなことを考えてしまうのも、自然の中で長く暮らしているせいだろうか。目に見えるものすべてにそれぞれの命と意志があるように思うのは考えすぎだろうか。

さっきから、インクがバスタブの横にできた陽だまりでおなかを出して寝ている。野生の動物はおなかを見せないものだけど、この子のはじめて見たときからこうで、よほど怖いものがないと見える。まるで灯台は自分の持ちものだと言わんばかりだ。コピに言わせると今日のインクは何色ということになるのだろう。ときおりまぶしそうに薄目を開けては欠伸をしている。はじめて会ったのが10年近く前だったことを考えると、コピの言うようにもうすっかりおばあさんということになる。もっとも20年以上生きる猫もいるらしいから、おばあさんと決めつけては失礼かもしれない。

「インク、今日もいい天気だね」寝ている素振りのインクに話しかけてみる。

案の定、少し耳をこちらに返しただけで、知らんふりだ。

横目で西の海を見たときに、キラリと光るものが目にとまった。もしかしてと思って目を凝らすと、どうやら鮫ではなく船の帆のようだった。

そうか、明日にも船長が来る予定だった。新聞もできたし、あとは船に積み込むのを待つだけだ。好奇心旺盛な船長のことだから、あの海に見えるインクの魅力に取り憑かれるに違いない。

水平線に見える船は小さな米粒ほどにしか見えない。視界の両端まで広がる海に比べれば、米粒にも満たないかもしれない。そう思うと、大海原の彼方から毎月のように来てくれる船長の島

への思いの強さを感じずにはいられなかった。ほんとうにいつの日にか船長にリブロールを任せる日がくるのかもしれない。

そのとき海面で何かがジャンプした。

「あ、ミドリ鮫……」

海面のきらめきがじゃまをしたけど、あれはミドリ鮫にちがいない。イルカと思っていたのがミドリ鮫だったのだろうか。もっとよく見ていればコピの言うようにミドリ鮫にも会えるのかもしれない。そう言えば、今はちょうど赤い満月の時期だった。今夜にでもミドリ鮫の群れが来ると考えただけで、ノートの主が書いていたのと同じような興奮を覚える。仮眠をして今夜は夜通し海を見てもみようかと真剣に考えてしまった。

インクもさっきの鮫を見ていただろうか。振り返るとインクの姿がかすんで見えた。ちょっと疲れたかなと思いメガネをはずして目をこすってみると、もうそこにはインクはいなかった。また、どこかに遊びにってしまったのだろうか。それにしても目がかすむようになるようだ、爺さんもいいところだ。本を読むのもほどほどにしなさいと言われていたようだ。

後ろから物音がしたので、振り返るとインクがバスタブのほうから出てきた。どうも目の調子がよくないみたいで、またかすんで見える。まったくおいぼれたものだ。

第23話 水の島+

鯨の大群を見ることもなく、いつもと同じ朝を迎えた。その日も船長の船は来ないで、結局2日後になった。

「やっほーい！ みんな元気かー？ 船長様のご到着だぞ」いつもの元気なダミ声が聞こえてきた。

「船長、いらっしやーい」ミリルさんがまだ見えない船長の声に応える。

「しばらくぶりに来てみたらすっかり夏になっちまったな」ドタドタとデッキ側からお店に入ってくる。

「夏といってもまだはじまったばかりですよ」ミリルさんが答える。

「おうよ。でも、ナツヨビもあんなにいるしよ、今年の夏は暑くなりそうだな」

「そうだ、船長ならミドリ鯨のことを知っているかもしれない。」

「船長、ご苦労様だね。唐突だけれど船長はミドリ鯨って見たことあるかね？」

「ああ、一度だけな。たしかこの島の少し東のほうだった。なかなか壮観だったな」

「やっぱりいるんだ。今でも」離れたところにあるソファーに座っていたトラピさんが独り言のように言う。

「今でもと言ったか？ もう30年も前のことだぞ。あんなきれいな色してりや目立ってしょうがないだろ。生き残りがいるかどうかもあやしいな。もともとこのあたりに生息していた鯨なんだらうけどな。みんなで缶詰にでもしってしまったか？」

「船長ったら」ミリルさんが呆れ顔で見た。

「俺は鯨にはほとんど興味なくてな、あんなもの見るだけで十分だろ」

「見たいというか.....」この事情を話そうとすると、それをさえぎって、

「まさか、水族館をやりたいなんて言わないだろうな、爺さん。頼まれてもお断りだぞ。鯨になんの義理もないしな。鯨に食われるなんてごめんだ」

「船長、ノートにねミドリ鯨のことが書いてあるんですよ」ミリルさんが口を挟んだ。

「それならいい。ノートを読んでいる分には命にかかわることもないだろう。それはそうとして、今回は品物なしで、土産話だけ持ってきた」

いつもの調子で、人の話を聞く気もないようだ。忙しい人だから仕方ない。ただ、ミドリ鯨が肉食のように言うところは気になった。

「えー、普通の本だけなんですか？ ちょっと残念」

「残念？ そりゃあ、ないだろう。はるばるやってきた客人を迎えるお言葉とは思えませんが、お嬢さん」

「あら、ごめんなさい。だって、いつもおもしろいもの持ってきていただけるから」

「おもしろいものときたか。わははは。それなら俺だけで十分だな」たしかに船長の話はいつも

突飛でおもしろい。思わずみんなで顔を見合わせて笑ってしまった。

「船長、はじめまして。トラピです」ペコリと頭を下げた。

「新入りだな？ よろしくな。この店の次期オーナーになるダルビーだ。こう見えても、義理と人情に厚く、気は優しくて力持ちだからな。親切にしておいて損はないぜ」

「また、好き勝手なことを言ってる。オルターさん、船長が言いたい放題ですよ」

「船長にはお願いしないといけないこともあるしね。ここは、手厚い歓迎をしておかないとだめかな」船に積み込む新聞のことが気になって頭から離れない。

「まあ、オルターさんまで」

「さすが長老、よくわかってる。その話というのはだな。ここの水が滋養強壮にいいという噂が流れててな。調べてみると、その昔、ウォーターランドという名前で呼ばれてたっていうんだな、これが。知ってたか？」

「それは初耳だな」以前住んでいた人からも聞いたことがない。

「そうだろ？ そこで船長さん考えたね。水の島って売り文句はどうかって」

「あら、すてき。水の島、ウォーターランドね。覚えやすいわ」

「ところで、何も無いと言ったものの、俺らしからぬ普通の本は持ってきてるわけよ。よかつたら見てくれ。いらなけりゃ、俺の本棚にでも入れておいてもらおうか」

「船長の本棚？」どうやら船長もリプロールを自分の書斎のように思ってるらしい。長旅の途中でちょっと立ち寄る自宅のような場所と思ってくれているのなら、それはそれでうれしいことだ。

「いつになくたくさんあるね。どれどれ」何冊か手にとって見る。船長が言うように今回は普通の本がたくさんある。

「俺だって、たまには選書のできる場所を見せないとな。ただの運搬人のように思われちゃたまらんからな」

「えっと、これみんな水の話ばかりですね」トラピさんが何冊か見て言った。

「あれ？ 水の話はお気に召さない？」

「いや、そんなつもりは」トラピさんがあわてて言葉を取消す。

「船長の選書であれば、みんなもらうよ。お返しはいつものように水と食料の補給で」

「取引成立な。それさえあれば、こちらは百人力だ。世界の果てまで行けるってもんだ。あ、そうそう。ここの水はいいっていう人は確かにいるな。飲ませてやるとほっとするってよ。なにか仕込んでいるのか？」

「いや、なにも」

「この前、違う島で乗せた客人もえらく喜んでたな。どこかで料理人やってたらしくて、水のうまさに驚いていたぞ。ミリルさんよ、今日は水だな。うまい水をくれ」

「あら、また水……」

「もしかして、あのドラム缶に水を入れるんですか？」トラピさんが外のドラム缶に気がついて尋ねた。

「若いの、あんたは勘がいいみたいだな。ドラム缶はいくらでもあるからな。水あってこそそのオフエーリア号ってことだな。オフエーリアは水死したじゃないかって？ そんな名前じゃ沈むだろうって思ったか？ 水もしたたるいい女って言うのを知らないか？ そういうことだ、わはは」

「いえいえ、いい名前ですよ」トラピさんが一生懸命ご機嫌を取っているのがわかる。何度か会っているうちに船長の人柄がわかるのだけれど、初対面だとみんな面食らうのだろう。

「船長、ボルトンってわかります？」ミリルさんが思い出したように聞いた。

「あー、俺がここの定期連絡船をやってるって聞きつけたらしくて、ハトポステルの番号を聞いてきた。何か言ってきたか？」

「水をくださいって……」ミリルさんがそのまま伝えた。

「まったく仕方ないやつらだな。あれほどだめだって言ったのに。戻ったらもう一度釘を刺しておこう。俺の目の黒いうちは許さないからな」

「あの、ボルトンというのは？」トラピさんが聞いた。

「ありゃ、ただの水で金儲けしようって企んでいるやつらだ。公社なんて言ってるけど、頭の中は金のことしかないな。あんなところと契約でもした日には島の水をすっかり抜かれて、からからに干からびちまうぜ」

「えー、そうなんですか？」ミリルさんが困った顔をした。

「だいじょうぶだ、契約さえ結んでなければ、俺が止めさせる。いいか、ここの水はだれのものでもない。ほんとうに必要な人がいるんだから、だれにでも気安く渡しちゃだめだ。いいな」

船長が妙に真剣な顔をしている。やはり、メーンランドのほうで何かあったのかもしれない。その話をしようとしたときに、時間もないからと新聞の話になった。

「おお、いいじゃないか。これだな。俺にまかせとけ。悪いようにはしないから」

船長にまかせておけばきつとうまくいく。頭のいい人だから心配ない。それに、この島のことを大切に思ってくれている。

「お、待てよ、この包みなんだか臭うな。なにか入ってるのか？」

「それがインキの匂いなんですよ。海の匂いがするでしょ？」ミリルさんがうれしそうに言う。

「海の匂いか。おもしろい。どこかで嗅いだことがある匂いだな。どこだったかな……」天井を見上げて、昔の記憶をたどっているようだ。

船長には何か心当たりがあるらしいが、どうしても思い出せないようだ。新聞を手にした人からいい知らせが入る予兆かもしれないと期待がふくらむ。

船長は、水をドラム缶に入れ終わると、先を急ぐようにリブローを後にした。どうも雲行きが怪しいのだそう。海が荒れないといいのだけど。先を急ぐ船を3人でいつまでも見送った、東の空に黒い雲が見え始めていた。



第24話 雨の夕暮れ

いつものように船長の船はなかなか島を離れない。天気も悪くなりそうだから、早く移動できるといいのだけれど。

「雨が来ないといいですね」とミリルさんが心配そうに言う。

「そうだね。海が荒れると航海するのも大変だろうね」

風も心なしか強くなっているように感じる。

今日は外に出るのも億劫なので、リブロールで船長の持ってきてくれた本でも読んでいることにしよう。

ミリルさんは洗濯物を取り込んでくるといって家に戻った。新聞の積み出し準備で疲れただろうからゆっくり休むように言った。

新しい本の何冊かに目を通したときに、雨が降り始めた。初夏に降る雨は大雨になることも多くて、海辺の地形が変わるようなことさえある。海拔の低いこの島は、島の形さえ一定しない。天候の悪いときには住民も海辺にはあまり近づかないようにしている。

雨が降り始めてしばらくしたときに、一人の女性が尋ねてきた。はじめての人だったのでこちらから声をかけた。

「こんにちは」とても小さな声が返ってきた。

「島ははじめてですか？」

「1週間ほど前に来ました。」ちょっと不安そうな表情を見せた。

「今日はあいにくの天気になりましたね」この時期には珍しい雨に遭うというのも気の毒なことだ。

「こちらは本屋さんなんですね」と聞かれたので、「ええ、まあ、本屋というか、図書館のようなものかもしれないですが」と答えた。

「少し雨宿りさせていただいていいですか？」

「あ、どうぞ、どうぞ。遠慮なく」とテーブル席に案内した。

「ここは動物も大丈夫ですか？」遠慮がちに聞いてきた。

「ああ、人も動物もなにもかも大丈夫ですよ」

「よかった。」と言うとすぐに店の外に出て、見たことのない動物を連れて入ってきた。

「それは……」

「カバの子供です」

返す言葉もなかった。どうしてカバなんだろう。このあたりでカバなんて見たこともない。

テーブルの上に広げてあった船長の本を眺めていたと思ったら、「これ水の本ですね。私にも読ませてもらっていいですか？」と聞かれた。とても遠慮深い人のようだ。

「今日届いたばかりの本なんですけど、よかったですらどうぞ。水にご興味が？」と言いながらも、実は横にいるカバが気になって仕方がない。

「ええ」と一言だけ言うと、椅子に腰掛けて、カバをつれたまま本に目を落とした。

どこの人だかは知らないけれど、この島では余計な詮索はしないというのが決まりごとなので、お互いに話すこともなく雨だれの音を聞きながら静かに読書を楽しんだ。雨に濡れるのをいやがる人も多いけど、砂漠のような土地があることを考えると、雨の降ることにも感謝しないといけな。木々や草花は雨を喜んでいるに違いない。雨をしのぐ場所さえあれば、本でも読んでいればいいのだ。雨は人に休むことを教えてくれる。

船長がこんなに水の本ばかりを持ってきたのには何か理由があるのだろう。ウォーターランドという名前を聞いたから、それならということで関係書籍を集めたのか。この水がいいという話もしていたから、自分でも調べてみたかったのだろう。

その中の一冊に、南部地方のことを書いてある本があった。気候風土について書かれた本だった。目を通してしていると、思いがけずミドリ鮫の文字が目にとまった。雨のあとに土地の恵みが海に流れ込むときに、ミドリ鮫は捕食のために集まるのだと書いてある。そうか、緑色は海草ではなく苔や藻の色なのかもしれないと想像してみた。森の恵みが海とつながるという話もわかる気がする。そしてその海の水が蒸発して雨になって森の命を育む。自然の循環というわけだ。ミ

ドリ鯨が森と海の間を取り持っているのかもしれない。でも、それと時間がゆるりと動くことが関係しているのかどうかはわからない。関係がないことなのかもしれない。本には当然そのことについては何も書かれていなかった。

「今日は雨もやみそうにもないから、よかったらここのソファで休んでもらっていてもいいですよ」本を静かに読んでいる女性の様子をうかがってみた。

「ほんとうですか？」とすぐに返事があった。やはり宿に困って来たようだ。

「ここはみんなのうたた寝の場所でもありますから。よかったらかけるものもあるので使ってください」とブランケットのある場所を伝えた。

「すみません」と頭を下げた。小さなカバは見かけとちがって、妙におとなしく横に寝転がっている。カバのことを聞くのがはばかりられるほど当たり前に寝ている。

ミリルさんがいれば、うまく接客もしてくれるのだけど、こんな爺さんでは何の役にも立たない。とにかく女性のじゃまをしないようにしないと。気まずいようであれば灯台に戻ろうかとも思ったが、こちらを気にしている風でもない。

リブロールの窓を雨の雫が幾筋も不規則に流れ落ちる。見ているとそれが音符のように見え、雨の奏でるメロディーが聞こえてくるようだ。雨の日の読書はなかなか楽しい。雨読とはよく言ったものだ。一文字、一文字が恵みの雨のように心に沁みていく。

第25話 針のずれ*

カバを連れた女性は寝る様子もなかったけど、二人だけにいるのもどうかと思ったので簡単な食事の用意をしておいて灯台に戻った。

泊まる場所も決まっていなかったから、雨がやまなければ、あのままりブロールで一夜を明かすのかもしれない。大きなザックのようなものも持っていたので、いつもは野営しているだろう。実際、夏になると島に遊びに来て屋外で朝を迎える人も多い。

ミドリ鮫のことが気になって、ミドリ鮫を見たあとのページを読み返してみた。

*****ノート*****

南西の風と日差しが強い

今日は驚くことがありました。日時計の針が指す位置が前と少しちがっているのです。太陽の位置が変わらないと考えると日時計は石に固定されていたから、地面が動いたとしか思えません。周辺を見渡しても何も変わる場所がないのに、最初に植えた苗の場所と比べてみると、島そのものが少し右回りの向きに動いたということになります。

しげしげと日時計を眺めていると、草むらから”きまぐれ”が顔を出して、こちらの様子を伺うようにじっと見ていました。昨日から今日にかけて身体に感じる振動もなかったので、何も起こらなかったと思いたいところですが、目の前の日時計がそれをどうしても許してくれそうにないのです。

もしかすると、気がつかなかっただけで、もっと以前に何か起こったのかもしれないとも考えてみましたが、まったく心当たりがありません。最後に考えられるのが、ミドリ鮫の中で意識がなくなっていたときだけです。そう思うとますますあの時間が悔やまれるばかりです。

”きまぐれ”はこちらが考えるのをあきらめたのを見届けるようにして消えてしまいました。同じ島の仲間と言いたいところですが、なかなかつれない友達です。どこで寝起きしているのかはよくわかりませんが、いつも出会うのは灯台の近くなので、このあたりをネグラにしているのだと思います。

*****ノート*****

第26話 おいしい水

翌日は雨もすっかりあがって、草木に乗った雨露の粒が朝日に照らされたあちらこちらで小さく光っていた。リブロールに行ってみると、昨日の女性が店のまわりの掃除をしていた。雨のせいで少し汚れてしまったのかもしれない。

「おはようございます。今日はいい天気になりましたね」気づかないようなので挨拶した。

「昨日はありがとうございました。お礼にと思ってお掃除をしていました」と言うのにっこりと微笑んだ。少し元気が出たようだ。

気になっていたカバを探すと、店の横にある小さなプールで朝から水浴びをしている。環境がどうあろうが、わが道に行く姿勢は見上げたものだ。きっと大物になるに違いない。でも、大きくなったらどうなるかは考えない。

「ご挨拶が遅くなりましたが、私、ネモネと言います」

「私は、オルターです。どうぞよろしく」

「昨日は、助かりました。こちらは雨が少ないと聞いていたので、雨具も用意してなくて」

「突然の雨でしたからね。カバ君も元気でよかったです」

「彼にとっては、雨は生活そのものなので一向に気にならないらしいです。水が命の次に大切なものなんです」

「人間も水がないとだめですからね。人もカバも同じです」当たり前すぎて、自分でも何を言ってるのかわからない。こんなことを言うってしまうのでも、カバがここにいること自体がそもそも普通じゃないからなのだ。

話しているうちに、ノーキョさんが手を振りながら、こちらに近づいてくるのが見えた。

「ノーキョさん、いらっしやい」

「オルターさん、来ましたよ。印刷うまくいったみたいですね。新聞の第2号を拝見しました。昨日、コピちゃんが届けてくれて」

「あのインキのおかげで、いい新聞ができました」

ネモネさんとノーキョさんは初対面のようなので、それぞれを簡単に紹介した。二人はすぐに打ち解けて話をしている。若いと仲良くなるのも早い。

「また少し、資料整理をさせていただきますね。」とって、ノーキョさんはテーブル席のほうに資料のどっさり入ったかばんを下ろした。ほんとうに勉強熱心な人だ。本だけでなく、ノートや使い道のわからない道具もたくさん出てきた。布製のボロボロになった筆入れは見てくれにこだわらないノーキョさんらしい。

「あれ、オルターさん、この本。どうしたんですか？」

「本？ ああ、それは昨日、定期船のダルビー船長が持ってきてくれたものなんです。まだ、整理できてなくて」

ノーキョさんも、新しい本が気になったようだ。しばらく見ていたと思ったら、いきなり大きな声をあげた。

「おー、これはすばらしい。この水の本、手に入れるのが難しいといわれていたものです。たしかにこれだ、間違いない」驚きを隠せない様子だ。こちらはそれを聞いて少し慌てた。

「え、そうなんですか？ 実は、私もまだよく見てなくて」希少本に気づかないなんて本屋の面子もあったものではないけど、もともとそんなものは持ち合わせていないのはみんなのほうが良く知っている。

「かなり古い本で、今はほぼ入手不可能だと思います」手に取った本を何度もひっくり返したり、ページをめくったりしながら言った。

ノーキョさんもどこかで探したことがあるのだろうか。

「実を言いますと、私も水をさがしに来ました。最初その本を見てほんとうにびっくりしました」ネモネさんも同じように思っていたのだ。これじゃあ、もう本屋だなんてはずかしくて言ってもらえない。やはり、船長の目利きがあつてのリブロールということか。

「そうだったんですね。それでカバを？」また、変なことを聞いてしまった。とにかく外のカバが頭から離れないのだから仕方ない。

「あ、あのカバはミームという名前なんですけど、他のカバにはない特別な力をもっているんです」

「特別の力というと？」 ノーキョさんが聞いた。

「身体にいいお水を見つけられるカバなんです」 秘密を明かすように小さな声で教えてくれた。

「それがあそこにいるカバですか？」 ノーキョさんが驚いた顔をして、プールで水浴びをしているカバを見に行った。

「水の具合がいいと皮膚がピンク色に染まるんですね。それでいい水を探せるんです」

「それはすごい。いい水というのは？」

「疲れも取れて、長生きができるお水です」

「長生き．．．それは聞き捨てならないな。そんな水が見つければ、みんな欲しくなるでしょうね」

そう言ったときに、ふと思い出した。

「あれ？ もしかして最近島のあちこちをこのミーム君と歩いていました？」

「ええ。何かご迷惑をおかけしましたか？」 昨日と同じ困った表情を見せた。

ピンクのカバ.....これをみんなブタと見間違えたのかもしれない。

「どうかしましたか？」 ネモネさんのほうが心配になってこちらを見た。

「いや、ちょっと思い出したことがあって。大丈夫ですよ。だれも気にしてないですから」

「気にしてないんですね。よかった」と言ってほっとしたような表情をした。

「オルターさん、あのカバ、もしかすると水を探すカバかもしれないですよ。以前、聞いたことがあって、いい水を見つける力をもったカバがいるらしいですよ」

「あ、そのカバです」 ネモネさんが、あまりにさらりと答えたのを聞いて、ノーキョさんは、空

いた口がふさがらなくなってしまった。

「え？ そうなの？ いやー、これは驚いた。今日は、本といいカバといい、とっても水日和な朝になってしまいましたねえ。こんなこともあるんですね。あの、ネモネさんは、ずっとこちらにいらっしゃるんですか？」

「ええ、もしいいお水がみつかったらというか、いい温泉がないかと思ってまして」

「おー、それは素晴らしい。ぜひぜひ、温泉を。ねえ、オルターさん。いいですよね」

「そうですね。温泉できればきっとノーキョさんと、それこそ入り浸り」

「ほんどだ、ほんどだ、文字通り入り浸りだ。あはは。温野菜だってできるし。最高ですね。願ったり叶ったりですよ」

「それで、歩いてみた感じはどうでしたか？」

「まだ、来たばかりでわからないのですが、冷水のいいお水はいくつかみつけれられたので温泉もみつかるのではと期待してます」こちらの反応に安心したのか、ネモネさんもうれしそうだ。

「いやー、それは楽しみだ。オルターさん、みんなで温泉ですよ。温泉に入って、ここでうたた寝。考えただけで楽しいじゃないですか。ネモネさん、何かお手伝いすることあったら言ってくださいね。穴掘りでもなんでも協力しますから」

「ありがとうございます そう言っていたら心強いです」

カバは相変わらずプールに浸かったまま全く動く気配もない。気のせいか、肌がピンク色に見えた。

第27話 雨上がり

大きな虹が島を見下ろしていた。夏の時期には、島をすっぽり囲むような虹が出る。時期によっては、オーロラの帯のような形になることもある。あんな虹が見えるのもこの島ならではののではないかと思う。島にいる住人の何人かしか見たことがないほどめずらしい虹ではあるけれど。オーバー・ザ・レインボウはノルシーさんが好んで弾く曲だ。この虹の向こうには何かがあるのか。海に出る習慣の少ない島民には島や周辺の海のことわからないことだらけだ。でも、みんな知らないことがたくさんあるほうが楽しいと思っている。

ノーキョさんは、水の本を読み終えられなかったことを残念だと言い残してお店に戻って行った。どうしても雨上がりの今日収穫しないといけない野菜があるのだそうだ。なんでも、朝露をたっぷり含んでいて、とてもおいしいのだとか。

帰り際に思い出したように村の食堂の案内を置いて帰った。週末に自然食のパーティーをやりますと書いてあった。島向けに新聞を出して欲しいとのことだ。もしかすると、そのための野菜を今日収穫するのかもしれない。

村の食堂には2年前まで器用になんでもつくれるコックさんがいたのだけれど、持病の過食症がひどくなってメインランドに戻ってしまった。コックさんの過食症というのも実際困ったもので、料理を作るに作れなくなってしまふ。とにかく、作ったそばから自分で食べてしまうのだから。美味しい水がそうさせたのであれば、とても残念なことだ。

そんなことがあって、食堂の建物だけがそのまま残され、今では村の公民館のようにして使われている。村の集まりで良く使われるけど、所有者が不在なので自由に使ってよいことになっていて、パーティーをやりたい人が食材を持ち込んで、好きなときに自由に食堂を開く。持ち込みOKではなく、持ち込みしかないのだ。

ノーキョさんの後を追うように、ネモネさんも温泉探しに出かけていった。ネモネさんといっしょに出て行くカバは心なしか楽しそうに見えた。プールの水はあまりいい水ではなかったのだろうか。

二人を見送ったあとにミリルさんが入れ替わるように入ってきた。

「ミリルさん、そろそろメインランドで新聞配られているころでしょうかね」気になる新聞のことを聞いてみた。

「あの雨をうまく切り抜けられていれば、そろそろ一週間ですから。楽しみですね」

「来週ぐらいには、新聞を読んだ人から何かしらの連絡が入るといいですね。そうそう、今週末

にノーキョさん恒例の自然食の会をやるらしいので、新聞で告知してほしいですよ」

「あら、新聞も期待されちゃって大変」うれしそうにこちらを見た。どうやら、記事を書くことが私の性に合っていて楽しくてしょうがないのを見抜かれているようだ。

「みんなの役に立ってますね」ミリルさんが褒め上手なのはわかっているけど、そう言われるとうれしいものだ。

「次は、美味しい水の話と自然食パーティーの話で書いてみますね」

「私、もう少し水の本を読んでみます。ウォーターランドって呼ばれていた由来が知りたくて。お客さんにもお話ししたいし。この島が人を集める理由がこのあたりにあるのかもしれないですよ。ノートさんも知っていたのかしら？もしかして、不老不死になってしまったなんていう話はないでしょうか。そう思うとなんだか楽しくなります」

という読む本を選びはじめた。仮に不老不死でなくても、この島のスピードの遅さ程度に長生きしてゆっくりと生活を楽しめればと思う。遅ければ遅いほどいい。

虹はいつのまにか空から消えて、瑞々しい空気が島いっぱいに広がった。おいしい水もたくさんたまっただろうから、あとで、水採り機も見てください。

書き上がった新聞記事の推敲をしているとミリルさんが、「どこかで音楽が聞こえませんか？」と言った。

「ノルシーさんのピアノですか？」

「風の音かな。遠くのほうで太鼓のような音。聞こえませんか？」

「うーん、私の耳には何も」

「あれ、空耳かな。聞こえなくなりました」

島には音楽がない。自然の奏でる音がピアノのように聞こえることもある。彼らは、とても上手な演奏家だ。季節や時間によって人の心を読むようにさまざまな演奏を聞かせてくれる。ほかのどこでも聞くことのできない自然の奏でるメロディーに時間が過ぎるのをしばしば忘れる。お気に入りのハンモックに身を委ね、しばしのお昼寝を楽しむことにしよう。

第28話 小さな楽団

「トンテケ、トンテケ、ピーリヨリ、ピーリヨリ」

「コピちゃん、ご機嫌ね」

「コピが踊ってる。よっぽどいいことがあったのかな。昨日は配達さんありがとう、コピ」

「トンテケ配達隊！」とびよこびよこ踊りながら言った。

「あれ、やっぱり太鼓の音。聞こえますよ」ミリルさんが南の方角に耳を向ける仕草をした。

「音楽隊来た！」

コピが飛び出して行った。

「音楽隊？ なんのことかな」

「オルターさん、あそこに。見えますよ。鼓笛隊みたいなの。なんでしょう。あそこから聞こえてくるんですよ」

ハンモックから起き上がり、キャビネットの引き出しから観察用の単眼鏡を出して見ると、太鼓、バンドネオン、笛の小さな楽団が踊りながら歩いている。

「あれ、トラピさんがいる。いっしょだ」最後をついて歩いているのは間違いなくトラピさんだ。

楽団のトンテケな音が、こちらに少しずつ近づいて来る。陽気な音楽が繰り返し、繰り返し演奏されている。少し小さく見えるのは子供だろうか。

「オルターさん、私、見て来ます」ミリルさんも出て行った。

今日はメインランドだと日曜日にあたる。休息日にトンテケと思うとおかしくなった。普段は何の音もない島でリズムカルな音が鳴り響くと妙な気分になる。村の人たちもさぞや驚いていることだろう。ちょっとした騒ぎになっているのかもしれない。

戻ってきたミリルさんが、わかったというように、

「トラピさんのお友達らしいですよ。お手紙出したら、遊びに来たんだそうです」と教えてくれた。

「大道芸の関係なの？」

「どこかのお祭りでいっしょになったことがあるらしいです。トラピさんと同じような旅芸人の一座だそうです」

「そういう仲間ってあるんでしょうね。いろんなところでいろんな人と出会うのも楽しそうだ」

「しばらくは休養もかねて島でゆっくりするみたいですよ。今日はそのご挨拶まわりなんですって。ね、コピちゃん」

「トンテケ、トンテケ！」コピも大喜びのようだ。

「なんでも、双子の子どもとお母さんでやってるらしいです。もともとは、本格的な楽団にいらしいんですけど、地方回りのほうが楽しくなったそうで、今ではもっぱらそちらで生活をしているそうです。トラピさんの説明ですけど」

「まさか、ジャズはやらないよね？」一応聞いてみる。

「どうなんでしょう。音楽に違いはないし。今度、聞いてみましょうね」

「いやいや、トンテケも楽しいから」音楽の選り好みなんて言うようなところではなかった。

トンテケ、トンテケ．．．音楽隊．．．気がつくと思議なりズムがすっかり頭に残ってしまった。音楽のおもしろいところだ。なんだか聞いているうちに楽しくなってきた。今度の村の食堂の集まりでトラピさんと何かやってもらえないか聞いて見るのもいいかもしれない。

よく見ると、みんな背中に何かしよっているようだ。白いカバンのようにも見えるけど、どうやら羽のようだ。見ようによっては天使の音楽隊にも見えなくもない。虹の後に地上に舞い降りた天使というところだろうか。

コピがリズムに合わせて、首を左右に振っている。楽しい週末になりそうな予感がしてきた。

第29話 窓の記憶 +

「これぐらいでどうかな？」背伸びしたままのノルシーさんがもういいだろうと言いたげに聞く。

「もう少し右が上かな」

「これぐらい？」無理して首をこちらに向けるている。

「もう少し……」まだ右が低いように見える。

「ああ、それで、いい具合かな。ちょっとそのまま」金槌を取って踏み台に上がり、窓枠の蝶番に釘を5、6回打ちつける。

「もう、いい？ いいかな？」背伸びして伸ばしている手がさすがにつらいようだ。

「待って、待って。もう一箇所」上のほうも手早く釘を打つ。

「それにしても、この窓もお客さんが開けたとたんに、枠ごと落ちるかな」ノルシーさんがあきれ顔でぼやく。

「まあ、そういうこともあるってことですな」島に来てからずっと外の雨風にさらされて、海の向こうを見続けた窓に多少の気遣いもしたくなる。

「そういうことなわけね。まあ、この家みつけたとき、最初にくっつけたのがこの窓だし。彼も彼なりにがんばったと」

キイコ、キイコ。ノルシーさんは窓が固定されたのを確認するために開けたり閉めたりを試している。

「彼だか彼女だかはわからないけど、それだけ開けたり閉めたりされれば、足腰も弱くなるってものですな。ご苦労様なことです」

「おお、これはお窓様失礼いたしました。ゆっくりおくつろぎください」ノルシーさんは取り付けがうまくいったのを確かめると窓をゆっくり閉めた。

今日はエバンヌにお茶をしに来たら、いきなり窓の修理を手伝わされることになった。エバンヌの建物は風格があるものだけど、二人で取り付けた窓も骨董品のような味わいのある美しい窓だ。その窓が落ちたというのだから、手伝わないわけにはいかない。

改めて取り付けてみると、この窓から飽きもしないで海を眺めていたのを思い出す。あのころは二人以外にあまり住人もいなくて、来る日も来る日もこの窓越しに海を見ながら時間をすごした。当時はリブロールもなかったから、ここが唯一の休憩場所でもあった。お茶を飲みながら、これから先のことを考えたり、新しい発見を披露しあったり、いつか世界周遊の大型客船でも通るんじゃないかと、できるかぎりの想像を膨らませて楽しんだものだ。二人共に、この窓が唯一外界とつながっていると感じていたのかもしれない。

「窓はできるだけ大きくしようなんて言ったのはオルターさんだよな？ よくもこんな大きな窓をつくったもんだよ」と懐かしそうに言うと、息を吐きかけながら窓ガラスを丁寧に拭き始めた。

「そうだったかな。とにかくきれいに拭いてやってくださいね」ノルシーさんをお願いする。

「今でもね、この窓からの眺めが好きで来るといってお客さんは多いよ。暗いお店だから、海のほうにどうしても目が向くんだらうけど」

たしかにエバンヌは照明を落としている分、明るい海が外で見るとより一層もきれいに見える。とくに北側の海の透明度はきわだっているから、始めて来た人にとっては思いがけないプレゼントになるだろう。

「あ、そうそう、豚のことだけど。あれは豚じゃなくてカバみたいだよ」

「え？ 豚じゃなくてカバ？ それじゃあ、ますます話がわからなくなるじゃない？」

「なんでもね、いい水を探す力のあるカバらしいよ。知る人ぞ知るカバだとか」

「じゃあ、いい水探してもらって、おいしい水割りもいただけるってわけだ」ノルシーさんが窓を拭く手を止めて、いたずらっぽく目をしてこちらを見る。

「ああ、そっちの話ね。それもありませんか？」

「しかし、誰もカバとは思わないでしょ。カバと散歩なんて。どれだけのどかな島なんだろう。ほんとにカバなの？」

「プールに浸かっているの見たからね」

「そうなんだ。プールにカバか……」

ノルシーさんが磨く窓を通して灯台を見ていると、忘れてしまった記憶が思い出されるような気がする。

「しかし、この窓から見る灯台は格別だよ。あれがレンガ作りの灯台だったんだからね」

「今の、白い灯台もよくない？」

「どちらもいいけど、この窓越しに見ると、もともとあった赤いレンガの灯台が見えるんですよ」

「オルターさん、ノートの読みすぎ」 こっちを見て笑った。

「そうかもしれないけど、やっぱり赤い灯台なんだよね」

「そんなこと言ってたら、ほんとうに自分の記憶が何処かに行ってしまうかもよ。痴呆に注意」と言いながらレコードジャケットの立った棚を見ている。

「それならそれでも」

「まあ、ご本人がご所望ならそれもいいかもしれないけど。記憶なんて過去のものでしかないしね」 ノルシーさんもメインランドの話をおもしろがらないから、過去にこだわりもないのだろう。

この島の景色はときどきデジャヴのように思えることもある。なくした記憶は案外近いところにあるのかもしれない。記憶なんて、断片の組み合わせでしかないと思うこともあるし、人間は思い出に生かされていると感じることもある。この窓から見える気がする赤い灯台がその答えを出してくれる時がくるのだろうか。



目が覚めたら、外はもう薄暗くなりかけていた。灯台の後ろの空もオレンジ色に染まっている。ノルシーさんも出かけたのか姿が見えない。懐かしい昔のことを話しているうちに寝込んでしまったようだ。久しぶりの慣れない大工仕事に疲れたのかもしれない。

しばらくコーヒー豆を挽きながらレコードを聴いていたら、ノルシーさんが戻ってきた。

「オルターさん起きた？ 代わりに水集めといたよ。窓のお礼ね。そういえば、ミリルさんが探してたよ。何か約束してない？」

「私を？ 何だろう？」

「ほらね、あんなことばかり言ってるから、すっかり呆けちゃったでしょ？」

「また、人聞きの悪いことを。否定しきれないところもあるのがなんだけど... ちょっとリブロールに戻ってみるかな」

「待つてオルターさん、本」

「あ、それは置いておくから読んでみて。おもしろいよ」

「そっか、じゃあ遠慮なく。読み終わったら返すね」

リブロールに戻ると誰もいなかった。ミリルさんは帰らないといけない用事でもできたのかもしれない。そう思いながら机の整理をし始めると、メモ書きが置いてあった。

「あ、自然食の会.....」

すっかり忘れていた。ほんとうに呆けてきたかな。新聞に夕暮れ時と書いたから、そろそろ始まる時間だ。ミリルさんのことだから、ノーキョさんの準備を手伝いに行ったのかもしれない。外を見ると、食堂のほうに向かう人影も見える。

夕暮れ時と言っても、人によって受け止め方はまちまちだから、夕焼けのころから一時間ほどかけて集まってくるだろう。1時間の範囲で揃えばいいというのがいつもの島時間になっている。

今日はトラピさんの手品もあるはずだし、きっと久しぶりに賑やかな夜になるだろう。耳を澄ませると、あのトンテケも聞こえる。もしかすると音楽隊も正式なお披露目になるのかもしれない。

食器を入れた場所を覗いているとコピの声がした。

「じっじ、食堂の日！ トンテケもいる！」

「おや、お出迎えかい？」 きっとミリルさんに言われたのだろう。

「はやく、はやく！」

コピに引っ張られるように店を出た。

「ランプも持たないと」 今日には遅くなりそうだから必要だろう。

「コピは平気！」

コピは平気でもと思いながら、足元の用心のために、小さなランプを持った。コピはいつものように元気に飛び跳ねながらどんどん先に行く。

「じっじ、こっち、こっち」 時々振り向きながら手を振る姿が、夕暮れに現れた小さな妖精のように見える。

少し歩くと、食堂の明かりが見えてきた。アグリさんのことだから料理の準備も万端だろう。今日は先日の雨の日に摘み取ったという朝露草のサラダがメインになるのだという。サラダがメインというのもめずらしいけれど、今日は特性のスープもあるらしいし、エモカさんも例の長時間発酵酵母のパンも用意されるらしい。今夜は島の自然食をたっぷり楽しもう。

食堂

みんなそれぞれにお皿をもって集まるのが、食堂のルールになっている。綺麗な盛り付けにこだわる主催者は食器まで用意することもあるけれど、見た目にはこだわらず素材そのものを楽しむことが多いので食器が揃うことはめったにない。

「オルターさん、いらっしやい！」 目ざといトラピさんがこちらに気づいて声をかけてくれた。どうやら手品のほうも始まっているようだ。みんなの歓声と拍手も聞える。

「今夜の自然食とてもおいしいですよ」ミリルさんも手伝いをしながらすっかりご馳走になっている。

「オルターさんも、そこにかけてください」ノーキョさんの声が厨房のほうから聞えた。

「じゃあ、遠慮なく」ひとつあいていたカウンター席が今日の場所になった。

手提げからいつも使っているお皿とカラトリーのセットを出してカウンターテーブルに並べる。みんなそれぞれの食器を置いているのを見るのも楽しい。毎回料理を想像しながら食器を変える人もいれば、私のように同じ食器しか使わない人間もいる。食器ひとつをとっても個性は出るものだ。

「あ、エモカさん、こんばんは。長時間発酵のパンおいしいですね。この前食べさせてもらって」隣に座っていたエモカさんに挨拶した。

「ありがとう ございます。この島で、偶然、みつけた 酵母なんです。おいしくてよかった」エモカさんはいつも控えめで、言葉を選ぶように話す。人柄もその話し方と同じだ。

「あれはきっと島の名物になりますよ」と言うと、

「まちがないですよ。このパンがなかったら今夜の食事会は開けなかったかもしれない。今日のメインはエモカさんの長時間発酵のパンで、僕の朝露草サラダはおまけです」ノーキョさんが笑いながらエモカさんのパンを皿に載せてくれた。

「そんな……」横でエモカさんが下を向いて頬を赤らめた。

「あちらが、オルターさん」後ろから、音楽隊の3人を紹介しているトラピさんの声がした。振り向くとお母さんと双子の子供がペコリとお辞儀をしていた。

「あ、どうも本屋のオルターです。今日は楽しい音楽をありがとうございます」

「ナミナです、こんにちは。こちらこそ楽しませてもらって。すてきな島ですね」

「もう、この人住む気満々なんですよ」トラピさんが笑った。それにつられてみんなも笑った。

水上生活のスロウさんや、蒐集家のユーヨアさんも来ている。はじめてみる人も何人かいるよ

うだ。だれかの友達なのだろう。

空が星でいっぱいになるころになると、カウンター席とテーブルがいっぱいになった。あちらこちらで楽しそうな話し声が聞える。

「とにかくね、このパンときたら……一度食べれば、どう言うのかな……」

「楽しい音楽だね。あの曲は以前……そうそう……」

「すごいすごい、ほんとうに消えてしまったね。不思議だ。ハトも出るのかな」

「朝露草って、朝小さな花が開く草だよ。雨のあとだとこんなにおいしいのか。知らなかった」

「長時間だからおいしい……時間をかけると……そうだよ」

「それは、楽しみだな……いつなの？」

「でも、今日のメインは……やあ、こんにちは！」

たくさんの会話と笑い声が料理をおいしくしてくれるし、あたらしい出会いをつくってくれる。みんな、ここで語らう時間を楽しみにしているのだろう。

「コピちゃんもたくさん食べてね」ミリルさんの声が聞えた。コピはカウンターの中にいるらしい。小さいのでこちらからは見えない。

「ノーキョさん、今日は盛況ですね。よかった」

「あはは、これも島の恵みのおかげですよ。はい、御代わりをどうぞ。スープも特性なので」

「ほんとうにおいしいね。きれいな虹がたくさんつまったサラダとたくさんの時間が入ったパン。この島ならではのな。」

「みなさーん、トラピの手品とナミナ音楽隊の演奏がはじまりますよー！」トラピさんの芸人さんらしい元気な声が聞えた。

ぱちぱちぱち。ぴゅーぴゅー。広場のそこかしこからまた歓声があがった。



第31話 水玉の光 +

楽しい時間はすぐ経つ。みんなと話しているうちにすっかり夜も更けてしまった。料理の提供は終って、ナミナさんがリクエストに答えて、小曲を演奏している。本当はピアニストなのだそうだけど、旅に出るときはバンドネオンに変えてみんなに近いところで演奏するのだそうだ。聴く人に近づけば近づくほど演奏の勉強になることも多いと言っていた。

楽器をやらない人間にはその意味はよくわからないけど、演奏も人のつながりということか。それとも旅芸人の醍醐味なのか。楽器のできない私にはよくわからない。

お腹もいっぱいになったので、カウンターを離れて広場の向かいにある水玉画廊のほうに席を移した。年を取ると若い人たちの中にいるのもなかなか大変になる。離れてそれぞれの時間を楽しんでいるのを見るのもいいものだ。

水玉画廊

「オルターさん、こんばんは」ユーヨアさんが水を持ってきてくれた。

この画廊も食堂のように自由に使えるようになっているのだけど、ユーヨアさんの水玉のコレクションの展示以来水玉画廊と呼ばれている。実質的にもユーヨアさんがオーナーのようになって掃除や催しなどの面倒をみている。画廊といっても古い建物を画廊として使っているだけで、なにも飾ってなければただの小屋でしかないそんな殺風景な場所でもある。

「ユーヨアさんのポートレートはいつ見てもいいね。写真が話しかけてくるんだよね。それぞれの人生が見えるようだな」

「あら、オルターさんから褒めていただけるなんて」笑いながら言った。少しお酒も飲んでいるのか、謙遜の仕方がいつになく大げさだ。

「このポートレートはだいたい島で撮られたんでしょ？ それぞれの人の人生を感じますね」

「今ここには新しいものが並んでますけど、本当は名も知られてない人の古いポートレートが好きなんです。写真ならモノクロのポートレート、モノなら使い込まれた骨董品。そういうものに興味が行っちゃうんです。なんていうか、記録じゃなくて記憶？ そんなものが感じられるものが好きなのかな」

「記憶なんですよね。問題は……」自分でもよくわからないままに、なんとなく相槌を打った。

「私はそういうのが好きですよ。蒐集家って言われる人ってみんなそうなんじゃないかな」

アートコレクターのユーヨアさんは、ときどき島を離れ、いろんなどころからめずらしいものを集めてくる。船長もユーヨアさんのためにと、たまに古いポートレートを持ってきてくれる。

「記憶って形になるもの？」

「というか、形に記憶が込められるような。モノってそういうことじゃないです？」

「なるほどね」

とすると、自分の過去の記憶もなにかのモノの中にあるってことかな、と考える。形の無い記憶がなにかのモノに残っているとしたら．．．なんだか不思議な気分になる。

「今度、オルターさんのポートレートとも撮らせてください」

「私がモデルに？」驚いて聞き返す。

「オルターさんの記憶も写真に」ユーヨアさんは楽しそうに笑っている。

写真に残る記憶はだれのものなのだろう。なんとなく自分のものではないような気もした。並んでいるポートレートを見ていると、記憶ってだれのものなのかわからなくなってきた。少し飲みすぎたかと思いきよと椅子に腰掛けて休むことにした。

「そうだ、これ見てみてください」ユーヨアさんが思い出したように言った。

「ノートを書いた人が子供のころに見た空虫ってこれじゃないかと思って」彼女の指差したカゴの中には、キノコとその周りを青く光りながら舞う小さな虫が数匹いた。

「おお、空虫……」

「半島のほうで、ホタルを見かけますよね。その中にまぎっていたんですよ。そこを見ていたらこのキノコがあって。キノコごと持って来てしまいました」

これが空虫なのだろうか。ホタルみたいだけど光は青く見える。暗闇を舞う姿が水玉のようにも見えた。ふと気配を感じて半島の先のほうを見ると数百もの青い光が夜空を舞っていた。

「ああ、空虫が……」

「え？ どこですか？」そばに来ていたトラピさんが聞いた。

「向こうの空に。ほら」南の空を指差した。

「あれー、オルターさんお酒飲んだ？」トラピさんが笑っている。

目を擦ってみたら、なにかの見間違いだったのか見えなくなってしまった。キノコのほうを見るとそちらの青い点滅も消えていた。

「あれ、青くない……」

ユーヨアさんが、ホタルをみつけたとトラピさんに説明している。

「オルターさん、よかったらこのホタルお持ちになりませんか？」ユーヨアさんが勧めてくれた。

「あ、ありがとう。今日は少し飲みすぎたかもしれないから、またあらためてももらいに来ます」自分の意識になんだか自信がなくなりはじめていた。

しばらくしてナミナさんたちの演奏がまた始まった。陽気な曲に合わせて、一部の人はいっしょになって仲良く踊っている。ミリルさんとノーキョさんもその輪に入っているようだ。今夜は夜空を楽しむのにちょうどいい陽気だ。広い草原に浮かぶ自然がいつぱいの島に灯された小さな明かりのもとで、おいしいものをたくさんいただいて、楽しい手品を見て、音楽とダンス。こんな贅沢な時間はなかなか得られるものではない。

月が南の空高くにたどり着くころになると、早い人は家路につきはじめる。もしかして、途中でだれかが空虫を目にすることはないだろうかと思いながら見送った。



第32話 飛行船

日差しが目まぶしい。リブロールのソファで眠ってしまったようだ。グラスの水を一息に飲み干す。昨日は、いい気分になって遅くまで酒宴の席を楽しんだ。ノーキョさんの新作ワインが口に合ったのか、久しぶりのパーティーが楽しかったせいか、ついついアルコールがすすんでしまった。

机の上を見るとエモカさんのパンが置いてある。お土産に持たされたのだろうか、帰り道のことはほとんど覚えてない。少しのお酒で曖昧になってしまう記憶というのは何なのだろう。人は忘れるから生きられると聞いたことがある。それも程度の問題だという注釈が必要だろう。

窓から外を見ると、ブランコのポールに張られた紐に、洗ったばかりのテーブルクロスが揺れている。洗濯物とオーブンの白い煙がいつものように島の朝を告げる。ミリルさんが朝の日課にしている洗濯をもう済ませたようだ。日の差し込み具合からすると朝というよりお昼に近い時間かもしれない。

いつものように、白い紙を出して昨日の楽しい夜のことを書く。これが日課になったのは、島便りをつくりはじめてからだ。身の回りで起こったことを紙に書いて、最後に今日の日付をダイアル式のスタンプで押す。うまく力を加えないと文字がかすれてしまうので注意がいる。黒いスタンプを押したときに、1枚のなんでもない紙が特別なものになってしまう。それが記憶というものなのかもしれない。そして記憶の時間がスタンプとともに始まる。

「オルターさん、こんにちは！」

「あれ？　トラピさん、なんだか今日はよそ行きじゃないですか」
いつものシャツ姿とは違い、青いストライプのジャケットが新鮮だった。手には身体ほどもありそうな大きなバッグを持っていた。おそらく荷物の少ないトラピさんの生活道具一式が入っているのだろう。

「実は、来週開催される、メインランドのお祭りに呼ばれたもので、今日はこの足で島を立ちます。しばらく、会えませんが、またすぐ戻ってくるので」

「それはそれは。また急な話ですね」

「予定は以前から決まっていたんですが、ナミナさんがこちらに来ることもあったので、ぎりぎりになっちゃいましたね。まあ、旅芸人なんていつもこんなものです」

「ナミナさんといっしょに？」

「彼女たちは後から合流の予定です。島が気に入ってしまったみたいで」

「そうなんですね。でも、今日は船が入る日ではないのでは？」

「ああ、なので今回は飛行船にしました。次の船だと公演に間に合わないので」

最近では飛行船も時々見かける。巨大な風船を2つつけた熱気球だ。空港のようなしゃれたものもないし、上空の気流が安定しないこの地域には低空で飛ぶ飛行船がいいのだそうだ。荷物の制約はあるらしいけれど、大きくてもカバンひとつぐらいなら載せてもらえるのだろう。旅行することのない私は飛行船がどういうスケジュールでこの島に来るのかさえも知らない。

「メインランドですか。もう、どんなところだったかも忘れてしまいました。どちらのほうに？」

「それが、例のリアヌシティなんですよ」

「おお、そうなんですか！」思わず大きな声を出してしまった。あのノートの主が住んでいたところにトラピさんが招かれるなんて、これはなにかの縁に違いない。

「リアヌシティまで行く機会なんてなかなかないですからね。僕もそちらのほうでなければ、しばらく島でゆっくりしたいと思っていましたけど。なにかみつからないかって期待してしまいますよね」

「ほんとです。これは楽しみだな。トラピさんもすっかりトレジャーハンターだ。飛行船だとリアヌシティまでどのぐらいで行けますか？」

「普通便でまる1日というところですね。明日の夕方までには着いているのかな。というか着いてないと困るんですけど」

「便利になったものだな。私も機会があったら行ってみたいとずっと思っていて……」

「オルターさんのためにもしっかり見てきますよ。観光コースも考えてきますね」

「いやいや、トラピさんは仕事だから……」

「だいじょうぶですよ。公演の空き時間も結構あるので」

あまり無理は言えないけど、講演の合間にいろいろな情報を集めてもらえるとうれしいと思う。

「それでは、そろそろ出発の時間なので」

「あ、気をつけて。公演の成功祈ってますよ」

「ありがとう。オルターさんもお元気で。向こうからハトポステルを出しますね」

飛行船はいつも沼地の西側に面した草原に降りる。リブロールからもちょうど見えるあたりだ。まだ機影も見えないから到着は少し後だろうと思っていたら、トラピさんが店を出たところでリブロールの上を大きな影が覆った。

ぶおーん、ぶおーん……

小さなエンジン音が風に乗って聞こえる。気がつかないうちに飛行船は島のすぐ上まで来ていたようだ。10人乗りほどの飛行船はゆっくりと旋回しながら草原のほうへ向かう。風を切るプロペラの音も少しづつ回転を緩めてゆっくりとした周期になっている。

力を抜いてベッドに横たわるようにふわりと着地すると、階段がするするっと地面に下ろされて2、3人の人が降口に立った。トラピさんは降りる人が終わると、操縦士らしき人とひと言ふた言話すところらに手を振りながら乗り込んだ。ミリルさんも見送りに来ているようだ。コピもいっしょにいる。昨夜、この予定を聞いていたのかもしれない。

ナツヨビが船を追うイルカのように飛行船の周辺を飛んでいる。息をためて笛を長く吹いたような、風音にも似た独特の鳴き声が聞こえる。飛行船から降りた人たちは水玉模様の鳥の歓迎に驚いていることだろう。

しばらくすると飛行船はなにもなかったかのようにまた静かに地面を離れた。そして風に押されるようにして、ゆっくり、ゆっくりと大空の中に溶け込んでいった。

第33話 レンズの掃除*

天候が崩れるとさすがの飛行船と言えども休まざるを得ないが、幸い昨日、今日と好天に恵まれた。トラピさんに乗せた飛行船はもうそろそろリアヌシティの郊外あたりまで行っただろうか。

今日は、しばらくやっていない灯台のレンズ磨きでもしようと思い立ち朝から準備をはじめた。小さい灯台とはいうものの照射灯のレンズの表面はでこぼこで、それなりの大きさもあるので、部屋ひとつを掃除するぐらいの手間はかかる。

近海を通る船は多くはないものの、岩礁や浅瀬の多いこのあたりでは灯台の役割も大切だ。船長も灯台のランプだけは忘れずに磨いてくれと口癖のように言っている。島民にはわからないが船乗りにとっては、灯台が唯一広い海で安全な航海の見守ってくれるもの。たかがレンズ磨きと片付けられない大切な仕事なのだ。昔はオイルの灯火を使っていたそうだが、今は風の力を借りて電気が蓄えられ夜のあいだ闇を照らす。考えてみると、この灯台が島でもっとも近代的な施設なのかもしれない。でもそれを支えているのが雨の日も晴れの日もわけ隔てなく吹く風という自然の力というのもおもしろい。

灯台に着くと、いつものようにインクが迎えてくれた。眠そうな目でこちらを見ている。みんなから慕われているインクがいてくれる限りこの灯台も安心だろう。少なくとも忘れられる心配をしないがいい。

机に目をやると引き出しが少し開いていた。開けてみるとだれかが見たのか、ノートに葉がはさまれていた。出発前にトラピさんが来たのかもしれない。葉のページを開いてみた。

***** ノート *****

島の少し高くなっているところでは、いたるところに果実のなる木が自生しています。リアヌシティで売られている食用の果物と比べると人の手がかけられていない分見劣りはしますが、人ひとりが空腹を満たすのには十分すぎるほどの量です。ところが、食べる人もいないだろうと安心してると、その果物が一夜にして食い散らかされてしまうことがあります。この実を好物にする渡り鳥の群れでも来るのでしょうか。目覚めると熟したものだけ選んですっきり食べ尽くされています。

中でも飛びぬけておいしいのが、私がピーチプルと名づけた淡いピンク色の果物です。名前で見像がつくかもしれませんが、桃とリンゴを掛け合わせたような見た目、柔らかく果肉がととも口当たりのいい果物です。もし、この世に楽園と呼ばれるところがあるなら、このピーチプルのなる土地がそれにもっともふさわしいように思います。食べる時にこぼれ落ちる果汁の雫はこの世のものとは思えないほどのおいしさです。至福に味があるなら、まさにこのピーチプルに違いありません。

おもしろいものでは野菜のような果実もあります。葉を巻き込んだような実が木になります。こちらは鳥も好まないようで、熟すとぼとりと落ちてしまいます。こんな果物はこれまで一度も見たこともありません。こんなものが木になっていることがほんとうに不思議です。こればかりは見た人にしかわからないでしょう。

これらの植物の写生を何度か試みてはいるのですが、なかなか納得のいくものが描けません。記録として価値のある絵にならないのです。子供のころから絵を描くことより外を走り回っているほうが好きだったのですが、こんなことならもう少しきちんと習っておけばよかったと今更ながらに後悔しています。

おいしい食べ物に出会うといつもあのジギ婆さんのことを思い出します。貧しくて普段なかなかおいしいものを口にする事のない婆さんに持って行ってあげればどんなに喜ぶだろうかと思うのです。

婆さんは二度と帰って来られないと言っていました、未だにその言葉の意味するところはわからないままです。島に渡る時に使ったボートはしっかり陸にあげて蔦で縛り止めてありますし、同じ道を辿ればいつでも戻れそうな気もします。あえて言えば、こんな楽園のような場所から急いで帰ろうとは誰も思わないということでしょうか。もし、過去にだれかがこの島に来ていたなら、私と同じように考えたに違いありません。それほどに居心地のいい場所なのです。

行方のわからなくなった爺さんはこの島には足を踏み入れなかったのかもしれませんが。踏み入れていれば、あんなに慌てた手紙を書くこともなかったでしょう。そう考えてみると、私が消えたはずの島にいること自体も不思議に思えてきます。

一ヶ月ほどの予定だったこの旅も、リアヌシティを発ってもう2ヶ月を過ぎようとしています。新聞社の人たちも私の行方を捜し始めているかもしれないと思うと少し申し訳なく思うのです。

***** ノート *****

トラピさんは、200年以上前のジギ婆さんの何かを探そうとしているのだろうか。もっともノートを書いた本人の名前がわからないから、手がかりはジギという名前以外にはないのだけれど。

「おじゃまします」

ノートを読みふけていて、入口に人が立っているのにまったく気がつかなかった。

「こちらの灯台は入らせてもらっていいですか？」

「どうぞどうぞ」あわててノートを片付けた。

「島ははじめてですか？」

「はい、最近知りました」

よく見ると小さな手に島便りを持っている。

「あ、それ……」

「港で配られていたチラシをいただいて」

「そうでしたか。それを見てこちらに？」

「そうなんです。本当に何も知らなくて……」

「もしかして、昨日の飛行船ですか？」

「あ、そうです。このチラシに書いてあった水玉の鳥が迎えてくれました。ほんとうにいるんですね。感激しました」

「ほんとうなんですよ。驚いたでしょ。あんな鳥いないですよ」島便りを見て来たという人とはじめて会って、大人げもなく興奮している自分がおかしかった。

「島の印象はどうですか？」

「想像していた通りのところだったので、もう少し近ければ毎週来たいぐらいです」

ザックを背負っているところを見ると、この子も野営のつもりで来たのだろう。最近の女性は元気がいい。

「この灯台は上に上がれますか？」

「ええ、もちろんですよ。ただ、階段が急なので気をつけてください」

「じゃあ、失礼して……」

インクが案内人にでもなったつもりなのか先に駆け上がって行った。はじめて来た人には、今

でもこの灯台が島巡りの目標のひとつになるだろう。島で唯一目立つ建物とっていい。

上がったまましばらく降りて来る気配がなかったので、「どうですか」と上のほうに向かって声をかけてみると、

「海が丸く見えます！ 大きな水玉みたいできれい。夜見るときっと宇宙にいるようですよね」と返事が来た。

「そうなんです。宇宙に放り出されたみたいな気分になりますよ」

客人はその後もずっと海を眺めているようだった。ときおりカメラのシャッターを切る音が聞こえる。それ以外には、波の音だけしか聞こえない。

どうやらこの調子だと、照射灯のレンズ磨きはまた先送りになりそうだ。船長の来るまでに終わらせるだろうか。

結局1時間ほどして女性は降りてきた。ありがとうございますとひとこと言って、そのまま出口に向かった。その後ろ姿は何か考えごとでもしているように見えた。

背負っているザックが動いたので見ると、ウサギが顔を出していた。インクがふーふーいっている。ネコとウサギとは相性が悪いのかなと思う。

小さな女性は名前も告げないままにエバンヌのほうに向かって行った。島便りの配られている様子をもう少し聞きたかったけれど、ここは配られていることがわかっただけでもよしとしよう。早速ミルルさんに報告して次の島便りも考えないと。

第34話 名前の由来

次の新聞には、エバンヌのことを書こうと決めてペンを取る。ところが、エバンヌの何がこの島の特徴なのかと考えてみると、ノルシーさんの人柄以外に書くことを思いつかない。そこに島の情報がありますと書けばアピールになるのだろうか。エバンヌというよりも、島をともに楽しんで来たノルシーさんへの思いが強いのかもかもしれない。それはそれで島の温かみを使えることになるかもしれない。

しかし、記事にするのであれば、あのきれいな海と潮騒、古いレコードから流れるジャズの話のほうがいいだろう。昨日のうさぎ少女は、今日はどこを歩いているのか、リブロールに立ち寄ってくればもう少し話を聞けるのにと思いながら筆を進めた。

「オルターさん、冷たいお水はいかがですか？」ミリルさんがいつものように飲み物をすすめてくれる。

「あれ、めずらしい。今日はお水ですか」

「よければ、ひと口飲んでみてください」

渡されたグラスを飲み干して、「この時期に飲む冷たい水はいい」と言うと、

「それだけです？」とミリルさんがちょっと物足りなさそうな顔をした。

「何か入ってました？」

「きっと、ネモネさんが悲しみますよ」

「え？ ネモネさんの水なんですか？」

「そうですよ。昨日ネモネさんが来て、おいしい水の候補って置いていかれたんです」

「あれ、もう一杯もらっていいですか？」

言われてみるとさっきよりおいしい気がする。

「たしかにおいしいですね」とあらためて感想を言うと、「あら、急においしくなっちゃいました？」と、味に無頓着なところを知っていてクスクス笑っている。

「いや、そういうわけではなくてね、最初からおいしいですよ。ミリルさんも人が悪いな。何か隠してますね？」

「ごめんなさん。いつも飲んでいるお水なんですよ。ネモネさんが、灯台の水もおいしいって言われて」

「え、灯台の水？ これ、灯台の水なの？」

「ピンクレベルには届かないんですけど、十分おいしい水だって言われてました」

「なるほど。おいしい水もいろいろあるわけだ。もしかすると、程度の差こそあれこの島の水は全部おいしいってことなのかな？」

「そうみたいです。その中でも特別なお水が見つかるかどうかということみたいです」

水にレベルがあるというのはよくわからない。同じ水でも効用が違うというのはどういうことなのだろう。成分の何かが違うということなのだろうか。

「そうすると、ネモネさんはまだ水探しに精を出しているということですね」

「そうみたいです。早く、いいお水が見つかるといいですけど」

妙な話ではあるけれど、あのブタ君の活躍に期待したいところだ。

「あ、そういえば、ウォーターランドの名前の由来がわかりました。昔、船が遭難して瀕死の状態でこの島に流れ着いて、そのまま命を落とした人がいたそうで。そこで、おいしい水を口に含ませたら奇跡的に息を吹き返して元気になったらしいんですね。それ以来、水の精霊の宿る島として名が知られ、その水の効用に授かろうと遠くから海をわたって訪れる人が増えたと本に書いてありました」

「それはいつごろの話なんですか？」

「何百年も前の話のようですよ。言い伝えに近いような話ですね」

「そんなに前の話だと、ノートの主が来る以前の話かもしれないな」

「もしかすると、神代の時代の話なんでしょうか。実際、ミドリ鮫の漁師もこの島の水を好んだ

と書いてありました」

「なるほど、なんだか聖水伝説のような歴史のある話なんですね」

「それと、もともとはウォーターランドではなくてウォーターリーフと呼ばれていたと書かれてました」

「ウォーターリーフ？ リーフって珊瑚礁の集まったところですよ。島じゃなくて」

「でも本にはそう書いてありましたよ」

「ノート氏が訪ねたのはアターリーフだったから。それがウォーターリーフになったと？ それとも違う 珊瑚礁域だったのかな。地図にもまともに書かれてなかった時代だからそれも考えられますね。でもそうだとしたら、この島でノートがみつかったこととつじつまが合わなくなるし。いや。待ってくださいよ。もしかしたら、もしかしたらですよ、アターリーフってwaterのwが消えていたのだとしたら……」

「あ！ そうだ、オルターさんそうですよ。だって、看板の字が消えかかっていたって、ノートに」

「なるほど、とすると、ここは本に書かれていたようにもともと水で名の知れたところだったというわけですね」

「きっとそうですよ。知らないのは今の住人だけだったと。私たちって本当にのんき」

思わず顔を見合わせて笑った。

「それにしても、珊瑚礁は簡単に島になるものなのかな」いまひとつすっきりしない。ミリルさんはおいしい水があればどちらでもいいですけどと言っている。トラピさんに連絡が取れたらこの話も一応伝えよう。何かの助けになるかもしれない。

「私たちも無意識のうちにここの水に惹かれて集まったのかも。でも、住民も気付かない特別な水っていったいどこにあるんでしょう」

「そこがカバくん頼みなわけですよ」

「ネモネさんのカバちゃんにがんばってもらわないとですね」

「ネモネさんは、他に何か言ってませんでした？」

「みつからなければ、温泉だけでも作ろうかなっておっしゃってましたよ」

「お、そうですか。温泉の候補地はみつかったのかな？」

「周辺の小島のほうにあったようなことを言われてたかな。あそこなら迷惑はかからないだろうって。ノーキョさんにはももう伝えたようなことを言われてました」

この年になると年寄り扱いされても仕方はないのだけれど、声もかけてもらえないのもちよつと寂しいので、あとでノーキョさんを訪ねてみることにしよう。何か手伝えることもあるかもしれない。

「ミリルさん、水をもう一杯いいですか？」

「これからはお茶をよして、水にしましょうか」

「おいしい水を使ったものであればなんでもおいしいでしょうから、いままでのままで」

入れてもらったグラスの水をしげしげと眺めてみたものの、特別な色も香りもない。おいしいお酒は水に近いという。人の身体もほとんどが水でできているとも聞くし、結局すべては水に始まるということなのだろうか。水に始まり水に終わるとしたらおいしい水は本当に養老の水なのかもしれない。ウォーターリーフが今のようなウォーターランドと呼ばれるようになったのも気にはなるところだけど、まずは名前の由来がわかっただけでもなにかの手がかりになるかもしれない。

「オルターさん、お水まだ飲みます？」

「あ、そうですね、お願いいたします」

もう立て続けに5杯も飲んでいる。いい水とはいうもののさすがにお腹がたぷたぷになってきた。いい水でお腹を下すことはないと書いてあったのかどうかも気になる。

第35話 留守

ノーキョさんのお店はガチョウやアヒルが放し飼いになっている。お店に入ろうとすると、グワグワいいながら後をついてくる。出迎えのつもりなのか、それとも番犬ならぬ番鳥なのか。横をみると生みたてのタマゴがころがっていた。これはアヒルの卵なのだろうか。ひとつ拾ってみるとほのかな温もりが手に伝わる。

アヒルには名前がついているらしく、小屋にはガーコとガースの新居と書いてある。もしかするとツガイなのかもしれない。ということはこの卵には命が宿っているということだ。小さな命もこの島の住人、大切にしないと。2羽に挨拶の気持ちを込めて、そつともとの場所に戻した。

「ノーキョさん、います？」

何の返事もなく、音もしない。机を見ると15時まで、小島に渡るとの手紙が残してある。用がある方は、裏の信号煙でお知らせくださいと書いてあった。信号煙というのはスロウさんがつくったもので、何かの連絡があるときに、火をつけて煙を出すもの。回転する蓋で煙の間隔が選べるようになっているので、煙の色と量でいくつかの連絡が読み取れるようになっている。昔でいうところの狼煙といわけだ。これは手先の器用なスロウさんならではの作品だと思った。島一番の発明家としても誰もが認める人で、なんでも作れてしまうスロウさんが羨ましい。

15時までにまだ2時間もある。こんな、時間に店をあけるのもめずらしい。急用でも入ったのだろうか。店の中を眺めるとこの前にもらったインキが濃い、普通、淡いの3種類の瓶に入れられ棚に並んでいる。気泡が入った手作りの瓶も味わいがある。これも新しい商品ということになったのだろう。島便りに使っているインキとわかれば、お土産に持ち帰る人もいるかもしれない。

もう一度置き手紙を見ると赤い矢印と双眼鏡の絵が書いてあった。もしやと思い壁に掛かっている双眼鏡を持って外に出た。矢印の向いていた西の海のほうを眺めるとそれは西側の小島のひとつを指していた。双眼鏡を覗いて見るとノーキョさんの姿が見えた。なにをしているのだろうか。ネモネさんとスロウさんもいる。そうか、あそこで温泉が出たのに違いない。ネモネさんもあんなところまで探していたとはご苦労なことだ。見た感じでは、温泉もずいぶんそれらしい形になっているように見える。もう何日も掘っていたのかもしれない。カバくんもすっかりピンクになっている。あれはきっといい水なのだろう。小島に渡るか、3人が戻るのを待つかを考えていると、ナミナさんが、旅行鞆を持って歩いて来た。

「こんにちはナミナさん。お出かけですか？」

「ええ、カーニバルに呼ばれているんで」

「あ、トラピさんと同じところですね」

「そうです。彼はもう現地に入ってます。私のほうはご覧の通りのゆっくりで一……クナ、センカ、静かにしててねー」

「あはは、元気いいお子さんだ。お兄ちゃんがクナくんでお姉さんがセンカちゃん？」

「この子たち双子なんですね。もう、いたずらで、いたずらで」

「でも、楽器のほうは上手に演奏できる。たいしたものだ」

「小さい頃から旅回りでいっしょに演奏してたので、知らず知らずのうちに覚えちゃいましたね。と言っても、太鼓と簡単な笛ですけど。あ、この子たち私の子供じゃないですよ。ある人から旅で遠くに行くので預かってくれと頼まれて」

「そうなんですか。でも、3人の演奏はとても楽しくていいですよ。聞いているだけで身体が踊り出してしまう」

「音楽は楽しく……あ！ クナ、だめだめ。そんなことしたらセンカが困るじゃない。静かにしないといっしょに行けないよ」

まだ、小さい二人の子供は元気がいい。なかなかじっとしてられないようだ。親子じゃない3人がいっしょにいるのには事情もあるのだろう。あまり詮索しないほうがいいかもしれない。

「オルターさんは、ここで何を？」

「ノーキョさんを訪ねて来たんですけど、ちょうど小島のほうで温泉堀をしているようで」

「あ、今日にでも入れるようになるって言われてた温泉ですね。温泉入ってから出発の計画だったんですけど。間に合わなかった」

「今日と言っていました？」

「建物はそのうちにとは言われてましたけど、お湯にはいるだけなら今日からでもって」

「また、張り切って掘ったもんだな、ノーキョさんも」

「私が入りたいってわがままを言ったからかもしれません。悪いことしちゃったな……あ、オルターさん、私、飛行船の時間があるので、これでー」島に向かってくる飛行船の機影を見つけたようだ。

「ああ、お引き止めしてごめんなさい。気をつけて。トラピさんにもよろしくお伝えください」

「わかりましたー。ハトポステル出すように言っておきますね」

「ノートのことわかったら、連絡くださいって伝えてください」

「ノート？」

「そう言えばわかると思うので。わからなかったらいいです」

「はい。じゃあ、オルターさん、行ってきまーす」

「行ってらっしゃい。クナちゃん、センカちゃんも気をつけて」

「はい、おじいちゃん、ばいばーい」

3人を見送って、あらためて小島のほうを見ると、座って休憩しているように見えた。もう、石を敷き詰めるだけということのようだ。あの様子だと海との境目がないような温泉になるのかもしれない。海とつながった温泉なんてこの島ならではの楽しみだ。みんながメーンランドから戻って来る頃にはいい水のきれいな温泉が完成しているだろう。

この日は、結局3人が戻ってくるまでガーコとガースを相手にノーキョさんのを待つことにした。島の時間は使いきれないほどたっぷりある。みんなが戻ってくると、温泉の湯船が完成したので、翌日はみんなで試し湯をしようということで話がまとまった。手伝いで来たはずだったのだけど、若い人の勢いにはとても追いつけない。

それにしても、楽しみにしていた温泉は思ったよりも早くできた。明日には試せると聞いて年甲斐もなくうれしくなってしまった。ネモネさんのカバくんもこれで少し休めるといものだろう。おいしい水にどんな効用があるのかはわからないけれど、このところちょっと気になっている物忘れなどにも効果があるといいとか、すっかり寂しくなっている頭の毛が生えてくるようなことがあるかもしれないとか、ありそうもないことをいろいろと想像してみたりする。神頼みみたいな効用ばかり思いついて自分でもなんだかおかしくなった。それでも、そんなことをあれこれ思う時間がまた楽しい。ノートの主もこの島の水の効用について何か気づいていたのだろうか。もし、それを知っていたのなら、こちらがまだ気づいてないだけでどこかに書き残してあるかもしれない。

そんなことを考えていたときに、船長の言っていたノートの印刷のことを思い出した。そろそろはじめようかと思い、引き出しからノートの束を取り出してみる。ページさえもふられてないままにばらばらに重ねられた状態で封筒に入れられているので、はじめてみた人は頁の順番に並んでいると思い読み始めるだろう。

ところがこのノートの順番は私が推測で並べただけで、それが正しいという保障はどこにもない。何日目というような記述があるものはそれを頼りに読み進めることもできるけれど、ここに残ってない頁や記述の抜けも多いから日付の入っていないものをどう並べて読むかでわかる話もわからなくなる。読む側がつくった順番によってどうにでも解釈できてしまう可能性すらある。

それを思うと消えかかった文字をなんとか読んで、見やすくするために印刷することはできたとしても、推測だけで頁をふることはむずかしいかもしれない。仮に製本したとしても、今のノートと同じように時間軸は判然としないままになってしまう。頁のない紙の束は本とは言えないだろう。

頁と時間の流れは似たものかもしれない。季節の記述があるところは、その季節を想像しながら読むことが多いけど、それが何年目の話なのかもわからない。結局、ばらばらになったノートは夢と同じように記憶の断片でしかないのだろうか。

***** ノート *****

天まで届く真っ白な入道雲。夜の月もいつになく白く大きく輝く。

夏が苦もなく過ごせているのは、リアヌシティに比べて湿度が低いおかげです。その分、日に当たっている時間を気にすることもなくなるので、いつもこの時期にはひどく日焼けしてしまいます。木陰で過ごせばこんなことにはならないのですが、風を楽しみたくて海辺で昼寝などをしていると、1日にして長い休みの後の子供のように真っ黒になってしまいます。空気が澄んでいることも日焼けをひどくしている理由のひとつだと思います。日の当たらない事務所で校

正作業をしていたころを考えると、今は別人のようにたくましくなっていると思います。リアヌシティに戻っても誰だかわかってもらえないかもしれません。

海辺にいて気付いたことがあるのでそれを書いておきます。それは、月の満ち欠けが普通の周期よりも遅いことです。記憶をたどってみると、この島に来て満月を見たのはまだ3度だけなのです。おかしいのはそれだけでなく、海の干満の差がメーンランドよりもはるかに大きいということです。とくに島に来たばかりのときの最初の満月のときに島が水没しそうなほどに水位が高かったことを考えると、あの赤かった月の色との関係もなにかあるように思えます。あの日はいつも以上にたくさんの魚影も見られたような記憶があります。満月の日に産卵をする動物もいると聞いたことがあるのでその関係かもしれませんが。"きまぐれ"が現れたのもちょうど満月の時期だったように思えるのです。

まだ、はっきりと確信は持てないでいますが、ジギ婆さんが言っていた、時間がゆるりと動く謎に少しずつではありますが近づいているような気はします。残念ながら、ひとつひとつのおかしなできごとはまったく理解できないことばかりですが。

***** ノート *****

この頁は何年目の夏に書かれたものなのだろう。月の周期が遅いというのは果たしてどのくらい遅かったのか。もしかすると、彼の単なる思い込みで2週間ごとに満月になると考えていたのかもしれない。そうじゃないとあまりにも道理が合わないというものだろう。それとも、星空のこともしばしば書かれていることを考えると、天文に詳しくて1日程度の遅れを正確に観測して把握していたのだろうか。

こういう風な内容の曖昧さがあることも含めて、順番のわからないノートを印刷にして本にするというのはなかなかむずかしい話になりそうだ。普段この島で生活をしていると時間を気にしないでいられることをありがたく感じていたし、ゆったりした暮らしはこの島の良さだろうけど、このノートのように時間の順番がわからなくなってしまうとさすがに困ってしまうかもしれない。まるで老人ボケのようなものだ。もしも本当に島から時間が消えてしまうようなことになると相当やっかいなことになる。



第37話 火炎

「じっちゃん、たいへん！ おきて！ おきて！」

外はすっかり夜の闇に包まれている。うとうとしてしまったようだ。何が起こったのだろうか？

「森が真っ赤！！」

「悪い夢だ……」現実に戻るために声にしてみる。

「じっちゃん、たいへん、たいへん」

「オルターさん、いますかー！」 誰か走り込んで来る音が聞こえた。ミリルさんの声だろう。

「うん？ ミリルさんまでがどうしたことだろう」

なんだか、騒がしい。これは、夢じゃないのかもしれない……。

「オルターさん、火事ですよ、半島が火事！」

「えー？ 火事？」 いきなりとんでもない現実に戻された。

「外を見てください」

「おお、空が赤い……」 呆然として立ちすくんでしまった。

「さっきから半島のほうの森が燃えているんです みんな消火に行きましたよ」

これは大変だ、すぐ行かないと。

「みんなあるだけのバケツもって」

「急ぎましょう」 ミリルさんはそう言うなり小走りに灯台を出た。

この島で火事が起きたのはじめてだ。少なくともこんな大きな火事は一度もない。バケツを両手に持って、煙を頼りに走って行くと、まだ100mもはなれたところなのに空が炎と火の粉で真っ赤に染まって、炎の熱が消火に向かう人の行手を遮る。みんなそれぞれにバケツをもって集ま

っているが、とてもそんなもので消えそうにないほど炎は空高く柱のように燃え盛っている。

「オルターさん！ 危ないからこれ以上近づかないほうがいいよ」食堂のある広場に着いたところで呼び止められた。

「あ、スロウさん。船はだいじょうぶでしたか」

「なんとかかんとか。気づくのが早かったから帆が焼ける程度で。ノーキョさんも今水をかぶって消火に向かったところ。おいらも今から海水を使って消火をしようと思って」

「海のほうからですね。くれぐれも気をつけてくださいよ」

「船にポンプがあるので、海水をくみ上げて放水してみようと思って。どれぐらい役に立つかわからないけれど。ここは、できることなら何でもかんでもやらないと。大切な森がなくなってしまうっちゃ話にならないから」

「スロウさん、ほんとうに気をつけてくださいね。森はいつかもとに戻るから」心配そうにミリルさんが言った。

「コピも手伝う」こちらを見ていた目から涙がこぼれた。怖さのせいかな、それとも悲しさをこらえているのか。よく見ると小さく震えている。

「コピちゃんはだめよ。ここでバケツに水を入れるお手伝いをしてましょ」制止するミリルさんの手を振り払おうとしている。コピの森への思いはだれよりも強い。

「しかし、これは、ひどいことになった。広場のほうまで延焼したら大変だ。島の自然も壊れるし、メインランドから来た人が過ごす場所もなくなってしまう。とにかく早く消さないと」

「コピちゃん、とにかくここから先はいつちゃだめよ、わかった？」

「うん……火はいつ終る？」泣きながらミリルさんに聞いている。「早く消えるといいね」なだめているミリルさんも答えようがない。

「かなりの勢いだな。これじゃあ、うまく消えてもほんとうに森はなくなってしまうかもしれない。とにかく急がないと」とても大丈夫なんて言えるような火じゃない。

「スロウさん、みんなの避難は終わってるのかな？」

「住人はいないところだから、だいじょうぶ」

「野営場に人はいなかったのかしら」ミリルさんが心配そうに言った。

「おいらが知ってる人は火が燃え広がらない段階で避難してたよ」

「オルターさん！ だめだめ、危ないから」ミリルさんにいくら言われても、さすがにコピといっしょに待ってるわけにはいかない。

「ここでこのまま見てられないから、ちょっと消火を手伝ってきます」コピが少し落ち着いたのを見て燃え上がる森に入る決心をした。

「オルターさん、ほんとに気をつけてくださいよ。水をたくさんかぶってください」ミリルさんが語気を強めて言った。

火を甘く見てはいけないのはよくわかってる。だからこそここで消さないと大変なことになる。半島の南のほうは先は少し低くなっていて、木々が茂り屋外で過ごすための野営場もある。メーランドから来た人がよく野宿している場所だ。この前、灯台で会ったうさぎの女性はだいじょうぶだろうか。こういうときは悪いことばかりが頭を過ぎる。半島から流れてくる黒煙が星空を覆いつくしている。早くしないと。

「コピちゃん、あの船長の持ってきた青い本にお願いしようね」後ろのほうで声が聞こえた。

「あおいほん！」

「困ったときの神頼みだね。みんなが無事に戻ってくるようお願いしようね。この島にだってきっと神様はいるから」

「おねがい、おねがい！」空に向かって小さな手を一生懸命すり合わせている。

「おいらはボートのほうに回ることにする。必ず消して来るので、ここで待ってて」スロウさんのいつになく高ぶった声が聞こえた。

井戸を過ぎて海に向かって土地が傾斜するあたりから、火をさえぎるものもなく熱風がただただ吹きつけて来る。あいにく風は南風で雨が降る気配もない。消防施設のない島では住民が力を合わせて水を運ぶのが精一杯。みんなが無事で消火を終えられることを祈らずにはいられなか

った。

第38話 新しい朝+

消火作業は休むこともなく朝まで続いた。水を汲む人、バケツを運ぶ人、炊き出しをする人、みんながそれぞれにできることで消火作業を手伝った。それでも火の手を抑えることはできず、野営所周辺の森は一夜にして焼け野原になってしまった。ナツヨビが巣を作っていたのはこのあたりではなかっただろうか。島の特異な自然が跡形もなく一夜にして消えてしまった。朝日が顔をのぞかせる時間になってようやく火は収まり、そこかしこからぽつぽつと小さな白煙が立ち上るだけになっていた。一面炭になってしまった野営所周辺で、何人かの人はまだ焼け跡をひっくり返しながらか火がしっかり消えているか最後の確認している。

半島の先に見えるスロウさんのボートからは、まだ放水が続いている。トクトクトクというポンプの小さな音が聞こえる。放水をぼんやりと見ていると、バケツを運んでいたノーキョさんが戻ってきた。

「いやあ、大変なでした。もう、へとへとです」

「みんなの力で島が助かりましたね」 こういうときはなにか前向きなことでも言わないと気持ちのおさまりもつかない。

「でも、半島のあの美しい木々は壊滅です。なんとか一部でも残したかったのですが。残念なことになってしまった」 ノーキョさんも首をうなだれる。

「ナツヨビもたくさんいたところですからね……」 ミリルさんが空を見上げて言った。

「そうなんです。島の自然体系が崩れないか心配で」

「そんなことよりノーキョさん、とにかく少し休んでください」 ミリルさんがタオルを差し出した。

「ああ、すみません。これじゃ、しばらくは温泉なんて言ってる場合じゃないですね」

「ここは、火が消えただけでもよかったということにしませんか。みんなでゆっくり温泉にでも浸からないと」

「そうか、そうですね。そのための温泉だ。そう考えましょう。でも、まだ交代で当番の見張を立てたほうがいいですね」

「見張？」

「ああ、燻ってるところから火が上がるとも限らないということもあるんですけど、変な人を見たという話があつて」

「というと？」

「真っ黒なパーカー来た人が野営をしていたらしいんですけど。その人が焚き火をしたままで、ゴムボートに乗って海に出たというんですよ。それも荷物を全部まとめて。ちょっとおかしくないですか？」

「もしかして、その人が？ そうだとしたら、ひどい話だ」この島にそんな人が来るなんて思いもしなかった。メーンランドの人の心はそこまで荒れてしまったのだろうか。

「その焚き火が急に広がったというんですよ。周辺に引火するようなものでも置いてあったのじゃないかと」

「それはなんとしても調べないと」これが悪意によるものなら許すわけにはいかない。でも、なんでそんなことをしなければいけないのかまったく理由もわからない。

「森は元には戻らないですよね……」ミリルさんがぼつりと言った。

「だいじょうぶ、自然の力は偉大だからきっと奇跡が起きますよ。新しい芽が出て、また新しい命が育っていく。自然の持つ治癒力は人が思う以上にすごいですからね。ここは、それを信じましょう」

「そうだといいな」ミリルさんから少し笑顔が溢れた。

「少ししたら、いろんな草木の種を撒きましょう。私にまかせてください。この森の種子は全部集めてありますから、だいじょうぶ」

「おお、それはすばらしい。心強い話だ。そうだ、森をスケッチしたものがあるので、ぜひそれも参考に」

「オルターさん、コピちゃんなら一本一本の木の場所まで覚えているかもしれないですよ」

「そうか、コピも手伝ってくれるね。島一番の物知りさんだからね」

コピが泣きはらした目のままで、いっしょうけんめい苗を植える仕草をしている。この子がいれば森は必ず蘇るに違いない。

少し話しているうちに、スロウさんの海からの放水も止まった。

「スロウさんのボートからの放水があつてよかったですよ。あれがなければ火の手は収まらなかったかもしれない。スロウさんは、島の恩人ですよ」とノーキョさんが言った。

「ほんとだ。あとでたくさんお礼を言わないと」また、これで島の絆が深くなったと感じた。

スロウさんは、普段はボートの上で暮らしている。半島の広場には小さな作業場を持っていて、ときどきそこで機械の組み立てをしている。昨日活躍したのもスロウさんが廃材を使って作った海水を吸い上げる機械だったそうだ。理由は聞いてないけれど、海水の調査もしているらしい。同じ自然の研究をするノーキョさんとは大の仲良しで、陸の先生ノーキョさんと海の先生スロウさんというところだろうか。

消火作業をしていた人も徐々に広場に戻ってきはじめた。それぞれに、よかった、よかったと笑顔で喜び合っている。みんなで島を守れてほんとうによかった。怪我の話も聞かないし、それだけが不幸中の幸いだった。食堂で作業をした人の疲れを取るための席を用意していると、スロウさんが戻ってきた。

「スロウ、お疲れ様。ノーキョさんがスロウさんが来たのに気がついて声をかけた」

「みなさん、お疲れ様。一晩かかっちゃったね。でも、消えてよかったよ」

「スロウさんのつくったポンプがあつてよかったって話をしていたところですよ。お疲れ様でした」ミリルさんが絞ったタオルを差し出した。

「少しでも役に立ててよかった。アグリンも顔が真っ黒だな。ははは」スロウさんが笑った。

「あれ、そう？」ノーキョさんがおどけた表情をして。広場に笑い声が広がった。安心したせいかみんなの顔に笑顔が戻ってきた。

「まだ、完成してないけど、このまま手掘りの温泉に行きましょうか？」ノーキョさんがみんなを誘った。

「あら、温泉できたんですか？」ミリルさんはまだ知らなかったようだ。

「まあ、2、3人入れるぐらいだけど、とってもいいお湯だよ」スロウさんも勧める。「もちろん、ネモネさんに了解もらっただけど」

「カバくんの初仕事ですね」とミリルさんが言うと、「そうなんですよ。カバくんピンクになって。間違いなくあれは名湯ですよ」とノーキョさんも自信満々に答えた。

「じゃあ、ちょっと支度してくるかな」と言うとスロウさんは船のほうに戻って行った。

「私も用意してきます。みなさんお疲れ様でした。オルターさんもよかつたらいっしょに温泉入りましょうよ。養老の温泉ですよ」

「オルターさん、早く行きましょ」ミリルさんに急き立てられた。

「じっじ、はやくはやく！」

「うんうん、早く試してみないとね」といいながらも混浴なのかなと思う。裸の付き合いというのはちょっと違うように思うが。

「あ、オルターさん、水着で入ってくださいよ」また、周りから笑い声があがった。

半島のほうを見るとナツヨビが上空を旋回していた。

「あ、ナツヨビも大丈夫だったね」鳴き声の聞こえるほうを指差した。

「子どももいる」コピの目はどこまでもよく見える。

「そうか、子供ももう巣立っていたのか。よかった、よかった」

自然食の会の夜に見た空虫はどうなっただろうかとふと気になった。あれが幻だったとしても、いると信じてそのまま記憶に留めておきたかったが、この火事でそれもかなわないことになってしまった。



第39話 楽しいお湯

スロウさんのボートに乗せてもらって小島のほうに渡ってきた。沖のほうから見る半島は普段見ている景色とまるでちがった眺めなる。

「海が全部温泉になったようでしょ？ 海と温泉の境目がないんです」

「まったく、まったく」

「水がこの島のいいところだったなんてね。どうして今まで気がつかなかったんでしょうね」

「まったく、まったく」

「だんだん若返って来たみたいですよ」

「まったく、まったく」

「オルターさん！ 皺がなくなってきましたよ」

「まったく、まったく……ん？ どれどれ。ほんとに？」顔をさすってみるけど自分ではよくわからない。

「あはは、聞こえてました？ すっかりくつろいでますね」

「あ、失礼、失礼。しかし、こういう四方を海に囲まれた温泉っていうのもいいものですね。これじゃあ、皺もなくなるってものですよ」

スロウさんと二人でこちらを見て笑っている。今朝までの火事のことをすっかり忘れてしまいそうなほどにいいお湯だ。自分が腑抜けになっているのがわかる。

「男3人で温泉ってなんだろうね」スロウさんが言う。

「ミリルさんたちはまだ来ないかな」ノーキョさんが半島のほうを見ながらいうと、「まあ、それもない話かもしれないな」スロウさんが笑う。

ミリルさんとコピは一度戻ってから来るというので、途中で分かれて男3人で先に来た。言われてみると、男だけだとどうもしっくりこない。これじゃ作業員が仕事のあとの汗を流している

ようにしか見えないだろう。実際そうなのではあるけれど。

「あ、あれネモネさんじゃない？」景色を眺めていたスロウさんが言った。

カバくんといっしょの小さなボートが近づいて来た。

「ネモネさん、いい温泉になりましたよ。先に入っていました」ノーキョさんが言うと、「どうぞ、みなさんの温泉ですから遠慮なく」うれしそうな声が返ってきた。

「お湯の感じを聞きたくて、遠慮もなく来てしまいました」横でピンクのカバがあくびをした。

「ネモネさん、これはもう最高ですよ。肌がつるつるとかもあるんだけど、なんだかね入っていると陽気な気分になってきますよ」今の気持ちがそのまま言葉になって出た。

「ほんとに、火事のことあまり気にならなくなりますよね。不思議だな」ノーキョさんが、上に広がる真っ青な空を見上げた。

それを聞いてネモネさんが、「これたぶん、みんなが楽しくなれるお湯なんですね」と納得したように言った。

「なるほど、効用は楽しい気分になれますだ。それはいい」スロウさんが掬ったお湯がゆっくりこぼれる。

「あとはいつ皺が消えるかだけだな」と言うと、

「あはは、オルターさん、そこはじっくりと。ですよ、ネモネさん」とアグリさんが言うと、「そうですね」とネモネさんが微笑む。

ネモネさんの言う通りなら、この楽しい気分が若返りにつながるのかもと思う。笑顔いっぱい時間が身体に悪い訳がない。

「本島のほうでいい水がなかなか見つからなくて、気分転換も兼ねてと思ってスロウさんをお願いしてここに来てみたら偶然見つかったんですよ」

「いやいや、ネモネさんとカバくんの力だよ。おいらたちじゃきっと一生かかってもみつけれなかった。探しもしなかつただろうしね」と言いながらスロウさんがお湯から上がった。

「よかったらネモネさんもどうぞ」と言うと、「あ、私は一番最初に試したので」と微笑む。さすがにむさ苦しい男3人といっしょというのはためらうだろう。

「ここに小さな小屋でもつくって、休憩できるようにしないと」ノーキョさんの頭には次の計画ができてるようだ。

「ところで昨日の火事は何が原因だったんですか？」ネモネさんが色を失ってしまった半島の森の方に目を向けた。

「なんだか不審な人を見たという話はあるんですけど、実際それが原因かどうかはわからないですね」ノーキョさんが簡単に状況を説明した。

「自然発火ということはないんですか？」

「私の知る限りはないと思いますよ。少なくともこれまで一度もなかったし、雨の降ったあとでそれほど乾燥もしてなかった」と答えた。

「そうなんですね。だとするとほんとうに残念な話ですね」

それを聞いたノーキョさんが、「原因は原因として、1日でも早くもとのきれいな半島に戻さないと」と言った。

それでももとの森に戻るまでは何十年もかかるだろうし、しばらくは草地のようなところになるのかもしれない。そう思うと失ったものは大きいと言わざるを得ない。

「あ……」双眼鏡で半島のほうを見ていたスロウさんが小さく声を上げた。

「ちょっと行ってくる」と言うなり洋服をつかんでいきなりボートに飛び乗った。

「スロー、どうした？」

「スロウさんが何か答えたようだったけれどエンジンの音にかき消されて聞こえなかった。」

「あ、人だ」スロウさんの置いていった双眼鏡を覗いてノーキョさんが言った。

「人？」と聞くと「半島の火事のあとに人がいますね」

「後片付けの人ではなくて？」

「なにか探しているみたいですよ」

「あれ、パーカーだ！」とノーキョさんが叫んだ。

「え、それって昨日のですか？」

「あ、ボートに……乗った。ゴムボートだ……」

「スロウさんは追いつきそうですか？」と聞くと、「だめですね。スローのボートは遅いから」と悔しそうに言った。

何をしていたのだろう。さすがの温泉にもこれを気にしなくするほどの効用はない。一瞬にしてひどい現実に戻されてしまった。

どこかに犯人がいると思うと、まだしばらくは温泉に入っている場合じゃないのかもしれない。温泉も早々に切り上げてまた半島に戻ることにした。

第40話 残された印

「このあたりだったよね。何か残ってないかな」スロウさんにノーキョさんが聞いた。

水浸しになったところを少し探して「炭ばっかりだね」とスロウさんが言った。

「なにしてたんだろ」

「犯人は現場に戻るっていうし、やっぱり怪しいな」スロウさんはボートの去ったほうをじっと見ている。

「ほんとに片付けしに来たんじゃないかな」

「それなら、あのボートはどこに行ったと思う？」

「それはそうだな。島からボートで離れる人ってほとんどいないからね」

「それにあのボートは普通じゃない。えらく早くかった」

スロウさんは去ったパーカーを犯人と確信しているようだ。燃えた木を片付けながら、何かみつからないかとまわりを探しているとコピが来た。

「お、コピ、お昼寝してきたかい？」少し元気になったような顔で頷くのを見て安心した。

「じっじ、これ」何かを手に持っている。

「これ、みつけた」とこちらに小さな手を差し出した。

「これは？ ボタンかな。どうしたの？」

「ここにおちてた」

「え、今日みつけたのかい？」

「うん」

「ノーキョさん、スロウさん、ちょっといいですか」少し離れたところを探していた二人を呼んだ。

「これが、ここにあったらしいです」

「なんだろう、bかな？」スロウさんが指先で汚れを落としながら言った。

スロウさんから渡されたノーキョさんが、「bかqだな。なにかのバッチかな。ボタンじゃないかな」

「aでもcでもなくてbか、pでもrでもなくてqね」スロウさんがこれだけじゃ何もわからないと言いたげに首をかしげた。

「島では見たことないな……」とノーキョさんもお手上げだというようにつぶやいた。

「前から落ちてたのかもしれない」と言うと、「なかった」とすぐにコピが言った。コピが言うなら間違いない。だとすると、やはり火事の際に落とされたものだ。

このあたりはノーキョさんが消火していたところですね」と聞くと、「そうなんです。もう1人いたけど島の人だし……でも、あとで聞いておきますね」

3人で頭を悩ましているところにミリルさんが来た。

「みなさん、ゆっくり休めましたか？ あ、コピちゃんも来てたのね。ごめんね寝ちやって」

「温泉のほうは楽しめました？」

「ミリルさんも早く入ったほうがいいですよ。すごく幸せな気分になれるから。まだ、ネモネさんがいるんじゃないかな」とノーキョさんが言った。

「じゃあ、このあと行ってみますね。それで、オルターさん、ハトポステルが来てましたよ」

「誰からでした？」

「トラピさんから。これです」

「あ、ナミナさんが伝えてくれたかな」小さく巻かれた手紙を伸ばした。

「ミテホシイトコロ ガ アリマス リアヌシテイ ノ サーカスゴヤ デ マツテマス……」

「何かわかったんでしょうか」とミリルさんがこちらの顔を伺っている。

「トラピさん、急いでいたのだろう名前も書いてない。もしかしたらナミナさんが書いてくれたのかもしれない」

すぐに来てくれと言ってるように感じた。何をみつけたのだろう。トラピさんのことだからノートに関係した何かをみつけたに違いない。それも一度もメーンランドに行ったことのない私に來いというからには、かなり確信を持てる手がかりを見つけたのだろう。

「ミリルさん、トラピさんたちはいつまでの予定でした？」

「出る前には、2、3ヶ月と言われてました」

「ちょっと、戻ってすぐ返事を書きますね」

「オルターさん、火事の後には僕たちでなんとかしますから行ってきてください」とノーキョさんが言うとスロウさんも頷いた。

次に船長が来るまで、一週間もないだろう。この年になって飛行船は考えられないから、船長に頼んで船に乗せてもらおう。早ければ2週間後はメーンランドだ。火事の後始末のほうは二人にまかせて、すぐに準備をしよう。新しい新聞も持っていかないと。あまりに遠いせいで今まであまり考えることがなかったメーンランドが急に身近なものになってきた。自分のまわりで何か動き始めている気がした。

第4 1話 望郷*

広場のハトポステルに2号がまだいることを確認してリブロールに戻った。テーブルの引き出しからハトポステル用のロール紙とペンを出して、とりあえず船長の船が到着し次第メインランドに向かうことを書いた。

書き終わって筆を置くと、あらためて留守中のリブロールをどうするかが気になった。ミリルさん一人にまかせていいものか、それとももう一人だれかにときどき見てもらうようお願いしておくか。頼むならノルシーさんにしようか、ノーキョさんにしようか。いろいろ考えると気が重くなってくる。

200年以上前のノートへのこだわりだけでそこまでやらないといけないものか。それで何がわかるというのかとも思う。一方で、こんな機会は二度とないのだから行かないでどうするという心の声も聞こえる。メインランドには誰か知っている人でもないのととてもじゃないけど一人では行けない。それもリアヌシティとなるとこれが最初で最後のチャンスかもしれない。

そのときハトポステルの2号が、こちらの気持ちを察したように大きく羽ばたく仕草をした。それを見た瞬間に心は決まった。躊躇する理由はない。きっと島のみんなもわかってくれる。

目の前に置かれている印刷機を見て船長が言っていたノートを印刷する話を思い出した。向こうにノートを全部持っていくわけにはいかない。そう思うと、余裕をもって2週間後と書いたものの、自分に残された時間はあまりない。印刷はできるところまでということにしても、せめてメインランドの生活を書いてあるところぐらいは用意して行きたい。

ハト2号の足の筒に小さく丸めたロール紙を入れて、飛び立つのを見届けて灯台へ向かった。

***** ノート *****

唯一海を渡る手段であった手漕ぎの船も、あの日以来戻ってくることはありませんでした。やはり一瞬見えた人影は見間違えではなかったのかもしれませんが。人がボートを使ってメインランドのほうに戻ったのであれば、そこからまたこちらに渡って来る人もいるかもしれないという期待もしてしまいます。落ち着きなく動いていた様子から、それがどこかから流れ着いた動物だったとしたらボートとの関係はなくなってしまうですが、そうであれば、いずれまたどこかでその動物に会えるという楽しみにもなります。

上弦の月のころだったと思いますが、ボートの行方を探してみようと思い立ちました。少し大きな木を組み合わせて簡単ないかだのようなものをつくり、メインランドのほうへ漕ぎ出しました。30分も海の上にいたでしょうか。空は晴れ渡って霧も出ていなかったのですが、遙か先を眺めてもボートはもちろんメインランドの影を見つけることもできませんでした。この島に渡ったときはそれほど距離がなかったことを思い出すと、なにか釈然としない気持ちになりました。

。考えられるのは私の向かった方角が違ったということぐらいでしょうか。北に向かったつもりが東の方角になっていたのかとも思いました。潮任せのいかだでは思うような方向にも進みません。鳥たちが私の頭の上で騒ぎ立てているのは何かを伝えたいのかもしれないと思い、鳥影が見えなくなる前に戻ることにしました。

メインランドの住居の周辺には公共の交通手段として運河が網の目のように張り巡らされていました。船は生活の一部だったので、子供のころは船大工さんの工房によく出入りして船作りの真似事のようなことをしていたのを思い出します。だからといって、その時の記憶でとても人の乗れる船などつくれるものではありません。それどころか、最低限の道具であるノミも鉄鎚もないのですから。

さすがに途方にくれて、流れ着いた瓶にここにいることを買ったノートの切れ端を入れて海に流したりもしましたが、それが誰かの手に届く可能性は、夜空の星がこの星に届くようなものときえ思えます。なにかでつながっているという気休めのようなものだったかもしれません。

***** ノート *****

町にたくさんの運河があったことが書かれている。当時のことを考えるとかなり交通の発達していた街だったのだろう。そのお陰で交易も盛んだったのかもしれない。故郷に対する想いも決して消えることはなかっただろう。もしかすると、彼はメインランドに戻りたかったのかもしれないときえ思う。この穏やかな環境があったとしても、人の温もりには替え難かったのかもしれない。

人影についても書かれているけれど、この人がいっしょであったり、きまぐれと友達になれていたら、終の住処になったとしても不思議ではないとも思える。可能であれば、仕事をきちんと清算して、家族さえも招き寄せたかったのかもしれない。しかし、それらに関わる記述があるだろう後半のノートは島には残ってない。なくなってさえいなければきっと世界のどこかにあるはずだ。68年前に島を去った人が、大切なところだけを持って行ってしまったのだろうか。そこに何が書いてあったのかは島のだれも知らない。

インクが灯台の外で小鳥を追いかけている。鳥のほうも逃げる気がないのか、少し羽ばたいてはすぐ近くに舞い降りるものだから、インクのほうも懲りないで忍び寄っては飛びつく。猫と鳥が仲がいいという話もあまり聞いたことがないけど、彼らの様子を見ているとそんなことはお構いなしにじゃれあっているようにも見える。灯台の周囲はいろいろな花が咲くので、水玉模様の蝶もそこここでひらひらと舞っている。動物たちが無邪気に戯れているのを見ると、島の自然と暮らす豊かな生活のありがたさをしみじみと感じる。動物と人間の境目も意識しないような生活はなによりも本来の生き方に近いのかもしれない。人が特別だという考え方はいつのころからはじまったのだろう。この島で暮らしているとそんなことさえもどうでもよくなっていく。人の歴史を謳歌しているだろうメインランドに着いた途端にノートのことなど忘れてしまい、この島に

戻りたくなってしまふのかもしれない。

ノートでメインランドに関連した記述を探すのも思った以上に手間がかかる。いつでも寝られるようにベッドに入って続きを読むことにした。まだまだ先は長い。

第4 2話 呼び声 *

いつまでも目覚めの時が来ないような深い睡魔が全身を包み込んだままの時間が続く。窓の外からインクの鳴き声が小さく聞こえてくる。まるで別の世界から誘いかけてくる艶かしい女性の声のようだ。

***** ノート *****

ノートを書き始めてもう何年になるでしょうか。皮の綴じ紐も切れかけているので、このままだとノートとしての体裁を保つことさえできなくなりそうです。月日の経つのはほんとうに早いものです。

今書いているノートが3冊目になります。紙を大切にするように少しの隙間も無駄にしないように心がけてきましたが、このノートが用意してきた最後の1冊になります。最近、ノートの残り少ないページと自分の島での生活が重なっているようにさえ感じます。あと何年書き続けられるでしょうか。ページがなくなったときが、私がこの島を離れる時になるのでしょうか。

ひと夏の予定でこの島に来た日が昨日のように思い出されます。今では、だれも私が生きていないと思ってないかもしれません。もしそうだとしたら、このノートをいつの日にか誰かがみつけてくれることを祈るばかりです。それすら叶わないことになれば、この島はまた永遠に閉ざされただれも知り得ない世界に閉じ込められてしまうのです。

いつの日か、このノートがリアヌシティの人の手に届くことを信じるのであれば、町の人に向けてもっと書き残しておかないといけないと思います。

市の統合直前のあわただしいときに後輩だったトエル君とアシスタントのエミル嬢に仕事を任せて出てきてしまいましたがあまくやってくれているのでしょうか。新聞社の事業拡大がどうなったかだけはこちらに来ても気になるところです。

あのころ話題になっていた新しい銀行という会社との話はどうなったのでしょうか。失われた子供たちというところから来た人がその話を持って来ていたと思います。編集長は銀行という仕組みが世界を変えるのだとよく言っていました。私にはよくわかりませんが、大きな仕事が自由にできるようになるというような話でした。ほんとうに大きくなるのがみんなの幸せにつながるのかはわかりません。今この島に来て強く感じることのひとつです。

間借りをしていたエリムおぼさんにはとても申し訳なく思っています。おぼさんのつくる野菜いっぱいのおシチューはとてもおいしかったのを思い出します。自分の生活も省みないで私のことをいつも気にしてくれた人だから、借りていた部屋を今でもそのままに残してくれているかもしれないと思うと心が痛みます。もし、そうであれば、よく利用していたカフェのアビムさんに預けてきた蓄えはすべてエリムおぼさんに部屋代としてお渡ししたいと思います。もちろん足りないのはわかっていますから、多少の足しにでもなればということですが。廊下を照らす蠟燭の

足しにでもしていただければと思います。冬のすきま風も身体によくありませんから、壊れた窓の修理にも使ってもらってもいいかもしれませんし、入り口の駆け上がりの欠けたところも怪我をされるのではないかと心配です。

街の記憶を思い出しながら書いていると、楓の森やエルド川のほとりのレンガの道までもが懐かしく思い出されてきます。毎日通勤で通った道で、毎朝庭の花の世話をしていたあのお嬢さんはもうどなたかのご婦人となられてしまったのでしょうか。今でも湖の花を探しに出かけられているのでしょうか。そんなことを考えていると、過ぎ去ってしまった時間の長さについて改めて考えさせられます。

***** ノート *****

ページをめくっていくと、町のことを書いているところはあちらこちらにあった。これまでメーンランドに行くことなどまったく考えてもみなかったのがこれまで目にとまることもなかったのだけれど、こうして読み直してみるといろいろなところに書き残されていたことに気づく。ふるさとへの郷愁はどんなときも消えることはなかったのだろう。

半分ほど見たところで、昨夜から溜まっている疲れで身体に押しつぶされるような重さを感じるようになってきた。字を追う目も瞼で閉じられることが多くなってくる。うとうととしては目覚め、目覚めてはうとうとする繰り返しが続く。現実の時間とノートの時間の境目がわからなくなるほどに意識が混じり合ってしまった。一瞬見る夢の中でメーンランドの石畳を歩く自分も見えた。石畳の先にエリムおばさんの家も見える。一步一步踏みしめる足の裏には石畳のごつごつした感触が伝わってくる。そして、赤い花の咲き乱れる庭で花摘みをしていたおばさんがこちらに向かって手を振ってくれた。その声はおかえり、ソダーさんと言っているように聞こえた。

第43話 旅立ちのとき

今日はいつだろう？

あまりに深く眠り込んでしまったので、ベッドに入ってから何日も過ぎたような錯覚にとらわれた。子供の頃の昼寝のあとに感じた、あの一人時間から取り残されたような感覚だ。あまりに突然の火事だったから、自分でもわからないほど疲れていたのだろう。身体は正直だ。

遠くから誰かを探しているらしい人の声が聞こえた。それがコピの声だとわかるまでに少し時間がかかった。夢と現実の間をふわふわと浮かんでさまよっているようだった。だれかが起こしに来てくれなければ、それこそ昼どころか何日も目が覚めなかったかもしれない。

呼ぶ声に促され薄く目を開けたとき、世界は磨りガラスを通したように白くぼやけていた。コピの声のするほうに顔を向け、ミリルさんに印刷のお願いをするように頼んだ。確認のできたページを封筒に入れてなんとか持たせた。その後は、意識の奥からするするっと伸びてきた夢の触手に捕われて、また眠りの淵へと引き戻されていった。

再び目覚めたのは真夜中だった。寝すぎで体中が痛く、それが同じ日なのかどうかさえも怪しくなっていた。夜中の散歩というわけにもいかないのに、そのまま机に向かってメインランドについて書かれているページ探してぱらぱらとページをめくった。あとで思い返してみると、この時点で私の意識はすでに島になかったのかもしれない。ノートの主が書き残したふるさとの情景が自分の記憶を塗り替えていくような不思議な時間だった。

翌朝からのはじめた印刷は思ったよりも順調に進んで、3日もするとメインランドのことが書かれているところはほとんど印刷で複製することができた。ミリルさんの頑張りがなかったらとても無理だっただろう。そして、あの船長の持ってきた青い表紙だけの本にメインランドの思い出を書いたページが綴じこまれた。ノートの主の記憶を辿るように青い本の長い旅が始まった。

新しい島便りもつくった。ひどい火事もあったけど、一日も早く水の力を借りて前のような美しい島に戻ることを祈りながら、楽しくなれそうな温泉のことを書いた。メインランドでできるだけたくさんの人に渡してこよう。それが島のみんなを支えてくれて、森の再生も早めてくれるような気がする。

船長の定期船が来たのはそれから2日たった朝だった。それからは、あわただしく出発の準備がはじまった。船長に予定を聞くと、今回は島に一泊して帰るとのことだった。新聞の効果かどうかかわからないけれど、数人の観光客も乗っていた。それぞれに出発時間を確認して島の散策に出かけていった。彼らの観光の時間を取るために船内で一泊するのだという。

「オルターさん、準備のほうは大丈夫ですか」とミリルさんが気にかけてくれる。一人じやなにもできない人だと思われているから仕方ない。

「少しの間ですから、荷物はあまり持たないでね。すぐ戻りますよ」と気軽な旅を装ってみる。

「すぐに戻るって言って戻らなかった人もいるからね」めずらしく顔を出していたノルシーさんが人の心を見透かしているように笑った。

「え？ あー、ノートの主のことですね。ミイラ取りがミイラにならないとも限らないということですか？」ミリルさんがまた心配になったようだ。

それを聞いていたコピまで「じっじ、早く帰って」と言い出した。

「だいじょうぶ、私は若くないし、この島が自分の終焉の地と決めているから」少なくとも今は本当にそう思っている。

「何かあったら、俺もいるしな」ソファで寝ていた船長が目を覚まして、いつもの調子で話に割り込んできた。

「必ず連れ戻してくださいよ、船長」ミリルさんがソファの船長のところで約束してくれというように話している。

「いや、その時は俺がリブロールのオーナーになる。わははは」とその願いを一笑に付した。

「もう、船長はそんなことばかり言って」ミリルさんがぶいと横を向いた。

「ミリルさん、心配ないですよ。向こうにはトラピさんもナミナさんもいるから安心してください」

みんなの様子をじっと見ていたコピが「じっじ、これ」と言って小さく握った手を差し出した。

「これは？」と聞くと「一番きれいな石。昨日みつけた」と精一杯の笑顔でこちらを見ている。

「これは宝石かな。コピありがとう。必ず肌身離さず持っているよ。これで大丈夫だね」光にかざして見ると、虹色に輝いた。石を通して光の先を見るとそこにも小さな虹が見えた。なんてきれいな石なんだろう。こんな石のある島を忘れてしまうわけがない。

それを見ていたミリルさんが「なくさないように袋を作りましょう。ちょっと待っててください

いね」といって裁縫セットを手提げ袋から出した。

「みんなよお、なんだか俺が爺さんを誘拐でもするようじゃねえか。どうなってるんだ、おい」

船長の大きな声を聴いてちょっと雰囲気や和んだ。船長がいれば心配なことなんて起こるはずもない。すべてはうまくいくはずだ。

「あれ、オルターさん、もう出発ですか？」いつもと同じつもりで資料整理に来たノーキョさんがたくさんの人を見て驚いている。船長のように神経の太くないノーキョさんだから、これではいつものようにうたた寝もできないだろう。いつものリブロールでなくてちょっと申し訳なく思う。

「出発は明日ですよ」と言うと、ノーキョさんは、安心したようにいつものようにテーブル席の椅子に座った。

そうは言っても、今日しか会えない人もいるかもしれない思い、留守の願いを書いた手紙をみんなに手渡して回った。

「これは？」とノーキョさんが不思議そうな顔をした。

「みんなにひとことだけですけど手紙を書きました」

「オルターさんらしいな。あとでゆっくり読ませてもらいますね」

「そうしてください。ここで読まれるのはちょっと気恥ずかしいですから」

出発の時間が近づくにつれ、島の美しさはこの人たちの温かな気持ちでできているのかもしれないとあらためて感じた。ノートさんに始まったかもしれない人のつながりはみんながどこに行こうとずっと続いていくのだろう。

第44話 手紙

出発の日は好転に恵まれた。もう準備は万端だ。

「ミリルさん、しばらく留守にするけどよろしくお願いしますね」

「手紙を出すのを忘れないでくださいね」何度も何度も念押しをされた。コピのくれた虹色に輝く石もかわいい袋に入れてもらってなくさないように首から下げた。

船長の案内に従って船に乗り込むと、タラップが船に引き込まれた。濡れてツルツルした硬い鉄板の床に足元を取られそうになる。今朝掃除したときの水がまだ乾いてないのだ。

しばらく船内を見ているうちに、昨日島の散策に出かけた人たちも戻って、みんな乗船し終えた。初めて乗った船長の船は、甲板には気の利いた椅子があるわけでもなく、倉庫がそのまま船になったようだ。正直言ってあまりゆっくりできるような船ではない。でも、どこことなく感じる安心感は船長のイメージそのままだ。

みんな、揺れるから、間違えて落ちないように手摺をつかんでいてくれという船長の声があったと思った瞬間に船が大きくなづくように前後に揺れた。

ゴクン、ゴトン、 ドン、 ドン、 ドン、 ドン、 ドン、 ドン ……

目覚めの悪そうなエンジンがゆっくりと回りはじめた。

「オルターさん、元気でねー」

「おいしいものたくさん食べてきてねー」

「お土産よろしくーねー」

見送りの言葉を聴いていると観光旅行にでも出かける気分になる。

同乗している乗客たちはみんな船室に入ってしまったようだ。一人甲板に残ってみんなが見えなくなるまで手を降った。パン屋さんの近くに見えるのはユーヨアさん、床屋さんのところに二人でいるのはエモカさんとネモネさんだろう。灯台のところでも手を降っている人が見える。あの大げさな手の振り方はまがいなくノルシーさんだ。こちらノルシーさんが小さくなって見えなくなるまで手を降り続けた。しばらくスローさんの船もついてきてくれていたけど、ふたつの船の間は少しずつ離れていった。追いかけるのを諦めたスロウさんは船をとめて、こちらから見えなくなるまでその場所で見送ってくれた。

船のほうは見送りはいつものセレモニーですとでも言いたげに、スピードを少しずつ上げて島からの距離を広げていった。さっきまでいっしょだったナツヨビも、海の色が変わるあたりまで来たところで島のほうに戻って行った。

+++++ 島の人々 +++++

見送りから戻ってきたナツヨビがリブロールのデッキのポールにとまった。

「オルターさんが戻るまでに森を少しでも元に戻しておかないと」ノーキョさんが言うと、遠い沖のほうで別れを惜しむようにくぐもった汽笛が鳴った。

「ほんとうに行っちゃいましたね」ノーキョさんが言った。

「ほんと」デッキから戻ったミリルさんが力が抜けたように椅子に座った。

「じっじはいつもどる？」コピがもう待ち遠しくなって聞いた。

「すぐに戻るよ。たぶんこの島好きだから」灯台から戻ったばかりのノルシーさんが答える。

いるはずの人がいない空虚な時間がリブロールの店内をゆっくりと包んでいった。見送りに集まっていた人が船のほうを名残惜しそうに見ながら、それぞれに椅子を選んで座りはじめた。夢から目を覚ましたようにミリルさんがみんなのお茶の用意をはじめた。みんな口々に突然の旅について話しながら手紙を開きはじめた。

「半島の森をよろしくって書いてありました」最初に読んだノーキョさんが言った。

それを聞いたミリルさんが「私には、お客さんとコピをよろしく、ですって」と言いながらコピの頭に手を当てた。

「よろしく？」コピが首をかしげた。

「コピちゃんを可愛がってねって、じっちゃんが」

「いいこ、いいこ！」コピが手を合わせてうれしそうに笑う。

「コピちゃんには、ナツヨビやシマモグラと仲良くって書いてあるよ。ノート印刷ももらえたしよかったね」

「みんな、みんな、友だち！」

それぞれに手紙を読んでいると、少し沖まで見送りに行っていたスロウさんの船が戻ってきた。リブロールのデッキに船を横付けし、ぐったりした様子で店に入ってきた。

「この先の海は、なかなかむずかしいね。気流も影響しているんだと思うけど、方位と距離がうまくとらえられない。よく船長は座礁しないで来られるな」

「そんなにむずかしいの？」

「並の航海士じゃ無理だな。自然気象すべてに通じてないとだめだね」

「船長ってやっぱりすごい人なのね」

「あんなに連結した船を操舵できること自体普通じゃないよ」あきれたような顔をして言った。

「オルターさんたちが、帰って来るまでに温泉つくって、おいしい水もみつけてお迎えできるといいですね」高台で見送ったというネモネさんが言った。

「おいしい水が見つかったって連絡をすれば、きっとすぐに帰ってきますよ」ノーキョさんが笑った。

「ネモネさんのおいしい水頼みですね」ミリルさんもそんな気がした。

+++++ 島の人々 +++++

第1章のあらすじ

時計がなく、時間に追われることのない辺境の小さな島ウォーターランド。大陸メインランドから遠く離れたこの島は、都会の喧噪を逃れた人たちが自然と共に暮らす自由な生活を楽しんでいるところだ。

この島には200年以上も前に島を一人で訪れた人によって書かれたノートの一部が残されています。そのノートには大きな時間がゆるりと動き、島が消えるという謎めいた話が書かれています。しかし、今そのことについて知っている住人はだれもいませんし、それを目にしたものもいません。

さらに島での生活の記録として、ミドリの鮫との遭遇、方位のずれ、ゆがむ虹など常識では考えられないできごとが次々に起こったと記録されています。しかし、ノートの一部しか残されていないため、そこからすべてを知ることはできません。一人で生活していたノートの主がどうなったのかさえも謎のままです。

住民で最古参になる本屋のオルター爺さんがそのノートを手がかりに、島で起きるふしぎな出来事の秘密をなんとか解き明かそうとします。一方で、住民の失踪やおいしい島の水の発見、島特有の動植物との暮らし、不審火など、島では都会とは違う出来事が頻繁に起きます。

住民たちは予想もつかないそれらの出来事を自然の一部として受け入れています。不思議と発見が交互に現れては消える暮らしがこの島の日常です。島のおおらかで、時間やお金に縛られない自由な生活はそれらのできごとを楽しみに変えてしまうほどに豊かなものなのです。

メインランドとの連絡船の船長もこの不思議な島に魅せられている一人です。島のすばらしさをメインランドに伝え、ノートに関する情報を得ることを提案します。古い印刷機を手に入れみんなで島便りを定期的に出すことになりました。それを読んだ人が少しずつ訪れはじめたころ、メインランドに仕事で渡っていた島の住人から、オルターに知らせたいことがあるのですぐに来てほしいとの手紙が届きます。

島をまったく出たこともなくのんびりと生活していたオルターでしたが、ノートの謎が解かれる期待を持って船長の船でウォーターランドを後にすることにしました。

第2章の登場人物

オルター	うたた寝書店リブロールの店主
ダルビー	定期船の船長
マリエール	船長のパトロン 俗称マリー
ルーラー	スラント・ケープ港の情報屋
ナーシュ	行方の知れないマリエールの主人
トラピ	大道芸の手品師
ナミナ	小さな楽団をもつトラピさんの友達
ネモネ	おいしい水を探しカバと旅する人
コノン	ウサギを背負った女性
お祖父さん	コノンさんの祖父
お祖母さん	コノンさんの祖母
ミオ	家族の家に住む赤毛の少年
ヨシュア	家族の家の主催者
ターク	ヨットマン
ホーラー	自称公書館管理人の男
ハロウ	歴史ある雑貨屋の主人
ジノ婆	湖に住む180歳の老婆
その他	

第1話 反転する海

ドッコン、ドッコン、ドッコン.....エンジンの音が船底のほうから響いてくる。荷馬車のようにずっしりと重いリズムが足から身体に伝わる。慣れるまでに少し時間がかかるかもしれない。

「船長、こんな日が来ると思わなかったね」

「おれは、いつかこの日が来ると思っていた。爺さんはメインランドに行くだろうってな」

「どうして？」

「船乗りの勘ってやつだな。航海と人生って似たようなものよ。おおよそは見当がつく」

「そういうものかね」

「そこに海図があるだろ。それを見てみな。方位計と合わせると位置がわかる」

言われた通りに地図と方位計を合わせてみる。

「島からメインランドの方向へ向けて離れている？ ということだね？」

「島は見えるか？」

「あれ、地図の向きがおかしいのかな？」

「いや、合ってる」

「しかし、窓に見える島の方向が.....違う」

「おかしいだろ？ この島の入口は普通じゃないってことだ。常識じゃあり得ない航路だからな」

「島に見える方角が磁石の示すものと違うということ？」

「早い話がそういうことだ。島に方位計通りに入ろうとすると入れない。常識じゃあり得ない方位の組み合わせでやっと到着できるってわけよ」

「そんな話、聞いたことないね」

「ないだろうな。俺しか知らない」と言って高笑いした。

「ただ、俺にはなぜだかわかっている。誰でも自由に島に行かれちゃ困るから教えないけどな」船長の笑い声が操舵室に響く。

外に出て、今出たばかりの島を眺めて見る。いつも島から見ていたのと逆にとても早く遠ざかっているように見える。島から見たとき、遠いものが近くに見えるのとは逆に、目の前にあるはずのものが水平線の端にあるように感じる。まだ出向して数分なのに。

「船長、これはどういうことなんだろう」

「さあ、こればかりは俺にもよくわからない。いずれにしても、見えるものと実際は違うということだ。海から島に入る人は今でも少ないだろ？ 昔と変わらず、今でもやっかいな島ということだな。わはは」

「飛行船も同じなのかね」

「俺は飛行船乗りじゃないし、わからねえな。でも、似たようなことは起こるんじゃないか。今度飛行船のやつに聞いてみな」

船は、一歩ずつしっかりと海底を踏みしめるようにして進んで行く。船長の船は後ろに3つの貨物船を連結しているので相当の馬力が必要だろう。まるで海を走る蒸気機関車だ。

「爺さん、あらためて紹介するよ。こいつはマリエールだ。マリーでいい」客室には何人か人がいたようだったが、その一人なのだろう。妖艶な佇まいの女性だ。

「はじめまして」しっとりした落ち着いた声だ。

「俺の仕事のパトロンってところだな。それでいいな？」と言いながらマリーさんの方を見た。

「この人とは長いつきあいで、私が昔働いていたお店のお客だったの。船乗り相手のバーね。今は私の気まぐれにつきあってもらってる人かしら」

「お抱え運転手ってどこか」と言って船長は大きな声で笑う。

「そうね。よく窓も磨いてくれるわね」となにか意味ありげに言った。

「まあ、あれやこれやで持ちつ持たれつってとこだな」

いいも悪いもお互いを知り尽くしている関係のようだ。

「爺さん、マリーと知り合いになっておくといいぜ。こいつはいい女だ」

「いい女……」マリーさんが無表情に繰り返した。

「と、俺は思ってる」にやりとこちらを見た。

「パトロンとしてね」

「金だけじゃないぜ。爺さんのこころの隙間を埋める手伝いをしてくれるはずだ」

「こころの隙間……」船長は何を思っているのだろうか。

「オルターさん、あの島に時々伺っていいかしら？」遠くに見える島を見ながら言った。

「あそこはだれのものでもないですよ。自給自足のようなところだから、マリエールさんのような人に納得してもらえるか心配ですけど」

「ははは、すっかりお嬢様と思われたようだな」船長がおかしそうに笑った。

「私はだいじょうぶ。メインランドから離れる時間さえあればいいの。必要なのはそれだけ」

「それなら、だいじょうぶでしょう。現実世界からかけ離れたようなところですから」と言うと、マリーさんが少し微笑んだように見えた。

彼女は、ずっと船窓から水平線を見ている。その言葉や物腰からはするとただ漫然とぜいたくな生活をしているというわけでもなさそうだ。お金にはまったく興味がないようにさえ見える。

「いい島だっただろ？ あれが俺の愛するウォーターランドだ」

「わかるわ、ダルビーの気持ち」

「なにもない島ですけどね」

「なんにもないから大切なものがわかるの」

「そういうことだな。メインランドは何が大切なんだかわからなくなってるからな」

「なんでもあればいいというものじゃないわ」

気がつくやうに船の振動も気にならなくなっていた。島を離れるにつれて波も高くなり、海面が巨大な生き物のようによく呼吸する。

「おっと、灰皿は？」落ちそうになった灰が船長の葉巻にぶらさがった。

「そのドアの横のキャビネットに」マリーさんが落ち着いた声で言う。

「ありがとよ。爺さんこういう関係だ。わははは」

葉巻を灰皿に置くと、船長は舵輪を両手を使って右に大きく回した。島は今まで見えていた左後方から右側に移った。まるで島に戻るように見える。その瞬間、大気がハレーションを起したように原色にフラッシュした。何が起こったのかわからなかったけど、世界の何かが入れ替わったように思えた。気がつくやうに今まで見えていた島が視界から忽然と消えていた。マリーさんは何事もなかったかのように、船窓から外を見ている。船の向っていた方向に反して、ウォーターランドでの生活がとても遠くにいつてしまったような寂しさを感じた。

第2話 遙か天空

日没の少し前、夕食の時間になった。ベルの音が用意のできたことを知らせてくれる。キッチンと言ってもいいぐらいの小さな食堂に食事が用意された。

食卓は木箱を並べただけのもので、その上に洗い立ての白いテーブルクロスがかけられている。テーブルに置かれたローソクのやわらかな明かりが、ささやかな夕べの集いを豊かな時間に変えてくれた。

乗客はマリーさんの他に3人いた。そのうちの一人はあのうさぎを背負っていた少女だった。島を楽しめただろうか。火事で島のイメージを悪くしていなければいいが。残りの二人は、やはり島便りを見てきたという夫婦連れだった。1時間ほどの食事の間、二人から島の生活についていろいろ質問をされた。うらやましいと言いながらも、あまりに都会と違った生活に驚きを隠せないようだった。とくにお金にまったく意味がないということはにわかには信じられないと言われた。

うさぎの少女のほうは口数も少なく、頷くか、相槌を打つだけのことが多く、自分から話題をつくることもなかった。まわりの大人たちに気後れしていたのかもしれない。

船の夕食は簡素なものだったけれど味付けに工夫がされていてとてもおいしくいただいた。もともと客船ではないから、必要最低限の食料しか積んでいないのだろう。詳しくは聞かなかったが、船長が料理をしている風でもなかったのも、マリーさんが腕を振るったのかもしれない。

この船にはゲストルームのようなものもないので、船首に近いところに小さな空きスペースをみつけて食後に休憩する場所をつくった。船を運転する人は船長しかいないので、船長と話せるのは操舵室にいるときぐらいしかない。船長が休む時はエンジンを止めて船が海の静寂とひとつになるときだ。夜9時ぐらいまでは船長の自由になる時間はないと言われた。リブロールにいるときのようにゆっくりはできない。

島よりもさらに視界を遮るものの少ない星空の色は、生々しい宇宙の姿そのものだった。今まで見ていた空さえも、ほんの一部でしかなかったことに気づく。空が広いせいもあって、流れ星が途絶えることなく現れては消えていく。これでは願い事がいくつあっても足りない。旅がうまくいくことと、みんなの健康をお願いをしたあとは、ただぼんやりと数だけを数えていた。100を超えるあたりからは寝る前のおまじないのようになり、意識のない世界に引き寄せられていった。

「おじゃまかしら」 うとうとしていたとき、マリーさんに声をかけられた。

「あ、こんばんは。どうぞどうぞ。すばらしい星空ですね。島でもこれほど美しい夜空は見られませんよ。粉末のような細かな星まで見えるせいか、漆黒ではなく流し絵のようなさまざまな色が見えるんですね。それが遙か天空で大きく回転するのですから」

「オルターさんは、星空を見て一人を感じるのかしら？」

「どうでしょう。たくさんの友達のほうを思い出すかな」

マリーさんからの答えはなかった。

少しして「島には長いの？」と聞かれた。

「島の住人では一番長くなりましたね」

「そう」

「定住という感覚で来る人が少ないですから」

「住んでみたいと思う人はきっと多いでしょうけどね」

「都会に長いと、島の生活にもいろいろ不便も感じると思いますよ」

「何が大切かね……」マリーさんは自問自答しているようにも見えた。

「みんな、あの島の時間を持ち帰りたいらしいですよ」

「時間を？」

「時間というか思い出というか」

「ああ、そういう意味ね」と言うと静かに目を閉じた。星の囁きに耳を傾けているように見えた。

「野焼きはいつもこの時期に？」

「野焼き？ あ、あれは火事です。大変でした」

「そうだったの……」

マリーさんからそのあとの言葉は続かなかった。こちらもなぜか遠い昔にあったことのように

思えた。

「マリーさんは、何かお仕事を？」

「いまは何もしてないわ。しなければいけない理由もないし」

夜の静寂もあってか口数も少なくなってしまう。お互いもよく知らないこともあって、その後は差し障りのないメインランドの暮らしについて聞かせてもらった。

船長はマリーさんと仲良くなっておくといいと言っていたけど、その意味はまだわからない。もしかすると、メインランドのほうでいろいろな伝手を持っている人なのかもしれない。

第3話 水の悪意

マリーさんは30分ほど夜風に当たって部屋に戻った。満天の夜空が30度ぐらい回転して船が天の川と同じ向きになったところに、エンジンは回転を落とし始め、最後にひとつため息をつくようにして止まった。その後に静寂な世界が訪れると、自分以外はだれもいないという空疎な感覚にとらわれた。それを待っていたように、色を消してうねり踊る海面が目の前に姿を現した。空と海、世界はこの二つの巨大な生き物のためにあるかもしれない。

「お、爺さんここにいたのか」仕事を終わった船長が葉巻をくゆらしながらやってきた。「星がすごいだろ？」

「きれいなもんだね。島で見るより空が大きい気がする」

船長はさっきまでマリーさんが座っていたのと同じ場所に腰を降ろした。よく見ると片手に氷の入ったグラスを持っている。グラスを目の高さにして、「これが命の水だ」と言った。

「もしかして、島の水？」

「これさえあればまた精気を取り戻せる。1日のいろんな汚れがきれいさっぱり落ちる。島のおかげだな」

「私も一杯もらっていいかな」というと、船長は大きく頷き、自分の持っていたグラスを差し出した。口いっぱいの水を一息に飲み干した。

「うまいね。いい水だ」

「わはは、いい水だな」船長はうれしそうに笑った。

「そう言えば、ボルトンのやろう、この水に感づきやがったな。よけいなことをしないように釘はさしておいたけど、あいつらはどんな手を使ってでも自分たちのものにしようとするからな、気をつけたほうがいいぞ」

「水公社のボルトン？」以前ハトポステルで送られてきた手紙のことを思い出した。

「以前、メインランドで理由もなく身体が動かなくなる病が流行ったときに、不治と思われたその病をある水で治癒できるということがわかってな、それ以来いい水があると聞くと片っ端から利権を抑えようと躍起になってやがる。ほんとうに必要な人の治療に使うならまだしも、買い占

めて高値で売りさばこうとするところが許せねえ。あいつらの後ろには金まみれのネイコノミーがあるから始末が悪い」

「そのネイコノミーというのにウォーターランドの水も狙われていると？」

「ネイコノミーというのは自然換金主義経済のことで、すべての自然を経済活動としてとらえるというやつだな。まったく人間様も偉くなったもんだ。今回の件で実際に動いているのはボルトンだ。それは間違いない。手を出すなどは言っておいたが、そんなことで怯むようなやつじゃない。くれぐれも気をつけたほうがいい。最近は水そのものがあらゆるエネルギーの元にもなるという研究もあって、まるで産業革命のころの蒸気機関のような勢いだ。このままだと世界の水はすべて誰かのものになる。もちろん水にとどまらずすべての自然が経済に取り込まれるって仕掛けだけだな」

浮世離れた島に住んでいると、そんな話はまったく耳にすることもない。それどころか水の価値すら忘れていて。それだけ水に恵まれ、水の恩恵を受けていたということなのかもしれない。

「そうだ、マリーのことだけどな、俺は船に乗っていることが多いからメーンランドに着いたら、あいつの世話になるといい。一人暮らしで暇を持て余してるし、マリーのところでやっかいになれば寝起きする場所に困ることはない。わかったと思うが、料理もうまいからな」

船長は宿泊や食事のことまで気にしてくれたのかと思うと感謝に耐えない。

「まあ、この広い世界、これも何かの縁ってことだ。あの星全部とつながろうなんて思ったって所詮無理な話だしな。こういうつながりを大切にすることだ。これが港を渡り歩く船乗りの生きる術というやつだ」

勝手な一人旅と決め込んで気楽に楽しもうと考えていたけれど、ちょっと安易すぎたことがはずかしくなってしまった。いつまでも船長頼みではいけない。

「爺さん、余計な心配はしないでいいぞ」こちらの気持ちを察したように船長が言った。

「俺に遠慮はいらない。同じ島を愛する仲間だからな。まあ、せいぜい頼ってくれ。明日は、7時には朝食だ。慣れない船旅だから早く寝たほうがいい」と言うと席を後にした。

その後もしばらく夜風に当たっていた。雨が降るように流れる流星は出向を祝ってくれているのだろうか。まだ見ぬメーンランドは自分に何を教えてくれるのだろうか。ノートの行方もさるこ

とながら、消えた記憶の何かが目覚めるかもしれないという期待もしてしまう。

寢室に戻る途中で船長に会った。望遠鏡に補助器具をつけたような道具をもって海を眺めている。聞くとセクスタント（六分儀）だと教えてくれた。星と水平線の位置関係で船の場所と向かう方位を確認するものだという。その細かな記録をつけるうちにウォーターランドに最適な航路をみつけたということだった。どういう仕組みでわかるのか詳しくは聞けなかったけれど、灯台とこのセクスタントが船長にとって命より大切なものだそうだ。最新の方位計を使ってもウォーターランドの周辺だけは正確には測れないとということらしい。

部屋に戻ってベッドに入っても、慣れない船旅のせいかなかなか寝付けず、ミリルさんに印刷してもらったノートを眺めながらメインランドに思いを馳せた。きっとコピも同じように枕元に置いているだろう。

第4話 イルカの歓迎

慣れない船旅と準備の疲れもあって、翌日は朝食のベルの音に起こされるまでぐっすりと寝てしまった。船は朝食時にはもうエンジンが全開で回っていた。頬をなでる風は朝日のすがすがしい匂いに満ちて、水面は朝日を溶かしてつくった絵の具を流し込んだように黄金色にきらきらと輝いている。

船上で迎える朝は気持ちが大らかになり、とても楽しい一日になりそうな気分させてくれる。

昨夜思ったことと逆に、朝の海は世界をひとつにつないでくれているというイメージが強くなる。朝と夜では海もまったく違った表情を見せてくれるからおもしろい。

「ほら、今ここにイルカが見えたわよ！」乗客の一人の奥さんがうれしそうに声をあげた。

それを聞いて、うさぎの少女も部屋から飛び出してきた。

みんなで船のまわりをジャンプするイルカにさわろうとするけどなかなか思うようにいかない。

船長に船を少し止めてもらおうと提案するとみんなから歓声があがった。

操舵室の船長に相談に行くと、「鮫じゃないのか？ 食われないように気をつけたほうがいいぞ」とそっけなく言われた。こんなところで止めてくれなんて言うこと自体に無理があったのかもしれない。

船長のご機嫌を伺うように「ここはサメがたくさんいるのか……」と独り言のように言うみる。

「うじゃうじゃいる。入れ食いだな」という答えが返ってきた。

「入れ食いって……」思わずその光景を想像してしまった。

船長がどこまで本気で言っているのかわからなかったけど、その口ぶりから少なくとも冗談ではないようだった。

「俺の親父は猟師をやってて、たまたま出くわしたサメの野郎にまんまと飲み込まれた」

「まさか、ミドリ鮫に？」

「そのときいっしょにいた人の話だと、海面が一瞬緑色になったって言うから、俺はミドリ鮫に違いないと思ってるけどな。もともと俺がウォーターランドの海域に入ったのは、親父を食ったそのサメを自分の目で確かめたかったからだ」

「そのときにミドリ鮫を見た？」

「いや、そうやすやすと見つかるようなやつじゃないからな。でもな、ここを定期航路として何度も航海をしている間に一度だけ小さいやつにお目にかかった。なんだか、人食いと思えないようなきれいな鮫で、こいつらが本当に親父を飲み込んだのだろうかって、見たときは信じられなかったな。なにかの間違いじゃないかと。半透明のやたらきれいな緑色の鮫だった。

「船長はそれで鮫がきれいなわけだ」

「まあな、真偽のほどはわからないが、見たという人がいるんじゃ、それを信じるほかないからな」

「俺の船乗り人生はもともとサメを探す航海に始まった。それがいつのまにか島の不思議な航路に魅せられちまって、やっとの思いでその島にたどり着いてみれば、これがまたお人よしの集まりだったというわけだ。わははは」

エンジンが、静かになり船がイルカの群れの中にゆっくりと止まった。船長は目を凝らして海面を見たあとに「鮫はいないようだな」と独り言のようにつぶやいた。

「あの島は俺を呼んでいたと思ったな。それで、定期船のコースを変えて爺さんのいるウォーターランドにも立ち寄ることにしたってわけだ」

「じゃあ、ミドリ鮫様様だ」

「たしかに。親父がサメに飲み込まれていなければ、爺さんと出会うこともなかったな。不思議な巡り合わせだ」

「俺はいつかミドリ鮫のやつを見つけて、親父の中途半端な思い出にも決着をつけたいと思ってる」

「それは、鯨を捕まえるということ？」

「そうとも言えないな。やつに正面から向かい合ったときに何かけじめがつくような気がする。おそらく以前見たような小物じゃなくて、でかいやつがいるんじゃないかと思ってる。海面を緑色に染めて人を飲み込むほどのな」

デッキのほうから「今、頭にさわったよ！」という声が聞こえた。イルカが集まっているのかもしれない。

「というわけだから、イルカにばかりに気を取られないで鯨にも気をつけたほうがいい」

船長は、葉巻に火をつけてシートに座った。

船のまわりでは、私たちが歓迎してくれているようにイルカがどんどん集まっている。かれらのうちのどれかがウォーターランドにも遊びに来てくれているのかもしれない。イルカも鯨も同じ海で繋がる友達としていつまでも仲良くしたいものだ。

第5話 旧世界への入港

船に乗ってから5日が過ぎた朝、水平線の端に町の影が見えてきた。望遠鏡で見ると、朝焼けでレンガづくりの建物がピンク色に染まっている。高台のほうまで建物があるところからすると大きな港町のような。船は最後のひとふん張りと言わんばかりに勢いよくスピードをあげる。もう30分もすればこの船旅も終わりになるだろう。さっきまで食後の休息をしていた乗客たちも部屋に戻って下船の用意をはじめたようだ。

荷物の片付けが終わらないうちに船は港の入口に着いた。港は大小さまざまな船でいっぱいだった。ヨットハーバーと漁港が少し離れてある。その間は住人が海を楽しむための公園のようになっている。漁港に近い市場では戻って来た漁船の水揚げ作業も始まっていた。一晩中漁をしていたのだろう。

船は船長の絶妙とも言える操舵技術で漁港に近い栈橋にぴったりと接岸した。すると、ハンチング帽に小さなショルダーバッグとカメラを肩からかけた男が待ち構えていた。目鼻が顔の真ん中に寄った狐のような顔で、またどこかで会ってもすぐに気づきそうだ。

「ダルビー旦那のお帰りのー！ 情報屋のルーラーでございと。よっころしよ」小柄で身の軽い男だ。手すりをひよいと飛び越えて船に乗った。

「おまえもほんとにしつこいな。水の話はしないって言ってるだろ」船長が面倒くさそうに睨む。

「いや一旦那、それは心外だなあ。あっしが、そんなケチな了見の男に見えますか？ 船長さんの無事のご帰還のお祝いに……」にやにやした顔が信用してしていいかどうかの判断を迷わせる。

「おまえのその言い草がまた胡散臭い」船長も男の相手をするのが面倒なのか投げやりにあしらいながら接岸作業をはじめた。

「まったくこれだからね。いやね、いい葉巻が手に入ったもんでね。旦那にお知らせしないわけにはいかない、そう思ってますね。あっしもいろいろ考えてるわけさ」もみ手をしながら船長の顔色を伺っている。

「ほんと口から先に生まれたようなやつだな」

「そんなこと言わないで。それもこれも船乗りのみなさんのことを思えばこそでして、へへへ」

「そんなことより、島便りのほうはどうだ？」

「よくぞ聞いてくださいました。もうとっくでき。みんな次の島便りを楽しみに待ってますぜ」

「お前が言うともうも嘘臭くてだめだな」

「嘘臭いって、旦那。そりゃあないですぜ。町はあの島の話でもちきりなんだから、そこの修理屋にでも聞いてみればわかりますって。ね、マリエールさん」

マリーさんも少しうなづくだけで、何も答えずにいつものことだというようになりゆきを見ている。

「じゃあ、新しいのを持ってきたからまた頼むな」と言って新聞を渡すと、「こちらが編集長のオルター爺さんだ」と紹介された。編集長と言われたのにはちょっとあわてた。

「こりやまた、編集長様とも知らずに大変失礼しました。ご覧のとおり口の悪い船長ですが、根はいい人なのでね、あっしからもひとつよろしく頼みます。へへへ」

「素人仕事で、おはずかしい限りです」

「オルターさんは、船長の知り合いにしとくにはもったいない方だな。口の悪さだけはうつらないよう祈ってますぜ」

「おい、余計なこと言わなくていい。ほら、葉巻代だ」

「へへへ、こりやまたたくさん。上物ですからね。またご用向きのときはあっしにご用命を」

「わかった、わかった。ところで、サーカスはまだやってるか？」

「お、サーカス見物ですか？ 人は見かけによらないものですねー」

「ばか、俺じゃないだろ。オルターさんが友達とそこで待ち合わせだ」

「あ、はいはい、そういうことでしたら、いつでもあっしにお任せください。この町でルーラーの知らないものはありませんぜ。そうでしょ、ダルビー旦那？」

「じゃあ、午後一番にここで待ち合わせだ。頼んだぞ」

「よろしくお願いします」と言うと、ルーラーという男はへいへいと調子のいい返事をしながら船から飛び降りると、別の船のほうに行ってしまった。

昼までにはまだ6時間ある。島のみんなのお土産に、港のにぎやかな情景を何枚か絵にしてもいいと思いつきながらしばらく町並みを眺めた。島にはカメラなどという上等なものはないから、いつも簡単な絵で思い出や記録を書く。

「爺さん、俺は荷下ろしをするから、それまでマリーのところに行って休んでいるといい」と言うと、マリーさんにひと言ふた言話して、連結している後ろの船のほうに行ってしまった。

横で聞いていたマリーさんに「ついて来て」と言われて、右も左も分からないまま後に従った。

市場周辺は大変な雑踏になっていた。みんな作業に没頭しているせいか、おしゃべりしている声はあまり聞こえない。ただただ、物が下ろされたり、運ばれたりする慌ただしい生活の音があたりを埋め尽くしていた。市場に並べられている箱にミドリ鮫が混ざってないかときよろきよろと見回してみたけれど、さすがに目にすることはなかった。その昔ミドリ鮫漁が盛んだったころには、ここにたくさんのミドリ鮫が揚げられていたのかもしれないと思うと感慨深いものがある。

市場を抜けると、こじんまりした小売の魚屋や漁師相手の屋台のような店が続いた。店先では水揚げの終わった男たちが、大漁に祝杯をあげていた。みんな日焼けしたいい顔をしている。

マリーさんの家は街の中心部から5分ほど歩いた港を見下ろす高台にあった。それは想像していたより大きな邸宅だった。こんな屋敷に一人で住んでいるというのはどういうことなのだろう。大きな庭を抜けて家に入ると、きれいに磨かれた大理石の床に天井に描かれた模様が映りこんでいる。ロココ調の造作が施された柱、精巧な金細工の手すり和不規則な蹴上の螺旋階段が目をつけた。

2階に上がると年代もののシャンデリアの下がった廊下があり、通路に沿って7や13の番号のドアが向かい合っていた並んでいた。そのうちのひとつに案内された。ドアに17番という番号が書かれていた。

案内されたのは、大きなベッドとソファ、それにバスルームまでついている一人で使うには大きすぎる部屋だった。

「こちらの部屋を使って。家の中はご自由に見てもらってかまわないので。お昼の用意ができた

らお呼びします」マリーさんはそっけないぐらい簡単な案内を済ませると階下に降りていってしまった。

日差しが差し込む窓を開けると港が一望できた。船から見えた高台の大きな建物がここだったことに気がついた。

建物の周辺には枝を茂らせた庭木があって、その梢を通り抜けたひんやりとした風が窓から吹き込んでくる。木々のつくる影とやさしい風にリブロールにいた時間を思い出した。

市場のほうを見ると船長の船が小さく見えた。まだ、作業は続いているようだ。大きなクレーンが連結船のほうからの荷下ろしをしている。

ノートを辿る旅がいよいよ始まる。過去をさかのぼるとを考えると、今いるこの地は旧世界とも言える。時代と文明が相互に入れ違うような旅になりそうな予感もする。はたしてどんな過去と未来が待っているのだろう。

第6話 新しく古い港

水揚げされたばかりの珍しい魚を使ったお昼をいただいたところで、マリーさんに夜までには戻ることを伝えて港に戻って散策することにした。これから自分がお世話になる町がどんなところか知りたかったし、ノートに關係するなにかがあるかもしれないと思うとじっとしていられなかった。

港に戻ると朝のあの喧騒は嘘のように静まっていた。少し歩いてみると、歴史を感じさせる古いレンガの建物に対して、道行く人の今風の艶やかないでたちが印象的だ。新旧のバランスがほどよく取れた暮らしやすそうな町に見える。駅があるところからすると、陸と海をつなぐ交通や商業の要所になっているのだろう。町の看板などからスレイトン・ケープかスレイトンという名前の港町らしいことがわかる。高台から見えた入り江は外洋の波を遮り、港をつくるのに打ってつけの場所のように見えた。

海沿いの道を歩きながら、ノートの主がボートに乗ったのはこのあたりだったのではないだろうかと思ってみたりする。手漕ぎボートで数時間という記述はいまだに腑に落ちないが、メーランドの南端のこのあたりのどこかから海に出たことには間違いない。

船長に聞いたハトポステルのオフィスは町外れだった。白い漆喰の壁は土埃をかぶっていて、お世辞にもきれいな建物とは言えなかった。ハトポステルは連絡手段のない離島との連絡だけに使われているので、その宛先は10箇所ぐらいしかない。どれも離島のようなようだった。その中でもウォーターランド宛のものが一番少ないらしく、ポストも特別に小さいものだった。

小さなテーブルに無造作に置かれたペンとロール紙を使って、無事着いた報告をミリルさん宛に書いてハトに持たせた。

定期船の泊まっている棧橋に戻ると、作業を終えた船長が椅子に腰掛けて島便りを眺めていた。

「船長、マリーさんの家すごいところだね。船長がパトロンと言った意味がわかった」

「あそこは、もともとはララ・ホステールと言って、港では有名な宿泊施設だった。眺望もいいし、このあたりじゃ一番の場所だろうな。あの頃は、船乗りが集まるバーもあって、俺はその常連客だったというわけだ。ホテルの看板をはずしてからもう10年近くになる。今はマリーの極親しい知り合いだけのためのゲストハウスだ」

「マリーさんがホテル経営をしたということ？」

「いや、彼女じゃない。旦那が地元でも名の知れた事業家で、街の名士というやつだな。あそこもその事業のひとつだった。ホテルの名前は、マリーの正式な名前ララ・マリエールからつけら

れた名前だ。旦那とはもともと歳の差もあったんだが、リアヌシティのやつらとの揉め事も後を絶たなかったし、経営の過労もたまったんだらうな。もう15年近く前の話だ」

「なるほど。それで一人暮らしを」

揉め事というのは事業に関連してだったのだろうか。事業拡大しようとするといろいろな人とぶつかることも多かったのかもしれない。

「お待たせしやした！情報屋ルーラーの到着でござい。編集長さん、準備のほうは万端で？」

「編集長というのは気恥ずかしいので、オルターにしてください」

「こりやまた謙虚なことで。まあ、ご要望とあらば、失礼ながらそう呼ばせていただきやすが」

「列車は15分後に出発なのでそろそろご用意のほうを」

「ここからさらに移動するんですか」

「エキスポラーに30分も乗れば着きますぜ。リアヌシティはこんなちっぽけな港町とは違いますからね。編集長も……失礼、オルターさんもびっくりですな」

「私にとっては、ここスレイトン・ケープでもウォーターランドに比べれば十分大都会で……」

これ以上大きい街だと思うと、考えただけで気が重くなる。

「もともとリアヌシティは小さい町だったんですがね。交易でどんどん栄えて周辺の町をすっかり飲み込んでしまいましたね。今じゃメーンランドの地方都市、特に南部地方では有数のメガロシティですぜ。もっとも中心街はずいぶん移動しましたから、旧市街は俗にいう古都として小さな箱庭のような景勝地になっちゃいましたがね」

「今日は新市街のほうに？」

「サーカスをやってる新市街まで行けば、あとは路面電車かバスでご自由に」

「必要なら、向こうの安全なところに宿をとってもいい。ルーラーの顔でそこはなんとでもなるだろう」船長が言った。

「お安い御用で。ちよいとばかりの手間賃さえいただければですがね、へへへ」それを聞いた船長がルーラーをジロリと睨む。

「30分ぐらいの移動であれば、ここに戻って来ます。都会はどうも性に合わないから、このぐらいの町がちょうど落ち着くし。マリーさんもいるから」

まさかリアヌシティがそんなに大きな町になっているとは思ってもしなかった。トラピさんは、そこで何を見つけたというのだろう。それがノートであればトラピさんもなかりの強運の持ち主かもしれない。

第7話 ウテラス様式のドーム

リアヌシティまでのエクスポーラーはすべてが自動化されていて、座席も一席ずつが繭のように分かれていた。車両案内もその座席の中でしか聞こえないので、通路に立つと全くの無音になった。風切り音すら聞こえないほどの静けさに驚く。これほどすばらしい乗り物なのに、いつ廃線になってもおかしくないほど乗客が少ないというのはどういうことだろう。誰がどういう目的でこんなものを作ったのか不思議に思う。

シートに座った人は何をするわけでもなく、目を閉じるか無表情に車窓から外を見ていた。隣の席のルーラーさんも席に座るなり急に口数が少なくなった。私とはあまり話をしたくなかったのかもしれないけれど、彼との距離の近さと車内の静けさが妙に心をざわつかせた。

線路の周辺には住宅があるわけでもなく何かの管理地のようなようだった。無機質なグレー一色の景色が車窓を延々と流れていく。そして、繰り返される景色による催眠効果のせいか意識が遠のきはじめたそのときだった。目の前に雲を突き抜けて空に届きそうなほど巨大なドームが出現したのだ。そして、矢のように疾走していたエクスポーラーは、スピードを落とすこともなくドームの小さな穴に吸い込まれるように飛び込んで行った。一瞬、万華鏡のように変化する閃光が走り、その強烈な照明に目が眩んだ。それは照明というよりも全身にカメラのフラッシュを浴びたようだった。船で島を出た後に体験したものよりも鋭角的な光の線を感じた。そして、そこを抜けたと思った瞬間、メタリックな高層建築と水晶のような不思議な構造物が天に向かってそびえ立つ未来都市が現れたのだ。それが夢にも想像しなかったドーム都市リアヌシティの姿そのものだった。姿と言うのがふさわしい、人間を飲み込んだ生命体のような印象を受けた。

リアヌシティまではルーラーさんが言ったとおり30分弱の時間だった。ただし、距離のほうは船長の船に乗っていたのときほど変わらないぐらいあったと思う。とにかくエクスポーラーの移動スピードは船とは比較にならないほど早かったのだ。

リアヌシティの中央駅は冷たささえ感じるほどに整然としていた。行き交う人もどこに立ち寄るわけでもなく、ただ黙々と目的に向かって歩いているだけのように見えた。港にいたときにはまだ行き交う人の会話が耳に入ったけれど、リアヌシティに来ると人の声そのものをほとんど耳にしなくなかった。聞こえるのはスピーカーから流れる自然の風を模したような音だけ。それにあわせるように大型の送風機から緩急のつけられた風が吐き出されていた。注意して聞くと地面の下のほうから心音のように重く繰り返す音が聞こえてきた。

「オルターさん、こういう都会はね、あっしのような無駄口をきくやつには暮らしにくいところなんです。そもそも必要とされてないわけですし。話すときは場所を選ばないとだめってことすな。まあ、よっぽどの用でもない限りは喜んで来るようなところじゃないですけど。こんなところで待ち合わせなんて、お友達も変わった方ですな」周りの目を気にするように小声で言った。

地下の音のことを聞くと、「あー、これね。えっと、その、あれですわ。大きい声では言えませんけどね。アトムパワーとかなんとかいう……このドームはウテラス様式ってやつで、あれはなんでも胎音だとかなんとか」口ごもるように耳元で言った。

おしゃべりなルーラーさんが無口になるほどにリアヌシティは合理性と効率一辺倒で管理されているところなのだろうか。その後は、ルーラーさんは何かを恐れるように押し黙ったまま、サーカス小屋までの道を案内してくれました。そして、オレンジと黄色の縞模様の大きなテントでつくられたサーカス会場に着くと、すぐに戻らないといけないと言って足早にサーカスを去った。

周囲はもともと公園になっているところのようで、大道芸の人たちがそれぞれにお客さんを集めて、得意な芸を披露していた。トラピさんたちを探すのにそれほど時間はかからなかったものの、トラピさんの姿をみつけたときは正直ほっとした。出し物は島で見せてもらったのと同じ手品だったこともあって島を出てからの緊張感がずっと消えていくような気持ちになった。ナミナさんたちのトンテケの演奏も風に乗って聞こえてくる。客寄せで公園の周辺を回っているのだろうか。島の友達がこんな都会でがんばっているのを見るとなんだかうれしいものだ。おもわず大きな拍手をしてしまい、周りの人から変な目でみられてしまった。とにかく、島と同じ手品、同じ音楽を聴けたことがうれしくて仕方なかった。

「オルターさん、お元気でしたか！ 観客の中に似た人がいると思って見ていたんですけど、まさかご本人だと思わなかったのでびっくりしました」

「急いで来ないといけないと思って、手紙はまだ見てなかったですか？」

「すみません。なかなかハトポステルを見に行けなくて。今日は時間ありますか？」

久しぶりに会ったトラピさんは、とても元気そうに見えた。さすがにこれだけのお客さんがいるとやりがいもあるのだろう。

話す時間のあることを言うと、控え室のほうへ案内してくれた。

近くで聞いた覚えのある声でしたので振り返ると、船で一緒に来たうさぎ少女が雑踏の中で誰かと話しているのが見えた。彼女もこのサーカス見物に戻ってきたのかもしれない。相手は黒いスーツ姿のビジネスマンで、手に持つ六角形スーツケースが印象的だった。

トラピさんに言われて、テントの入り口と反対のほうに別棟として作られていた控室に入る。華やかな衣装や小道具があちらこちらに置いてあった。顔を白く塗った芸人のような人もときどき出入りしている。

いよいよノートが始まりの地に足を踏み入れるという期待に身体が震えるほどの興奮を覚えた。ノートのルーツであり島のルーツである場所にすべての答えがあるのだろうか。

第8話 サーカス小屋.

「オルターさん、どうぞこちらに掛けてください。片付いてないですが、リアヌシティにはゆっくり話すようなところもないので」

この街ではあまり人が出歩いてなさそうだから、カフェのように語らう場所も必要ないのかもしれない。

「それにしても、このタイミングで来られるなんて。ほんとびっくりしましたよ。ノートさんの住んでいたと思う場所をみつけたのは、まだ昨日のことですよ。驚いたな」

「え？ 昨日ですか？ 手紙は2週間ほど前に……」

「手紙？ 僕からのですか？ それはどういうことでしょう」

「……」 事態が飲み込めるまで少し時間がかかった。

どうやらあの手紙はトラピさんが私宛に出したものではなかったということのようだ。

「でも、サーカス小屋で待つと書いて……あ！ あのうさぎ少女だ」 あわてて外に飛び出した。彼女の姿はすでにそこにはなかった。

「どうやら、別の人物が送ったものをてっきりトラピさんから私宛に送られたものだと勘違いしてしまったみたいです。火事の直後で気が動転していたのかもしれない」

「火事？ 島で火事があったんですか？」

「つい先週の話で……」 その後しばらくは、島便りを渡して火事の話とおいしい水の話の説明をすることになった。

「それは大変でしたね」

「みんなで力をあわせれば、自衛消防団でもなんとかなるものですね。お陰でみんなの気持ちが前より強くつながった気がします。それで、あの……ノートの主が住んでいた場所がわかりましたか？」 話を本題のほうに戻した。

「そうそう、本当に昨日のことですよ。明日、手紙を書こうと思っていたところにオルターさん

が現れたんですからほんとうにびっくりですよ」

トラピさんが言うには、たぶん歴史の古い旧市街のほうだろうと目星をつけて歩いているうちに、ノートに書かれていた場所に似たところをみつけたということだった。今は一部しか残っていない水路や町並み、その昔は一番栄えていた場所であることなどから間違いないと。とくにそれを確信したのは、住人の名前だという。その地区のほとんどがヤイハブだというのだ。地元の人に話を聞くとその一帯は数百年前に北方から来た移民が作った町で、ヤイハブという名前自体がメーンランドでもめずらしいとのことだった。

「どうです、オルターさん？ 間違いなくないですか？」

「たしかにぴったりですね。ここからどれくらいですか？」

「バスで15分くらいですね。今はオールドリアヌと呼ばれている歴史保存地区の一角です。指定建造物の橋があるんですけど、そのあたりがノートさんが生活していたところに一番近いような気がするんです」

向こうの様子を確認していたところに、ナミナさんが2人の子供といっしょに入ってきた

「今日は頑張りすぎて疲れちゃったよ。ほんとのこの街は大きいばかりで、歩いていてもあまりおもしろいところがないところだね。明日は……、あれー、オルターさん？ ですよね？」

「あはは、わかりましたか？ おじゃましています。みんな元気そうですね」

「元気というか、この街に染まらないようにしないとですね。あまりおもしろいところじゃないでしょ？」

「メタリックな建物のこと？」

「一見きれいなんだけど生気がないというか、みんな何が楽しくてこんなところにいるんでしょうね」と言うと、楽器を置いてまわりついている子供たちに「こらこら、子供はお話が済むまで、外で遊んでて」とやさしく諭した。

「みんな働きづめということですか？」

「それもあるし、安全な生活を得るためにすべてをドームシステムに依存してるみたいで。ここ、エゴラインという仕組みで何から何まで済ませられるんですよ。そのお陰で生活での不安は何

もないようですけどね」なんだか納得がいかないというようにナミナさんはため息をついた。

「それはそれでいいような気もしますが。エゴラインというのは何ですか？」

「説明しにくいですけど、ほら、社会基盤ってやつですよ。昔なら電気、水道と同じようなものかな。サービスや取引記録はもちろん、気持ちの高揚のようなものまで。うーん、なんて言えばいいんでしょう。意志や感情までがライン内で片付いてしまうらしいですよ」

「感情？ それはわからないな。大道芸はエゴラインと関係あるの？」

「ああ、大道芸はですね、ライン疲れをしてる人たちにとっては古くて新しい娯楽として楽しまれているんです。ここではリアルプレイって言われていますよ」ナミナさんの話を聞いていたトラピさんが説明してくれた。

「そうだね、古くて新しいタイプだね」とナミナさんが同意する。

「リアルプレイというのは、こういう場所に集まって生の人の会話を聞いてみたり、場所と時間をだれかといっしょに共有する感じですね。まあ、大道芸も一方的なやりとりとも言えなくないですけど、それでも古くて新しい交流として懐かしいみたいですよ」

交流がなくなっていると言われてみると、ここに来てずっと感じていたことの説明がつく。みんなそのエゴラインというものでつながっているのだろう。

「まあ、みんなドームの中に居さえすれば安全を約束されるし、何不自由なく暮らせますからね。とにかく全部おまかせです。便利さの代償もそれはそれで大きいと思いますけど」

「住人さんは意識していないけど、個々人の一挙手一投足がデータ化されているという話だよ。もちろん、私たちが漏れなくね」と言ってナミナさんが諦めたように肩をすくめてみせた。

「そんなことがほんとうにできるのかな」と言うと、トラピさんが「あくまで噂ではありますけどねえ」と補足した。

話を聞いていても、さすがに理解しがたいところがある。どうやって住人の気持ちまで調整できるというのだろう。

「便利さを集めていったら、たまたまそうなったというだけですね。いさかいもバランスで調整されるし、犯罪からも守られる。冤罪とかはぜったい起こり得ない」トラピさんも仕方ないとい

うように笑った。

「冤罪は起きようがないわね。どこを見ても針の穴ほどの隠れ場所もない」ナミナさんもそこは同感のようだ。

「無菌室ともいえるな。病気になりたくてもなれないからね」

「ああ、それいいかも。防菌・防虫ドームだ」ナミナさんが皮肉っぽく言った。

「となると、住民じゃない僕らも虫側か」トラピさんが虫の仕草を真似てみせた。

「この場所はどうかの？」と聞くと、「ここは仮設テントだから比較的捕捉されにくいかもしれないですね。比較的だけど。あまり、よろしくない話をしているとドームシステムに入れなくなるか、徹底したデータ分析にあうだけです」と説明をしてくれた。

「まあ、ドームはなんでもあるけど、なんにもないようなところよね」

「うんうん、それぞれ」

二人はお互いに納得したように笑っている。楽しそうなところを見ると、呼ばれて来た人間にとっては、これはこれでおもしろい話なのかもしれないと思う。子供を見ていなくてもぜんぜん心配ないのも、リアヌシティだからこそなのかもしれない。一定の収入のある人だけの閉じられたコミュニティといえるかもしれない。

それにしても、これだけの施設を管理するエネルギーコストも相当なものだろう。

それをトラピさんに聞くと「アトムパワーが使われているようですよ」と教えてくれた。100%再生する循環エネルギーシステムだという。自然エネルギーを管理してコントロールする仕組みなのだとか。島で隠遁生活をしていると、何から何まで知らないことだらけで驚くことばかりだ。

トラピさんたちと話し込んでいるうちに、気がつくの外は夕暮れになっていた。とは言っても、人工の時間設定なので、時計に合わせた景色ということらしい。人工なのに自然よりもきれいに見えるのをどう理解すればいいのか、ほんものが何かわからなくなってしまう。

「オルターさん、よかったらオールドリアヌに行くのは明日にしませんか？明日なら僕たちも休めるのでご一緒できますし。みんなでいっしょにノートさんのふるさとを散策しにいきませんか？」

「ああ、それは助かります。とにかく土地勘がまったくないから、これじゃあ、子供のお使いになってしまいそうだし」

「あはは、なるなる」ナミナさんが笑っている。

「じゃあ、少し早いですが明日の7時でいいですか？ 駅で待ち合わせにしましょう。あそこからバスが出ているので」

「わかりました。あまり遅くなると船長たちが夕食を待っているといけないから今日は早めに引き上げることにします。明日は麦わら帽子を忘れないようにしないと」

「美しい都オールドリアヌに行くんだよ」ナミナさんが双子に話している。子供たちも旅行と聞いてうれしくてしかたないようだ。

その後、駅まで送ってもらい、一人エクスポーラーの上り列車に乗った。繭に座ると、眼前の透明なディスプレイに今日の行動が文字データとして表示された。最後に確認ボタンが出たので押すと、またのお越しをお待ちしていますという文字が返されてきた。

そしてしばらくすると、何もなかったかのようにディスプレイは消えた。

第9話 ホテルの夕食

スレイトン・ケープに帰ると日はすっかり落ち、行くところもなかったの、ハトポステルだけ確認してまっすぐにララ・ホステールに戻った。

ドアを開けるとエントランスのソファでマリーさんと船長が話していた。

「船長、オルターさんが戻られたわ」

「お！無事でなによりだ。こりゃ生還を祝って祝杯だな」満面の笑みで迎えてくれた。

生還は大げさだけど、実際このホテルに戻ってみると、あらためてさっきまでいた世界との違いに愕然とする。

「船長、あそこは私みたいな者には大変なところだね。ずっといたんじゃ身が持たない」

「俺は身が持たないというよりもお尋ね者だからな、入れてさえもらえない。入れなくて上等だ。わはは」船長はそれを喜んでいるようにみえた。

スレイトン・ケープやウォーターランドのようなところに住んでいる人間がリアヌシティに行くと、お尋ね者になってしまうというのわかる。自由きままにしていると、なにかにつけて目をつけられてしまいそうなところだった。すべての考え方と基準が違うのだからそれはそれで仕方がないだろうけれど田舎者にとっては釈然としないものがある。

「お食事はどうされます？」とマリーさんが疲れを気遣ってくれる。

「お願いしていいですか？　ずっと移動していたのでさすがに」

「爺さん遠慮しないでいいからな。俺が案内した客はすべてフリーパスだ。な、マリー？」

船長は、昼間買った葉巻を取り出すと、いつものオイルライターを使って火をつけた。

「今度ウォーターランドに来られたときは、しっかりお返しさせていただきます」と言うと、マリーさんは「気にしないで」とにっこり微笑んで席を立った。

奥の調理場のほうから「食べられないものはあるのかしら？」というマリーさんの声が聞こえたので、なんでもいただきますと答えた。

「それで、爺さん、リアヌシティのほうはどうだった？ えらいところだろ」

「いやあ、想像もできない街だね。あれは街じゃなくて、なんというか.....大きな生き物に飲み込まれたようなと言うか」

「まったくだな。俺も5年以上行ってない。あれを暮らしやすいというやつらの気がしれないな。年々でかくなってやがるのが信じられない」

「ドームが大きくなる？」

「メインドームがでかくなる時もあるし、衛星ドームができることもある。今時のやつらはああいうところがいいらしい。まったく情けないやつらだ。事業運営はドームコントラクションという半官半民の会社がやってるんだが、あの水公社ボルトンも同じ系列ってわけだな」

「考えようによっては、ああいう生活が一番安全なのかもしれないけどね」

「その代わりに、失うものも多いと思わねえのかな。俺にはさっぱり理解できないな」

「どうみても、私や船長やマリーさんには合わないだろうけどね」

明日、行ってみないことには何もわからないけど、オールドリアヌはノートの主がいたころの面影を残しているのだろうか。そこがドーム都市の救いになっていることを願わずにはいられない。彼が生まれた地を離れウォーターランドに行ったころに今のようなになる兆しがあったとは思えないけど、まったく関係ないことでもなかったような気もする。町が合併するという話もあったことを考えると、大きくなるには大きくなるだけの理由があったのだろう。

「リアヌは、もともとあんな街じゃなかったんだが、自然主義経済のネーコノミーにいいようにやられちゃったな。エクスポーラーもやつらが権益を得るためにつくっただけだからな」

「そういうことなんだね」

「線路沿いの小汚いグレーに整地されたところが、利権を得るための既成事実として押しえられたってわけだ」

「それで、誰も乗らないと？」

「まあ、そんなとこだな。ただ、リアヌはあれに乗らないことには入れなくなってるけどな。そうじゃなければ、あんなもん乗る理由はないだろうな」

「なるほど」

「ただ、あのドームのなかにノートのやつがいたとなっちやあ、検閲特急のエクスポーラーで行くしかない。まったく、うまくいかない」

「そういえば、ウサギの少女に会ってね。ウォータランドで読んだ手紙はどうも彼女宛のものだったらしくて。トラピさんに会えたのはほんとに運がよかったよ」

「なんてこった。あの子、そんなこと何も言ってなかったな。サーカス見物ときたか」

「ビジネスマンのような男と話してた。入居手続きでもしてたかな。」

「ボーイフレンドとサーカス見物なんじゃねえのか」

船長はうさぎ少女には端から興味はないようだ。

「マリーのいるときにはあまり話せないが、あいつの旦那もリアヌの利権主義者と戦った一人だ。あの旦那がいなかったらオールドリアヌさえ残らなかったかもしれないな。ナーシュはこの町のためにがんばってた。そんな男がある日突然町から消えてしまったんだからな。生死さえもわからないままの別れていうのはきついだろ？」

マリーさんが船の中での言動がひとつひとつつながってきたような気がした。今でも、この大きなホテルを一人で守っている理由もわかる。

「明日は、そのオールドリアヌのほうにトラピさん達と行くことになったよ。やはり、そこにノートさんの住んでいたところがあったらしくて」

「それはよかったな。まあ、余計なことはしないことだ。おとなしくさえしていれば、奴らも手出しはできない。一応、プライバシーが一番強い権利であることはエリア憲章でもうたわれているし。まあ、ブレイン・センターから外にはデータは出しませんというだけの話で。意味ねえけどな」

「お食事の用意ができたわ」マリーさんの声が聞こえた。

今日は1日歩いていたので、お腹も空いていたこともあるけれど、それ以上にマリーさんの料理がすばらしくおいしかった。ホテルをやっていたときもおもてなし料理をつくるのが楽しみだったという。この料理を忘れられないでここを訪ねる人がいるというのもわかる気がする。港を見下ろせる高台でいただくマリーさんの料理は極上の時間を提供してくれる。

「オルターさん、向こうはどう？」しばらく食事をしたところで、マリーさんが聞いてきた。

「とにかくあんな巨大な都市になってるとは思ってもみませんでしたよ」

「そうなのね」あきらめたような言い方が寂しそうだった。

「こっちは、でかいから巻かれるってわけにはいかないからな」船長が大皿の海老料理を取りながら言った。

「エクスポーラー周辺はリアヌの権益地区になるのは聞いたと思うけど。もうそこまで近づいてきているの。誰にも止められない」

「マリー、止められないというのは諦めがよすぎないか。俺らにだってまだチャンスはある。ドームコンストラクションの大気利権とボルトンの水脈利権が一致してるからめんどろだけどな。このスレイトン港まであいつらの手に落ちると、あとは海を超えて拡張して行くのは時間の問題だぞ。ウォーターランドだってどうなるか。それだけは許せない。ナーシュがオールドリアヌを守ったように俺たちもこの港と海を守るんだろ。そうじゃないか？」

「でも、オルターさんはノートのことだけを考えていて」マリーさんがこちらを向いて諭すように言った。

「そうだな。そこになにか答えがあるような気もするしな」

3人で食べる夕食はとても楽しい時間だった。ここを船長に紹介してもらってよかったと心から思った。

食後はすぐにシャワーを浴びて、ほてった身体を冷ますために窓を開けて風を入れた。しばらく何もする気になれなくて横になって港の夜景を眺めた。

この風いだ海を見ていると、昼間見た光景がすべて嘘の世界のように思えてくる。ウォーターランドのようななにもない辺境の地とリアヌシティのようなすべてが揃う未来都市とどちらが理想の世界なのだろうか。何が正しいのかさえもわからなくなってくる。

そろそろ島を出て一週間になる。手紙は明日には届くだろうか。それを見たミリルさんが、みんなに無事到着をしたことを知らせてくれている姿が目につく。

島のことを考えているうちに、コピにもらった虹の石を思い出した。袋から取り出してみると、光の加減か島にいるときに見えた虹が見えない。昼間でないとだめなのかもしれないと思う。明日、夜が開けたらもう一度見てみよう。虹を見れば、ふらふらと落ち着かない不安定な気持ちも少し楽になるような気がする。そうすれば、またあのリアヌシティへ行く元気もでるだろう。

寝るにはまだ少し早かったので、明日の準備もかねて、鞆から印刷して来たノートを出した。島を離れてみると、ノーキョさんの漉いた紙の手触りとインキの香りがとても懐かしい気持ちにしてくれる。

***** ノート *****

新聞社の校正に疲れると、近くの公書館の庭に休憩に行くことも多かったことを思い出します。今、書いているノートが本にでもなっていていつかあそこの書架に入れてもらえるとうれしいだろうと思ったりすることもあります。

リアヌシティは移民してきた祖先の血の滲むような努力によってつくられた街なので、住む人みんなが自分の生きた証をそこに残そうとします。あの地を離れて思うのは、私の存在したことを証明してくれる唯一の場所だったということです。いずれ、この島がそうなるのかもしれませんが、生まれ育った町への郷愁は簡単には消えそうにはありません。

公書館の庭には移民を記録した年月を記録した石碑があって、その横に昼寝をするのにちょうどいいお気に入りの石のテーブルがありました。

公書館に行くといつも顔なじみの館長が声をかけてくれました。館長と言っても、事務員と二人で文書管理しているだけなので、結構時間に自由がきく仕事だったのかもしれませんが。

仕事を休むことを決めてから出発までの間、毎日のように仕事帰りに立ち寄りしましたが、ミドリ鮫漁の話以外にはとくに得られるものもなかったのは前にも書いたとおりです。館長に役に立てなくて申し訳ないと恐縮されたのが昨日のように思い出されます。もちろん館長には何の責任

もないわけですが、今思うと、自分たちの町の歴史を残しているという仕事に対する強い思い入れがあったのでしょうか。

館長のそんな気持ちに応えるためにこのノートを書き記したと言っても過言ではないかもしれませんが。だれも知らない土地の紀行文をまとめて感謝の気持ちとして寄贈したいと思ったのです。あのとき自分のことのように親切に面倒を見てくれた館長のために。それが私たちが生まれ育った町へのお礼にもなるような気がしました。

***** ノート *****

彼の思いは、館長に届いたのだろうか。もしかして、失われている残りのページがすでに公書館に届けられていれば、それはそれでうれしいことだ。ノートに託された思いの半分はもう叶っていることになるだろう。もしそうであれば、今回持ってきたノートも寄贈として受け取ってもらえると嬉しい。ノート書いた人の夢を叶えることも自分の役割のような気がするのだ。

港の明かりが少しずつ消えて、街灯が見えるだけになっている。街灯だけになるとしなやかに湾曲した入江の形がとてもきれいだ。それは、外海から訪れる人たちを優しく受け入れるためにもっとも適した形に見える。

深夜には漁に出る漁師でまたにぎやかになるのだろう。それまでのつかの間の休憩というところか。

***** ノート *****

リアヌシティのたくさんの水路は、私たちの生活を支えるものでした。朝夕になるとたくさんの舟が行き交い、各地の産物を市場に運び込んで来ます。南は港と町をつないでいたので、海のものもたくさん入って来ました。いつの日かこの島のピーチプルを市場に届けられればと思うこともあります。

木立の間を抜けて、山のほうに向かって入っていくと、湧き水でできた大きな湖に出ます。そこは町のみんなの憩いの場所になっているところで、家族や友達とピクニックに行くこともありました。両親の家業を継いで牧羊をしている兄ともよく訪れたものです。

その湖でもこの島に負けず劣らずきれいな水が湧き出していました。私がこの島に抵抗なく住むことができたのも、生まれ故郷でも水そのものが近い生活だったせいもあったかもしれません。

祖先たちがリアヌシティの永住の地としたのも、あの湖があったからだと思います。そして同じように、私もこの島の水を飲んだときに二つ目のふるさとになると感じたのです。水との相性はそれほど大切なものなのだと思います。

***** ノート *****

明日は彼の生まれ育った本当のリアヌシティに足を踏み入れる。公書館が残っていれば立ち寄ることにしよう。当時の記録が保管されていれば、彼の生きた時代の様子も詳しくわかるだろう

。

ノートを鞆にしまい、カーテンを閉めてベッドに入った。窓を見ると降り注ぐような星空が見えた。

第11話 同じ川

2度目のエクスポーラーは早朝だったためか、ほかに乗る人もなく、たった一人の乗客になった。マリーさんがみんなで食べるようにとお手製のサンドイッチを用意してくれた。ほんとうに面倒見のいい人だと思う。見聞きしたことを忘れないようにと新しい手帳も渡された。ミドリの表紙にスレイトンの紋章がついたものだった。その上、ご主人がよく使っていたという万年筆までいただいてしまった。いくら資産があるとは言え、思い出の品までいただくときさすがに恐縮してしまう。この手帳に見聞きしたことをきちんと書くことがマリーさんへのお礼になればと思わずにはいられなかった。

前と同じように車外のグレーの景色を見ていると、時折大きなタンクが置かれていることに気がついた。同じグレーなのでスピードが早いこともあって、この前はわからなかったのだけれど、目が慣れると定間隔で置かれているタンクの多さに気づきさらに驚いた。

タンク以外に何かないかと思って窓に顔を押し付けるようにして見ていると、赤い制服を着た年老いた車掌が車両に入ってきた。ちょうどいいと思い尋ねてみると、よく聞こえなかったのか、少し間を置いて返事があった。「お客様、あれはドームのエネルギー安定のために使用する大量の水を貯めておくタンクでございます。このエクスポーラーと併走するように地下水脈がありまして、それがドームシステムの安定稼働を支えているのです」と堅苦しいほど丁寧な口調で説明してくれた。どうやら、ドームの飲料水として使われているわけではないようだ。

2回目のせいか、リアヌシティのセントラル・ステーションまではほんの少しの時間にしか感じられなかった。巨大なドームは港から目と鼻にあることをあらためて感じた。

駅につくと、乗り換え口近くにいたトラピさんとナミナさんたちの姿がすぐ目に入った。どうも、外から来た人間は整然としたこの街では特別に目立つようだ。それがちょっとおかしくもあった。

「オルターさん、なんだか目立ちすぎー」と手を振って近づいてきたナミナさんが言った。

向こうから見ると私のほうが逆に目立のだろう。一人ふらふら降りてくる挙動不審な乗客なのだからそう見られても仕方ない。いずれにしても、妙に目立つお上りさんのツアーのはじまりというわけだ。

ナミナさんが、「今日はたのしいピクニックですよ。天気もいいし」と双子の二人に話しかけている。

「オルターさん、バスはこっちです。あの階段の下に乗り場が見えますか？」トラピさんが先導してくれて、その後をあひるの行進のようにペタペタとついていく。

しばらくすると、バスがどこからともなくすーっと現れた。水を分解した水素を使っているバスだった。メーンランドで水の価値が高まっているというのは、こういうところとも関係する話なのだろう。動き出してみるとエキスポーラーと同じようにほとんど動力の音が聞こえない。目を閉じると移動していることさえ忘れてしまうほどだ。この静けさはなれない者にとっては、少し落ち着かないところがある。

町並みには特別見るべきものもなく、前日のメタリックな高層ビルのイメージに変わって、熱帯雨林にでもいるのかと見間違えるほどだ。緑以外に目に入る建物はほとんどない。遠くから見たメタリックな高層建築も、近くにくるとまったく視界から消えてしまう。地面は苔のようなもので覆われ、その下には水が見えている。どうやらドーム全体が水の上に浮かぶ睡蓮のような構造になっているようだ。いずれにしても、信じられないほどの美しい木々の緑に圧倒される。これがよくないこととはとても思えない。

オールドリアヌのあるエリアは、ルーラーさんの言う箱庭のようなものでは決してなく、違和感を感じることもなく自然に石造りの街へと入って行った。境界や入口のようなものが設けられているわけでもなかった。

「オルターさん、ここがノートさんの生活していたリアヌシティです。どうです、今のリアヌシティとは大違いでしょ」トラピさんが外の景色を見ながらうれしそうに言った。

「ここなら、私も住んでもいいわ」ナミナさんもすっかりお気に入りのようだ。

町の中心部と思われる小さな橋のところに着いたところでバスを下りた。

「これはまた、趣のある橋だね。橋脚が眼鏡になっているところも愛嬌があっていいし」

「オルターさん、驚かないでくださいよ。この川なんていう名前だと思います？」

「あれ、ノートに書いてありました？」

「なんと、チャルド川！」

「ええー、ほんとうに？信じられない……」思わず口を開けたまま川に見入ってしまった。

このことを聞いただけで、涙が出そうなほど嬉しかった。それは、300年の時を隔ててノートの主となにかが繋がった瞬間だった。ウォーターランドの川と同じ名前の川がオールドリア

又にあった。ノートの主の誰にも話せなかったふるさとへの思いがいやなほど伝わった。そして、その場所に今自分自身がいる喜びは言葉にもならなかった。

第12話 守られた村

橋に続く道は石の敷き詰められた細い道で、何百年ものあいだ人や荷車が往来したために、真ん中が少し窪んでいる。歴史保存地区というだけあって、石造りの古い街並みが延々と続く。ここにノートの主が実際に暮らしていたと考えると感慨深いものがある。今にもその人が路地から出てきそうな気さえする。広場をみつけては空虫がいた場所はどこだったろう、建物を見てはカフェや文具屋はここだったかもしれない、そんなことを考えながら歩いていた。そうしていると、苔むす石だけの町が色づいて見えてくるから不思議だ。

歴史保存地区と聞いて、人が住んでない場所と思い込んでいたけれど、どうやらそれも思い違いだったようだ。ときどき農作業をしたり、洗濯をしたりしている人がいるのだ。

町の生活を知りたくて、小川のほとりで洗い物をしている女性に声をかけてみた。

「ちょっとよろしいですか」

「はい？」面倒そうにこちらを振り向いた。

「こちらは住んでいる方もいらっしゃるんですね」

「そりゃそうだよ。みんな生活してるしね。遊んで暮らしているわけじゃないよ。」

「これは、失礼しました」

「毎日同じことを聞かれるもんでね。住んでることがそんなにおかしいものなのかね」

「ああ、そりゃそうですよね。町に人がいておかしいなんて道理はない」思わず苦笑いをしてしまった。

トラピさんと、ナミナさんがこちらを見て笑ってる。

「みなさん、代々こちらに？」

「ここの住人はここ以外に住んだことなんてありゃしないさ。生まれてから死ぬまでこの町といっしょだ……」

「町から出た人はいないんですか？」

「さあね。そんな人間いるのかね。聞いたことはないがね」

「そうですか。外でこの町の出身だという人がいたと聞いたもので」

「へえ、そりゃあ結構なことだね。そんなお方は村に戻ることはないだろうけどね」

洗い物の邪魔をしたせいか、どこことなく棘を感じる話し方だった。こういうのが人間味であるなら、歓迎すべきことなのだろうけど。

「あの、このあたりに公書館ってありますか？」

「コウショカン？」

「本やいろいろな資料の置いてあるところなんです」

「ああ、歴史文庫のことかい？ それならこの道の先に行けばあるよ。ものの5分も歩けば着くさ。悪いけど、洗い物を片付けないといけないから、今は案内できないよ」

ぶっきらぼうな話し方をする人だったけれど、この人はいい人だったかもしれない。こちらが仕事のじゃまをしたのがいけなかったのだろう。

「オルターさん、その川の辺に舟工房があるでしょ」トラピさんが、指を差した。

木立に隠れて見えなかったけど、言われてみると木造の古びた建物の中に作りかけの枠だけの舟が見える。2、3人が乗れる程度の一本マストの小型の舟だ。細長い楔のような見られない形からすると、当時と同じ製法で作られているものなのだろう。

「こういう素朴な舟が当時の生活を支えていたんだろうね。どこかで乗れるところがあったら試してみたいね」

「それ、いい考え。あとでみんなで乗りましょ。この町は運河の町だから、舟から見ないと何もわからないよね」ナミナさんが言うと双子が飛び跳ねて喜んだ。

「なんだか、ほんとうに観光旅行みたいになってきましたね」トラピさんがこちらを見て笑っている。

「せっかくこんないいところに来たんだから楽しまない手はないですよ、ねえナミナさん」

「それで、あそこに見える少し大きな建物が新聞社だったところではないですかね」トラピさんが言った。石造りの建物はすべて数百年の昔からあるものらしいから、新聞社の建物がそのまま残っている可能性は十分あるということだ。

「あの、壁の半分ない建物のこと？」

近づいてみると、屋根はすっかり崩れて、苔むした石の壁だけがある小さな公園だった。壁には町の歴史と歴史保存地区についての説明の書かれた木のプレートがひとつ掛けられている。読むとそこにナーシュさんの名前があった。ナーシュ・ヤイハブ氏からの寄贈と書かれている。マリーさんのご主人のことだろうか。この建物を寄贈したということのようだ。旦那さんはほんとうに資産家だったのだろう。もしかするとマリーさんもここに町に住んだことがあったのかもしれない。

入口の椅子に座っていた人に聞いてみると、ナーシュさんがこの町を残してくれたということを手振り手振りで一生懸命説明してくれた。町を守るために私財を投げ打ってくれたことを心から感謝しているという。話を聞くと、どうやらオールドリアヌはリアヌシティのドーム外に位置する自治区のようになっているらしい。その権利を守ってくれたのがナーシュさんだというのだ。この人にとっては村を救った英雄なのだ。その人が失踪して久しいというのだからさぞや心配なことだろう。彼の身に悪いことが起きていないことを祈らずにはいられない。

「オルターさん、ここで一休みにしませんか？」トラピさんの声が聞こえた。見ると建物の端のほうにできた木陰の涼しいところのテーブル席に座っていた。

さっそく、マリーさんのつくってくれたサンドイッチをテーブルの上に並べた。

「あら、おいしそうなサンドイッチ。オルターさんがつくったの？」ナミナさんがびっくりした顔で見ている。

「まさか、まさか。いただきものです」

「やだ、オルターさんも来て日も浅いのに隅におけない」

トラピさんが笑いなが「これが新聞社の跡だとしたら、この辺りに仕事机があったかもしれないということですよ」と言った。

「そうそう、ここで例の古い手紙を読んだというわけだから、ノートさんの旅のはじまった場所だよ」と言うと、トラピさんは真剣な顔をして周辺を見回した。

「この新聞社はいつごろまであったんだろう。当時の新聞なんかも残っていたりするのかな」

「公書館に行けばきっとありますね」

ナミナさんと双子はノートのことも詳しく知らないので、私たちの話には興味ないとばかりに、きれいな花の咲いた庭をくるくる踊るようにしながら回っている。

ウォーターランドよりも北に位置するリアヌシティは気温が少し低く、夏の時期にもかかわらず、春先のように穏やかな陽気だ。屋外で食事をするのにちょうどいい。

ノートの主がウォーターランドなら住んでもいいと感じたように、ここオールドリアヌならナミナさんも言ったように住んでもいいと思った。どちらも同じようにすばらしい。それでもこんなに美しい故郷を後にしたのは、リアヌシティが今のようになりそうな予感があったのかもしれない。

耳元を一筋の風が吹き抜けたときにどこからか「ソダーさん、ソダーさん……」と呼ぶ声が聞こえた。あたりを見回して見たけれど、近くにトラピさんとナミナさんたち以外にまったく人影はない。ソダーさん……どこかで聞き覚えのある名前だ。こんな景色の場所で聞いたような覚えがある。あれはどこだったのだろうか。

第13話 湖面の幻影

食事が終わると、すぐ近くの水路が交差するところにボート乗り場をみつけた。まず最初に大きな案内板の出ている湖のほうに行ってみることにした。

船は水路に合わせるように細く、その分長かったけれど、3人も乗ればいっぱいになり、2組に別れて分乗することにした。トラピさんが帆の操作を試してみたけれど前に進むこともままならず、結局オールで漕ぐことになった。

「お客さん、どうでしょうか。チャルド川のトラピ・ボートの乗り心地は」と案内人になりきったトラピさんが聞いてきた。

「いやいや、トラピさんの船頭さんは最高ですよ。これはもう、ノートさんのいた町に違いないですね。景色がどうのこうのというよりも、水と空気が知らない土地とは思えない。彼もウォーターランドに着いたときに同じことを感じたんだと思いますよ、きっと」

「そうなんですよ。なので僕も、もうここ以外に考えられないなって」

「これがドームの自治区じゃなければどんなにいいところだったか」ナミナさんが残念そうに言った。

欲を言えばそうだけれど、ナーシュさんによってこの町が守られただけでも神様に感謝しなければいけないだろう。オールのかくゆっくりした水音を聞いていると、それこそ天上の世界にいるような気持ちになる。人が自然と共生している世界というのはこういうことなのだろう。

「あ、見えますか？ あれが、湖ですよ」

言われた方を見ると、木立に囲まれるように流れるチャルド川の上流が少し開けて見えた。そこがノイアール湖だった。

「あの湖、湖底まで見えるほど透明度が高くて、それが名前の由来だそうです。ノイというのは透明という意味と吸収という2つの意味があるらしくて……」

「吸収？」

「吸い込まれるほどきれいってということなんですか？」

「ああ、無色透明でなんでも受け入れるみたいな感じなのかもね」

「あら、それっていいですね。ドームの何も”ない”感じとは違う豊かな感じがするわ。どちらも同じ”ない”なのに何が違うんだろう？」巧みなオールさばきで並走していたナミナさんが不思議そうに言った。

「なにも”ない”にも、いろいろな”ない”があるってことだねえ」と言うと、「奪われているのと、無垢の違いじゃない？」とトラピさんが言った。

「それだ。それで純真無垢な私はこっちのほうがあってるってことなんだな」

それを聞いてみんなで大笑いになった。ナミナさんもおもしろい人だ。でも、ほんとうに彼女は純粋な人のような気がする。きっと、自分の気持ちに素直に生きているんだろう。

湖は想像もつかないほどたくさんの光にあふれていた。それは、湖面から世界を照らす無数の光の粒が生まれ出ているかのように見えた。なにもないところから世界のすべてのものが生まれる不思議を感じさせる幻想的な光景だった。それほど神聖な輝きに包まれていたのだ。

「あれ、オルターさん、シャツの下、胸元が光ってる」と向かい合って座っていたトラピさんが声をあげた。

「え、どこどこ？」手探りで探すと、コピからもらった虹の石だった。あわてて首からはずすと、確かに光を発しているように見える。

「ずっと光ってた？」

「どうでしょう。今気がつきましたけど.....光のいたずらなのかな」

それを聞いたナミナさんが船を寄せて不思議そうに石を覗き込む。

「あれ、虹が見えますよ」

「そうそう、この石ね、虹が見えるんですよ」

「すごい、すごい。こんなきれいな石、見たことない。ほんとに虹が出てるよ」

突然輝き出した石を見ていると、今度は揺れる湖面の上にコピが見えた。ウォーターランドの緑の絨毯の上で蝶々を追いかけているように見える。それもその場所はこの前火事になったところだった。信じられない出来事に思わず目を擦った。コピの姿は波間に上る陽炎のようにゆらゆ

らと揺れている。

「トラピさん、見えます？ あそこ」湖面を見るように促した。

「お、コピちゃん？ え、なんでだ？」

「えー。これどういうことなの。なにここ！」ナミナさんが驚いて声をあげた。

「わからない。この湖普通じゃない。それとも石のほうが普通じゃないのかな」

みんなで唾然として見ていると、太陽が雲に隠れ、石の虹と水面に見えたコピの姿もゆっくり消えた。

「なんていうこと……目の錯覚じゃないよね？」ナミナさんの興奮が収まらない。

「ここ、何かがあるんでしょうね。超常現象っていうのかな」

「人智の及ばない自然の力か……」一人つぶやいた。

やはり、ここリアヌオールドには何かがあるという思いが一層強くなった。それがノートの主と関係あることなのかどうかはわからないけど、ウォーターランドとオールドリアヌはきっと何かで繋がっているに違いない。

湖面に見えたコピは元気いっぱいだった。あれは今のコピを投影したものか、自分たちの記憶の断片が表出したものか、まるでわからない。そう考えているうちに、この湖そのものがなにかの意識を持っているのではないかとさえ思い始めていた。

雲から太陽が現れて、また石から虹が現れた。あわてて湖面を見たけれど、さっき見えた映像は二度と現れることはなかった。

湖から川を下って船着場のほうに戻る途中に公書館の案内をみつけた。川の中州のような場所に建てられていて、まわりとは水路で切り離されたような場所になっている。木立に囲まれた小さなお城を守る堀のようにも見えなくもない。堀を渡す橋もかかっていないので水路から見える看板があっても誰でもを招き入れる場所というわけでもなさそうだ。船着場のようなものもないので、船から降りるのにも手こずるようなところだった。さっきの女性が言ったとおり、建物の入口の看板には公書館ではなくリアヌシティ歴史文庫と書かれていた。古い石の壁には公書館としっかり彫り込まれていたもので、以前はそう呼ばれていたことは間違いない。看板がなければ、石造りの納屋か何かの作業場にしか見えないかもしれない。

重い一枚板の扉を押して入ると、天井に届きそうな書架が隙間もなくびっしりと並んでいた。それぞれの棚は今にもこぼれ落ちそうなほどの本であふれている。部屋は古い本の枯れた匂いで満ちていて、当時の空気がそのまま閉じ込められているようだった。ゆらゆら揺れる蠟燭に照らされる書架を見ていると移ろいゆく時間と、それをひとつ残らず記録しようとした人たちの強い思いを感じる。室内にはとくに受付や案内表示があるわけでもなく、管理する人の姿もない。もしかすると、観光用に開放されているのではなく、住民のためだけの施設なのかもしれない。

棚の上の方を見るための階段がいくつか掛けられている。全部を見ようと思うとどれだけ時間がかかるのか想像もつかない。前にもここに立ち寄ったというトラピさんは勝手を知っているせいか、もう目指す棚の前に立って本を開きはじめている。どういう配列になっているのか説明してくれないところをみるとトラピさんもまだよくわかっていないのだろう。

石で造られた建物の中は冷んやりとして、外の音もまったく聞こえない。人の息遣いが聞こえるほどに静かだ。館内には、年代物のテーブルと椅子がひとつ置かれているだけで他にはなにもない。どの本も数百年の年月を感じさせるのに十分なほど変色し、中には手に取った瞬間にぼろぼろと崩れてしまいそうなものもある。

「これ、どういう配列なんだろう？」ぐるぐると見て回っていたナミナさんがまわりを気にするように小さな声で囁いた。

「歴史とか、生活とか、人物とかでわかれているみたいですよ。問題はその位置と境目がどこのかがわからないということ」トラピさんが困った顔をして答えた。

「そうか、一応分かれているのね……」

数冊続けて見てみると何を分類した棚なのかわかるのかもしれない。マリーさんにいただいた

緑のノートに少しずつ書き留めてみることにした。

しばらくすると、ドアが開いて人が入る気配がして、まっすぐ部屋の奥に向かった。

地元の人に聞くのが早いと思い姿が消えた棚の裏を覗いた。ところがそこには、男の姿はなく、数百年の間なにごともなかったかのように静かに本が並んでいるだけだった。

「さっきの男の人、出て行きましたか？」入り口のほうにいたナミナさんに聞くと、知らないという返事だった。一瞬、みんなが合わせたように声を沈めた。そこには永遠とも思える静寂があるだけだった。

ナミナさんと双子は、30分もするとさすがに古書だらけの密室に飽きてしまったようで、本も見ないで手遊びをしている。

「しかし、この蔵書はすごい」

「ほんとですね。これを見れば、誰でも大切に守ろうと思いますね」

「トラピさん、どこかに歴史の棚ってありました？」

「僕も探しているんですけど。この蔵書すべてが歴史そのものみたいなものだから、歴史編纂のようなことをあえてする必要がなかったのかなと思ったりもしますね。歴史って権力者のために書かれるって言われるじゃないですか。意図的に歴史をつくる必要がなければ、この蔵書だけで十分かもしれない。えっと、ここに地図の類のものがまとめてあるんですけど、ノートさん書いた記述と一致するものをみつけられれば彼の生まれた時代がわかるんじゃないかと思って」

「カフェとか雑貨屋とかを探す？」

「それとか、新聞社」

「それはいい考えかもしれない」

そのあとは1時間ほど二人で地図の棚を読み漁った。

第15話 消えた男

その後、公書館に入ってくる人はだれもいなかった。棚を2段ほど見たところで、いつまでも果てることのない作業の先行きがまた気になり出した。そうすると消えた男に話を聞けなかったことがどうにも悔やまれる。

「しかし、人が突然いなくなるかな.....」思わず口をついて出た。

「気がつかないときに出て行ったとか？」自分を納得させるように横にいたナミナさんが言った。

でも、そのナミナさんはずっと入口の横にいた。

「もしもし.....だれかいませんか？」とどこかにいるかもしれない男に向けて声をかけてみたが、誰からも返事はない。狐につままれたような気分だ。気分を変えるために別の棚を見ることにした。

双子がつまらなそうにしているのを見て、ナミナさんが背中を押すようにしていっしょに出て行った。子供にとってはなかなか退屈な場所なのだろう。

「この棚なんかは町の風土や風物詩に関するものを整理しているように思いませんか？」トラピさんが言った。

「なるほど、それで気候や季節行事になるわけですか」

次に、裏側の産業関連をまとめたところを見ていると、『失われた子供の興隆』という本があった。失われた子供のことはノートにも書いてあったと思い目次を見てみると、それはどうも金融関連の仕事をする人々かその職業のことを指しているようだった。お金の貸付を生業とする人がこの町に集っていたようだ。

今でいう金融業が生まれた頃の町の様子が克明に書かれている。町が大きくなるきっかけを失われた子供たちがつくったのは間違いない。その内容からすると1700年終わりあたりから1800年初頭が浮かんでくる。200年ちょっと前だ。

さらに見ていると、すべての棚が時代順に並べてあることがわかった。古いものは500年も前の記録もあるようだ。紙が生まれたのはいつだったかと考えてしまった。

なかなか目指すものに出会えないでいたところにナミナさんが戻ってきた。

「ちょっと、お二人来られない？」

「なにかみつけました？」と言われるままに外に出た。

そのままナミナさんのあとについて公書館の裏の草地のほうへ回った。無邪気に双子がころころがって遊んでいた。

ナミナさんが、「静かにして」と、人差し指で唇を押さえるように言った。

「あれ？ 人の気配？」

「聞こえるよね？ よかった、わたしだけじゃなかった」

どこからか聞こえる小さな音に集中していると、近くで立て膝になっていたトラピさんが叫んだ。

「下のほうだ！ 地面の下から聞こえる。ここきっと地下があるんですよ」

3人が地面に耳をつけようとしたそのときに、さっきの男がのっそりと現れた。

「おまえたち、何しに来た」

それは明らかに疑いを持った眼差しだった。髭を蓄えた大柄な男は、5人を品定めでもするようにじっと見た。そして、忘れないようにしっかり記憶にとどめているようだった。

あわてて飛び起きて、「あの、ノートを書いた人を探しに……」とトラピさんが答えた。

「おまえ、何を言ってる。ここで勝手なことをするな」

「ナーシュさんの知り合いの人にここのことを聞いて……」事態があまり芳しくないようなので思わず口を挟んだ。

「ナーシュさんの名を出せば、出入り自由とでも思っているのか？」

これはどうも雲行きが怪しい。この男は何かを疑っているようだ。出直したほうがいいのかもしれない。

「えっと、別に大切な資料を盗ろうとしているわけじゃなくて、ほんとうに……探しものを」

「みんなそう言う。それが手口だ。ここは俺たちの場所だということだけはよく肝に命じておけ」

取り付く島もないというのはこのことだ。今日のところはあきらめたほうがよさそうだ。

「オルターさん……」とトラピさんがこちらの顔をうかがっている。

「私、オルターと言いますが、お名前だけでも」

「ホーラー、ホーラー・ヤイハブ」ぶっきらぼうに名前だけ吐き捨てるように言った。ヤイハブというところを特に意識して言っているように聞こえた。

ナミナさんは理不尽なことを言う男の態度に納得がいかないという顔をしているが、とりあえず今日のところは退散したほうが良さそうだ。

意気消沈したままに水路にあったベンチのところに戻って、3人であらためて顔を見合わせてため息をついた。せっかくのオールドリアヌ散策にケチがついてしまったような気分だ。

「あいつ、なんなんだろう？」ナミナさんが口惜しそうに言った。

「まあ、僕たちは他所者だし、ホーラーという男の気持ちもわからなくはないよね。あそこは彼らにとっては特別な場所だったんだよ、きっと。誰でも入れるところではなかったとはね」トラピさんがなだめる。

「それはわかるけど、あの言い方はないでしょ？」

「あはは、それだけ大切な場所ってことだね。ノートさんのことを知りたいというのはこっちの勝手な都合だし」

「オルターさんは、ほんと人がいいですね。それなら公書館の看板はずすべき」ナミナさんの銚先はこちらにも向けられた。

「でも、地下になにかありそうなことはわかったじゃない。ナミナの大発見だよ」トラピさんがナミナさんのご機嫌をとるように言った。

「そうよ。せっかくみつけたというのに、何あの男。失礼だよ」

「ナミナさんの好きなオールドリアヌのイメージが壊れるよね」と同調すると、「私はこの町好きなのよ。どうしてそれがわからないかなあ」と男の態度に対する憤懣はおさまらない。

「さあ、気分を変えてもう少し歩きましょう」

「よし、こうなったらあいつも知らないような大発見するわよ」

「あはは、じゃあ宝探しに出発だ！」

水路に沿った径を歩いていくと露天のたくさん出ている円形の広場に出た。ここが村の生活の中心になっているところなのだろう。しばらく見ていると誰もお金のやり取りをしていないことに気づいた。お店と思っていたのは商品を並べてほしい人に配っているだけのようだった。何も並べないで座っている人は何かのサービスを提供するのかもしれない。誰かが近づくと少し話をして、そのままいっしょにどこかに行ってしまう。

船長へのお土産にちょうどいい葉巻屋もあったし、マリーさんの喜びそうな新鮮な野菜もあった。髪切りをする人や、家の修理を請け負う人や、牛を連れてミルクを配る人など、生活のすべてがここにあった。その生活と仕事の境目が無いのんびりした交流がとても自然で、穏やかな陽射しとともに悪くなりかけていた村の印象をもとのように戻してくれた。

「オルターさん、このお茶、ほらノートに出てたアシスタントの女性がお土産で買ったあのお茶ですよ」

「おー、ほんとだ。このあたりの名産なのかな？」

「このお茶いただけますか？」と露天を出している人に聞くと、「好きなだけもっていきな」と言って大きな匙のようなものを渡された。

「お代は？」というとゆっくり首を横に振った。

いつかオールドリアヌにお返しすることを心に誓って、ありがたくいただいた。ここには人の気持ちの交流がたくさん残っている。お茶を袋に入れながらナミナさんが老婆と話し込んでいる。彼女のご機嫌もすっかり治ったようだ。

丸い広場はサークルと呼ばれていた。みんなが集い交流する場所として、形のあるものもないものも、日常の全部がまとめて行き交っている。

突然、ナミナさんたちが演奏の身振り手振りをしながらトンテケのリズムを口ずさみだした。それを見たまわりにいる人たちが自然に手拍子をはじめた。リズムに合わせて双子も楽しそうに踊りだす。

「いいね。これが本当の交流だよ」とトラピさんもうれしそうに言った。

サークルの人たちの様子を見ていると、その中に公書館で会ったあの男がいるのに気づいた。いつか彼とも話ができる日がくるだろうか。

空を見上げると薄い雲が茜色に染まり始めていた。明日もいい天気になりそうだ。トラピさんたちとの小旅行も終わりに近づいていた。

第16話 雲の塔

トラピさん、ナミナさんと、また楽器を持ってオールドリアヌを訪ねることを約束して、エクスポーラーに乗った。例のディスプレイにはオールドリアヌにいた時間のところにはカラードエリアとだけ表示されて、その内容には何も触れられていない。生体チェックに異常なしとだけ表示されている。リアヌシティ側から見るとオールドリアヌのほうがなんらかの色のついたエリアということなのだろう。何はともあれ、今回も無事チェックは通過したようだ。

港のホテルに戻ると、おいしそうなスープの匂いがしていた。奥のほうから有名な歌曲の一節が聞こえてくる。若かったころの出会いを懐かしむ歌だ。マリーさんの艶やかな声を聞くだけで、慌しかった1日の疲れを忘れ、心が静まってくる。

「おかえりなさい、オルターさん」ドアのベルの音で帰宅に気づいたのか、マリーさんの歌が止まった。

調理場に行って戻った挨拶をすると、窓ごしに歩いている姿が見えたと教えてくれた。調理場にいればだれが訪問してくるか事前にある程度わかるようだ。お客をもてなす準備をするには最高の見晴らしというわけだ。

マリーさんは、シチューを混ぜる手を休めて「何か収穫ありました？」と言った。お土産の新鮮な野菜を渡すと、サラダにするとおいしそうと喜んでくれた。

「いやあ、あそこの本はすごかったですよ」緑の手帳を開きながら説明した。

公書館の地下の話をする、マリーさんも地下のことは知らないと言った。聞くと、マリーさんはリアヌシティの生まれではなく、ナーシュさんのほうの出身地だった。どうやら、地下の蔵書については誰でも知っている話ではないようだ。

「それで、何かわかったことありました？」

「いや、あれはちょっとやそつとで見られる量じゃないですね。なにか方法を考えないと一生かかっても無理かもしれないです。それと、あそこの湖ご存知ですか？ ノイアール湖と言ったかな」

「ああ、きれいな湖.....いいところね」

湖で起きた不思議な話をする、ジノ婆さんという180歳を超える老婆が湖の北側にある出

島に住んでいることを教えてくれた。なんでもオールドリアヌの生き証人と言われているそうで、代々長生きの家系もあって、字は書けないけど本のなかったころの吟遊詩人のようにリアヌシティのことを語り伝えているということだった。彼女なら何か知っているかもしれないということだった。たしかに180歳以上の長生きが3代ぐらい続けば簡単にノートの主の時代に遡ってしまう。住んでいるのが湖のほとりであれば、なおのこと詳しいかもしれない。

いろいろ聞いてみると、マリーさん自身は実際にリアヌシティで暮らしたこともなくて、知っているのは近代化が始まって以降のリアヌシティのことだけだという。

「雲の塔がまだ低かったころは、リアヌシティへの入植者も少なかったし、ドーム・コンストラクションなんて会社もなかった」スープ皿をテーブルに並べながら言った。

「雲の塔？」

「ドームの中樞になっている一番高いタワーがあるの。そこが町の拡大に合わせるように高くなっていった。それと合わせるようにドームの運営基盤が整備されてされていったわ。ナーシュとは、その雲の塔に行くと言って出て行った日が最後……雲の塔なんて誰も入った人がいないところだったから、危ないことはしないように言ったのに……」

触れないほうがいい話をしてしまったようだ。

「オルターさんが行った公書館に、とにかくたくさん記録があるらしくて。データ消失でリアヌシティの運営システムが瓦解しそうになったときに、ナーシュが公書館の記録を提供してドームの消失を救ったの。公書館の記録でドームの倒壊を免れたということね。そのときの条件がオールドリアヌを歴史地区として残すというものだったらしいわ。もちろん自治権を得るための資金供出もあったのだけど、公書館の記録の公開で自治を得たというほうが正しいわね。でもそれは諸刃の剣で、身を切って土地を守ったとでも言えばいいのかしら」

「というと？」

「記録を提供することが、公書館と自分の身を危険にさらすことになったわ。そこにこのドームの命運を握る鍵があったわけだから。ドーム・コンストラクションとは対峙せざる得ない関係になってしまった。表向きはなんとでも言えるけど」

「なるほど、それほど重要なものがあそこには眠っているというわけですね。それをナーシュさんは知っていたと」

「ドーム・コンストラクションにとっても痛し痒しね。自治権を与えざるを得ないわけだから。目障りなものがドーム横に残ってしまった」

リアヌシティを守るために使われたのがオールドリアヌの宝とも言える記録そのものだったのは両方にとってとても皮肉な話だ。

お土産に買ってきたお茶をマリーさんに入れてもらった。ノートに書いてあったほどの苦味は感じなかった。それでもどこか懐かしく感じたのは、以前どこかで飲んだことがあるのかもしれない。マリーさんは珍しい香りだと喜んでくれた。

二人で話し込んでいるところに「準備ができたから明日出港するぞ」という大きな声が聞こえた。船長が帰ってきたようだ。どうやら船長はここを常宿にしているらしい。

「お、爺さん、急ぎの荷物が出てな、急遽明日出港だ。ウォーターランドにも立ち寄るから、何か伝えることがあったら書いておいてくれ。みんなを安心させてやらないとな。こんなにうまくいってますって書いてやれ。わははは」

船長にも公書館の話をした。そのあたりの経緯はナーシュさんから直接話を聞いていたマリエールさんのほうが詳しいようだ。

「とにかく、まだ何度も行かないと。次はジノ婆さんのところも訪ねてみることにしよう」

「ああ、あれはオールドリアヌの道祖神だな。じっと町の様子見ている、巫女のようなことをしたり伝承のための記憶を唱えている。こちらの質問に答えてくれるかどうかは婆さんの気分次第だな」と船長が言った。

湖の北の端で一人暮らす老婆と話しをする期待がふくらんでいった。

第17話 水の革命

翌朝は早朝に起きて、船長を見送りに港まで出た。市場でおこぼれをもらおうとカモメが朝早くから忙しそうに飛び回っている。そこに情報屋のルーラーさんが小走りで駆けつけてきた。なんだかカモメと同じように見えておかしかった。

「これは、オルターさん。リアヌシティの旅はいかがでした？ 百聞は一見にしかずってやつでしょ」愛想笑いをしながら擦り寄って来た。

「先日はお世話になりました。おかげさまでいい旅になりました」

「いい旅になりました？」怪訝な顔をしてこちらを見た。

「想像と違ったところもありましたけど、意外なところも含めて面白い旅でしたよ」

「それは、それは.....オルターさんはリアヌと相性がいいんでしょうかね。あっしはどうにもだめなもんで、ガイド失格ですわ。リアヌシティもオールドリアヌもいるだけで背中がむずむずする始末でね」と言いながら背を竦めてよじるような格好をして見せた。

「水が合わないってやつですかね。こう見えても、もちもちの敏感肌なもんで」と言って一人で笑っている。

「とにかく、こことちがって自由があるんだかないんだかさっぱりわからない。情報屋としてはにっちもさっちもいきませんわ。あそこに行くと息苦しくなるばかりでね。それこそ商売上がったりでさ」へらへら笑いながら頭をかいた。

船長が船から「ルーラー！ また、留守中頼むな」とエンジン音に負けないような大声で叫んだ。

「あ、旦那、気がつきませんで。あっしにまかせりや、心配なんて...」こっちを見て「ないでしょ？」と片目をつぶって見せた。

「船長！ ウォーターランドのみんなによろしく。航海の無事を祈ってるよ」

「ありがとよ。爺さんもがんばってくれ。マリーのやつのこと頼むぞ」

マリーさんにはこちらがお願いする側だから、これにはどうにも返事をしようがない。

船長が操舵室に入ると、船はいつものように大きく汽笛を鳴らすと、連結した船を従わせるように夜が明けたばかりの海にどっこんどっこんという音を響かせながら出ていった。

少し沖で船が大きく舵を切るのを見届けると、ルーラーさんが「ちょっとお話ししましょうか」と誘ってきた。向こうの情報も知りたいのかもしれない。急ぐ用事もなかったので、二人で裏道にあるカフェに入った。

「オルターさんもいろいろ大変ですな。何もあんなところに好き好んでいくこともないのに」と気遣うようなことを言いながら、他の客と離れている一番隅の場所を選んで、海の見える側の椅子を勧めてくれた。

「もともと、ウォーターランドの歴史に興味があってやってることですから。だれに頼まれたことでもないですし」ルーラーさんが何を考えているのかわからなかったので有体の答えを返した。

「オルターさんは、まだわかってないですな、このことが」ちょっと呆れたような顔でこちらを見た。

「2度行っただけですからねえ。まだ、わからないことだらけですよ」

「ふーむ。じゃあ、怪我してしまう前に少しお教えしましょうかね。えっと、また、向こうに行くことがあったら香料とかタバコとかを.....いろいろありますからね。そこところは頼みますよ。大人の関係ということで」

「ああ、お土産ですね。昨日、船長からも葉巻を頼まれましたよ。覚えておきましょう」

情報は報酬が伴うものだと言わんばかりだ。情報の押し売りみたいな話にちょっと噴出しそうになった。

「早い話がですな、失われた子どもたちの末裔が、水と交流が金に変わるものになると気づいた、それがネーコノミーってことなんですわ。ほら、金本位制とかあったでしょ、その昔。金が唯一価値のあるものとして認められ、その兌換券として何の価値もない紙のお金が動いていた時代。それはご存知ですよ？　なんだかんだ言っても金に勝るものはなかったわけなんですわ。それが、あるころから、金より重要なものがあるってことになりましたね、金以外にも有限で希少価値があって総量をコントロールできるものがあるってわけです。わたしらのような素人の人間には思いつきもしませんがね。それが水と交流ってことなんですな。あっしの言ってることわかります

かね？」

「金より水や交流の価値が高いってことを言われてます？」

「さすがオルターさん、もの分りがいいですな。水を取り上げられて、一人ぼっちにされたんじゃない。そんなことされちゃった日には、最後は金や銀なんてどうでもいいし、紙のお金に至ってはなんの役にも立たないですからね。水は飲み物以上の価値もありますしね」

「なるほど、水も取り上げられれば困るのは困りますけどね。水はだれのものでもないのでは？」

「おしゃるとおり、最初はみんなそう思っていたわけですよ。ところがね、気がつくと飲める水が自分の力だけでは手に入れられなくなって、人との交流も雲の塔を通さないとできないような仕組みになってたんですな、これが」

そんなことが起きると思えないけど、よりいいものを求めているうちに、自分の力ではなにもできなくなっていたということなのかもしれない。あのオールドリアヌと正反対の、進歩に対する代償だったのだろう。

「それとですね、ドーム・コンストラクションが水そのものの持つ力にも気づき始めたもんだから、アクア・リボリューションなんて事態になってしまったわけですよ。そのおかげででかくなったのが、ボルトンっていう会社。あいつらがまたとんでもないやつらでね」

「アクア・レボリューション？」

「そうでき、文字通り水の革命ですよ。雲の塔っていうのがその象徴ってことらしいですよ。水が蒸発して天に上ると雲になるでしょ。要するに彼らは水の最上級にあるってことですよ。うまいこと言うもんでしょ。あつしに言わせりゃ、太陽のありがたい光を遮るのが雲のやることだと思いたがね」

「ボルトンも同じ一味というわけですか？」

「向こうで気づきませんでした。大きくbと書かれた黒いスーツケース.....」

「あ、あれがボルトン？」うさぎの少女と会っていた男のことを思い出した。

「いたでしょ？ あいつらがドーム・コンストラクション配下にあるボルトンの共有員ですな。コネクターと呼ばれていますが、いったい何をつないでいることやら、つないでないのやら。それこそ余計なお世話ってやつですわ」

「話は戻りますが、水と交流を基礎にした経済が世界を席捲しはじめたときに、失われた子供たちの最後の末裔が死んじまいましてね、雲の塔のグローブレインのメモリーが唯一社会基盤を支えるものになったんですわ。事故でその一部が消失したときときには、そりゃあ大変な騒ぎでしたな。この港でもドームが爆発したっていううわさが流れてきて、しばらくは有毒ガスがどうだとか、犯罪者が逃げ出しただ、個人の生活履歴と契約がすべて消失されたとか、大変な騒ぎでしたな。個人の特定さえできなくなったって、意味のわからない話でしょ？」

「なるほど、その機会をとらえて、ナーシュさんがオールドリアヌの自治権を獲得するための交渉を思い立ったってことなんですか」

「よくおわかりで。ところが、これがまたオールドリアヌの行動派の機嫌を損ねることになったんですわ。公書館のみんなの財産を勝手に使ったてなもんですよ。町の地権はすでにナーシュさんが買い取っていましたから、ナーシュさんもあとは自治権さえ抑えられれば町を永久に守れると考えたんでしょうな。そのために村の宝とも言える歴史記録の一部を提供するという手を使ったわけですわ。まあ、この駆け引きが正しかったのかどうかなんて誰にもわかりませんやな。わかるのはオールドリアヌの町が昔と変わらないままで今もあるってことだけですな」

「それは、いいことじゃないですか？」

「問題はナーシュさんが、雲の塔の機能修復のためになんの記録を渡したかですな。評価はその内容次第というわけでき。ただ、あの人ほど公書館の蔵書に詳しい人もいなかったから、他の誰にもできない芸当をやったのけたというのが一般的に言われているところですがね」

「でも、どうしてそのあと失踪を？」

「それは誰にもわかりませんやな。ドーム・コンストラクションから身を隠すためか、情報を得るか秘密を守るためにやつらに拉致されたか、自戒の念から自ら命を絶ったのか。オルターさんならどう思います？」

「うーむ、これはかなりややこしい話ですね」

「じゃあ、旦那はオールドリアヌの住人とリアヌシティの住人とどっちが幸せだと思いますかね？」

「私なら迷わずオールドリアヌですね」

「それは殊勝なことですな。船長とおんなじだ。リアヌシティからオールドリアヌに移住した人なんて聞いたことありませんけどね。はたしてどちらが正しいのか。残念ながらあっしにはわかりませんし、関わりたくもないですわな」

水と交流は生きるものの権利と主張したナーシュさんはドーム側となんらかの利害対立をしたということのようだ。ナーシュさんもあの町の出身だったから失われた子供たちと無縁ではなかっただろうし、今でも、ナーシュ信奉者と批判者がいるということだ。それをよくわかってないと、失敗をするというのもわからなくない。

「マリーさんは詳しい事情を知らないから、さぞややりきれないでしょうな。ナーシュさんが戻っても戻らなくてもやっかいな立場になってるのは間違いないですわ」

一通りの話が終ると、振り向いて船長の船が出て行ったほうを見た。

「そんなことなもんでね、オルターさんにはうまくやってもらいたいと思ひましてね。オールドリアヌにはいいものもたくさんありましたでしょ、あっしと手を組めば.....」

「できるだけ穏便に問題を起こさないように気をつけますよ。いろいろ情報をありがとう」

「うまくやれば、こんなおいしい話もないですからね」と意味ありげに言い残してそそくさと席を立て雑踏に消えていった。あとには口をつけていないお茶が残っていた。

情報屋というのは裏表を知り尽くして、その間を綱渡りするような仕事だろうから、ルーラーさんの立場もよくわかる。考えようによってはドーム側からの回し者の可能性だってあるだろうけれど、船長との親しそうな関係を見ると、危なっかしくて仕方がないこちらを心配しているいろいろ教えてくれたのだろう。そこに商売の話がついてくるのは情報屋という仕事柄仕方ない。

港からの帰りに不思議な湖のことを書いた手紙を出しにハトポステルに寄ると、ミリルさんからの返事が届いていた。

ミンナゲンキ、ミドリタクサンハエタ

焼け跡にまた緑の草が生えてきたのだろう。植物の再生力が思うより早いのに驚く。もちろんノーキョさんががんばっているおかげもあるだろう。あの緑で覆われたのどかなウォーターランド

の日々が懐かしい。リアヌシティを知れば知るほど、いつまでも今のままであってほしいと願わずにはられない。

第18話 来客

ホテルに戻って居候らしく掃除の手伝いをしているうちにお昼になった。食事を終えて休憩をしていると、新しい客人が訪ねてきた。どうやらマリーさんの古い友達らしい。ナーシュさんとも面識があったようでナーシュさんの思い出話に花が咲いている。マリーさんにいっしょに話しましょうと呼ばれてヨットの販売をしているというタークさんを紹介される。今は、単独でブレイク海をセーリングしている途中で、マリーさんと会うためだけに寄港したのだそうだそうだ。

航海途中でここに立ち寄る人も多いという。部屋から南青海の美しい海を眺めながら、航海の疲れを癒しつつ次の計画を考えるにはこれほど環境の揃ったところもないだろう。港には有名なヨット工房もあるらしいので、利用する人が多かったというのもわかる。今はホテルとしての事業を営んでいるわけではないから、古くからの知り合いが昔を懐かしみ立ち寄るといふことのようにだ。

「途中、ダルビー船長の船を見かけましたよ。頑丈そうで、働き者のあの船でしたね。今も変わらずなんですね。長いのにたいしたもんです。昔の船は作りがしっかりしているから、手入れさえしっかりしていればいつまでも壊れることもないということでしょうね。ダルビー船長のあの船に対する愛情は半端じゃないですし」

「譲り受けた人との思いでも詰まってるからっていつも言ってますよ」

「そうですね。当時はダルビー船長も大変だったから、あの船は戦友みたいなものなのかな」

ダルビー船長の船の話でひとしきり盛り上がると、マリーさんがセーリングのことに話を変えた。

「タークさん、今回はずいぶん時間がかかりましたね」とねぎらうように言った。

「いやあ、今回ばかりはまいりました。セーリングの途中で羅針盤が壊れてしまって、一週間ほど誰もいない海で漂流生活ですよ」

「一週間も？ それは大変だったわね」

「ところが、そのおかげでいいことがありましてね。たまたま流れ着いた島が手付かずの自然がそのまま残っている地上の楽園のようなところで」

「あら、それは不幸中の幸いだったわね」

「ほんとに、幸いのほうが多かったかもしれないです。助けてもらった島の人に羅針盤まで直してもらって。何日かお世話になってしまったんですけど、それはもうきれいな島でしたよ。みなさん、最近火事があって大変だったと言われてましたけど」

「火事……」 マリーさんがこちらを見た。

「それ、なんという島でした？」

「島の名前はわかりませんが、いい温泉なんかも教えてもらって。楽しくなるお湯や元気になるお湯や、めずらしい温泉がいろいろありましたね。お土産に特性の灯台キャンドルまでもらってしまっ。おかげでこうして元気にここまで帰って来られました。あの島の人たちのお陰です。」

「そうでしたか」 マリーさんと目をあわせてうなづいた

「どこだかご存知ですか？ あそこの周辺はどうも羅針盤が効かないようで、場所さえよくわからないんですよ」

「タークさん、ここにいらっしゃるオルターさんはその島の方よ」

「え！ そうなんですか？」

「たぶんそうだと思います」 ちょっと曖昧な答え方をしてしまったけど、おそらくウォーターランドだろう。

もう少しはつきりさせたかった「だれかと話をされました？」と聞いてみた。

「名前は聞かなかったですが、キノコを集めてた子と、ピンクのカバといっしょのネモニさんと言ったかな？ それと灯台を貸してくれたミリルさん。すっかり食事や宿までお世話になってしまいました。島の名物のキノコや牡蠣のおいしかったことといたらなかったですよ」

まちがいなくウォーターランドだ。なんだか自分の住む島の住人がほめられると自分のことのようにうれしい。

「失礼ですが、オルターさんは、あそこで何を？」

「申し遅れました。ちょっと本屋の真似事をしてまして」

「あ、たぶん、そこに伺いましたよ。キノコの子に教えてもらって。そのミリルさんに灯台の宿まで用意していただきました。親切な方ですね」

「あはは、それはよかった。灯台の宿は最高ですからね」

「本屋さんのほうでも、あんまり風が心地よくて昼寝している人もいました」

「あそこは、別名うたた寝屋とも言われていますから。ははは」

「うたた寝屋っていい響きだな。イメージにぴったりだ。また、行きたいなあ……といっても場所がわからないし」と言ってタークさんは一人笑った。

「船長は場所をよく知ってますよ。聞いてみるといいかもしれません」

ウォーターランドを訪ねてきた人をみんなでがんばって迎えている様子が目に浮かぶようだ。不在中の島をみんなで守ってくれている話を聞いてほんとによかった。こちらもみんなにいいお土産話ができるようがんばらないといけない。

「これ、オルターさんたちが作られている島の新聞なのよ」マリーさんがタークさんに島便りを見せた。

「あ、温泉のことが書いてありますね。これはいい。定期刊行されているんですか？ 僕もこれほしいな」

「港で配布してますからいつでももらえますよ」

「誰でももらえるんですか。それはいいことを聞いた。でも、あの島のことはあまり知られたくない気がしますね」

「そうですか？」

「いや、なんというか、誰でも行けるようになるとどうなるのかなと……でも、独り占めというのはよくないかな」

「メインランドの人はいろいろ大変そうだから、ああいう生活もあることをご紹介したいと思っ

ているんですけどね」

「わかります、わかります。そうですね、隠すようなことではないですもんね」 タークさんは自分に言い聞かせるように言った。

タークさんの話を聞いて、ウォーターランドは誰でもが行けないから、いいところがたくさん残っているということにあらためて思い至った。一人でも多くの人のためになる島であってほしいと思う気持ちはあるものの、たくさんの人が押し寄せようになるのもちょっと違う気がする。たくさんの人に幸せを感じてもらうために、たくさんの人に島のことを伝えることがいいことなのかどうか。幸せを共有するために開かれた島であることは間違いではないはずだけれど。最近では飛行船も来るようになっているし、メインランドに来てみるとウォーターランドの将来についていろいろ考えてしまう。船長はそのあたりのバランスをうまく取ろうとしているのだろう。

「それにしても、あそこは人がいい。やはり環境が人をつくるんでしょうね。豊かな自然が一番ってことですね」

「ほんとうは人がいないほうが自然にはいいのかしら……」 マリーさんがぼつりと言った。

タークさんが「いやいや、人も自然ですよ。ヨットに乗っていればよくわかります。人のできることなんて自然に学ぶことぐらいですから」と明るい声で言った。

タークさんは、今夜はホテルに宿泊するという事だったので、遅くまで南青海や南黄海のいろいろな景勝地の話を聞かせてもらった。美しい景観に心を奪われない人はいない。それが人と自然がひとつであるという意味なのかもしれない。

第19話 家族の家

タークさんを見送った後、まる1日の休息日をつくった。身体を休めながら計画をつくり直し、再びオールドリアヌの探索に出た。

リアヌシティも三度目になると、最初感じた違和感も少なくなり、こういう街に住むのも悪くないのかもしれないとも思い始める。実際、住んでいる人たちは長い時間をこの街と共にし、その街の変化を日々目の当たりにしながら暮らしてきたわけだから、今さら昔のような生活に戻るといえるのは考えにくいだろう。ここで生まれて育った子供達もいることを考えると新しい価値観を簡単に否定することもできない。

トラピさんとナミナさんは大道芸の公演日程の関係で今回は調整がつけられなかった。サークルでの大道芸披露は次回ということで、2回目のオールドリアヌは一人旅になった。一度行ったところなのである程度は勝手にわかるし、一人の方が話やすいところもあるだろうと考えることにした。

バスの出発まで時間があつたので、少しまわりを歩いてみようと思い駅を出てみると、思った以上にボルトンのコネクターがたくさんいることに気づく。こちらが気にしていても、向こうが意識的に避けているのか目が合うこともない。逆に自分たちの存在を消そうとしているようにさえ思える。

街を歩く人はコネクターの存在を気にするでもなく、お互いに声をかけることも、挨拶をすることもなく、何に対しても関心がないかのような顔をして行き交っている。前回は気づかなかったけれど、彼らの目は町ではなく何か別のものを見ているように思える。もしかすると、エクスポーラーのシートのディスプレイのように、目の前に何か見えているものがあるのかもしれない。見ているようで見ていない。そう考えると、不自然な目線や動きも納得がいく。

しばらく歩いていると、ときどき建物の影に子供の姿があることに気づいた。なぜかこの子たちは、コネクターと違ってこちらをしっかりと見ている。そのうち、一人の赤い髪の少年が恐る恐る近づいてきて「お爺ちゃん、大丈夫」と心配そうに声をかけてきた。街に住む彼らからすると、ふらふら頼りなく歩いている見知らぬ年寄りが気になるのも当然だろう。

「ありがとう。このあたりは、はじめて来たから、よくわからなくてね」

「そっか。散歩してるの？」

「オールドリアヌ行のバスが来るまでね。君はここの子？」

「うん、ファストレイヤー」

ファストレイヤーというのがこの場所の地名なのだろう。

「この人はどうして、みんな話をしないの？」

「モビラだよ」

「モビラ？」

「モービルラインでみんなつながってる。目の前の人なんて関係ないよ」

「やっぱり、そうなんだね」

この子が言ってるのが、この前ナミナさんから聞いたエゴラインというものなのだろう。みんな見えない線でどこか違うところとつながっている。

「そうだ、雲の塔はどこにあるか知ってる？」

少年は黙ったまま、歩いてきた道のさらに先の方を指差した。そちらを見ても生い茂った街路樹ばかりで何も見えない。かなり遠いのかも知れない。

そこまで話したところで、赤い髪の少年は急に走り出し建物の間に隠れてしまった。振り返ると、後ろのほうを歩いているボルトンの姿が見えた。子供はボルトンを見て逃げたようだ。彼らの間には何か問題があるのかもしれない。

そのまま少年は戻ってこなかったのが、雲の塔を目指して、不規則な形で並ぶくすんだベージュ色の建物の間を歩いた。しばらくすると、途中に一見教会のように見える白い建物が現れた。看板には手書きの文字で、家族の家と書いてある。さらにその下に、家族はいつも繋がっている、という至極当然と思えることが書かれていた。家族というのは本当に血縁のある家族のことをさしているのだろうか。何かの宗教団体のように思えなくもない。こういう旧来の関係を保つための場所もまだ残ってはいるようだ。とても居心地の良さそうな施設に見えるのに、人のいる気配は感じられない。催しがあるときだけに使われるのだろうか。

中に入っていいものかどうか迷っていると、上の方で鳥の鳴くような声がしたので、屋根の上を見上げるとさっき話した少年が自分の後ろを指差している。よくよく見ると、空と同じ色だったのでわからなかっただけで、視界のすべてさえぎるほどの大きな壁が目の前にそびえ立ってい

ることに気がついた。それがまさに雲の塔だったのだ。

あまりに大きく、あまりに高く、あまりに美しく、すべてが想像をはるかに超えていた。青色というのが正しいかどうかわからない、まるで澄み渡る空そのもののような色だった。塗装ではなく空を鏡のように映しているか、透明に透けているようにさえ思える。家族の家はその真下にあったのだった。

歩いていたレンガの道は、雲の塔を周回するようにつながっているように見えた。雄に一周1キロ以上ありそうだった。入口も窓もない塔は、巨大な六角形の柱をねじるようにして、まるで方向が定まらない蔦のようにくにやくにやと空に伸びていた。塔の最上部は、その名のとおり雲の高さまで届いていて、まぶしい太陽の光のせいもあって空に溶け込んでしまっている。

人智を超えたような構造物を呆然として見上げていると、「誰かをお探しですか」と背の高い男が声をかけてきた。黒い牧師のような服を着ている。

「すごい塔ですね」

「はじめてですか？」

「ええ、バスに乗るまで時間があつたもので」

「そうでしたか。ではごゆっくりお楽しみください」

そう言うと、家族の家に入って行った。

会話になっているような、なっていないような変な気分だった。それを見ていた屋根の上の少年はサヨナラを言うように手を振って、屋根からひよいと飛び降りて走り去った。

あとには雲の塔と自分だけが残された。そしてあらためて塔の威圧するかのような大きさに目を奪われた。この塔の圧倒的な存在感を頼り、そこでのなにも心配しないでいい暮らしを選択するリアヌシティの人たち。リアヌシティを選ぶ理由がまたひとつわかったような気がした。

第20話 湖水の道

バスの時間が迫っていたので、雲の塔のことは次回にすることにして急いで駅に引き返した。

バスには先に3人の乗客が座っていた。その古風な服装からみんなオールドリアヌの住人だとわかる。その中の一人に話しかけてみると、健診で時々セントラル駅のほうまで出てくるのだという。健康状態の検査に呼び出されるということらしいけれど、そのぐらいの自由ささえも許されていない自治なのかと思う。

「地元には身体にいい水もあるんだが、生で飲んじゃだめだそうでね」諦めたような顔で言った。

「ノイアール湖をご存知かな？」

「先日はじめて行きました。すばらしい湖ですね」

「昔から命をつくる水と言われててね。われらはそれを信じていたんだがね。どうもよくないらしくてな」

「失礼ですが、お歳を伺っていいですか？」

「わしか？ 126になったところだったかな。もう忘れたわ。後ろの婆さんは、たしか132だな。違ったか？」確認するように後ろの席を振り向いた。お婆さんは2度ほどうなづいていたけれど、聞こえたのかどうかはわからない。

この人たちは、聞かなければ100歳を過ぎていることもわからないし、その見た目の若さからはどこかに悪いところがあるとはとても思えない。病気などしたことがないとお互いに自慢げに話しているぐらいだ。リアヌシティで検査すれば、もっともっと長生きできると笑っている。

「でも、その湖の水のお陰で長生きできているんじゃないんですか？」と問いかけると、「あれは、飲料水にはいけないらしいからな」と同じことを繰り返すだけだった。

あの湖の水は、だれも飲めなくなっているのだろうか。科学の判断がどこまで正しいかはわからないが、あのきらめく光に溢れた湖の一体どこに問題があるのか知りたいものだ。リアヌシティの住人はみんな200歳まで生きられるとでもいうのだろうか。

バスで健康談義をしているうちに、前回と同じ眼鏡橋の停留所に着いた。長老たちはまた会いましょうなどと言うと、楽しそうに話をしながら降りていった。そのかくしゃくとした姿からは年

齡を感じさせるものはまったくない。

車内に表示される行く先を見ると、次が湖水入口というバス停になっていたのでもうここまで乗ってみることにした。湖の南端に位置する停留所につくまでものの5分ぐらいだった。

降りたところには特別なものは何もなく、知らなければここがバス停とは誰も思わないだろう。折り返し地点になっているようで、バスはもと来た道を無人のまま引き返して行った。よくよく考えると、このバス停に一体いつバスが来るのかがわからない。いつもの成り行きまかせで、来なければ来ないでなんとかなるだろうと考えて先を急ぐことにした。

バス停からは細い畦道が北に向かって湖に沿うように伸びていた。まずはそれを頼りに湖の巫女が住むという出島のほうを目指すことにした。向こうに舟があれば、帰りはそれで公書館まで戻ろう。

湖畔の道は、虫の音がしている。ウォータランドに比べると秋の訪れも早いのだろう。夕暮れ時には少し冷え込むかもしれない。道沿いに咲く草花を眺めながら歩いていくと、一面白い花が咲き乱れるところに出た。この花はウォータランドでもよく見る綿のようにふわふわしたユキニ草だ。秋の終わりから冬にかけて咲くめずらしい花だ。その花に囲まれるようにして歩いていると、ちょっと島に戻ったような気持ちになった。島に帰る頃には、同じようにこの花が迎えてくれるだろう。よく見るとユイローの花も咲いている。気候が違っていても同じ花が咲くものなんだと感心する。

歩き始めて15分ほどたったところで、湖に浮かぶ出島が見えてきた。それほど大きくもなく、人ひとりが住む家をなんとか立てられるぐらいの広さだろうか。周辺は背の高い水生植物が密集していて、島の内部がどうなっているのかは見えない。知らなければ、それが島だということにも気づかないかもしれない。

さらに5分ほども歩くと”舟”という一文字だけ書かれた看板があった。横をみると湖の方に小さい栈橋が見える。水草がからむのをさけて、帆を使ったとしても出島に直接はいることはできないだろう。舟で来ると、出島の玄関口はこの栈橋ということか。そこを過ぎると草木も伸び放題で、人の手がまったく入ったことのない原生植物がそのまま残る雑木林へと変わっていった。

その林の入ると、信じられないことにウォータランドの灯台の横にあるものとまったく同じ六角の石柱が立てられていた。大ききこそ違うものの、石柱の上部は六角の中心を結んだ位置に向けて丸い窪みになっていて、そこに少しの水が溜まり水滴が丸い球のようになって揺れている。ウォータランドには1つしかない石柱がここではあちらこちらに点在していたのだ。よく見ると、6つの面の上の端にはそれぞれ記号のような文字が同じような配置で刻まれている、それぞれの石碑には名前も彫りこまれているようだ。

一見墓地のように見えなくもないが、無造作に置かれているところからすると、弔いのためというより何かを記録するための物のようにも思える。そう言えば、あの雲の塔も六角だった。リアヌシティにとって六角は特別の意味があるのかもしれない。そう考えるとウォーターランドのあの六角の石碑もノートの主が何かの目的を持って立てたものと考えるのが自然に思えてくる。

原生植物をかき分けて出島の入口にたどり着くと、ほんとうに小さな木の小屋がひっそりと佇んでいた。こんなところで一人住む老婆とはどういう人なのだろう。彼女から何を聞くことができるのだろうか。

第21話 出島

出島の入り口は古い錆びた柵が倒れ掛かっている、だれでも自由に入れるようになっていた。入り口の周囲も草が伸び放題に生い茂っている。一見見ただけでは、人が生活をしているとは思えないようなところだった。

「こんにちは……」

錆びてた腐食した柵の前から様子を伺いながら声をかけてみたが、答えが返ってくる気配はない。

「失礼します……ね」

庭は想像していたのと違って、手をかけてきれいに棲み分けがされていた。湖からの風が吹き込むと、植え込みの草花がそろってやさしく揺れる。揺れる花は硝子細工のように繊細で、風の調べの合わせた鈴の音が聞こえてきそうだ。小さな庭のそこかしこ溢れる命の営みを感じる。

「入らせていただいてもよろしいですか？」ドアの手前まで入ってもう一度声をかけてみた。

声が聞こえたのか、家の奥でコトリと小さな音がした。少し様子を伺っていると、ドアの隙間から黒いものが顔を覗かせた。

「おお、インク！なんでこんなところに……おまえ……」思わず目を疑った。青い艶のある毛並み、ちょっと気だるそうで冷めた目、どこをどう見てもインクだ。

「インク、ほらこっち」手を差し伸べると、しばらくこちらを見ていたかと思うと、後ずさりしてドアの後ろに隠れてしまった。

六角の石碑といいインクといい、ここがどこだったのか一瞬わからなくなってしまふ。これは夢を見ているだけじゃないのか。もしかすると灯台が近くにあるのではないかと周囲を見回してしまった。目を凝らして周りを見ていると、気温が低いせいで湖の上に薄くかかっていた乳白色の霧が出島のほうに流れてきた。それに合わせるかのように周辺の景色が風に吹かれる布のようにゆっくりと揺れ始めた。景色のズレを見ていると、少しずつ自分の意識が現実世界から遠のいていくのがわかる。もしかすると周辺に密集していたユイローの覚醒作用のせいかもしれない。

そのうち立っていられなくなって、崩れるようにしてそこに座り込んでしまった。

目の前に広がる湖の方をみると、水面にきらめいていた無数の光の粒が一点に集中し始め、光の水文のようなものができていた。しばらくすると突然水面が大きく隆起し、水文が崩れたかと思うと濃淡のある金色の光の束となり、空に向かって一気に立ち上がった。それは、垂直な虹のようにも、巨大な竜のようにも見える眩いばかりの光景だった。

立ち昇る黄金の柱に目を奪われていると、背後の家の方から誰かが近づいてくる気配がした。すでに、誰なのか聞くことさえもままならないほどに意識は混濁していた。声を聞き取るのがやっとで、返事をするすらかなわなかった。

「だれか？」

「あ……」

「ナーシュか？」

「い……い……」

もう声の主を確認することさえもままならなかった。老婆に間違いないと思うものの手足の自由もきかない状態で、振り返ることすらもできなかった。意識はさらに遠のいて行く。

「どこ……きた」もう相手の声さえ聞き取れなくなっている。まぶたも重くなって、視界も閉ざされはじめてきた。

立ち昇る黄金の虹がゆらゆらと不規則に揺れ始める。その中に人がいるように見えた。くるくる踊りながら虹の中を舞っている。そしてしばらくすると、その姿は黄金の光の中に溶け込むように消えてしまった。

そうするうちに、ぼんやりとした影が回り込むようにして目の前に立った。

「おま……のか……ソダ……」黒い人影から途切れと切れに声が聞こえる。もう、うな垂れた顔を上げることすらできなかった。

そして、この言葉を聞いたのを最後に、あのとりのように深い漆黒の淵へと落ちて行った。まるで鉛のように身体が重く自由がきかない。動かそうとしても自分の体と思えないほどに重くだるい。身体が湖畔のこの土地とひとつになってしまうような感覚にとらわれる。誰かが闇の中か

ら手を差し出そうとしているのがわかるけれど、その手をうまく捉えることができない。

深淵は途方もなく深く、戻る場所さえ見失ってしまいそうだった。もはや、そこは別の世界とも思えるほどに遠かった。一瞬、闇を舞う六角の石碑が見えたけれど、すぐに消え去ってしまった。重い身体は同じところにとどまっているように思えず、時空を超えて移動してるような気さえした。自分が自分でなくなるような感覚、ぐるぐると記憶が周り、どれが自分の記憶なのかさえわからなくなる。なぜ、今ここにいるのか、誰が何をしようとしているのか、すべてが崩れたモザイクのように飛散していく。

第22話 赤い灯台*

どれぐらいたったのだろうか。薄明かりの中でミヤオという鳴き声が聞こえた。声のするほうを見るとインクがいた。目が覚めたところはウォーターランドの灯台だった。いつもと変わらない灯台のベッドに横になっている自分に気づいた。ユイローのほのかな香りが窓の外から流れ込んでくる。なぜ自分が今ここにいるのかがわからない。インクはいつものように愛嬌を振りまくわけでもなく、少し離れたところからこちらを見ている。

少し気持ちが落ち着き身体の重さも取れてきたので、外に出て見ることにした。ところがそこに見えるはずのエバンヌは跡形なく消えていた。気のせいかな草木の生え方もいつもと違ってみえる。ただ、六角の石碑はいつもと同じ場所に何も変わらずあった。ただ、その石碑もよく見ると、まだ風雨にさらされていない真新しいもので、読めなかったはずの文字も、SODA YEAHAVE とはつきり読めた。やはり、これはノイアール湖にあったヤイハブの六界錐と同じものだったのだ。ノートの主が置いたものに違いない。SODAというのが名前だったのだろうか。それとも別の誰かを祀ったものなのか。

後ろでインクがしきりに鳴くので振り返ると、そこに見えたのはいつもの白い灯台ではなく、苔むして今にも崩れそうなレンガ造りの赤い灯台だった。

「そんなばかな……」自分の身に何が起きているのかまったく検討もつかず、意味のわからない不安な気持ちに全身が包まれた。

足元を見ると、金属の円盤と矢印のいっしょになったようなものが、石の上に置かれている。よく見ると、日時計のように見える。だれがこんなところに置いたのかと思った瞬間に、走馬灯のように記憶が回転し始めた。「これはノートの主が置いたと書いていたあの日時計では……」

急いで灯台に戻ると、ベッドはいつも使っていたものではなく、木造りで干した草を敷いたものだった。机の上にはノートが置いてあった。ただ、そのノートは新しく、しっかりと革ひもで綴じられノートとしての体裁を保っている。それは、ウォーターランドにあったバラバラになった紙の束ではなかった。めくってみると紙に目立った汚れもなく、毎日の記録がきちんと書き残されている。横には書くために使われていると思われる魚かなにかの骨を削っただけのペンと、インクを入れた貝殻の壺があった。怖いもの見たさの気分でペンをインク壺に入れてみると、瑞々しい青いインクから海の香りがこぼれ落ちてきた。

そのとき背後に人が見ているような気配を感じた。あまりの恐ろしさにとても振り返る勇気がなかった。もし、そこにノートの主が立っていたら……そう考えただけで、全身が凍りつくほどの恐怖を感じた。どうしてもノートの主と会話を交わしてはいけないように思えた。なぜだかは

わからない。会話をした時点で、もうこの夢は覚めないという根拠のない思いに縛り付けられたのだ。

しばらくは、ノートをめくることもできないままに、息を潜めて身動きもせずじっとしていた。丸に十字の枠の窓から見える海だけは、いつも見ている海と何も変わらなかった。繰り返す寄せる波が、時を刻む時間のひだのように思えた。それは、1日にも感じるほどの長い時間だった。

気配が消えてしばらくしてインクの鳴く声が聞こえたときに、それに勇気づけられるようにして後ろを振り向いた。そこにはすでに誰の姿もなく、インクが横になって、しっぽを床から上げ下げしているだけだった。あの気配はノートの主ではなかったのだろうか。

しかし、この猫はほんとうにインクなのだろうか。それさえもよくわからなくなってくる。第一ノートには猫のことなど何も書かれていなかったから、猫がいたとは考えにくい。もしかすると、なくなったノートに書かれていたのだろうか。いや、そもそもあの時代に同じインクがいるはずもない.....インクに似ているだけの猫。

誰もいないことを確認できると、机の上にあるノートが気になり、あらためてページをめくってみた。ノートは書き始めてまだそれほどの月日がたっていないようで、書かれているページもそれほど多くはなかった。中にはまったく読んだことのないページも含まれていた。一番新しいページには日時計のことが書かれていた。そうすると、まだこの島に来て日が浅いということになる。もう、この時点で石碑を作り始めていたということだ。急いで過去のページを見た。

***** ノート *****

ずっと探していた石を見つけることができました。これで先人たちと同じように、六界錐をつくることができます。石に文字を掘る技術は持ち合わせてないので、うまく彫れないかもしれませんが、教えてもらった通りに祈れば、そのときが来ても必ずつなぎ合わせてくれると思います。もっときちんと話を聞いておけば良かったと思いますが、こういうことはいつでも後になって思うことなのです。公書館の館長に聞く機会がなければ、六界錐の意味さえも知らなかっただろうと思うと、今そのことを知っているだけでもよかったと考えることにしたいと思います。なにかあったときもこの石柱さえ残しておけば迷うことなくこの場所に帰ってこられるでしょう。

6文字を刻むときには無心にならなければならないと聞かされました。私が今いるこの島は、計らずもそれをできる環境にあると言ってもよいと思います。次は石を彫るだけの硬さをもった、ノミに変わるものを探すことにします。ゆるりと時間が動くその時に間に合えばいいのですが。

***** ノート *****

ノートを見ても、この島に来てすぐに石柱をつくりはじめたのは間違いないようだ。彼にとってはそれほど大切な仕事だったのだろう。その後、何よりも硬い鉱石を島の端のほうで見つたと書かれていた。それを使って、一文字ずつ丁寧に、来る日も来る日も彫り続けたのだろう。彫られた文字は、きれいとは言えないもののはっきりと読める文字になっていたことを思うと、彼の願いがなんであろうと、いつかかなう日が来ると信じたい。ここからどこに旅立とうとしているのかわからないが、何かの起点にしようとしたその気持ちはわかる気がする。

ゆるりと動く時間というとらえどころのないもののことを思うと、何の起点になるかは本人にもわからなかったのかもしれないと思った。

第23話 水に映る顔

ノートを読んでいるうちに、夕暮れが近づき日も少し傾いてきた。ここがノートの主が実際にいる場所であるなら、夕闇になる前にこの灯台に戻ってくるだろう。そんなありえないことを思わずにいられないほどにウォーターランドとそっくりで、違う場所にいる。

顔を合わせるのを避けるために、一度灯台を離れることにした。灯台から沼への道は雑草が伸び放題で、人が住んでいるとするならあまりに手が入れられていなかった。リブロールのあるはずのところを見ると、ウォーターランドにリブロールをつくる前の景色そのままだった。海側につくったデッキも波除もないので、海の波がそのまま岩場の岸に打ち寄せている。ただ、建物がないだけではないなにか理由のわからない違和感があったのでしばらくそこに座って景色を見ていた。

もし、水平線に船でも見えたときにはどう考えればいいのかだろう。それが、船長の船であったとしたら、頭の中はますます混乱するばかりだ。船長と自分、それにノートの主が同時に会することになったらと想像するだけで眩暈がしてくる。

船長に「先に着いたので待ってました」と言うと、「それはありがたい」と感謝され、「こちらがノートさんです」と紹介する。「はじめまして、お会いできて光栄です」という会話が交わされる。「こちらは、はじめてですか」という問いかけに「定期船なのでときどき立ち寄りますよ」と船長が答える。「そうでしたか。よかったですら灯台にも寄ってください」と誘われ、二人でノートさんの住まいを訪ねる。「かわいい猫ですね」というと「インク」という名前ですと聞かされる。「どちらから来られましたか」と質問されて、「メインランドのほうから」と答えると、「実は私もリアヌシティのほうから来たばかりなんです」と言われる……。

ありえない。だいたい今はいつなんだということだ。ウォーターランドに正確な時計なんてないと言っても限度というものがある。それじゃあ、今はいつなのかと考えると、ノートのあった時間が唯一の拠り所になる。ということは200年前……。どうしてここにいるのかは、夢の中と考えればすべて解決するというわけだ。夢の中でさえあれば……助かる。慌てず目覚めを待とう。

どの波も同じように打ち寄せてくるばかり。灯台も色形こそ違うものの同じ場所に見える。エバンヌやリブロールがないことだけが違和感を感じさせているとも思えない。なにかが決定的に違うと思いつつも、時間だけが過ぎて行った。

そして夕日が落ちるときになってやっとその決定的な違いに気づいた。信じられないことに夕日が東側に沈んでいたのだ。これは地球の自転が変わったということか、それとも島の向きが変わったのか。それともまったく別の島にいるのか。自然の原理原則と思われることさえ違うこの世界は一体どこなのだろう。

同じ島だと思い込んでいる自分の記憶の方が違っているということか。もはや、同じということの意味することさえわからなかった。記憶と現実のどちらが正しいかと問われれば、目の前にある事実のほうが正しいに決まっている。たとえ、それが自然摂理に反するようなことであってもだ。時空を鏡で反転させるなどということはあるまいだろうけど、できればそうであってほしいと思うほどに頭が混乱していた。

目の前で起こっている現実を受け止めることができなくて、浮力を失った飛行船のように下がりはじめた太陽を追うように東の方に向かって歩いた。あの太陽はほんとうに同じ太陽なのだろうか。もはや、自分の目さえも信じるができない。夢が覚めることを何度も何度も祈った。出島の巫女が夢から呼び戻してくれないだろうか。それともノートの主と会うことで何か救われることでもあるのだろうか。

太陽はこちらの不安をよそに東へとすべるように落ちていく。途方に暮れてチャルド川の方へ行ってみると川幅こそ多少の違いがあるものの、そこには同じように川が流れていた。水面を眺めていると、ぴよんと魚が跳ねた。広がる水門を見ているとまた別のところで魚が跳ねる。夕間詰めの捕食の時間なのだろう。自然のなにげない営みを見ていると、不安な気持ちがおさまるから不思議だ。しばらく見ているとその繰り返しがぴたりとやんだ。上の方から笛を吹くような鳴き声が聞こえたので見上げるといつのまにかナツヨビが飛んでいた。水面に目を戻すと、その影が写っていた。

朝から何も飲まず食わずでいたことに気づき、川の水をすくおうとして水面に手を伸ばしたときに、さらに信じられないことが起こっていることに気づいた。水に映った自分の顔が別の男の顔だったのだ。思わず水を救おうとした手で自分の顔をなでた。水に同じように顔をなでる男の姿が映った。その顔は見たこともない人だった。いったいだれなのだろう。自分の若かったころにも見えない。今まで一度も見たことのない人だ。これが夢の世界であるなら、早く元に戻して欲しいと思わずにはいられなかった。何か自分を確かめるものはないかと思い、コピからもらった虹の石を探したけれど、みつけることができなかった。ここへ来る途中でなくしてしまったのだろうか。自分が自分であることさえ信じられなくなりそうな不安な気持ちに襲われた。

深夜になっても灯台に明かりが灯る気配もない。焚き火で暖を取るようなことはしなかったのだろうか。沼のほうに行くとボートが一艘置いてあったので、少し沖に出て海から灯台を見つめることにした。

時間はちょうど、西の水平線から月が目覚めて昇りはじめるところだった。舞台が暗転し太陽と主役を交代した月は見たことがないほどに大きく威圧的だった。そして今夜の月は夜の太陽と見紛うほどに赤く燃え上がっていた。

第24話 海の使者

夕暮れの空には雲一つなかった。暗闇への不安もあるけれど、今夜は月明かりが闇を照らしてくれるだろう。このまま目が覚めなければ、一人この島で夜を過ごすことになる。まるで、ノートの主の最初の夜を迎えるような気分だ。違うのは灯台にすでに暮らしている人がいること。身に危険を感じるようなものがいなければいいが、そんな保証はどこにもない。今夜は眠れないかもしれない。いっそのこと海に出ていた方が安全かもしれないと思った。

沼の方に見えたボートは長い間使われていないように見えた。メインランドから渡る時に使ったのがこんなボートだったとしたら、相当の勇気が必要だったろう。ただ、この島の周りを廻る程度であればなんとかなりそうだ。さいわい今夜は風いだ穏やかな海だった。

海に漕ぎ出してすぐに、時計と反対回りに向きを変え灯台の裏側を目指した。北側は比較的浅瀬が多いはずなのでなにかあったときも安心だと思ったからだ。真っ赤な月は水平線を離れ、星で埋め尽くされた夜空に海面からはじかれたようにぼんと浮かび上がっていた。いつのときも変わらないのはこの星空だけだ。夜空までもが違っていたならば、この世界はもはや自分の知るところの世界でもなくなるという不安にかられるだろう。

沖に少し出たところで、なにか大きなものにぶつかり、船底を激しく擦った。暗闇のせいで何が起こったかわからなかったが、大木にロープをくくりつけて湿った地面を引きずったときと同じような鈍く長い音がした。このあたりは浅瀬のはずなので、潮の関係でボートも通れないような浅瀬ができていたのだろうか。

気になって水の下を覗き込むとキラキラと緑色に明滅する透明な何かが、ボートの下を前方方向に向かって進んでいるのが見えた。ときどきボートがその上に乗り上げるようにして、前に押し出されているように感じる。水深は予想していたのと違って、思った以上に深く見えた。

そのとき、どしんという激しい衝撃とともに後ろからなにかがぶつかった。危うく海に投げ出されそうになり、ボートの縁にしがみついた。振り返ると、大きな柱が水中から突き出て、それが船を前に押すようにしている。しかし、柱のように見えたのは赤い月明かりのせいだった。それが大きなヒレであることに気づくのに時間はかからなかった。ボートの後ろの水面に突き出たヒレは透明感のある深みのある緑色だった。ノートでしか知らないあのミドリ鮫、それも想像もできないほどの大きさのミドリ鮫だった。巨大な鮫の背中に乗ったボートはどんどんスピードをあげていった。それは灯台を通り越して、水面に浮かぶ赤い月のほうに向かっていくように思えた。島はみるみる小さくなって行く。

さすがに身の危険を感じて、遠ざかる島に目を向けると、その後ろに島を包み込むように横たわる大きな影が見えた。最初は雲の影かと思ったが、しばらく見ているうちにそれが陸地だとい

うことに気づいた。雲でなければそれ以外に思いつくものがなかったというのが正しかったかもしれない。昼は視界に入らなかった陸地が見えることに自分の目を疑った。しかし、それはままぎれもない現実だった。

それにしてもこんな近いところに大陸が見えるというのはどういうことだろう。それも島の南側の目と鼻の先に……いや、月との関係でいうと北側になるのか？ あれがノートの主が渡ってきたメインランドだというのだろうか。こんなに近い位置にあったとは。蜃気楼かとも思ったが、そうだとしたらそれはあまりにも鮮明すぎた。まるでノートの世界に入ったかのような現実には驚くばかりだった。

鯨は想像していたよりもはるかに巨大だった。背ビレがなければ鯨と見間違えただろう。その大きさに反して、その泳ぎ方は鯨とも思えないとても優雅なものだった。まるでこの海の守り神であると言わんばかりに、威厳すら感じさせた。迷うことなく真っ直ぐに進むミドリ鯨は明らかに目的を持って何かを目指していた。

これ以上島から離れると戻れなくなると思い、ボートを傾けて鯨の背中から離れようとしたときに、世界が崩れてしまいそうなほどの地鳴りがした。いや、地鳴りではなく大気が軋んだというほうが正しいかもしれない。まるで地震のような波動が空間を形作るすべての粒子を震わせたようだった。そして、それまで見えていた星空がガラス細工のように割れて地上に落ち始めた。赤い月さえもが上下に大きく割れ、半分が海に落ちそうになっている。これが夢でなければなんだというのだろうか。

一瞬のことだった。鯨が大きく寝返るように身体をよじらせたかと思うと、海底に向けて大きく方向を変えた。ボートはいとも簡単に空中に投げ出され、そのまま回転し船首から海に落下していった。ボートと離れた身体は、時間が間延びしたようにゆっくりと海面に落ちた。目の前が、無数の泡でいっぱいになり、泡のひとつひとつに鯨の姿が映った。

どこまでも紺碧な海に、揉まれるように回転する赤いボートとのたうつようにしながら海底に向かう鯨の輝く緑、この世のものと思えない幻想的な時間が流れた。

海底に向かうにつれ、海流が渦巻きのようになって吸い込まれていく。まるでこの島から、どこか違うところへ流れ出て行くような……呼吸はすでにできなくなっている。間もなく、視界も無数の白い泡に遮られボートも鯨もなにも見えなくなった。

第25話 覚醒

誰かの呼ぶ声が聞こえる。目を開くと見知らぬ家で横になっている自分に気づいた。見上げると何人かの人々が心配そうな顔をしてこちらを覗き込んでいた。

「あ、目を開いた！」誰かが大きな声をあげた。まわりで、よかった、よかったという声がある。

「ここは……？」

「あんた、湖畔の道端に倒れていたんだよ」一人の男が言った。

出島で気を失ったのかもしれないと言うと、見つかったのはそこから少し離れた場所だったと説明してくれた。

「六界錐のおかげだよ。あそこに戻ってきたんだよ。あんた、運がよかった」

「あの、石碑のところですか？」

「そうだと、感謝しなきゃだめだ」

意識が朦朧としてみんなの言っていることの整理ができない。そもそも、ここはウォーターランドではないのか？ そうであるとすると、あれは全部幻想だったということか。それにしても、記憶が鮮明に残っている。

日にちを聞くと意識をなくした日からもう3日も過ぎている。

「私は道端に？」

「そうさな、湖畔の棧橋のあたりだ。偶然、コノンが舟でジノ婆のところに行ったから見つかったようなもんだ。あんた本当に運がいいよ」みんながそうだそうだと言わんばかりにうなづいている。

「ユイローの茂るところに3日もいたんじゃ、普通ならお陀仏だ。とくにあそこのユイローの幻覚作用は強いと言われているからな。花粉の飛ぶ今の時期は危ない」

「みなさん、ありがとうございます……」少し事情がわかってきて、コノンさんがだれだかわからないままにお礼を言った。

「誰か、コノンに伝えてやれ。心配しているだろうから」年長らしい人が言うと、どこかで「今日はリアヌシティのほうに出かけたよ」という声が聞こえた。体調が戻ったら会ってお礼を言わ

ないといけない。その人が命の恩人ということのようだ。

こちらが思いのほか元気だったのに安心したのか、集まっていた人たちもそれぞれの家に戻って行った。意識がしっかりしてきたところで、残っていた人が用意してくれた雑炊をごちそうになった。少し落ち着くと出島のジノ婆さんのことが気になり出した。あのときいた人はジノ婆さんではなかったのか。

「ジノ婆さんはこのことをご存知なんですか？」最後に残ってくれていた人に聞いて見た。

「どうなのかね。ジノ婆が知ってればこんなことにならなかつたらうし」

「そうですか……」なにか釈然としないところもあったけど、意識のなくなる前のことがはっきりしないのだからどうしようもない。あらためて出島を訪れないといけないと性懲りもなく思ってしまった。

そのあとは、気になっていた六界錐のことを教えてもらった。

言い伝えでは遠くへ旅立つときや、誰かと生き別れになるようなことがあると、あの石が目印となってどこかで結びつけてくれるというような話だった。それは生死を超えたものと言い伝えられているらしい。墓石と違って本人が自分のためにつくるので、弔いのためではないという。この地へ戻れるようにという願いが込められた石というわけだ。

昔からリアヌシティは人と土地との結びつきが強いところで、土地信仰のひとつとして口伝えに残されてきた伝承のひとつだという。もともとヤイハブ一族がこの地に移り住んできた時も、もといた場所にたくさんの六界錐を残したと聞いているとのことだった。

ただ、最近ではそれを信じる人も少なくなって、オールドリアヌの歴史や伝承に傾倒する人が稀につくることがあるぐらいだという。この地を心の拠り所として、生きる上でのアンカーとして楔を打ち込むつもりで作る人がいるのかもしれない。

石碑はつくらないまでも、六角の小物はどこの家にでもあって、お守りとして肌身離さず持っている人は今でも多いという。現物を見せてもらうと、短くなった鉛筆のような形で、先の窪んだほうに鎖がついてロケットペンダントのようになっていた。

「ところで、あんたはここに知り合いはいるのかい？」

「旅行者みたいなものなので……知っている人というと、ホーラー・ヤイハブさん？」

「あはは、番人のホーラーか」

「番人なんですか？」

「自称、歴史文庫の番人だそうさ。ちょっと知恵が足りないが、あの子はあの子で一

生懸命やってるんだがね」

「そうでしたか」

「よくなるまでもう少しかかるだろうから、それまではここにいるといい」

そこまで話して、ここが助けてくれたコノンさんのお祖母さんの家だということがわかった。このお婆さんも100歳は優に超しているのだろう。自分など子どもぐらいにしか思ってもらえていないのかもしれない。

身の回りのものの説明をし終わると、お爺さんの仕事を手伝ってくると出て行ってしまった。

一人になると、マリーさんのことを思い出した。3日も戻ってないとなるとかなり心配をかけているだろう。連絡を取ろうにも、その方法すら思いつかない。ここは1日でも早く体調を戻して港に戻るしかないだろう。

第26話　なくしたもの

その日は夕方まで、そのまま横になったまま体を休めた。どうやら外は雨が降っているようで、雨垂れの音が窓の隙間から聞こえてくる。

ドアの外に人の気配を感じたので耳をすませていると、ゆっくりとドアが開いた。

「起きてますか？」遠慮がちな小さな声だった。

「あれ、もしかしてあなたがコノンさん？」

コノンさんというのは、ウォーターランドの灯台で会ったあの無口なうさぎ少女だったのだ。まさかこんな形で再開するとは思ってもしなかった。

「よかった」安堵したような笑みが彼女の顔からこぼれた。

手には小さな瓶を持っていた。

「滋養にいいという薬草を絞ったものなので、よかったら」枕元に置いてくれた。

「ありがとうございます。コノンさんのお陰で命拾いしました」

「私は偶然居合わせただけで何も……でも、ほんとうによかった」

「道端に倒れてましたか？何も記憶がなくて」

「湖から這い上がったところで意識を失ったようでしたよ。ボートから落ちたのですか？」

最後に海に落ちた記憶と話はつながる。ただ、それは湖の話ではないし、場所もここではなかった。

「なんだか、記憶が途中から途切れていて……」

「鮫がどうだとか、うわ言のように」心配そうな顔でこちらを見ている。

やはり、夢を見ていたのだろうか。そうだとしたら、出島の記憶と海に飛び込んだ記憶がどうしてもつながらない。無意識に湖に飛び込んだとしか考えられない。あのとき見えた人影が現実

であれば、どうしてこんなことになったのか。

「ジノ婆さんに会いに行かれたんですね」と聞いて見た。

「ときどき相談ごとがあるときに……」少し表情が曇ったように見えた。

「私は残念ながら話をできませんでした」

「ジノ婆さんもオルターさんが来られたことを知らなかったみたいですね」

ジノ婆さんが知らない？ あのときいた人がジノ婆さんではなかったとしたら、いったい誰だったのだろう。

「ジノ婆さんは出かけることもあるんでしょうか？」

「ほとんど家に。起きてるか、寝てるかの違いだけで」

「猫はいつもあそこに？」

「ほとんど見かけませんが、あのあたりに居着いている猫がいますね。猫がいるときは、この子が嫌がるんです」と背負っていたウサギを覗くような仕草をみせた。普通より少し短く丸い耳の白ウサギが、いつものように顔を出していた。

出島で見たものは、自分にだけしか見えない幻覚だったのだろうか。やはりユイローの強い覚醒作用だったのかもしれない。

「あの湖は場所によってですが、底がないほど深くて。ボートは気をつけたほうがいいですよ。あそこで行方がわからなくなって戻れなくなった人を何人も知ってます」

「そうなんですか……」ちょっと軽はずみに行動しすぎたことを反省した。

「これはウォーターランドで摘んだ押し花です」カードのようなものを見せてくれた。それは初夏に咲く紫の小さな花だった。焼けたところにたくさん群生していた花だ。また咲き乱れた景色を見ることができようかと思いながら懐かしく見た。元気を出すようにというコノンさんの心遣いを感じた。

「あそこの灯台から海を見た時に、この世界にまだこんなところが残っていたんだと思って」景

色を思い出し遠くを眺めるような目をした。「ほんとに世界のすべてを見渡せるようなところなんですね。あそこって……」

「何もない宇宙に浮かんでいるようだったでしょ？」

「わたしたちのリアヌシティは何をなくしてしまったんでしょうか」突然リアヌシティの話になった。

「コノンさんは、ウォーターランドにその答えを探しに？」

「なくしたものがわからなくて……大切なものだと思うのですが」

「物ではないですね？」

「そうです。大切な何か……オルターさんは、なくしたものはありますか？」

「古い記憶かな」

「思い出ですか？」

「思い出じゃなくて記憶ですね」

「それは大切ですよ。みつかるといいですね」

「私は、きっと何かの気持ちをなくしたような気がするんです」

「気持ちですか……」

「ごめんなさい。変な話をしました」急に我に帰ったように微笑んだ。

「ウォーターランドに行ったときにそれを思い出せそうな気がして、わすれないようにそのとき咲いていた花を摘んできたんです」

「コノンさんのような人にも何かの気持ちをわすれたなんてあるのかな」

「どうなのでしょう。ときどき気持ちの空白を感じる時があつて」

気持ちの空白という言葉をはじめて聞いた、どうも記憶ではないようだ。あまり詳しく聞くのもどうかと思い、話題を変えた。

「そのウサギさんは、いつもいっしょなんですか」

「この子は事故で足をなくしたんです」背中のうさぎのほうに顔を向けた。

「それで、背負ってるの？」

「もともと好奇心旺盛な子だったので、いろいろなところを見せてあげたくて。私たち、なくしたものの同志なんです。リアヌシティも同じような気がします」

「じゃあ、記憶をなくした私も仲間に入れてもらえますね」

「はい。でも、命だけは大切に」

「ほんとだね、あはは」

「それでは、私はこれで」

「コノンさん、ありがとう」

彼女はにこりと微笑むと、「お大事に」といい残して部屋を出て行った。

彼女はどうしていきなりあんな話をしたのか、誰かに聞いてもらいたかったのだろうか。それで気持ちが癒されるのであれば、いくらでもお手伝いはさせてもらおう。それが恩返しになるのであれば。

その夜は、疲れが溜まっていたせいか、夕食もしないままにまた眠りに落ちてしまった。

そして、またあのときのような夢を見た。

渦に流れ込んで行くようにして泳ぐ鯨が、振り向きながら「何を見たいか……何を……」と聞いてきた。しゃべろうとしても気が焦るばかりで声は出なかった。「今夜はどこ……」ぶくぶくという泡の音と重なる震えるような声の問いかけは、いつまでもこちらの答えを待っているようだった。

声を出そうともがいているうちに、強い光がミドリ鯨とこちらの間に割り込むように差し込んだ

。そのまぶしさに先を行く鯨の姿を見失いそうになる。離れていく鯨が「だいじょうぶ……それがいい……」といいながら夜空の彼方に去って行く。

次に目覚めた時が、湖のほとりでないことだけを祈りながら鯨の行方をずっと見ていた

第27話 うさぎの庭

「だいじょうぶかい？ それがいいから、試してみるといいよ」という声が聞こえた。

薄目を開くと窓から柔らかな朝日が差し込んでいた。鳥たちの賑やかな声が聞こえてくる。昨夜の雨もすっかりあがったのだろう。枕元を見ると粉薬と食事が用意してあった。コノンさんのお祖母さんが用意してくれたのだろう。

「少しはよくなったかい？」お祖母さんは椅子から立って、カーテンを少し開けてくれた。

「あ、よく寝ました。もう、朝なんですね」

「ははは、もうお昼時だよ。さっき客人が来て、出直すと言って帰ったよ」

「私を訪ねてですか？」

「夫婦連れで、子供もいたようだ」

たぶん、トラピさんたちだ。心配かけてしまった。ここを探し当てるのも大変だったはずだ。

「公書館に行って、昼過ぎにはまた来るって言ってたようだよ」

寝ていたから起こさないように気遣ってくれたのだろう。戻って来るまでにはまだ時間がありそうだったので、身体感覚を取り戻すために家の前の庭を少し歩いて見ることにした。家の入り口にある石の階段に足をかけたときに。階段が大きく欠けていてつまずきそうになった。慌てて壁に手をつけて身体を支えた。こんなところでまた怪我をしたのでは笑いものだ。ころびそうになったのを見ていたお祖母さんが「古い建物だからね、その階段は気をつけておくれよ」と言った。

庭と言っても塀で囲われているわけでもなく、広い草原の一部をレンガで仕切ってあるだけの簡単なものだった。お世話になった家は、周りにある家よりも敷地も建物も大きく、昔はなにか別の目的で建てられたもののようだった。家の周囲を見渡してみると、バス停のある眼鏡橋の近くだった。もしかすると、あのときバスに乗っていた老婆たちも見舞いに来てくれていたかもしれない。そう思うと少し恥ずかしくなってしまった。いい年をして、池に落ちたもないだろう。

庭の半分はウサギの遊び場になっていた。コノンさんはほんとうにうさぎが好きなようだ。ざっと数えただけでも20匹はいそう。4、5匹ごとに固まって仲良く草を食べている。なんと

も言えず微笑ましい。このかわいいうさぎをウォーターランドに持ち帰れたらきっとみんな喜ぶだろう。助けてもらった上にこんなお願いをするなんて、あまりに身勝手な話だと思いつつも、意外にコノンさんも喜んでくれるかもしれないと思う。

からだの模様や目の色を見ていると、それぞれ少しずつ個性があつて、同じうさぎが一匹もない。こんなうさぎが島を自由に走り回ってる姿を想像しただけで楽しい気分になる。ノートの主にもこういう友達がいたなら、島の生活もきっと楽しかっただろう。

ずっと見入っている姿を見て、洗い物をしていたお祖母さんが話しかけてきた。

「みんな名前があるらしいよ。どこかで拾ってきちゃそこに入れるからたいへんさ」

「コノンさん、面倒見が良さそうですからね」 こういうところにも人柄は出るものだ。

「一番可愛がつてるのは、ピールだがね」

「どの子ですか？」 たくさんいるうさぎの中からグレーの一匹に目星をつけて聞いて見た。

「いつも背負ってるやつだよ」

「ああ、足のない……」

「そうだね。あの子は子供の頃から、なにか足りないのが好きでね。おもしろい子だよ」

足りないものがあるのが好き……。コノンさんの人柄がなんとなくわかるような気がする。なんでも足りていればいいわけではないし。なにか足りないものを補い合うときにやさしさや思いやりも生まれる。

「そんなもんだから、お人好しもほどほどにしないと悪い人に騙されるよっていつも言ってるんだがね」

「でも、人を信じられることって大切なことだと思いますが」

「信じれば救われるかね」

「救われた人間としては、そう思いたいところですね」

うさぎの中の一匹が鼻をヒクヒクさせながら近寄ってきたので、背中をさすってやった。

「この子にまで、心配をかけてしまったようです」

「ははは、あんた、いい人みたいだね。コノンをよく頼むよ。あんたの島が気に入ってしまったみたいだから」

「私の命の恩人ですから、それはもちろん」

ウサギの餌やりを手伝って、部屋で薬膳だという料理をいただいていると、外でトラピさんの声が聞こえた。コノンさんのお婆さんと話をしているようだ。しばらくすると、「じゃあ、失礼して」という声がして、部屋に入ってきた。

「あ、オルターさん生きてた！」冗談だか本気だかわからないトラピさんの大きな声に驚いた。

「あはは、そんなに簡単には……ご心配おかけしました」

「いえいえ、オルターさんさえ元気なら。ほんとによかったです」

「あれ、ナミナさんたちは？」

「以前聞いたマリーさんという方も心配されているだろうということで、そちらの連絡に行ってもらいました」

「あー、それは本当に申し訳ない。それも気になっていたので」

「これで、安心してオールドリアヌ探検を続けられますか？」

「いやあ、一人で歩くのはどうなのでしょう」

「あはは、もう同じ間違いはないでしょう。気をつけるのはボートだけです」

そう言われても、何を間違ったのかもわからないので、気をつけようもないのだけれど、何につけても用心するにこしたことはない。

「宿ならうちを使うといいよ。ここはもともと共同住宅だったところだから。部屋はいくらでもあるよ」コノンさんのお祖母さんが言った。

「オルターさん、よかったですね。こんなにまで言ってもらって」

トラピさんも、自分のことのように喜んでいるけど、そんなに人の世話になってばかりもいられないだろう。

「僕らもときどきお世話になるので」そう言うとおばあさんに「よろしくお願いします」と頭を下げている。

「いいともいいとも」お祖母さんもうれしそうに答えている。

寝ている間にトラピさんとお祖母さんはすっかり仲良しになっているようだ。トラピさんは、だれとでも遠慮なく打ち解けられるからたいしたものだ。手品でも見せたのかなと勘ぐってしまうほどだ。大道芸をやるような人であればこそなせることなのだろう。

第28話 もうひとつの扉

翌日はすっかり体調も戻って港に帰れそうなところまで回復したので、それをコノンさんのお祖母さんに伝えた。

「ほんとうにもういいのかい？ また、どこかで倒れたなんてならないだろうね？」

「いや、3日も休ませてもらいましたからもう大丈夫です。ほんとうにありがとうございました。このお礼は必ず。オールドリアヌがいつまでもこのままでいられるように私にできることがあればなんでもやらせてもらいますので」

「あれま、それは心強いね。でも、無理はしないでおくれよ」

「また、迷惑をかけることがない程度にですね。気をつけます。ほんとうにいろいろお世話になりました」

「あたしの願いはコノンのことだけだから、よろしく頼んだよ」

「もちろんですとも。島に来ることがあったら私を訪ねるように伝えてください。コノンさんは、今日は？」

「あの子はリアヌシティにいるから、また、しばらく戻らないよ。向こうにもたくさんのうさぎがいるらしいからね……」

「そうでしたか。それでは、くれぐれもよろしくお伝えください。ありがとうございました」

挨拶を終えると石畳の道に出た。足の裏に伝わるごつごつした感触がうれしい。久しぶりに外の空気を吸った気がした。澄み渡った空気が清々しい。少し歩いたところで後ろから「オルターさん気をつけるんだよー」というお祖母さんの声が聞こえた。振り返って手を振っていたお祖母さんに深くお辞儀をした。

バスに乗る前に、どうしてももう一度公書館を見たくなった。見たいというよりも、このまま帰ったのでは、溺れただけの話になってしまうという情けない状況をなんとかしたい気持ちからだったかもしれない。また湖に一人で行くというわけではないから、きっとこれぐらいは大目に見てもらえるだろう。

公書館に着くと前に来たときと同じで、人がいる様子はまったくなかった。中に入ると、また

あの古い本の匂いに包まれた。瞬間的に時間を移動をしたように感じる。この中にいるだけで、いにしえにつながる扉の前に立っているような気持ちになるから不思議だ。

今回はあの六界錐に関するものはないか棚を探してみたが、トラピさんの言っていたように、まるで迷わせるための迷路のような本の並びが待っていただけだった。驚いたことに、前回来たときと並び方が大きく変わっているところさえあった。あの時見た地図の棚が消えてしまったのに気づいたときは愕然とした。緑の手帳に細かく書き留めていた棚配置の記録は何の役にも立たなくなった。

意図的に探せないようにしているという、トラピさんの言っていたことが正しいと思わざるを得ない。これでは、ここを利用する人がいないのも当然だろう。名前こそ歴史資料館となっているものの、誰にも歴史を伝えることのない、誰の役にも立たない資料館になっていたのだ。これをノートの主が知ったらなんと思うだろうか。

トラピさんの言うとおりに、入口が他にあるとするなら、どこかと地下でつながっているということになる。あの男が消えたのは、地下への入口がこの建物の中にあっただからだと考えると、書棚や床板のすべてが隠された出入口に見えてくる。それらしいものがあると拳で叩いて、一つ残らず確認をしていった。もう、六界錐について調べるどころの話ではなかった。自分が昨日まで寝込んでいたということもすっかり忘れて、床を這うようにして秘密の扉を探した。

ひとつの棚を調べていたときに手を滑らせて本を床に落としてしまった。床の響きがおかしかったので落ちたあたりを手探りで探しているときだった。目の前の棚が突然軋むような音を立てたと思ったら、棚の隙間にこちらを見ている人の目があった。

「あっ……」という声が出て、すぐに隙間は閉じられてしまった。すぐに開けようとしたけれど、かんぬきでもかけてあるのかまったく動かない。

「すみません。開けていただくわけにはいかないですか？」と声をかけてみた。

「……」当然、何の返答もかえってこなかった。

やはりここに、もうひとつの出入口があったのだ。それは本来の入口の反対側に位置するもっとも奥にあたる場所だった。

仮にその扉が開いたとしても、その先にあるのは裏庭だけのはずだった。すぐに、建物の外に出て裏側に回ってみたいけれどあたりに人の気配はなかった。鳥たちのさえずりが幾重にも重なってこだました。それは、何も見てない、何も知らないと言っているように聞こえた。石の壁を叩いてはみたものの、仕掛けを知らないものには開けることはできなかった。

ホーラーという男はこの扉から出て行ったのだろう。そうだとすると、地下に繋がる通路は一体どこにあるというのだろうか。子供のような冒険心がまたむくむくと頭を持ち上げてくる。

ただ、一人で探しまわっているうちにまた事故にでもあって迷惑をかけてもいけないと思うと、さすがに自制心のほうが勝った。気になる入口探しはまた別の機会にあらためることにして、今日のところはおとなしく退散することにしよう。それがこの街の人たちに対する感謝の表し方というものだろう。

バスが来るのを待って、リアヌシティのセントラルステーションに戻った。ここまで来ると自分の世界に帰ってきたという気がするのがおもしろい。天まで届く雲の塔のほうが湖より身近に感じるのはどういうことだろう。リアヌシティのほうが科学という人の手の届くところにあるものでできているので安心感をおぼえるせいなのか。

今回の不思議な体験は、身近になるはずだったオールドリアヌが、前よりも遠ざかってしまったような気させられる。ただ、その判断が正しいのかどうかはまだわからない。

サーカス小屋に寄って、戻ってきていたナミナさんにもお礼を言った。マリーさんも心配して待っているということだった。早く戻って安心してもらうことが今の自分が一番にやらなければならないことだろう。

エキスポラーに乗るといつもの生体チェックが始まった。ディスプレイを見ると、意識のなかった3日は赤字でDISAPPEARANCEの表示が点滅していた。消失ということは居所不明ということか。あれが、意図的に行われたことだとすれば、監視対象になるような行為だったという警告なのかもしれない。リアヌシティのシステムで自分の居所を捕捉されていないということは.....私は一体どこにいたということなのか.....。

第29話 水調べ

「オルターさん、いますか？」

階下のほうから聞き覚えのある声がして目が覚めた。昨日までの疲れのせいで、すっかり寝過ぎしてしまったようだ。掛け時計の針が8時30分を指している。

エントランスでマリーさんが話している声が聞こえる。少しすると、「それじゃあ、オルターさんによろしくお伝えください」という声がしてドアの閉じられる音がした。慌てて窓から顔を出して見るとルーラーさんが早足に坂を下って行くのがみえた。もしやと思って港のほうを見ると、船長のオフエーリア号が港に停泊しているのが見えた。もう、荷下ろしを始めている。連結した船にはいつも以上に大きな荷物が乗っているように見えた。船長は何を運んできたのだろう。

着替えを始めるとドアをノックをする音がして「オルターさん、お客さんですよ」というマリーさんの声がした。ネモネさんが到着したのだろう。

「あ、すぐに行きます！」

顔も洗わないで、寝起きの顔のまま階段を降りた。

「お久しぶりです」顔を見た途端に待ち兼ねたようにネモネさんが言った。ブタ君もしっかり後ろにくっついている。

「長旅お疲れさまでしたね。急な話だったけど何かありましたか？」と聞くと、いつものように控えめな口調で「湖を見たくて」という返事だけが返って来た。

「あ、湖を見に？」ネモネさんは笑顔で頷いた。あまりにそっけない答えに少し拍子抜けしてしまった。湖のことで頭がいっぱいになっているような笑顔を見て、湖のことを書いて送ったのは自分のほうだったことを思い出して苦笑いしてしまった。

「オルターさんがきれいというのはどんどころだろうって」

「ああ……そうだよ。見たことないほどきれいでね……」着いたばかりのネモネさんに、湖で事故にあったなんてとても言えない。そばにいたマリーさんが下を向いたまま話を聞いている。

挨拶が終わると、マリーさんが「とりあえず、お部屋に荷物を」と言って2階へネモネさんを

案内して行った。5日もかけてきたわけだから、まずはひと休みしてもらうのが迎える側の心遣いというものだろう。さすがにそのあたりは、マリーさんも手慣れたものだ。

ネモネさんが部屋に入っている時間に準備してあった朝食をいただいた。出てきたのはたぶんのネモネさんがお土産でもって来てくれたパンだ。久しぶりに食べたエモカさんの長時間醗酵のパンはおいしかった。やはり、あの島の酵母は特別なのだろう。

しばらくすると部屋着に着替えたネモネさんが降りてきた。

「スレイトン・ケープはほんとにいいところですよね」

「あれ？ 前にも来たことありました？」

「えっと、ウォーターランドに行くときに、この港経由で行ったので」

「あー、それはそうだね。ははは」自分だけが知らなかったということだ。島に船できた人はほとんどこの港経由のはずだし、みんな船長の船で来たのだから知ってて当然だった。

「湖はここから近いですか？」ネモネさんはすぐにでも出かけるつもりらしい。少し事情を説明しないといけないだろうと思い、「向こうはこちらと違うことが多いから、あとで詳しく説明をしましょう。出かけるのはそれからでも遅くないから」と伝えると、少し納得がいかないような顔をしていた。

「カバ君はお部屋に？」とマリーさんが聞くと、「バスタブが気に入ったようで」と申し訳なさそうにネモネさんが言った。さすがのマリーさんもカバを同伴する宿泊客を迎えるのははじめてだ。「お水加減はだいじょうぶかしら」とマリーさんらしくないことを言っている。だれでもあのカバをみれば普段の冷静さをなくすのだ。

「ところで、ウォーターランドのみんなは元気でやってますか」

「ミリルさんは、ちょっと寂しそうかも、でもみんな仲良くオルターさんのお帰りを待ってますよ」

コピにもらった石をなくしたことを話して、あの子に何か変わったことはないかと尋ねると、普段通り元気に走り回っているということだった。それを聞いただけでも胸のつかえがひとつ取れた気がした。

「コピちゃんもいっしょに来るって大変でしたよ」とネモネさんが困った顔をして笑った。

「いつかコピちゃんも連れてきてあげましょ」とマリーさんがコピに話しかけているようにやさしく言った。マリーさんもコピのことが気になっているようだ。無垢なコピは誰からも愛される。

「そうだ、火事のあとはどうですか？ ずいぶん緑が生えてきたと手紙に……」

「そうなんです。信じられないと思いますが、木までどんどん伸びて。みんなびっくりしていますよ。ノーキョさんは、水のせいじゃないかって」

「ほお、水に成長促進作用でもあるのかな」

「詳しいことはわかりませんが、あそこの水は普通じゃないことは確かです。今、スロウさんとノーキョさんが二人でいろいろ試してくれていて、広場が青空実験教室のようになってますよ。コピちゃんが、実験班長だそうです」

「あはは、それはいい」

「ネモネさんの話を聞いていると、あの透明な海と空の色が目浮かぶわね。また、行ってこようかしら」マリーさんが目を細めた。

「マリーさんがいないとここはどうなります？」他人事ながらちょっと気になった。

聞かれるのを待ってたように「オルターさんに留守番をお願いしようかしら」と本気とも冗談とも取れないようなことを言うので、「マリーさんのように気が利かないからだめですね」と答えると、「心配ないわ」と話が決まったかのように言われてしまった。これはもしかすると本気で言っているかもしれない。信頼されてちょっとうれしいような困ったような気分だった。

「では、オルターさんが留守番で、私が島のほうに」もう心は島に行っているような顔をしている。

湖がいかにきれいだったかという話をしているうちに、ネモネさんが湖の水も特別なものかもしれないと思っていることが伝わってきた。その様子に自信を得て、この数日間の奇妙な体験のことを残さず話してみた。するとネモネさんは、幻覚ではなくて実際にあったことかもしれないと言ってくれた。その言葉を確認した上で、一人で行くのは危ないからよく考えた方がいいと言ってみたが、カバのミームがいるから平気だと、こっちの心配をまったく意に介する様子もない

。ネモネさんのようなおとなしそうな人でも、人は見かけによらないものだ。最近の若い女性はほんとうに元気がいいと思う。

「水のほんとうの力なんて誰も知らないと思うんです……」と手に持ったコップの水を見ながら独り言のように言った。

「ほんとうの力か……少なくともオールドリアヌの年寄りがみんな長生きなこととは関係があるような気はするね」

「きっとそうなんです」と言うと、マリーさんの出した地図をじっと見入った。バスや舟の乗り方など、行き帰りの行程を具体的に考えているようだ。

「湖に行くにはそこを管理下に置いている会社の運営しているエクスポーラーという列車に乗らないといけないよ」というと、「一人旅は慣れてますからだいじょうぶです」とあっさり聞き流されてしまった。なかなか管理の意味が伝わらない。もし、ネモネさんまで行方が知れなくなったら自分の責任だと思うけど、本人はそんなことはお構いなしに「明日見えます」とまったく迷いなど感じられないものだった。

「心配なのはオルターさん？」と言ってマリーさんがネモネさんを見たけれど、地図に見入っていて人のことまで気が回らないようだ。

「まあ、心配なのはこちらだろうけどね」と言うと、ネモネさんも気がついたようで、二人でそろってこちらを見て笑いをこらえているように見えた。

夕方になって船長も戻ってきた。船長は湖での体験を年寄りの妄想じゃないかと言ってなかなかまともに聞いてくれない。ただ、ネモネさんだけはずっと真剣に話を聞いてくれた。怖がるどころか湖への興味は募るばかりのようだ。

「ほんとうに、明日行きますか？」と確認すると、「ええ」とだけ言って何のためらいも感じられなかった。

「オルターさんは、ホテルの片付けを手伝ってくれますよね」とマリーさんが言うと、船長までが、「マリー一人じゃ大変だからな」と言う始末だ。もう信用もなにもあったものじゃない。

「ということらしいのでネモネさん、向こうでトラピさんを訪ねてみてください」としぶしぶ留守番を承諾した。

「オルターさんには支配人さんの仕事をしてもらわないと」とマリーさんがまた人をからかうようなことを言うと、船長が「それじゃあ、やっぱり俺がリブロールの店長やるしかないな」と笑いながら言った。

船長たちがそれぞれの部屋に入った後、オールドリアでの奇妙な体験を書き残しておこうとナーシュさんの書斎を借りた。昨日まで使われていたように皮製のペントレイに置かれた鉛筆を手にした時に、指先に感じた手触りがあの六界錐を思い出させた。不思議な体験を解き明かす何か手がかりがあるとするなら、どう考えても六界錐以外に思い当たるものがない。ユイローの幻覚というのであればウォーターランドにだって同じ草はある。それが理由とはとても思えない。ましてやジノ婆が悪いはずらをしたわけでもないだろう。

鉛筆を指先で回しながら起こった出来事を書いていると、鉛筆の6つの面それぞれに釘穴のような小さな点が打たれているのに気がついた。面の違いをはっきりさせるためのような穴だった。それぞれにあけられている穴の数は3つで、奇数の3、5、7がそれぞれ2面ずつある……。サイコロのように1から6数字が並んでいるわけではない。他の鉛筆も見たが、全く同じ数の穴があけてある。ナーシュさんが気まぐれに開けたとも思えない。転がすと、3、7、3、5、7、5、7……と同じような確率でそれぞれの数字が出る。

この不規則な数字を紙に書いてみると、どこかで見たことのある数字だと思い始めた。もしやと思って2階に上がって廊下に立ってみると、部屋の番号は鉛筆と同じ数字を含めた2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31、37……。飛び飛びの数字が73までつけられていた。縁起のいいと言われる奇数を並べているわけでもないようだ。

部屋数と合わないから宿泊客の部屋割りをこの鉛筆を転がして決めていたとも思えない。その後も、廊下を挟んだ部屋の配置から、それぞれの数字を足したり引いたりして見たもののなんの規則性も関係性も見つけることができなかった。六界錐と鉛筆と不規則な数字に何の意味があるのかわからないままに時間だけが過ぎていった。

考えるのをやめて、体験したことを書き起こしているとさらに時間は過ぎて、気がつくとき夜の12時を回っていた。そろそろ終わりにしようと、鉛筆で描いたオールドリアヌの地図を手にとって、照明に照らし出来具合を見ていると、本棚の端に置かれていた絵筆が目にとまった。ナーシュさんが絵を描くという話は聞いていない。絵筆と金属製のパレットが本でいっぱい書斎のバランスをどこか崩しているように感じた。

その筆を一本を手にとって紙の上をすべらしてみると、どこかで昔書いた水彩画の記憶が蘇ってきた。絵を書くのは得意ではないけど、白い紙に色を付けるのはきらいではなかった。滲んだ色が混ざり合い、そこに知らないあたらしい世界が生まれていくような感覚が好きだったのかもしれない。

筆の横に立ててあった金属製のパレットを取り出してを開いてみると、使い古された固形の透明水彩の絵の具が並んでいた。人のものを勝手に使うのもどうかと思いながらも、ちょっと地図

に色付けしてみたくなくなってしまった。コップの水に筆先を浸し青色の絵の具を少し溶いて湖のところを塗ってみた。湖が少し緑がかったのを思い出し、緑色も少し載せてみた。紙の上のついた小さな湖の中で2色の水彩絵具がゆっくりと重なり、まるであのときのもうろうとした意識のように、静かにお互いを受け入れながら混ざり合って行った。しばらく、その様子に見入った。この透明な水が世界を成すもので、色が人や鮫であったら.....というようなことをぼんやりと想像してみた。

さらに妄想は膨らみ、湖の水を使って描いてみたらどうだろうとも考えた。湖の水を使って今回の旅を絵に残しておくのもいい思い出になるかもしれない。湖の水でなくとも、その土地の湧き水で絵の具を溶くと土地の何かが加わった色が出るように思う。明日、マリーさんに絵の具を貸してもらえないか聞いてみて、了解がもらえたらこの港の風景から描いてみよう。島から持参したスタンプを机の上に置くと、まるで自分の書斎のように思えてきた。今日書いた記録に日付のスタンプを押してライティングデスクを閉じた。

こうしていると、この港にいる間はララホステルの副支配人というのも悪くはないかもしれないと思えた。ただ、自然とかけ離れた人工的な生活に染まっていくと考えると、それは甘い蜜のような話なのかもしれない。きっとマリーさんや船長はいやというほどわかっているのだろう。

昨夜、船長がめずらしく時間があるから、明日は港を案内してくれるようなことを言っていた。そのついでにどこか景色のいいところをみつけて写生してみよう。じっとホテルの中にいるよりは、なにかしているほうが湖のことを忘れられていいだろう。

窓から入る風は少し秋の気配を感じさせる涼やかなものだった。港のほうをながめると、もう漁船が出港の準備をしていた。

第31話 見送り

翌日は、ネモネさんの出発準備で朝早くから賑やかだった。というより、船長がいたからそう感じたのかもしれない。

船長はしばらく仕事がないので港でゆっくり過ごすという。船長の休んでいるところなんて見たことがないから、休みの日は何をするのか想像もつかない。働き者の船長がずっと寝て過ごすとも思えない。

「ネモネさん、ほんとうに一人でだいじょうぶ？」年寄りはどこまでも心配が先に立つ。

「なにかお土産買ってきますね」と出発を前にしてますます元気だ。カバのミームも玄関で準備万端の様子で待っている。背中に荷物の鞆を載せてやる気満々のように見える。

「爺婆じゃあるまいし、ちょっとそこまで行くのにみんなで何を心配してるんだ？ なんなら俺が抱っこしてエキスポーラーに載せてやろうか」

「そういうことではなくて、女性が一人行くようなところではないから……」

「利権さえからんでなきゃ、ただの観光になるに決まっているだろ。きれいな湖とやらを心ゆくまで楽しんでくることだな」

「はい……」ネモネさんが微笑んだ。

「エキスポーラーって、動物もだいじょうぶなのかしら？」と思い出したようにマリーさんが言ったので、「うさぎを連れて乗ってる人もいるからだいじょうぶでしょう」と答えると、船長が「エキスポーラーも俺様を乗せないで、カバやウサギ相手してるんじゃないや大変だな」と笑い飛ばした。

忘れないうちにとあって、昨日描いた地図をネモネさんに渡して湖への道を簡単に説明した。とくに出島の周辺には気をつけるように伝えた。旅慣れているせいかさすがに理解は早く、こちらが逆に説明に戸惑うぐらいだ。一通りの説明を聞き終わると、鞆の中身を確認すると言ってミームのところに行った。今朝のミームは普通にカバの色をしている。

「そうだ、マリーさん、昨日ナーシュさんの部屋で水彩画のセットをみつけて、勝手にお借りしました。すいません」

「ああ、いいの。あれは何を思ったかナーシュが突然買ってきて。絵もかけないのに……。遠慮しないで使って」

「この近くに画材屋があるんですか？」

「画材屋というか文具屋が港の方にあるの。ナーシュの知り合いだから、付き合いで買ったのかもしれないわね」

「ハロウか？ だったら、あとで俺が案内してやるよ」

画材屋のある港町というだけで、ここの人たちの豊かな生活を感じる。人間も捨てたものじゃない。絵だって果てしなく広がる世界と自然を愛し、それとひとつになろうとしている行為と言えなくもない。絵の具の顔料が自然からつくられたものであればなおさらだ。それが、美しい自然の一部を紙に切り取るだけにすぎないとしてもだ。

「そうだ、マリーさん。部屋の番号のことなんですけど……なにか理由が？」

「ああ、あれは、ナーシュが好きな番号を勝手につけたの。わたしも1から並ぶよりもいいわねって」

「俺はいつも2だ。港を見るにはあそこが一番いいからな」

「3はダルビー海運の事務所。オルターさんの5も見晴らしはいいわね。7だけは空き部屋がないとき以外は使わない……」

「そりゃ、マリーとナーシュの部屋だからだ。わはは」

「それは、どうかしら……」

マリーさんが呆れた顔をしているところを見ると、何か違う意味があるのだろう。

とりとめもない話が終わると、エクスポーラーの時間になったので駅まで見送った。

その後、約束通り船長が案内してくれるというので、話に出ていた画材屋に立ち寄ることにした。

海に沿って西の方角に5分ほど歩くと目当ての店に着いた。軒先にはHAROW'Sという看板がかかっていた。銅板でつくられたもののようで、見るからに年期の入ったものだ。裏には店に来る客が係留するための小さなヨットハーバーも見える。マリーさんが言っていたように、ヨットマン相手の雑貨屋といういうほうがイメージに近いかもしれない。

「ハロウさんよ、いるかい？ 客を連れてきたぞ」

「船長、まだ店を開いてないようだよ」 9時を回ったばかりだった。

「この街には営業時間なんてしゃれたものはない。あるのは店と客だけだ」店の奥を覗き込むようにしながら言った。肩越しにのぞくと工房のようなところが見えた。

「ほんとうにいないみたいだな.....夜逃げでもしてなければそのうち帰って来るだろう」いつもと同じで勝手なことを言っている。

店内にはヨットでの生活に必要なというもというわけでもなく、日常生活に必要なものがところ狭しと並んでいる。鍋、紐、糊.....。画材は店の一番奥の隅の方にあつた。昨日使った鉛筆もここで買ったのだろう、同じものがあつた。

「ご覧の通り、どこにでもある雑貨屋だな。もともとリアヌシティにあつた店だが、ハロウもドームとの関係に嫌気がさして、看板だけ持ってこちらに引越しというわけだ。ただ、売り物はオールドリアヌでつくられたものを昔と同じように揃えているみたいだな。壁に歴代のオーナーの肖像画がかけてあるだろ」

「なるほど、歴史のある雑貨屋なんだね」

「店の奥にお宝があるって聞いたな。昔の貴重な生活用品でもあるんだろ。ハロウがここに来たときにはじめた骨董市が、毎月一回日曜日の朝に開かれるから来てみるといい。そこの壁に予定が書いてあるだろ」

船長の指す方を見ると、黒板に予定が書かれていた。次は今週の土曜日だ。朝6時から2時間。骨董好きは早起きする人が多いのかもしれない。

画材を見ていると、その横にいろいろな紙があるのに気がついた。見ると一枚一枚にHAROW'Sの透かしが入っている。古風な店構えにも通ずる店主のこだわりを感じさせる。そうでなければ、ナーシュさんもひいきにすることもなかっただろう。画材の棚を眺めていると絵の具のうんちくが書かれたメモが置いてあつた。リアヌシティの特産の原料を使っているという説明書だった

。昨日使ったパレットや筆はやはりここのオリジナルだった。

画材以外にもオールドリアヌの職人がつくったというものも多く、それぞれに製作者の名前がついていた。この作者を訪ねて行くのもいいかもしれない。店の品物を眺めているだけで、オールドリアヌの街並みが目の前に浮かんでくるようだ。

船長も何かの物色に夢中になっている。葉巻のところを見ているところをみると好きな葉巻のシガレットケースでも探しているのかもしれない。

第32話 紋章の透かし

しばらくして店に戻ってきたハロウさんは、見るからに人柄のよさそうな紳士だった。文化人というのはこういう風体の人を言うのだろう。

「いや、リアヌシティは正直離れたくはなかったんですが」

「みんなそう言うな。オルター爺さんの話じゃどうもそうでもないらしいが、な？」いたずらっぽく顔をしてこちらを見るので、わざとらしく憤慨して見せた。

「いつから変わってしまったのか誰にもわかりませんよ。まあ、どこにあっても心は古き良きリアヌシティのままですから、こちらで細々とでも伝統を守ればと思ひまして。同じ場所にあっても心まで失ってしまうよりはいいでしょう」

「向こうではどのあたりだったんですか？」ちょっと気になって聞いてみた。

「今、バス停になってるところをご存知ですか？ 眼鏡橋のところの……」

「ああ、あのあたりならよくわかります。コノンさんの家がありますね」

「あのすぐ近くでした。昔は村の中心で栄えていたんですが。今じゃさっぱりでしょう」

「それにしても、これだけの店を数百年に渡って守ってきたんですから大したものですよ」

「代々不器用なところがよかったのかもしれない」と言って肩をすくめたのを見て、「頑固一徹ってやつだな。優柔不断なのに比べればよっぽどましだ」と船長にしてはめずらしく褒めた。

「このお店を見れば、ハロウさんのこだわりはわかりますよ。このペンといい、入れ籠の箱といい。いい味が出ている。こちらの紙は手漉きですか？」

「ああ、それはお店ができたころからのオリジナルの紙で、もう何百年も前から同じ方法でつくってます。創業時からずっとあの湖の湧き水を使って漉いてきたんですよ」

湖の水でというのを聞いて、昨日考えた水彩画に使う水のことを思い出した。紙にも水質は当然関係するだろう。

「ハロウさんよ、早速、例のやつを見せてやってくれないか」

「ああ、この方がそうでしたか」と納得したようにうなづくと、店の奥に入って古い本のようなものを持ってきた。何とも言えない風合いが年月の経過を感じさせる。

「これが、初代がつくったものなのですが、そのころから何ら変わらないですね。当時は羊皮紙という皮を薄くしたものがよく使われていたみたいですが、あのあたりでは、私どもの創業者が植物から紙をつくることをはじめたようで」

革ひもで綴じられた古い本が出てきたので、何か由緒あるのかと思い、「これはめずらしい本なんですか」と聞くと、「おいおい、これを見てもわからないのか」船長がひとこと言いたげな顔をしてこちらを見た。

「えっと、これがあたらしい船長お勧めの本ということ？ そういうこと？」

「これだからな、まったく。ページを開いてみな」と呆れた顔をしている。

「あ、今度は文字のない本というわけだ」

「そうじゃなくて、これはノートだろ？ ハロウズの」

「え？ これがハロウズのノート？……ノートの主が買ったあのノート？」

「まったく感が悪いな。この店で買ったんだよ」

ハロウさんがにこにこしながら、こちらのやりとりを聞いている。

「それで、ここをわざわざ案内したんじゃないの？ 世話がやける爺さんだな、まったく」

ここまで言われてやっと話がわかった。船長もきちんと説明してくれないから人が悪い。

「いやあ、これは驚いた。あなたの祖先が作ったノートを持ってウォーターランドに来た人が……」と言いかけると、「船長から聞いていますよ」とハロウさんが笑った。「船長に売ってくれと頼まれましたが、これだけは」と申し訳なさそうな顔をしているので、こちらのほうが恐縮してしまった。

きっと船長はなんとか手に入れて、ウォーターランドに届けようとしたのだろう。

「それでだな、ここは顧客台帳が代々引き継がれているわけだ。ノートの透かしでおおよその特定ができるんじゃないかってお話。おわかりいただけましたか」

「わかった、わかった。船長もそれなら早く言ってくればいいのか」とさすがにひとこと言うと、「こっちだって、いろいろ考えたあげくにやっところを突き止めたのに、そうやすやすとお教えられるわけないだろ」まんまとひっかかったと言わんばかりの大笑いをした。

話を聞いた後、もう一度手製という紙を見てみた。なるほど、電気にかざしてみると、薄い紋章のような透かしが入っている。

「それは創業者が紙の出来具合をみるためにつけはじめたようで、のちには漉いた年を明らかにするという目的に変わったようです」

「なるほど、じゃあ、買ってすぐに書き始めていけばかなり正確な年がわかりますね」いつも記録を書いたあとに押している日付スタンプのようなものだと思った。いくつかの紙があったので、何か違いがないかを見比べていると、後ろの方で「ハロウさんよ、紙の代金は俺が払うから頼むな」という船長の声が聞こえた。

結局、船長に押し切られ、水彩画によさそうなスケッチブックを買ってもらうことになってしまった。

「いつも申し訳ないね」

「気にすることはない。幻覚の世界で宝の山がみつかったときは山分けということだけをわすれなければな」と言うと、自分の行きたいところがあるからと、反対側の路地に入って行った。船長も幻覚の話をもっとくありえない話でもないと思っているのかもしれない。まだ、誰にも本当のことはわからないのだ。

それにしても、あの店をみつけたのは船長の大きな手柄だ。これでノートの主にまた一歩近づけるだろう。今、ノートの現物を持っていないことが返す返すも残念でならない。すぐにまたハトポステルを出さないと。

「オルターさん、よかったらこれを」ハロウさんから包みに入った何かを手渡された。

見るとほんの少し色の褪せかけた紺色と白のチェック柄の布ばりのノートだった。

「いや、何も気にされないでいいですから。少し前のノートなので使ってやってください」

「これはありがたい。遠慮なくいただきます。お礼は今度島に来られたときに」

ノートの主と同じようにここでノートを手に入れられたことがとてもうれしかった。ここからこのノートの旅もはじまるのだろう。

船長と別れてから。さらに西のほうへと歩いてみた。町はずれまでそれほどの距離はなく、10分もすると人影もまばらになってきた。堤防が切れたところで浜辺に出るとスレイトン・ケープが一望できる場所があった。そこは、浜に打ち寄せる波が耳に心地よい、プライベートビーチのような趣きをもった白い砂浜だった。平日のせいか人影もまばらで絵を描くのにちょうどいい場所に思えた。

第33話 砂浜のスケッチ

砂浜に手頃な流木があったので、そこに腰掛けて鉛筆でデッサンの真似事をしてみた。空と海ばかりの景色を書くのはなかなかむずかしい。これに色を付けるだけでは、どこで書いても同じような絵になってしまいそうに思う。青色の絵の具だけあれば終わってしまいそうだ。折角の紙を無駄にしているような気になってしまう。

うまく色が出せないで四苦八苦していると、後ろから声をかけられた。

「あ、ハロウさん」

「うまく描けそうですか」

みっともない絵を見られていたかと恥ずかしさで逃げ出したくなった。

「その絵の具はいかがですか？」

「ああ、ほんとに素人なのでいいも悪いもなく、こんな絵ですいません」

とてもじゃないけど、絵の具の良し悪しを語れるほどの技術なんて持ち合わせていなかったからそう言うしかなかった。

「でも、その青い空と澄んだ水の色は本物のようですよ」

ハロウさんは、人をその気にさせるのがうまいようだ。その上こちらはおだてられるとすぐその気になるのだからどうしようもない。自分の絵を見てなかなか捨てたものじゃないかもしれないと悦に入る始末だ。

「いやあ、この絵具と紙のおかげですよ。そうか、ノイヤール湖の水のおかげかもしれない」

「そう言ってもらえると、職人冥利に尽きます。もしよかったら、いかがですか」と昼食用に持ってきたサンドイッチを差し出された。

「あ、でもそれはハロウさんの……」

「さっき、オルターさんがこちらに向かわれるのを見たので、きっとここで絵を描かれているだろうと思ひましてね。私の分もありますので心配なさらないでください」

ハロウさんの気持ちをありがたく受け取って、二人で絵画談義をしながら昼食をとることになった。

絵具も創業当時からあったものなので、もしかしたらノートの主も持っていたかもしれないという話になった。当時は写真もなかったころなので、旅をするときに記録用に求める人も多かったというのだ。まさに、この港に来てから自分が思っていたことと同じだ。そうだとしたら、ノートに書き残されていた植物を描いたという話は、きれいな色がつけられた絵としてどこかに残っているのかもしれない。

「これはナーシュさんが使っていたものらしいんですけど、ナーシュさんも絵を？」

「ナーシュさんは、筆を取られることはなかったんじゃないでしょうか。そのパレットもどなたかからの頂き物だったかもしれないですね。かなり年季の入ったものですね。ちょっと手前味噌な話になりますが、この絵具は光を閉じ込めたような透明感のある輝きが特徴で、時間がたっても瑞々しさを失わないんですよ。あの湖そのものです」

「ウォーターランドで作られたインクもいつまでも乾かないような輝きを保つようなんですけど、これは水の問題なんですか？」

「それは私にもわかりませんが、まちがいないのは、この絵具はオールドリアヌの水と顔料で作られているということですね。それも在庫限りの絵の具というわけです」

そう言われてあらためて絵具を見てみると、小さな金色の粒子が光っているように見えた。この粒子がノイワール湖産の証なのかもしれない。

「もう、この絵の具はつくられていないのですか」

「湖の水もないですから、同じものをつくるのはむずかしいですね」

ノイワール湖を離れると、絵の具もノートも創業当時のものと同じというわけにはいかないのだろう。ナーシュさんはそれを思って、絵の具を買い求め手元に置いたのかもしれない。

「オルターさんは、船長とは古い友達なんですか？」

「船長は定期船で島に本を届けてくれるようになってからのつきあいで、ここ3年ぐらいですね」

「私はたまたま骨董市で知り合いましたね。船長も古いものが好きなようで、いつも本や古い写真などを探されてますね」

「たぶんそれを島に届けてくれているのだと思います」

「そうでしたか。印刷機もそちらに？」

「そうなんです。それで島の新聞をつくることになって」

「ああ、あの島便りがそうなんです」

「素人仕事でお恥ずかしい限りです。あの印刷機は市に出されていたものですか」

「印刷機は知り合いの伝手で話がありまして、見る目のある人にとまって船長に話したら一つ返事で決まりました。なにか目的をお持ちなんだろうとは思っていましたが。あの印刷機もオルターさんの島で新聞をつくれるなんて幸せですね。あれも昔オールドリアヌにあったものなんですよ」

「そうだったんですか。なんだかどんどんこちらのものが増えていきそうですよ。ハロウさんも是非一度遊びにいらしてください」

「ありがとうございます。早速家内と相談してみましよう」

「そうだ、また骨董市にも伺います」

食事を終わるとハロウさんはまたお店番をするのに戻って行った。もしかすると、この砂浜はハロウさんの休憩場所だったのかもしれない。

また、筆を取ると空に薄い雲がかかっていた。海にも大きなヨットが停泊している。これで少し絵らしくなるかもしれないと思い白い絵具を塗り重ねた。そうすると海も空も白い絵の具で汚れたようになった。なかなか思うようにいかない。水がよくても腕がなければ、どうにもならないと絵具にたしらめられているような気分だ。もしかして、ナーシュさんも同じだったのかもしれないと思うと、会いもしてない人に勝手に親近感を感じた。

なんとか絵を描き終わると砂浜から街の方に戻った。この前のカフェでルーラーさんと船長が話しているのが見えた。さすがに情報屋と言われる人の嗅覚は鋭い。船長がどこにいてもわかる

ようだ。また、顔を寄せて新しい情報交換をしているようだ。邪魔をしないように声をかけるのを遠慮して通り過ぎた。

そのまま、ララホステルに戻って書斎でスケッチブックを開いていると、マリーさんが興味津々の顔で覗き込んできた。

「あら、オルターさんすてきな絵」

「これなんだかわかります？」

「夢に見た紺碧の世界かしら。この白いのはきっと白い壁の家ね。羊の群れもいたのかしら」

「あ、そう見えますか……」

なにを書いたかさえ言わなければ、これでなかなかの才能を持っているのかもしれない。それともこれも絵具のお陰か。いずれにしても、一度どこかで描き方を教えてもらったほうがよさそうだ。

第34話 骨董の日

ネモネさんは、トラピさんと会えただろうか。出かけてから2日が過ぎた。

コノンさんのお祖母さんのところにお世話になっているのだろう。もともと野宿も平気な人だから、自分で宿を探したかもしれない。

それにしても、自分自身の体調が回復してくると、迷惑をかけたことも忘れてまた出かけたくなる。コノンさんたちが向こうにいるうちにオールドリアヌを訪ねられないかと思い始めるのだから我ながら困った性分だと思う。

「知らせのないのは良い知らせと言うから」と、マリーさんはさほど心配もしていないようだ。人によっても心配する度合いも違うということだろう。わかってはいるもののちょっと情けない気持ちになる。

「そう言えば、今日は骨董市の日でしたね」気晴らしもいいかもしれないと思って言ってみた。

「一ヶ月が経つのはほんとうに早いわね。早いのはいいことなのかしら」マリーさんはお客さん用に置いてある卓上のカレンダーをめくって来月の予定を確認している。

歳とともに早く感じるようになるのは、惰性で毎日を過ごすようになるからだと思ったけれど、それを言うのはやめにした。

「マリーさんもいっしょにどうですか？ 船長も朝一番から掘り出し物探しをしているようだし」

「ごめんなさい。私は古いものにはあまり興味がないの。男の人ってどうして古いものばかりにこだわるのかしら」

言われてみると古いものが好きな女性にあまり出会ったことがないしれない。男の方が物へのこだわりが強いのだろうか。古ければ古いほど味が出るところはある。女性は、もの自体よりも使っていた人のほうに意識がいつてしまうのかもしれない。

「ナーシュも好きだったけど、彼の場合はオールドリアヌそのものが骨董だったわね」

「なるほど、そう考えると骨董って郷愁のようなものなのかもしれないですね」

「男は移動し続ける生き物みたいだから、自分の心の置き場がどこかに必要なのかもしれないわね。それがモノであったとしても。女は今がすべてなの……」

言われてみるとそんな気もする。自分自身もそうだし、船長もナーシュさんもハロウさんもみんな当てはまる。そしてみんななぜかオールドリアヌに吸い寄せられて行く。獵をして移動する男の本能に関わることなのかもしれない。ネモネさんは女性だけど、彼女の場合は土地ではなくて水へのこだわりだから、他の男たちとはちょっと違うのだろう。

「マリーさんにとってのオールドリアヌはどういうところですか？」

「そうね、ナーシュの故郷でとても水のきれいなところかしら。でもそれ以上のものではないわね」

「ウォーターランドは？」

「あそこは私にとっての自由とこれからにあたる場所」

「これから？」

「おそらく……」

ちょっと真意をつかみかねる言い方だったけど、すくなくとも郷愁ではない。

一人で出かけることを決めて部屋の窓から窓港のほうを見ると、レンガ通りが小さなテントの露店でいっぱいになっていた。ヨットハーバーにもたくさん船が入っているところからすると、骨董市はかなり広く知れ渡った催しなのだろう。赤や黄色の縞模様のテントが楽しそうな雰囲気伝えてくる。想像する骨董市よりも明るい雰囲気のように思えた。

ノートを作った店をみつけたことをわすれないうちにとまってレターロールに書いた。

準備を終わって一階に降りると、マリーさんが「オルターさん、これ」と言って紙封筒を手渡された。

「これは？」

「ホテルのお手伝いをしてもらってるから」と言うと、お礼はいらないとでもいうように庭の隅にある納屋の方に行ってしまった。

なんだか、マリーさんや船長の気持ちをあらためて感じた。お金を持たない生活をしながらお返しする方法なんてあるのだろうかと考えてしまう。でも、それをみつけることがあの二人へのお返しになるような気がする。

ホテルを出ると同じように港に向かう人たちが前を歩いていた。いっしょに歩いているうちに、何か楽しいものが待っているかもしれないという期待が膨らんでくる。

レンガ通りは思った以上にたくさんの人で溢れていた。こんなに人がいる港を見たことがない。家族連れも多く、骨董市というよりも朝市と言った方が正しいかもしれない。いつものむさ苦しい男たちの働く港とは趣を異にした、陽気な笑い声でいっぱいのお祭り会場になっていた。マリーさんはこの雑踏があまり好きではないのかもしれない。実際、マリーさんがたくさんの人が往来する雑踏の中で買い物をする姿は想像しにくい。

駅に近い港の中心部から露天や出し物を見ながらハロウさんの店のほうに向かうと、本来の骨董市にふさわしいお店が増えてきた。その中に六界錐だけを扱う店もあった。骨董と言われるだけあって、金細工の高級なものから、陶磁器でできたものなど様々だった。用途もペンダントから、宝石箱、置物まで様々なものがあつた。これを見るだけで生活の一部になっているのがよくわかる。お土産にと思っていくつか手にとって見たものの、いただいたお金を使うとなかなか心が決まらないものだ。無意識のうちに、お金とモノの生活に囚われてしまっていると思うと余計に躊躇してしまう。

しばらく歩いていると船長の姿をみつけた。店の主人らしき人と話し込んでいる。お店にはどう見ても船長の嗜好に合いそうにない古い陶器の花瓶が並んでいた。ここで仕入れて他のところに転売するのだろうか。もしかすると骨董を買うのが目的ではなくいろいろな人と話すのが楽しくてここに来ているのかもしれない。そういう風にも見えた。

「船長、いいものあつた」と聞くと、「ここが目利きの腕の見せどころよ」と言って片目をつぶってみせた。

「ダルビーの旦那にかかっちゃ、全部言い値になっちゃうよ」店主らしき人があきらめたような顔をして笑っている。

「よし、こいつに決めた」と船長が言うと「はいはい」と観念したように返事をしているのがおかしかった。

ハロウさんの店までたどり着いてみると、どうやらここが骨董市の最後の場所になっているようだった。お店の横の空き地が運営する側の休憩所になっているようだ。よく見るとそこにはハ

ロウさんも姿があった。

「オルターさん、先日はどうも」こちらが見ていることに気づいたようだ。

「主催側は大変ですね」

「いやいや、そんな大そうな話ではないですよ。道楽者のお祭りですから」と照れ臭そうに言った。となりにいた女性が、「この人、骨董市がないと生きちゃいけないですよ」と笑っている。おそらくご婦人なのだろう。なんとも微笑ましい光景だ。

「なにかいいものみつかりましたか」と聞かれたので、六界錐の話をするとそのお店を出している人を紹介すると言って、さっき見ていたお店のところまで案内してくれた。その上、ハロウさんの友達価格ということで、思わぬ値引きまでしてもらった。六界錐がたくさんあるだけで幸せな気持ちを感じるようになるとオールドリアヌの仲間としての資格を得られたようでなんだかうれしくなる。

第35話 花瓶の花

一通り店を見て、手紙を出しにハトポステルに立ち寄ると、今度はハト2号が新しい手紙を持って待っていた。内容は、水のことでボルトンから相談がきているというものだった。船長がうまくやってくれていると信じているけど、その話とは別なのだろうか。

ララホステルに帰ると先に戻った船長がマリーさんと話していた。テーブルの上を見ると今しがた骨董市で買ったばかりのあの花瓶が置いてあった。それを見てマリーさんへのお土産を買ってこなかったことに気づいたけど、時すでに遅しだ。いつもながら自分の気の利かなさ加減にあきれのばかりだ。

「この部屋にちょうどいいわね」マリーさんが花瓶をゆっくり回しながらうれしそうに眺めている。

「爺さん、これいいだろ？」と聞かれたので、「さすがに船長の目利きにはかなわないな」と言ってお茶を濁した。そう言うしかない。

「オルターさん、気にしないでいいのよ。この人、半分は自分のために買ってるんだから」

「おいおい、それはないだろ。わざわざ買ってきたのに」

「マリーさん、それは船長の気持ちですよ」マリーさんからの答えはなかったけどわかっているのだろう。花瓶に生けられた花は庭に咲いているときよりもさらにきれいになったように感じた。花の好きな人に悪い人はいないというが、このホテルにいと心からそう思える。きちんと手入れのされた庭の花は自然の草花に負けず劣らず美しい。気持ちをやさしくしてくれるようだ。

マリーさんが、席を立ったタイミングをみて手紙を船長に見せると、一瞬眉間にしわを寄せて険しい顔になった。

「戻った方がいいかな」船長の顔色を伺うと、「いや、俺に任せてくれ。明日には出港するから立ち寄ってくる」と言った。何か心に期するものがあるようだ。その後再度手紙を見て、あいつら許せねえなど独り言のように言ったのが気になった。

こちらに来て2週間になることを考えると、留守をまかせっすりだし、そろそろ帰らないといけないだろう。そう思うとますますネモネさんのいるうちにオールドリアヌに行きたいという気持ちが強くなる。せめてジノ婆さんには会っておかないと、この旅の目的の入口にも立てないままに帰ることになってしまいそうだ。

「次の船ぐらいで島に戻らないといけないね」と言うと、向こうのことは心配しないでいいといつも船長のおおらかな表情に戻っていた。

話のついでにすぐにでもオールドリアに行きたいことを伝えると、躊躇する様子もなく行きたければいけばいいんじゃないのかという答えが返ってきた。聞いた自分自身も何を相談したかったのだろうと思った。自分の責任で判断すればいいだけだ。

「マリー、オルター爺さんがまたあの恐ろしいオールドリアヌに行きたらしいぞ」と余計なことを言うから、調理場にいたマリーさんが花を生けた花瓶を持って戻ってきた。花瓶をテーブルにそっと置くと、じっと二人の顔を見てため息をついたかと思うと「男ってどうしてこうなのかしら……」と言うと、出かけるなら明日は天気がよくないからと明後日にしたほうがいと教えてくれた。

部屋に戻って、久しぶりにノートの本を出した。明かりにかざして見たけれどノーキョさんの紙には透かしはなかった。もしやと思いマリーさんからもらった緑の手帳のページを透かしてみると、紋章が入っているのがわかった。マリーさんにもらった手帳もハロウズのものだったのだ

しかし、よくよく考えてみると、島に置いてきたノートも現物ではなく写し取ったものだから、透かしなど入っているわけがない。手紙を書いたあとにこんなことに気づくとは情けない話だ

窓から風が吹き込んだときに印刷してきたノートが床の上に舞うように落ちた。捕まえかけたと思ったノートの主が手の間からすりりとすり抜けて行ってしまったような気がした。

第36話 はぐれた子供たち

二日後の朝の出かける間際になって、あらためて湖には一人で行かないという約束をマリーさんにさせられた。しかし、湖に行かないとジノ婆さんに会えないのだから、そんな約束を守るわけがないのだ。マリーさんには申し訳ないけど、今回だけは許してもらおう。それで何かあっても自業自得ということだ。

男たちのやることに呆れ返っているマリーさんにしてみれば、こんな口約束は気休めでしかないと思っているだろう。マリーさん自身があとで後悔しないためにというのがほんとのところなのかもしれない。そうだとしたら、男の身勝手さを思わずにはいられない。

3度目にもなるとさすがに誰も見送ってはくれないし、こちらも慣れたものだ。船長の出港を見送ってその足で駅に向かった。前回の行方不明のことがあるから、悪くするとエキスポーラーに乗車を拒否されるかもしれないと内心ちょっと不安だったけれど、いつものように無人の改札を何事もなく抜けることができた。シートに座ってディスプレイにWelcomeという青い文字が出た時にはなんだか気が抜けて一人笑ってしまった。

リアヌシティに着くとメタリックな高層ビルが琥珀色に色付いているように見えた。もしかすると季節感を演出するために建物そのものの色が変わるのかもしれない。この前来た時よりも少し秋の気配を感じるのはどうやら気温のせいだけではないようだ。

最初にサーカス小屋を訪ねたが、あいにく二人とも不在だった。今日は休養日だったようだ。二人ともネモネさんのいるオールドリアヌに行ってしまったのかもしれない。それならそれでちょうどいい。すぐにセントラルステーションのバス停留所に戻った。

オールドリアヌ行のバスは1時間に1本。つまり1台しかないということだろう。そのゆったりしたペースもあの村にはちょうどいい。バスが来るまで少し時間があつたので、船長やマリーさんに見せるために雲の塔のスケッチをしていくことにした。

それにしても雲の塔はどこから見ても全体がつかめない。遠いと空と同化してしまうし、近いと大きすぎて景色からはみ出してしまう。六角形であることも、周りを歩いてみてはじめてわかる程度の実感しかえられない。結局、実際に見えるものを描くのではなく、イメージで全体を捉えるしかない。それでも塔の先はいつも雲に隠れているので、どうなっているのかまったくわからない。

くねくねとよじれた塔の先をずっと眺めていると豆の木を登ったジャックの話を思い出した。塔の先まで行きたいという望みはいつか叶うのか。物語のようにその先にはオウガが待ち構えているのだろうか。

よく見ると、塔に蔦がからむように外階段があることに気づいた。塔の大きさからするとあまりに華奢で頼りない。工事用に作られたものか、緊急避難用か、用途はわからないが、あんな階

段を登っていたら強風でも吹いたときには簡単に吹き飛ばされてしまうに違いない。まるで登れるものなら登ってみろと言われているようだ。

下絵が描けたので、絵の具で色付けに熱中していると「また来たの？」という声がどこからともなく聞こえた。あたりを見回すと道沿いにある緑の建物の上にこの前の赤毛の少年がいた。なんだかリアリティで唯一の友達に再会できたようでちょっとうれしくなった。少年もこちらを見て笑っている。

「君はここに住んでいるの？」

「そうだよ。おじいさんも？」

「おじいさんは遠い島から来たんだよ」

「島って？」と聞かれたので、ウォーターランドの話をする、どうやら島というものの自体の理解ができならしい。当然海のこと知らない。

考えてみれば、このドームで一生を終える人がいてもおかしくはないわけで、この少年も一生涯海を見ることはないのかもしれない。エクスポーラーで行けばすぐのスレイトン・ケープさえも見られないというもおかしな話だ。もしそうだとすると映像や話で聞くこともないのか不思議ではある。

「オールドリアは行ったことある？」と聞くと、「ないけど、コノ姉さんが教えてくれるよ」と言った。

「コノ姉さん？」

「うさぎのコノ姉さん」

まちがいない、きっとコノンさんのことだ。

「コノ姉さんはこのあたりにいるの？」

「うん」と言ったと思うと、ついて来てというように先を歩き出した。行った先は偶然にもあの家族の家だった。コノンさんがここにいるとは思ってしなかった。

「あ、ここ入ってもいいの？」

「だれでも入れるよ。家族の家だから」と言って少年はドアを開けてくれた。

中に入るとたくさんの子供達がいた。みんな瞳がキラキラしていて、一目見た瞬間にリアヌシティの無表情な人たちとは違うと感じた。

はじめてきた客を彼らは暖かく迎えてくれた。

「こんにちは」というとその声を聞いて、奥からコノンさんが出てきた。

「あ、オルターさん.....どうしてここを？」

「あの子が案内してくれました」

「ミオありがとう。彼はここでは年長になるのでいろいろ手伝ってくれるんです」

コノンさんは最初こそ驚いて事情を聞いてきたものの、すぐにいつもの落ち着きを取り戻し建物の案内をしてくれた。はじめて入った家族の家は整然と片付いてはいるものの、20人はいそうな子供達の遊び道具や生活用品がところ狭しと置いてあった。リビングも食堂もなく大部屋でいっしょに暮らしているように見える。どこかで見た光景だなどと思って考えると、オールドリアヌのうさぎの庭を思い出した。

「もしかして、リアヌシティのうさぎって.....」

「そうなんです。本当のことを言うとお祖母さんがまた心配するので。うさぎもいますし」といっしょにいた子供の頭を撫でた。

「この子は最近きた子で.....まだ慣れてないのよね」

どうやら、ここは孤児が集まっているところのようだった。子供達がたくさんいるところであり詮索するのもよくないと思い、施設についての質問はやめた。

コノンさんの知り合いと聞いて、子供達も安心したのか、どこからともなく近づいてきて遊んでもらおうとする。おじいちゃん、おじいちゃんと言いながらまわりついてくる。あまり年寄りを見たことがないのか珍しいものでも見るような目をしている。

持っていたパレットとスケッチブックに子供の一人が気づいて、描いて見せてくれとせがまれた。仕方なく雲の塔の絵を見せると真剣な顔をして覗き込んできた。仕方なく、ミオ君の顔を

書いて見せることにした。髪をオレンジの絵の具で塗ると見ていた子供達から歓声があがった。

時間を忘れて子供達と遊んでいると、この前来た時に会った背の高い牧師のような男の人が入ってきた。

「おかえりなさい」みんなが彼を迎えた。

「ヨシュアさん、オルターさんです」コノンさんに紹介された。

「よくいらっしゃいました。こちらははじめてですか？」ゆっくりとした口調が特徴的な人だった。

「先日外まで来て、そのときにお会いしました」というと「そうでしたか」とやさしく微笑んだ。この人がこの施設の責任者なのだろう。

事情がわかってないことを察して「ここは、一人ではぐれてしまった子供達が共同で暮らすところです」と説明してくれた。彼はそういう子供のたちの面倒を見ているのだそうだ。一挙手一投足をデータ化されているドームではぐれるというのも腑に落ちないが、こういうところでは外で暮らす人間には想像もつかないことが起こるのだろう。

いずれにしてもはぐれたというのは迷子ではなく、孤児のことを言っているのだろうと理解した。それにしても、みんな明るく楽しそうにしている。親と離れた暗さのようなものは微塵も感じられない。これもコノンさんの力によるところなのかもしれない。

「みんな元気がいいね」と言うと、「ここが好きみたいです。もともと家族というものをあまり知らなかったのかも」とコノンさんは言った。

「地上のことをファストレイヤと呼ぶとミオ君に聞いたのですが、家族は上の方にいたということですか」と聞くと、ヨシュア氏が「レイヤは天上まで無数にあります。そのどこかにということです。ちなみにここを、レイヤではなくスラングでグランドと言う人もいます」

「地べたというような意味で、あまりいい言葉ではないんです」コノンさんが補足してくれた。地上に取り残された唯一のレイヤということかもしれない。ここでもコノンさんは足りない何かに惹かれているのだろう。

「もし、またリアヌシティに来ることがあったら遊びに来てもいいでしょうか？」と聞くと、ヨシュアさんはよく聞こえなかったのか、「それは私にもわかりません」と言うと帽子を取り奥の部屋に入ってしまった。

「ヨシュアさんは、あまり話さない人なの？」と聞くと、コノンさんが「無駄なおしゃべりはしないほうかも」と教えてくれた。ここに来る目的もないなら、遠慮した方がいいのだろうかと言うと、そばで聞いていたミオ君が、みんな待ってると言ってくれた。プレゼントに書いたばかりの似顔絵を渡すとうれしそうに自分の居場所に持って行った。

今回あらためてジノ婆のところを訪ねるつもりでいることを話すと、コノンさんも今日オールドリアヌに帰るつもりでいるというので、予定を午後に遅らせていっしょのバスに乗ることにした。

第37話 トマト色の兆し

出発の時間になったので、子供達に見送られてバスに乗った。

コノンさんももともとは両親とともにリアヌシティのセカンドレイヤに暮らしていたのだけれど、慣れない暮らしにすっかり体調を崩してしまいオールドリアヌのお祖母さんのところに戻ってきたのだという。リアヌシティでは昔のような家族の関係もすっかりなくなってしまっているという。

「それでもリアヌシティに来るのはどうして？」と聞くと「あの子たちがいるので……」という答えが帰ってきた。

「あまり無理しないほうがいいよ」

「休みたくなったらウォーターランドに遊びに行きます」と笑った。

「ウォーターランドのことは新聞で知ったの？」と聞くと、ヨシュアさんの知り合いの人に教えてもらったということだった。その人もコノンさんの頑張り過ぎが気になったのかもしれない。

「そうだ、ウサギをね、何羽か島に……」と言いかけると、その話を待っていたかのように「ほんとに？」という反応がすぐに返ってきた。同じことを考えていた偶然に、思わず顔を見合わせて笑った。その後は、ウサギの暮らす島の話で盛り上がった。まるで二人とも明日にでも島に帰るような勢いなのがおかしかった。

眼鏡橋のバス停留場で降りて、コノンさんの家に行くとお祖母さんが待っていた。コノンさんはお茶も飲まずにウサギたちの餌やりをしようと庭に出て行った。

テーブルを見るとたくさんの瓶が並べてあった。

「あんたの友達のネモネさんが集めている水だよ。今日もお友達といっしょに水探しだって言ってたよ」

「こんなにたくさんですか」

「小壘を探してくるだけでも大変さ」と言いながら笑っている。

「あの子が島に持ち帰るんだとき。そんなに好きならここでおなかいっぱい飲んで帰りゃいいも

のを。若い人の考えていることは私にやわからないね」と言うと、手に入れたばかりの壺を井戸水の入った桶で洗い始めた。

これを島に持ち帰って、スロウさんたちと成分の分析でもしようというのだろう。ネモネさんは何か感触を得ているのかもしれない。

リアヌシティで偶然コノンさんと会った話をすると「ウサギは元気だったかい」と聞かれたので、みんな元気でしたよと答えると、お祖母さんは「そうかい、そうかい」とうれしそうに言った。それがコノンの幸せでもあるかのように。

「私も昔リアヌシティで悪いやつにだまされたことがあってね。コノンをよくしたのだからね」とまた念を押された。どうやらコノンの人を疑わない性格はお祖母さんから受け継いだもののようだ。

「それであんたのほうはどうだい？」

「あ、もうすっかり」と言うと、また同じように「そうかい、そうかい」と喜んでくれた。お祖母さんにとってはここに来る人はみんな自分の子供のようなものなのだろう。世話好きなところもコノンさんに似ているかもしれない。

ハロウさんのお店を訪ねた話をすると、以前お店があったという場所を教えてくれた。

「ああいう人が止むを得ず出て行くのを見るのはつらいことだよ」と悲しいことを思い出したように目を伏せた。ハロウさんはこの村にはなくてはならない人の一人だったのだろう。きっと村のお祭りなんかも取り仕切っていたに違いない。

コノンはまだしばらくウサギの世話に時間がかかりそうなので、その間にハロウさんのお店があったというところまで行ってみることにした。

その場所はほんの数分歩いたところにあった。思っていたよりも小さな建物で、石造りの古い外観だけがそのまま残されていた。店を閉めた後に生えたのか、蔦が建物にからみついて、それが石造りなのかどかもわからなくしている。蔦をそのままにしておくと石であってもいつか崩れてしまいそうだったので、絡みついた蔦をしばらく無心にむしり取った。ここだけは残さないといけないという思いだった。

ここがノートの主の出発前に立ち寄ったところだと考えると感慨深いものがある。その店をハロウさんの曾祖父がはじめたのだからなおさらだ。同時は雑貨屋というものもなかっただろうから、生活用品を扱っていたのかもしれない。なにか当時の痕跡が残ってないかと手探りですみ

ずみまで探して見たが、廃屋になって久しいこともあってか、これといったものはみつからなかった。何百年の歳月と記憶は石の中に閉じ込められてしまったのだろう。

石造りの家はひんやりとしているせいか意識が研ぎ澄まされていく。耳を澄ますと、蔦の葉が風で揺れるかすかな音と、遠くから届く水音が聞こえてくる。苔むす石と風と水だけの世界。悠久というのはこういう時間をいうのだろう。

建物を見ているうちに、300年近い隔たりを超えてつながれていくものとは何だろうと遠い昔に思いを馳せた。なにかのモノ、それとも一筋の時間、あるいは動くことのない場所だろうか、書き残されたことば……考えるほどに答えがわからなくなる。時間を超えてつながらなければいけない理由があるのかさえもよくわからなくなってくる。自分自身も生きているのではなくて、生かされているのかもしれない。

この場所は水路も近いので、商売をするのにはちょうどいいところだったろう。水路から大海原に出て、知らない遠くの国までハロウズのノートや手帳が届けられることもあったかもしれないと思うと、18世紀当時の交易に壮大なロマンを感じてしまう。遙か彼方の土地でハロウズの紋章の入ったものを見つけることがあったなら、それは思いがけない喜びになるだろう。それが当時の文字の書かれたノートであればなおさらのことだ。

周辺を散策していると、舟の乗り場に3人の姿をみつけた。みんなに会えたことよりもなによりも、カバのミームが真っ赤になっているのに目を見張った。

「オルターさん、思った通りでした」とネモネさんがめずらしく大きな声を上げた。

「ここの水は、とんでもない名水みたいですよ」トラピさんも目を丸くしている。

「未だに信じられなくて……」ネモネさんも驚きを隠せないほどに興奮している。

「やっぱり、ここに住むのが一番いいということなのかな」と言うと、「ドーム・コンストラクションさえいなければ……悔しいなあ」とナミナさんが呟いた。

しかし、ミームの色がすごい。とてもカバには見えない。まるで熟したトマトのようだ。

「こんなに赤くなってだいじょうぶかな」

「これは、いい水の証なので」

「それはそうだろうけど、腫れ上がってるようにも見えないな……水の瓶詰めは持ち帰るつ

もりなの？」

「あ、あれは、スロウさんたちに調べてもらおうかと思ってます」

「ノルシーさんが嗅ぎ付けると水割りに使っちゃうかもしれないよ」

「気をつけます」と真面目な顔をして答えたのを見て、みんなの気持ちが水を介して一つになっていくような気がした。

ミームが赤くなっているのを見ると、なぜか心も晴れやかになって楽しいことが起こりそうな気がしてくる。

「そうだ、今夜はサークルで演奏会の予定なので、オルターさんも是非」とナミナさんが言った。

「それはいい。きっとみんな喜んでくれるね」

「それで、明日ジノ婆さんのところに行こうという話です。水の話も聞かないといけないですからね」トラピさんが、こちらから話を持ち出す前に計画を説明してくれた。

これだけ仲間がいれば心強い。きっとマリーさんもわかってくれるだろう。明日、ジノ婆さんに会えると思っただけで心が浮き立つ。一足先に戻ってコノンさんにその話をする私もいっしょにと言ってくれた。もうなんの心配なく湖探索ができる。あと少しだ。

その夜は、サークルでの演奏会が大盛況で、トラピさんとナミナさんたちは一晩で村の人気者になった。一芸が身を救うというのはこういうことを言うのだろう。いろいろな人から、個人的な演奏会の申し込みが舞い込んできた。当然報酬はなくて、村一番のミルクであるとか、編んだばかりの冬物のセーターだとか、村人それぞれの得意とするものとの交換になる。中には、だれも知らないきれいな花のを見つけ方やおいしい料理の作り方という話まであって、物々交換どころかいろいろな情報までが舞い込んで来た。

公書館のホーラーの姿も見かけたもののまだ心は許してくれないようだった。ただ、こうして交流を繰り返して行くうちに閉ざした心が開かれていくに違いない。それは、彼が音楽に合わせて身体を揺らしているのを見ればわかる。

第38話 礎石の力

ネモネさんは水を探したいというので、残りのメンバーはコノンさんの案内でジノ婆さんに会いに行くことになった。前夜の雨のせいで、湖の畔はぬかるみ、足を取られながらジノ婆さんの家を目指した。曇り空のせいもあって湖もくすんだ水色に見えた。コノンさんがいっしょに来てくれただけで安心感が違うし、ジノ婆さんに間違いなく会えるとという確信のようなものを感じる。

コノンさんのほうはというと、草花の名前を教えてくれたり、めずらしい鳥がいると立ち止まって鳴き声を真似てみたり、こちらの気持ちとは関係なくオールドリアヌの自然を満喫している。ナミナさんたちも公園の間の休日ということでピクニック気分を存分に楽しんでいるようだ。

ユイローの草が見え始めたあたりからまた出島が見えてきた。

「ほんとうだ、六角の石碑がたくさんある」ナミナさんが感心したように言った。こちらはここから先が現実にはない世界への入り口になるような気がしているのだけれど、みんなはめずらしい遺跡でも見ているように物珍しさで興奮しているようだ。

トラピさんが「六界錐をつくるのもいいな……」と独り言のようにつぶやいた。荷物も持たずに旅をするトラピさんのような人でも、終の住処か心の置き場のようなものを求めるものなのか。

ジノ婆さんのいる出島と家の景色は記憶と寸分も違わず、前回も間違いなくここまで来ていたことを確信した。問題はこの先だ。コノンさんが、先になって庭に入った。

「ジノ婆、来たよ」

「コノンか？」こちらのほうを見て用件を察したように言った。

「そうだよ。オルターさんとお友達のナミナさんにトラピさんもいっしょだよ」

ジノ婆さんは、使い込まれた揺り椅子にゆったりと腰掛けたままで出迎えてくれた。ふくよかな外見とやさしそうな顔を見てひとまずは安心した。想像していたとおり、見た目からは悪意のようなものはまったく感じられなかった。この前の人影は幻覚で見たもので、ジノ婆ではなかったということだろうか。

「いろいろご心配おかけしました」ことの次第はともあれ、とにかく最初にお礼を言った。

ジノ婆は、まるで関わりがないかのように、「なんのことか」と言った。

そう言われてはじめて、話す時に視線がすこしずれることに気づいた。盲目で一人暮らしをするのはたいへんだろうと思った。

「オルターさんたち、とてもいい人だから、オールドリアヌのことをいろいろ教えてあげて」

「ふほほ、コノンに悪い人はおらん」

「あの、言えない話は無理をしてお話しただかなくても結構ですので……」と言うと、みんなの顔を見るように左右に動かした。

ひと通り挨拶が終わると、ウォーターランドから来たこと、ノートの主がこの土地の出身者であること、数々の不思議なできごとについて順を追って説明した。ただ、ここで経験した幻覚の話はジノ婆の反応を見てから話すことにした。

「ノートの男なぞワシにはわからん」この一言で期待はあっさり裏切られてしまった。言われてみればもっともなことではあるのだけど、ここまで来てこのまま引き下がるわけにもいかない。

「六界錐とは何か関係ないでしょうか」トラピさんがなにか話の糸口をつかもうとして言った。

「ワシは六界錐の番人ではないからな」

「ナーシュという名前をご存知ですか？」トラピさんも簡単には諦めない。

少し顔を上げて考えるようなそぶりを見せたが、何も言わないで首を横にゆっくり振っただけだった。

「この土地を守ろうとして頑張った人なんですが……」とさらに言葉をつないだ。

「この100年ぐらいの話か？」

「もちろんです。ここ数年の話です」この老婆にとっては3年も300年も違いがないのだろうか。

「最近のことのほうが忘れることが多くてな」と言って、しばらくうつ向いて静かに考えていた

ようだったが、答えは返って来なかった。言いたくないのか、ほんとうに知らないのか判然としないので、コノンさんの顔を伺ってみたが、彼女も困った顔をこちらに向けるだけだった。

「六界錐をつくと必ずここに戻れるというのはほんとうなんですか？」黙って聞いていたナミナさんがそのやりとりに我慢できなくなったように口を開いた。

「黄泉の世界からもな」

「生き返ることもあると？」ナミナさんが、思わず目を丸くして聞き返した。

「ワシも生き返りの繰り返しじゃ、ふほほ」煙に巻くような話だった。

「六界錐をつくれれば生き返れるということですか？」トラピさんも身を乗り出した。

「ふほほ、ノイヤールの水次第じゃな」

迷信なのか事実に基づく話なのかはよくわからないものの、ここで願いを立てて、六界錐をつくるというのがそれを叶えることにつながるということのようだ。つくるかつくらないかは、信じるか信じないかによるのだろう。それに水が深く関わっている。

「オルターとやら、ワシは目が見えない分、心はよく見えてな。あんたの記憶も水が教えてくれるじゃろう」

一瞬、心を全部見透かされているような気がした。ジノ婆を巫女と呼ぶ人もいたから、そういう力もあるのだろう。

「水がうまく生かしてくれる」

「水がすべてを知っている……」何を言われているのかわからないままに水面の輝きに目を向けた。そこにはおだやかな湖水がいつもと同じようにあるだけだった。

しばらくジノ婆さんと話をしているうちに、また自分の様子がおかしくなりはじめていることに気づいた。みんなは特別に変な様子はないと思っているのだろうか。ジノ婆さんとの話に夢中でこちらのことに気づいてないのかもしれない。

しゃべろうとすると口が思うように回らない。そのうちにまた景色がゆらゆらと揺れ始めた。だめだ、またこの前と同じような気分になっている。早く抜け出さないと今度こそ戻れなくなってしまう。気持ちの焦りと裏腹に景色が前と同じように揺れはじめ、それとあわせるようにみんな

なの動きが緩慢になってくる。

また、膝から崩れ落ちるように座り込んでしまった。あのときと同じように黄金の竜が見えるかと思ったけれど、湖を背にしているのだから見ることができない。みんなの様子は何も変わらないのに、動きだけがどんどん遅くなっていく。話し声も引き延ばしたようにどんどん間延びしていく。それは転がっているボールが惰性を失い、徐々に遅くなり最後は止まるような感じにも似ている。

まさか、いきなりまたこんなことになるとは思っても見なかった。ただ、今回はまわりにたくさんの方がいるので、なんとかなるだろう。それであれば、思い切ってあのときの世界を存分に見てみるというのもいいかもしれない。

「いいのか。このままで……」とまた遠くから誰かの声が聞こえてくる。目の前に現れた小さな暗闇が水に落とした炭のようにまたたくまに視界を覆い尽くした。

「戻りなさい……」

誰かが闇の先にいて誘っているような気がする。そのとき、小さく緑に輝く光が見えたような気がした。

抵抗しても無駄だと思って暗闇の意思に身を委ねていると、先のほうに見えた緑の点に徐々に引き寄せられていった。それは予感していたとおりにミドリ鮫の群れだった。この前のような巨大な鮫ではなく、人間の倍ほどの大きさの鮫が100匹近くも泳いでいる。

何か獲物を真ん中にして、お互いに牽制しながら襲いかかるタイミングを伺っているようにも見える。恐ろしい気持ちとは裏腹にその距離は徐々に短くなって行って、最後は吸い込まれるように大きな鮫の球の中に取り込まれてしまった。

襲われると思って咄嗟に目を閉じ、口を食いしばり身体を小さくした。

ところが、実際には何も起きなかった。彼らはまったく見えてないかのように、一定の距離をおいたまま周囲を泳ぎ続けている。その真っ黒な目は深海に住む魚のように、かすかな光だけを感じ取っているようにも見える。それは、永遠の時間を住処にしていることの証であるかのように、何の意思も感じさせず、どこまでも深く沈んだ眼差しだった。

この空間が水の中なのか空中なのかもよくわからない。なにかやわらかい抵抗感の中に身体が浮かんでいて、手足を動かすにしてもすばやくというわけにはいかない。どちらかに重力がかかっているようでもないで、宇宙空間に投げ出された感覚に近いかもしれない。わかっているのは、世界の光を吸い込んでしまいそうなほどの闇の中にいること、そしてまわりに身体をミドリ色に発光させながら泳ぐ鮫がいるということだけ。

そもそも、これが夢なのか現実なのか、それさえもわからない。身体をよじってみても、手足をバタつかせても、おかれている状況はまったく変わらない。少なくとも命が脅かされないのであれば、なるようにしかならないとあきらめた。

しばらく鮫のゆったりした群泳を眺めていると、ウォーターランドの動物たちと同じ緑色の水玉模様だということに気づいた。身体の中では淡い緑色の細かな点がときどき明滅しているのがわかった。それは、身体の代謝に合わせてリズムを刻んでいるようにも思えるし、お互いに何かを交流しているようでもある。もしかすると彼らだけにわかる歌を歌っているのかもしれない。お互いの身体を伝わり流れる光の連鎖が、宇宙を旅する流れ星のようだった。

Why does the sun go on shining?

Why does the sea rush to shore?

Don't they know it's the end of the world,

'Cause you don't love me any more?

気がつくと頭の中で、ジ・エンド・オブ・ザ・ワールドのゆっくりしたメロディーがリフレインしていた。夢であればいいのだけれど。この先に一体何があるというのだろうか。

そのとき、どこかから、

みんな.....知ってる.....元気。会いたいかな.....ぶくぶく、ぶくぶく.....

なにも、どこも、だれもない.....ぶくぶく、ぶくぶく.....

という声が聞こえてきた。いや、聞こえたと感じただけで、声ではなかったかもしれない。

以前どこかで同じ言葉を聞いたことがあると思ったけれど、意識がもうろうとして思い出せない。誰かから聞いたことばだっただろうか。

声の先を探して、闇の奥に視点が定まらないままに目を向けてみると、赤い木の葉のようなものが回転しながら浮遊しているのに気がついた。あれは、あのときに乗った赤いボートだ。どうしてここにあるのだろう。幻覚が繋がっているのか。

もし、記憶と意識を閉じ込めている場所があるなら、こんなところではないだろうかと思った。夢の世界も記憶の断片と考えれば、これこそが夢そのものかもしれない。

そのとき、背中の方にコツリと当たるものがあったので手を回してみると、なくしたはずの虹の石だった。ミリルさんが作ってくれた袋に入っているのだから間違いない。中の石を出してみたけれど、光も差し込まないところだから虹を見ることもできない。鮫たちの光の明滅を受けて、かすかに緑色に見えるだけだった。

孤独な闇の中でコピのことを思い出してウォーターランド戻りたいと思った。その瞬間に、闇の空間が突然霧散して消えた。

目の前にはジノ婆さんが何事もなかったように椅子に腰掛け、みんなも前と同じように話を聞いている。自分はここに倒れていたはずではなかったのかと思ったが、誰もそれについて言う人もいない。

「六界錐をつくれれば生き返れるということですか」とトラピさんがぎっきと同じことを聞いた。

「ふほほ、ノイヤールの水次第じゃな」

みんなの顔を見ても、なにもなかったように前と同じ会話を続けている。おかしい。これはデジャブなんかではない。どう考えても時間がどこかで引き戻されている。

前と同じ会話をひとつおりの聞いた後に、思わず「ミドリの鮫をこの湖で見た人はいないですか

」と聞くと、ジノ婆さんは「聞いたことはないが、いると思えばいるじゃろうな。ふほほ」とこちらを向いて言った。

握っている手を開いたとき、そこに虹の石があった。

第40話 ノイヤールの緑石

「そろそろ戻りましょうか」とコノンさんが言った。

トラピさんも、ナミナさんも出島を離れるのが名残惜しそうだった。ジノ婆さんにもっと話を聞きたいという思いと、何を聞けばいいのかわからないという気持ちが入り混じって言葉にならないようだった。せっかく会えたのにすっきりした答えも得られず消化不良になってしまったかもしれない。

ジノ婆さんの方は、とくに引き止めるわけでもなく、別れを惜しむわけでもない。ここに何百年も暮らしているというのが事実なら、今日の訪問者など取るに足らない、通りすがりの旅人にもならないだろう。

最後にと行ってトラピさんが「六界錐は勝手につくって置いてもいいんですか？」と聞いた。

「それはあんたの自由じゃな。ここに戻る気ならつくればいい」

「ここに戻れる人は、もう六界錐があるということですか？」と尋ねると、「あるから戻れるとは限らないけれどもな」という答えが返ってきた。この答えをどう捉えればいいのだろう。それは、戻れたからといって必ずあるとは限らないと言っているようにも聞こえた。

「じゃあ、ジノ婆、また来るね」とコノンさんが言ったのにあわせて、それぞれお礼の挨拶をして出島を後にした。

自分はどこかから戻って来たということだろうか。あれば戻れるということは、すでにあるということなのだろうか。それともどこにも行ってなかったというほうが正しいのか。何が答えなのかわからない。

トラピさんが六界錐を少し見て行きたいというので、比較的たくさんあるところをコノンさんに教えてもらって立ち寄った。大きな木の下にあって、木が傘になって守っているように見えた。

「面に刻まれている6種類の文字はみんな同じだ……」と言いながら、トラピさんがメモを取り始めた。本気でつくることを考えているようだ。こちらはここに作らなければいけない理由もないので、誰か知った人の名前はないか探してみることにした。コノンさんがナーシュさんの六界錐を教えてくれた。他のものと違って薄緑色の石でつくられていた。一見、苔がむしたように見える石だった。

「これはいい石なんですよ。ノイヤールの湖底でしか取れないものなので、なかなか目がに
機会がないです」

コノンさんがそう言うのを聞いて、ミドリ鮫の群れが湖の底に息を殺して潜んでいる様子が頭に
浮かんだ。もちろんそんなことはないのはわかっているのだけれど。

「オルターさん、これは話をされていたハロウさんという人のものかなあ？」とナミナさんが聞
いて来た。見ると確かにハロウと掘ってある。ナーシュさんのすぐ近くだ。それも同じような緑
の石だった。

「この石のほうにご利益がたくさんあるのかな」とトラピさんが言うと、コノンさんが「それは
聞いたことないですけど」と言いながら笑った。

緑の石は村に功績のあった人の印なのかもしれないと勝手に想像してみた。

「トラピ、ほんとうにつくるつもりなの？」とナミナさんが聞いた。

「なんていうか、手品みたいじゃない。人が消えたりあらわれたりなんて……」と言いながらメ
モを取り続けている。トラピさんの場合は土地への執着というわけではないようだ。不思議な現象
に手品師としての血が騒ぐのだろう。

突然、ウォーターランドで消えたないないさんのことがふと頭をよぎった。ロスファさんとい
うのが正しい名前だったと思い、あたりを探して見たがやはりみつからない。ロスファさんの出
身はここだったという話は聞いてないからなくても不思議ではない。彼もどこかに六界錐をもっ
ていればいいのだけれど。

ここにナーシュさんの六界錐があるということは、いつか戻ってくることがあると考えてもい
いということだろう。もしかしてと思って自分の名前を探して見たけれど、さすがに見つから
なかった。

「あれ、オルターさん、石……」胸元で光っている石にナミナさんが気づいた。

「あ……」と言葉に詰まって「えっと、さっき出島で見つけました」とその場を取り繕った。み
つけたのではなく、意識が戻ったら手に持っていたのだけれど、そんな話を誰が信じるだろう。だ
いたい意識がここになかったことすら知らないし、自分さえも起こったことを信じられないでい
るのにとて人にも説明する気にはなれない。それこそ気は確かか疑われるだけだろう。

「オルターさん、運がいいですね」と言われて、運って何だろうと思った。

帰り道にコノンさんが野生のウサギのいるところを教えてくれた。昔はたくさんいたけれど、ノイヤール湖の水位がときどき下がるようになってからはめっきり数が減ったのだという。

「雨が少なくなったということ？」

「ドームができたころからなので、何か関係あるんでしょうか」と逆に聞かれた。

「自然は敏感ですからね。それにドームのエネルギーは水の力を使っているというから当然なにか関係しているでしょうね」とトラピさんが言った。

ウサギの姿は見ることはできなかつたけれど、ウォーターランドにも同じような草原があると思った。あそこなら彼らも水の心配をしないで安心して暮らせるだろう。

「オルターさん、ジノ婆さんの話はわかりました？」とコノンさんが聞いてきた。

「そうだねえ、もともと答えなんかしないような気もするし.....ただね、なんていうか、あの場所はどこかに繋がってるように思えてね」心の中ではそうに違いないと思っているのだけど、みんなの意見も聞きたかったので控えめに言って見た。

「どこかというと？」とトラピさんがすぐに反応した。

「だれも知らないところにね」

「だれも知らないところへの入口ですね」とコノンさんがこちらを見て微笑んだ。

「そう。それはジノ婆さん自身もほんとうにわからないんじゃないかな」

「あの森には聖霊がいてねというような話に近い感じですかね」トラピさんが自分なりに解釈して言った。

そうかもしれない。だれも知らないけれどみんなが知っている。あの湖にはミドリのサメがいてね.....心の中でつぶやいた。

第4 1話 ロマン

「お祖母さん戻ったよ」

「おかえりコノ。ジノ婆はなんだって？」

「いつもの感じかな」

「ジノ婆だって神様じゃないからね」

そうなのだ。長生きしたからといって神様になるわけではない。他の人よりはこの土地のことを知っているというだけだ。

「出島のあたりが神秘的な何かの力でどこかにつながっていることはわかりましたよね。六界錐のことも教えてもらったし、問題はどういうタイミングでどこに行って、戻ってるのかはっきりしないことかな」とトラピさんが言った。

「でも、それって一番肝心なところじゃない？」とナミナさんがすかさず突っ込んだ。

「夢がないことを言うなあ。そこが創造力の問題なんだよね。その想像力を逆手に取るのが手品師なんだけど」とトラピさんも思うところがあるようだ。

「それにしても現実主義者みたいに自分用の六界錐を置こうとしてない？」

「あれも、ジノ婆さんの話にロマンを感じたから作ろうと思っただけ」

「また、男のロマンだ。そして男はみんな行方をくらますと……」ナミナさんは、まるで男はみんな身勝手だとでも言いたいような口ぶりだ。

「オルターさん、ロマンって大切ですよ」とトラピさんに話を振られた。

「あ……そうだねえ……ないよりはあったほうが……」なんとも歯切れの悪い答えになってしまった。

「あはは、ロマンのお陰でいつも女は振り回されて大変だねえ」お祖母さんが笑っている。

「そうだ、お祖母さん。鮫の話は聞いたことがありますか」トラピさんが思い出したように聞

いた。

「鮫も男のロマンなのかい？ この土地では昔から海もないのに鮫の話はよく聞くよ。あれも神話みたいなものかね」

そのとき、腰まである長靴を履いて、肩から投網を下げたお爺さんが入ってきた。

「お祖父ちゃん、おかえり。今日はたくさん獲れた？」とコノンさんが聞いた。みんなは以前にも会ったらしく、驚く様子もなく話を続けた。自分だけが何日もこの家にお世話になったのに会うのははじめてのようだった。

その真っ黒に日焼けした顔からすると、屋外にすることが多いのだろう。投網漁で生活の糧を得ているのかもしれない。このお祖父さんも200歳近いのだろうけど背中も曲がってないし、気骨のありそうな顔つきが職人を感じさせる。オールドリアヌの人は歳をとってもそれぞれの力で自然とともに生きている強さを感じさせる。

「あんた、昔はよく鮫を捕まえたって、いつも言ってるわよね」お祖母さんが話の続きを始めた。

「鮫がどうしたって？」事情のわからないお祖父さんは片脚立ちになって長靴を脱ぐのに気を取られている。

「コノンのお友達が鮫はいるかって聞いてるのさ」

「この村に鮫も見ないで大人になった男なんかいないだろうよ。鮫漁に行くのは成人の儀式みたいなもんだからな」

「それであんたも鮫を仕留めたって言ってたね」

「あの日のことを忘れられるわけがないだろ。とにかく島ほどあるでかいやつだったからな。あれは鯨を丸呑みにしていたやつにちがいない。鮫漁は成人の儀式として一人で海に行くものと決まっていたから、あいつがわしの目の前に現れた時には村一番の英雄になれると思ったもんだ」

「鮫がいたんですか？」

「そうともさ。3日間お互いに睨み合ってた。夜明けの薄暗い時間に相手が目を閉じた一瞬を見て、特大の槍でひと突きだ。あの頃はわしの腕にかなうやつはいなかった。あの鮫もたいした

やつで、命乞いもしないで静かに海に命をささげたよ」

「それで手ぶらでご帰還かい？」

「ばかなことを言っちゃいけない。生まれた海に戻してやるのが鯨に対する仁義だからな。それが海の勇者に対する情けというもんだろ」

「そういうことらしいよ」と言うと、お婆さんは飽きたような顔をして台所に入った。

ノートの主が書いていたジギ婆さんの旦那さんもそうやって海に出て時間がゆるりと動くのを見たに違いない。そこがすべての謎のはじまりのような気がしてならない。

お祖父さんの話は、鯨の話から若い頃の思い出、自慢話とどんどん広がって行った。しばらく聞いていたネモネさんも水の瓶詰めをしに行ってしまった。

「わたしや生まれてこのかた鯨とやらにお目にかかったこともないから、どこまでがほんとの話やら……」というお祖母さんの声が台所から聞こえてきた。

お祖父さんは「まあ、鯨も見たことのない女にはわかれっというほうが無理だわな」と気にすることもなく、また巨大な鯨と睨み合ったときの話を続けた。

「鯨を生け捕りにしてきたという話はないですか？」とトラピさんが念を押すように聞いた。ノイヤール湖のどこかにいるのかどうかを知りたかったのだろう。

「トラピさんとやら、そんなことじゃなくてな。この村は鯨に守られてるわけだ」お祖父さんはまるで秘密を明かすかのように顔を寄せて言った。もちろんお祖母さんには聞こえない。

話を聞いているうちに、自分が見たあの大きな鯨はコノンさんの祖父さんが言っている鯨と同じかもしれないと思い始めた。

「鯨がどこにいるかって？ あんたにも鯨がいるんじゃないのかい？」お祖父さんはにやりとしてトラピさん胸のあたりを指差した。

「生け捕りにしたとかしないとかじゃなくてな。わかるだろ？」というとお祖父さんはグラスを手に取りゆっくりと口に運んだ。

「網のあとのこの一杯がたまらんでな」と言って満足そうに笑った。

自分の鯨がいる？ お祖父さんが話しているのは自分にしか見えない鯨なのだろうか。

「あなたの命が助かったのも鯨のお陰じゃないのかい？」 お祖父さんがこちらを見て言った。

だまって鯨の話を聞いていたナミナさんが「結局、男はみんな鯨探しのね」とあきらめたように言った。

「そんなに鯨のことを知りたけりゃ、ジノ婆に聞いてみな」とお祖父さんは投網を干すための支度をしながら言った。

結局またジノ婆さんに話が戻ってしまった。ジノ婆に何を聞けばいいというのだろうか。

第42話 善と悪

夕方近くになると、トラピさんとネモネさんは公演があるということで、先にリアヌシティのサーカス小屋に帰って行った。彼らの公演予定はあと一ヶ月ほどあるので、まだ2、3度はオールドリアヌを訪れることになるだろうと言っていた。

ただ、オールドリアヌでの余興が思いのほかうまくいったこともあって、ノートさんのことを調べるといよりも、サークルでの公演やいろんな人から頼まれる出前公演でスケジュールがいっぱいかもしれないとも言っていた。彼らにしてみればそれはそれで大道芸人冥利に尽きるということだろう。

でもそこは二人のことだから、公演をしながらもいろんな人と友達になって、オールドリアヌのことについての情報もたくさん集めてくれるだろう。トラピさんはウォーターランドに戻る前に自分の六界錐までつくってしまうかもしれない。そうなればすっかりオールドリアヌの人だ。行く先も風任せのトラピさんがウォーターランドに戻るかどうかあやしくなってくる。

コノンさんもうさぎの世話が終わると、子供たちが待っているからと言って、二人といっしょにリアヌシティに戻ってしまった。

行き違いで水を探しに出かけていたネモネさんが戻って来て、二人だけの時間になった。水の収穫はどうかを聞くと、採取した水はもう20箇所は下らないという。それぞれ2つずつ水の瓶詰をつくっているというから、もう40にもなるということだ。いくらなんでもこんなに持ち帰れるかどうか心配になってくる。

ネモネさん自身はもともと水が好きだったわけではなく、小さくて身体の弱かったころに何度も病気を患ったのをきっかけに水に関心を持つようになったのだという。両親の仕事の関係で居所を点々と変えているうちに、たまたま湧き水だけで生活する時期があって、そのころを境にみるみる健康を取り戻していったのだそうだ。今のネモネさんからは考えられない話だった。あえて言えば、奥手な性格だけは昔も今も変わらないですねとはずかしそうに笑った。

「水の力で人の身体や心もきれいになっていくものなのかな」と聞くと、迷わず「はい、そうだと思います」と自信たっぷりの答えが返ってきた。水の持つ力を心から信じているのだろう。

「それなら、どうしてボルトンのような水の会社に悪意が芽生えるのかな」

「必ずしも悪意とも言えないかもしれないです」

意外な答えだった。

「ある人からは悪意と見えても、別の見方をすると善意になるとか.....それに、頼ってる人もた

くさんいるから」

「結局すべてにおいて善意になることなんてないってということかな」と言うと、何か思うところがあるようでしばらく無言になってしまった。

「あの……オルターさん。さっきボルトンの黒いパーカーの人の話ができましたよね。パーカーの人が本当に犯人なんですか」

「いや、そうと決まったわけじゃないけど、あやしいかもしれないっていう話だよ」

「そうなんです……」と言うとまた二人で沈黙してしまった。

台所の方から、「二人は今日も泊まっていくんだろ？ だったらそろそろ夕食だよ。お祖父さんをお呼びしておくれ」というお祖母さんの声が聞こえた。

今日も歩き回ったせいかととてもお腹が空いている。

ネモネさんが動きそうにないので、お祖父さんをお呼びにしようとしたとき突然、「あの、わたし、その人を知ってるかもしれません」と悲しそうな目をしてこちらを見た。

「え、パーカーの人？」

「火事の現場ではなくて、朝方の冷え込んだときに黒いパーカーを着た人がいて……」

「知ってる人だったの？」

「違う人だと思いたいんですけど。コノンさんが……」

「……」返す言葉に詰まった。

「違いますよね？ きっと、見間違いですよ？」ネモネさんは自分にも言い聞かせるように言った。

「たぶん……」

そう言いながら、はじめてリアヌシティに来た時にコノンさんが男と話していたのを思い出した。あの男は間違いなくボルトンの黒いスーツケースを持っていた。島に届いた手紙はコノンさんに当てたものだったのだろうか？

台所ではお祖母さんが5人分の食卓の用意をしていた。今夜はコノンさんの分も用意してあったのかもしれない。

「その話はここだけにしておきましょう。本当のところはわからないし」

「そうですね。コノンさんに限って……」ネモネさんに少し笑顔が戻った。

「コノンがどうしたって？」お祖母さんに聞こえてしまったようだ。

「えっと、その、そうそう、リアヌシティでがんばってるって話をしていたんです」

「頑張りすぎなければいいんだけどね……」お祖母さんがいつものように言った。

コノンさんは家族の家で身寄りのない子供たちの面倒を見ているやさしい人のはずだ。そう自分に言い聞かせて夕食のテーブルについた。

「お祖父さん、ひとつ聞いていいですか？」

「なんだいあらたまって」お祖父さんは食事の手を止めて置いてこちらを見た。

「鮫は守り神なんですか？」

「オルターさん、また鮫の話かい」お祖母さんが笑っている。

「言っただろ、自分の心に聞いてみなって」

「鮫には、何の意味もないと？」

「鮫がきめるんじゃないくてな、わかるだろ？」もう自分で考えろというような口ぶりだった。

「少なくとも悪意はないですよ、ね……そういうことですね」と言いながら自問自答することになってしまった。

お祖父さんはそれ以上の説明はしないで、今日の釣果のことを話し出した。珍しくいい漁だったととても上機嫌だった。皿にのった大きな鱒も今日の自慢のようだった。鱒はよく見ると淡い水玉模様だった。

鮫の棲む村オールドリアヌ……と鮫漁の盛んだったウォーターランド。悪意はどこかにあるのか、それとも悪意なんか存在しないのか。水に生かされて。水に惑わされる世界。答えはあの鮫が棲む水に聞けと……。

第43話 静寂の時

食事が終わって一人自室に入った。ベッドの上に横になって窓を仰ぎ見ると、今夜はあいにくの天気垂れ込めた雲が村に覆いかぶるように広がっていた。空いっぱい隙間なく流れる雲が、人々の喜怒哀楽すべてを吸い込んで、まるで濁流のようになって流れている。

この調子だと明日の天気も怪しそうだ。この時期のオールドリアヌは思ったより雨が多いのかもしれない。冬を前にした雨季なのだろうか。これを見ているとあのノイヤール湖の水位が下がるほどの乾期があるとはちょっと考えにくい、季節によって雨量の差が大きいのもかもしれない。

村全体に石造りの平屋しかないことと山の少ない地形のおかげで、部屋からは視界の届くはるか先までを見渡すことができる。晴れた日の琥珀色の夕焼けは筆舌に尽くし難いほど美しい。

この窓とその先に見える景色がとても懐かしく感じられるのは、オールドリアヌが誰の心にもある心象風景のような景色だからかもしれない。こんな田舎があつたらいいなあと思わせるような、豊かな自然とゆったりした空気に満ち溢れている。その上住んでいる人たちも心優しい人ばかりだ。

どこからか犬の遠吠えが聞こえる。動物たちにとってもこの夕間詰は特別な時間なのかもしれない。それは、昼間の現実が夜の非現実の世界に変わるとき。月が闇を照らすだけの誰も知らない世界がはじまるのだ。

この村はそれを当たり前のこととして受け入れ、どこまでも深く沈み込む無限の静けさに包まれていく。夜を支配する闇がすべての音を吸い込んでしまおうとしているかのようだ。光と音のない世界に草木は息を沈め、動物たちは恐れを感じ怯える。犬たちはお互いの命あることを確認し合うように遠吠えを繰り返している。

世界から光が消え去ったとき、目を開けたままで静かに横たわる鮫たちがノイヤール湖のどこかで目覚める。彼らは闇の大きな流れにあわせて、同じ場所にとどまるのに必要な最低限の動きだけを繰り返す。闇と共生するように沈黙を守り、誰にも気づかれることなく密かに闇の深淵に溶け込む。

遠くでコノンさんのお祖母さんの呼ぶ声が聞こえる。

「ソダーさん、ソダーさん……」

ウォーターランドを出る時に聞こえた声と同じだ。あの声はコノンさんのお婆さんの声だったのであろうか。

「お出かけの時間が……」

あのときよりもよりはっきり聞こえる。

闇の隙間を掻い潜って届く声は誰の元に届くのだろう。声の主はコノンさんのお婆さんでなければ、それがどこにいる誰かはわからない。疲れからくる幻聴のようなものなのかもしれない。夢と同じように散り散りになった記憶が闇の隙間からこぼれ落ちてくるのだろうか。

階下では別の人の声が聞こえる。ネモネさんとお祖母さんが話し込んでいるのか。女性同士の話はいつまでも尽きない。

こちらは、夕食のときにネモネさんが話したことが頭から離れない。

黒いパーカーの話が事実だとすると、リアヌシティとウォーターランドランドは水を介して見えないところで密接につながっているということなのかもしれない。自分たちの知らない何かが遠く離れたところで着々と準備されていたということか。

ダルビー船長はそれを知っていて、なんとか島を守ろうとしてくれていたのだろう。それはナーシュさんの思いに重なるところもある。それが船長とマリーさんを結びつけている理由のような気もする。

もし、コノンさんがボルトンの使者として送り込まれていたのだとしたらかなりむずかしい話になる。何を基準に正義を判断すればいいのかわからなくなりそうだ。

そもそも本人は起きたことに気づいているのだろうか。知らないのであればどうしてボルトンの意向で島に来たのかだ。これを本人に聞くのは心苦しい。彼女を傷つけることになりそうな気がする。お婆さんがあの子のことは頼んだよと言った言葉が頭に浮かんでは消えた。そうすると不思議なほど気が晴れるのだ。

厚い雲に覆われた夜空を見ながら考え事をしていると悪いことばかりが思い浮かんでしまう。目を閉じてみんなの待つウォーターランドの楽しい生活のことを考えるようにした。

窓を開けたままで毛布も掛けなくて寝てしまったせいで、真夜中に冷たい風に起こされた。初秋といっても深夜の冷え込みは夏とは違う。

階下の話し声は聞こえなくなっていた。時計を見ると真夜中の12時を過ぎている。みんなそれぞれに自分の部屋に入って1日の疲れをとっている時間だ。

この家にはいくつの部屋があるだろう。もともと庄屋のような仕事をしていたのではないかと

も思う。一度コノンさんにこの家の家系を聞いてみるのもいいかもしれない。ノイヤール湖の水の秘密につながるなにかの糸口がつかめるかもしれない。

遠くでフクロウがホーウホーウと鳴いている。

考え事をしているうちに目が冴えてしまったので、スケッチブックに記憶を頼りに絵を書くことにした。台所に降りて絵具を溶く水を少しもらおう。集められた水は部屋の隅に置いてあった。よく見ると、瓶の水もかすかに輝いて見える。絵の具にあったのと同じように小さな光の粒子が輝いている。もしかすると深夜にノイヤール湖に行くと湖全体が輝いているのかもしれない。

絵を書くのに熱中して、気がつくやうに夜明け間近になっていた。雨は降っていないようだ。

少し朝の匂いがしてきたとき、階下で物音がした。お祖母さんが朝の支度をはじめたのだろうか。時計をみるとまだ4時前だった。

第44話 光る魚

年を取ると誰もが目覚めが早くなる。4時にもなれば起きるといふ人も多い。どうも寝るのにもそれなりの体力がいるということらしい。

朝の支度をする音を聞きながらスケッチの仕上げをしていると、階段を登ってくる足音が聞こえた。木の階段は古いこともあってギシギシと音を立てる。眠りが浅いとあの音だけで目を覚ましてしまうだろう。

ドアの外で様子を伺っているようなので、こちらのほうから朝の挨拶をした。

「漁に行くなら30分後に」ドアの外から聞こえたのはお祖父さんの声だった。それだけ言い残すとまた下に降りて行った。

突然の誘いに少し戸惑った。ただ泊まってるだけじゃなくて手伝いでもしろということだろう。こちらから先に言うべきだったか。湖に倒れてから合えないままでいたのも、お祖父さんが朝早くから漁をしていたためだと考えると申し訳なく思った。

スケッチブックを閉じて、急いで出かける用意をした。用意と言っても釣りの道具があるわけでもなく、洗面をして少し厚着の洋服を着たぐらいだ。釣りに合う気の利いた服など持ち合わせてないから重ね着をした。夜明け前のこの時間はまだまだ寒い。

玄関と居間が一緒になった部屋に降りるとお祖父さんがひとりで出かける準備をしていた。お祖母さんはまだ起きてないようだった。昨夜ネモネさんと話し込んだせいかもしれない。

「早くから起こしたな」お祖父さんが少し申し訳なさそうに言うので逆に恐縮してしまった。

「あの、少しでも手伝いができれば……」

「素人のあんたにや無理ってもんだな」と言うとテーブルの上の袋を指差して、「それを頼むな」と言いながら玄関を先に出た。

外に出てみると、白夜ではないにしてもウォーターランドの夜よりははるかに明るいことに気づいた。月明かりかと思っていたけれど空は薄い雲に覆われ、月はもとより星のひとつも見えなかった。

お祖父さんの舟小屋は公共の船着場の横だった。とても小さい小屋だけれど、場所は一等地といってもいいだろう。小屋にはジギという札が書いてあった。

「ジギというのは名前ですか？」

「屋号のようなものだな。ジギを使っていた漁師仲間もずいぶん減ったけどな」

ノートに出てきたジギ婆さんのことを考えていたが、あれは本当の名前ではなかったのかもしれない。釣具屋か舟宿の屋号のようなものだろう。船はこの前乗ったものよりさらに小さい、一人乗りと言ってもいいほどのものだった。

「これに？」と聞くと「あんたのはそっちだ」と隣の船を指差した。その船には帆はなくオールで漕ぐようになっていた。どうやら自分で漕げということらしい。それではますます手伝いにならないと思った。

漁の道具をぜんぶ積み込むとお祖父さんの乗った舟は滑るように出て行った。帆掛け舟を使うのは、魚を驚かせないためというだけでなく、神聖な湖に対する心遣いでもあるという。お祖父さんが言うには、地元の人間違ってもオールは使わないという。今日は釣果を期待していないと言われているような気がした。お祖父さんが誘ってくれたのは手伝いでなかったのだと思った。

船小屋を出ると、トラピさんたちときた時と同じ水路を伝って湖の方に向かった。ただ、途中近道のような狭い水路に入った。

「落ちないように。ここいらは水の下地形が入り組んでいるのと水草が多くて、絡まると助からないからな。特に櫂を使う舟は気をつけた方がいい」公書館の近くに来た時に、お祖父さんが言った。ここで行方が知れなくなった人も多いとのことだ。

「乾燥期に2mも水が引けばわかるが、この下は洞穴のような地形で間違った方に泳ぐと水面に出られない。少しぐらい泳ぎが得意でもだめさ。あんたが溺れたのがここでなくてよかったな」

「洞穴のようになっているんですか？」

「もともとこのあたりは洞穴が多い地形だから、要塞に適していると判断した祖先が移住先に選んだという話もあるぐらいだ」

「公書館のあたりにも洞穴が？」と聞くと、「どこにでもあるさ」ととくに驚く様子もなかった。「だがな、それは村人同士でもあまり話さない。お互いに知らないし勘ぐらない約束になっている」

おそらく、地下がそれぞれの家系に伝わる秘密の藏のようになっているのだろう。大切な食料

を保存するためだったかもしれない。それとも、現代の金庫のような役割だったのだろうか。詮索していると思われるのもいやなので、お祖父さんの家にもあるのかと聞いたかったけどやめておいた。

そうなる、図書館の下に地下があるのは間違いないとして、それが特別な意味あるのかどうかは自分の力で入口を見つけない限り誰も教えてくれないということになる。当然掘り起こすことは厳禁だろう。謎解きの入口は近いようでまだ遠い。

湖が近づくと連れて、水面の明るさが増してきた。昼間に来た時には気がつかなかったけれど、月もないような深夜に来るとその明るさが尋常でないことに気づく。とくに湖底のほうに行くほど明かりが集まっているように見える。普通ならば暗くなるはずの水深の深いところに大きな光源があるようだ。光源というか、そこが昼間のようにも思える。地球の反対側が見えているとでも言いたくなるような不思議な光景だった。

以前来た時に見えた光の粒子は少なく、その結果として夜が作られているようにさえ思った。太陽は光の粒子が吸い寄せられて集まっただけのものかもしれない。まるで天動説にも似たばかげた考えではあるけれど、そんな考えが頭をよぎるほどに朝靄につつまれた湖は幻想的な気配をたたえていた。

湖の北の方まで来るところには湖面を離れ立ち昇る粒子も多くなって、それに合わせるように夜が明けてきた。

お祖父さんは何も言わず一人で漁を始めた。30分に一度ぐらい網を打つだけで、それ以外はじっと瞑想でもしているように湖面だけを見ている。魚がないのか、そもそもそれほどの釣果を必要としないのか。

こちらもすることもなく、ボートから覗き込むようにして光る湖の底を見ている。夜の沈黙とは違い、光の揺り籠に寝かされているような穏やかな気分になる。ノイヤール湖の持つ力が何かはわからないけれど、そこに正と負のすべての方向から目に見えない大きな力が働いているのではないかと思った。

お昼近くになるとお祖父さんは舟を岸に寄せた。

「昼時だからそろそろ飯だな」と言って、草の葉に包んだパンと瓶詰めのミルク、根野菜のようなものを出した。飲み水があるならノイヤールの湖水を汲んでくるようにと言われた。お祖父さんは、ボルトンが言うような水じゃないから大丈夫だと付け加えるように言った。

食事をしながら午前中の釣果を二人で確認した。ビクに入っている魚はそれほど多くはないものの、思っていたよりも鮮やかな魚で水玉模様が鮮明に見えた。

「こいつが、ドットトラウトだな。きれいだろ」ビクの中の一匹を指して教えてくれた。

ウォーターランド以外の場所にも水玉模様の動物がいるとは思わなかったけれど、それよりもなによりもその美しさに目を奪われた。ノイヤーに住む魚はとんでもない輝きを持っていた。お祖父さんはこれを見せたかったのかもしれない。

そのドットトラウトも水からあげるとすぐに別のもののようにくすんだグレーになって、水玉の模様もかすんで微かに見える程度になってしまった。彼らは湖だけで輝きを与えられているのだ。

第45話 罪

漁は夕方まで続いた。実際には食事の後の日の高い時間は昼寝していたので、夕方の羽虫が飛ぶ時間になって2時間ほどの漁をただけだったというのが正しい。

天気の方が気になっていたが、雨にはならず薄曇りの一日となった。お祖父さんが言うにはこういう日が一番たくさん捕れるらしい。今日の釣果が少ないとしたらこちらのせいということだ。ビクを見ても10匹ぐらいしかいなかったもので、ちょっと心配になった。

漁を終えると、湖に棲む魚の話のいろいろ聞かせてもらった。土地を知るのに自然体系を知ることが大切なことだと思う。お祖父さんが言うには、季節や時間により釣果が大きく異なるという。それだけでなく、ドットトラウトがよく網にかかるときに限って何かが起こるそう。実際、自分自身が溺れたあの日もたくさん現れたらしい。

漁の成否が細かな仕掛けの調整とタイミングで決まるのと同じで、この世界に偶然なんていうものはないというのがお祖父さんの言いたいことのように感じた。問題は、気づいているかいないかだけで、あらゆることは必然としてつながっているのだと。

トラウトと持ち帰ると、お祖母さんがムニエルにしてくれた。料理されたトラウトに湖で見たあの輝きはなく、食用としてしまうことに若干の抵抗を感じた。こちらの様子を見ていたのか、お祖父さんが「これも必然さな」と言った。

カバのミームもたくさんの晩御飯をもらって満足している。彼もここに来てからはおいしい水さがしに大活躍だった。どこを歩いてもピンクになるわけだから休むわけにもいかない。そのおかげでネモネさんもたくさんの水のサンプルを集めることができた。

食事の終わる頃にネモネさんが「オルターさん、私、水もたくさん集められたのでそろそろウォーターランドに戻ろうかと思えます」と言った。今度は一日も早く、スロウさんたちと水の秘密を解き明かしたいということだろう。

「次の船長の船で？」と聞くと大きくとうなづいた。

「せっかく友達になれたのに残念だね」とお祖母さんが言った。

「ミームもこの水大好きなので、またときどき遊びにきます」とお祖母さんを気遣うように答えた。お祖父さんは何も言わずにムニエルを淡々と口に運んでいる。

「オルターさんはどうします？」

「えっと、ジノ婆さんにミドリ鮫のことだけは聞いておきたいから」

一人で行くのはよくないと思いながらも、それだけは聞いておきたいという気持ちが抑えられなかった。

「明日は、トラピさんなんかも来るかもしれないしね」ちょっと言い訳のようなことまで言ってしまった。

「ジノ婆さんにはまだまだ聞きたいことがありますものね」ネモネさんはこちらの気持ちを察してくれたのか、ことばのままに受け止めてくれた。お祖母さんはみんないなくなると淋しくなると思っていたのかニコニコしながら話を聞いている。

翌日は、水を入れた瓶でいっぱい荷物もあったので、スレイトン・ケープまでネモネさんと一緒に日帰りで戻ることにした。

途中、トラピさんたちを訪ねて、次の休養日を確認した。ふたりの話だと4、5日後になりそうだという話だった。サーカス小屋の公演のほうが盛況でなかなか休みが取れなくなっているようだ。その時もナミナさんと双子はリアヌシティを演奏して回っている最中だった。トンテケ、トンテケという音が遠くから聞こえてきた。彼らの演奏と思いがこの人たちの心に届くことを祈ってサーカス小屋をあとにした。

エクスポーラーは、時間通りに駅に着いた。ネモネさんと二人で、荷物を抱えて乗り込んだ。エクスポーラーの荷物置き場は、客席と別のキャビネットに収めるようになっていて、乗り込む前に荷物チケットを受け取る仕組だった。瓶の入った袋は大きかったので仕方なくそもチケットを受け取ってキャビネットに入れた。

二人で並んで席に座ると、ネモネさんはあらためてオールドリアヌに来てよかったと言った。ミームがあんな色になったのをみたことがないと未だに興奮覚めやらない様子だ。この水からウォーターランドの謎のひとつが解けるかもしれないねと言うとうれしそうに笑った。

いつものようにディスプレイが現れて生体チェックがはじまった。そのときだった。ネモネさんのディスプレイが赤くなって、crimeという赤い文字が点滅した。

クライム.....犯罪？ メッセージを覗き込んで見ると、域内の水を外に持ち出すことは禁じられているという説明が表示されている。

「え……」ネモネさんが小さく声をあげた。

ネモネさんはショックを隠せなかった。もちろんこちらも同じ気持ちだが、水を集めたネモネさんお気持ちは察するに余りある。なによりも楽しみにしていた水の成分を調べられないということに対してひどく落ち込んでしまった。この一週間あまりのメインランドの旅が不毛なものになってしまったようにさえ感じられただろう。

エクスポーラーの車窓から見えるグレーの景色が、すべての楽しみや喜びを押しつぶしてしまうように思えた。スレイトン・ケープに着くまで話しをすることもできず黙ったまま呆然として30分の時間を過ごした。

駅についたときに念のためキャビネットを開けようとしてみたが、それはまったく無駄だった。固く閉じた扉は二度と開くことはなかった。

第46話 汽水の調査

スレイトン・ケープに着くと夕暮れで町が黄金色に照らされていた。荷物も持たないで降りることに焦燥感を感じるばかりだった。

「もうオールドリアヌには行けないね」ネモネさんが日焼けが癒えたようにすっかり元の色に戻ったミームに話しかけている。

あれほど楽しみにして、期待通りの素晴らしい水に出会えたのに。ほんとうに二度と行けなくなるとしたら、ネモネさんの水探しの旅に終止符が打たれてしまうといっても言いすぎではないように思う。それほどノイヤール湖の水は特別なもののような気がする。しかし、それを意気消沈しているネモネさんに言うわけにはいかない。どうして水の持ち出しが危険だということに気がつかなかったか、あのとき自分が持ち込みの手続きをしていればどうなっていたらと思うと、後悔するばかりだ。

ホテルに戻ると、ネモネさんの様子がおかしいのをマリーさんもすぐに察したらしく、とにかくゆっくり休むようにと伝えてくれた。私のほうはどうしても今日リアヌシティに戻らないといけないと言うと。理由も聞かないで、そうなのとだけ言ってソファに腰を下ろした。

「あの、またノイヤール湖の話なんですけどね……」と言いかけると、マリーさんが残念そうな顔をしてこちらを見るので、ネモネさんの話に変えた。

「いや、あの、ネモネさんが、私じゃないですよ、水を持ち帰ろうとして集めたんですよ。そうしたらですね、エクスポーラーの車内チェックに引っかかってしまったようで、キャビネットに入れたまま取り出せなくなってしまって。それで、ネモネさんはすっかり……」

「そうだったの。行く前とあまりに様子が違っていたから」

「なんだかひどい話じゃないですか。ネモネさんの気持ちを思うと」

「でも、はじめてであれば、また行くことはできるわ」

「そうなんですか？」

「ダルビーは何をやったのか知らないけど、一度や二度の話ではなかったみたいだし。ただ、ナーシュのようにならないとも限らないわね」

「そうですか。じゃあ、ネモネさんに教えてあげないと」

「オルターさん、今はやめて明日にでもしたほうがよくない？」戻って来られないかもしれないと言っているのがどうしてわからないのかというような顔をされてしまった。

「そうか。問題は水を持ってこられなかったことですしね」椅子に座り直した。

「あそこの水はいろいろないわく付きだから気をつけることね。オルターさんのこの前の一件もあるし」

「ああ、たしかに……」それを言われると返す言葉もない。ジノ婆さんの言っていた水の力という言葉が遠くから聞こえてくる。

その後は、気まずい雰囲気になってしまって、お互いに何をするでもなく時間だけが過ぎて行った。

マリーさんは、オールドリアヌをさけているように感じる。それはナーシュさんの失踪が原因なのだろうけど、とにかく口にもしたくないほど嫌っているようだ。ナーシュさんを探しに行ったこともあるのかもしれないが、そのときにもいろいろあったのだろう。それから10年も経っていることを考えると、オールドリアヌの記憶さえも消し去ってしまいたいという気持ちもわからなくもない。そんなところに来て、オールドリアヌとの行き来をしているのだから、マリーさんの気持ちを逆なでしているようなものだろう。

夕食も終わって、着替えを取りに自分の部屋に入ろうとしていたときに船長が戻ってきた。ドアをいつになく勢いよく開けて、八つ当たりをしている。少し飲んでいるようだ。

「お、爺さんいるのか。あいつらウォーターランドに探査装置のようなものを持ち込もうとしたから、勝手なことをするなって怒鳴りつけてやったぞ。ずうずうしいにもほどがあるってな。それも、大気とか海水が汚染されていないか調査したいって適当なことを言ったっていうんだから、どうしようもないやつらだな」

「ミリルさん、困ってなかったですか」相談する店主もいなくて途方に暮れている姿が目につく。

「まあ、やつらのことだからうまく丸め込んだだろうな」船長の腹の虫が収まらないようだ。

「何か水のことと具体的なことでもわかったのかな」というと、マリーさんが「ボルトンに理由

もなにもないわ」といつものことだとでも言わんばかりに言い捨てた。

「ボルトンとの関係はわからないが、スロウって兄ちゃんが言うには、島のどこかに汽水の流れ出しているところがあるっていうんだな。もちろん池は真水に近いのはわかっているんだが、どうも海底から湧き出しているって話だ。例の火事があったあとの植物の成長を調べてて気がついたって言ってたな。あの、兄ちゃんなかなかやるな。大したもんだぞ」

「その汽水にボルトンも目をつけたってことかな」

「どうもそうみたいだな。やつらはウォーターランドに限らず可能性のあるところは片っ端から掘り起こしている。スレイトン・ケープの先に続く水脈をしらみつぶしに当たってるってことだろうな。なんでも、たまに来る飛行船もボルトンの関連会社のものだっていうじゃねえか。あんなの許してたら、どんどんわけのわからないやつらが入ってくるぞ。一応飛行船の勝手な離着陸も許可しないって言うておいたけどな。自分だけで利権を独占するつもりかって言いやがったよ。まったく、利権だけしか頭になくず野郎のくせしやがって」

「飛行船もそうだったんだ。島便りを出してる場合じゃないかな」話を聞いてさすがに考えてしまった。

「新聞を見てあの静かな島を守ろうという人も出てくだろうけど、ボルトンだけはいただけないな。ネーコノミーの餌食になっちゃう」

得体の知れないボルトンという会社の影がどんどん大きくなることに不安を感じる。静かで美しいウォーターランドが見えない何かに汚染されていくような気がして悲しくなってしまった。

第47話 黒い六角の紋章

「そうそう、火事の後に残っていたバッチ。あれはボルトンのマークだぞ。qなんかじゃなくてボルトンのbだ。六角にbはボルトンだからな。やつらが置いた何か失火したんじゃないか」

「え？ 火事の際にボルトンがあそこにいた？ 見かけない黒いパーカーの着た人を見たっていう人もいるんだけど」コノンさんのことは言わず船長の考えを聞いてみた。

「そいつは限りなく黒だろうな。とんでもないな」

やはり船長も黒いパーカーをボルトンと思うようだ。それぐらいウォーターランドにいる人は気心の知れた関係なので、珍しい人の記憶は強く残る。悪く言うと狭い世界に閉じこもっているともただの田舎者と言えなくはないのだけれど。それがいいところなのだ。

「ボルトンの紋章も六角なんだね。言われてみれば雲の塔も六角だったし、リアヌシティで見た黒服の持ってるスーツケースも六角だった」

「黒い六角を見たら、まずはボルトンって思っている。ボルトン以外の人間で好き好んで黒の六角を持つやつもいないだろう」船長もやっとうちが納まってきたのかポケットからシガレットケースを出して葉巻をとった。この前の骨董市で買ったケースだろう。

「じゃあ、六界錐はどうなるんだろう。ボルトンにも繋がってるのかな」

「もともと六角はリアヌシティの紋章だから、同じところに生まれて、白と黒に分家したようなものだからな。正確には緑と黒ということだろうけどな。もちろんボルトンのやつらは自分たちこそが六角の直系だと考えているだろうが」船長はそんなことは許さないともも言いたそうだった。

「オールドリアヌ側が緑なわけだね。同じ六角の派生だとするとボルトンも悪いやつばかりじゃないって可能性もあるだろうね」

「白も黒に混じれば真っ白なままじゃいられないだろう。せいぜいグレーってとこだな。やつらの性善説を信じるやつがどれほどいるか俺にはわからない」葉巻を大きく吸って、少し間をおいてゆっくりと煙を燻らせた。

「それを言ってしまうとリアヌシティの住民はみんな黒になるよね。そんなことはないと思いたいけれど」話しながら、家族の家にはいた子供たちの顔が目には浮かんだ。

「人を信じるのもほどほどにってことだろうな。騙されてる本人は気がついていない。それが幸せと言うやつもいるけど、そんなもんじゃないだろう。ちがうか？」

コノンさんのお婆さんと同じようなことを言ってると思った。

「さっきの汽水の話だけど、ウォーターランドの汽水が木々の成長の源だとしたら、スロウさんにノイヤール湖のほうも調べてもらいたいなあ。あそこのお年寄りみんな驚くほど長生きだし」ネモネさんの気持ちも考えて言ってみた。船長はスロウさんのことを買っているようだからこれはいい提案かもしれない。

「そこだな。まかり間違っただけで水脈が同じということであれば、なにか共通することがあるのかもしれない。爺さん、湖探検で何かわかったことはないのか？」

思わずマリーさんの顔を見てしまった。マリーさんは聞いてないふりをしている。いや、してくれているのか。

「あそこの光る湖底に緑の岩盤があるらしいね」当たり障りのなさそうな話からしてみた。

「緑？」

「ナーシュさんたちの六界錐がその緑の石なんです」

話に夢中になっていて、ネモネさんが2階から降りて来ていたことに気づかなかった。思ったよりも元気そうなので安心した。スロウさんの話も聞いていたかもしれない。

「緑.....緑か.....。やっぱり緑と黒だな」と緑と黒という言葉が船長が繰り返した。

「船長、鮫は緑だったね」

「それ言うと、草木も苔もみんな緑じゃねえか」

「草木はもともと緑じゃない」とマリーさんが笑った。

「船長の見た鮫は緑だったんだよね」と確認すると、あれは確かに緑だったなど記憶を辿るようにして言った。

「船長が見たのは日中だった？」

「いや、月もない真っ暗な夜だった。だから鯨が光っているのがわかったってことよ」

それが、現実か幻想なのかはよくわからない。ただ、自分がオールドリアヌで鯨と出会った時と同じような状況にも思える。問題は、現実の話に神話とか幻想とかが入り混じって、鯨が一体どこにいるのかはよくわからなくなっているところだ。

「そのミドリの鯨って、今でもどこかで見られるものなのかしら。ナーシュも一時期鯨のことばかり話してたわね」マリーさんが思い出したように言った。

「なんだか、男の世界らしいですよ。ロマンなんだそうです」ネモネさんが村でお祖父さんに聞いた話をした。

「鯨はロマンか。そいつはおもしろい。鯨探しに人生を賭けてるって……おい、それは俺のことじゃないか。わははは」

「考えたらダルビーも親の仇だとか言って鯨を追いかけてるものね」とマリーさんが言うと、そのどこが悪いというようにむくれた顔をした。どうやら船長もロマン男の仲間らしい。

「緑の鯨は、もしかして汽水にいるんじゃないでしょうか」とネモネさんが言った。

「汽水か……ありえなくもない話だな。汽水に住む鯨か」と船長が言うとみんなそれぞれに思い当たることがないか考えているようだった。だれも何も言わなかったけれど、それぞれの目は心当たりのあることを思い浮かべているように見えた。

やはりミドリ鯨が鍵を握っている気がする。ジノ婆さんがミドリ鯨のことを知っているのかどうかわからないままだ。早く戻って、ジノ婆さんを訪ねよう。

船長は明日にも定期便で出ると言うから、その便でスロウさんに来てもらえるかもしれない。そうすればこちらで何か手がかりがみつかる可能性も出てくる。

急いでスロウさんに手紙を出そうと思った。待ち合わせ場所はサーカス小屋にしておけば、自分がいなくても、ナミナさんかトラピさんはつかまえられるはずだ。あの二人があと一ヶ月もリアヌシティにいないことを考えると急いだ方がいいだろう。

ネモネさんに、次の船で帰ることを言ってホテルを出た。

ミテホシイトコロ ガアリマス リアヌシティノ サーカスゴヤ デ マツテマス

ハトポステルで手紙を書き終わると、その足でそのままエクスポーラーに飛び乗った。

エクスポーラーの最終の時間が気になって慌てて書いたら、差出人と宛先を書くのを忘れたことに気づいた。船長が行けばオルターが書いたということはわかるから大丈夫だろう。

エクスポーラーからの景色は夕闇に染まり、空にはまだどんよりした雲が垂れ込めている。明日はジノ婆さんにノイヤールのサメの話と緑石のことを確かめよう。どれも住んでいるノイヤール湖の話だから何か知っている気がする。きっと何かの関係しているに違いない。

第48話 水上の村

リアヌシティに着くとすぐにトラピさんたちのところに行った。水を持ち帰れなかった話をすると、やっぱりそういう制限がかかっているんだと、リアヌシティへの不信感を募らせた。その上で、やはり水そのものがすべての謎の鍵を握っているのではないかという話になった。トラピさんはそれに確信を持っているようだった。

私は、今回のオールドリアヌ訪問を終えたら一度ウォーターランドに戻るので、もしスロウさんと行き違いになったらこれまでの経緯を話してもらおうことと、その上でノイヤール湖の水を二人もいっしょに調べてもらいたいということを頼んだ。

二人とも望むところだと言わんばかりの張り切りようで、次にウォーターランドに帰るまでに必ず水の秘密を解き明かすと意気込んでいた。

どこからともなく視線を感じたので周囲を見まわすと、建物の陰に家族の家のミオ君の姿があるのに気づいた。遠くから遠慮がちにこちらを見ていた。家族の家に行きたい気持ちもあったけど、最後のバスの時間が迫っていたので、手を高くあげて、またあらためて来るという気持ちだけを伝えた。こういう風にされると一時でもリアヌシティを離れるのが寂しくなる。一方で、リアヌシティが黒に染まってしまうなら、その前に彼らを助けないという気持ちも強くなった。何か言いたげなミオ君のまっすぐな目が脳裏に焼きついた。

オールドリアヌのコノンさんの家に戻ると、おばあさんとお爺さんが二人で静かに夕食をとっているところだった。一脚の燭台がテーブルを明るく照らしていた。食事は3人分が用意してあった。お祖母さんにお腹が空いただろうとすすめられて、部屋に入らずそのまま食卓についた。

「ネモネさんがいなくなると淋しいね」とお祖母さんが言うと、「また、そのうち来るだろ」とお祖父さんが気に留めないようなそぶりを見せた。

二人に水を持ち帰れなかったとは言えなかった。あんなに一生懸命壇を集めてくれたお祖母さんのことを思うとどうしても言い出せなかった。

「ネモネさんも早くまた来たいと言ってましたよ」とだけ言うとお祖母さんはいつものように、「そうかい、そうかい」と言いながらお皿に煮物をよそってくれた。外が少し肌寒かったので、朝から煮込んだという鍋料理が身体を芯から暖めてくれた。この温もりがいつもこの家にはある。ノイヤール湖で意識を失わなければ二人に出会うこともなかったことを考えると、危険な目にあったとはいうものの偶然の巡り合わせに感謝したい。これもお祖父さんに言わせると必然だというのだろうけど。こういう必然ならいつでも歓迎だ。

お祖父さんがその日獲ったドットトラウトは、食卓には出なかった。

「今夜はトラウト料理はなしですね」と言うと、「持ち帰れるように、燻製にしているからな。うちのはサークルでも一番の人気だぞ」と言うと、おいしい燻製作りのコツをいろいろと説明してくれた。

ドットトラウトには湖畔に茂るスモールリーフの木のチップが合うのだという。同じ土地のもの同士を合わせると相性がいいのだろう。それを弱い火で何日もかけて燻すのだ。この燻し方が門外不出の秘伝だと自慢しながら話を聞かせてくれた。この土地ならではの光を閉じ込めた魚とその光を吸収した木とほどよい時間をかける腕前が極上の自然の恵みを作り出す。

いただけるものならこれほど嬉しいことはない。ウォーターランドのみんなへの最高のお土産になる。お土産はドットトラウトの薫製とオールドリアヌの水彩絵具で描いたスケッチで決まりだ。

あらためてこの家の祖先の話を聞いてみると、想像したとおり昔は耕作のために人を雇うほどの農地を持っていて、このあたりではちょっと名の知れた農家だったのだそうだ。しっかりした岩盤と粘土質の土地の上に位置することもあり、交通手段としての水路には恵まれていたものの農地は水はけが悪く苦勞したという。その当時に、生活の糧として半水生の農作物を作ることもしいろいろ試されて、今夜の煮物にも使われている大ハスネや水芋、沼大根などは今でもこの村の特産品になっているらしい。農作地でもある水辺の沼と低木がつくる木陰と朝方の霧は、この村ならではの美しい景観をつくる。

農業をやめたあとは住み込みの手伝いをする人もいなくなって、部屋を貸して生計の足しにしていた時期もあったそうだ。お祖父さんが生まれた頃には、湖の漁だけで暮らすようになっていたのだと言う。

食後の果物とお茶が出た時に、もう一度ジノ祖母さんのところに行きたいという話をした。やはり、一人で行くのはよくないという話になって、また、お祖父さんの漁に同行して、昼時になったらジノ婆さんのところに連れて行ってもらうことになった。

今夜の空は、今にも降ってきそうなほどの星空に埋め尽くされ、熟して今にも崩れそうな満月がノイヤール湖のほうにそろりそろりと登りはじめていた。いつもの夜よりも赤い空の色が窓越しにもわかるほどだ。

お祖父さんは明日も早いからと言って、寝室に入った。

「オルターさんも、あの人と行くのなら早く休まないといけないね」お祖母さんが残念そうに言った。

「そうですね。漁は早いですからね」先に失礼することを許してもらった。

第49話 豊漁の予兆

投網を投げると、最初から20匹ほどのドットトラウトが網にかかった。

「今日は特別な日になりそうだな」おじいさんがぼつりと呟いた。

特別な日という言葉に大漁というだけではない別の何かを感じた。

「鮫が現れるとか？」気になったので聞いてみた。

「ああ、鮫か……そうかもしれないがな」と言いながら、光るトラウトを網から一匹ずつビクに移していく。

投網を手繰り寄せると、輝く湖面にもう一投した。お祖父さんが続けて網を打つのは珍しい。網は湖に被さるように大きく開いて落ちた。その瞬間、網の中で驚くほどたくさんドットトラウトが跳ねるのが見えた。

「今日は早めに引き上げたほうがよさそうだな」

「獲れ過ぎですね」と笑って言うと、「獲れ過ぎはよくないからな」と独り言のように言った。

「なにか起きますかね」お祖父さんの顔を伺った。

「あんた、ナーシュを知ってるか？ あいつの消えた日にそっくりだ」

思わず湖底を覗き込んだ。会ったこともないのにナーシュさんの影がそこに見えたような気がした。

「今日は早めに漁を切り上げて、ジノ婆のところだけに寄って戻るとしよう」

結局、霧が晴れるのを待つこともなく、ビクは一杯になってしまった。なぜ何かが起きる日に限ってトラウトがたくさん獲れるのかはお祖父さんにもわからないという。

漁の道具を片付けると舟を北に向けた。

「わしの後をしっかりついてくるんだぞ」強い口調だった。

帆掛け船はアメンボウのように水の上を滑って進む。それに対してこちらの櫓を使って漕ぐ船はどうにも効率が悪い。ちょっと気を抜くとすぐにお祖父さんの舟との間が開いてしまう。もう若くはないので、10分もすると息が切れてくる。そうすると、こちらの様子を察したお祖父さんがしかたなく舟のスピードを落とす。

「景色が揺れて見えるようならすぐに言うんだぞ」と心配そうにこちらを見た。

なにも聞いてはいないが、お祖父さんも同じような体験をしたことがあるに違いないと思った。

さらに、10分も進むと、ジノ婆さんのいる出島が見えてきた。同じ湖でも北のほうは霧が深いようだ。気温の差があるのだろう。南の沼地とはちょっと違った土地になるせいか、木々が茂る雑木林のような景観に変わる。農業にはやはり適さないように見える。

お祖父さんの指示で、舟を棧橋にしっかりくくりつけた。今日は舟を流されるような天気でもないだろうと思ったけれど、地元の人にしかわからないこともあるのかもしれないから、言われた通りに何度も何度も杭にロープを巻きつけた。

先に出島に上がったお祖父さんのジノ婆さんと呼ぶ声が聞こえた。舟を降りてからあの時と同じように、またユイローの匂いがしてきたのでちょっと心配になったが、すぐにあとを追って出島に向かった。お祖父さんがジノ婆さんと呼び続けている。足が悪いのにどこかに出かけたのだろうか。

柵を越えて出島に入ろうとしたときに一瞬足元を何かを取られた。おかしい、また普段と何かが違う始めている。顔を上げると、目の前の景色がずれ始めているのがわかった。湖があのと同時に同じように光り、一点に集中しはじめている。よく見るとドットトラウトだった。数えきれないほどのトラウトが湖の中心に向けて集まっている。お祖父さんが心配していたのはやはりこのことだったのだ。集まったトラウトの輝きが水面を盛り上げる。それと合わせるように光の粒子が弾け飛ぶ。

水面が今にも張り裂けそうなほどに大きく膨れ上がり始めた。

その時、光を背景にして立つ人の影を感じた。一人……いや、二人か……。お祖父さんとジノ婆さんがこちらに手を差し伸べてくれているようにも見える。すでに喉は自由を失って、助けを求めることさえもできない。三度も同じ失敗をしたことを責める声も聞こえてくる。

もがいても、騒いでも、光り輝く景色は焦点を合わせさせてくれないし、手足の自由が戻るわけでもない。なぜ、何度も同じような目に会うのだろう。コノンさんのお祖父さんは今どうなっ

ているのだろう。この前のトラピさんとナミナさんのように、この状況にまったく気づいていないのか、それとも同じような目にあっているのだろうか。

このまま、ここに戻れないとしてもそれは本望だろうと自分自身に言い聞かせた。

ゆっくりと揺れ続けていた景色が光を受けて走馬灯のようにぐるぐると回転しはじめた。そして、光とひとつになって空に向かって吹き上げるように登った。それは徐々に黄金色の束となってねじれ、うねりながら太い光の柱となったと思ったら、一気に天まで立ち上った。

遠くのほうで、鯨はまもりじゃ、という声が聞こえた。ジノ婆さんの声だろうか。まもり……マモリ……何かの護りか。

その声は消えることなく止まったままに遠ざかって行く。音が時間とともに消えず、もののように止まる。それは意識の中にとどまっているということとも違う。いろいろな音が止まっていくに連れて、ブーンという不快な濁った音に変わっていく。

それを待っていたように真っ黒な闇が辺りに立ち込め始める。明かりを閉じ込めてしまう闇の大きさは計り知れない。世界を包むのは光ではなく、闇なのではないかとさえ思える。それほどに闇の力は強く大きかった。

漆黒の闇と思っていたのは、深い深い緑色の世界だった。光がすっかり消え去っていたために限りなく黒に見えたのだろう。真っ暗闇と思われた世界には緑が微かに残されていたのだ。

緑の痕跡を少しでも見つけようと目を凝らしていると、闇に散らばる六界錐が何処かを起点に徐々に広がっていくのがわかった。それも闇の中にあるためにほんのかすかにしか見えない。

気がつくや首から下げていた虹の石がわずかな光を放っていることに気がついた。

「そうか。この石が闇の世界にあつて唯一明かりを発し六界錐を照らし出しているのか……」

この前もこの虹の石をたくさんの鯨が取り囲むように集まっていたことを思い出した。彼らもあの真っ黒い目で微かな明かりに引き寄せられていたのだろうか。

虹の石のほんの微かな光だけが、暗黒の中に唯一の光を発している。どこかでコピが呼ぶような声がした。それと合わせるように、ひとつの六界錐との距離が狭まっていくのがわかった。あの六界錐の向こう側にコピたちがいるように感じた。そこにみんなのいるウオーラーランドが待っている。そう思った。

六界錐はどんどん近づいてくる。いや、こちらが近づいているのかもしれない。それとともに暗闇にどこからともなく明かりが差し込んできた。

自分はどこに行くのだろう。すでに、ジノ婆さんとお祖父さんのいるオールドリアヌではないどこかに意識は移っているようだった。後ろの方に鮫の姿が見えた。あの巨大なミドリ鮫だった。

こちらを追っているように見えたが、明かりが強くなり始めたところで、大きく身体を反転させ来た方に頭を返した。あっという間に鮫の後ろ姿は闇の深みへと消えて見えなくなってしまった。

そのあとは、意識が途切れたときのように、頭の中が白い光で満たされた。書き残されたすべての記憶が強烈な光でかき消されていくようだった。

第2章のあらすじ

都会を逃れた人が暮らす小さな島ウォーターランド。本屋リブロール店主のオルターと住人たちは豊かな自然に囲まれてのどかな生活を楽しんでいます。島には数百年前に訪れた旅人が残したノートがあり、そこには時間がゆるりと動き島が消えるという謎めいた話がかかれています。

あるときノートを書いた旅人の出生の地がわかり、オルターはその秘密を証すために大陸メーランドに向かうことになりました。たどり着いた先リアヌシティは想像もしなかった未来都市で、そこは暖かな交流が忘れられ合理性と安全性だけが優先される場所でした。それを管理していたのがドーム・コンストラクションとその関連会社のボルトンでした。

そして、旅人の故郷であるオールドリアヌがかろうじてその管理の手を逃れた自治エリアとなっていました。オルターたちはこのオールドリアヌに度々足を運びノートの秘密と村の謎に迫ろうとします。しかし、答えが隠されていると思われた公書館にさえも近づくことを阻まれ、思うようにノートの真相を探ることができません。

その後、島の秘密を知ると思われるノイヤール湖の出島に住むジノ婆さんのところを訪ねることになりますが、六界錐のある場所に近づくとまるで何かに囚われたようにオルターの意識は混濁し、ミドリの鯨が棲む世界に引き寄せられてしまいます。そこはノートの主がいたと思われる場所であるようですが、それを確信することができないままに現実の世界に連れ戻されてしまいます。鯨はどこから現れるのか、六界錐は何を意味しているのか、それともノイヤール湖の光る水にすべての答えがあるのか。確信に迫ろうとしたそのとき、オルターの意識がまた遠のいていきました。

第1話 再生する記憶

深い緑の闇から抜け出すと、潮の香りのする暖かい風の吹くところに出た。明るい陽射しに目が慣れてくると、そこが慣れ親しんだ場所だとわかった。それは間違いなくウォーターランドの灯台だった。一瞬遅れてインクが淡い光と共に目の前に姿を現した。この子は私のいる場所をどうしてわかるのだろうか。気がつくインクのいることだけが意識を失った世界にいるときの唯一の救いになっている。

そんな気持ちを知ってか知らずか、何も変わることはないとも言いたげにいつものように机の下で毛づくろいをはじめた。ベッドから身体を起こすと、不思議なものでもみつけたようにじっとこちらの様子を伺っている。もしかして、また違う顔になっているのだろうか。自分の顔を恐る恐る触ってみたがよくわからない。

「インク、おいで」声を掛けると、少しこちらの様子を見ているようだった。なにか違うところがあるのだろうか。何度か呼んでいるうちにオルターの声だとわかったのか、忍び足で近づいて来て身体をすり寄せた。

ここはこの前来た場所と同じなのだろうか。すべてが今のウォーターランドに似すぎている。ベッドも前のような藁の寝床ではなく、いつも使っていた布地のシーツが掛けてある。それも洗いたてだ。

一番気になるのは東と西の方位の入れ替わりだけれど、日が高いこともあってよくわからない。太陽は少し南に傾いているようにも思える。そうであればほんとうのウォーターランドと同じということになる。

灯台の中に何か違ったものはないか探したが、とくに記憶と違うものは見つけれなかった。もしかして、ノイヤール湖が人の記憶をどこかに再現して見せているのではないかと想像してみた。ここが自分の記憶を元にした創造の世界だとしたら、それは夢と同じようなところなのかもしれない。

前回ウォーターランドと似たところに行ったときにはミドリ鮫が現れて元の世界に帰ることができた。来るときにも現れたことを考えると、今回も鮫を見つければいいのかもかもしれない。急いで鮫に連れていかれた海のほうを見たが、そこに鮫の姿はなかった。しばらく見てもなにも起る気配がなかったので、彼らは夜に現れるのだと自分に言い聞かせた。そうでもしないと、不安な気持ちが押さえられなくなりそうだった。

ベッドの枕元には読みかけのノートが置いてあった。手にしてみると、舟遊びをしていた場所

のことを書いてあるページだった。ウォーターランドを出る前に読んでいたところだ。ここには水路のことしか書いてなかったけれど、もしかするとノイヤール湖のことも書いていたのかもしれないと思った。

ノートを読んでいるうちにノート氏もノイヤール湖で意識を失ったのではないだろうかという考えが頭をよぎった。彼も出島に六界錐を作っていたのだろうか。そうだとしたら、そのあと訪れたというウォーターランドも、実世界にあったかどうかさえ疑わしくなってしまう。でも、ノートそのものはウォーターランドに存在している……。

もし、夢の世界を他人と共有できるのであれば、自分のいるところとノート氏のいるところが同じ夢の中と考えればいい。同じ夢であれば……。

それよりも今は、出島で別れてしまったコノンさんのお祖父さんはジノ婆さんと何も気づかないままに話をしているのかどうかのほうが気になる。そこではなにも変わらずに時間が進んでいるのだろうか。自分がこんなことをしているこの瞬間も、きっと向こうの世界はいつも通りに動いているのだ。そう思うと一体何が正しい現実なのかわからなくなってしまう。

ノートをめくってもみても、いつも見ていたものと同じものに見える。間違いなく自分で書いた写しだ。横にいるインクにも何の違和感も感じられない。いつもと同じように足先の毛づくろいをはじめている。まるで、今のウォーターランドに戻ったような錯覚を覚える。

人が歩いてくる気配がしたので、あわてて風呂の後ろに隠れて小さくなった。一人で来た人はすぐには出ていかなかった。机で何か作業をしているような物音が聞こえる。書き物でもしているのだろうか。インクもなついているようだ。喉を鳴らしているのが聞こえた。

前にも感じたようにこの世界の人と目を合わせることがとても危険な行為であるように思えて仕方がなかった。それは、二度と現実世界に戻れないのではないかという不安だったと思う。なぜそう思ったのかは自分でもよくわからない。

普段、夢に見る世界というのは、自分自身の目線なのか第三者の目線なのかは曖昧なものだけけれど、今おかれているのはその感じに似ている。机に座っているのは自分自身のような気さえする。

そんなことを考えているうちに、不覚にも風呂の横の壁にもたれたまま、また深い眠りに落ちてしまった。その後、机のところにいた人がどうしたかはわからない。目覚めたのは、すっかり日が落ちた時間だった。一瞬出島に戻ったかと思ったものの、目の前のバスタブを見てそうではないことはすぐにわかった。夢の中で夢を見ることもあるのだろうか。せめて目覚めたところ

が寝入る前と同じところであってほしいと思った。そうでないと、自分の居場所がまったくわからなくなってしまいそうだった。道に迷うどころの騒ぎではない。無限に広がって行く意識の中で遭難してしまいそうだった。

明かりのない部屋は真っ暗で何も見えなかった。手探りで窓をみつけ外を眺めて見たが、月も星もない闇の世界が広がっているだけだった。

第2話 メビウスの時

あたりを見回しても人の気配はまったくない。ノート氏が現れそうな気配も感じなかった。気がつくといんくの姿も見失い、すべては暗闇の中に消えてしまった。

また、前と同じようにボートに乗って海に出れば出島に戻ることができるかもしれないと思い灯台を出た。

しかし、そこで目にしたのはまったくあり得ない光景だった。

「え、どうして……」思わず声を出してしまった。

エバンヌがある。耳を済ませるとジャズが流れているのが聞こえ、窓には動く人影まで見えた。この前のような孤独な世界ではなくそこに人がいることに孤独感以上の恐怖を感じた。

店を覗いてみたい気もするものの、そこに誰がいるのかは想像もつかない。たとえノルシーさんがいたとしても、ほんとうのノルシーさんかどうかを見きわめることもできないだろう。もし、ノルシーさんの顔がこの前の自分と同じように違っていたらと思うと、とてもドアを開ける気になれなかった。

ここはほんとうのウォーターランドに似すぎている。それは、まるで自分自身の記憶の中に入ってしまったかのようだった。

そのままボートのあった場所を目指した。ただ、この前乗ったボートはいっしょに海深く沈んでしまったことを考えると、そこにあの赤いボートがある保証などなかった。月もない暗闇の中で必死に探してみたものの、なくなったボートを見つけることはできなかった。

もしやと思い、北のほうに行ってみると思ったとおりのボート乗り場があった。それは今のウォーターランドにあるボート乗り場とまったく同じだった。とりあえず鯨に会うだけなら、同じ赤いボートでなくても構わないだろう。海に出られさえすればいいのだと自分に言い聞かせ乗り込んだ。

少し沖に出たところで前と同じように西に向けて方向を変えた。左手にはさっき通り過ぎたエバンヌが見える。鯨が現れるのを期待しつつ西に向かって少しずつボートを進めた。

ときどき後ろを見ながら西に向かったもののあのときのように鯨は現れなかった。ふと気になってボートの下を覗き込むと思っていたほどの深さはなく、そこに巨大なミドリ鯨が現れるとはとても考えられなかった。

後ろを振り返っても、鯨の背ビレを見つけることはできなかった。この前と違ってのは月も星もない夜ということ。それに前に来たときは白い灯台やエバンヌはなかった。その違いが何を意味しているのかはわからない。

深夜過ぎぐらいいまで灯台の先の海に浮かんだまま時間をやりすごすことにした。しかし、待てど暮らせどミドリ鮫が現れることはなかった。仕方なく灯台の近くにボートを寄せることにした。エバンヌには数時間前と同じように明かりが灯っていたけれど、灯台のほうには人が入った様子はなかった。

これで現実世界に帰れなくなれば、またマリーさんに心配させてしまうし、コノンさんのお祖母さんやお祖父さんにも余計な気苦労をかけるだろう。そして何よりもあの美しいオールドリアヌに戻れなくなることが悲しい。できれば、帆掛け船を自在に操れるようになって、お祖父さんとたくさんのドットトラウトを獲ってみたかったし、マリーさんのところで手伝いをしながら、ハロウさんといっしょにオールドリアヌに水彩画を描きにも出かけたかった。

そんなことを考えているうちに、もしかしてナーシュさんも今の自分と同じようなめにあっているのかもしれないという気もしてきた。行方が知れなくなって10年経つという。10年は長すぎる。戻るきっかけをつかめないでいることも考えられなくはない。もしそうであれば、ジノ婆さんが言ったように六界錐が出島に呼び戻してくれるのを期待するしかないのか。そんなことより六界錐を持たない自分のほうはどうすればいいのかのほう心配になる。トラピさんのようになぜすぐに作らなかったのか悔やんでも悔みきれない。

それとも、この世界からも船を使ってオールドリアヌに行くという方法もあるのかもしれない。ここが自分の知っているウォーターランドと何も変わらないのであれば、船で行った先にあるオールドリアヌも同じかもしれない。オールドリアヌがこの世界にもあればの話だけれど。

机にあるノートを見ていると、ノート氏の体験と自分の今の状況がなんだか同じようにも思えてくる。ノート氏もどこかで意識を失って同じように別の世界で旅をしたのではないか。もし、そうだとしたら、意識世界と現実世界の両方にあるノートの存在はどういう関係と考えればいいのかだろう。どこかにそれを繋ぐものがあるということか。

現物か写しかの違いこそあれ、内容に違いがあるわけでもない。そんなことを考えているとやはりノート氏はまだどこかにいるのではないかと思えてくる。もしかして、昼間にここにいた人がノート氏その人ではなかったらどうか。時間と空間と現実と夢が混在してどこから考えていけばいいのか糸口がまるでわからなくなってしまった。

そうこうしているうちに、東の空が明るくなってきた。空を覆っていた雲にも切れ間が見える。明るくなると人目にもつきやすくなるので、灯台を出て建物の裏側に身を隠すことにした。

波際のところまで降りるとさすがに波しぶきが強く、人も近づきそうにない。身を隠すのにはちょうどいい場所だ。灯台のデッキに登る人さえいなければみつかることはないだろう。

ここで鮫が現れる夜が来るのを待つことにしよう。

第3話 時間の澱み

この灯台が白い灯台に変わったのはいつごろのことだったのだろうか。この前来た場所には赤い灯台があった。同じ場所に六界錐はあるものの読み取れなくなった文字は年月の経過を感じさせる。赤い灯台か白い灯台かは時代の違いなのかもしれない。

結局夜明けまで待ってもミドリ鮫が現れることはなかった。エバンヌのほうをしてみるといつの間にか明かりが消えていた。

南のほうに回ってリブロールの方を見ようとしたとき聞き覚えのある声がした。

「じっじ、昆布拾い？」

「あ、コピおはよう……」何も考えずに思わず返事をしてしまった。

現実ではないとわかってはいてもコピに会ったのが無性にうれしかった。

「コピも手伝う！」と言いながら元気良く駆け下りてきた。

しばらく呆気にとられて次のことばが出てこなかった。一生懸命なところはいつものコピと何も変わらない。また、湖のときと同じように幻影を見ているのではないかと思いながらも、目の前で起っていることは現実としか考えようがないほど実際の世界と寸分の違いもなかった。

ありがとう……と言いながら顔を見ると、いつもとまったく変わらない無邪気な笑顔が返ってきた。

そうなると、今度は逆に自分のほうはどう見えているのかが気になった。

「あの、じっじの顔、変じゃないかい……」と聞くと「寝ぼけた顔！」と言っていつものようにこころと笑った。

「じっじ、ほんとうに今日いくの？」と言われて、何を言っているのかがすぐには理解できなかった。何か約束でもしているのだろうか。

「虹の石があって助かったよ」と言いながら胸元に手をやると、「虹の石ってなあに？」と言って目をくりくりさせた。コピには何のことを言われているのかわからないようだ。

指先で首から下がっているはずの虹の石を探したがみつけることはできなかった。また、なくしてしまったのだろうか。鮫たちが虹の石の光を求めて集まっていた光景がふっと浮かんで消

えた。

「船長は今度は何を持ってきてくれるかな」と聞いてみると、「いいもの！」とうれしそうに答えた。いいもの.....船長はまだ来ていない、というよりこの世界にも船長は来るということだ。

メインランドに向けて船で出たのが夏至から24日目だったことを思い出して日にちを尋ねてみると、今日は23日目だという。今日は出発の前日ということのようだ。時間のずれた記憶の世界に来てしまったのだろうか。

「コピはウォーターランドに来る前はどこにいたの」唐突な質問だとは思ったけれどどうしても聞きたかった。

「木と川のあるきれいなところ！」うれしそうに言った。

「そうか.....木と川のあるところね。そこにはじっじはいなかったよね」まさかそれはないだろうと思いつつも一応確かめてみた。

「ドットだけだよ」

「ドット？ ドットって魚のこと？」

「ドットはドット」と言って昆布取りに夢中になっている。コピはドットトラウトを見たことがあるのかもしれない。コピの生まれ育ったところにもいるということだろうか。

話しているうちにコピが突然リブロールに現れた日のことを思い出した。あのころは、船長の船もなかったし、この子はどうやってこの島に来たのだろうか。そう考えると、コピも今の自分と同じようにしてここに来たのかもしれないと思った。つまりそれはどうやってきたのかわからないということに他ならないのだけれど。

「スロウさんやノーキョさんたちはどうしてるかな。火事後の実験広場はうまくいってる？」ネモネさんの言っていた話はここではどうなっているかと思い聞いてみると、「火事はたいへん、たいへん。実験広場はなあに？」きよとんとしてこちらを見ている。

やはり、火事があった後だ、木々が想像以上に成長していることにはまだだれも気づいてないということか。コピはまだ広場の実験班長にはなっていないようだ。

コピといる時間を懐かしく思い出しながら、昆布取りをしていると、「ミリルさん来た」と言われて突然立ち上がった。

「え、リブロールがある？」思わず口をついて出た。

「じっじ、へん」と言うと、初めて会った人でも見るようにこちらをじっと見た。

少しして「ねぼけてる」と言って笑い出した。

言われてみると、昨日からリブロールを見てないことに気づき灯台の裏に回ってみると、そこには朝日を受けて立つリブロールがあった。昨夜は月明かりもなかったので気づかなかっただけだろうか。

「ミリルさんと昆布の朝ごはん！」と言うとぴよこんと立ち上がって誘うようにこちらに手を伸ばした。

コピはいつもの調子で話している。その様子に自分の知っているコピと違うところは何もない。過去の記憶にこういう場面があっただろうか。自問自答してみるものの思い当たることがない。

「じっじ、いこいこ」コピが急かすけれど、どうにも足が前に出ない。

そのとき、コピの後ろの海面に背びれが見えた。海面に大きな背中を見せたと思ったらすぐに水の中に消えてしまった。一瞬だった。ミドリ鮫はここにもいるのだ。もう少し早く現れてくれていればという思いが込み上げた。ただ、まだあの鮫といっしょに戻れるチャンスはあるということにほんの少しではあるけど救われた気がした。

手を引かれるようにして、波打ち際の湿った砂地を歩いてリブロールに向かった。リブロールが近づくにつれて、これでしばらくは出島には戻れないだろうという諦めの気持ちがまた頭をもたげてきた。晴れ渡った空を見上げると、太陽がいつものウォーターランドと同じように東の空に登っていた。

ほんとうのウォーターランドと寸分も違いのない世界があるとしたら、現実と意識世界を切り分けることに何の意味があるのかわからなくなってくる。

目を伏せるように歩いていくとリブロールから「あら、オルターさん。お出かけの日で寝られませんでした？ ユイローは効かなかったのかしら」ミリルさんの明るい声が聞こえた。心を決めて顔をあげると、そこにいたのはいつもと何も変わらないミリルさんだった。その姿のどこにも違いはなかった。

「昨日はせっかくの満月だったのに途中から曇がかかってしまいましたね」

「曇っていた……」この二人は昨日もここにいたということだ。この同じ空の下に。

「旅の用意の方はどうですか」

「用意……そうか、用意だよ」と自分でも意味不明なことを言っているなど思った。

「メインランドは遠いところだから、準備も大変ですよ」

やはり、船長の船が来て、これからその船でメインランドに行くということのようだ。

「えっと、ちょっと今回は思うところがあって……」自分でも何を言いたいのかよくわからなかった。ただ、ここを離れるといよいよ出島に戻る道が閉ざされて時間の迷宮に迷い込んでしまうような気がしたのは間違いない。

「でも、トラピさんが待っているかもしれないですよ」と言いながら引き出しから取り出したロールペーパーの手紙を渡された。

「あの、それは……」トラピさんからの手紙ではなかったとは言えなかった。もちろん現実世界での話だったので、この意識世界でも同じなのかどうかさえもわからない。

丸めてあった手紙をもう一度開いて読み直した。

「じっじ、トラピさんと会えるの？」とコピが覗き込むようにして言った。

開いた手紙はトラピさんからの手紙ではなかった。それどころかボルトンがコノンさんに宛てたものでもなかった。

ミテホシイトコロ ガ アリマス リアヌシテイ ノ サーカスゴヤ デ ……

これは、自分がスロウさん宛に書いてハトポステルに投函した手紙そのものだった。急いで書いたので読みにくくはあったけど、オールドリアヌに戻る前に書いた手紙だ。あの手紙がねじれた現実と意識世界を超えて今ここにある。時間を遡るばかりか、前後の関係さえ崩れている。

何がずれて、現実と意識の世界がどうつながっているのかまったくわからなくなってきた。ただ、あらゆる出来事が混在した現実だけが目の前にある。理由などわからなくてもいいので、

とにかく目が覚めて出島に戻れないものかと思わずにはいられなかった。無意識にミドリ鮫の迎えが来ることを祈っていた。

「オルターさん、なんだか具合が悪いみたいですよ。顔色がよくないわ」ミリルさんが心配そうにこちらを見て言った。

それを聞いたとたんに一気に疲れが出て、そのまま倒れるようにして横になった。

「じっじ、だいじょうぶ？」

「心配ないよ。昨日遅くまでノートを読んでいたのがよくなかった」ウォーターランドを出る前の日を思い出しながらなんとか話をあわせた。

出発の前の日の夜、灯台でノートを読んでいるうちに寝てしまった。そのあとはどうなったのか。翌日はほんとうに目覚めたのだろうか。今いる世界がほんとうの現実世界だとしたら、メインランドでの出来事はすべて夢の中で起ったことだったのか。

今日は船長がやって来る日だという。その船に乗ってメインランドに渡って、オールドリアヌのノイヤール湖で意識を失ってしまう。そして目覚めるのがまたここになったら……。

時間の澱みに取り残されたまま延々と時間がループするということだ。今日、来るという船長は、こちらを見たときになんと言うのだろう。

第4話 変わらない人たち

ソファーに横になっていると、ミリルさんが採ったばかりの新鮮な昆布でスープとサラダをつくってくれた。夢の世界には色がないとか、味がないとか聞くこともあるけれど、このスープにはしっかりとした味もついていたし、昆布は茹でられてきれいな緑色になっていた。

口にただけで気持ちが少し落ち着いた。考えたら昨日の昼から食事をしていなかったのだ。現実でも意識の世界でもどうやら空腹だけは時間通りにやってくるらしい。

スープを飲みながらリブロールに変わったことはないかと店内をあらためて見回してみたものの特別違和感を感じるものもなかった。本棚には青い表紙の本も置いてある。船長とページのない本にノートを印刷して綴じ込むとそれが終わりのない旅の入り口になるという話をしたのを思い出した。あの時からノートの世界の旅が始まっていたのかもしれない。

「船長が着くのはお昼頃でしょうか」とミリルさんが言うと、いいもの、いいものとコピがうれしそうに飛び跳ねた。

「オルターさん、具合が良くないなら、メーンランドは次回にしたほうがよくないですか」

「そうだねえ」どちらとも言えない曖昧な返事をした。ミドリ鮫が現れるのをここで待つべきか、船長の船で島を離れるべきかの判断ができない。ループする時間の起点すらよく思い出せないからどうにもならない。何かわかるまではこのまま様子を見るしかないのだろうか。そのうち目が覚めるのかもしれない。

「だれか代替りの人に行ってもらおうのも方法ですよ」ミリルさんは諦めることが決まったと思っているようだ。

「代替りの人にノイヤール湖まで行ってもらおうというのも……」

「ロイヤル湖ってどちらに？」

「あ、ノイヤール、オールドリアヌの……」

「ノートに書いてあるんですか？」ミリルさんが初めて聞いたという顔をしてこちらを見た。

「そうか、夢でみたのかな……」と言って口ごもってしまった。ミリルさんの言う通り、オールドリアヌは実際行った人間にしかわからない。夢で見たと思えば、何も不思議ではなくなる。

「オルターさん、少し休んだ方がいいみたいですよ」ミリルさんが心配そうな顔をしている。

「横になっていてくださいね。ちょっと、エバンヌに行ってきます」と言って急ぎ足で出て行った。

コピは本棚から青い本を持ってきて、隣でおとなしくページをめくっている。

「コピ、その本の向こうに何かありそうかな」

「きれいな水のところ！」とうれしそうに言った。

「きれいな水が見えるのかな」と聞くと、うんうんと首を大きく振った。

静かになったのでしばらく目を閉じてみた。もしかすると出島で目覚めないかという期待もあったけど、目を開いたところはやはり同じリブロールだった。

横目で本を読むコピのやさしい顔を見ているうちに、この世界から船長の船でメインランドに行くのはやめようと思いはじめた。現実と何も変わらない世界からあえて別の方法で戻る必要はないということもあったけれど、それ以上に二つの世界の時間の狭間に落ち込んでしまいそうな恐怖感が拭い去れなかったことが一番の理由だったかもしれない。

「今回は船に乗るのを止そうかな」と言うとコピもうれしそうに頷いた。

いっしょに青い本を眺めているとミリルさんが小走りに戻って来た。

「おじゃましますよー、オルターさん調子はどう？」ノルシーさんがいっしょだった。

「また張り切りすぎちゃったかな」と言いながら額に手を当ててきた。

「熱はないみたいね。でも、今回はよしたほうがいいかもね」と言ってミリルさんと何か話している。

「変な夢を見たんだって？」と言うとソファの近くにテーブルの椅子を持って来て座った。

「夢というか……」説明のしようもなかった。

「ね、ね、また赤い灯台見たんじゃないの？」長い付き合いのノルシーさんにはこちらの気持ちが見抜かれているように思うことがある。

「赤い灯台って、ほんとうにここにあったのかな」と思わず心を許して聞いてしまった。

「あったかどうかって、ノートに書いてあったんだよね」ノルシーさんが言った。

「いや、ノートには書いてあるけどね。実際にここにあったのかなって……」

「ほら、だからノートの読みすぎに注意って言ったのに」困った人だと言わんばかりの顔をしてミリルさんの方を見た。

「現実じゃないのかなあ」時間の違いだけでもない気がして仕方がなかった。

「どちらでもいいけど、今回はやめだね。どうしてもって言うのなら、別の人に行ってもらったほうがいいね」

「そうか、ネモネさんはまだ島に？」

「そうかって、船長の船も来てないし。これは相当重症だよ」困った人だという顔をして笑った。

やはり、ここは出発する前日の夏至暦23日のウォーターランドなのだろう。そう思うとすべてのつじつまが合う。オールドリアヌで起きたことはすべて夢の中でのできごとだったと。

「とにかく、少し様子を見た方がいいかもね。ノーキョさんのところで薬草でももらってこようか」

「いや、大丈夫だから。少し休めば」

「昨日は遅くはなかったよね。明かりついてなかったし」

「寝た時間は覚えてないけど遅くはなかったような。記憶があいまいで」

「こりゃ、薬草投与決定だ」

みんなの話を聞いているうちに、今度はここはほんとうのウォーターランドではないかと思いはじめた。夢で見えていたわけでもなく、何かの間違いで灯台の横にある六界錐に引き寄せられてここに戻ったとも考えられる。そうだとすると昨日の夜のことがどうだったか気になる。

「ミリルさん、昨日の夜は灯台に来ましたか？」

「あ、わかりました？ ユイローがあったのでお風呂にどうかと思ってお届けしましたよ。お風呂に入っていたのがつきましたか？ オルターさん、かなりお疲れみたいでしたよ」

風呂に隠れていたのではなく、ベッドで寝ていたということだ。あのときの人影はミリルさんではなかったということか、それとも向こうの世界のことだったのか。

「ああ、ノートを読んだら眠くなってしまってね」とこちらの世界に話を合わせた。

「月がすごく綺麗で。満月の日のユイローは身体にいいって聞いたことがあったので」

「そうか、昨日は赤い満月の日だったんだね」

「そうですよ。でも、あのあと雲に隠れてしまったから、あまり効き目がなかったかも」

意識を失う時にいつもユイローが関わっている気がする。

「じゃあ、ノーキョさんのところに行ってくるね。ミリルさん、正気になるまで見張っててね」と言ってノルシーさんが出て行った。

第5話 見えない鮫

ソファから起き上がると、ミリルさんが心配そうにこちらを見ている。まるで管理下に置かれた希少動物扱いだ。

「オルターさん、あまり無理しないで横になっていたほうがいいですよ」

きびしい指導がされる。身を隠していなければいけなかったかもしれないのに、どうしてこんなことになってしまったのか。

違う世界から来たからなんて言ってもわかってくれる人もいない。傍目に見ているとただの病人にしか見えないだろう。

「ちょっとミドリ鮫のことを調べたくてね」実際、それは嘘ではなかった。こちらにしてみればミドリ鮫を見つけられるかどうかは死活問題だからゆっくり寝てからなんて言うてはいられないのだ。

「ミリルさんはこのあたりでミドリ鮫を見たことないですよね」

「私はないですけどコピちゃんはよく見るって言いますよ」

「コピはどこで見るの？」横にいたので聞いてみた。

「みるのはここ」

「ここって、ウォーターランドだよね？」

「ここ、ここ」両足をそろえてぴよんぴよん跳ねている。ここというのは今いる意識世界のウォーターランドのことを言っているのだろうか。ミドリ鮫は現実世界にはいない生き物ということなのか、それともただ見つかりにくいというだけなのか。

「あの、今朝ね、ここに来る前に見たような気がしたんだけど……」ミリルさんの反応を伺いながら聞いてみた。もしかするとこちらの世界ではミドリ鮫がいるのが当たり前かもしれない。うかつなことは言えない。

「今朝はイルカの家族が入江に迷い込んでいましたけど。イルカではなくてですか？」

「え、イルカがいたの？」

「さっきまであのあたりで遊んでましたよ」灯台の横あたりを指差した。自分が見たあたりと同じだ。

「コピちゃんを見た？」ミリルさんが聞いた。

首を横に何度か振った。コピが見てないのか。

「コピちゃんは一番最近はいつ見たの？」一度も見たことがないというミリルさんもどんなときに見られるのか知りたそうだった。

「きのうみた！」

一瞬時間が逆回転して目の前の景色が昨日に巻き戻された。

あのときミドリ鯨がこの海にいたなんて。どうしてその鯨を見つけられなかつただろう。コピだけにしか見えないとでも言うのか。みつけられなかつた悔しさがこみ上げてくる。

「コピちゃん、それいつ頃だったの？」ミリルさんもさすがに納得がいかなかったのだろう。

「よるのまえ」質問の意味がよくわからないというように首をかしげながら答えた。ミドリ鯨のことをなんでみんなしつこく聞くのかわからないようだ。いつでも見えるコピにとっては当然だろう。

鯨が現れたのが探していた深夜ではなかつたとすると、自分がここに来たころだろうか。風呂の後ろに隠れたころと同じ時間かもしれないと思った。

「オルターさん、何か心当たりがあるんですか？」こちらが何か考えているように見えたのかミリルさんが聞いてきた。

「いやただ、そのときどこに居たかなと思って……」

「私がユイローを届けたころだったのかなあ。ほんとうにいと信じないといつまでたっても出会えないのかもしれないですね。でもオルターさん、絶対コピちゃんにしか見えないものってあると思いませんか」

「子供のころにしか見えないものがあると言うしね」自分で言いながら、それはなんだろうと思

った。妖精の類いのものだろうか。妖精がほんとうにいるかいないかは別として、妖精なら子供の目でしか見られないような気がした。

「もしそうだとしたら大人ってつまらないですね」ミリルさんが頬杖をついて海を見ている。

話をしているうちに、現実世界で船長が届けてくれた水の本のことを思い出した。あの本には鯨の話は出てなかっただろうか。ミリルさんに聞いてそんな本の話は聞いたこともないと言われるても困るので自分で棚を見ってみることにした。

棚を順番に眺めているとコピが何を探しているのと聞いてきたので、小さな声で水の本と試みてみた。そうすると、テーブルでスロウさんが見てたと教えてくれた。出航前の記憶とこの世界はほぼまちがいがなくすべてが一致している。

「ミリルさん、船長のもってきた水の本のどれかにミドリ鯨のこと出てました？」

「水の本ですよ。どれかに出ていたってスロウさんが言っていましたよ」

そこになにかヒントが隠されているかもしれないと思って、“ミドリ鯨”という文字がないか探した。それから30分ほどページを黙々とめくって、やっと5行程度の記述があるのをみつけた。

水のご利益で命を救われたというミドリ鯨漁の漁師の話から、ウォーターランドの湧き出る水を手に入れようとする人が絶えない。一部では聖水だと言う人まで現れて、その水を得たものはすべての災いから解放されるとまで言われた。そして、同じ地域に生息するミドリ鯨も神の使いとして崇められるようになった。ミドリ鯨漁の漁師たちが多く暮らしているセイレーン港は、聖地への入口としてその名を知られるようになった。

ミドリ鯨は神の使いとして崇められていた……セイレーン港と言うのはどのあたりだったのだろう。それが今のスレイトン・ケープであったとしてもおかしくはない。実際ノートの主もミドリ鯨漁の話を知っていたわけだし、コノンさんのお祖父さんの話ともつながる。ただ、これだけでは、ウォーターランドがどこにあったのかがはっきりしない。ここは一体どこにあるのだろう。

「スロウさんは何か言っていました？」

「ミドリ鯨ってどのあたりに生息していたんだろうってノーキョさんとずっと話していましたよ。男の方って謎の生き物にロマンを感じるんですね」

ロマン……ここにもロマンを求める男たちがいる。それは未知の世界への憧れなのか、それとも知らないものに対する恐れなのか。もしかするとミドリ鮫のロマンがこの意識世界をつくってきたのかもしれないとさえ思えてくる。ほんとうはなにもないのに、みんなの夢や希望、祈りだけで作られた世界があるとするなら、鮫は自分たちをどこに向かわせようとしているのだろう。彼らが棲む水はどこに流れていくのだろうか。

そんなことを考えながら海を眺めていると、水平線にキラリと光るものが見えた。

「オルターさん、船長の船が見えてきましたよ」ミリルさんが目の上に手をかざして言った。

「いいもの、いいもの！」コピがいつものようにぴよこんぴよこん飛跳ねた。

船長はどこからこの島にわたって来るのだろう。スレイトン・ケープであれば、この意識世界にも同じ大陸と同じ港までもあるということか。夢ともうひとつの世界が頭の中で交錯していく

。

第6話 薬草

船長の船はいつも遠くに見える。どこか違う世界から来ているような気さえする。

連結した船があたかも水平線の下から海面に引っ張り上げられているようだ。その昔、あの水平線の先は滝のように流れ落ちていると考えられていた。地動説を唱えることは神をも恐れぬ行為とされた。あのころは誰もが太陽が動いていると信じて疑わなかった。今ではだれもそんなことは信じないし、天が動いていると思っている。

でも、この意識世界は太陽が西から昇り、星が硝子細工のように空からこぼれ落ちる。水平線の先には限りがあって、別の世界がはじまると言ったらおかしいと思われるのだろうか。

こんなことを言っているといよいよボケがはじまったと言う人もいるだろう。でも、オールドリアヌでは百歳を超えるお年寄りたちが生き生きと働いている。何が正しいかなんて誰にもわからないのではないかとも思う。歴史に名を残す冒険者たちも夢に捕われ、誰も知らない新世界を発見してきたのだ。これから新しい夢の地が見つかったとしても何の不思議もない。

「夕方近くになりそうですね」ミリルさんが言った。

「あそこに見えるのに、近くて遠いね。空気が澄んでいるからそう見えるのかな」

「きれいな水だと川や海が浅く見えるのと同じかもしれないですね」

「ミリルさんは、あの先にある世界から来たわけですね」

「あの先ってメーンランドのことですか」

「そう思われてるけど、ほんとうのところはどうなのでしょう」そう言いながらあの先にはなにもないんかもしれないとほんやり考えていた。

「オルターさん、なんだか変ですよ」妙なものでも見るような顔をされた。

その場を取り繕うことはいくらでもできたけれど、そんなことしてどうなるのかという気がした。自分でも何がほんとうなのかわからないのだからどうしようもない。

「あれ、オルターさん起きちゃってるし、寝てないとだめじゃないの」ノルシーさんが薬草をかかえて帰って来た。

「こんなにあるのに煎じるとコップ一杯ぐらいになるんだって、知ってた？」

「なんだか効きそうですね。大きいお鍋を持って来ないと」ミリルさんがあわてて取りに行く支度をはじめた。コピも本に飽きたようでミリルさんについて行こうとしている。

「じゃあ、今度はこちらがオルターさんの面倒見係ね」とノルシーさんが言うと、ミリルさんは笑いながらコピの手を引いて出ていった。

どこまでもボケ老人扱いのようだ。何も話す気になれず、一向に近づいて来ない船長の船を眺めていた。ノルシーさんはいつものように朝方まで起きていたのかさすがに眠そうな顔をしている。

「あのね、オルターさん。そろそろ夢の世界から目覚めないと。みんな心配するじゃない」

「夢の世界？」

「昨日寝たときに変な夢を見たんでしょ？ 相当強烈な夢だったみたいだけど。ノーキョさんにユイローは幻覚作用があるって言ったっていうじゃない」

「ああ、少し前に言ったかな」

「それで、夢と現実の境がわからなくなってるってこと」困った人だというようにため息をついて目を伏せた。

「それは、ここが現実ということ言ってるわけ？」

「何かご不信な点でも？」

「じゃあ、どうしてそうだって言えるのかな」と聞くと、いきなりこちらに手を伸ばして頬をつねった。こんなことをされるのはいつ依頼のことだろう。

「どう、現実の痛みは？」ノルシーさんは自分の頬もつねって同じように痛そうな顔をして見せた。

「じゃあ、赤い灯台はどこにあると思う」

「えっと、それを世間では過去と呼ぶらしいよ」

「それだと、普通の答えだな」

「もしかして、今でも別のところに赤い灯台のウォーターランドがあって、そこは鏡のように逆転した世界になっているとでも思い始めた？」

「じゃあ赤い灯台がここの過去というのなら、ノルシーさんの過去はどこにあるんだろう」

「いやなことがあると人間過去を忘れるものらしいからね。無理して思い出さなくていいの。それがこの島の約束だしね」

「自分の出所って大切じゃないかな。過去があって今があるわけだし」

「いい過去ならね。でも、必ずしもいいとは限らないから。僕は今とこれからを大切にしたいけど」

ウォーターランドではどこから来たかもどこへ行くかもお互いに触れないことになっている。それはそれでもいいのだけど、今回の件はこの島のなにかと関係しているという気がするし、ノートの主や灯台守の消息が知れないこともまったく無関係とも思えない。もしかするとナイナイさんの失踪も同じ理由かもしれない。

知りたいのはどこからきたということではなくて、ここはどこなのかということなのだ。

「ほら、好きな曲でも聞いてさ」

そう言うとエバンヌから持ってきていたレコードをプレイヤーのターンテーブルに乗せた。ボリュームを上げると回転にあわせてプツツ、プツツと針の音が聞こえる。

エンド・オブ・ザ・ワールドだった。今のような体調の時に聞くとまったく別の曲に聞こえる。まるで世紀末の世界にでも来てしまったような気になってしまう。

「世界の終わりか……」とつぶやくと、「なにやってあげてもだめみたいだね」と笑われた。

「オルターさん、ノートのことを調べるのもいいんだけど、何でもやりすぎは身体によくないと思うよ」

「それはわかっているけど」

「人生なんて不思議なことだらけじゃない」

「不思議って、なにが？」

「だってさ、僕だってメーンランドにいたような気はするんだけどよくは覚えてないし」

「オルターさんもそうなんですよ」

「ああ、そういう話ね」

「むかし二人でさ、さんざん考えて、もう考えるのよそうって決めたじゃない。あの大きな窓からずっと海と灯台を眺めていても何の答えも出なかったよね。わかったのは時間は流れてしまったってことだけ」

「船長がみんなを連れて来る前の話ね」

「コピちゃんだけは、いまだによくわからないけどね」と言うと肩をすくめた。

その後、気分が変わるかもしれないからと言ってコーヒーを入れてくれた。ノルシーさんの入れる水出しコーヒーはいつ飲んでもおいしい。それはこの世界でも同じだ。

ノルシーさんとこうして話していると、確かにここはもといたあのウォーターランドのような気もしてくる。オールドリアヌの旅が全部夢だったと思えば話は簡単なのだ。

「そう思うと、ここはここでいってことかな」

「そうそう。どこにもないユニークな唯一の場所ね」

「どこともつながってない別世界ってことだよな」

「つながっていてもいなくても、僕らにとっては唯一の場所と考えればいいでしょ」

「世界のずっとはずれの島じゃなくて？」

「どうでしょうねえ。海の向こうは二人でいい加減眺めたしね。眼鏡の度が合わないせいじゃな

いでしょ」 そう言うと別のレコードに掛け直した。

2曲目は、オーバー・ザ・レインボウだった。好きな曲だ。

「虹を超えたところに何があってもここはここ。ドロシーだって結局そうだったんじゃないか
った？」

オズの魔法使いの話だ。しばらく歌詞に耳を傾けた。虹の向こうはどうであろうとここはこ
こか。

Somewhere over the rainbow
Way up high,
There's a land that I heard of
Once in a lullaby.
Somewhere over the rainbow
Skies are blue,
And the dreams that you dare to dream
Really do come true.

Someday I'll wish upon a star
And wake up where the clouds are far
Behind me.
Where troubles melt like lemon drops
Away above the chimney tops
That's where you'll find me.

Somewhere over the rainbow
Bluebirds fly.
Birds fly over the rainbow.
Why then, oh why can't I?

If happy little bluebirds fly
Beyond the rainbow
Why, oh why can't I?

気がつくとノルシーさんがうつ伏せになって小さく寝息を立てていた。朝まで起きていれば眠
くもなるだろう。見ている夢がオールドリアヌであれば、あとでいろいろ話せるだろう。同じ夢
の話として。

しばらくするとミリルさんが大きな鍋をかかえて帰ってきた。鍋の大きさだけ見るとなんだか大変なことになっている気がする。これで煎じる薬草はいったい何に効くのだろう。すでに実験動物扱いになっている気さえしてくる。

煎じるのに数時間かかるということで、ノーキョさんがあらかじめ作ったという粉末を渡されて、水で一息に飲み干した。カビのような匂いとヒリヒリする苦みが口に残った。この世界で初めて口にするものだった。

それにしても、ノルシーさん、ミリルさん、コピ。リブロールの様子に水の味。すべてがあまりに似すぎている。もし、今ここにいる人たちがいつものウォーターランドの住人じゃなかったらと思うと正直ぞっとする。同じ場所と思わないとすべての記憶が崩れたジグソーパズルのようになってしまいそうだ。

「飲んで横になると落ち着くですよ」ミリルさんが上掛けを出してくれた。

どうやら精神安定剤のようだった。飲むと確かに気持ちが少し楽になった。どこの世界であろうと、ノーキョさんの作るものに間違いはないという安心感がそうさせるのかもしれない。

とにかく、この薬を信じて気持ちを休めることにしよう。

第7話 二度目の下船客たち

少し寝てしまった。気がつくやうと船長の出迎いで、みんなデッキのほうに出ていた。船長の船は着いたのは日差しが傾きはじめる時間だった。オフエーリア号も長旅に疲れたのか、高ぶる鼓動を鎮めるかのように何度も排気を吐き出しながらゆっくりと棧橋に身体を寄せた。

甲板にはまっすぐに背を伸ばして立つマリーさんの姿も見える。こういう形で再会するのはとてもおかしい気分だ。あの夫婦連れの船客もいる。みんな現実世界のときと同じように島にやってきた。違うのはこちらが一度経験しているということだけだ。

船長から説明を聞き終わると乗客は順番に下船を始めた。みんなウォーターランドのきれいな自然に目を奪われて、リプロールがあることさえ目に入らないようだ。すぐに、それぞれの目指すところに向けて散らばって行った。

「みんな元気でやってたか。こちらは相変わらずの絶好調だぞ。わはは」威勢のいい声が響く。

「うん？ なんだか匂うぞ。殺虫剤でもまいたか。まさか俺を虫ケラ扱いしようっていうんじゃないだろうな」いつも通りの独演がはじまった。

「船長ったら、薬草ですよ」ミリルさんがまじめな顔をして説明する。

「そうか、いいものだったらいくらでも売りさばいてきてやるからな」

「いくら売れてもこの島にお金を使うところなんてないですよ」

「俺がみんなの老後のために預かっておくから心配するな。それはそうとして、今回はこの島で1日休ませてもらって明日出港だからよろしくな。今日はダルビー観光の社長自ら泊まりがけで夢の島のご案内というわけだ」そう言うとお手製らしい観光案内用の手持ちの旗をにやりと笑いながら振って見せた。船長もどこまで本気で考えているのかわからない。

「みんなのほうは相変わらずのようだな……一人だけがおかしいのは」と言って違いがないか確認するように店内をひととおり見渡した。

「そうなの船長、オルターさんが今朝から体調がよくなって。それで薬草なんですよ」

「おかしいのはいつものことだけど、もしかして普通の人になんてなったのか？」

いつものように人をからかうことだけは忘れない。

「なんだかちょっとお疲れみたいで。火事のことだって心労が重なったんじゃないかと」

「火事？ 怪我でもしたのか」急に真面目な顔に変わった。

「みんなで消火したので、火事は半島が焼けただけで済んだんです。みんなで助け合ってがんばったので怪我人もなしです」

「そうか。怪我がなかったのは不幸中の幸いだな。それですっかりお疲れなわけか。若くないし無理しない方がいい」医者が問診でもするような目でこちらをじっと見ている。

「何かおかしいところでもあるかね」船長の目はごまかせないかもしれないと思って聞いた。

「爺さん、もしかして変な夢でも見たか」突然夢の話を聞いてきた。じっと凝視するようにこちらの目を見たままだ。

「そうみたいですよ」ミリルさんが答えた。

「幻覚か？」

いきなり核心に迫るようなことを聞くので驚いた。そう思わせるようなところでもあったのだろうか。それとも船長の持つ人並外れた嗅覚によるものか。

「ノートの読みすぎだから」船長の声で目を覚ましたノルシーさんが眠そうに目をこすりながら言った。

「そうか」

いつもしゃべり続ける船長が少し考えごとをするように静かになった。なにか気になることでもあったのだろうか。

船長はこちらがオールドリアヌからここに来ていることを知っているわけではないので、今ここにいることに対して疑念を持ちようもないはずだ。だとすると、それを思わせることがあったのかもしれない。

このことについての話はその後は何もなく、すぐにいつもの他愛ない話に戻った。今回は島便りを見た観光客がお土産だと言ってみんなを笑わせた。ミリルさんが買ってほしいものもないし、何か島のためにしてもらえるのかと期待をこめて聞くと、船長は今回の客はいつかこの島になくってはならない人になると自信たっぷりに言った。いつもと同じで船長の言うことは

みんなにはすぐにはわからないだろう。ただこちらには、それがマリーさんのことを言っていることがすぐにわかった。

しばらくするとコピが手に木の実をたくさん持って戻ってきた。ウォーターランドにも秋が近づいている。

「じっちゃん、いいものあげる」

コピはときどきおもしろいものを見つけに来てはみんなを驚かす。

「おいしい木の実でもみつけたのかい」と言うと、木の実をテーブルに置いてポケットから何か別の物を取り出した。

きれいな石だった。見た瞬間に、あの虹の石だとわかった。同じ種類の石というのではなく形までまったく同じ、なくした石そのものだった。また、忘れようとしていたもうひとつの世界が目の前に立ち昇るように大きく現れた。

「コピ、これはどうしたの？」ミリルさんが聞くと「灯台のところでみつけた」と言って自慢げな顔をした。

「きれいな石ね。だれかが落としたのかしら」

あわてて「コピ、ありがとう大切にするね」と言って受け取った。これを持っていないとこの時間の澁みから逃げ出せないかもしれないと思ったのだ。誰のものでもない自分のものだ。奪い取るように掴む様子を見てみんなちょっとへんな顔をしたのがわかった。

気がつかないうちに落としたのだろう。この石も自分と同じように出口のない時間の澁みに入り込んでしまったのだ。

「なくさないように袋をつくりましょう。ちょっと待っててくださいね」と言ってミリルさんは裁縫セットを手提げ袋から出した。

「オルターさん、ほら、たまにはいいこともあるじゃない」ノルシーさんが言った。

「使い道がなけりゃ、島の秘宝館でもつくったらどうだ」船長がまた冗談か本気かわからないことを言った。

「ノートも秘宝館入りだね」ノルシーさんまでもいっしょになって悪ノリしている。

灯台の方を見るとマリーさんが六界錐のあるあたりに立っていた。マリーさんは六界錐のことを知っているはずだ。この島に何か目的を持って来ていたのかもしれない。もしかして、ナーシュさんの失踪と関係があるのだろうか。六界錐のあるところにナーシュさんが戻るというのであれば、この島に来たことがあるかもしれないと思った。

第8話 入れ替わり

ひとしきり船長の話が終わったところで、ノーキョさんがいつものように資料整理にやってきた。

「あれ、オルターさん、もう出発ですか？」大勢のお客さんがいるのを見て驚いている。

「いや、明日の予定だったんですけどいろいろあって……」ここから前のときと時間の流れが違う方向に向かうことになると思った。

「オルターさん体調を崩したみたいで、とてもメーンランドなんて行けそうにないですよ」

ミリルさんは、この話はなしだと決めてしまったようだ。まわりの誰からも異論が出ることもなく、それは残念ですねとまで言われてしまった。

そのとき、「仕方ない、じゃあ、おいらが代わりに行ってこようか」という声が聞こえた。遅れて来たスロウさんが店に入るなりいきなり代理の渡航をしてもいいと言ったのだった。

一瞬みんなえっという顔をしたものの、すぐにそれがいいかもしれない思ったようだ。どこかでノートの謎解きに対する期待を捨て切れなかったのだろう。

「いや、おいらもここに流されてたどり着いたようなものだから、前から一度船長の船の航路というのを体験してみたいと思ってて」

「お、ダルビー商会の副社長狙いか」船長も悪い気はしていないようだった。

「このどでかいオフエーリア号を自在に操る船長の剛腕を一度は体験させてもらわないと」スロウさんは船を横目に見ながら言った。

船長もまんざらでもないような顔をして「やっと俺の腕に惚れたやつが出てきたな」とにんまりした。

船上生活をしているスロウさんも海とともに生きるのを信条としているような人だし、船長と通じるものがあるのかもしれない。決してお世辞で言っているわけでもないようだ。

「往復するだけ？」ノーキョさんがあまりに急な話だったのであきれ顔をしている。

「うーん、メーンランドにおもしろいところでもあればそっちもだけど」スロウさんの興味はあくまで船長の操舵と海に限られているようだった。しばらくスロウさんと船長は航路や大型の船の特徴などの話で盛り上がった。

「あの……きれいな湖があるんだけど、そこも見てきてもらえないかな」思わず口をついて出てしまった。

「おい爺さん、湖があることをどうして知ってるんだ」船長がおかしな話をすると考えたのか、こちらの顔を覗き込むようにして見た。

「夢で見たからほんとうにあるか確かめて欲しいと思ったんだけど……」不用意に言ってしまったことをなんとか言い繕った。船長は納得がいかないような顔をして首を傾げている。

「そんなことよりオルターさん、トラピさんが向こうで待ってくださいますからそちらのほうをお願いしないと」

ミリルさんは、湖は夢の話と決めつけているから手紙の方が気になるようだ。船長はなにか引っかかるところがあるというような顔をして髭をさすっている。

「スロウ、いい機会だから行くといいよ。火事のあとはなんとかするから」ノーキョさんが言うと船長もスロウさんの気持ちを受け止めたようにうなづいた。

「火をつけたやつのも気になるし、わかることは全部調べてくる」

船長の船に乗りたいただけではなく、いろいろな思いがあって渡航を決めたようだった。その気持ちが親友のノーキョさんにはよくわかるのだろう。

「さて、そうと決まったら客といっしょに名残惜しい島巡りでもしてくるか」ダルビー船長が椅子から立ち上がって大きく背伸びをした。

ノーキョさんとスロウさんは火事のことやメーンランドのことをいろいろ話し合っている。まだ、焼け跡の草木の生育が早いことには気づいてないようだ。

船長の行く先を見ると、まっすぐに灯台をほうを目指していた。すぐにマリーさんのいるところにたどり着き二人で何か話している。周りの景色を楽しむわけでもなく、腕組みして六界錐のそばに立つとずっと石を見ている。

二人にはあの六界錐がだれのものかわかるのだろうか。以前見た時には石にソダーと刻んであ

った。あれはナーシュさんのものではない。それは機会をみて話した方がいいのかもしれないと思った。

「オルターさん、スロウさんに行ってもらえることになってよかったですね」ミリルさんも安心したような顔をしてこちらを見ている。一番喜んでいるのはミリルさんかもしれない。

「あ、おいらは自分が勝手に行きたくなっただけだから」スロウさんが恐縮したように笑っている。

「オルターさんが夢で見たという湖も探してくるよ。それ、なんていう名前だっんだろう」

「夢の湖に名前なんてないですよ」ノーキョさんが口をはさむと、「夢でも名前ぐらいはあるよ」とスロウさんが返した。

「たしかノイヤール湖だった」うる覚えのふりをして言ってみた。

「ほらね。あるじゃない」とスロウさんが言うと、ノーキョさんがどこかで聞いたことのあるような名前だなど言いながら手元に会った水の本をめくった。

「OK、時間があったら見てくるよ」と約束をしてくれた。みんなが夢の話と思っているのにスロウさんだけが真剣に答えてくれたのがうれしかった。

「夢だとそこに光る魚がいてね。湖も光っていた」この際だから全部話しておこうと思って湖の不思議な話をいくつか紹介した。

「また、その話。オルターさん、夢の話はわすれて休んでくださいよ」ミリルさんが横で呆れた顔をしている。世話の焼けるのはどこにいても同じなのだから気にしなくいいと自分に言い聞かせた。

灯台のほうに目をやるとマリーさんと船長の姿は見えなくなっていた。ノートを見に灯台に入ったのかと思ったら、照射灯の展望デッキのところに現れた。マリーさんも、世界に二つとないあの景色に目を奪われていることだろう。大海原に小さく浮かぶ島に身を置いて、母なるな自然の大きさを心ゆくまで堪能しているにちがいない。それはきれいということばだけでは言い尽くすことのできない、すべての喜びと悲しみを包み込むような豊かな感情にも似た情景だ。だれもがあの大いなる水に心を奪われる。

よく見るとマリーさんがこちらのほうに向かってゆっくりと手を振っていた。横にいたミリル

さんが手を高くあげてそれに応えた。

第9話 時間の層*

こちらが落ち着いたのを見届けるように、みんながそれぞれの用事を片付けるために行ってしまったので、一度灯台に戻ってみることにした。そうすれば、今が夢か現実かわかるかもしれないと思った。

灯台への道のりはほんの数分だけど、このあぜ道をどれだけの人が歩いてきたのだろうと思うと、それぞれの時代の景色が重なって見えてくるような気がする。

あぜ道の先を薄くかすれた人影が同じ方向に向かっているのが見えた。狭い肩に不釣り合いな大きなザックを背負って、よろめきながら一步一步地面を踏みしめるようにして進む。ザックに入っているのは集めたばかりの薪だろうか。冬が来る前に暖を取るための燃料を用意しているのかもしれない。それとも今夜の料理に使う燃料か。

向かう先にある灯台を見上げると白い灯台の裏側に赤い灯台が重なって見えた。漆喰の白い灯台の画像がぶれるように小刻みに動くとき、その輪郭からはずれるようにして赤いレンガの灯台が見え隠れしている。少し強い風が吹くと赤い灯台が前に浮き上がってくる。まるで2つの陽炎が重なってるようだ。

そう思っていると周囲に生えている同じ草木も微妙に色合いや形が違って見えてくる。だれも訪れることもない辺境の地に生える草に時代ごとの違いがあるとも思えないけど、時間が層をなして重なっていると考えると、200年前の草と交配で生まれた新しい草がそれぞれ仲良く共生することを謳歌しているようにも見える。

時間は流れると誰もが言うけど、世界は時間が幾重にも幾重にも積み重ねられ成り立っているのだ。その隙間に入り込めればたくさんの重ねられた時間と記憶を本をめくるように訪ねることができる。自分のものだと思い込んでいる”ところ”さえも過去の積み重ねでできていると考えれば、今置かれている状況も説明がつくような気がしないでもないでもない。一つの世界がこの瞬間を支配しているのではなく、幾重にも重なった時間がこの景色をつくり、この身体や心をつくっているということだ。

もしノート氏も同じ考えを持っていたなら、そこに孤独などなくなり無限とも言える世界の営みとひとつになれたのではないだろうか。

空にはやわらかな刷毛ではいたような薄い雲が大きく広がっている。夏にたくさんいたナツヨビもめっきり少なくなった。島が黄金色の紅葉でいっぱいになるのも近い。

秋の夕暮れ時は光輝く海に抱かれ、艶やかな錦糸で織られたブランケットに包まれる。そして、実った果実をいただく生き物たちの冬越しの準備がはじまり、役割を終えた木々からこぼれ落ちる滋養が海にたっぷりと流れ込む。明日への命をつなぐ恵みに島全体が満たされるときだ。そして、その恵みはこの島にしかないおいしい水となって循環していく。

リブロールのほうを振り返ると船長のオフエーリア号が無骨な船体を宿木に身を寄せるようにしてデッキに沿って横たわっている。

あの一隻の船がこの島と水平線の果てのどこかの世界をつないでいると思うととても不思議でもあり、頼もしくもあった。オフエーリア号だけが向こうの世界へつながる航路を知っている。そう考えた時に、リアヌシティのドームに飛び込んで行くエクスポーラーの姿が重なった。船と列車の違いこそあれ、非日常の場所へと誘う道を走り抜けていく。

そこでは現実とまるで生き写しの生活が繰り広げられている。あたかも夢で見る世界と同じように。いや、夢よりも正確な相似した世界と言っていい。そしてそれは、写したり見たりするだけの世界というよりも、存在するすべての生を育むために有機的に広がっている生き物のような何かである気さえする。

現実と非日常の世界を判別することは叶わない。なぜなら、どちらがどちらを映すものでもない。どちらもが、それぞれに少しの繋がりと影響を持ちながら、独立した世界をつくりあげている。表と裏、正と負、プラスとマイナス……すべての相似形に意味があるのと同じだ。そして、カノンさんのお祖父さんがいうように相互の関係にも偶然はなく、いずれもが深い必然性を持ってつながっているのだろう。

灯台の入口に近づいたときに中から物音がした。立ち止まって様子を伺うとミャーオという鳴き声が出てインクが入口から顔を覗かせた。こちらを一瞥すると、何の興味もないというそぶりでも横を向いてそのまま外に出ていった。私がいてもいなくても大した問題ではないのだろう。逆に、その何ものにもとらわれないあるがままの自由な姿に救われた気がした。

空を見ると夕日がまぶしく輝き、紅色のベールが海をやさしく包みはじめていた。水は世界をつないでいると最初に考えたのは誰だったのだろうか。果てしない航海に出て、見たこともないものを見つけた時に、この世界に終わりはないと感じたのではないだろうか。

インクが海を見ている姿は無心を形にしたようにも見える。彼女は海を見て何を考えているのだろう。人間の戯れに付き合うことに何の意味も感じず、時間とひとつになって世界に溶け込んでいる。人間だけが時間に意味を持たせ、困惑する世界に閉じ込められてもがき苦しむ。時間に縛られ、世界にしばられ、生きることにしばられる。

海からインクに目を戻してしばらく見ているうちに、彼女の姿が薄く霞んで行くのがわかった。目がかすんでいるのではなく、インクのほうが風にかすれて視界から消えようとしているのだ。きっとその先にはもう一つの世界があるのだろう。自由に行き来できる術を知っているのであれば、その方法を教えて欲しい。

そう思った瞬間に、インクがこちらを向いてしっかりと目を合わせてきた。ついて来てと言われた気がした。

近づいて行くとインクの姿はさらに薄くなり、しばらくすると最初からいなかったように、景色の中から消えてしまった。

灯台に入ってベッドに横になった。マリーさんたちもノートを見ただろう。すべての答えはきっとあのノートに残されている。その答えはまだだれにもわからない。それがわかったときに何が得られるのかもわからない。

ノートを見ているうちに、鞆の中にハロウさんの店でいただいたノートが入っていたことを思い出した。突然思い立って、こちらに来てからのできごとを書き記しておくことにした。そうすることに何の意味があるのかは自分にもわからない。ただ、そこにいた事実だけは残しておかないと思った。またいつか誰かが目にすることもあるだろう。

***** ノート *****

自分がここに来たのがはじめてかどうかわからない。はじめてかもしれないし、ずっと昔からいるのかもしれない。ただ、ほとんどすべては同じで変わらない。同じように太陽はのぼり、海は輝き、風が頬をさすっていく。

ウォーターランドでは、時間がゆるりと動くと言われる。不思議な力を持つ水もあるという。ただ、目に見えるのはこの自然だけ。自然だけが現実としてここにある。

今日から、この島でのほんとうの生活が始まる気がする。ここで起ることをこのノートに書き記していくことが、私に課せられた仕事と考えよう。

***** ノート *****

書き終わると、今日の日付のスタンプを押した。はたして日付に意味があるのだろうか。ノート氏の書いたものと自分の書いたものの前後関係すらあまり意味がないのかもしれない。ただ、ハロウズの紋章の透かしと日付印は間違いなく今日をここに留めるだろう。

ノートはなくさないように引き出しの底板のさらに下に入れた。ミリルさんたちが見て私の行動を不審に思われても困ると思ったのだ。ここなら、誰にもノートの存在を気づかれない。

第10話 偶然の地の灯台

考えてみると、コノンさんにはじめて会ったのがこの灯台だった。彼女と出会ったときから何か違う方向に回り始めたような気がしないでもない。その後、火事が起き、メインランドに渡り、オールドリアヌで意識の世界へと入ってしまった。

コノンさんが来る前は何も起きていなかったのか、ネモネさんがおいしい水を見つけたことは関係なかったか、その前につくっていた島便りが引き金になっていなかったか、思い当たることはいくつもある。

島便りは船長が印刷機を持ってこなければ作ることにはなかった。そう考えると船長がここに偶然立ち寄ったことに遡り、さらにその先の自分とノルシーさんが島に来たときからすべてがはじまっているとも言える。もっと言うなら、それ以前にノート氏が書いた島の記録や自分たちの知らない前にいた住人の暮らしもある。

コノンさんのお祖父さんの言うようにすべてに関連性がある、原因と結果が無限に繰り返されるのだろう。それが因果と言われるものだ。意図したものでなければ偶然として片付けられるし、誰かが意図しているとなれば必然ということになる。偶然と思える物もすべて必然であるということならば、そこにいる誰かというのは神ということになるのかもしれない。

もし、すべてが偶然に見えてしまうウォーターランドと真逆なところがあるとしたら、それがリアヌシティのようなところなのだろう。リアヌシティのドームコンストラクションはきっと神になろうとしているのだ。すべての関係をコントロールして必然の結果にしてしまおうということだ。それは恐れを知らない考えで、ひどく歪んでいびつな必然を作り出してしまおうような気もしてくる。超えてはいけないものもあるのだ。

そんなことを考えていると、仮につながりが必然であってもそれは誰にもわからなくていいのだとさえ思いたくなってくる。人間一人が関係したり、知ることのできる範囲なんてそれほど広くはない。船長が話していたように、今ある小さなつながりを大切することが重要なかもしれない。科学文明とかけ離れたところにあるウォーターランドではそんなことぐらいしか思い浮かばない。

そう考えてみると、小さな島便りであってもとても大切なもののように思えてくる。リアヌシティとオールドリアヌを行き来するコノンさんの手に島便りが届いたということを考えて、島便りによって生まれる新しいつながりは想像する以上に広範囲になっていくかもしれない。ほんの少しの文字がとても多くの人とのつながりをつくっていく。見えなかったつながりを見えるようにしてしまう文字は、人を人たらしめた偉大な発明だったのかもしれない。

それでも、島の話を書くことが、いい方向に進むのか、悪い方向に進むのかは誰にもわからない。言えるのは、そこに新しい何かの関係が生まれるということだけだ。それによってこの世界の謎が解けることもあるかもしれないし、何もみつからないかもしれない。仮に解けないまでも、そこに生まれる関係から新しい世界が作られていくだろう。

この前の島便りで何を書いたかを思い出せない。そうだ、あのとき書いた原稿をコピに頼んだところで意識が薄れて行ってどちらの世界に居るのかわからなくなったのだった。その後、船に乗って船長が情報屋のルーラー氏に島便りを手渡した。そして島便りは現実世界か意識世界かのどちらかに渡っていったはずだ。

しばらくは、メインランドのオールドリアヌのことや鮫のいたところのことばかりが走馬灯のように頭の中を巡り、島便りの内容についての記憶がなかなか浮かんでこなかった。

温泉のことを書いたのを思い出したのは夕日が水平線に落ちはじめるところだった。こんなに曖昧な記憶でしかないことがこの世界で起きたとは到底考えられない。はたして連続した島便りとしてメインランドに届くのかどうか、それこそ神のみぞ知るだ。

何を書くか考えているうちに時間だけが過ぎていった。灯台のことを書こうと決めてからも文字にしていくのに手間取った。この灯台のことをどう書くかがとても大切なことのように思え、それにふさわしい言葉を探すのに頭を悩ませることになった。

ただ、そうしているうちに居場所を見失っていた心が落ち着きを取り戻していくようにも感じられた。現実の世界だろうが、意識の世界だろうが、この灯台のことだけ忘れなければなんとかかなりそんな気もしないでもない。灯台に赤と白の違いがあったとしても、どちらもこの場所にある灯台には違いない。この場所がいくつもあったとしてもこの場所はこの場所だ。違う灯台と思ってしまうのは、現実世界しか知らない人間の考えることだと割り切ってしまうえば、気持ちが楽になる。灯台はきっと自分の居場所を明るく照らしてくれるはずだ。

ノート氏もこの灯台を居処をした。今の自分に必要なのもそういうものなのだろう。どんな世界であれ、闇を照らす灯台とそこから見える世界がありさえすれば、居場所を見失ったとしても必ず戻ってくることはできる。それまで、行き場を見失い揺れ動いていた気持ちに、雲の切れ間からさす陽光のように一筋の明かりが見えたような気がした。

島便りの原稿を書き終えるころになって、灯台に名前がないことに気づいた。いい機会だからここで灯台に名前をつけるのもいいと思った。ところがいざ考え始めると、島を象徴するランドマークとも言える灯台にふさわしい名前がなかなか浮かんでこない。悶々としているうちに日もすっかり落ちてしまった。

「オルターさん、調子はどうですか」ミリルさんとコピが様子を見に来てくれた。

「もうすっかりよくなりましたよ。船に乗れそうな気もしてきました」

「あら、今朝のオルターさんとは別人ですね。でも、今回はやめたほうがいいですよね」こちらの反応を伺うように首を傾げてみせた。

「ミリルさんに言われるとなあ」と言うと、ほっとしたような笑みを見せた。

「いい話があって。コピちゃんが島地鶏の卵をみつけてきたんですよ。それでみんなで元気の出る夕食会を開きましょうということになって」

「それはすごい。めったに手に入らない卵だ」

島地鶏はコークと呼ばれている鳥で鶏やウズラのように地面を走り回るだけで空は飛ばない。鳥は地上に天敵がいないと空を飛ばなくなるのだという。コークそのものは島ではよくみかけるものの卵を目にすることはめったにない。

「じゃあ、今夜は卵パーティーですね。ありがとう」

ミリルさんの話を聞いているとますます元気がでてきた。卵料理に目がないのを知っていてコピといっしょに探してくれたのかもしれない。ありがたいことだ。

「そうだ、この灯台のことを島便りを書いていて、灯台に名前がないと思っていたのだけど、なにかいいアイデアないでしょうか」

「ウォーターランド灯台じゃだめですか」とミリルさんが言った。

「それもいいんだけど、地名の灯台ならどこにでもあるし、何か意味のある名前ないかなと思って」と悶々としていた気持ちを伝えた。

じっと話を聞いていたコピの顔を見ると、しばらくきょろきょろと周りを見渡したと思ったらあ、燭台を指差して「ローソク！」と言った。

「ローソク灯台……」あまりにもそのままのイメージでぴんどこなかった。

「でも、オルターさんいいじゃないですか。大海に凜とたたずむローソクってなんだか神秘的でイメージがいいかもしれないですよ。昔の灯台は松明の火だったって船長も言ってたし」

ミリルさんが燭台のローソクに火を灯してテーブルに置いた。薄暗くなりかけていた小屋がほんのりと明るくなった。いつものオイルランプよりも繊細でやわらかな明かりだった。さっきま

で頭にあったいろいろな迷いが霧が晴れるように消えていくのがわかった。

「それでは、あとでグレン語の辞書でも見てみましょう。みんなとも相談しないといけないですね」

「私たちはリブロールで待っているのです、準備ができたなら来てくださいね。今夜は灯台の命名式もいっしょですね」と言うと、二人はリブロールに戻っていった。

ローソク、ローソクというコピの声がゆれるように遠ざかっていく。ローソク灯台もなかなかいいネーミングかもしれない。

第11話 島地鶏の卵料理

草原で虫の音の合唱がはじまったころ、ミリルさんに連れられて村の食堂に出かけた。今回は、オルターの快気祝という名目で開かれるのだと言う。病気になったわけでもないのに快気祝というのもおかしな話だと思いはするものの、いつもと変わらないみんなの気持ちがうれしい。急な話だったので特別な案内もされないこじんまりした会になるようだった。船長たちは別の計画もあったので招待はされていないそうだ。あくまで親しいご近所さんだけの夕食会といったところだろうか。

食堂に入る前に、目と鼻の先にある半島のほうをながめて見てみたけれど、草木はまだそれほど伸びていなかった。ネモネさんの言っていた驚くほどの早さというのは一体どれほどのものなのだろうか。

「ノーキョさんが、とりあえず水だけは絶やさないようにしましょうと言っていました」とミリルさんが緑の半島を取り戻すための計画について説明してくれた。今はなにもわからないので、とりあえずは水の力を信じましょうということらしい。悪いものを洗い清めるようなものかもしれない。

「それがいい」とつぶやくと、ミリルさんも真っ黒になって立ち枯れた木々を見ながら「きっともとに戻ります」と祈るように言った。

食堂に入ると、いつもと同じようにノーキョさんが厨房の中で料理の準備をしていた。コピも水を張った桶の前で玉ねぎの皮むきを手伝っている。

こちらに気づいたノーキョさんが「夜にマフィン料理というのも変ですかね」と笑いながら言った。ノーキョさんにはマフィンは朝食というイメージがあるのだろう。

「いやいや、この島の恵みを楽しめればそれだけで幸せです」と言うと、ミリルさんもノーキョさんを応援するように「エモカさんの特製イングリッシュ・マフィンとコピちゃんの卵、それにノーキョさんの自家製の調味料が揃えば島一番の豪華料理ですよ」と言った。

「それにおいしい水もありますからね」ノーキョさんもみんながわかってくれたのがうれしそうだった。

「素材が一級品で、料理するのが素材を知り尽くした理科の先生だなんて、こんな食堂は世界にふたつとないです」と言うと、ノーキョさんに「オルターさんそれほめてますか？」と笑われてしまった。でも、ほんとうにそう感じたのだから仕方がない。

料理ができるのを待ちながら話しているこの時間が、かけがえのないひとときのように感じる。あまりの幸せに、今この場所にはないものはないとさえ思えてくる。それほどにみんなの優しさ

が身に沁みる。

テーブルの上のカゴには調理を待つ卵が10個ほど入っていた。島に長くいてもこれだけの数を一度に目にすることは珍しい。それほど珍重され、島ではなにものにも勝るご馳走のひとつとなっている。卵はみんなが大切なものと思っているから、偶然みつけれられても乱獲されるようなこともない。口にするのはよほど特別なときだけだ。

しばらくするとマフィンの焼けるいい匂いがしてきた。

「パンの焼ける匂いってどうしてこんなに幸せな気分にしてくれるんだろう」

「ほんとですよね」というミリルさんの目が元気になって良かったと言っているように見えた。

「パンって生きる糧だからじゃないですか」と卵を焼く準備をしていたノーキョさんが言った。

「パンを食べないと生きられないということですか？」ミリルさんが聞いた。

「食べ物というだけじゃなくて、生きる糧というのは生きることを支えるすべての意味を含めてですね。なにかに例えて言うメタファーというやつです」

「そうか、パンってすごいんですね」とミリルさんが感心したように言った。

「あはは、エモカさんのパンは別の意味でもすごいですけどね。長い時間をかけてこの島の空気をたっぷり取り込んだ特製のパンですからおいしくないわけではない」

ノーキョさんが目玉焼きを慣れた手つきでフライパンからすくい上げて返した。何をするのも器用な人だ。

「オルターさんはターンオーバーでだいじょうぶですよね」

「ターンオーバー？」

「あ、両面焼きのことです。マフィンに挟むならそのほうがいいですよ」

「そうか目玉焼きにもいろいろあるんだね」

口に入りさえすればいいと思っているから焼き方なんか考えたこともなかった。

「私はお日様のようなサニーサイドアップで」とミリルさんが言うと、「僕は混沌が好物だから、ぐちゃっとなったスクランブル派です」とノーキョさんが言った。

「なるほど、目玉焼きにも個性がでるものだな。ターンオーバーだと何でしょうか？」

「きっと裏表のない人」ミリルさんが言った。

「それならスクランブルもそうだよ。怪しいのはサニーサイドアップじゃない」とノーキョさんが笑った。

そう言われてみると、ターンオーバーには両面がしっかりあるけど裏表はない。自分がふたつの世界を行き来するのもターンオーバーみたいなものだと思った。そこには裏も表もないと考えるのも悪くないかもしれない。

「ターンオーバー、いいですね。私はターンオーバーで」とあらためてノーキョさんをお願いした。

久しぶりにいただいたコークの卵は、少し気持ちが晴れたせいもあってか今までになく楽しめた。

食事のあとは、島の特産物の話になった。ノートに出てくるピーチプルは昔のようにふやせないだろうかとか、ナツヨビの卵はどうなんだろうとか、跳魚も島ならではの特産と言えるのだろうかとか、食べ物のことになると話はつきない。ほんとうに自然の幸に恵まれた島だとあらためて思う。

ノートの主が孤独を感じていたかもしれないと言うのも人の勝手な基準であって、たくさんの命の宿る島にいたと考えると島の生き物たちとの生活を楽しんでいたのかもしれない。

お腹いっぱいになったところにミリルさんが、灯台の命名のことを思い出してくれた。今夜決めないと明日の船に島便りが間に合わない。

「そうだ、わすれるところでした。島便りに灯台のことを書いているんですけど、名前のない灯台がないのは寂しいという話していたんです」

「たしかにこの島のシンボルだし、名前があってもいいですね。何かいい案は出たんですか？」

「ローソク灯台！」と言いながらコピが手を高く上げた。

「コピちゃん、ローソクって消えそうじゃない？」ノーキョさんのイメージとも少し違っていたようだ。

「グレン語の辞書で調べたら、ローソクはキャドリンって言うらしいんですけど」と言うと、ミリルさんがキャドリンというのはキャンディとか教会を連想しますねと言った。

その後、3人でいろいろな名前を出し合ってみたもののなかなかいいアイデアが出ないままに、なんとなくキャドリン灯台という名前に落ち着いた。ミリルさんの提案で、島に長いノルシーさんにも意見を聞いた上で決めることになった。

今夜は記念すべき命名の日になると思うと自分自身の再出発にもなるような気がした。

この島に来てから自分でつけたオルターという名前も本当の名前ではない。いつか閉ざされた記憶の扉が開いて本当の名前で呼ばれる日が来るのだろうか。夕闇に包まれ始めた白い灯台を見ながら思った。

第12話 もうひとつの出航

いよいよ定期船の出る日の朝を迎えた。早朝からの突貫工事のような仕事だったけれど、新しい島便りもなんとか間に合わせることができた。灯台の名前も、コピちゃんがローソクっていうのならそれでいいじゃないというノルシーさんのひとことでキャドリン灯台に決まった。ノーキョさんも島名物になるロウをつくるとはりきっている。

ここから前の自分の旅ではないもうひとつの時間がはじまることになる。ふたつの時間に整合性はない。上書きされるように前の旅が幻に帰するのだろうか。スロウさんのことだからたくさんが発見をしてくる気がする。これはこれで心配にはおよばないのかもしれない。できればナーシュさんの行方も探ってもらえたらなどと勝手な期待までしてしまう。それよりも、水に関心のあるスロウさんのことだからノイヤール湖の秘密のほうを明らかにしてくれるかもしれない。必ず行くと言ってくれたあの言葉を信じて待とう。ノイヤール湖へ戻れなくなるとしてもいいのかもしれない。こちらが現実と思えばいいだけのことだ。

コノンさんが来たので出かける前に少しでもと思って声をかけた。とくに臆する様子もなく挨拶を返してくれた。隠し事をしているようには到底思えない、あのやさしいコノンさんそのままだ。

「島はどうでしたか」差し障りのなさそうな話からしてみた。

「ほんとうにいいところでした」うれしそうに答えてくれた。

「気に入ってもらえてよかったです。また遊びに来てもらえそうですね」

「それは私の方からお願いしたいぐらいです。きっとまたすぐに戻ってきます。頼まれていたこともできなかつたので」

「頼まれていたこと？」

「お世話になっている牧師さんが前に一度ここに興味を持たれたらしくて、子供たちと移り住めないかと考えているらしいんです。島の環境保護のための収集箱を置いてきてほしいと言われていたんです。半島の木の枝にかけておいたのですが、あの火事でだめになってしまいました。環境保護というより、その前の環境調査と言ったほうが正しいのかもしれませんが」

「あ.....そうなんですね。この島はだれでも自由に住めますけど.....調査を？」

「子供たちは特別に管理された環境で暮らしているので免疫力が低くて、下調べしておかないと環境不適合障害を起こしてしまうかもしれないんです。ひどいと命にもかかわってしまうので」話し終えると唇を強く結んだ。何か思うことがあるようだ。

「強いアレルギーのようなものなんでしょうね。それで調査箱を？」

「そうなんです。でも、戻ったらあやまらないと」と残念そうな表情をした。それは頼まれた人にとっても子供たちに対して申し訳ないという気持ちのようにも見えた。

黒いパーカーのことも気になっていたので島は寒くなかったかと聞いてみた。この時期はまだパーカーを着るほどの寒さではない。日中ならまだ半袖でも過ごせるぐらいだ。

「朝方少し冷え込んだかなと思った時はありましたけど大丈夫でしたよ。親切な方がパーカーも貸してくれましたし」

心当たりを考えてみたけれど貸したという人が思い浮かばなかった。腑に落ちないという顔をしていたせいか、コノンさんがさらに話を続けた。

「何だか、船で魚を捕りに来たと言われてましたけど。私は魚のことはよくわからないので」

スロウさんじゃないとしたら、この島で魚を獲りそうな人もいない。だれだったのだろう。

「あ、そうだ。パーカーを預けておきますので貸したと言う人がいらしたらお返しいただけると」鞆を開けて黒いパーカーを出した。

創造していたよりも薄手のものだった。防寒というより雨よけに近いようなものだった。

「わかりました。リブロールのほうでお預かりしておきますね」

まさか黒いパーカーそのものが手に入るとは思いもしなかった。これがあれば犯人の手がかりが得られるかもしれない。

「でもほんとうに牧師さんが言ってたとおりのすばらしいところで、思い切って来てよかったです」島を離れるのが名残惜しそうだった。

あのヨシュアという牧師さんにこの島に行くことを勧められて来たのだろう。彼が以前来たという記憶もなかったので、かなり昔の話だったのかもしれない。その時はどうやって来たのだ

ろう。

「野営場でしたよね。火事で怪我はありませんでしたか？」彼女の居場所もちょっと気になったので聞くと、怖くて最後はボートで逃げることで考えて、北のボート乗り場の方まで走ったということだった。コノンさん自身というよりも、背中 of 歩けないうさぎピールのほうが怯えていたのかもしれない。

「また、すぐ会えますね」と聞くと「はい、戻って相談してみます」と言って半島の方に目をやった。

少なくともコノンさんには罪を犯したという自覚はまったくないようだ。実際のところ、その調査箱が出火元だったかどうかさえもわからない。ただ、彼女にないものがあるとしたら、人の悪意を感じられないことかもしれないと思った。管理されて免疫のない世界に生きるというのはいかにいうことなのだろうか。

「そろそろ船に乗ります」と言うと慎重に足下を確かめながら船に乗り込んだ。

コノンさんの背中で、ウサギのピールが首を振りながら手をぱたぱた動かしている。

「マタクルヨ」とピールが言った。いや、言ったように思えた。

彼ももっと島にいたかったのかもしれない。こちらに向かって手を振っているようだった。

ほどなくして乗客全員が船に乗り込んだ。マリーさんとはどうしても話す気になれなくて、結局ことばも交わさないままに見送ることになった。ここで話しても何かが変わるわけでもないだろうし、話せば話すだけ自分自身が混乱してしまいそうな気がした。向こうに戻ったときに落ちついて話した方がいいだろうと思った。

「じゃあな、爺さんまたな。あまり考えすぎない方がいいぞ」と船長が言った。

「船長、ミドリ鮫見つけたら教えてくれないかな」唐突だと思ったけど、何を言っているかわからなかったので思いつきを口にだしてしまった。

「わはは、ミドリ鮫だな。爺さんも見たことあるんじゃないのか？」と言うと人の顔を覗き込むようにした。

「見たのかな……」当然、答えにはならなかった。

「じゃあ、スロウ兄ちゃん行くぞ」と言うと仕事の顔に戻って操舵室に入って行った。

「オルターさん、お土産話楽しみにしててよ！」と言いながらスロウさんが船長に続いて乗船すると、船にかかっていた板を手際よく船に取り込んだ。もうすっかり船長の片腕になっているようだ。

出航はみんなで見送った。ノルシーさんは灯台から見送ると言って出て行った。

「スロウさん、いい旅になるといいですね」とミリルさんが言うと「スロウは寢座を持たないやつだから、どこに行っても心配ないですよ」とノーキョさんが頼もしそうに答えた。

オフエーリア号は大きな汽笛を鳴らすと、力強いエンジン音を響かせながらメインランドに向けて出向した。あの時船でずっと見送ってくれたスロウさんが操舵室の窓からこちらに向かって手を振っている。島がすぐに米粒ぐらいになってしまうのを見て驚くことだろう。

定期船の見送りはいつもと同じであっけないほど簡単に終わった。その先に待ち受けているいろいろなことを考えるとスロウさんにちょっと申し訳ないことをしたような気持ちにもなる。

見送りが終わって椅子に腰を下ろすと、机の上に見かけない本が置いてあることに気づいた

「ミリルさん、これは」

「あ、船長の今回のお土産ですって」

前に乗った時はメインランドのことで頭がいっぱいだったけれど、船長はお土産をしっかりと持って来ていたのだ。

「これはまたずいぶん古い本ですね」一目で骨董価値のある本だということがわかった。

「オルターさん、びっくりしますよ。タイトルを見てください」

「Travels into Several Remote Nations of the World.....なんですかこれは？」

ノーキョさんがこちらを見て笑っている。もう一冊には、The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoeというタイトルがつけられていた。

「え？ ロビンソンクルーソー？」

「びっくりですよ。もう一冊はガリバー旅行記ですよ」ミリルさんが自分のことのようにうれしそうに話す。

奥付を見るといずれも初版本のようだった。どちらにも初版本があるなんて考えたこともなかった。スウィフトという作家もいるのだから初版があってもおかしくないわけだけど、ギリシャ神話のような古い伝承のような話とばかり思い込んでいた。

「なんでこの本を？」

「ノート氏がこの島にきた頃にこの本が出版されていたんじゃないかって言われてましたよ」ミリルさんも理由を詳しく聞いたわけではなかったようだ。

「ある意味、この島も似たところがあるかもしれないですよ」と資料の整理をしていたアグリさんが言った。

「ガリバーとロビンソンがここに来たとか？」

「あはは、さすがにそれはないでしょうけど、船長からすると同じように見えるかもしれないですよ」と船を見ながら言った。

どちらの本も本物に出会えるとも思ってなかったし、詳しくはどんな本かも知らない。この世界にいる間に読んで見るのもいいかもしれない。もしかしたら現実世界ではお目にかかれない希少本という可能性だってありえるだろうから。

「オルターさん、これ」ミリルさんから小さな袋を渡された。

「ありがとう。大切にしますね」

それは虹の石が入ったあの袋だった。この石があればきっとなんとかなるだろう。なくしても、落としても手元に帰ってくる石に不思議な力を感じ始めていた。

第13話 季節のあいだ

翌日から前と同じように灯台とリブロールを往復する生活に戻った。変わったことと言えば、スロウさんの船が岸に繋がれたままになってることと、ネモネさんの温泉に行くのが日課になったこと。それに、船長の本が2冊増えたこと。

温泉は石できれいに浴槽がつくられて、更衣用の小さな小屋もできた。湯船は2、3人入れればいっぱいになりそうな大きさだけれど、温泉付きのプライベートアイランドとして一人のんびり時間をつぶすのにちょうどいい。とくに朝日を眺めながら朝霧の中で湯船につかっていると、もやもやした気持のときでもきれいさっぱりと心のわだかまりが洗い流されてしまう。

海の温泉なのでさすがに苔むす古びた風情というわけにはいかないけど、水平線とひとつになれる温泉などというのもそうそうあるものじゃない。それが楽しくなる水の温泉というのだからなおさらだ。

半島のほうから聞こえる鳥の音が、のんびりゆっくりやればいいよとさえずってくれる。

本のほうはメインランドに行かなくてぽっかり空いた心の隙間を埋めるのにちょうどよかった。船長がそこまで考えて持って来たとは思えないけど、船長の持ってきたお土産がいつも先に起る何かとつながっていくような気がする。なんだか船長の思うようにことが運んでいくように思えてしまうのは考えすぎだろうか。もしかすると、船長には自分にはない人並みはずれた洞察力があるんじゃないかと思ったりもする。

それにしても、ロビンソン・クルーソーがこんな分厚い本だとは知らなかった。これを読むとどうしてもノート氏の生活を思い起こしてしまう。自分で選んだとはいえ無人島での一人暮らしは楽ではなかっただろうと思わずにはいられない。当時はこんな温泉があることも知らなかっただろう。自分のとった行動を早まったと後悔することもあっただろうか。

それとも、ガリバーのように好奇心旺盛な青年で、見たこともない世界を心行くまで楽しんだのか。もしそうであれば、現実を映す鏡のような世界に驚き、今までにないものの見え方に歓喜したかもしれない。それはだれも気づかなかった新しい世界の発見だったのだから。

2冊の本の出版された年がノート氏の出発したころとそれほど違わないことも旅に出たことと無関係ではなかっただろう、時は大航海時代も終わって、夢や野望を持った人々の関心はさら次の新世界へと向かっていたのだ。ただ、ノート氏がリアヌシティを離れたのが何かをみつける旅だったのか、何かを捨てる旅だったのか、その答えはわからない。

船長自身は船乗りとしてこの本を読んだのだろうか。海に取り残される怖さを思いつつ、新しい世界に向かう勇気と冒険の素晴らしさに共感することもあったかもしれない。そんなことより、ノート氏の時代の本だということがあったから、そちらへの興味の方が強かったのだろうか。意識世界のウォーターランドに取り残された自分の方はと言うと、本に書かれている二人と

も違って、もとの世界に帰る手だてもきっかけもみつけれないままに、時間だけが無駄に過ぎて行くような気がしてしまう。覚えておかなければいけないことが何なのかもわからなくなりそうだ。メーンランドで体験した記憶すべてが、この世界に取り残されたまま消え去ってしまうかもしれない。ただ、時間が経つにつれて、それはそれで悪い気がしなくなっていく。とくに本の世界に入り込んでしまうと、そんなことはどうでもよくなるから不思議だ。

季節は日毎に秋の気配を感じるようになっていった。

ウォーターランドの秋から冬への季節変わりはとても早い。秋の紅葉は2週間ぐらいであつという間に冬になってしまう。冬は北から氷のように冷たい海流が流れ込むために、気温も急に下がり、島の景色も大きく変わる。ほんとうに思い切りがいいことだ。

雪は多くはないものの、島一面に咲く真っ白なユキニ草の花と白く枯れ落ちるシロノキの枯葉のせいで、まるで雪で覆われたような風景になる。はじめて見た人は本物の雪と見紛うかもしれない。その上、上空に寒気が吹き込んだときには実際に粉雪が降ることもある。それほど寒くならないのに降る雪はこの島の豊かな自然を感じる時でもある。

冬が近づいてくると灯台に夏の間取り外していた窓をつける。夏のあいだは建物の必要さえ感じないほど穏やかな日が続くけれど、冬は夏のようなわけにはいかない。風も幾分強くなるのもこの季節の特徴だ。取り付けられた窓が夜風できしむような日もある。

ノート氏にとっても冬はさすがに心細くなったかもしれない。そんなときにあのきまぐれが彼の寂しさを忘れさせてくれたのだろうか。

島に残ったノーキョさんはスロウさんのあとを引き継いで、植物の育成と水の間係を毎日観察している。そして、もっぱらその手伝いをしているのがコピということのようだ。ネモネさんの言っていたとおり、みんなコピのことを実験班長と呼んでいる。この島に詳しいコピがやれば、みんなの気づかないこともみつけれられるかもしれないという期待もあるだろう。コピはノーキョさんのことを先生、先生と呼んで、いいコンビになっているようだ。彼らが大発見をする日も遠くないかもしれない。

半島の焼けた草木のほうも聞いていた通り驚くほど早く成長し、二週間もすると木々の高さこそ前ほどでないにしても、焼け跡とわからないほどにたくさんの草花が焼けた地面を覆った。自然のもつ治癒力にはほんとうに驚かされる。スロウさんが言うように、この周辺の汽水の持つ力に負うところも大きいだろうけど、自分たち人間よりも草木の回復は遥かにスピードが早い。彼らは必然にあわせるだけで、人間のように運命に抗い、偶然を妄信することもない。それだからこそしなやかに回復していけるのだろう。

第14話 飛行士

船長の船が出て2週間ほどしたころに入れ替わるようにして飛行船がやってきた。

降りたのは黒い服を着た男一人だけだった。

背の高い男は降りるとすぐに半島のほうに向かって急ぎ足で行ってしまった。手にはあの六角のスーツケースを持っていた。

記憶ははっきりしないが、コノンさんがサーカスの広場で話していた男に似ているような気がする。ただ、黒装束が個性を消しているのと同じように見えるのかもしれない。彼らはドームにあっては目立ってはいけない黒子のような存在なのだろう。都市のインフラに関わる仕事なんて、なくなってはじめてわかるようなものだから、それまでは身を潜めて目立たないようにするのが一番いいのだ。

飛行船はその男の帰りを待っているのかプロペラを止めてその場に留まった。いつもと違ってすぐに飛び立つ気配はなかった。

社交的なミリルさんが、飛行士さんもお疲れかもしれないからお茶でも勧めてくると言いながらコピといっしょに出て行った。

見ていると、飛行士に声をかけられたのか、少し話していたと思ったら船内に入っていくようにしている。なんだかそのままさらわれてしまうのじゃないかと、ありもしないことを想像してしまった。ほんとうにミリルさんとコピがいなくなったら、意識世界のことであったとしても生きる希望もなくなってしまいそうな気がした。こんなことを思うようだからまだ正気じゃないのかもしれない。

15分ほどしても出てくる気配がないのでさすがに心配になって飛行船まで行ってみることにした。タラップのところまで来ると、操舵席にコピがちょこんと座っているのが見えた。慣れないことをさせられて緊張しているようだ。さすがに原っぱを走り回るのとはわけが違うだろう。

こちらに気づいたミリルさんが、オルターさんも乗せてもらいませんかと声をかけてくれた。3人いっしょにさらわれるのであればそれもいいかもしれない。

見ていると、もう一人乗せてもらえないか飛行士に聞いているようだ。あまり多いと飛行船に負担でもかかったりするのだろうか。

こんなに近くまで寄って飛行船を見るのははじめてだった。真下で見る機体は思った以上に大きかった。リブロールを2つ3つ並べたほどの長さがあるだろう。エンジンは暖機運転でもしてい

るのか、ドクンドクンという鼓動のような音が聞こえる。セントラルステーションで聞いた音にも似ていた。横風が気球にぶつかって、ぼおぼおと大きな音を立てている。飛行船にとってはなにもないところにじっとしているのが一番苦手なのかもしれない。

船長は、ボルトンはこの飛行船とも関係あると言っていた。コノンさんから火事の報告を聞いて、島に何かの証拠品が残ってないか見に来たのかもしれない。それでも、もし火事がボルトンの仕業であれば、のこのことこんなところに来るかどうか。火事は別の原因だったのだろうか。

「オルターさん、OKですって」船内からミリルさんのうれしそうな声がした。

せっかく交渉してくれたのを断るのもどうかと思って乗り込んだ。

「はじめまして。シーゲルです」と飛行士が挨拶をした。悪党の顔を想像していたけど、人相だけで言えば船長の方がよっぽど悪党面をしている。思った以上に若く、その紳士な振る舞いにちょっと拍子抜けしてしまった。

「シーゲルさん、もともとは船乗さんだったのに、とつてもむずかしい試験を受けられて飛行士になられたんだそうですよ。海も空も自由に行けるなんてすごいですよね」ミリルさんが言う。シーゲルという飛行士は照れたような笑みを見せた。飛行船乗りになるような人だから人間のできもいいのだろうか。だれにでもなれるものでもない。

コピは操縦席に座っているのに退屈したのか、足をぶらぶらさせながらつまらなそうな顔をしてこちらの方を見ている。実際、操縦席の計器を見て見ても何がなんだかさっぱりわからない。

「飛行船は風を読まないとだめでして、あの鳥たちの苦労もわかるというものですよ」飛行士が南に向かって飛ぶナツヨビを見て言った。

「それにしてもこんな大きなものがガスだけで浮かぶんですねえ」と言うと、「あ、これは熱気球です。ただプロペラは最新の水エネルギーを使っていますけど」と教えてくれた。

なんだか聞けばなんでも答えてくれそうな人だったので、「ここに来るのは大変だって聞いたことがあるんですけど、飛行船もそうなんですか」いきなり核心に迫るような質問を試してみた。その答えでこの島がどこにあるのかわかるかもしれないと思ったのだ。

「よくご存知ですね。たぶん飛行船乗りでも知っているのは僕ぐらいだと思います」驚いた様子もなく淡々と説明してくれた。

「船長とおなじですね」ミリルさんがこちらに向かって小さな声で言った。ミリルさんの飛行士を見る目が少し変わったように見えた。

「この辺りの潮がおかしいということは前から知っていたので、飛行船乗りになってからも度々調べに来ていたんですが。結局は船のときと同じで、天候の悪い時に気流に流されてて予期せず辿り着いてしまいました」

「島には上がらなかった？」

船のときは座礁の可能性もあるということで、島には上がりませんでした。あのときは積み荷もほとんど失うし、船は修理もできないほど壊れてしまって散々な航海でしたよ。港に戻れたのは運が良かったですね。そんなこともあって船乗りをやめて飛行士になることにしたんです。飛行船で何度も飛んでいるうちにここに来るための気流の流れもなんとかわかったのでこの仕事を」

「自分で気流を読むなんてすごい」ミリルさんが目を丸くして聞き入っている。

「この仕事というのはボルトンとの契約のことですか」

「あ、ボルトンをご存知でしたか。そうではなくて、僕はどこの会社にも属さないでやってるんです。ここだけが航路というわけでもなくて、ここもいくつかの仕事のひとつですね。今回もそうですが、お客さんの依頼があれば来るというだけです。儲けだけを考えるとやめたほうがいいんですけどね。気流に流されるリスクも高くとても割にあいませんから」と言うので飛行計画表のようなものを見ながら苦笑いをした。

シーゲルというこの飛行士はこの島を特別の場所とは思っていないようだ。そこは船長が島を好きで来ているのとは違う。向こうで依頼があったときに来るだけなので、船長が定期的に来るといっても違う。もちろんこちらから来てもらう連絡をとることもできない。

「この領域に入るのにはそれなりに労力がかかるので、仕事じゃなければ好んでは来ないでしょうね。みなさんはどうしてここに？」逆に質問をされてしまった。

「みんなこの自然が好きで、街の生活は性に合わないという人ばかりです」

「ああ、そういうことですね。そうなんだろうな」と言うと、ちょっと失礼と言いながらキャビネットからカメラを取り出し周りの写真を撮り始めた。シーゲルさんもこの

島の自然をきれいだと思ってくれたのだろうか。

こういう話を聞いていると、船長が定期的に着てくれているのは当たり前のことではないのだとあらためて思った。

少し島の気候などについて話したところで、飛行士は機体の整備があるのでと言ってロープを掴んで気球によじ登り始めた。この作業は灯台のレンズ磨きどころの騒ぎじゃなさそう。好きじゃないとやれない仕事かもしれない。

どうやら、水は渡さないと言うべき相手はこの飛行士ではないようだ。

第15話 灯台のローソク

コピも操縦席にすっかり飽きていたようなので、気球に登ったままのシーゲルさんのほうに向かって戻ることを言って飛行船を降りた。少し歩いたところで飛行船を振り返ってみると、シーゲルさんは気球の一番上に座って島の景色を見ているようだった。

あそこからすべり落ちでもしたら大けがをするんじゃないかなと言うと、そんなことを考えるようでは飛行船の飛行士なんてなれないですよとミリルさんに笑われた。

コピのほうは飛行船にすっかり興味をなくしたのか、広場のあちらこちらから聞こえる虫の声を追いかけながら歩いている。いつでもほんとうに興味関心のあるものに対して素直に反応する子だ。自然に生きるというのはこういうことなのだろう。変に知恵のついてしまった大人にはまねができない。

リブロールに戻るとノーキョさんが資料整理に来ていた。熱中しすぎてこちらに戻ったことにも気づかないようだ。

「飛行船見てきました」とミリルさんが言うと、ふいをつかれたように顔をあげて、「ああ、おどろいた。ミリルさんですか」と言いながら笑った。

「ミリルさんかって。お勉強のじゃまをしてしまいました？」

「あはは、だいじょうぶ、だいじょうぶ。ローソクのことで頭いっぱいになっていたので」

「すごい、もうローソクづくりの準備ですか。コピちゃん、ノーキョさんがローソクだって」ミリルさんがうれしそうに言うと。コピがなんのことかわからないというような顔をしてノーキョさんを見た。

「えっと、まだ調べているところなんだけど。冬が近くなると葉が白くなって落ちるシロノキってあるじゃないですか。あれがハゼの木仲間じゃないかと思って」

「ハゼノキ？」

「ローソクの方法ね」

「言われてみると、ローソクって何でできているかわからないな」

「今はだいたいパラフィンワックスでつくるんですけど、この島だと蜜蝋かハゼや漆などの植物からかなと考えていたところですよ」

「さすがは先生。なんでも知ってるんですね」ミリルさんが本を横から覗き込んでいる。

「パラフィンワックスは石油からつくるので、自然なものしかないこの島ではちょっと無理かなと思って」

「できれば、自然な素材を使って作れるといいですね」と言うと、「でも、石油も自然のものなんですよ？」ミリルさんが不思議そうな顔をした。

「あ、そうですよ、オルターさん。よくよく考えればこの世界にあるもので自然じゃないものってないんですよ。ミリルさんの言うのが正しいな」

言われてみれば、石油も化石からできたものだと言ったことがある。ビルだって、船だって、みんな自然なものから作られている。本だってそうだ。人為的に手を入れられたものが自然じゃないということだろうか。考えれば考えるほど自然の境目がわからなくなってきた。人工と言うことすら人間のおごりでしかないのかもしれない。人間だってもともと自然の一部だったはずだ。

「ミリルさん、自然はやはり奥が深いですね」と言うとノーキョさんは本で一生懸命勉強するような格好をして見せてみんなを笑わせた。

「それで、島で適当な材料はみつかりそうですか？」

「そのシロノキからローソクをつくるのがいいかなと思っていたんですけど」

「あの木からローソクが？」

「木と言うか実ですけどね」

ノーキョさんが言うには、背丈はふつうよりあるものの葉っぱの形からして間違いなくハゼノキの仲間だということらしい。船長に頼んでパラフィンワックスを運んでもらうのもいいのだけど、ろうソクの形だけを島でつくるとするのはノーキョさんの自家製魂が許さないのだという。島で取れた材料からろうソクができるのであればそれにこしたことはない。また、ノーキョさんの腕前に頼ってしまうのだけれど、そこはいつものように期待してしまう。

「ろうソクは灯台の形にしますか？」ミリルさんも手伝いたいようだ。

「そうですね。灯台の型枠はミリルさんをお願いしますね。色もちょうど白だし、ロウソクにぴったりだ」

「早くできあがったロウソクの灯台に炎を灯してみたいな。暖かなたくさんの炎に包まれた島を想像するだけでも楽しそうです。クリスマスのころには島をロウソクでいっぱい飾れますね」

「ああ、それいいですね。みんなでキャンドルナイトを楽しみましょう」

白い灯台と聞いたときに、赤もつukれないだろうかと思った。赤と白のセットの化粧箱に入った灯台を島のお土産にしてもらえればこれほどうれしいことはない。みんな赤い灯台のほうはどうしてかと思うだろうけれど、それがみんなの心に残れば自分の知っていることの何かが伝えられるような気がする。この島には白い灯台だけじゃなくて、赤い灯台もあるのだから。

「ロウソク一杯で遠くから見える？」コピが聞いた。

「そうだな。今より遠くから見えるようになるかな」

炎が島をいつまでも照らしてくれることを祈ろう。

第16話 黒服の試飲

秋の足音が聞こえるようになると、わけもなく心がざわついてくる。特別に何かが変わるわけでもなく、夏の単なる延長にあるはずなのに……降り注ぐ陽射しを遠い日のことのように懐かしんだり、冬の蓄えもないままに涼やかな風に倦怠を感じてみたり。枯れ葉の舞うころになれば、なにが起きることもなく過ぎてしまった1年の追想でもしてみようかと考え始める。

なにも悪いこともしていないし、心残りなことがなくても、秋はどういうわけか心がざらざらして穏やかではいられなくなる。そんなときにはそばにいる人の息づかいにやすらぎを感じたりもする。そして夏への郷愁になんとかけじめをつけたところで、自然が見せる最後の宴とも言える木々の彩りと虫の音が島を飾る。その後には白く透き通った季節がやってくる。そして、部屋に閉じこもって暖を取りながら、南の端から来る春の到来を待ちわびることとなる。

窓の外の風景は変わらなくとも、秋を感じさせる小さな変化があちらこちらに感じられる。景色は人の心をただ映しているだけなのかもしれない。

そんなことを思いながら窓の外を見ていると、黒服の男が半島の方からこちらに向かって近づいて来るのが見えた。彼はこんな島にまで来ても仕事がわすれられないのか。

「おじゃまします」ていねいに挨拶して店内を一瞥すると、ここは本屋なんだろうかと聞いてきた。

背丈は1m80cmはあるだろう。この高さで黒装束となると、黒子というよりも威圧感すら感じさせる。顔は何も見えていないように無表情で、コピが羽虫を追いかけて店内を走り回っていてもまったく動じる様子もない。リアヌシティのセントラルステーションで行き来していた人の顔を思い出してしまった。

「いい本がありますね」棚の本をかがむようにして見ている。

「メインランドに目利きの船長がいて、その人のみつくろいです」と言うと、「なるほど」とひとことだけ言うと、こちらを振り向くこともなく書棚を眺め続けた。

「この本は……」と言うと船長が持ってきた水の本を手にとって、しばらく興味深そうに見入っていた。同じページを行ったり来たりしているので、何か気になるところでもあったのかもしれない。

「この島の水は身体にも心にもいいものらしいですよ。試してみられますか？」ミリルさんがいつも客さんにするように声をかけた。

「いいんですか」遠慮ともお願いともとれるようなあいまいな返事だった。読みかけの本を元の棚に戻してピッチャーのあるところに場所を変えて、ミリルさんの給仕をじっと見ていた。視線の向かっている先からすると、給仕ではなく水そのものを見ているようだった。

「はい、どうぞ」ミリルさんがおいしい水を手渡した。

男は水を受け取るときもほとんど表情を変えなかった。そのまま一気に飲み干すと、コップに残った水を手のひらに少しだけこぼして、それをもう一方の中指でゆっくりとさするようになっている。まるで水の不純物でも確認しているかのようだった。

「あ、何か入ってました」心配そうな顔をしてミリルさんが聞いても答えはなかった。

水のついた指先をじっと見ていたと思ったら、六角のスーツケースを開いて何かを確認しはじめた。一人頷いてスーツケースを閉じると「この水はここに？」と聞いてきた。

おいしかったですかと聞くミリルさんの後ろで、コピが隠れるようにして見ている。

「この島の代表者はどなたですか」

聞かれたミリルさんは、何か返事をしてくれというようにこちらを見た。横で植物図鑑を開いていたノーキョさんが、オルターさんでいいのではと言った。

「この水を譲ってもらうことはできますか？」黒服がこちらに向かって聞いた。

「私が代表というわけではなくて、島に長いというだけですが。水は島民みんなのものなので、外の方にお譲りするほどなくて」と答えると、黒服の男は「お願いしてもだめなのですね」と再度念を押すように言った。

ミリルさんが、オルターはまだ意識がしっかりしていないのではないかと不安そうな表情をしている。コピはミリルさんの後ろに隠れたまま顔も出さなくなった。

「そうですか。それは残念です。メーンランドの困った人に役立つと思いましたが」と言うとき時間が気になるのか飛行船のほうを振り返った。飛行士は、操縦席に戻ったのか姿が見えない。

「オルターさん、少しぐらいなら困った人のために……」ミリルさんが横に来て耳元で囁いた。

それを見ていたノーキョさんが「ミリルさん、水はこの島のものだから」と言うと、様子を伺

っていた黒服の男は少し間をおいて「独り占めはよくないですよ」とだけ言った。

重苦しい空気が流れて、みんなしばらく押し黙ったままの時間が流れた。その場の空気を察した黒服は「また、あらためて伺うことにします」と言うと名前も告げずに足早に出て行ってしまった。飛行船はそれから5分もしないうちに音もなく地上を離れ、うろこ雲のたなびく大空へゆっくり吸い込まれるように上がっていった。

「オルターさん、あそこまで言わなくても」ミリルさんが少し不満そうな顔をしてこちらを見た。頼まれれば嫌と言えないミリルさんからすれば、ひどい接客と見えたかもしれない。ノーキョさんは理由を知ってか知らずか、何も言わないで植物図鑑をずっと読みふけている。

「あの人、また来そうですね」ミリルさんはこれで終わりにするつもりはないようだ。船長から断った理由を聞けば納得してくれるだろうか。

「コピ、どうした。恐かったかい」

「ううん。悪い人」とひとことだけ言うと身を固くして飛行船の飛んで行った方を見た。

黒装束がそう思わせたのか、表情のない顔がそう感じさせたのか、コピには何かがわかったのかもしれない。

「いい人じゃないね」本に没頭していると思ったノーキョさんが独り言のように小さな声で言った。

ほんとうのところはどうなのかはよくわからないけど、船長たちの話を聞く限りでは、島にとってあまり好ましい人ではないだろう。悪くすると島の水を全部抜き取られてカラカラにされてしまうかもしれない。水位の低くなることが多くなったというノイヤール湖の情景が頭に浮かんだ。

ミリルさんは黒服の使ったコップを片付けながら、まだ腑に落ちないという顔をしている。

「ほら、この木を見てください。シロノキにそっくりでしょ」ノーキョさんが気分を変えるように本の写真を指差して言った。

「おんなじ葉っぱ！」コピが言った。

「あの実でロウソクが作れるとは思わなかったね」

「こんど黒服の人が来たらロウソクをプレゼントしましょうね」

「ミリルさんは、どこまでもいい人だね」とノーキョさんが笑うと、コピが「いい人、悪い人、いい人、悪い人」と繰り返しながら、写真の葉っぱを数えていった。

「……いい人」と言って最後の葉を数え終えた。

「まあ、誰にとっていい人なのかという問題だけどね」ノーキョさんが言うと、「この島を好きな人に悪い人なんているのかなあ」とミリルさんがぼつりと言った。

意識世界と思っているこの島にも船長の話していたとおりにボルトンの男がやってきた。それを知っていた私は、ミリルさんを制して水を提供することを断った。時間が前後していることと、自分自身がそこにいるかいないかという違いはあるものの、水をめぐる話に変わりはない。

現実世界と意識世界は明確な境もなくつながっているのだろうか。現実と意識の境目がないとしたら、この世界は二重、三重にいくつもの次元が重なってできているようにも思える。どうしてそんなところに迷い込んでしまったのかはわからない。ただ、ある日突然人が消えたり、見えなくなることがあったなら、この夢と見紛うような時空の淀みに入り込んでしまっているのかもしれない。そこは、どちらが現実で、どちらが意識世界という明確な判別すらことすらできない。

第17話 湖の正夢

飛行船が行ってしまったあとには、また秋の訪れの感じる静かな生活だけが残った。島の木々は日の当りのよいところから紅葉が始まっている。島の住人たちもそれに合わせるようにそれぞれの住処で思い思いに衣替えをはじめめる。

「スロウさん、元気でしょうか？」テーブルの拭いていたミリルさんが、急に何かを思い出したように手を止めて言った。

「スロウさんのことだから心配はないでしょう。知らせのないのはよい便りと言いますしね」

「なんだか知っている人のいないままに季節が変わっていくのってさみしくないですか？」

「気持ちまで違うところにいってしまう感じですかね」

スロウさんは向こうの生活には慣れただろうか。窓の外を吹く風も日ごとに冷たくなっていることだろう。庭の木々はすっかり落ちて、橙色の葉が艶やかな模様の絨毯のように小石の敷き詰められた庭を覆っているかもしれない。

オールドリアヌの探索が順調に進んでいるのかは気になるところだ。夢の話とっていたノイヤール湖が実在することがわかれば、約束したことを思い出してくれるはずだ。トラピさんに案内されてコノンさんのお祖母さんの家を案内されたころかもしれない。もし、ジノ婆さんのところ行っていたら私は来てないと言う話になるだろうし、そもそもそんな話にさえもならないのかもしれない。

「あの、ネモネさんはメインランドに行きたいって言ってませんか？」

「ここの温泉も見つかったし、しばらくはのんびりされるつもりじゃないですか」ミリルさんは何を急に言い出したのかと言うような顔をしている。

「いや、なんとなくね、向こうにもいい水があるんじゃないかと思って」

「なんとか湖ってところのことですか？」

夢の話ということにしたものの、ミリルさんも多少は気にかかっているのかもしれない。

「オルターさん、私、船長の持ってきた水の本を見ていたら、オルターさんの言っているところかもしれない湖を見つけたんですけど……」ミリルさん自身、半信半疑のようだった。

「え、それノイヤール湖という名前でした？」

「名前はなかったんですけど、なんだかきれいな鱒がいるので太公望の憧れだとか書いてありましたよ」

「へえ、そういうこともあるんですね」こちらもおもしろいこともあるものだというような言い方をしてミリルさんの顔色を伺ってみる。

「正夢ってということですか？」

「そうか、正夢だ。名前まで同じならびっくりですけどね」

ミリルさんに教えてもらって湖のことが書いてあるページを開いてみた。確かに名前こそ書かれていないもののノイヤール湖に間違いなさそうだ。黄色い斑点のある鱒が釣り人を集めていると書かれている。当時の自然の豊かさからすれば、それほど際立った美しさというわけでもなかったせいか、湖がきれいかどうかについては特に触れられていない。記述があったのは周辺の水路の発達のことだった。そのあたりの話もノイヤール湖の周辺と一致する。何よりも説明に添えられている挿絵の鱒がドットトラウトそのものだった。その鱒はこの湖にだけ生息すると書かれている。

「このページにしおりがはさんであつたんですけど、スロウさんが調べていたんでしょうか」

「どうでしょう。スロウさんが湖を見つけたということミリルさんに知らせたのかもしれないですね」

「え、このしおりで？」ミリルさんが、目を丸くしてこちらを見た。

「いや、冗談ですよ。でも、ちょっとそんな気がしたもので」

ミリルさんは、変なことを言わないでくださいと言って笑ったけれど、実際、スロウさんがノイヤール湖から自分と同じようにこの世界に来ていると考えられなくもないし、何が起きてもおかしくないような気がしている。

もう少しすれば、トラピさんたちも帰ってくるだろう。黒服やノイヤール湖、夢の話と思われていた世界が少しずつみんなのいるこの意識世界と重なってきている。

「そうだ、ノーキョさんが今日ロウソクの試作をするのでいっしょにどうですかって言われてましたよ」

「お、お誘いですね」

「コピちゃんは、今朝から葉っぱの実験班長に行くってはりきっていたので、もうお手伝いしているかもしれませんね」

コピもノーキョさんから実験班長を頼まれたのだ。スロウさんと自分のメーンランドへの渡航が入れ代わったままに、前と同じように島の時間は流れていく。

「じゃあ、食事をしたらロウソクのお手伝いに行きましょうか」

「そうですね。そろそろクリスマスの準備もしないといけないし。いいローソクができるといいですね」

赤い灯台のあるウォーターランドに来た時、たくさんのローソクで島でいっぱいだったら、さぞや幻想的だっただろうと想像してみた。赤い灯台が過去であるなら、そんなことはあり得ないことなのだけど、時間の順番さえここにはないのかもしれないとも思う。まだ、夢が覚めているかどうかさえもはっきりしないのだから、何が起きるかどうかなんて誰にもわからない。

第18話 魚拓のドット

食事が終わったところで、ミリルさんといっしょにノーキョさんのお店を訪ねた。

「いらっしやい。ようこそ蠟燭研究所へ」ノーキョさんの明るい声が出迎えてくれた。

「あら、今度は蠟燭研究所なんですね」

「ノーキョさんは多芸だから、休む間もないね」

「多芸というか生物関係の知識の範囲でしかないですよ」謙遜して照れ笑いをしている。

ノーキョさんのお店は雑貨屋のようでもあり、実験室のようでもあり、はじめてきた人は誰もがその店構えを見て戸惑う。実際、値札のついた商品が並べてあるわけでもないのにお店ということ自体が無理なのだ。お店には見えないのだけどももしろそうなものがいろいろ並んでいるから、かえってみんな気になって仕方ない。

「この島にいと、なにからなにまで珍しいことばかりで、やる事がなくなるなんてないですよ。僕にとってはウォーターランドはワンダーランドですから」

室内はその言葉を裏付けるように、植物の種や苔の壘詰、使い道のわからない粉や液体、作りかけの道具などが所狭しと置かれている。機械類はスロウさんが作っているものも多いのかもしれない。ここは二人の遊び場でもあるのだろう。

「あ、これがローソクの元ですか？」床に置いてあった白い固まりを見ていたミリルさんが言った。

そうですよと言うと、ノーキョさんは大きな鍋に蠟の固まりを入れて火にかけた。部屋の角にはかごに入ったシロノキの実も置いてあった。

たくさん集めたものだと感心して覗き込んでみると、島に詳しいコピが集めてきてくれたものだと教えてくれた。コピもすっかりノーキョさんの遊び友達だ。

「ノーキョさん、こちらの葡萄草の実も材料になるんですか？」

「ああ、それは赤いほうの色をつけるのに使おうかと」そう言うと一粒指先でつぶして見せてくれた。思ったよりは黒に近い赤だった。葡萄草の実を食べるものだとばかりと思っていたけれど

、知恵さえあれば使い道はいろいろあるものだ。

「これがミリルさんと相談してつくった灯台の木型です」ノーキョさんがテーブルの下から取り出しながら言った。

「ほんとだ。うまくいくといいな」思っていたとおりの出来上がりだったのかミリルさんもうれしそうだ。

話しているうちに鍋のぐつぐつ煮える音が聞こえてきた。蠟がとろとろになったところで木型に流し込むのだという。

準備ができるまで手持ちぶたさだったので、ゆっくり見たことのないノーキョさんのお店を眺めていると、額装された魚の魚拓が壁にかけてあるのに気がついた。理科の先生は何をやらせても器用なものだ。

「ノーキョさん、よかったら今度跳魚釣りでもご一緒しませんか」釣り友達になれるかと思って誘ってみた。

「僕はもっぱら研究のほうなので。足手まといになるといけないですから。それは少し前にスロウが海で釣り上げた魚なんです。見かけない魚でしょ」

言われてみるとこの辺りで見たことのない魚だった。きれいに取れている魚拓を手にとって見ていると、ミリルさんが首を傾げている。

「どうかしました？」

「なんだかあの魚に似ているような」

「え、あの魚って」

改めて魚拓を見て、一瞬自分の目を疑った。黒一色だったのでわからなかったけど、あごが少し大きくなっているところを除けば紛れもなくあのドットトラウトそのものだった。魚拓では出せなかったのか、ドットの柄を手で書き足してある。ノイヤール湖にしかいないと思っていたのに、まさかここで同じ魚を見ることになるとは。ノートの主がここまで魚を運んで来たとは思えないし、鮭の仲間なら降海してもおかしくないということだろうか。そうだとするとここはノイヤール湖から下って来られるような距離なのだろうか。鱒といよりもウナギの生態に近いような魚をイメージしてしまう。何がどうなっているのかまたわからなくなってきた。

「これはノーキョさんが魚拓に？」

「スロウから頼まれたので。素人仕事なんですけどね。形だけでも残しておきたいと言われて」

「きれいな魚だったらしいですよ」ミリルさんは前から魚拓のことを知っていたようだ。

「スロウは発光するような模様を見て、深海魚の一種なのかもしれないって言ってましたね。勝手に光魚って名前をつけてましたよ」

「もしかすると、スロウさん、水の本を見てこの魚と同じだと思ったのかもしれない。それでメーランドに行くことにしたのかも」

「なるほど、スロウだとやりかねないな」ノーキョさんが顎に手をあてて言った。

スロウさんが夢で見た湖の名前に興味を示したのもこれが理由だったのかもしれないと思うと、あのときの会話も納得がいく。

「実はこの魚、夢の中にも出てきたんですよ」みんなとの距離を縮めるためにもいいタイミングかもしれないと思って言ってみた。

「この魚も夢に？ あのなんとか湖にですか？」ミリルさんがまた困惑したような顔をした。

「あれも正夢だったということかな」

「オルターさん、ほかにも夢で見たことがありますか？」ノーキョさんも、さすがにおかしいと思い始めたようだ。

「船長とかもね出てきましたよ」と言うと、ノーキョさんとミリルさんが顔を見合わせて、やっぱり普通の夢なんだと納得したように笑った。

「夢の話はそれとして、スロウはこれをどこでつかまえたんだろう」ノーキョさんはそこだけでも聞いておけばよかったとちょっと後悔しているようだ。

「もしかしたら、海の底にたくさんいるのかも」ミリルさんが好奇心でいっぱい目のをした。

「それならもっと見つかってもいいはずですよ」と言うと、ノーキョさんが「みんな跳魚と思っただけかかもしれないな」と言った。

言われてみるとどこか跳魚に似ている気もする。島の周辺にいたと思っていたのは跳魚ではなくてドットトラウトだったのだろうか。もしかすると船長が釣竿をくれたのはそれを知りたかったからかもしれない。ミドリ鮫ばかりに気を取られていたけれど、実はドットトラウトこそが秘密の鍵を握っているとしたら.....ノートにはドットトラウトとわかる記述はないけれど、それこそが行方のわからない残りのページに書かれていたことと考えられなくもない。

「魚の話はこれぐらいにして、コピちゃんも待っているのでローソクのほうをそろそろ」いつも冷静なのはノーキョさんだ。蠟の具合を確認するようにかき混ぜながら言った。

こちらは頭の中がドットトラウトでいっぱい、ローソクを作っていたこともすっかり忘れていた。

「コピちゃん、手伝って。私は芯を入れていけばいいですね」

ミリルさんの手際のいい作業もあってローソクが次々にできていく。シロノキの実もたくさんあるので材料にも困ることはないようだ。

「そちらのほうまでできたら、オルターさんご希望の赤い色をつけてみましようか」ノーキョさんはローソクがテーブルの端まで並んだのを見て、葡萄草の実から採ったという染料を蠟に混ぜた。

「ほんとにきれいな赤になりますね」ミリルさんが感心したように言った。

赤い灯台も夢に出てきたことを言ってみようかと思ったけど、これ以上みんなを混乱させるのもどうかと思いやめにした。今日はみんなでつくるローソクを心ゆくまで楽しむことにしよう。

3人が赤いローソクを作っているのを見ながら、こちらのほうはドットトラウトに出会うことを期待して、海釣りをする場所はどこがいいかを考えていた。

第19話 幻の釣り

翌日は、少し雲が多いぐらいで、釣りをするのに悪くない日和になった。潮も高くなっているので、ふだんより大きな魚がいそうな気がする。ちょっと様子を見に来たというアグリさんがとなりで仕掛けの準備をおもしろそうに見ている。

「オルターさんのその竿はどこで手に入れられたんですか？」

「船長からのプレゼントなんです」

「そうなんですか。船長、プレゼントなんかしそうでないけどな」と言って笑った。

「ほんとは釣りでもしてゆっくりしたいのは船長自身なんでしょうけど」

「ああ、それならわかる気もします。自分ができないから島のだれかにというわけですね」

竿の話をしているうちにノーキョさんも釣果が気になってきたらしく、そのまましばらく付き合ってくれることになった。

「まさに幻の魚探しというところですね」と言うと、またひとつ島にいる楽しみがふえましたと言いたげに何度か頷いた。

ドットトラウトがこの島にいると思うだけでなんだか楽しくなる。コピ以外に見た人のいないミドリ鮫に比べれば、魚拓のあるドットトラウトのほうがはるかに現実性のあるロマンだし、シーラカンスのような話もあるから、夢のままでは終わらない。この手つかずの自然環境があれば絶滅という心配もないだろう。

とはいうものの、夏も終わりにになると羽虫も少なくなるから、跳魚もそろそろ釣れなくなってくる。釣りのできる日もあとわずかと思うと、次の春まで待つてはられないという気にもなる。

「それで、餌のほうは何を？」

「餌……」

言われてみてはじめて気がついた。跳魚と同じ羽虫の疑似餌ではだめかもしれない。コノンさんのお祖父さんは投網を使っていたから餌は何がいいのか聞かなかった。

「問題はそこからでしたね」と言うと、二人で大笑いになってしまった。

スロウさんが釣りをしているという話を聞いたことはないから、やはり偶然何かに引っかかったとか、別の仕掛けに入っていたとか、そういうことだったのかもしれない。

「オルターさん、どうします？」さすがのノーキョさんもこればかりは手の打ちようがないという顔をしてこちらを見た。

「考えてもしかたないから、とりあえず疑似餌のままでやってみることにしましょう」そういうより他になかった。だめなら別のものを順番に試していけばいいと思った。跳魚のときも最初はそうだった。

岸からの釣りといっても、さすがにいつものチャルド川とは違う。はるか彼方まで広がる海を前にしてみると、岸の近くにドットトラウトがいるとは考えにくい。投げ釣りでないと、魚の方も餌を見つけられないかもしれない。

「釣れますかね」ノーキョさんも期待しているものかどうかさすがにはかりかねているようだ。

とろんとした海に疑似餌が頼りなげにゆらりゆらりと漂っている。選んだ場所が内海のようになっているところだったので波もほとんどなかった。小魚の魚影が見え隠れしていたけど光り輝くドットトラウトの気配は感じられなかった。

しばらくつきあってくれていたノーキョさんも、さすがに期待薄とみたのか用を思い出したと言ってお店に戻ってしまった。

ふわりふわりと白い羽毛が波間を漂うのを見ていると、世界の広さと、自分の小ささをあらためて感じる。小刻みに震えている羽毛の動きが自然とひとつになっていることの証のようにも見える。風に吹かれるままに右へ左へと動く様は自然に身を任せて、翻弄されているようでいて、これが無限に広がる自由そのものということなのかもしれないとも思う。

目を閉じると羽毛と同じように、はてしない世界に放り出されているような気分にもなる。何かに翻弄されているのかいないのかさえもわからない。ただ、言えるのはそこにいるということだけ。いるだけで自然の一部となり、自由であることを許される。

ぼんやりと羽毛を見ていると、白い綿毛が逆光の中で霞んで見える。魚に相手もされない姿はなんとも言えない気持ちになる。

「ソダーさん……」

ソダーさん.....また、あの声がだれかを呼んでいる。どこかで。

「オルターさん.....」

女の人の声だ。ジギ婆さんだろうか。コノンさんかもしれない。

「だいじょうぶ.....ですか？」

また、ちがう世界に呼ばれて行くのだろうか。

「こんなところで寝てると風邪をひきますよ」

「あ、ネモネさん.....」

打ち寄せる波を見ているうちにうとうとしてしまったようだ。羽毛を探すと岸のすぐ近くまで打ち寄せられていた。

久しぶりに見たカバ君はピンクで元気そうだ。オールドリアヌで見た熟したような真っ赤よりこのぐらいのほうがいい。

「今日は海釣りなんですね」

「幻の魚を求めてとでも言いますか」

「幻の？」

「そう、幻の、ノーキョさんのところで魚拓になってる魚」

「そうなんですか、楽しそうですね」

「水の本にも出てますよ」と言うと、ちょうどミリルさんのところに行くところだったらしく、見てきますというとカバくんととことこと行ってしまった。どうやら女性は釣りにもロマンにもあまり興味がないらしい。

第20話 夕立

「オルターさん、これどうですか」

しばらくして戻って来たノーキョさんは手製の竿を持っていた。あり合わせの材料で竿をつくってきたという。

「さすがノーキョさん。ご自分で？」

「自分でと言っても、枝と細工用の糸を結んだだけです。餌になりそうなものも適当に見繕ってきましたよ」

竿もないのに釣りに付き合ってくれていたんだと思うとちょっと申し訳なく思った。船長にもらった竿を使ってみませんかと勧めてみたけど、初心者には手製の竿で十分と言って聞いてくれない。こういうところがノーキョさんの好かれるところなのだろう。

ノーキョさんの手製の竿はとても長く、かなり沖の方まで餌を飛ばすことができた。ちょっと目を離すと餌を見失ってしまいそうなほどだ。日が傾きはじめていたので、水面のきらめきがよけい餌を見にくくする。ノーキョさんは若いから目もいいのかもしれない。そう思っ一層目を凝らして見ていると、竿の先がほんの少ししなったように見えた。

「あれ、何かがかかりましたよ」

糸の先の疑似餌が見えなくなっている。

「いきなり、幻の魚とききましたか？」

「そうならほんとうにビギナーズラックだ」うれしそうに竿の先を上げた。

「ノーキョさん、ゆっくり、ゆっくり、あわてないで」

竿を引きながら後ずがりしていくにつれて魚影がぼんやりと見えてきた。岸の近くまで来たところで網を使ってすばやくすくい上げた。

「どうですか？ 幻の光魚でしたか？」ノーキョさんが駆け寄って来た。

「おお、これは！ なんと！」

「なんと、どうでしたか？」

「まさにあのおいしい跳魚です！」

「え、跳魚？」

「でした」

「なんだ、オルターさんも人が悪いな。光魚が釣れたかと思いましたよ」と言うとノーキョさんは気が抜けたようにその場に座り込んでしまった。

さすがにいきなりドットトラウトと言う訳にはいかなかった。釣りなんて釣れないのを楽しむようなものですよと慰めると、ノーキョさんはやっぱり僕は魚拓を取っているのがあっているのかなと言って笑った。

そのあとも、ノーキョさんが用意して来てくれた餌をいろいろ試してみたものの雑魚さえもかからないままに時間だけが過ぎていった。

「こういう風になにも釣れないままに、自然と戯れるのもよくてね」

「そういうものなんですかね。まあ、間違いなく自然あってこそその遊びですよ。この島にはびったりかもしれない」

しばらくするうちに光魚のことはどこへやら、ミリルさんのことで話が盛り上がってしまった。ノーキョさんもミリルさんには頭が上がらないのだという。頭が上がらないもの同士で、ミリルさんは長女に違いないとか、世話焼きな性格なんだとか、都会育ちだとか勝手なことを言いあっていた。釣れない時はたわいもない話で時間をつぶすのも一興なのだ。

「お待ちかねの手紙が来ましたよ」

後ろからミリルさんの声がした。ノーキョさんと思わず顔を見合わせた。ミリルさんは二人で仲良く何の話をしているのかしらと言うと、丸まったロールレターをこちらに差し出した。もしかして聞かれていたならますます頭が上がらなくなる。ノーキョさんもまずかったですねという顔をしている。

「ちなみに私は一人っ子ですけど」ミリルさんが言った。

「あ、そうでしたか。そうですよね。そう思ったんだよな」ノーキョさんが珍しくしどろもどろになっているのがおかしい。人ごとではないのだけど、こちらは慣れたものだ。

「もしかしてこの前来た黒服のボルトンからですか？」と聞くと、「お待ちかねのスロウさんからですよ」と普段と同じミリルさんの笑顔で返事が返ってた。目でノーキョさんに大丈夫というサインを送った。

「やっときたな。スロウは元気でしたか」地面に寝転がっていたノーキョさんが腰を起こした。

キレイナ ミズウミ アリマシタ

これは自分が向こうで書いた手紙ではないだろうか。湖のことを書いたのは覚えているけどはっきりと文章までは覚えていない。

「元気そうですね。この手紙、ネモネさんはもう見ましたか？」

「さっき会ったので、向こうにもきれいな湖があったようですよって伝えましたが、何かありました？」

「ネモネさんは何も？」

「すごく行ってみたいって言っていましたよ」

「こちらよりもきれいな水なんですかね？」ノーキョさんが言った。

「そりゃあもう、とびきりきれいな湖ですよ……あ、夢ではね」

「オルターさんの話はみんな夢の話なんだから」

「まあまあ、ミリルさん。楽しい夢はたくさん見れた方がいいということで。それでスロウは元気そうですね」今度はノーキョさんに助けられた。

「自分のことは何も書いてないから、きっと大丈夫でしょう」

「空の雲行きがあやしくなってきたから私は戻りますね。お二人も雨に降られないように」そう言うとミリルさんは早足でリブロールのほうに戻って行った。

二人でなんとかやり過ごせましたねと言って笑っていると今度はこちらの竿の疑似餌が波間に引き込まれた。あわててリールで糸を巻き取ると小さい跳魚が糸の先でジャンプしたかと思うと、するりと針をはずして海の中に逃げ帰って行った。

「あれも跳魚でした？」

「光魚ならもっと光っているでしょうから」

「満月の日はだめなんですかね」

「とりあえず、日の落ちる夕暮れぐらいまで頑張ってみますか」

そのあと二人で1時間ほどいろいろ試してみたものの、結局目指す獲物に出会うことはなかった。川では愛想のいい跳魚も、海ではなかなかつかれない態度で二人の釣り人はなかなか楽しませてもらえなかった。

釣果のないまま帰り支度をしていると、真っ黒な雲が急に空を覆い突然土砂降りになった。この次期にはよくある夕立だ。仕方がないので近くにあった行方のわからなくなっているないないさんの家の軒下で少し雨宿りをさせてもらうことにした。

石造りのこの家はおそらく島でももっとも古い構造物のひとつで、漁師が漁具の置き場としてつくったものではないかと言われている。人が住むにはちょっと小さすぎる。

「まいりましたね。でも、夕立ですぐに止むでしょう」

「急ぐわけでもないからゆっくり雨音でも楽しみましょうか」と言うと、ノーキョさんは小さく頷いて空を見上げた。

雨音を聞いていると、吹く風に合わせて草花の歌声が聞こえてくる。ノート氏が書いていたように天に向かって喜びの歌を輪唱しているようだ。揺れる葉のこすれあう音があたかも歌っているかのように聞こえるのかもしれないけど、それでも自然の奏でる愛しきセレナーデであることには違いない。

「あ！」と突然ノーキョさんが声をあげたと思ったら「枕とシーツを干したまままだ。オルターさんまたです」と言うなり、上着を頭にかぶって雨の中を駆け出して行った。

せっかくの天日干しが台無しだ。今日は運に見放されている日なのかもしれない。

ノーキョさんが行ったあと一人で地面にできた水たまりに落ちる雨の波紋をながめていると真っ黒だった空に少し明りが射しはじめた。それに合わせるようにして雑木林にミルク色の霧が立ちこめて来た。ノーキョさんが家に着いたころには雨はほとんど上がってしまうだろう。

少し寒くなってきたので、失礼して家の中に入れてもらった。閉じた薄暗い家の中で雨の音を聞いていると、時間が流れているのか止まっているのかわからなくなる。時間の経過を忘れさせてしまう空間だった。何百年も前、ここに誰かが同じようにいたかもしれないと思うと壁に積み上げられた石の一つ一つに存在感を感じる。オールドリアヌにハロウさんが残した石の家を訪ねたときのことを思い出した。形を変えない石には時間を消し去る力があるのかもしれない。

雨はしばらくやみそうになかったので、ベッドで少し横にならせてもらうことにした。目を閉じると、止みかけの雨の滴がまた時を数え始めた。

雨音に耳をすませていると、どこからか聞いたことのある声がした。

「いやはや、こんな天気見たこともない」

同じように雨に降られてしまったのだろうか。

「何かの罰でも当たったのかな……ぶつぶつ」

窓から外を見ると雑木林のほうからこちらに向かって来る人影があった。どうやら独り言を言っているようだ。道にでも迷ったのだろうか。傘も刺さずにはずぶ濡れになって歩いている。

足音が家の前で止まると無造作にドアが開けられ、挨拶もなくいきなり一人の男が入って来た。

「あれ、オルターさん。会えてよかった。ほんとにほんとに」

目の前に現れたのは行方の知れなくなっていたあのないないさんその人だった。

第21話 再会

「ないないさんじゃないですか！ どこにいらっしゃったんですか？ そんなずぶ濡れになって」

「オルターさんこそ、私の家で何をされているのですか？」

「あ、ああ……これは失礼しました。ちょっと雨宿りさせてもらいに」

「なるほどなるほど。急な雨でしたからね。釣りの帰りですね」竿を持っているのに気づいたようだ。

「あの、ないないさんは？」

「とにかくとにかく、オルターさんにここで会えて良かった。それにしてもこの冷たい雨には参りました」

どうも状況が飲み込めない。どこかに行っていたというのだろうか？ ボートで帰ってきたということでもなさそうだ。

「食べかけていたパイも台無しです」形もないほどに崩れていたパイを残念そうに見た。

「あの、食べかけのと言うか、もう何ヶ月もたっていますけど……」

「え、さっきまでパイを食べてましたが、あまり変なこと言わないでください」と困惑した顔で言った。

「ないないさん、どこかに出かけられました？」

「ちょっと思い出したことがところがあって、なくした枕を探しに行っていただけですけど。どうも道がよくわからなくて……なにかありましたか？」

ないないさんの中ではまるでこの数ヶ月の時間がなかったかのようだ。

「もし良かったらいっしょにお茶でもいかがですか」

「あ、ごめんなさい、勝手にベッドまでお借りして」あわててベッドを立った。

あまりのさりげなさにこちらの方が戸惑いを感じてしまったけれど、せつかくのお誘いだったので遠慮もしないでそのままごちそうになることにした。ないないさんの家は以前違う人が住んでいたところで、一人暮らしの調度品がぎりぎり入る程度の広さだった。二人も入るとベッドの場所を除いてほとんど隙間がなくなってしまう。

ないないさんは濡れた洋服を脱ぐと、寒い寒いと言いながら袖のない夏服を着ようとしている。

「もしかして.....夏服しかお持ちにならなかったですか」心配になって聞くと、「夏にしては今日の寒さは変ですよね」という答えが返ってきた。

その時、もしかしてないないさんも違う世界に迷い込んでいたのかもしれないと思った。

「今、お茶を入れますから」と言うと、薪のコンロに使い込まれたポットをかけた。

あまりの寒さに手が震えて、何度やってもマッチを上手く擦れないようだ。マッチが湿っているのかもしれない。

「上着を着た方がいいですよ。風邪をひきます」

「ほんとにほんとに、ここは夏でもこんなに寒くなるとは思いませんでした」まだ、夏だと思い込んでいる。

マッチを受け取って火をつけた。ないないさんは部屋の角にまとめてあった大きな荷物をひっくり返して秋物の服を探している。

「この島の雨は本当に一瞬で天気を変えてしまうんですね。スコールよりもずっとすごいです。とにかくとにかく驚きました」

「外で何かをされていたんですか？」

「枕を探しに林のほうをみていたら無性に眠くなって。木陰でちょっととうとうとしたらこんなことに。眠り茸でもあったのでしょうか」

仮にそういうキノコがあったにしても、いくらなんでも何ヶ月も眠れる人なんていない。間違いなく違うどこかに行っていたと確信した。きっと、本人も何が起きたかまだわかっていないはずだ。変な夢を見たと思っているのだろう。まちがっても違う世界に行ったなんて言うはずが

ない。

こちらは、早く別の世界に赤い灯台がなかったかと聞きたいところだけど、まずは落ち着いて疲れを取ることが先決だろうと思った。

ないないさんが、いつも使っていたコップもなくなったのでと言いながらコーヒーをお椀のようなものに入れてくれた。少しこぼしてしまったのは寒さではなく、まだ目の焦点が定まっていないからだろう。コップを持つ手も頼りない。

「ほんとにほんとに、こんな狭いところで」こんなときでも気遣いを忘れないところがないないさんらしい。

「横になって寝た方がいいですよ。お疲れのようだ」

「いえいえ、ご心配なく。それよりもそれよりも、今はオルターさんがいてくれたほうが.....ありがたいです」

何かに怯えているようにも見える。向こうで怖い思いでもしたのだろうか。まだ少し震えている手を両手で包んであげると、にっこり微笑んで、ほんとにほんとにすみませんと手の暖かさを囁みしめているように頭を何度も下げた。

窓の外を見ると雨が少しおさまってきた。秋の雨音は心に染み入る。夏の終わりとともに過ぎ去ったものたちからの惜別の歌のようだ。

気がつくやうに、ないないさんが目を閉じて首をうなだれていた。そのまま横にして、毛布をかけてあげた。きっと今夜はこのまま目を覚ますことはないだろう。明日あらためてここに来て、体調が良さそうならゆっくりと夢の話聞かせてもらおう。

夢のことを想像していると、ないないさんが寝返りを打って、ここはどこなのでしょうと言った。はっきりした寝言だった。何か答えてあげたい気がしたけど、言葉にならなかった。実際答えようもなかった。

ここがどこであれ、わかっているのは、いなくなっていたないないさんがここに戻って来たということだ。みんなどこかに行って、みんなここに戻ってくる。それがウォーターランドというところなのだ。

耳を澄ますと、水滴が水たまりをはじく音が聞こえる。林のほうから鳥の鳴き声も聞こえた。夕立も去ったのだろう。

ドアを開けてみると、赤い満月が雲の切れ間から顔を出していた。振り返るとないないさんが穏やかな寝顔で小さな寝息を立てていた。

第22話 赤色の宴*

***** ノート *****

島もすっかり秋の空気が変わった。自然の移ろいには誰も抗えない。その一部となれたものだけがこの土地に生きることを許される。今日は大きな発見をした。この島にも光る魚がいたのだ。どこから来たのかわからないけど間違いなくここにいる。ミドリ鮫との関係についてははっきりはしない。彼らは同じ世界に生きるもののようにも思える。その世界はこの島のどこかにあるのか、別のどこかなのかもわからない。長い間行方の知れなかった人にも再会できた。その人は自分の記憶が途切れてしまっていることにまだ気づいていない。記憶も時間も幾重にも重なり断裂しながら繰り返す。

***** ノート *****

リブロールに戻ったけれど誰もいなかったので、灯台に来て引き出しの底板の下に隠しておいた新しい方のノートに今日のことを書き残しておいた。

ないないさんのところからの帰り道は赤い満月が暗い夜道を照らした。景色がまるで赤いフィルターをかけた写真のようになる。世界が動くときには必ず赤色満月が出ている。これは偶然ではないだろう。雨が降った前後の赤い満月の夜には何か起きる。ジギ婆さんのところからずっと同じなのだ。

もしかしてと思って窓から外を見ると、灯台の明かりが照らす海に大きな鮫が見えた。じっとこちらを見ている。あの目は何を語っているのか。帰りの時を知らせているのだろうか。わからない.....もしかするとないないさんはあの鮫といっしょに帰ってきたのかもしれない。

何か足にぶつかったと思ったら、インクがくるぶしのあたりに身体を擦り寄せていた。彼らはいつも手が届きそうでいて、手を伸ばすとすりりとなくなってしまう。

灯台の下にボートがあるかもしれないと思い、急いで岩場を下りてみたけれど、そこには波が打ち寄せているだけだった。見送りのときにスロウさんがボートを使ったことを思い出した。ボート乗り場に戻したのかもしれない。すぐに鮫のいた場所に目を戻したけれど、そこにはピンク色に浮き上がる大きな波が打ち寄せるだけだった。

振り返ると赤い月がとろけて落ちてしまいそうなほどに艶かしく輝いていた。まるで飴玉のように幻想的な色だった。まわりを取り巻く星たちも月の美しさを褒めそやすかのように、ひとつひとつがいつもの倍ぐらいの光を放ち赤色の祝宴を祝っている。赤の世界に極上の宝石が燦然と輝く時間は短い。突然そのときはやってきて、まるでガラス細工が砕け落ちるように赤の世界は終焉を迎える。

しばらく諦めきれずに海を見ていたけれど、二度と鯨をみつけることはなかった。鯨の現れる日に誰かが戻って、誰かが消える。今日はないないさんが現れた。別の誰かが消えたのかもしれないと思った。

インクが大きなあくびをした。ドットトラウトがいようがいまいが、ミドリ鯨が現れようが消えようが、なんの問題もないと言っているようだ。何色の灯台だろうが気にする様子もない。それが彼の住む世界なのだから。

「インク、おまえはどこから来たのかな」

首のあたりをさすってやると、いつもはつけてない赤いリボンが結ばれているのに気がついた。

「これはかわいいリボンをつけてもらったね」

きれいに結び直してやると、野良猫とは思えない赤色の宴にふさわしい装いをした紳士に見えてきた。

「今夜はおめかしして月の宴にお出かけかな」

上目遣いでこちらを見る目が、今日は特別の日だから盛装でいないとだめだよと言っているような気がした。

次の満月の前には雨が降るだろうか。雨が降ればそのときこそ出迎えのミドリ鯨が現れるかもしれない。

第23話 消えなれ

雨上がりの日にはいつも大きな虹がでる。それもきれいに半円を描かず、方向を見失ったように蛇行して天へと伸びていく虹だ。オーロラのカーテンのようではなく、地表近くをまるで大きな眼鏡橋のようにうねり、気象条件によっては立ち上がるように上にねじれて昇る。世にも稀なる自然のつくる芸術だ。この変わった虹もこの土地ならではの風物詩と言っていいだろう。

島のあちらこちらに朝の支度をする煙が見える。長時間発酵のパンを食べて以来、エモカさんのところの煙を見るのが日課になっている。食べる食べないに関わらず、パンを焼いている煙を見るのは幸せな気分になるから不思議だ。

リブロールの煙突からも薄い煙が出ていた。ミリルさんが掃除用にお湯でも湧かしているのだろう。家々から立ち昇る朝の白煙は、一日の始まりをみんなであわせているようで楽しいひとときだ。

この灯台にも古いストーブがひとつある。これが冬になると出番を待ちかねたように活躍する。鉄でできた四角いだけの無骨なストーブだけれど、ミドリ鮫漁のころの昔から灯台守の孤高の生活をずっと支えきた頼もしい友だ。その気になればオープンとしても使えるようだけれど、これといった料理もしないので残念ながらその機会は少ない。古いホーローのヤカンが天板でお湯を温めている。

ないないさんはもう起きたらどうか。まずはミリルさんに薬草のお願いをしないといけない。もともとないないさんと親しくしていたのはミリルさんだから、きっと戻って来たと聞けば大喜びするにちがいない。ミリルさんお手製の美味しいスープでも届けてあげればきっとすぐに元気になる。

ないないさんの家の方を見てみた。まだ煙があがってないところをみるとすっかり寝込んでいるのだろう。体調をおかしくすることはしないにしても、移動の疲れを取るにはそれなりの時間がかかる。

日課にしている灯台の朝の掃除を終えてリブロールに行くと、ちょうどミリルさんが店内に吹き込んだ落ち葉を掃き出しているところだった。秋の枯れ葉はリブロールを埋め尽くしてしまうほど多く、これも自然を楽しむ流儀だとは思うもの、掃除する人のことを考えるとやはり大変だ。

「ミリルさん、いいニュースですよ」

「え、光る魚釣れてしまいました？ 大きかったんですか」

「あ、いや、そっちではなく……もっとびっくりするニュースが」

「えーなんですか。もったいぶらないで教えてください」

「あのないないさんが戻ってきましたよ」

「え、今どこに？」

もうすぐにでも会いに走り出して行きそうな勢いだったので、事情を説明して準備ができたらいっしょに行くということでなんとかはやる気持ちをなだめた。

「何も変わりはありませんか」鍋の用意をしながらミリルさんが聞くので、「外見には変わりはありませんね。というよりいなくなったときのままでしたよ」と見たままに答えた。

「ここに来られたときと同じということを言われてます？」

「もしかしたらそうかもしれない」

「同じ服のままということですか？まさか誰も気がつかないところで意識不明のまま数ヶ月たったと言われてないですよ」

「うーん、そんな気がしないでも……」

「オルターさんたらまた変なことを。きっと内緒で遊んでたんですよ」

ミリルさんに私の言っていることの真意がわかるはずもない。それはいつかないないさんの口から説明される日を待つしかないのかもしれない。

「ちょうど新鮮な牡蠣が手に入ったので、これでスープでもつくりましょうか」

「ああそれはいい。あの牡蠣があれば薬草もいらないかもしれない」

誰が養殖したわけでもなく、牡蠣は島の周辺の岩場に自然のままに繁殖している。緑豊かな島の滋養をたっぷり取り込んで、これから旬になる牡蠣もこの島の風物だろう。インクも実はこの牡蠣が好きでこの島に住み着いたのかもしれない。

しばらく薬草を入れた鍋の煮えるのを見ていたミリルさんが、突然思い立ったように「やっぱ

りないないさんのところに行ってきます」と言うなり一人戸口の方に向かって歩きだした。どうしても会いたい気持ちを抑えられなかったようだ。

「料理もあるし、こちらに来てもらいましょうね。ちょっとお鍋を見ていてください」と振り返ってひとこと言うと楽しそうに走って行ってしまった。

ミリルさんはほんとうにないないさんのことを大切な友達と思っているのだろう。居ても立っても居られない気持ちもわからなくもない。ないないさんのような遠慮がちな人を見るとミリルさんのお世話魂が黙っていられなくなるのだ。

薬草を煮詰める鍋の水がなくなってきたところにミリルさんが戻ってきた。

「もう、起きてましたか」

「オルターさん、ないないさんとはどこで会いました？」

「あれ、何も言ってなかったですか？」

「ないないさん、どこに行ってもいないんですけど」

「しまった……」

また、何も聞けないままに行方知れずになってしまったかもしれない。

第24話 漂流するヨット

結局この日はみんなでないないさんを探して回ることになった。考えられる限りのところを当たって、出会った人にはだれかれ構わず聞いた。それでもないないさんの消息はまったくつかめず、また私の夢だったのではないかという疑念だけがみんなの中に残った。だれも口に出しては言わないものの、こちらを見る目を見ればわかる。

ちょっと気まずい雰囲気になってしまったので、言い訳しても仕方ないと思い、気分を変えるために思いつきで次に出す新聞の話をしてみた。ないないさんがまた別の世界に行ったのであれば、すぐに帰って来ることはないだろうというあきらめに似た気持ちもあった。一方で、そうしているうちに、またふらりとないないさんが現れるかもしれないという淡い期待もあったかもしれない。

ないないさんのことは気になるものの、それを新聞に書くのはさすがに気が引けた。今一番気になることではあるけど、人が突然消えてしまうのではいくらなんでもいい印象は持たれないだろう。かといって、幻の光る魚というのも、書くなら釣れてからの話であってまだ記事にするには早い。

結局、ミリルさんの意見もあって、キャンドール灯台のことを紹介するのが一番いいということになった。ノーキョさんのロウソクもできたことだし、船長も船いっぱい持ち帰ると言うに違いない。ハロウさんたちの朝市に並ぶのが目に浮かぶようだ。この島に定期的に来て、水の補給以外に船長の収入につながることもないだろうから、島の名産品として持ち帰ってもらうのも悪い話ではない。

しかしよくよく考えてみると、ここで作った新聞やロウソクは現実世界に届くかどうかの方が気になる。意識が覚めて出島に戻った後に、はたしてこの新聞を手にするのできるのだろうか。あくまでもこちらの意識世界の話しであって、現実世界のほうには届かないようにも思える。もし、向こうで手にするのができたら.....何がどうなっているのか.....それはまたそのときになってみないとわからない。今は余計なことは考えないことにしよう。

久しぶりに書き始めると、書きたいことがたくさんあって、短い文章にまとめようとするとなかなか思うようにはいかない。ロウソクのことをどう説明するかも意外にむずかしい。

まだ実際の使い心地を試してないことに気づいて、試しに火を灯してみた。思ったよりも炎が大きい。その分早くなくなってしまうのではないかと思ったけれども、これがなかなか短くならない。シロノキの蠟はとても長持ちするいいロウソクになるのかもしれない。よくよく見てみると、溶けて流れ落ちる蠟もほとんどないし煙もでない。普通のロウソクよりも蠟の燃焼効率がいいのだろうか。もしかすると、芯の素材もいろいろ考えられているのかもしれない。風が吹いても消えそうにないから、なかなか実用性があるものに仕上がっているようだ。

長持ちロウソクだということをノーキョさんに教えてあげるときっと喜ぶだろう。でも、もともとそういうロウソクにしたんですよと言われるかもしれない。ノーキョさんのことだからいろ

いろいろ実験してこの蠟にしたのだろう。何も考えてないのはこちらだけという話になってしまいそうだ。

「長いと言えばエモカさんの長時間発酵のパンも長いですね」とミリルさんが言った。

言われてみればあの酵母も発酵に時間がかかる。島の時間は壊れた時計と同じですべてが長い。すべての時間が長い島という話は、メーンランドの人たちにも興味をもたれるかもしれない。時間に追われて生活している人たちにとっては夢のような話だろう。

新聞をウォーターランドの長持ちロウソクという内容で書き終えて、また消えてしまったないさんの行方のことを話していると、コピが息を切らして飛び込んで来た。

「じっじ、船が来た！」

「あれ、船長？　今回はいつもよりちょっと早いな？」

「ううん、小さなお船」

「え？　船長の船じゃなくて？」

島に船が来るなんて何年ぶりのことだろう。この前来たのがスロウさんだったから、かなり前の話になる。スロウさんは手製の船で海上暮らしをしていて嵐の日にたまたまこの島に流れ着いてしまったという話だった。島に来る人は偶然で来るだけで、この島にいつでも来られる人は船長以外にはいないと言ってもいい。

「あ、もしかしてないないさんかもしれないですよ」とミリルさんが言うと、「こっちこっち」と言いながらコピが灯台の方に向かって駆け出した。

ミリルさんと、ないないさんだといいいねと話しながら後を追った。

先に着いたコピが「あそこ、あそこ」と大きな声あげた。

「あ、ほんとだ。あれヨットじゃないですか」ミリルさんはすぐに見つけて言った。年寄りの目には海面のきらめきばかりがまぶしくてなかなかわからない。

波のきらめきでよく見えないので、展望のデッキからなら見えるかもしれないと思い上がってみることにした。

「オルターさんわかります？ この方向ですよ」ミリルさんが下で指差してくれた。

言われてみるとヨットなのかなあと思うぐらいではっきりしない。

「望遠鏡！」と言うと、コピはリブロールにおいてある単眼鏡を取りに走って行った。

灯台の上からは島が一望でき、コピの走っていく姿がジオラマのように見える。ここからの景色は島民の生活がひと目でわかり、まるで島の物語を時間に合わせて読んでいるように思える。それはこの島の生活そのものが小説なんじゃないかと思う瞬間でもある。本を読む人なら一度は経験したことがある、自分自身が物語の中にはいってしまうような感覚に近いかもしれない。

そんなことを考えていると、もし今いるところが意識世界なのだとしたら、小説の中に入り込むのと同じことを実際に体験しているのかもしれないと思った。

久しぶりに展望デッキに上がってみると、昨日の雨もあってレンズはひどく汚れてくすんでいた。灯台としての用をなしていないように見えた。よく見えない船の話はそっちのけで、すっかり忘れていたレンズ磨きのほうが気にかかってしまった。

「ミリルさん、掃除道具お願いしていい？」ロープのついたバケツを下に下ろして頼んだ。

「今、やります？」

「そうそう、だってあれがヨットならきれいにしないと」

ミリルさんに掃除道具をまとめてあげてもらった。

「オルターさん、やっぱりあれはヨットですよ。ないないさん、どこでヨットなんか」

もし、ないないさんであれば、なおさら掃除を急がないといけない。なにかの手違いで沖に流されてしまったのかもしれない。磨く手のにも自然と力が入る。すぐにミリルさんも上がって来ていっしょに手伝ってくれた。

「じっじ」下からコピの声が聞こえた。コピは子供なので急な階段は登ってこない。掃除の続きをミリルさんをお願いして下に降りた。

「どれどれ……」

心の中でないないさんの元気な顔が見えることを期待していた。もし、ないないさんでないなら、正直ミドリ鮫でもドットトラウトでもよかったかもしれない。とにかく現実世界と繋がりそうなものならなんでもよかった。

「帆が見えるのかな……」

遠くを見ると視界が狭くなるのでなかなかみつけるのがむずかしい。コピが前に立って方向を教えてくれるけど、思うように単眼鏡で覗く円の中に入ってくれない。

「水平線のちかくを見るといいかもしれないですよ」上でレンズを磨いているミリルさんの声が聞こえた。

水平線に合わせて左右になめるように見ていると何度目かにやっと視界に入った。

「あー、あれは……たしかにヨットかもしれない」

「え、ヨットですよ」

「ヨットか……人が見えないから大きさがよくわからないけど帆はあがってるからヨットだよ」

「じっじ、お船見えてよかった！」コピがうれしそうに顔を左右に動かしている。

「オルターさん、あれ誰が見てもヨットですよ」レンズを磨いているミリルさんは早く戻って手伝ってほしいとでも言いたげだ。

「どのぐらいの距離があるのかな。こっちに向かっているかどうかだな……」

昔、遠くに見えた船が結局は島に来ないままに何度も見送ったのを思い出した。とにかくこの島は見えてから来るまでにとんでもなく時間がかかる。それも今だに理由はわからないまま。船長の船に乗った今でもわからないのだからどうにもならない。やっと見えたヨットがこの島を目指しているとしても、まだしばらく島に着くことはないだろう。

「オルターさん、掃除終わっちゃいますよ。これだけは人にまかせられないんじゃないかな」

そうだった。レンズ磨きは灯台を守る灯台守だけの仕事だった。ミリルさんが掃除をしたので

は灯台を守っているプライドもなにもあったものじゃない。

「最後の仕上げはやるから、そこまででいいですよ」

「えっと、もう終わりますけど……」

灯火台の油差しも終って、一向に近づく気配もないヨットのほうを3人でしばらく眺めていた。

「オルターさん、あのヨットぜんぜん人が見えないですけど変じゃないですか」単眼鏡を覗いていたミリルさんが言った。

「中で寝てるのかな」

「そうであればいいですけど、そういう時は帆を出しておくんですか？」

「人のみえないヨット」コピがミリルさんの言ったことを復唱するように言った。

「なんだか幽霊船みたい」

それがあのタークさんのヨットだと気づいたのは翌日だった。

第25話 救護に

翌日もからりと晴れた晴天だった。単眼鏡を覗くとヨットはほとんど同じ場所に見えた。いつもと同じで、いつまで立ってもこのシムに近づく気配はない。もしかしたら遠ざかっているのかもしれないとさえ思ってしまう。

凸レンズと乙レンズの関係はよくわからないけど、島のまわりを何かそういうものが囲っているのではないかと考えたこともある。今度、船長がきた時にレンズの本をなにか適当に探してきてもらうことにしよう。うまくすると水の本のようにいろいろな疑問が晴れるかもしれない。

「ほんとうに漂流してるんですか？」めずらしく朝から資料整理に来ていたノーキョさんが言った。

「まちがいないですよ。人が見えないのは倒れているからですよ」ミリルさんがこちらに同意を求めるように言った。

「ヨットだけどこから流れて来たというのではないのかなあ？」

「帆をあげたままで漂流するヨットなんてないでしょうね」自分で言いながら、やはりあれはタークさんが遭難しているんだという思いを強くした。

「あやまってヨットから落ちたんでしょうか」

ミリルさんの言うことも考えられなくないが、あれがタークさんのヨットだとするならヨットの中で倒れていると思ったほうがつじつまが合う。

「ちょっと近くまでボートを出してみましようか」ノーキョさんが開いていた本を閉じて言った。

船長の船も肉眼で見えてから船がつくまでには時間がかかる。もし、それと同じであればとても手漕ぎのボートで行ける距離ではないような気がした。

「まあ、見えている距離感と実際の距離はずいぶん違うんですけどね」ノーキョさんはこちらの気持ちを察したように言葉を続けた。

「それでも行きます？」

「もし、人が乗っていたらほっとけないですし、とにかく行けるところまで」

「あまり沖に出ると潮の流れも早いでしょうから無理しないほうがよくないですか」ミリルさんもさすがに心配なようだ。

「あ、そんなに無理するつもりはないですから、だいじょうぶですよ」いつもと同じ笑顔にちょっと安心した。

その後すぐに簡単な身支度をして、いっしょに行くというのを聞かないでボートに乗り込むと行ってしまった。ノーキョさんは、ちょっとした荷物もあるので島のボートだと二人だと無理だというようなことを言った。なにか考えがあるのかもしれない。

「ノーキョさん、ロープや非常食まで持って、あれは軽装備っていうんですか？」

「海のごとはよくわからないけど、陸とは違うからね」

現実世界で起こったことは、タークさんは無事この島にたどり着いたのちに体力を回復してスラントンケープまで元気にたどり着いた。そうだとすれば何も心配することはないのかもしれない。もしノーキョさんが連れて帰れなくても、潮に流されて島に打ち寄せられるのだろう。

「こういうときにスロウさんがいればよかったかも」ミリルさんがポツリとつぶやいた。

「ほんとですよ。スロウさんならエンジン付きのボートだからすぐに助けられた……」

そうか、現実世界ではノーキョさんでなくスロウさんが助けに行ったんだ。だとすると……。

「ミリルさん、ノーキョさんを追いかけてみましょう」

「え？」

理由も言わないでボートの向かった方向にある灯台を目指して走った。途中コピに会って、三人で灯台のある高台に向かった。

「ボート、ボート！」海の上に浮かぶノーキョさんを見つけたコピが叫んだ。

「ノーキョさーん！ 危ないから気をつけてくださいよー！」声の限り叫んだ。横でミリルさんが驚いた顔をしてコピと顔を見合わせている。

「あ、聞こえたみたいですね。手を降ってますよ」

「ボートー！」コピもいっしょになって叫んでいる。

ノーキョさんの向かう先には小さな点のように見えるヨットがある。

こちらから見える海の先は虫眼鏡のレンズを通して見ているようなもので、すべて拡大されて見える。それでも、点ほどにしか見えないのだから、丸1日漕いでも辿り着かない可能性だってある。そう考えると、ノーキョさんが軽装備と言ったのも間違いではなかったかもしれない。もっと重装備をした方がいいというべきだったと後悔の念で頭がいっぱいになった。

結局、夜遅くまで待っていてもノーキョさんは帰ってこなかった。灯台のレンズを磨いたからきっと島を見失うことはないですよとミリルさんが不安な気持ちを振り払うように言った。明日の朝にはきっと何事もなかったように元気な顔で帰ってくると自分に言い聞かせた。

幸い夕方になっても雲一つない晴天だった。満天の星たちがノーキョさんを助けてくれるだろう。この島を見失うことはないはずだ。それだけが救いだった。

第26話 もぐらの話

それからしばらくの間も、いつになく凪いだ静かな日が続いた。ノーキョさんのボートはいつまでも視界から消えることなく、島とヨットを結ぶ線の上にじっと止まったままで、まるで静止画のようだった。ノーキョさんの姿が見えている限りは命に別状はないということだと話ながらヨットとボートが重なるのを待った。

トラピさんとナミナさんがメインランドに興行に行って、次にスロウさんがメインランドに渡って、ないないさんがまた行方不明になって、今度はノーキョさんが島から出て行ってしまった。ユーヨアさんもこのところ見かけない。誰かが現れないまま、次々に島から人がいなくなるのはなんとも寂しい心持ちになる。それが秋の訪れに重なるからなおさらだ。

「オルターさん、ロウソクをたくさん並べてみませんか？」突然ミリルさんが言った。ノーキョさんが島を見失わないようにという思いから言っているということにしばらく気がつかなかった。

「でも、灯台もあるし……」

「そうですよね」と言うのと力なく肩を落とした。

リブロールにじっとしていてもなにもできることもないので、ネモネさんの温泉にでも行ってみてはどうかと薦めると、そうですよねと答えると放心したような足取りでリブロールを出て行った。ミリルさんもみんながいなくなっていくのが寂しいのだろう。

一人店にいても来る人もなさそうなので、本を持ってエバンヌの近くにある森の紅葉でも見に行くことにした。

森にはノルシーさんが切り株と倒木をつかってつくったベンチが置いてある。雨ざらしなので苔が生して一見ベンチに見えないけど、座るところだけはみんなのおかげでいつもつるつるに磨かれている。一番磨いているのは休憩時間に座っているノルシーさんだろう。もともとノルシーさんはこの小さな雑木林の美しさに惹かれてエバンヌを作ったぐらいだからこの場所に対する思い入れも人一倍だ。

ここの池はわき水なので、その流れがチャルド川となって海に流れ込む。島の周辺は汽水域だけどこのわき水はほぼ真水に近い。それを知っているいろいろな生き物が水を求めてここに集う。

ベンチの横に目をやると島モグラの穴があった。島モグラも飲み水をもらいに来ているのだろうか。彼らは用心深い性質なので人の歩く気配があると顔も見せない。知らない人は枯れ葉や草

に隠れた5センチほどの小さな穴は見逃してしまう。

ここは島モグラとの根比べと思って、息をひそめてじっと見ていると、土を掻き出しているのか、ときどき穴から小さな土の固まりが投げ出される。30分ぐらいたったとき、仕事に熱中するあまり油断してしまったのか、穴からときどきしっぽを見せるようになった。その後一度穴に入ってしまったと思ったら、今度はひょっこりと顔をだして鼻を拭うような仕草をした。

すぐにこちらに気づいて、「あっと、みつかった」と言った。というかそう言ったような気がした。

「だいじょうぶだよ。つかまえたりしないから」と言うと、「人間は信じるなって言い伝えもあるしな」と言いながら疑り深そうな目をしてこちらを見た。

「悪い人間もいるかもしれないけど、私は違うよ。この島は人間だけの物ではないし」と言うと、にわかには信じられない話だとでも言いたげに「そういうことにしておこう」と答えた。そして、すぐにまたもどもぞと方向を変えて穴の中に消えていった。

もぐらがしゃべるわけではないと思いながらも、犬と話せるという人もいるし、仮に話せないにしても何か通じることもあるのかもしれないと思った。

また出てこないかと穴を見ていると、その横に人が立っているのに気がついた。顔をあげるとすぐ目の前にネモネさんがいた。

「オルターさん、何をされているんですか？」

「あ、動かないで。そこに島モグラが……」

「さっき顔を出しましたね。かわいいモグちゃん」

まったく気がつかなかったけど、ネモネさんもいっしょに見ていたようだ。横でカバのミームが興味なしという顔で大きなあくびをしている。これだけの観衆がいる中で島モグラが出て来たのはちょっと驚きだった。よほど穴掘りに夢中になっていたのだろう。冬支度でもしているのだろうか。

「島モグラを見たのははじめてですか？」

「何度かありますけど、物音を立てるとすぐに逃げてしまいますよね。モグラって目が見えないと言いますが音には敏感みたいで」

ネモネさんも島モグラの用心深さは知っているようだ。短い滞在期間に水をさがしながら島のいろいろなものを見てきたのだろう。

「そう言いますね。だとしたら、こちらを見るなんてこと自体があり得ないのか……」

「その分、耳とか鼻がいいんじゃないでしょうか？」

「髭がアンテナになっていたりするのかな。空気の振動でわかるとか」

「それもあるかもしれないですよ。音だって空気の振動ですものね」 そういいながらミームの頭をよしよししている。ミームは鼻で水を嗅ぎ分けるのだろうか。こちらに見られているのがわかったのか、ふんと勢いよく鼻息を鳴らした。

「さっきね、人間は信用できないって言うから……」

「もうモグちゃんと友達になってしまわれたんですね。さすがオルターさん」と言いながらネモネさんがにっこりとほほえんだ。

「さすがというか、向こうが勝手に話ただけなんですけどね……ミームとも話したりします？」

「いつも話していますよ。この子の気持ちはなんでもわかります。ご機嫌がいいとか悪いとか。こう見えてもなかなかわがままなんですよ。ね、ミーム」

「話していてもまわりには聞こえないだけなんだろうね」

「聞こえるかどうかはその人次第なんでしょうね。仲良くなればいろんな動物たちとも話せるな気がします」

すると、行ってしまったとばかり思っていた島モグラが穴からぴよこんと顔をのぞかせた。

「聞こうと思えば聞こえるのさ」とひとこと言うと、こちらを恐れる様子もなく、またヒゲの泥を拭いはじめた。終るとすぐにでんぐり返しをして、ばたばたと手足を動かしながら忙しそうに穴の中に戻って行った。

「大きいから働き者のお父さんモグラですね。何か言ってましたか」とネモネさんが楽しそうに聞くので、島モグラが言ったとおりのことを話した。

「モグラのお父さんもなかなか哲学的なことを言いますね」

哲学的という意味もよくわからなかったけれど、そもそもモグラに教えられることがあるのだろうか。見ると、ネモネさんは地面にしゃがみ、ミームと顔の高さを合わせて楽しそうに話しはじめた。ミームのしっぽがぶるぶる動いているのをはじめて見た。

この島にいと、動物だけでなく、草木の歌声もよく聞こえてくる。幻聴の類ではなく、きっと自然に近づけば近づくほど彼らの声が聞こえてくるのだ。耳を傾けさえすれば、すべての生き物の言葉は心に届くということなのだろう。

「オルターさん、ミリルさんに聞きましたよ」

「あ、ヨットのことですか」

「ノーキョさんは一人で行ってしまったんですか」

「そうそう、モグラと話している場合じゃないですよ。灯台のところからはずっと見えているんですけど」

自分で言いながら蜃気楼のような話だなと思った。ノイヤール湖で陽炎のように見えたコピの姿も思い出した。モグラの話といい、地平線の彼方にいつまでも見える船といい、この島とノイヤール湖の自然はほんとうに不自然なことではいっばいだ。

「もしかしてノーキョさんプロペラを持っていました？」

「プロペラ？」ネモネさんが何を言っているのかわからなかった。

「もしかしてスロウさんと作っていたプロペラができたのかなって思ったんですけど」

「それはもしかして、スクリューのこと？」

「あ、そうか、船だとスクリューですね。そうでした」恥ずかしそうに笑った。

ノーキョさんはスクリューを積み込んでいたとすると、モーターかエンジンのようなものでも作ったのだろうか。それを使って助けようということなのだろうか。

第27話 おいしい世界 **

ネモネもさんもノーキョさんのことが心配だというので、二人で灯台に戻ることにした。

「あんな遠くに……」ネモネさんがとても信じられないとでもいうように言った。

「ノーキョさんって、海には出ない人だと思ってたからびっくりですよ。人一倍、正義感が強いとか、やさしいひとだから、だまって見ていられなかったんでしょうね。この島にはいなくてはならない人だし、なんとしても戻って来てくれないとね」

なんだか変なことを言ってしまった。戻らないわけないはずなのに。

「きっとあのスクリューが役立ちますよ」ネモネさんがノーキョさんの力を信じているというように言った。

ロウソクをつくりにノーキョさんのところを訪ねたときに、スクリューのようなものがあったかどうか記憶をたどってみたけれど、それらしいものが思い出せない。

スクリューは動力がないと回らないから、それを持って行くというのもイメージしにくい。手回しスクリューのようなものでも発明したのかと考えてみたけど、想像すればするほどオールで漕いだほうが理にかなっているような気がする。そうすると、ノーキョさんは何か動力になるものを考えついたということだろうか。

動力、動力……水力、火力、風力……いずれにしても電気を起さないと何もはじまらない。エンジンならガソリンとかオイルがなければただの鉄の塊でしかない。エンジンを動かす燃料が島で手にはいるとは考えにくいので、やはり水力や風力で電気を起こす方法でも考えついたのだろうか。それなら理科の先生のノーキョさんであればできてしまいそうな気がする。

灯台の電気はいつの頃からか水力を使った小さな機械で電気を起こすようになっている。それほど大きな機械でもないのに、一晩中照らし続けられるのが不思議なぐらいだけれど、波はどんな時も止まることはないから、有り余るほどの電力をつくれるということなのかもしれない。きっと海がある限り発電し続けるのだろう。

そのときふと思いついたのが、どこかにいるはずのドットトラウトがたくさん集まったら、彼らから電気をもらうことはできないのだろうかということ。電気うなぎだって本当に電気を出しているらしいから、それができればちょっと楽しいことになりそうだ。ただそうするとせっかくこの島ならではの土産としてつくったローソクが喜ばれなくなるかもしれない。なかなかすべてうまくというわけにはいかないものだ。

「そうだ、おいしい水なんですけど、どうも南のほうの海から湧き出ているようなんですよ」海

をじっと見ていたネモネさんが唐突に言った。

「半島の森のほうということ」

「たぶん。それも海の中なんじゃないかって話をしていたんです」

「へえ、それは考えてもみなかったなあ。海の中で湧き出ているとしたら、相当薄まっているということですよ」自分で言いながらばかなことを言っていると思った。

「どうなのでしょう。薄まっているのか、海全部がおいしい水になっているのか」

ネモネさんが言うように海までおいしい水なら、まるで海そのものがわき出しているようだと思った。この島が、いやこの世界がおいしい水の中に浮かんでいるということだ。おいしい水は楽しくなる水、まるで楽園そのもののような話に聞こえる。そんな水に浮かんでいるボートであれば命を落とすようなことはないと思えてくる。ネモネさんはそれを言いたかったとでも言うように穏やかな顔で静かに海を見ている。

***** ノート *****

このノートを見るかもしれないあなたにお願いしたいことがあります。この島には中世の昔から光る魚が住んでいて、彼らがまるで光り輝く銀河のように世界を照らします。一度でも目にすればそのあまりの美しさに目を奪われることでしょう。もし、この島と時空を超えてつながるオールドリアヌを訪ねる機会があったなら、ノイヤールという湖を訪ねてみてください。そこには信じられないぐらいの数の光る魚がいて、湖底から湧き上がるように湖面を目指します。お願いはそのドットトラウトからなんらかの力をもらうことはできないかということ。もしそれができるなら、この島はドットトラウトの光を通じて未知の自然世界とひとつになれるような気がします。そしてこの島とオールドリアヌもまたひとつになれそうに思えるのです。この世界はきっとおいしい水に浮かんでいて、その水をドットトラウトが光とともにすべての世界に運んで行くのです。オールドリアヌとウォーターランドは遠くて近い関係です。目を閉じさえすればいつでもこのウォーターランドに来ることはできるのです。そして夢から目覚めた時にはドットトラウトの眩しい光に包まれていることでしょう。

***** ノート *****

ネモネさんが帰ったあと、将来見るだろうだれかに向けてノートを書いていた。こんなことでもノートに書いていると、不思議と気持ちが落ち着いてくる。現実世界でも意識世界でも、オー

ルドリアヌでもウォーターランドでも、そんなことはどうでもよくなってしまふ。それぞれの世界が繋がっているということに意識が向かうからだろう。いや、もっとたくさんの世界とつながっているのかもしれない。

そして、それがドットトラウトのつくる光の連なりであったとしたらどんなに楽しいだろう。それらの世界をつないでいるのがあの六界錐だと思えば、ジノ婆さんの言っていたこともなんとなくつじつまが合うようにも思える。あの虹のように輝く石もほんとうはそこにあったものなのかもしれない。

第28話 自分の手紙

みんなの心配をよそに、その翌日も、そのさらに翌日も、3日目も、そして一週間後もノーキョさんのボートとヨットは重なることはなかった。窓から見えるボートとヨットはまるで景色に取り込まれてしまったように、位置も変えずに同じところに止まり続けた。

5日めをすぎたころからは何も手に着かなくなっていて、ぼんやりと窓の外を見ていることが多くなった。今朝も一度はリブロールに行ったものの、どうしてもヨットのことが頭からはなれず、ミリルさんに頼んで、すぐ灯台に戻って来てしまった。

いくらながめても海に映る雲が流れるばかりで、広い海に消える物も現れる物も何もなかった。船長が来るのもまだしばらく日にちがある。

流れる雲をぼんやりと見ているとき、赤い鳥が北の方から飛んで来て青空を横切った。それは赤い服を着せられたハトポステルの鳩だった。到着を知らせるように灯台の周囲を何回か旋回したあと中央広場のほうに向かって方向を変えた。誰かから手紙が届いたのだ。

ほどなくコピが手紙が来たと言いながらいつものように駆け込んで来た。

「ハトの手紙来た！」よほど急いだのか、いつになく息を切らしている。

「コピよくわかったね」

「ハトが呼んでくれた」

「そうか、コピには聞こえるんだね」と言うと、うれしそうにうんうんと首を振っている。

この前、島モグラの声が聞こえたように、きっとコピの耳にはいろんな動物の声が聞こえているのだろう。いつの頃からかコピが島に詳しいのはそのせいではないかと思うようになっていた。

「どれどれ」眼鏡をかけて、丸まっているレターロールを広げてみた。

そこにはノートの主がノートを買った店を見つけたと書かれていた。予想していた通りだった。それは間違いなく自分で書いた手紙だった。

しばらくしてミリルさんも灯台にやってきた。

「オルターさん、見られました？ スロウさん大発見ですね」

「ええ、驚きました」一応こちらの世界に話をあわせた。というより手紙が来たことで、また自分の拠り所がどこなのかわからなくなっていたから、ほかに言えることを思いつかなかった。

「急にまたノートが気になって」

ミリルさんはスロウさんが書いたと思い込んでいる。そのほうがまだ救われる。事の次第をわかっている自分には、今頃この手紙が届くことの不思議さを感じずにはいられないし、時間と空間のねじれにただただ啞然とするばかりだ。現実と意識世界の境界を超えて来る手紙が今手元にあることに目眩すら覚える。

ミリルさんが早速引き出しからノート氏の書いたノートの写しを出した。底板の下にあるもうひとつのノートに気がつかないかちょっと冷や冷やした。あれは、この世界の人がまだ見てはいけないものだ。現実世界の人でないとまたこちらの精神を疑われることになりかねない。

「これがそんな昔のノートだったんですね」ミリルさんもいつになく熱心にノートを見ている。

「でも、全部写しだから、現物ではないですよ。ぼろぼろの表紙だけは当時のもののようですが」

「どうして写しだってわかるんですか？」

「あ、自分で書き直したのも多いし、譲ってくれた人も書き直したと言ったと聞きました」

「そうなんですか。インクの色は似ているのに、ちょっと残念」そう言いながらも一枚、一枚確かめるようにめくっている。

「昔のものには透かしが入っていたそうですね」ハロウさんに教えてもらったことを思い出して説明した。この意識世界に思いがけず来てしまったおかげで、透かしのこともすっかりわすれてしまっていた。前に現物のノートではないと一度諦めていたこともあったけれど、そもそもこの意識世界にあるノートが現実世界のノートと同じかどうかすら疑わしいという気持だったかもしれない。

「透かしってなあに」コピが不思議そうに聞いた。

「紙を日にかざすと模様が隠れててね。ちょっとしたあぶり出しのように見えるんだよ」

「ノーキョさんの紙には入ってないですね」ミリルさんが言った。

「手間がかかる作業になるんだろうね」

そう言いながら、二人は透かしの入った紙がないか時間にまかせてさがしはじめた。

「一枚でもあればいいけどね」正直、調べても無駄になるだろうと思った。

そのあとは熱心にノートを見続けるコピを横に、話はノーキョさんのことに戻った。

「もう1週間になりますよね」ミリルさんが心配そうな顔をした。

今更この3人でノーキョさんを助けに行くこともできない。

「食料が足りなくなっていればいいけど」

「コピがユリノキの実をたくさんあげた」ノートから目を離さないまま話だけは聞いていたようだ。

それを聞いて少し安心した。ユリノキの実であれば、ノート氏も冬場の貴重な食料にしていたものだから日持ちもいいし非常食としては打ってつけだろう。あれを持っているならひとまず安心だ。飲み水のほうもスロウさんがアミメハスの濾過器を持つと言っていたから心配はない。あとは、天候が崩れないことを祈るだけだ。

ヨットにたどりつきさえすれば、帰りはなんとでもなるだろう。手漕ぎのボートよりもヨットのほうがはるかにましなはずだ。たどりつきさえすればどうにかなると思いたい。それにネモネさんの言うスクリュウのようなものがあるならきっとだいじょうぶだ。

一ヶ月がたつのは早い。もう少しするとまた赤い月の日がやってくる。次に赤い月が出た夜にこの島になにが起きるのだろうか。なにも起きない方がいいのか、起きたほうがいいのか自分でもよくわからなくなってしまう。ヨットのこともおいしい水のことミドリ鮫も光る魚も虹も島モグラもなにもかもがわからない。複数の時空が重なれば重なるほどに時間の整合性が崩れ、結果として自分の居場所がなくなっていくように思えなくもない。

少ししたときに、コピが小さく「あった」と声をあげて1枚の紙を上を差し上げた。それは植物の絵が書いてある1枚だった。

「透かしがあったの？」と言いながらミリルさんが覗き込んだ。

「オルターさん、コピちゃん見つけましたよ」驚いた顔をしてこちらを見た。コピのほうは特別のことにしたという風でもなく、もう次をさがしはじめている。

そこには間違いなくハロウさんの言ったとおりの紋章の透かしが入っていた。それも鯨と魚が円のかたちに絡み合うような文様だったのだ。

第29話 夜の散歩

その夜は、紋章のことが忘れられず、絵柄そのままにドットトラウトとミドリ鮫が頭の中をぐるぐると回り続けた。たまに消えたかと思うと、今度はノーキョさんのことが気にかかる。闇に紛れ込んでいるボートを探そうとすると、月の明かりに意識がとられる。ノーキョさんもあの月をみているかもしれないと思うと、まだつながっているという気持ちでいられる。向こうから灯台の明かりは見えているのだろうか。

月を見ていると今まで気にもしなかった、月が右側から満ち欠けすることにも今更ながら気がついた。もう少しすると欠けた半月が膨らんで満月となる。せめて月が明るいうちに戻って来られることを祈るばかりだ。

灯台から広大な海と無数の星々を眺めると、いつも宇宙のことを考えてしまう。地球の自転と公転が月の満ち欠けや季節をつくり、それらがいつからか暦となって人の生活のサイクルとなってきたと思うと、宇宙の偉大な規則と人間一人との関係はいったいどこまでつながっているのだろうかと余計なことまで考えてしまう。月齢がノーキョさんたちの生還と関係したりすることもあったりするのだろうか。

宇宙が回っていなければ、時間という概念そのものもなかったのかもしれないから何かは関係しているはずだ。しばらく月を眺めていると陰になっている部分がほんの少しずつ少なくなっているように感じる。時間が動いているというのはこういうことなのかもしれない。

そうこうしているうちにまたミドリ鮫とドットトラウトが円を書くように回る紋章に意識が戻る。どうしても知りたいのは、なぜあの紋章の透かしになったのかということだ。当時、ミドリ鮫とドットトラウトは住民にとって何か特別の意味があったのだろうか。円を描いている図柄に宇宙の縮図を見ているような気がしないでもない。円の図柄は無限の周回や完全な均衡などを表しているようにも見える。

夜になると一人でこんなことばかり考えているから、いつまでたっても眠れるはずもない。それこそユイローをたっぷり入れた湯舟にでも浸かって、夢の世界で朝まで心を鎮めていたい気分にもなる。ただ、それがこの世界との関係を一変させてしまうかもしれないことを知ってしまった今は、前の様に気楽に楽しむこともためられるようになってしまった。

考え事をしているうちに、月は夜空に半円を描く時計の針のように回り、気がつくとも半島の真上の一番高いところに見えるようになっていた。灯台から半島を見ると、入り江がちょうどその間になり、月の姿がそのまま海に映し出される。それはあたかも鏡に映ったもうひとつの世界のように見えなくもない。入り江に面したところにリブロールもあり、それは別の世界への入口のようでもある。

ベッドに横になってぼんやりと時間を過ごしていると、またあの漆黒の闇の中に引き込まれてしまいそうな気分になってしまう。なにか気分を変えられる本がないかと思ってい書棚を眺めていたとき、ネモネさんの言っていたおいしい水の話の思い出した。ちょうどいい機会だと思い、おいしい水がわき出しているかもしれないという半島の南のほうまで真夜中の散歩を試みるこ

とにした。誰も知らない深夜になにかが起きているのかもしれないという漠然とした予感もあった。

ランタンを持って、足下を照らして周りの小さな変化に注意を払いながらゆっくりと歩いた。この島で真夜中に明かりを灯しているのはエバンヌぐらいだから新月の夜などは歩くのもままならないほどの暗闇になるのだけれど、幸い今日は満月も近いこともあって、ランタンすら必要ないほどに明るい。

リブロールも月明かりが椅子やテーブルの陰をつくっていて、どこか幻想的なたたずまいを見せている。本棚の本も息をひそめて眠っているふりを装っているように見える。ただ、あれだけの活字と物語を飲込んだ本がほんとうに黙っていられるのだろうかと思ってみたりもする。一見そう見えるだけで、1冊1冊の本は人知れず言葉を紡いでいるのかもしれない。こうして月明かりに照らされるリブロールを見ると、それぞれの本に書かれた物語が夜の数だけ熟成を重ねているように感じられてくるからおもしろい。

真っ暗だとばかり思っていたノーキョさんの店に近づいたときに、窓が淡い緑色に光っているのに気づいた。火の気はないだろうけど、ちょっと心配になったので用心のために中を確認してみることにした。

緑色の光は納屋の奥からのようだった。開けようとしたけど頑丈に鍵がかけられていて開かない。あのおおらかで開放的なノーキョさんにしてはめずらしいことだ。

納屋から漏れ出ているほんの少しの光のお陰でお店全体が蛍を集めたように明るく浮かび上がっている。ローソクをつくりに来たときは気がつかなかったことを考えると、明るいときにはわからないほどのかすかな光なのかもしれない。扉の隙間から覗き込んでみたけれど、明るさのせいでもそこになにかがあるのかがわからない。火なら心配だけど、煙も出ていないようなので、火事の心配をするようなものではないのだろう。ノイヤール湖で見た光は黄金色だったからそれとも違うし、ドットトラウトの輝きとも違う。見たことのない何かがそこにあるのかもしれない。

いつまでも人の家のことを詮索をしても仕方がないので、また誰かに聞いてみることにして納屋を後にした。

食堂も過ぎて半島を見下ろせる場所まで来た時、一瞬あのそら虫が見えたような気がした。火事の前の夜にもこんなことがあった。幻覚も度々あると、目がおかしいのではないかと、また余計なことを考えてしまう。こすってみても、青い光の乱舞は消えない。蜃気楼のようなものかと想像してみたりもするけど、彼らが何を答えてくれるはずもない。

この心霊現象でも見ているのような曖昧な光は、記憶が勝手に映像を作って見せているだけなのだろうか。赤い灯台が白い灯台に重なるのと同じように過去のどこかの時間が透けて見えているのかもしれない。

しばらく見ているうちに暗闇に目が慣れてきて半島の先にボートが浮かんでいるのに気がついた。よくよく見ると船の横には海から頭を出している人の姿まで見える。こんな真夜中にだれがボートを出したのだろう。

「あ！」

突然にあの日の記憶が蘇って、気がつくや半島の焼け跡を駆け下りていた。放火犯だ。踏みつけている新芽の心配をしている場合ではなかった。また目の前で放火をされたのではたまったものではない。それもみすみす取り逃がしたとなっては悔やんでも悔やみきれない。

駆け下りる音に気がついたのか、ゴーグルに黒シャツ姿の男は慌ててボートに飛び乗り逃げ出そうとしている。

「おい、待ちなさい！ 逃げても無駄だ」大きい声を上げると一瞬こちらを見て、また急いでボートを出そうとした。ボートは火事の翌日に見たようなスピードの出るものではなく、ウォーターランドのボートだった。

目の前まで近づくと、男は観念したように、ボートの上に立つと網のようなものを持ったまま両手をあげて、「みつかったか」と言うと、ゴーグルを外しはじめた。どこかで聞いた覚えのある声だった。

第30話 密漁

「いい漁ができていたのに」

「え？」

「現行犯逮捕とはね。これが秘密の牡蠣」

「ノルシーさん？ こんなところで獲ってたの？ それもこんな時間に」

「密漁ってそんなもんじゃない？」

「密漁って……こっちは放火犯かと思ったから」安心したとたんに気が抜けてその場に座り込んでしまった。踏みつけてしまった新芽のことを思ってコピに申し訳なく思った。

「密漁は密漁でも、秘密の漁だからね。犯罪ではないからね」とノルシーさんはこちらを見下ろして笑った。

秘密の漁を密漁というのだろうと思うけど、ノルシーさんが言うようにこの島で獲っていけないものはない。コークの卵のようにみんなが意識して守っているものはあるけど、それでも禁止されているわけではない。

「大人になっても秘密のひとつぐらいないと楽しくないでしょ」と独り言のように言うと、こちらに牡蠣の入った魚籠を預けてかじかんだ手に息を吹きかけた。

こんな寒い朝に内緒で海に潜っていたとは知らなかった。いつまでも子供のようなどころのある人だ。それがわかるとまたノルシーさんに今までとは違った親しみを感じてしまう。

「それ、ミリルさんに渡してあげて。この前のスープ、一人で食べちゃったからね」

「真夜中の寒中水泳で獲ってたって伝えるよ。これが特上の牡蠣なんだね」袋に入った牡蠣が濃い緑色に輝いて見えた。

「あの獲り方の話はいいから。まったく、秘密もなにもあったもんじゃないな」と言うと、ノルシーさんはタオルで身体を拭いて、服を着替えはじめた。

「これが、その先の海で捕れるってこと？」

「秘密の場所だったのに……まいったな。誰にも言わない？」よっぽど残念なのだろう。なかなか教えてくれそうにない。

「あのね、秘密基地じゃあないんだから」

「あ、それぞれ秘密基地よ。これぞ男のロマン、じゃない？」

「牡蠣がロマンって……」

「だってね、その絶品牡蠣はここでしか捕れないんだからね、このヒカリモのある海底だけなんだから、これはもう男のロマンでしょ？」

「ロマンなのかな。ちょっとロマンにしてはサイズが小さい気がしないでもないけど……それで、ヒカリモってなんのこと」

「おっと、またロマンを漏らしてしまった。これはいかん」わざとらしく舌を出してみせた。

「で、なんなの？」

「今日はいつになく食いついてくるね。新聞には書かないでよ？ほんとに約束だからね」

「約束する」

「ほら、あのあたりの海をよく見て、なにか見えない？ 緑に光ってるでしょ？」

「あ、ほんとだ。なんだろう……」

「あそこね、大きな穴が口を開けててね、そのあたりにヒカリモが群生してるのね。これ秘密だから絶対言わないでね」目の前まで顔を近づけてきて、念を押すように言った。

「昆布でも密集しているのかな」

「昆布じゃないけど。岩場にヒカリモが集まってて、そこの岩場でこの極上の牡蠣が獲れるわけですよ。このお牡蠣様がね」

「ヒカリモって、もしかして光る藻のこと？」

「うーん、藻と言っていいのかどうかはよくわからないけど。海藻の一種であることは間違いな
いと思うよ。食べたけど味はそこそこ。それが夜になると光を出して、それに誘われるようにし
て牡蠣が穴から出てくるってこと」

「牡蠣ってそんなに移動するもの？」

「うーん、それは彼らに聞いてみてもらわないと。すぐそばにばかでかい穴が口をあけてるから
、そこから出てくるんじゃないのかな？ なんだかね、にゆるっとした水もわき出しているよう
な感じもするから」

「穴から牡蠣がね」

「そう、穴から牡蠣ね。棚からぼた餅みたいだな。でも、穴牡蠣って名前もいいかもね」

「穴牡蠣……」 と言いながら穴の中からぞろぞろとはい出してくる牡蠣を想像してみた。ちょ
っとありえない光景に思わず笑ってしまった。

「ふたりだけの秘密にしておく？」 ノルシーさんがうれしそうに言った。

「あー、二人のね。じゃあ、海底基地でもつくります？」

「あ、それいいアイデアだね。そうなるとがんばってもう少し素潜りの練習しないとだめかもね
」

ノルシーさんも、いったいどこまで本気で言ってるのかわからない。ヒカリモを見ながら穴牡
蠣をみつけたいきさつを聞いているうちに、どこかで見たことのある色だと思った。

「あれ……もしかして、あのヒカリモってノーキョさんのところにあったのと同じものなのかな
。緑の色が似ているような気が……しないでもないな」

「なに、ノーキョさんまで知っている？ 秘密の賞味期限とはかくも短く儂いものか。こりゃ
もうだめかな」

「これってほんとうに秘密なの？」

「そう言われるとあれだな、秘密基地も必ずしも秘密でない場合もあるしね。でも、穴牡蠣のほ

うはまだ知らないかもしれないな」ノルシーさんはちょっと負け惜しみのように言った。

「ロマンも秘密もなかなか大変だね」

そのあと、穴があるというところを教えてもらっているとき、行く筋かの光る線が海底を走ったのが見えた。

「あ、牡蠣が泳いでいる！」

「オルターさん、さすがの穴牡蠣さんもそんなにすばしっこいとまずいでしょ。あれは魚だよ」

「でも、光ってなかった？」

「ヒカリモの光でそう見えるんじゃないの。たまに見るけど」

ノルシーさんにはそう思えるかもしれないけど、こちらはここがドットトラウトの住処に違いないという期待を強く抱きはじめていた。

「ここ、二人の秘密基地でいいね。今度ここで夜釣りをしてみることにしよう」心はすでにドットトラウトを釣り上げているイメージでいっぱいになっていた。

話しているうちに、なんだかほんとうに二人だけの秘密ができたような楽しい気分になってしまった。空を見上げると月が西の空に輝き、西側の水平線が明るくなりはじめていた。満月の日まであと幾日だろうか。

第31話 海の穴

ノルシーさんは戻ってシャワーを浴びると言う、そのままボートで帰って行った。

その後もひとりで、ヒカリモの光と波間にきらめく月明かりの織り成す幻想的な世界に目を奪われたまま時間の経つのも忘れて過ごした。気がつく、と東の空が少し明るくなりはじめていた。教えてもらったあたりをよくよく見ていると少し黒くなっているのがわかった。朝焼けの光の加減で見えてくるのかもしれない。あそこが、ノルシーさんの言うところの大きな穴ということなのだろう。大きな穴なのか海溝のようなものなのかはよくわからないけど、見れば見るほどいかにもドットトラウトが潜んでいそうに思える。それどころかこれほどの大きさならばミドリ鮫も隠れているのではないかという期待までしてしまう。彼らがいっしょにいる光景を思い浮かべただけでも、浮き立つ心が抑えられなくなる。深海は彼らにとっては最適の住処になるはずだ。もしかしたら、あのノートの透かし紋章を考えた人もその光景をどこかで目の当たりにしたのではないだろうか。

コノンさんのお祖父さんと釣りに出たときのことを考えると、夜明け近くが彼らの活動時間のはずだ。あのときは曇り空で星ひとつ見えなかった。昨晚のような月明かりのある日はどうなのだろう。お祖父さんはミドリ鮫漁のことについてはあまりはっきりは言わなかったけれど、もしかしたらノイヤール湖で狙っているのは、今でもミドリ鮫なのかもしれないとさえ思えてくる。

期待はどんどん膨らんで、とてもその場を立ち去る気にはなれなかった。魚影のようなものが走る線もときどき見えた。ただ、ノイヤール湖のような大量の群れが現れることは夜明けの時間になってもなかった。

ヒカリモの神秘的な発光は朝方まで続いた。珊瑚の産卵が満月の日にあると聞いたことがあるけど、ヒカリモも月の周期と関係しているのかもしれない。お祖父さんと投網漁に出たのも満月のころだったのだろうかと考えてみたけど、月齢についてははっきりとした記憶がなかった。

ノルシーさんが大きな穴からにゆるつとした水が湧き出ていると言っていたのを思い出して、海水を少し手ですくってみた。ネモネさんの言うおいしい水はこれのことだったのではないかと期待した。にゆるつというほどのぬめりは感じなかったけれど、たしかにさらさらではなくダシのたっぷり溶け出したスープのような感触があった。たくさんの栄養素が含まれているのかもしれないと思口に含んでみた。もともと汽水なので塩分は少ないとは思っていたけれど、ほんとうに下ごしらえなしでこのまま料理に使えるようなほどの旨味を感じた。カバのミームがいたらどんな色になるだろう。すくった水をよくみると、小さな光の粒が金箔のように舞っているのがわかった。やっぱりノイヤール湖と同じだ。極上の牡蠣の採れるところには極上の水があるということか。水の本に書いてあったようにその昔ここにドットトラウトがいたということもいよいよ真実味を帯びてくる。それどころか今現在もここに生息している可能性すら否定できなくなっているのだ。

なんだか、探し求めているなにかに近づいているような気がしてくる。ジギ婆さんの話を思い

出していると、ノート氏の話と今この時間が重なりはじめてるようにさえ感じる。満月のときに早朝の釣りをすれば、すべての答えがわかるのではないだろうか。それが必ずしもいいことだけでないとしても、謎を解くための扉が大きく開かれそうな予感がする。

水辺で朝を迎える、ふしぎなほどに元気が出てきた。ベッドで鬱屈した気分でしたときとは別人になったような晴れやかな気分だ。とても夜通し起きていたとは思えない。まわりを見渡すと、焼け跡の草木がすくすくと育ってきている。ネモネさんもこの成長ぶりを見て驚いたのだろう。自分の気持ちが晴れるのと同じように、草木も元気になる水をたっぷりもらって、健やかに成長しはじめている。

大切な穴牡蠣も預かったので、少し早いと思ったけれどそのままリブロールに立ち寄ることにした。途中見たノーキョさんのところの緑の光は、朝日に紛れて光っているのかどうかさえもわからなくなっていた。ノーキョさんのことだから、きっとあの藻の光をつかってまた何かをつくらうとしているのだろう。

リブロールに着くと、鍋に水を入れ牡蠣をあけた。普通の水にいれるとどうなるのかと見てみると、濃い緑色のはがれ落ちるように薄くなって行った。それと合わせて味も落ちてしまうのではないかと心配になるほどだった。ノルシーさんはヒカリモはおいしいというほどものではなかったと言っていたけど、穴牡蠣にとってはヒカリモとの関係こそが大切なのではないかと思えなくもない。彼らも食べられるだけのために生まれて来たわけでもないだろう。命の交換を大切にしているはず。この世界に無駄な命などひとつとしてないのだから。

しばらく穴牡蠣の様子を見てみるとミリルさんが来て、生ものだから早く料理したほうがいいという話になった。肝心のないないさんはいまだに現れる気配もない。ノルシーさんががんばって獲ってくれたけど、ないないさんの英気を養うことにはならないかもしれない。それなら獲ったところに戻してやった方がいいのかもしれないと思いましたが、ノルシーさんの苦勞を考えるとそれもできないと思った。

もしかすると、今日の収穫は穴牡蠣ではなくてあの穴そのものだったのかもしれない。そんなことを考えているとないないさんが大きな穴に吸い込まれている映像が突然頭に浮かんだ。ないないさんはいったいどこに行ってしまったのだろう。

夕方近くになったら、エバンヌに行くことにしよう。お店を開く前にしたほうがいい。もう少し秘密基地の話をしなればいけない。

西の海上には季節外れの積乱雲が見えていた。あの雲が雨を降らす前にノーキョさんは戻ってくるのだろうか。

第32話 むめる水 **

「お客さん来たらこの話はなしだからね」

ノルシーさんは相変わらず秘密にこだわっている。それはもうこちらも十分承知している。もちろん穴牡蠣の話ではないけど。

「だいじょうぶ、二人だけのときにしか話さないから」

「男は秘密基地、女は秘密の花園なんだからね。スイカは切ってみてはじめて当たったかどうか分かるからこそいいわけ。そこにスイカの価値がある。それがわからないんじゃあちよっと困るんだな」

「たしかになんでも丸裸じゃあ、面白みはないからね」

「わかってくれた？ 上質な秘密こそが人生を豊かにし、生きる喜びを与えてくれるのであるってね」

何を言っているのかよくわからないところもあるけど、秘密がない人間はつまらないということをしきりに力説しているようだ。わからないことがあってこそその人生じゃないかということでもあるらしい。とにかく話を合わせないと先に進みそうになかった。

「よくわかりました、ノルシー先生」

「よろしい。それで話とはなにかね、オルター君」と言うと、こほんと小さく咳払いをした。

「実は、大穴のことなんですが.....」

「結局、君の話というのは例の秘密の話なのだね.....」といかにも残念そうな顔をして言うと、ポットのコーヒーを自分のカップに注いだ。

「あその水なんだけど、穴から湧き出してるようだって言ってたよね」

「と、思うけど、それが何か？」ノルシーさんはもったいぶるようにコーヒーをゆっくりと飲んでみせた。

「なんでわかるの？」顔を近づけて核心に迫るようにすると、「だって穴に近づこうとすると押

し戻されるし、流れに逆らって泳ぐようだからね。でも急流じゃないよ。ゼリーのようなというか、寒天がゆっくり押し出されるような」と言いながら身体をくねらせるようにした。

「寒天……」

「とにかく、にゆるっと、ぐにゅっと」

寒天の中をのたうつように泳ぐドットトラウトとミドリ鮫をイメージするけど、どうもしっくりこない。

「普通の気水じゃないのかな」

「神のみぞ知るというやつかな。母なる大地のことは創造主の神に聞けというではないですか」

そんな話は聞いたこともない。だれが言ったのかと聞くと、「ノルシー先生曰く」と言って笑った。

「あそこには夜明けまでいたことはないの？」

「オルターさん、密猟者に夜明けはまずいでしょ」

「それはそうだね」

「ヒカリモって持って来られるもの？」

「来られるけど、あれ食べてもまずいよ」

「食べるんじゃないくて、どんなものか見たくて。夜だけならランプ代わりにならないかとか」

「また突飛なことをおっしゃいますね。それはできればおもしろいかもしれないけど。よくそんなこと思いつくもんだね」

「じゃあ、明日よろしく」

「ちょ、ちょ、また行けど？ オルターさん、ちょっと人使い荒くない？」

「でも、いっぱい光るのは満月のころだけでしょ？」

「おっと、いつのまにそんなことまで。これは侮れないな」

「まあ、だてに年をとっているわけではないですからね。年を重ねた人間の神通力とでも言えばいいでしょうか」すべてはお見通しだというような顔で見ると、「高齢術にはかなわないな」と諦めたように言って、しぶしぶ出かけることを承諾してくれた。

そのあともいろいろ聞いては見たものの、結局、ノルシーさんから決定的な情報を得ることはできなかった。特に隠し事をしているようでもないのに、ほんとうに穴牡蠣だけが目的で通っていたのだろう。自分のような体験をしてなければ、それ以上のことを考えることもないだろう。

灯台に戻って、今日のことをノートを書き残しておくことにした。

***** ノート *****

この島の豊かさは水にあることは間違いない。そしてその水は地の底からわき出して、世界に慈愛と滋養を注ぎ込むのだ。ゆるく、ぬめる水が命の営みを支える光りを創造し生きる力を与える。光る鮫と光る魚がその使者として現れるときにその道は現れる。それがどこに続いているのかは誰にもわからない。満月の曇り空の日に光る園に足を運ぶとき、すべての答えが明かされて行く。

***** ノート *****

ノートにはあまりはっきりしたことは書かないほうがいいと思っている。日付も書かないことにした。いつだれがどんな目的でこのノートを見るのかわからない。すべてを明かすことが、必ずしもよい方向につながるとは言えない。とくにボルトンのような輩がいることを考えると、どうしても慎重にならざるを得ない。ノート氏のノートの一部の行方がわからないのも、そういうなにかが関係しているのだと思う。

「こんばんは」

書き終わって机にノートをしまったときにネモネさんが入ってきた。ノートを書いているところを見られたかもしれないと思ったけれど、そのことについては何も聞かれなかった。

「お休みされていませんか？」

「いや、ちょっと考え事を」

結局、昨日は一睡もしていなかったから眠そうな顔をしていたのかもしれない。

「今日、半島に行ったら緑が見違えるよう増えている」と目を輝かせて言った。

「私もね、実は今日見て驚きました」

「オルターさん、私思うんですけど、あそこの水のおかげじゃないかと」

「あそこの水？」

「半島の先の水がとてもいい水っていうあの話なんですけど」

「ああ、おいしい水ですね」

「それがほんとうに特別の特別なんですよ。もう少し調べてみますけど」

「ミーム君の色もですか？」

「半島だとそうでもないんですけど、この前船で島を巡っていたら、興奮して海に飛び込んでしまっ」

「もしかして真っ赤に？」

「そうなんです。見たこともない赤色に」

「それはヒカリモのあるあたりですか？」

「ヒカリモノ？」

「あっ、知らなければそれはいいです」

ノルシーさんと二人の秘密の約束だったことを思い出した。やはりあの半島の先になにかがあるのは間違いない。

「ノーキョさんはまだヨットにたどり着いてないですか」ネモネさんは窓から海を眺めながら言

った。ノーキョさんのことを心配して来たようだ。

「もうそろそろ、向こうに着いてくれないとさすがに心配になりますよね。ヨットの人の状態も心配だし」

「なんだかミリルさんも元気ないですし、早く戻って来てくれるといいですね」

「そうだ、これノーキョさんが作ったてくれたロウソクなんですよ」引き出しから出して赤い方に火を灯した。

「きれいな灯り」

「灯りに品質もなにもないかもしれないけど、この光はとてもやさしくて上質ですよ。自分たちでつくったからそう思うだけかな。どう思い.....ますか」

ネモネさんに目を向けると、両手を合わせて静かに目を閉じていた。彼女の祈りはきっと伝わるだろう。その願いが聞こえているのか、潮騒が灯台を何度も何度も重ねるようにやさしく包んでは消えていった。

横になって目を閉じているミームを見ていると、どこからか鐘の響くような音が聞こえてきた。

「ああ、インクか」

インクか、という言い方がよくなかったのか、一瞬こちらをみたかと思ったらふいと横を向いていつもの居場所にごろりと横になった。ミームがいるのに気がついているのかいないのか、気にとめる様子もない。

「あら、インクちゃん。元気だった？」

ネモネさんが手を伸ばすとごろごろと喉をならしている。ご機嫌が戻ったようでよかった。この前とちがって今日は首に鐘の形をした鈴をつけている。大きさこそ違うものの、鈴というよりは鐘と言ったほうが良いような形をしている。

「きれいな音がしますね」ネモネさんが感心して言った。

それを聞いたインクが「祝宴用の特別の鐘だからね」と言った。自分の耳をちょっと疑いながらもインクの声も聞こえるようになったのだろうかと思つた。そう思うこと自体がふつ

うではないのだろうけど。

「特別の鐘なんだ」とネモネさんがインクに話しかけた。

同じ声が聞こえたのだろうか、それとも同じように感じたということか。不思議に思ってインクの顔に見入っていると、今度は「今夜助かるよ」と言った。

「ヨツトの人が助かる？」と思わず問い返すと、ネモネさんがこちらを向いて「え？ 助かったんですか？」と聞いて来た。

「あ、いや、インクがそう言ったかと思って」

「そうですか。満月の夜ですしね。今夜はなにか起きてもおかしくないですよ。お祈りが届くかな」

その後インクが何かを話すことはなかった。

第33話 重なる影

「ないないさんに食べてもらわないとですよ」ミリルさんが言うと、コピが恨めしそうな顔をして穴牡蠣を覗き込んで指でつついた。

「穴牡蠣を獲るのって大変なんですね」

「牡蠣は冬場のものだから、潜るとなると楽じゃないですね」

「ノルシーさんにお礼言わないと」

ノルシーさんが一人でほとんど食たからこういうことになったのだからと言うと、ミリルさんはそれもそうですねと言いながら笑った。

「それで今夜は、幻の光魚の釣りに出かけることになりました」

「釣れそうなんですか？」ミリルさんは気の乗らない顔をしている。女性は釣り自体にあまり興味もないのだろう。

「まあ、当てにならないと思うかもしれませんが、居場所の目星はおおよそついているので少なくとも坊主ということはないでしょう」

「ボウズってなあに」コピが面白いことを聞いたというような顔をした。

「コピちゃん、一匹も釣れないことを坊主って言うのよ」とミリルさんが言うと、なにかはぐらかされたとでも思ったのか、つまんなさそうな顔をしてまた牡蠣の入った入れ物を覗き込んだ。

机の上には読みかけのロビンソクローソーの本がおいてある。この前読みかけにしたまま、持ち帰るのを忘れてしまったのだった。本棚に戻されずにそのままになっているのもリブロールらしい。ちょっとしたミリルさんの気遣いだ。これもここの居心地の良さを醸し出す理由になっている気がする。

読みかけていたところには葉が挟んである。リブロールにはお客さんそれぞれの色や形の葉が決まっていて、挟み忘れるとミリルさんが入れておいてくれる。それを見ると誰が何を読んでいるかわかって、うたた寝とは別のリブロールに来る楽しみのひとつになっている。植物の本にはノーキョさんとスロウさんのふたつの葉が仲良く挟まっている。こういうのもお互いに気兼ねすることのないこの島ならではのことだろう。

ロビンソクローソーのページをめくりながら、結末はどうなるのだろうかとぼんやり思った

。無事に助かりましたというハッピーエンドなのだろうか。もしかしてそれがノート氏その人の体験だったということはないだろうかと思像してみたりした。そうであれば、とんでもなく楽しい1冊になるのだけれど。

意識世界と思っているこの場所に来て数週間になるけれど、前にいたウォーターランドと何ら変わる事のない交流と時間の流れにかえて違和感を感じる時がある。突然違う時空に流れ着いたのに、こんなにのんびりした生活を過ごすのも変な話ではある。どうせならロビンソンクルーソーのように無人島であってくれた方が納得がいくというものだ。現代のロビンソンクルーソーはなかなか面倒なところに流されてしまったようだ。

「オルターさんまで釣りに出かけたまま帰って来ないなんてことにならないでくださいね」ミリルさんが思い出したように言った。

「それでもまだ牡蠣獲り名人のノルシーさんもいるから」と言うと、「そんな冗談を言ってる場合じゃないですよ」と真剣な顔になって怒った。ミリルさんが怒るのはめずらしい。次々に人がいなくなるから本当に心配で仕方がないのだろう。ちょっと気遣いのなさを恥ずかしく思った。

「コピもいくの？」

「だめだめ、コピちゃんには行かないの」と、ミリルさんが語気を強くして言った。

コピがまたつまらなそうな顔をしてこちらの様子をうかがっている。こちらの様子をうかがいながら、何か言ってくれというような顔をした。コピはミリルさんとリブロールで留守番しててと言うと、「実験班長もする」と言って水を撒く格好を見せて見せた。実験をしていた先生のノ一キョさんがいないのだからコピの張り合いもなくなっているのかもしれない。水撒きの動作もあまり気持ちが入っていないように見えてしまう。

秋も深まってくると、何気無い会話をしていてもどこか心寂しい気分になってしまう。これが新緑の季節であれば、もっといろいろ楽しいことも考えられるのだろうけど、秋のかさかさした風と虫の音はそうさせてくれない。それでもロマンだと言ってはしゃいでいる男たちもいるし、ミリルさんには心配ばかりかけているのだろう。

昨日から気になっている空模様のほうはというと徐々に雲が広がりはじめている。今日の天気はどうなるのだろうか。このまま雲が多くなっていくと赤い月も見られないかもしれない。空の天気も気になるところだけど、それ以上に時空の予報でもあるならば知りたいものだと思う。これだけいろいろなことが月齢と合わせるように起きると、もっと細かな事象と関連した何かがあるのではないかと思わずにはいられない。それと人がいなくなることともなにかつながりがあるような気がする。

「人恋しい季節だね。やっぱり秋は別れの季節なのかな」と思わず言わなくていいことが口をついて出てしまった。

それが聞こえたのかどうか、ミリルさんは机の上に置いてあった常連さんたちが使うカップを並べ直して頬杖をついたかと思うと大きくため息をついた。

「みんなどこに行ったの」と独り言のように言うと、机に伏せるようにして頭を乗せた。

コピがそれを見て、何も言わずに船着場のデッキのほうに出て行った。

行き先を見ているとヨットのほうを向いて何度も首をかしげている。

「どうかした？」ミドリ鮫でもみつけたかと思って尋ねると、「いっしょ」という答が返ってきた。

何がいっしょになったのかと思いコピの横に立ってみた。

「いっしょ、いっしょ！」と言いながらぴよんぴよん跳ねだした。コピがうれしいときのいつものサインだ。

「どれどれ、なにが見えたかな……」

隣ではコピが海の方に向かって手を振っている。

もしやと思いヨットのほうに単眼鏡を向けるとノーキョさんのボートがヨットと重なって、ヨットの上に見える人がこちらに向かって手を振っている。

「ミリルさん、ノーキョさんやりましたよ！ヨットにたどり着いたようです！」思わず大きな声をあげてしまった。

伏せていたミリルさんが、飛び起きるようにして駆け寄って来ると、単眼鏡を覗いてノーキョさんすごいとひとこと言ったまま次の言葉が詰まって出なくなってしまう。その後はずっとヨットの方を見たまま目を拭っていた。単眼鏡を覗いていても涙ではっきりは見えないだろう。少し落ち着くと、助かってよかったとうわ言のように繰り返した。単眼鏡を持ってないほうの手はコピの肩をしっかりと抱きしめていた。

「やりましたね、ノルシーさん」と声をかけるとミリルさんは何も言わずにこくりと頷いた。昨日インクが言った通りになった。あれはなにか予兆のようなものを感じたのかもしれない。

「こうなれば、あとはこちらに戻ってくるだけだから、もうだいじょうぶですよ」

そう言いながらも、どうやって戻ってくるのだろうかという心配は消えない。それでも、天気が崩れるまでには時間もあるし、もし崩れてもヨットなら安心と自分にいい聞かせた。それよりもヨットに乗っているタークさんの方は大丈夫だろうか。ノーキョさんの持って行った水や食べものを摂って早く元気になってくれればいいのだけれど。

水平線の先に見えるヨットでは、ノーキョさんが何か作業を始めているように見える。ネモネさんの言っていたスクリューを使おうとしているのだろうか。帆をあげる気配はない。

ミリルさんはコピと牡蠣の料理の話を楽しそうにしている。今度の穴牡蠣はノルシーさんとタークさんが食べることになりそうだ。

第34話 同じ手帳

「オルターさん、夕食はどうします？」

「牡蠣のスープ？」

「残念ですが、これは今いない人たちのために」と言うとなっこり微笑んでコピに同意を求めた。コピもさすがにわがままは言えないと思ったのかだまって聞いている。

「コピちゃんが集めてくれたキノコのソテーはどうですか」

「それもいいですね。キノコこそ秋の味覚だ」

さっきまでの沈んだ気分が嘘のように明るい空気に満たされていく。ことの成り行きなんていくら心配してもわかるわけでもないし、人の気分なんてちょっとしたことでどうにでもなるものだ。これでないないさんでも現れた日には、キノコのソテーが穴牡蠣のスープになって、匂いを嗅ぎつけたノルシーさんが呼びもしないのにやってきて、ノーキョさんの成功を祝して前祝いということになってしまうかもしれない。

「そうだ、ノルシーさんにもヨットが助かったことを伝えないと」

「そうですね。みんなに伝えないと。私、ネモネさんを探してきます」

久しぶりに楽しい夜になりそうだ。ノーキョさんが今夜戻ってくれば言うことなしだけど、ヨットはこちらから見えるほど近くはないはずだから、どんなに早くても明日以降の話だろう。

「じゃあミリルさん、ネモネさん頼みますね」と言い残してエバンヌに向かった。

店に入ると、ノルシーさんはソファに横になって寝ていた。穴牡蠣獲りに力を使い果たしましたという顔をしているのがおかしかった。寝ていても起きていても楽しい気分にしてくれるのはノルシーさんならではの才能だと思う。こんな寝顔を見せられると起こすのは忍びない。今夜の夜釣りもあるからゆっくり寝かせてあげよう。その時に話せばいい。

カウンターの後ろを見ると、ビクと網が用意してあった。長靴やカンテラまで準備万端のようだ。メジャーがあるのは大物がかかったら測ろうということなのだろう。なんだか、こちらよりはるかに気合が入っているようだ。

夕食まで行くところもないから、ないないさんの家の様子を見に行くことにした。

家に近づくとドアが開いているのがわかった。よくよく見てみると中に人の気配もある。もしかして、また戻ってきたのかという期待が膨らんだ。今夜はきっと特別の日なのだ。みんなが戻って来る日になるのかもしれない。

戸口まできてみると、中にいたのはミリルさんとネモネさんだった。

「ふたり揃ってどうしたんですか？」

「もしかして、戻っているかと思って」ミリルさんが言った。

「あはは、みんな同じことを考えたわけだ」と言うと、ネモネさんが「今夜は赤い満月ですから」と言った。そうなのだ、今夜は特別なのだ。

「あの、オルターさん、あのあとここに来ました？」

「いや、来てないですよ」

「そうですよね。おかしいね」とネモネさんと目を合わせて二人で不思議そうな顔をしている。

「どうかしましたか？」

「食事のあとが.....」と言いながらミリルさんがサイドテーブルを見た。そこには確かに誰かが食事をしたあとがあった。

「この手帳もなかったですよね」と言いながら小さな手帳を差し出した。

裏表紙にはシナモンと書かれていた。また、知らない人が来たのだろうか。手帳はまだ新しいようで、少しのメモ書きがしてあるだけで、特別気になることも書かれてなかった。

「新しい人ですか」ネモネさんが言った。

「シナモンというのが名前ならばですね」

「ないないさんが戻ったのかもしれないですね」

「うーん、どうなんだろう」

「でも、誰かが来たのは間違いないですね。どこかを散歩しているのかもしれませんが」ネモネさんが言った。

手にした手帳がどこかで見たことがあるような気がしてならない。

「気になります？」とミリルさんが聞いてきた。

「どこかで見たような」

「それも透かし入りの紙なんですか」ミリルさんが言うので見てみると、浮かび上がったのはHAROW'Sという文字だった。思考が一瞬停止して頭が真っ白になった。

「オルターさん、どうしました。大丈夫ですか？」

「あ、いや、大丈夫。えっと、透かしはあります。ありますね……」

透かしがあることを言っただけでいい気分ではなかった、口がうまくまわらなかった。

「いい手帳なんですね」

「これ皮装ですね。いいものなのかも」ネモネさんが興味深そうに見ている。

「あ、そうか、マリーさんのくれた……」

「マリーさん？ ってどなたですか？」

「えっと、あの、あ、そうだ。この前船長の船で来た、あのですよ。ほら、髪の毛の長い……」

「あの人の忘れ物ですか？」

「いや、そうではなくて、同じものというか」

「同じものを持ってたということですね」ネモネさんが助け舟を出してくれた。

間違いなくハロウズの手帳だった。マリーさんがくれた緑の手帳と同じだった。同じ製品であ

ることは間違いない。

「でも、それをないないさんが？」

「いや、同じ製品という意味ですけど、ここにあるというのが……」

「有名な手帳なんでしょうね」

「ああ、そうなのかな。いや、そうなんだな」

自分でも歯切れ悪いのがわかる。二人もなにかあると思っただろうけど、あえてそこには触れないようにしてくれたようだ。

しばらく3人で話してはみたものの、結局誰が来たのかはわからなかった。知らない誰かがふらりと来て、いつの間にかいなくなるというのがこの島では当たり前と思っていたけど、いろいろなことを知れば知るほどの当たり前ではないという思いのほうが強くなっていくばかりだ。

「でも、もしかするとないないさんかもしれないから、牡蠣のスープの出番かも」ネモネさんがミリルさんの顔を見ながら言った。

ミリルさんはすっかり期待疲れでもしてしまったのか、そうだといいですねとあまり気持ちの入ってない返事をした。

第35話 キノコステーキの薬味

結局、その夜は、だれも戻ってくることはなく、いつもの顔ぶれでの夕食になった。テーブルにはミリルさん特製のキノコ料理が並んだ。

「このキノコは肉厚でステーキを食べてるようですね。どうして秋のものってこんなにおいしいんだらうね」

「オルターさんは、ステーキを食べたことあるんですか」とネモネさんに聞かれた。

「いや、ステーキってこんなものかなと思ってね。昔写真で見たのに似てたので」

「お肉だけではなくて、魚にもステーキもあるし、キノコのステーキだってありますよね」ミリルさんが言うと、コピが「ステーキおいしい」とうれしそうに言った。コピは穴牡蠣よりもキノコのほうが好きなのかもしれない。

実際、しっとりして歯ごたえのある肉厚な食感がなかなかめずらしく、肉とは言わないまでも植物とは思えないボリュームを感じる。みんなでステーキキノコという名前にしようという話でもりあがった。

「えっと、このコショウのようなつぶつぶのものはなにかな？」

「ユロミ！」コピがステーキを教えてもらったお返しとでもいうように答えてくれた。

「ちょっと痺れるような味ですよ。それ、ユイローの実なんですよ」ミリルさんが説明してくれた。

「あ、これユイローの実なんですか。それでユロミなんだ。コピちゃんは、いろいろ知っててすごいな」ネモネさんが感心したように言った。

「これもコピが採ってきたのかい？」と聞くと、コピの顔と同じぐらいのキノコを前に慣れないフォークとナイフで格闘しながら領いた。

「ミリルさん、ユロミって子供が食べて大丈夫なのかな」と聞くと「コピちゃんは甘いトウカの実にしてあるのでだいじょうぶですよ」という答えだった。

「あ、そういうこと……でも、大人も食べ過ぎない方がいいかもしれないね」

「キノコ中毒とかですか？」 ネモネさんが聞いてきた。

「このキノコは前からみんな食べてるからだいじょうぶですよ」とミリルさんが説明した。

「ああ、キノコじゃなくてユロミのほう。なんというか、ユイローって覚醒作用があるようだから。実も同じかなって、ちょっと思っただけなんですけどね」

「島の香辛料でユロミも使う人は多いですけどね」ミリルさんが、不思議そうな顔をしてこちらを見た。

「ないないさんも好きでしたか？」 気になって聞くと、「ないないさんも大好きでしたよ」と言いながら、ユロミの入っている缶を戸棚から出して見せてくれた。缶にはコピのユロミとミリルさんの手書きで書かれていた。ユロミもコピが集めてくるのだろう。缶の蓋を開けるとさらさらとした小さな黒い粒がいっぱい入っていた。ツヤのある均質な実が野生のものとは思えない。ほんの爪先ほどの大きさなのに完全な球形と確信できるほどに美しい。粒の大きさも寸分の違いもないようだ。

「オルターさんはあまり好きじゃないですか？」

「いえ、そういうわけではないですよ。おいしくいただいていますから」

そう答えてはみたものの満月の夜にユイローに実を頂くというのは、まったく気にならないわけではなかった。すでにキノコステーキはほとんど食べてしまったあとだし、今更何を考えてみても始まらないのだけど。

窓の外を眺めると雲が垂れ込めていて、夕焼けは見られなかった。結局ノーキョさんはこちらには着かなかったけど、目で見てもわかるほどの早さでどんどん近づいて来ている。帆をあげている様子もないから、もともとついていた発動機でモーターを動かしたのか、持って行ったプロペラがうまくいったのか。いずれにしても順調に帰途につけて良かった。

「帰りは早そうですね」ヨットのほうを見ているのに気がついたミリルさんが言った。

「行きと大違いだね。これでタークさんも大丈夫だ」

「タークさん？」 ネモネさんが怪訝な顔をしてこちらを見ると、すぐに「じっじ、ぼけぼけ」と言いながらコピがころころ笑った。笑い茸でも食べたように笑いが止まらない。

「だいじょうぶですか？ 今夜釣りなんかして、溺れたりしないでくださいね」またミリルさんの心配性が始まってしまった。ただ、溺れるということばは耳が痛い。

「私もなんだかお酒を飲んだような気分になってきましたよ」ネモネさんがぼーとした顔をしながら言った。

子供だけじゃなく、おいしい水をこよなく愛するネモネさんのような人にも、ユロミの刺激は強すぎるのかもしれない。ミリルさんが水をすすめたが、ちょっと横になりますと言うとあつという間に眠ってしまった。

「キノコのせいじゃないですよねえ。ユロミは刺激が強すぎるのかしら」ミリルさんが気にしている。

「やっぱり、ユロミは、あまり使わないほうがいい気がしますねえ」

「せっかく、コピちゃんが集めてくれたのに」とミリルさんが残念そうに言うと、コピはまるで聞こえてないように、またステーキを食べはじめた。

「ユロミというのはいつごろなるものなんですかね。あまり見たことないですが」

「あ、これは、土のなかになるらしいですよ。一年中なっているんだとか」コピから聞いたという話を教えてくれた。コピは聞こえてないような顔をしている。

「1年中……」

「変ですか」ミリルさんが首を傾げてこちらを見ている。

「一年中じゃなくて、月に一度ということでは……」

「どうして月に一度なんですか？」

ミリルさんにはなんとなくそう思っただけと答えたけれど、そうだとしたら、ユイローと赤い月の関係はますます強くなるような気がした。

そのときネモネさんが寝返りをうってこちらを向いた。

「ミーム、この水……ウォーターランドと……みんなに……伝えないと……」

寝言だった。

ミリルさんが「ネモネさんは寝ても水のことで頭がいっぱいみたいですね」と言って笑った。

第36話　かくされたもの **

***** ノート *****

黒く輝くユロミが未知の旅路の扉を叩くとき夕日のように熟した満月がぬるりと剥がれて崩れ落ちると息を潜めていたその時間の織りなす世界の膜が身をよじりゆるりと移ろいはじめ間もなく見る人もない漆黒の闇の静寂が世界に降り注ぎ無限をつなぐ永遠の流れに身を委ね吊ういまそのとき　新しく生まれた光の子に照らし出されたすべての生き物と草木に片時の命を授け給うあらゆる形を　創造し喜びと悲しみを司る魂を吹き込みそして消える世界と生まれる世界が寸分の差もなく重なりながら表が内包され裏が表出する記憶と軌跡が仮想の混濁から解き放たれる

***** ノート *****

ノートを書いていたのは覚えているけど、書き終えたことさえもはっきり記憶にない。ユロミを食べたせいか頭の中がすっかりぼやけている。読み返してみてもこれでは何を言いたいのかわからぬ。ほんとうに自分で書いたというのなら、潜在意識の何かが勝手に書かせたのだろうか。書いた本人にもわからないのだからどうにもならない。仮にこれと同じようなことをノート氏が書いていたとしても誰にもその意味がわかるはずもない。ただひとつ、今はユロミに中毒性がないことを祈りたいだけだ。

灯台に戻ったこともよく覚えていないから、少し寝てしまったのだろう。おとといの寝不足が今になってこたえているのかもしれない。

物音がしたような気がしてインクの名前を闇に向かって呼んでみた。インク、インクという声だけが夜のしじまに共鳴しながら静かに消えて行く。この声はどこまで届いているのだろう。

東の空を見上げると、夕方までの曇り空はどこに行ったのか、昨日とは別のもののように大きく膨らんだ月が浮かんでいた。背景の夜空とまったく別の世界にあるとでもいうようにその存在を誇示しているように見える。たとえ後ろ向きに立っていたとしてもその存在感を感じずにはいられないほどの圧倒的なエネルギーを湛えている。赤い闇が世界を開く、赤い灯台、赤いろうそく、赤い月。緑のサメ.....緑の.....。

赤い月が真夜中に少しずつ濃く熟れていくのを見ていると食事の前に見た緑の手帳のことを思い出した。自分がマリーさんにもらったものはどこに置いてきてしまっただろう。公書館で棚配置を書いたところまでは覚えている。二度目に一人で行った時も棚の配置を手帳で確認したから、あの時もまだ持っていた。ないないさんのところにあつた手帳は、自分の持っていたものとまったく同じ種類のものだ。もしかすると、マリーさんにもらったあの手帳をどこかに忘れてしまってそれをだれかが持ってきただけということはないだろうか。まだ、釣りに行くまでには時間

があるので、もう一度手帳を見に行ってみることにした。

赤い月の日にユロミをたっぷり食べて、意識がはっきりしないままに一人でないないさんのところを訪ねるのもそれなりの覚悟がいる。そこになにがあるわけでもないかもしれないけど、わからないという不安がつきまとう。それでも赤い月明かりが誘うように足元を照らし出す。赤い地面に抜けるように黒い影が映る。エバンヌは珍しく明かりがついていない。ノーキョさんも釣りに備えて仮眠をとっているのだろう。

小屋に入ってみると手帳はこの前と同じ場所にあった。裏表紙にはシナモンと書かれている。もう一度赤い月にページを透かしてみると、記憶していた紋章も浮き出た。それが自分のもらった手帳とまったく同じ紋章だったかどうかはわからない。最初のほうのページには数字と記号でメモがしてあるけどその意味はよくわからない。落書きの用にも見えなくはない。ただ、どこかで見たことのある文字のような気もする。思い出そうとするとその記憶が逃げるように遠ざかる。

ページをめくっているうちに、最初の方が破り取られていることに気がついた。もしかしてと思って、家の中に破り捨てられたページはないか探したものの、自分が書き残した公書館のメモは見つからなかった。もし、みつかったとして何がわかるだろう。それに対する答えはなにも持ち合わせていなかった。

結局あらたに得られるものもないままに、灯台に戻ってまた出かけるまでの時間つぶしをすることになった。期待するようなことが見つけれないとそれはそれで何かを見落としているのではないかと不安になったりするから始末が悪い。ふと思い出してコピが見つけた紋章の入ったページを改めて手にして見た。よくよく見るとその植物はユイローの群生を描いたものようだった。いろいろな絵を書いた中でどうしてユイローの絵だけがここに残っているのか、無理にこじつけるつもりはなくても偶然ではないような気がしてしまう。このページだけが意図を持って残されたとしたら。

薄くかすれている絵にユロミが書かれていないか目を皿のようにして見た。ユロミの覚醒作用のせいか文字が霞んではっきり見えない。ときどき揺れるように視界が歪む。粒のように見えるものも経年によるくすみやシミとの違いをはっきり識別できない。絵の中に隠し文字でも隠されていないかともう一度じっくり見直して見た。ユロミのお陰で二重に重なる絵と格闘しながらなんとか見つけたのは草の間に紛れ込んでいた一対の目のようなものだった。その二つの線はユイローの葉にも見えるけれど、草の間に身を潜めている細く縦に割れた目に見えなくもない。ユイローの草に隠れるほどの動物であればそれほど大きくはない。

きまぐれ.....ノートの主がこの島で出会った唯一の友。この目が気まぐれだったのか。ユイローの後ろに姿を隠すきまぐれの目がじっとこちらを見ている。

第37話 摘み取り

夜明け前まではまだ3、4時間ある。寝るほどの時間はないし、起きていてもいよいよすることもなくなってきた。赤い月を眺めているにしても限度というものがある。たとえずっと見ていられたとして、それが目によいこととも思えない。眩しい夕日を見続けるのときほどの違いがないだろう。違うのは熟したようなぬめりがあることだけだ。あまりに手持ち無沙汰なので、時間つぶしにユイローの実を掘り起こして見ることにした。

ユイローは灯台の周りにはいくらでも生えているので気に留めて見たこともない。それぐらいなら葡萄草の実でも集めていたほうがましだし、少しがんばればピーチプルだって見つけれなくはない。ユイローに意味があるのは葉を風呂に入れると身体の疲れが取れるという言い伝えがあるぐらいだ。酒は百薬の長というのにちょっと似たようなあの酔い心地がそういう話を生んだのだと思う。

そもそも、この島にいて野草を抜き取ろうと思ったこともないし、雑草というような考えもない。それぞれの種が自然に繁殖するのを楽しむことこそがこの島で生活する喜びなのだから、草取りなんて家を建てる時以外に考えたこともない。枯草や枯葉は土に還り腐葉土として次の命を生み育てる肥やしとなるだけのことだ。そう考えるとコピがどうして地中にあるユロミを見つけたのかもよくわからない。たとえみつけたとしても、普通なら地面の下に小さく生っている粒を口にしようなんて思わないだろう。あの子の感覚はいつもみんなと違う。それが自然と共生する正しい生き方なのかもしれないけどなかなか真似はできない。

適当に掴んで引き抜こうとすると、これがなかなか思うようにはいかなかった。思いのほか根がしっかりと張っているようだ。これを抜いて実を集めるのにはなかなか根気がいる。あんまり抜けないので、灯台においてあったスコップで根元から根こそぎ掘りおこすことにした。知らない人が見たら墓堀盗賊にでも見えたのではないだろうか。

やっとの思いで抜いてみると、さぞやたわわに実がなっているのかと思いきや、実際には一株に10粒程度のことで、たわわにと言うには程遠かった。あの缶にいっぱい入っていたユロミを集めるのにコピはいったいどれぐらいのユイローを掘り返したのだろう。考えただけでも気が遠くなってしまう。缶にコピのユロミと書いたミリルさんの気持ちが少しわかったような気がした。

1時間ほどの収穫作業を終えると、土をかぶった実をこぼさないように大切に持ち帰って早速水洗いをしてみた。すると夕食で食べたのと同じように黒く輝く真球の実が現れた。興味本位で擦り潰してみると、中は純白だった。匂いも嗅いでみたけれど、無臭に近く香料のようなものでもなかった。ただ、鼻の嗅覚に届いた時、軽くめまいがした。ひと粒つまんで歯先で砕いてみると、舌先が小さく震えた。味覚というよりは、しびれという方が的を得ている。人間おいしいものばかり食べていると、最後は珍味のような味を求めるようになる。大人の味覚は自然を食べ

尽くした飽食の成れの果てかもしれない。そうするとこういう変わったものを口にしたいくなるのだろう。数粒食べてみると鮮度がいいせいか、純度の高いアルコールを飲んだように意識が夜の闇の中を移ろいはじめた。

ちょうどそのとき、頭の上に低く響く機械音が聞こえた。あの、ブーン、ブーンという飛行船の音だ。窓から見ると赤い月に照らされた巨体がさらに大きく、薄気味悪く灯台の真上にのしかかっていた。飛行船も灯台を目指してくるのだろうか。灯台が何もかも集めてくる。それにしてもこんな日にやって来るとは、あまりにもタイミングが悪すぎる。また、あの飛行士が乗っているのだろうか。そうだとしたら、誰かに依頼されて来たわけだから、またボルトンの黒服が乗っている可能性が高い。考えれば考えるほど、めんどうな時に来てくれたものだ。それもなんでこんな深夜なのか。雲が多いので、飛行船がどこにいるのかもよくわからない。音は頭の上を通り過ぎると半島の方に息を殺すようにゆっくりと移動して行ってしまった。

もし、夜明け前にあのドットトラウトの群れがあらわれたら、ボルトンもそれを目撃してしまうかもしれない。それではあまりに情けない話ではないか。彼らの先進的な科学技術を持ってすれば、島の秘密のすべてを握られてしまうのではないかという不安が頭をかすめた。

音が通り過ぎたのを確認すると、急いで荷物をまとめてノルシーさんを起こしに行った。ところが、エバンヌの店内を見渡してもノルシーさんの姿はなく、屋根裏の寝室ももぬけの殻だった。準備していたはずの道具もなかったので、半島の方で待ち合わせるつもりでいるのかも知れないと思った。一応、エバンヌのすぐ東側にあるボート乗り場に向かうとまだ別のボートが残っていたので、そのまま乗り込んで半島に向けて漕ぎ出した。

第38話 走る光

それにしても、夜中に来て挨拶もしないで半島の焼け跡の方に行くというのはどういうことだろう。何もなければ、いつもの発着場に着陸するのが当たり前ではないか。向こう方に行ってもあの飛行船が降りられるほどの場所はない。空から海に開いた大きな穴を見つけられてしまうかも知れないと思うと気が気でなくなる。オールを持つ手にもいつになく力が入り、ボートもぐいぐいと前に進んでいく。

海に出て少ししたときだった。クオオオーンというガラスの器に共鳴しているような透明な音が島一帯に響き渡った。地面が軋んでいるようにも思える奇妙な音だ。赤い灯台に行ったときに夜空が崩れ落ちた時にもこんな音がした。その音とも響きとも言えない地鳴りのようなものに気を取られていると、ドシンという音とともに、全身を大きな衝撃が走った。

ついに来た。後ろを見ると巨大なヒレが下から押し上げるようにボートにぶつかっている。よろけて思わずボートの手すりにしがみついた。

しばらく、潮の打ち寄せる音だけの静寂が当たりを包んだ。そのとき、どこからか聞いたような声がした。

「どうする……戻してやれるか……ぶく、ぶく、ぶく」

その声はまるで頭の中で誰かが勝手に話しているように聞こえた。外から聞こえているのではない。声が聞こえているのは頭の中からだ。何を戻せと言っているのか。いや、戻してやるとも聞こえる。これはミドリ鮫の声なのだろうか。それ以外にこの海原には何も見えない。

「向こうはこちらの形……こちらの影……」

意味がわからない。向こうと言うのは現実世界のことか、本当の島の生活に戻れるのだろうか。それともまったく違うところのことか。形がどうしたというのだ。何を言いたいのだろう。こちらが何かを考えるとそれに合わせるようにミドリ鮫の内側の緑の光が一斉に点滅している。

「会いたい、会いたい、会えるか……こぼ、こぼ、こぼ」と一方的に話していたかと思ったら、こちらの気持ちが変わったとでもいうように、一呼吸置いてミドリ鮫はボートを大きく前に押し出した。

陸の方を見るとエバンヌにはまだ明かりがつかっていない。ノルシーさんはどこに行ってしまったのだろう。エバンヌのほうに向かって大声で呼んでみても何の反応もなかった。誰かこの状況を見ている人はいないだろうか。だれでもいいから見てくれていれば。いや、ボルトンにだけは

見られたくない。

頭が混乱しはじめている。心の準備はできていたのではないのか。それでも突然すぎたのか。今何を考えればいいのかさえもわからなくなってきた。

ミドリ鮫は灯台の先まで来ると半島を目指すかのように方向を急に変えた。こちらが振り落とされそうになっていることなどお構いなしだ。それどころかボートがいつ壊れてしまってもおかしくないほどの衝撃が続き、そのスピードもモーターボート以上の早さになっている。ときどき背中に乗ったまま空中に押し上げられ、ミドリ鮫の背中から落ちそうにさえなる。落ちて鮫の尾びれにでも叩かれでもしたら、確実に命を落とすだろう。

半島の先まで来ると、ミドリ鮫は海底の方に向けて頭を大きく下げた。ボートだけ海面に残されるかもしれないと思ったけれど、ミドリ鮫の巨大な身体がねじれていくのにあわせて大きな渦ができ、乗っていたボートもろとも無数の泡といっしょに一瞬にして飲み込まれてしまった。

同じだ、また闇の中に飲み込まれて行く。穴牡蠣がはい出してくるあの穴に向かっているのだろうか。ドットトラウトはどこにいるのか。彼らがこの闇を照らしてくれはしないのか。もう少しですべての謎が解き明かされるはずではなかったのか。今、それが明かされようとしているのかどうか、それさえもわからない。

周辺を埋め尽くしていた泡が身体からどんどん離れて行く。そのあとには赤い月の明かりも届かない暗闇だけの世界が待っていた。身体が方向感覚を失い、呼吸もすでに止まっているように感じる。水の冷たい感覚は徐々に消えて行き、浮遊感のみが残された。乗っていたボートが紅葉した木の葉のように闇の先に吸い込まれて行くのが見える。先に行く鮫の姿だけがかろうじて移動していることを感じさせてくれる。鮫の姿がなければ自分がどうなっているのかさえもわからないだろう。今、この世界にあるのは、自分とミドリ鮫とボートだけだ。これでまた、溺れたという話になるのか……考えたくない。

しばらくしたところで、光の筋が反対方向に向かって走って行くのが見えた。すぐにそれは幾百、幾千、幾万の数となり……まるで光の柱のようになっていった。ノイヤール湖で天に向かって立ち上がったものと同じだ。それはあまりに美しく、あらゆる命の根元のようにさえ見えた。目にも止まらない早さと、焦点も合わせられない輝きに、それがドットトラウトかどうか確認することもできなかった。

気がつくと前を泳いでいたはずのミドリ鮫の姿は見えなくなり、光の流れは跡形もなく消え失せてしまった。そしてまた、時間も方向もなにもない闇だけの世界に取り残された。急に思い出して、ポケットの中に虹の石があるかどうかを確認した。それ以外に自分を守ってくれる物はないような気がした。目に見えない世界はどういうわけかいくつもの渦が大きくゆっくりと巻いているように感じられる。どちらにも流れず、淀んでるかのようにゆるく溜まっている。流れるこ

とを忘れた時間の中に取り残されてしまうと、何かを考えることも意味をなさなくなるように思えてくる。きっと生きていることさえ価値を持たなくなるのだ。すべてが止まった時に時間はなくなり、命さえも消え失せてしまう。そして光さえも.....。

第39話 時の流れ

意識世界が夢と同じなのであれば、今まさに目醒めの時を迎えようとしているということなのだろう。夢が終わる時に何もない真っ暗な闇が訪れるように。

これが深い眠りだったのか、浅い眠りだったのか、起きたその時にすべての真実がわかるのかもしれない。目覚めたあとにこちらであったことを忘れないで、現実のウォーターランドにいる仲間に伝えていかないといけない。きっとそれがメーンランドに来て、オールドリアヌを訪ねた意味になるはずだ。

光が失われ闇だけになると、目を開いている意味もなくなってしまふ。どうせ何も見えないし、何かが見えても自分の思うようにはならないと割り切ると気持ちが少し楽になる。2度も3度も同じ経験をすればそのあたりは心得たものだ。

無理して何かを見ようとしなくて目を閉じてみると、想像していたのとは逆に頭の中にたくさんのイメージが現れてきた。過去の記憶にあるものもないものも入り混じって、時間の流れと無関係に現れては消え、消えては現れる。つないでいくとどこかで見た場面になりそうではあるけど、どこかに無理があり、それを強引につないでしまうと自分の経験だけでは計れないものになってしまう。これは夢を見ている感覚に近いような気がする。

記憶と関係ないイメージ映像が表出しているということなら、自分とは無関係となるのだけれど、時折現れるミリルさんが新聞を印刷するところやノーキョさんと雨宿りをしたときのことなど、記憶にそのまま当てはまるものもあるのでまったく無関係とは言い切れなくなってしまう。

仮に知っているものの場合でも、それは自分が見ている目線ではなく、誰かから見られている第三者の視点になっている。知らない誰かの目で切り取られたイメージは居心地が悪く不安を掻き立てる。このイメージはいったいどこから出て来るものなのだろう。

意識世界の島にいたときに白い灯台と赤い灯台が重なって見えた時のことを思い出した。あれは今見えているのと同じように、イメージが時間を超えて重なっていたのかもしれない。ノイヤール湖で見たコピの映像も同じように思える。あれも意識世界の映像で、それが現実世界にこぼれ出していたのだろうか。もしそうであれば、このイメージ自体が時間の記録そのものなのかもしれない。時間を見るという考えは神をも恐れぬ驕りのような気がして身震いした。

幾重にも重なって行く映像は集合と離散を繰り返す、入れ替わりが激しくなるとまるで万華鏡のように見えはじめた。船長と船で島を出た時と同じだ。無数の光の反転に頭が覆い尽くされてしまふ。大量の光に包まれたようではあるけども、それが闇の実態のようにも思えなくもない。絵の具ですべての色を混ぜつづけると黒になるという話を聞いたことがある。おそらく光もすべてが集まるとそこに闇が生まれるのだ。もし、そうだとすると今見えていたものは光であって光ではなかったのかもしれない。

しばらくすると、光の痕跡のひとつも残らない吸い込まれるような暗黒だけの世界に戻った。そしてそこから無数の六界錐が形を見せはじめた。何も見えないはずなのに六界錐だけが網膜に映像を結ぶのだ。上も下もなく、方向の定まらない力に翻弄されながら浮遊している。同じ六界錐でも大きさや長さはそれぞれで、長いものは先を見定めることもできず闇の先を突き抜けているようにも見える。距離感もつかめないので大きさははっきりわからないものの、長いものは何キロもありそうだ。大きなものほど浮遊する動きが遅く、静止しているようにも見える。

閉じていた目を開いてみると、そこに見えたのは閉じていた時と同様に六界錐の浮かぶ闇の荒野だった。目を閉じても開いても同じものが見えていたのだ。この世界は自分の外にあるのか、中にあるのか。それさえもわからなくなってしまった。

暗闇が続くうちに睡魔が襲ってきた。目に見えるものと頭でイメージするもの、それに夢が加わったときに自分の存在はいったいどこにあることになるのだろう。インワールド、アウトワールド……それとも……。

第40話 ふたつの影

六界錐を感じていると、突然身体が揺すぶられた。接触を感じると自分にまだ五感があることがわかる。六界錐とぶつかったのだろうか。これだけあればぶつからない方がおかしいのだけど。

「オルター君……」

遠くから誰かの呼ぶ声が聞こえる。聞こえる方を向いて答えようとするけど、前と同じように身体は自由はきかない。

「オルター君はここで何をしている……している……かな？」

また、鯨の声が聞こえているのだろうか。今度は頭の中ではなく外から聞こえてくるような気がする。

「来るのが遅いから……」

ノルシーさんに間違いない。

「人に約束させておいて、ボートで寝るかなあ……」

ボートで寝る？ ボートに乗ったまま寝ているのか？

闇が薄くなってくると、ノルシーさんのこちらを見る顔がかすかに見えた。呆れ返った顔をしている。

「ああ……あ」言葉が声にならない。こちらが今どうなっているのか聞きたいのに身体は自由はきかない。

「おかしいと思ったらこれだもんなあ。こっちは一睡もしてないというのに……」

一睡もしてない？ それならどこにいたというのか。闇が晴れてくると手に光るものを持っているのが見えてきた。ドットトラウトを捕まえたのだろうか。目を凝らして見ようとするともた闇が煙幕のようにかかってくる。

これもまた映像イメージのはじまりなのだろうか。

「なにもなくてよかったよ」

なにも起きなかったというのだろうか。ドットトラウトのつくる光の柱は見えなかったか。

耳を澄ませると、ブーン、ブーンというあの音が聞こえてくる。

「そろそろ行く……」

どこへ行くというのだろう。

「いい夢みてるだろうよ」

また、違う声がした。

「はじめての漁でお疲れだ」

「鮫漁かもしれんな。ふほほ」

コノンさんのお祖父さんだ。相手はジノ婆さんか。

会話が続くけれど声はどんどん遠ざかり、最後には聞こえなくなりすべての意識がなくなった。

電源が切れたあとにはミドリ鮫の真っ黒な目のような無の世界が広がる。ヒカリモの明かりでもあれば……。

ぷつん……

第3章のあらすじ

オルターはコノンさんのお祖父さんと早朝の投網漁に出かけ、その足でジノ婆のいる出島に向かいました。ところが、もう少しで島に着くというところで、再び現実世界から闇の世界に引き込まれ、気づくとノイヤール湖とは全く違う場所で目覚めることとなりました。ところがそこは、ウォーターランドと全く同じ景観で、前回行った赤い灯台のある昔のウォーターランドではなく、現実世界と寸分も変わらないウォーターランドだったのです。

海にミドリ鮫がいれば前と同じように戻れるのではないかと探してみるものの、鮫の姿を見つけることはできません。そうしているうちに現実世界とそっくりのコピに声をかけられ、リブロールでミリルさんとノルシーさんにまで出会うことになりました。

みんなの話を聞いているうちに、その日がオルターが船長の船でメインランドに出港した前夜だということに気づきますが、あの記憶が意識世界で起こっていることなのか、それともオールドリアヌのノイヤール湖に行ったのが単なる夢だったのか、判別すらできなくなっていました。心配するみんなの意見もあってメインランドにはスロウさんが代役として行くこととなり、現実世界で起きたことと異なる時間が流れていきます。

オルターの話に不信感を持ったミリルさんは夢の世界から戻れなくなっているのではないかと心配し、ノーキョさんと薬草を用意したり、気分転換をするための食事会を開いたりしてくれます。そうしているうちに、オルター自身、そこが意識世界であろうが、現実世界であろうがどちらでもいいのではないかと思いはじめます。そんなことより目の前で起きている現実には抗わず合わせていくことが大切なのだと考えるようにしました。ところが、自分の考えを嘲笑うように向こうの世界で書いた手紙が届いたり、タークさんが乗っているヨットを見つけるなど記憶と現実の関係をかき乱す出来事が次々と起きます。現実世界と意識世界がまるで表裏のようにつながっていくことで、オルターは自分のいる場所さえも見失ってしまいそうになってしまいます。

そんなある日、ノルシーさんの秘密のロマンを知ることとなり、その場所でドットトラウトを釣り上げるために夜釣りをすることになりました。

そして約束の夜、またしてもオルターの前にミドリ鮫が現れ、深い闇へと引き寄せられることになりました。次に目が覚める場所がどこになるのかオルターには知る由もありません。はたしてノイヤール湖に戻るのでしょうか。

第1話 男の性

「オルターさんが、いっしょだとおじいさんも張り切って大変だね」お婆さんが嬉しそうに言った。

机の上には、燻製の下ごしらえをしているドットトラウトがきれいに頭を揃えて並んでいる。あれほど向こうで釣れるのを楽しみにしていたドットトラウトが当たり前のように目の前にある。ただ、どれも光を発しているわけではなく、どこにでもいそうな普通の鱒にしか見えない。

「ジノ婆さんのところに久しぶりに行ったが、相変わらずだな」

「ジノ婆の催眠療法みたいなのはほんとうに役に立つのものなのかね」

「まあ、あんなところに引きこもって目も見えないのに普通に暮らしていることがそもそも現実離れしてるから、なにかしら御利益はあるだろうよ」

おじいさんの話を聞いていると、釣りをやめたあとにジノ婆さんのところに行って何かの話をしたということらしい。確かにドットトラウトが大漁だったから、こちらの要件のほうを先に済ませようということだった気がする。ただ、出島の記憶がまったくくない。まるでそこの時間が消えてしまったようだ。ジノ婆さんと何の話をしたのだろう。

「それで何かが見えたのかい」お祖母さんが真剣な顔をしている。

「見えたんだか、なんだかな」お祖父さんが面倒そうに答えた。

「お祖父さんに聞いていてるんじゃないよ」と言いながら、はらわたを抜いたドットトラウトを渡した。渡されたお祖父さんは何も言うわけでもなく機械的に紐をエラから口に通して輪をつくっている。燻製窯にぶらさげるために必要なのだろう。

それにしても、あんなに綺麗な魚がここでは人に食べられるだけになっているのがどうにも納得できない。輝きをなくしてテーブルに並ぶだけのこの魚になにかの力があるとはとても思えない。すべてはただの幻覚だったのだとでも言いたそうな目でこちらを見ている。

意識が戻ったのはここに着く頃だったから、それまでは気を失っていたか寝ていたということなのだろう。もしかするとそれは一瞬の出来事で、戻って来た時間が少しずれただけなのかもしれない。そうでないとしたら、湖でおぼれた一件以来ちょっと意識がなくなる程度の話ではお祖父さんも驚かなくなって、お祖母さんに余計な心配をさせないようにと気遣っているのだろうか

。「また、話す機会なんていくらでもあるから」と言いながら気にすることは無いというようにこちらを見た。

「まあ、慣れないところで朝早くから漁に付き合わされたんじゃたまったもんじゃないさ」

「ここまで来て漁もしないんじゃ、それこそ何しに来たんだかわからないからな」

「あんたにはそうでも、オルターさんには関係ないことだろうに」

二人が話しているのは、自分が漁に行ったことがいいことだったのかどうかということなのだけれど、どちらもこちらの気持ちを察してくれてのことだからなんとも申し訳ない。それにも関わらず、目の前に並ぶドットトラウトが記憶をますます混乱させる。どこにいるのかもわからなかった神聖な魚が今夜の夕食に出てくるかもしれないという現実には受け入れられない。

「ジノ婆の言うように、自分探しだったらそれはそれでいいだろ？」

「また、そういう話なんだね。鮫を探したり、自分を探したり、勝手なことを言われても困るだろうに」

「なんというか、その、この魚もいくら探してもみつけれなくて……」

「こんな魚ならお祖父さんに頼めばいくらでも。ねえ、あんたそうだろ？」

「そうはいかないのが男の性なんだな。自分で探さないとだめなものもあるわけだ」

「ジノ婆がそう言ったのかい？」

「ジノ婆は女だから言わない」

「なんだかわからない話だね。それで、この鱒の捕り方を聞きに行ったってことじゃないんだろ？」

「えっと、そうではないんですが……」

「まあ、今日は疲れてそれどこではなかったってことだな」と言うとお祖父さんは燻製釜の準備

を始めた。新しい木のチップをならべている。

「まあ、夢の中まで追いかけられれば、この鱒も思い残すことはないだろうね」と言いながらお祖母さんは包丁をずっと腹に刺し、慣れた手つきではらわたを取った。こちらの話はあくまで夢のことであって、今夜の夕食の話になにも関係ないと言われているようだ。

「おや、この子はなにかをくわえているよ」

「ああ、そりゃ藻だ」振り返ったお祖父さんが目を細めて言った。

「そうなのかい」お祖母さんが指先で掴んで口から藻を引き出した。

「昔からこいつらは藻を餌にしてると言われているからな。網のわしらには関係ないがな」

「それでこの魚は昆布の出汁が効いてるってことだね。お祖父さんも次は昆布漁でもやってみたらどうなんだい」

「昆布じゃなくて藻だよ」お祖父さんが面倒そうに言うと納得いかないお祖母さんが「昆布と藻の違いって何なんだい？」と聞き返す。

「そんなことはいいから、燻製の仕込みを終わらせないと夕食もはじまらないだろ。客人もお困りだ」

「オルターさん、あの湖はね、私らが子供の頃にはもっともっときれいでね。深いところまで透けて見えてたものさ。湖底かどうかはわからないが、下の方が緑色になっていてね。そりゃあきれいだっただよ」お祖母さんの話は尽きない。

「昔の話はもういいんじゃないか」お祖父さんは何度も同じ話を聞かされているのだろう。

「湖底を見ていると湖に吸い込まれちゃうものだから、用もないのに湖に近づくなつてよく言われたものさ」お祖母さんの話は終わらない。

「泳げもしない女子供が行くところじゃないってことだな」

「私だって湖に行かせてもらってれば、あんたよりいい漁師になってたさ」

「また、婆さんのもしもやっていたら話が始まったな」

「生まれ変わったらわたしがあんたの面倒を見てあげるよ。そのときにはミドリ鮫も大漁だよ」

お祖父さんもお祖母さんの勢いにすっかり飲込まれて、最後のほうはだまって聞くだけになってしまった。

お祖母さんの話がひとしきり終わると、お祖父さんが耳元で「それで、鮫はでかかったのか？」と小声で聞いてきた。「大きさもさることながら、この世のものとは思えない美しさで」と言うと、お祖父さんは表情も変えずに小さく頷いた。きっと、男同士の会話はこういう形で繰り返されてきたのだろう。みんなミドリ鮫を捕まえようとしたことがあるというのはこういうことだったのだ。

お祖父さんは椅子から腰をあげると、「それじゃあ、こっちは夕食の準備ができるまで少し休ませてもらうかな」と言って部屋を出て行った。部屋を出るときに、「この世のものじゃないということだな」とひとこと言い残してドアを閉めた。

第2話 探さないこと

戻って来た時からまた当たり前のように時間が流れて行く。向こうで考えていたことの答えが何も得られないままに周りはいつもと同じように過ぎて行く。

わかったことと言えば、ドットトラウトがどちらの世界にも生息しているということ。それとユイローには実があって、強い覚醒作用か幻覚作用のようなものを持っている可能性があるということ。ここの出島の周りに茂るユイローにも同じような実がついているのだろうか。

「お祖母さん、ちょっと教えてもらっていいですか。あの、料理にユイローを使うことはありますか？」

「ユイローの湯に使うことはあるけども……」

「実も使わないですか？」

「どうなんだい、ユイローに食べられる実が生るのかね」

「そうですよねえ」

お祖母さんはユロミのことは知らない。鍋のスープを少し味見して、思い通りの味がついたのを確認するように二三度領いた。

「お祖母さんはずっとこの土地ですよね」

「ここで生まれて、ここで育って、お祖父さんと出会って……あれでも昔はいい男だったんだよ」

「そうでしょうね。いまでも十分に。それで、子供の頃からジノ婆さんも？」

「歳は聞いただけ？ 子供のころどころか、わたしらの祖先がこの土地に入植したころからいるさ。生き字引もいいところだよ」

「ずっと一人なんですか？」

「どうなんだかね。親しくしていた人がいなくなったって話はしていたことがあるそうだが、その人がどういう人なんだかは知らないがね」

「いなくなってしまうというのはどういうことなのでしょう」

「ここいらには、外海に出て商売する者もたくさんいたから、土地にじっとしているようじゃそれこそ役立たずって烙印を押されたもんだよ。鮫なんか追いかけた日には帰ってきやしないよ。それでも、この土地が嫌になってほかの土地に移り住んだっていう話はあまり聞かないがね」

「お祖父さんは戻ってきて良かったですね」

「ははは、ほんとだ、ほんとだ」

「それにしても、みんなどこに……」

「オルターさんも探しものはほどほどにすることだよ。ここじゃ、なくなったものは探さないというのがうまい生き方と言われてるんだよ」

それはウォーターランドも同じだ。景色の美しさだけではない何か共通するものを感じる。

「昔から、ないものばかり探していると、自分もなくなるって言うんだよ」

ないないさんはどうなのだろうか。いつも何かを探している。探すのをやめれば幸せになれると言われればそう思えなくもない。探しすぎるあまり自分自身がなくなってしまうのでは仕方がない。それこそいったい何のための人生か。そう考えると、ノートをいつまでも追いかけている自分自身はどうなんだろうと気になってくる。探せば探すほど知らない世界に引き込まれていっているのではないだろうか。その結果自分を見失っていく。それがわかっている、わからないことを知りたいという人間の欲望を消し去ることはむずかしい。

「探しているものが何かわからないというのはどうなのでしょう？」

「それは探しているっていうのかい？」

確かに、何か物足りなさがあるだけだと言ってしまうえば、ただの欲しがりにはしか見えない。

「そう考えると、コノンさんが足りないことが好きだというのは上手な生き方なのでしょうね」

「ほんとだ、ほんとだ」お祖母さんは自分の言うことがわかってくれたのがうれしいようだった。それも大好きなコノンさんのことだからなおさらだ。

「欲に囚われた人間は他人のものでも自分のものにしようとしませんから困りものです」

「まったくだね」

「なんでもかんでも自分のものにしようっていうのはどういう料簡なのでしょう」ボルトンの水に対する執着が頭を過った。

「コノンを騙すような輩がいた日には私が許さないからね」手に持った玉杓子をいまにも振り回しそうな勢いだ。

「ごめんなさい、料理の邪魔をしていますね」

「いや、いんだよ。コノンが下ごしらえしてくれているから、ただ煮込むだけでいいのさ」振り上げた玉杓子が鍋に戻った。

「今夜はコノンさんの料理ですか」

「あの子はどこで覚えたんだか私に似ないで料理がうまくてね」

「いやいや、お婆さんの料理もおいしいですよ」

「あたしのはただの田舎料理さ」

お祖母さんはそう言うけど、この土地に合うのはお祖母さんの料理だ。

「そういやオルターさん、あれだね、あたしにもその秘密のノートとやらを見せてもらえないものかね」

「ああ、あれは秘密ではないのでいつでもどうぞ」

「村の楽しみなんて、綺麗な花を見るぐらいなもんだから、楽しみらしい楽しみもなくてね」

「でも、お祖母さんまで探し物に巻き込まれてしまいますよ」

「あはは、うまいこと言うね。でも、もしかするとオルターさんが探すのをやめられるかもしれないし」

「え？」

「探してるものが見つければいいんだろ？」

あらためてそう言われると、自分自身何を探しているのかさえもよくわからないのが歯がゆい。誰に頼まれたわけでもないし、自分のことでもない。ということは何も探してないということなのだろうか。

「そんな深刻に考えないでいいよ。この土地にいた人間が書いたものだという話を聞いたから。ちょっとした興味だよ」

「そうですね。後で部屋から持ってきます」

部屋に印刷したノートを取りに行き、今日のことを書き残そうとして書くものがないことに気づいた。マリーさんからもらった手帳はどこに置いて来てしまったのだろう。

第3話 変わらないノート *

オールドリアヌは鮮やかな彩りも影を潜め、草木も冬越しの装いになっている。この地方にクリスマスがあるのかどうかはわからないけど、収穫の時期になれば感謝祭のような催しは何かしら行われるだろう。お祭りごとということであればスレイトン・ケープのほうでも骨董市とは違うものが開かれるかもしれない。収穫を祝い、新しい年を迎えるのは万国に共通する祝い事としてどこの地方にもありそうだ。

***** ノート *****

夏が過ぎても気温が大きく下がることもなく、年間を通じて過ごしやすい島であったことを神に感謝したいと思います。色とりどりに実る果実を見ているだけでも、この島の豊かさを感じることができます。すべての食べ物は乾燥させて保存食にしていますが、小麦の焼ける匂いだけは島に来てからもずっと忘れられないでいます。夏の間には小麦に変わるものはないかと探していましたが、見当をつけていた草にはそれぞれにそれらしい実がつけました。順番に擦りつぶしてパンが焼けるのかどうかを試す毎日です。おいしいパンが焼けるものはやはりどこかしら小麦に似ているところがあって、こんな辺境にある孤島でも大陸との種の繋がりがあつたものかと感心させられます。それはこの島の豊かさはあたかも自分が願ったものが命を得て形になっているのではないかと思えるほどで、何かに似ているというよりもすべての種の起原がここにあるのではないかと疑いたくなるほどです。リアヌシティほどの寒暖差はないものの、黄金色や茜色に変わった木々の様子は綴れ織りを見るような美しさで、赤い月の夜には島全体が燃え上がるような紅色に染まります。海の幸も山に劣らず豊潤で、見たこともない鮮やかな色をもった魚が季節を問わず網にかかります。シミリーナ地方は地理的には温暖な気候の地域に属しますが、海流の関係もあり熱帯地方の魚も生息しているのかもしれない。海のことをもっと知りたくて、子供の頃に舟工房で見たのを思い出しながら見よう見まねで船作りも始めました。できることなら、島の収穫物をたくさん持ち帰れるような舟をつくりたいものです。この島の果実がリアヌシティの市場に並ぶことを想像するだけで心踊る気持ちになるのです。

***** ノート *****

収穫のころには誰もが喜びと感謝の気持ちでいっぱいになる。ノート氏もこの時期を迎えてはじめて島の収穫物だけで生活をしていけるという確信を得られたのだろう。自然豊かな島の産物をリアヌシティへ届けることも本気で考えていたかもしれない。それは村の近代化に対するささやかな抵抗でもあつただろう。

久しぶりにノートを読むと時間を経つのも忘れてしまう。こちらの世界に戻ってくると、やはりこのノートを読みたくなる。そうすることだけが自分の居場所を確認できるかのように心が落

ち着きを取り戻す。ノートだけが自分の居場所というのも変な話だけれど、どこかに起点を置いておかないと自分を見失いそうになるのも事実だ。そのノートをオールドリアヌの人と共有できるというなら、それこそ願ったり叶ったりの話だと思う。

気がつくとき煮物のいい匂いがしている。食堂からお婆さんの話し声も聞こえる。耳を澄ますとコノンさんと話しているのがわかる。うさぎの餌集めが終わって帰ってきたのだろう。ちょうどいいので、ノートの話をコノンさんにも聞いてもらうことにした。彼女が自分の意志で放火したとはどうしても考えられない。ノートを見てもらうことでわかることもあるような気がする。

「コノンさん、おじゃましています」

「お久しぶりです」

「餌の方は大丈夫でしたか？」

「冬になるまでに集めておかないといけないので」

「そうか、冬はうさぎの食べ物もなくなるんですね」

「この辺りは雪が結構降るので。野生なら冬眠するんですけど、人の世話になってしまうとだめなようです」

「ウォーターランドならどうでしょう？」

「こちらよりは餌に困らないようにも思ったんですけど」

「餌というのは何かの草ですよ？」

「オルターさんはユイローはご存知ですか？」

「あ……ユイロー……ユイローが餌なんですか」

「ご存知ですよ」

「いや、その、刺激が強いのかなと思って」

「どうなのでしょう。あの子たちは好きなようですよ」

「なるほど。うさぎは平気なんだ」

「ユイローの湯はちょうどいい酔い心地だよ」お祖母さんが言った。

「身体が暖まるよね」コノンさんも好きなようだ。

同じユイローがあるというのも偶然ではないかもしれない。そうだ、唯一残っていたオリジナルの透かし入りのページの絵もユイローだった。

「あの、この中にノートを印刷したものが入っているので、コノンさんもよかったですらどうぞ」

「このノートで何かわかることでもあるんですか？」

「いや……何がわかるということでもないんですけど」

言ったとおりだろという顔をしてお祖母さんが笑っている。

「えっと、誰が書いたのかわかるといいなあと思っていて……」

「書いた人を知りたいということですね」

「書いたのがこの村にいた人間らしいから、コノンも見せてもらいな」

「村にいた人があの島に行って書いたノート……」コノンさんは自分の気持ちと重ねあわせているように見えた。

「このノートが私らを引き合わせてくれたと思えばありがたいことだしねえ」

「そうだよね。このノートのおかげだね」

ノートが何かを引き寄せているのか、誰かを引き合わせているのか。真実がどこにあるかわからない中でノートだけが変わらずにあり続けると思えてくる。

第4話 夕食の煮物

「ウサギの餌はどの辺りで？」

「湖の北の方で。以前、出島に行く途中でウサギがいるとお話したあたりです」

「え、あそこからユイローを運んで来たんですか？」

「ええ。でもほとんどは舟で運ぶので」コノンさんは当たり前のように言うけど、一人でやるとなるとなかなかの力仕事になるだろう。

「漁がなければお祖父さんも手伝ってくれるからね。明日は頼むといいよ」

コノンさんが持ち帰ったユイローを見てみたが、刈り取られているので根にユロミがなっていたかどうかはわからない。女性が根っこから抜き取るのも結構大変な仕事になるだろうから、そんな実があることにも気づいていなくても不思議ではない。それよりもコピがユロミを知っていることの方がおかしいのかもしれない。それともあれは意識世界だけの話なのだろうか。部屋の隅の揺り籠の中に入れられた足のないうさぎのピークはずっとユイローを食べ続けている。

お祖母さんが竈から煮物の鍋を下ろしてテーブルの中央に乗せた。

「コノン、食事の用意ができたからお祖父さんと呼んできておくれ」

それぞれの椅子の前には大ぶりのお皿と木のスプーンが順番に並べられていく。

「やっと夕飯にありつける」お祖父さんの声が聞こえた。

「今日はお祖父さんの好きなコノンの煮物だよ」

「そうかそうか。滋養たっぷりのあれだな」

「お祖父ちゃん、新しい薬草も入れておいたから」

お祖父さんはコノンさんがよそってくれるのをうれしそうに見ている。

「これで、ますます元気になるな」と言いながら受け取ると、お祈りも忘れて皿の中の薬草を探し始めた。

コノンさんとお祖母さんの作った煮物は想像通りのおいしさで、お祖父さんが楽しみにしているのもよくわかる。お祖父さんはドットトラウトの漁をしているときよりも幸せそうに見える。何気ない一日の終わりに家族いっしょに夕食をできることに勝るものはない。

「そうだオルターさん、うさぎたちを島に連れて行くのはいつにしましょうか」

「もう少し待ってもらえますか」と言いながら、ユロミが湖畔のユイローにも生ってないか確認しないとイケないと思った。

「まだ島には戻らないね」お母さんが念を押すように言った。

そう言われてはじめて、もう二ヶ月近く帰ってないことに気づいた。意識世界の島に戻っていたこともあってあまり日にちの経過を感じないが、ずっと待っている身からするととても長く感じるだろう。留守番を頼んだミリルさんも寂しい思いをしているかもしれない。

「冬までには一度戻った方がいいだろうな」とお爺さんが言うと、お祖母さんがすぐに「ここは冬の景色が格別なんだよ」と返した。

「でも、ウォーターランドの海と星空は特別ですよ。夏でもあれだけきれいなのですから、冬はどれほどかと思います」コノンさんがこちらを見て言った。

「でもこちらのような雪景色を楽しむことはできないですね」

「そうだよコノン、ここの雪はみんなきれいだっていうだろ？」

湖がきれいならそれが形を変えた雨も雪もきれいかもしれないと思う。水も雨も雪も霧もみんな同じだ。

「わしらみたいな年寄りには住み慣れたところがよくてな」

「あんたは鮫探しだからね」お祖母さんがうれしそうに言った。理由はなんであれお祖父さんがこの村にいてくれることが幸せなのだろう。

「羽を広げてどこにでも飛んで行けるのはコノンさんぐらいかもしれないですね」と言うとお祖母さんが、ちょっと寂しそうな顔をした。できればみんなここにいてほしいのだろう。コノンさんの両親がリアヌシティに住んでいるというのも何か事情があるのかもしれない。

「トラピさんたちは、もう島に着いたでしょうか」

「船次第だろうな」

「あの、大道芸というのはすごいもんだね。一晩で村の人気者になったようだよ」

「芸は身を救うとはよく言ったもんだな」

「ほんとだねえ。もうこの村に、あの二人を知らないものはいないだろうね。さすがのホーラーも気を許すんじゃないかね」

「ホーラーか、あいつまた特別だからな」

トラピさんとナミナさんはきっと何か新しい情報を得ただろう。ホーラーだってあの楽しさをわからないはずがない。

「そうだ、あの、スロウという名前の方は村に来てませんか」

「お祖父さん、スロウだって、知ってるかい？」

お祖父さんは煮物を食べることに気持ちがいて、だまって首を横に降るだけだった。スロウさんはまだここには来ていない。というより現実の世界ではスロウさんはウォーターランドにいるということなのだろう。それを聞いて少し安心した。港に戻ったらスロウさんに手紙を出して、ここに来てもらおう。湖に潜ってもらえればわかることがありそうな気がする。

「コノン、この薬草もジノ婆に教えてもらったのか？」

「そうだよ。腰痛に効くって」

「そうか、それはありがたいな」

気がつかなかったけれど、お祖父さんは長年の漁で腰を痛めているのだろう。投網を引くにも相当の力があるはずだ。大漁を喜んでばかりいられないのかもしれない。それをまったく顔に出さないのがお祖父さんらしい。

「お祖父さん、ノイヤール湖に潜った人っているんですか？」

「若い頃はしょっちゅうだな。ただ、深いぞ」

「オルターさん、きれいなものには気をつけたほうがいいって言うだろ」お祖母さんが忠告するように言った。

「湖に落ちて戻ってこなかった人も多いので」コノンさんもお祖母さんと同じ考えのようだ。

「女子供はだめだな」

「また、その話かい」お祖母さんは納得できないようだ。

「コノンさん、緑の石は湖底にあるって言っていましたよね」

「昔はそういう強者もいたってことだな」お祖父さんが答えた。

「あんたは行かなくていいからね」お祖母さんが釘を指すように言う。

鍋いっぱいにあった煮物が半分ほどになってみんなのお腹がいっぱいになったところで、お祖母さんがお茶を入れに水場に立った。

「これがノートなんですね」コノンさんが袋を覗くようにして言った。

「それは印刷機で刷ったものなので本物ではないのですが、かなり忠実ですよ」

コノンさんが紙をめくるのを、お祖父さんが興味深そうに見ている。

「こういう強者もいたというわけだな」

「ほんとうですね。知らない世界への一人旅ですからね」

「でも、どうしてそんな旅をしたのでしょうか」

「どうしてなのかは誰にもわからないさ」

「ゆるりと動く時間を探しに行ったようなんですけど」

「ゆるりと動くなってなんだい」お茶を持ってきたお祖母さんが聞いた。

「時間だってゆっくりしたいときがあるってことだ」

お祖父さんが言ったのを聞いて、コノンさんがクスリと笑った。

第5話 光りもの

部屋には小さな暖炉がある。この時期になるとさすがに暖房がなしでは過ごせない。部屋の隅には薪が重ねられていて、いつでも暖を取れる気遣いがうれしい。

ノートを預けてしまうと本当に何もすることがなくなってしまい、夜がとても長く感じられる。それでなくても冬の夜は長いから、夏の頃に比べると倍ぐらいにもなったような気さえする。

コノンさんは明日はお祖父さんとうさぎの餌のユイローを集めに行くということだったけれど、さすがにいっしょに行くという希望は聞き入れてもらえなかった。当然と言えば当然の話なのだけれど、お祖父さんから休んだ方がいいだろうとたしなめられてしまった。仕方がないので、ユイローの根に実がなっているかどうかだけ見てきてもらいたいとお願いした。ユロミにこだわる理由についてはとくに聞かれなかった。実を持ち帰れば庭でユイローを栽培できるかもしれないと思ったのかもしれない。

部屋にあるのはベッドと暖炉と作り付けの棚だけで、時間をつぶせるような気の利いたものもない。唯一の楽しみかもしれない窓も夜の間は防寒のために雨戸が閉められていて、外の景色を楽しむこともできない。ただ、部屋の壁は漆喰が塗られているので、石のような冷たさを感じることはない。

することもなく向こうの世界にいた時のことを思い出している時に、ネモネさんがここで水を集めていた話はどうなっているだろうと思った。意識世界が夢のようなものであると考えるなら、こちらと矛盾があってもおかしくはない。ただ、あれだけ寸分も違わない世界を見せられると、逆にこちらの世界が以前とまったく同じであるかどうか確信を持たなくなってしまう。気になり出すとまたいつものように目が冴えて眠れないので、炊事場に下りてネモネさんの使い残した瓶があるか見てみることにした。

ネモネさんはもうスレイトンケープのホテルに帰ってしまったから、水集め用の瓶がまだ炊事場に残っているかどうかはわからない。本人は船長の船で島に戻っているだろうということを考えると、置いていても使い道もないからお祖母さんも処分してしまったかもしれない。

暗がりの中で卓上のランプを手探りで探していると食器棚の陰にぼんやりとした明かりが見えた。青緑色の光が暗がりの中で微かにうごめいている。さすがに気味が悪かったので、近づく前にランプに火を灯すと、そこには無造作に並べられた瓶があった。おそらくこれが、ネモネさんのために集められた瓶だろう。中に入れられているのがミドリモであることはすぐにわかった。水の入った瓶の底の方に沈殿したミドリモが限りある力を振り絞るようにして光を発している。紙のラベルにお祖母さんの字で「藻」と書かれている。ドットトラウトがくわえていたものを

そのまま瓶にいれたのだろう。このままにしておくとか苔のようにどんどん増えて行くのだろうか。増えれば、これを釣りの餌にすることもできるし、電気もない村では足元を照らす照明の代わりにもなりそうだ。

ミドリモの後ろの瓶に別のものが入っていることにすぐ気づいた。そちらのほうの瓶の中には小さな虫が一匹入っていた。やや丸みを帯びた瓜のような形が可愛らしい。大きさはてんとう虫を一回り大きくしたぐらいだ。瓶をなんとかよじ登ろうとしているけど、何度やってすべって上には上がれない。かと言って瓶には羽を広げられるほどの空間もない。何度も繰り返される動きを見ているうちに小さな虫に情が移ってしまい、不憫に思えてきた。なんだか意識世界にいる自分を見ているようでもあった。この虫もあやまって瓶に落ちたのだと考えて、瓶から出してやることにした。

逆さまにした瓶からぼとりと落ちた虫は、一瞬何が起きたのかわからなかったのか、じっとしたまま動かない。ちょっと心配になって指先で触ると意識を取り戻したのかあわてて動き始めた。その瞬間、お尻の方がぼおっと青い光を発した。

「あ、空虫……」

あわてて瓶に戻そうとしたときには、その身体は自由を取り戻した喜びに力を得て、指先をすりりとると、薄暗い部屋の中に青い光の線を引きながら何回となく旋回しながら高い天井の上の方まで一気に上がって行った。

数百年も前にいたという空虫は、この村のどこかで小さな命を脈々とつないでいたのだ。ノートの記事がここでも現実に起こっていることに身震いするほどの感動を覚えた。ノートでしか知らない空虫が今目の前を舞っている。ジギ婆さんと見たという夕日の光景が自分の体験のように浮かび上がってきた。

青い光を見た時に、すぐに捕まえて瓶に戻さないとと思ったものの、そうすることに何か価値があるのだろうかと考えてしまった。営々と命の営みを続けている彼らの自由を奪うことなどできるわけではないし、悪くするとそれによって世界の一部が崩れてしまうような気さえした。空虫がいたことでノート氏との時間が途切れず、今もつながっているといううれしさでいっぱいになった。この場所とこの時間が一本の線につながっている。このこと以上に大切なことがあるだろうか。

空虫の青い光を見ていると炊事場から離れることができなくなり、椅子に座ったまま天井をふわふわと舞う様子を眺めていた。ネモネさんが水を集めていた瓶の中で空虫を見つけたのは偶然ではないような気がした。何かに少しずつ引き寄せられている。時間は戻っていないけれど、すべての出来事が当時の時間に近づいているような気がする。

もう一度会えるかどうかもわからない空虫の青い光は、記憶のページに青インキで文字を書くように天井高く舞い続けた。青い光と瑞々しい青いインキがひとつになっていく。

気がつくともテーブルに伏せたまま朝の日差しを受けていた。ランプは片付けられ、肩には毛布

がかけられていた。お祖母さんかネモネさんがかけてくれたのだろう。すぐに天井の方を見上げたけれど、空虫は見つけられなかった。朝になってどこかに隠れたのか、もっと広い世界に飛んで行ったのか。

空虫の入っていた瓶だけがテーブルに残った。手作りと思われる少し歪みのある瓶は、なにの意味も持たなくなったかのように生氣のないくすんだ色に見えた。

カーテンを開けると気温が低いせいで、窓の外にはもやが立ち込め、まったく視界がきかなくなっている。動物の鳴き声も聞こえず、まるで黄泉の世界にでも来てしまったような静けさだ。

地面には薄く雪が積もっていた。今年のはじめての雪なのだろうか。

第6話 白い朝

「おや、お目覚めかね。こんな寒い日に炊事場で寝るようじゃ相当にお疲れだね」

「まさか、雪が降るとは思いませんでした」

「まあ、この程度の雪なら、お天道様がちょこっと顔を出せば消えるがね」

もう、お祖父さんとコノンさんはうさぎの餌取りに出かけたのだろう。ピークの入っていた籠がなくなっていた。瓶のあったところを見ると、何もなかったかのように昨日とまったく同じように置かれていた。天井を見上げると、また、幻覚を見たかという声が聞こえたような気がした。もう、どこから声がしても驚かないけれど、見えたものが消えてもおかしいと感じなくなっていることのほうがやっかいかもしれない。

「ソダーさん、ソダーさん……」また、あの声が聞こえた。いつもよりはっきりしているのは気温と関係あるのだろうか。内耳の何かが寒さで敏感になっているのかもしれない。

「オルターさん、ぼおっとしてどうかしたかね。霧が晴れたら少し歩いてみるといいよ。こういう日は雪の結晶で村がキラキラしてきれいだからね」

「ああ、それもいいですね。幻想的な景色が楽しめそうだ」

「もっと寒くなると、雪じゃなくてね結晶そのままが降ることがあるんだよ。私らはスノウブリックって呼ぶんだけども。なかなか他のところじゃ見られないものらしいよ」

「雪の結晶が大きいってことなんですか」

「大きいというか結晶がきらきらと降るんだよ。理屈はわたしにはわからないから、詳しい話はお爺さんに聞いとくれ」と言うとお祖母さんはいつもの朝と同じように炊事の準備に取り掛かった。100年前から毎朝同じことを繰り返していると考えればそれはそれでとても意味深いことのように思える。この村にいと変わらないことこそ大切なのだと言われているようだ。生きるというのは詰まる所ということなのだろう。

どこかに空虫がいらないかと思ってまわりを見回すと、机の横に読みかけのノートとべっ甲の眼鏡が置いてあった。お祖母さんはさっそく読んでくれているようだ。

「ノートは楽しめましたか」

「ああ、コノンと半分ずつにしたよ。あの子は全部読んだって言ってたよ」

二人とも本を読むのは好きなのかもしれない。冬が長いところではわからなくもない話だ。

「公書館を利用されることもあるんですか」

「コショウかい？ 使わなくはないけども、薬味は使わない方が作物本来の味を楽しめるからねえ」

「あはは、公書館じゃなくて、えっと、村に文庫がありますよね」

「え、歴史文庫のことかい？」

「ええ、もしかしてお祖母さんは読み物がお好きなのかなと思ったので」

「あそこは村の記録ばかりなもんだから、この年になっても勉強させられているような気分だね。ホーラーが出入りや本の扱いをうるさく言うから、あの子が番をするようになって余計に足が遠のいてしまったかもしれないね」

ホーラーはよそ者にだけではなく、村の住民にも気を許してないというのは意外だった。

「ちょっと知恵が足りないもんだから、言いつけをきちんと守ってはいるんだけども、やることが極端なものだからね。とにかく保存が第一で、なかなか融通はきかないよ」

「ホーラーの家系が代々文庫の館長なんですか？」

「家系というか、村の見識者に引き継がれてきたわけだけども、ホーラーはどういうわけかナーシュさんと仲良くてね、あの人がいなくなってからというもの勝手に使命感を感じてしまったようだね」

「ナーシュさんはよくあそこに？」

「いりびたりさ。あの人が実質的な館長みたいなもんだったよ。なもんだから、いつのまにかこの村のことに一番詳しくなっちゃったね。行方がわからなくなったけども、あの文庫を知らなければあんなことにもならなかったかもしれないよ。知らないでいいことまで知ってしまったのじゃないかね」

お祖母さんの話を聞いていると、村人にとっては公書館はかならずしも喜んで出かける場所でもないのかもしれないと思えてきた。公書館の話をしているうちに外の様子も見てみたくなってきた。

ドアは寒さのせいかきしむような音がして、いつもより重く感じる。少し力を入れると隙間から冷たい冷気が部屋の中に入り込んできた。

「オルターさん、そこの上着を着て行くといいよ。ほら青いのがあるだろ」

お祖母さんの好意をありがたく受けて手編みの上着を羽織って出た。吐く息は白く、すぐに濃い霧と混じり合ってしまう。付近の民家も窓の明かりでかろうじてわかる程度で、想像以上に深い霧だった。ノイヤール湖や水路の暖かい水がこの真っ白な景色をつくりだすのだ。湖が自分の存在を誇示しているようにさえ思える。

雪のほうは思ったほどでもなく、石畳に薄くかかる程度だった。雪の朝というより霧の朝という方が的を得ている。お祖母さんの言う結晶の輝きを楽しむのにはもう少し日が登るのを待たないといけないようだ。それまでこの淡いベールのような雪が溶けないでいてくれるか心もとない。それほどに薄く可憐な初雪だった。

水路の方に少し歩きかけたところで、前方からこちらに向かってくる人影があるのに気づいた。考える間もなく、コノンさんとお祖父さんだということがわかった。

「おや、オルターさんこんなところで何をしているのかね」

「初雪だというので見物に」

「初雪はいいんだが、わしらは霧のおかげで船も出せなくて、このとおり出戻りだ」

「お祖父ちゃんが危ないって言うから」コノンさんは納得していないようだ。冬は待ってくれないから餌の確保のほうが心配なのだろう。

「まだ、日にちはあるさ。白い日の湖はやめたほうがいい」

確かにこれだけ深い霧に覆われると、道を歩いていても方向感覚を失いそうになる。闇夜の夜中に歩くのとそれほど変わらない気さえする。

「じゃあ、三人で仲良くご帰宅とするか。祖母さんもお待ちかねだろう」

きつとこんな日に出かけることもないだろうとお祖母さんに止められたのだろう。お祖母さんのご満悦そうな顔が目浮かぶ。

第7話 ノートの家

家に帰ると、3人分のカップが用意してあった。お祖母さんはみんなが戻ってくるのをわかっていたようだ。何も言わずにお茶をいれてくれた。生姜のスライスが入っていた。冷えたからだがじんわりと温まっていくのがわかる。

「オルターさん、村の雪景色もいいもんだろ」お祖母さんがこちらの反応を伺うように言った。

「雪景色じゃなくて霧景色だな」お祖父さんが小さな声で言った。コノンさんが笑っている。

「本格的な冬になってスノウブリンクが舞い降りてくるころには夢の世界でしょうね」

「ほんとにそうなんだよ。ねえ、あんた、スノウブリンクは特別なんだろ」

「あれは、水と関係してるんだろうな。水の成分が結晶をでかくしてると言うがな。本当のところは誰にもわからない」

「それこそ歴史文庫に行けばいくらでも資料があるだろうがね」

お祖父さんと水の違いについて話をしているときに後ろにあった水集めの瓶が目に入った。

「お祖母さんは空虫を見たことがありますか」

「ああ、最近めっきり見かけなくなったねえ。あんなもんどこにでもいたのにおかしなものだね。ドームになってから虫も住みにくくなったかもしれないね」

「ノートにもその虫の話し出てきましたね」コノンさんが言った。

「あ、読んでみました？」

「この村の昔のこともいろいろ書かれていたので楽しく読ませていただきました」

「コノンはあまり寝てないらしいよ。雪でちょうどよかったよ」

「それで、あの書いた人がいたところなんですけど、おそらくこのあたりですよね」

「そうなんですよ。めがね橋の近くだし、かなり似た景色なんですよね」

「ハロウズでノートを買ったっていうんだろ？ それだけでも間違いないよ、オルターさん」お祖母さんは最初のほうから読んだのだろう。

「じゃあ、もしかして……」コノンさんが言いにくそうな顔をしてこちらを見た。

「もしかしてなんだい？」お祖母さんが先を急かすように言った。

「ここなんじゃないかと」

「ここ？ ここって何がですか」

「ノートさんが住んでいたのが……」コノンさんはそれだけ言うとだまってこちらを見ている。

「なんだって。これを書いた人がここに住んでいたってことかい？」

「それもありえる話だな」お祖父さんが驚く様子もなく言った。

コノンさんが、心当たりのあったところを開いて説明してくれた。

「お祖母ちゃんが、階段の駆け上がりが欠けてるから気をつけなさいってよく言ってたのを思い出して」

「わたしも嫁に来た頃によく言われたからね。何度転んだことだか」お祖母さんが懐かしそうに言った。

「ここは部屋を貸していたことがあるんですか」

「あるもないも、今でもそうだからな」お祖父さんが部屋の鍵がぶら下がっている棚を顎で指して言った。

「ああ、オルターさんは、私の招待だからね。気にすることはないよ」お祖母さんはお金も代わりになるものも持ち合わせもないことをわかっていて気遣ってくれた。

「書かれている内容からしてここだってわけだな」お祖父さんがノートをめくりながら言った。

「あの、宿帳のようなものはないんですか」

「そりゃあるさ。それこそこの家の歴史みたいなもんだ。古いのはそれこそ歴史文庫に入っているよ。最近のものなら見てきてやってもいいが、このノート書いた人の名前は？」お祖父さんが椅子を立ちながら言った。

「名前……」

ノートのどこにも名前なんて書かれてなかった。お祖母さんもコノンさんもあきらめたほうがいいというように首を横に振っている。二人はそこまで知りたいとも思わないのだろう。

そのとき、またあの声が聞こえた。

「そうだ、ソダーという名前がないか見てもらっていいですか」

「その名前に心当たりでもあるのかい？」

「ええ、ちょっと気になっている人がいて」

お祖父さんが宿帳を見てくると言って部屋を離れると、お祖母さんとコノンさんとでノートに書かれていることと村に共通するところを順に読み上げ始めた。トラピさんたちの言っていたところも同じように出てきた。曖昧な記述も多いけど、ここじゃないと言えるものは何もなかった。少なくとも住人が同じ場所だと感じるのだからノートさんの住んでいたのがここである可能性はかなり高いと言える。

お祖母さんが「このノートも歴史文庫に置いた方がいいのかもしれないね」と言うと、コノンさんに「これは写しなんですよね」と聞いてきたので、ノートの一部を島にいた人から手に入れたら経緯を説明した。本物を探して歴史文庫に入れるというよりも、ノート氏本人が島から帰って来て自分で歴史文庫に納めたのではないかという気がしないでもない。彼がああ島で人生を終えたとはどうしても思えないのだ。いくら豊かな島だと言っても、生まれ育った土地を捨て一人で生きていくだけの価値があっただろうか。

「この人は島に何を探しに行ったのでしょうか。それともなにも探さなくて済むところに行ったとか」コノンさんが言った。

「ここも探さない人の村だから、欲しがらる人間が出て行ったということじゃないのかね」

「とすると大航海時代の例に漏れず一攫千金狙いだったと？ ノートの記述からはそういう風に

は見えないですけど、行ってみて考えが変わったのでしょうか」

「それとも他の男と同じ鮫探しかい？ そうでもなけりゃここにいて不都合なことでもあったのかね」

「私にはそうは思えなかったけど」コノンさんがノート氏の気持ちを察するように言った。何もほしいものはないのに同じように島に行きたいという彼女にはわかることのあるのだろう。

そのあとは、ウォーターランドにだけある不思議な草花や生き物の話になった。これには二人とも興味津々のようで、見たこともない自然の話が尽きることはなかった。とくにお祖母さんは植物にとっても興味を持ったようだ。昔の古い話しよりも今の島のことのほうが知りたいようだった。いつかお世話になったお祖母さんにも島の案内をしてあげたいものだ。

「そうだ、あその瓶はネモネさんの水集めの……」そこまで言うとお祖母さんが言葉をさえぎるように「そうだよ。次に来たときに片付けたなんて言ったらあの子も悲しむだろ？ また探してくるのも大変だしねえ」気がついてくれたのがうれしかったとでもいうような口ぶりだった。

水を持ち帰れないのがわかった今となっては、この先使われることもないかもしれないけれど、それはうれしそうに話すお祖母さんには言えなかった。

「昨日、あの瓶の中に空虫が一匹いたんです」

「空虫だって？ おかしなことをいうねえ。空虫が出たのは夏の少し前だから、何かの見間違えじゃないのかい」

「空虫っていまでもいるのかな」コノンさんが独り言のようにつぶやいた。

「コノンの生まれる前は湖が瑠璃色に光って見えたもんだよ。このノートの中にも出てきたね」

「え、ということは今はいないんですか」

「どうだろうねえ。わたしも子供の頃に見たきりだからね。でも、どこかにいたとしてもこの時期じゃないよ」

お祖母さんは、それは真冬に蝶が見えたというような話だと言って本気では取り合ってくれなかった。空虫を見たことがないというコノンさんもあまり現実味を感じないのか話半分で聞いているようだった。

雪の日は凜とした空気が村中に張り詰める。青い空虫の光はこんな季節にこそあうような気がする。瑠璃色の光を細く長く引きながら舞う現実にはありえない情景が窓の外に見えた気がした

。

第8話 宿帳の名前

ノートの話をしているとお祖父さんが古い宿帳を持って戻ってきた。全部で10冊ぐらいで古いものは分厚い皮の外箱がついていた。1780年ぐらいからは手元にあるのだという。250年分にしては少ないと思った。

「まあ、泊まる場所がない巡礼者を休ませるために部屋を貸したようなものだったからな。人伝えにうわさが広まって宿屋の真似事をしたってわけだ」お祖父さんが言った。

「巡礼というのはどこに？」

「なんでも南の方で聖水が湧くという話が出てからのことらしいね」お祖母さんが言った。

「ここの水だって十分大したものなのに、不治の病まで直す水がみつかったという噂が出て、はるばる大陸の北部から来る人までいたって話だけだな。いつだって噂話には尾ひれがつくから本当のところはわからないさ」

「ミドリ鮫の話が出てきたのはそれより後のことなのかね」お祖母さんが自分からミドリ鮫の話をするのはめずらしい。ノートを読んで興味を持ったのかもしれない。

「関係あったらどうする？」

「ミドリ鮫も尾ひれのひとつってことなのかねえ」お祖母さんがなんとか聞き取れるぐらいの声でぼそりと言った。

お祖父さんが苦笑いをしながらこちらを見た。加勢してくれというようにも見えたけれど、ミドリ鮫を信じていないお祖母さんに何を言っても無駄なことは二人ともよくわかっている。

「以前見た本に聖水のことを書いてありましたよ。なんとなくスレイトンケープあたりの話ではないかと思ったのですが」

そう言いながら、それが現実世界の話しだったかどうかがよくわからない。

「あんたも案外詳しいな。鮫を探すときに最初に目指したのはあのあたりだった」

「最初というと、ミドリ鮫の居場所はもっと先ということですか？」

「巡礼者はあそこを目指したが、わしらはもっと先だな。ミドリ鮫のいるのはあそこじゃない」

「ここの湖で見たという話でもなかったのですか？」

「鮫は淡水魚じゃないからな」お祖父さんはあきれたような顔でこちらを見た。

「ああ、やはり海ですかね。川との境目の汽水にも棲めないのでしょうか」

「たまに見たというものもないではなかったけれど、鮫にも道に迷うやつがいたってことだろうな」

「そんなもんだから男衆はみんな川を下って大航海ってわけだわね。でも鮫を見つけられなかったんだからしょうがないよ」お祖母さんが言うと、お祖父さんが小声で「鮫の話はご法度だからな」と言って笑った。

「それよりお祖父ちゃん宿帳のほうは？」黙って聞いていたコノンさんが気を利かせて話を変えてくれた。

「そうだ、そうだ。そんなことより台帳だったな」

「いましたかソダーという人」

「ああ、いたよ。泊まった人も住んでた人もいたようだな」持ってきた宿帳を開いてこちらに向けて見せてくれた。

めくってみると確かに六界錐に刻まれていた名前と同じ綴りのソダーという名前がある。この家に来た人だけで何人もいるようだ。ジギのような屋号だったのだろうか。

「それで、そのソダーというのは誰なんだい？」お祖母さんが言った。

「いや、実は時々呼び声が聞こえて」

「ソダーってかい？」

「ええ」

「心当たりは？」宿帳を見ていたお祖父さんがくすんだメガネを下げてこちらを見た。

「すみません。特になにもないんですが、ここに来てからも聞こえたもので。何か関係あるかと思って」

「なんだか妙な話だね。この家にソダーって人の霊が取り付いているんじゃないだよ。あんた聞こえたことあるかい」お祖母さんがお祖父さんに聞くとお祖父さんは聞こえるのは虫の声ぐらいだと言った。

「男の人の声なんですか」コノンさんが心配そうな顔をしている。

「あ、若い女の人の声かもしれません」と答えながらも幻聴のような感じなので性別もあまり考えたこともなかった。

「コノンも聞こえたことがあるのかい」

「聞こえたんじゃないくて、ジノ婆からもソダーという名前を聞いたことが……」

コノンさんの口からソダーという名前が出るとは思ってもみなかった。

「ジノ婆はなんだって？」

「詳しくは話してくれないけど、若い頃の何か思い出のある人らしいよ」

「それだけか？」お祖父さんもさすがに気になるようだ。

「オルターさん、ノートにその名前が出ていたわけじゃないんだろ？」

「残念ながら」

そう言うしかなかった。自分でもソダーがノートの主だという確信はない。ただ、赤い灯台の横にあった六界錐には間違いなくソダーと刻んであった。あの場所が夢か幻でなければ。

「ジノ婆が知っている人がいるとしても、宿帳にも何人もいるし。だからどうしたということでもないしな」そう言うとお祖父さんは宿帳を閉じてしまった。

お祖父さんもお祖母さんもわけのわからない話しにつきあわされていると感じたかもしれないけれど、こちらにしてみればノート氏がここに宿泊していた可能性があるということがわかった

だけでも大変な収穫だった。

ノートを書いたのがここにいたソダーさんかもしれないですものねというコノンさんの言葉にちょっとだけ救われた。

もしソダーという人がノートの主だとしたら、誰が彼を呼んでいるのだろうか。その声がただの幻聴でなく向こうの世界から届く声だとしたら。誰かが自分に何かを伝えようとしているように思えてならない。

第9話 使者

ドン、ドン、ドン。

ドアを叩く人がいる。

「こんな静かな日に騒々しいやつがいるものだな」お祖父さんが怪訝な顔をしている。

「雪で立ち往生でもしたのかね」そう言うと、ノックの鳴り止まないドアのほうにお祖母さんが急ぎ足で行った。

「どうかされたかね」と言いながらドアを開けると、吹き込む雪に混じって「コノンさんの家はこちらですか」という声が聞こえた。

「はい、私ですが」横にいたコノンさんが答えた。

「ミオがクラウドタワーに登っているのを伝言してほし……」というところまで来訪者が言ったところで、コノンさんは急に立ち上がった。眠りこけていたうさぎのピークが入っていたカゴをつかむようにして持ったかと思うとそのまま背負った。ピークは何が起こったのかわからないで目をまん丸にしている。

「うさぎの餌はどうするんだ」お祖父さんが出ていくコノンさんを呼び止めるようにして聞いた。コノンさんは振り返ることもなく「すぐ戻るから」と一言だけ言うと、戸口にいた使者を押し除けるようにしてそのままバス停に向かって駆け出した。

残ったお祖父さんとお祖母さんは何が起きたのかわからない。呆気にとられたまま顔を見合わせた。訪ねてきた人に事情を聞いても、タワーに登っているのを急いで伝えてくれと頼まれたと繰り返すばかりで一向に埒が明かない。

「ミオがタワーに登ったって何のことなんだい？ こんな寒い日に」とお祖母さんが言うと、お祖父さんも「そのミオっていうのはなんなんだ？」と言ったまま釈然としない顔で来訪者を問い詰めている。頼まれてきた来訪者のほうもなんで詰め寄られているのか訳がわからないと言いながら、逃げるようにして立ち去ってしまった。

お祖母さんはこちらを向くと、何でもいいから知ってることがあれば教えてくれという目で見ているし、お祖父さんもこんな日に飛び出して行った理由がわかるわけもなくただただ困惑している。

「えっと、たぶんコノンさんの知り合いの子の名前ではないかと」

それだけの説明ではあまりに言葉が足りなくて、二人とも首をかしげるばかりだった。聞かれたことに対してまともに答えられていないのは自分でもよくわかっている。だからと言って家族の家のことはしゃべってはいけないだろうから、何を言っても歯切れが悪くなってしまう。しばらく問答をしているうちにお祖父さんはこれ以上聞いても何もわからないだろうとあきらめたようで、気を紛らわすように雪で汚れた靴の手入れを始めた。

「でもその子がなんでコノンと関係あるんだい？ あんなにあわてることもないだろうに」お祖母さんはどうにも納得いかないらしく一人でぶつぶつ独り言を言っている。

「何か言い忘れたこととか渡し忘れたものがあるとか、でしょうか」そう言いながら、意味のないつくり話を心苦しく思う。お祖父さんは「こんな日にハイキングでもないだろうがな」と言うので雪を落とした靴をストーブの横に並べた。

「それにしても、あの子にうさぎの餌よりも大切なものがあつたのに驚いたよ」

「今日スレイトンケープに戻る前に寄ってみますよ。あまりご心配なさらないように」

「なにもなければいいんだがね。あの子も人を疑うことを知らないから、変なことに巻き込まれていないか心配だよ」

しばらく話しているうちに二人の動揺は落ち着いてきたものの、平静を装っているこちらもリアヌシティで何が起きたのかまったくわからない。一刻も早く後を追いたいものだけれど慌てて出ていくと、お祖父さんとお祖母さんがまた心配しそうなので、はやる気持ちを抑えて午後のバスで出発することにした。

ときどきクラウドタワーに登る人がいるという話は聞いていたけれど、それをあのミオ君がやるとは思いもしなかった。短い付き合いとは言え唯一のリアヌシティの友達だからこちらも気が気ではない。オールドリアヌの霧は一寸先も見えないほどだけれど、リアヌシティはどうなのだろう。霧の深い日をあえて選んだのだろうか。そうであれば人に知られずに登ろうとしたということかもしれない。そんなことよりも、彼はなぜクラウドタワーに登らなければならなかったのかがわからない。あんな気の遠くなるほど高い塔の先に何があるというのだろうか。ナーシュさんもあのタワーに同じように登って行ってそのまま帰って来なかったのだとしたら、なおさらのこと人ごととして済ませるわけにいかなくなる。

「オルターさん、これを持っていくといいよ。長い道中お腹も空くだろうし、列車の中で食べられるだろ？」と言いながら手焼きのパンで野菜などを巻き込んだブレドールの入った手提げの袋を渡された。

「あ、すみません。遠慮なくいただきます」

「ひとつはコノンに渡しておくれね。あの子の好きな自家製のチーズとピクルスを巻いてあるから」

お祖母さんはそう言うと少し潤んだ目でこちらを見た。こんなことでも恩返しになるのであれば喜んで引き受けさせてもらおう。

「帰るなら、いい燻製も持って行かないとな」お祖父さんもお土産の用意をしてくれている。どこまでもいい人たちだ。こんな土地から出て行ったノート氏にどんな事情があったのだろうかと思わずにはいられない。

椅子の上にはコノンさんの読んでいたノートがそのまま残っていた。ところどころに紙片が挟まれている。見るとこの村と一致すると言っていたところだった。花が好きな女性のことが書いてあるページにはメモ書きでジノと書かれていた。ジノという言葉に何か心当たりがあったのかもしれない。もつれた糸が少しずつほぐれていくような気がした。

窓の外を見ると、石畳の雪は溶けるどころかまた降り積もり始めた。出かける頃には一面が雪で覆われてしまいそうなほどに雪の勢いは増している。こんな天気ではバスは動くのかと思っていると、お祖父さんがこちらの気持ちを察したのか、「バスは止まらないよ。人口的につくられたものは、どこまで行っても自然の摂理とは無関係だからな」と言った。

第10話 悲しい空想

雪はまったく止む気配がない。外を歩いている人もいないから、足跡のひとつもみつけれない。まるで雪に閉ざされた世界に迷い込んでしまったような不安を感じる。

それでも予定の時間になるとバスは何事もなかったかのように眼鏡橋のバス停にやって来た。運転手もいないし、乗客もいないからこのままどこかに連れていかれてもだれも気づきはしないだろう。機械の誤動作で湖にでも落ちたらどうなるだろうかと、ありもしないことを考えてみたりもする。こういう時に無音で移動する乗り物は意味もなく不安を掻き立てる。一面真っ白な景色の中で振動も音も全くなければ移動しているという実感すら得られない。降り続く雪を受けても水滴のひとつもつかない透明なガラスの乗り物は外の景色を実態のない映像のようにも思わせる。

バスは湖のところまで行くと、ぐるりと方向を変えてリアヌシティに向かって戻り始めた。このバスは何に従って移動しているのだろうかと周りを見回して見ても、それらしいものは見当たらず、外にもバスを誘導していると思われるレーンや無線施設のようなものも見つけれない。まったく温もりを感じない無表情な機械を信じろと言われてもなかなかそういう気持ちにはなれないものだ。

降り続く雪はオールドリアヌの外れに近づいたところで小降りになり始め、気がつくときあれほど濃く垂れ込めていた霧も嘘のように消えていた。気候が変わったあたりがリアヌシティとの境目ということなのだろうか。気候が変わったというより、気候を人工的に変えているというほうが正しいのだろうかけれど。道に覆いかぶさる木々は秋をイメージする黄色い色からさらに褐色へと変わっていた。この紅葉の色も建物の色と同様に人口的に変えられているのだろう。木々が色づくだけで季節感を感じてしまうのだから人間の感覚というのも当てにはならない。

駅につくと、乗り込む人がいたので、オールドリアヌのほうは雪がすごいですよと親切に教えてあげたけれど何の返事もなかった。この街がそういうところだということのをあらためて思い出させられた。視線は違うところを見ている。目の前には暖かな交流などないところなのだ。

降りるとすぐに家族の家を目指した。トラピさんや、ナミナさんはもうリアヌシティを離れているはずだ。それぐらいの日は経っている。ミオ君がどんなに急いだとしてもまだ彼の姿は見えないはずだ。半径が何キロもある塔を登っているのだから、うまくするとまだ裸眼でも見えるかもしれない。どうしても彼の姿を見ておかないと、いつかまた来る再会の機会さえも絶たれてしまうような気がする。

家族の家にたどり着く前に、物見高い人たちが集まっていた。その先では、ボルトンの黒服が

通行を規制している。その様子はまるで警察官のようにも見える。彼らの持つ権限は思った以上に大きいのかもしれない。単に水を扱うだけの会社の職員というレベルとは考えにくい。

人垣を掻き分けながら前に進んで行くとコノンさんの後姿をみつけた。

「コノンさん！」

じっとタワーを見上げていて気がつかない。もう一度声をかけるとこちらに放心したような顔を向けた。

「オルターさん、ミオが……」 そう言った瞬間に目から大粒の涙がこぼれ落ちた。涙と嗚咽がしばらく止まらなかった。

「私がそばにいてあげられなかったから……」 と言いながらまた塔を見上げた。そこには小さな人影が見えた。それがミオ君だかどうかともわからない。

「オルターさん」

声をかけてきたのはヨシユアさんだった。いつものように表情を変えることもなくことの成り行きを見守っているように見える。なぜ彼はこれほどまでに冷静でいられるのだろうか。

ヨシユアさんは塔を目指す子供はミオ君が始めてではないのだと言った。前に登った子供たちも帰って来ないのでその後を追っているのかもしれないけれど、真実は本人たちにしかわからないとの説明だった。それはまるで通りすがりの人のように感じられるほど淡々とした口調だった。

行方のわからなくなった友達を探しに行っているのかと思っていると、ヨシユアさんはさらに「家族の関係で満たされていないということを考えると、その代償を塔に求めているのかもしれない」とも言った。

「塔に代償を？」

「もともと彼らの親は子供との交流さえも忘れてしまっていますから、子供たちはあの塔に親の感情を奪われたと思ってしまうのです。この街では塔がすべての象徴とも言えますから、向ける先のない悲しみは塔に向かうわけです」

「感情もコントロールするというエゴラインのせいですか」

「そうとも言えますが、どうでしょうか」 含みを持たせるような曖昧な答えだった。

「塔に奪われたと言っても、そこに何かあるというのですか？」

「本来は、塔というよりドームシティの環境を選んだそのことに原因があるわけですが、子供達にはそれはわからない」

「安全で快適な環境の代償と？」

「そうですね」

ヨシュアさんの話は、家族の家を主催している人の言葉とはどうしても思えなかった。彼が親の愛情さえも得られなくなった子供達のすがる場所を作っていることは間違いのないのだけれど、それは優しさや思いやりとはほど遠いもののように感じた。これもエゴラインで生活した結果としての感情の表し方なのだろうか。

ヨシュアさんの言っていることが子供たちの望んでいるものであればいいのだけれど、それは誰にもわからない。塔を一人登っているミオ君の姿を見る限り何か間違っているように思えなくもない。

それは、子供達のために尽くしているコノンさんにとっても同じようで、尽くしても尽くしても子供は離れていくのだという。家族の家の子供達は本当の家族との関係を失って、家族の家に集まり、そして一人タワーへと登って行く。まるでミドリ鮫を追うような話だ。彼らにもミドリ鮫が見えたのだろうか.....。

ヨシュアさんが「ミドリ鮫がどうしましたか」と聞いてきた。それは聞きなおしというより言葉の意味を確認したいというような言い方だった。

「あ、失礼、独り言です」

今説明するようなことでもないと思ったし、説明する相手がヨシュアさんではない気がした。

コノンさんは祈るような目でミオ君の姿を見ている。もしかするとコノンさんもこの家の子供の一人だったのかもしれないと思った。

第11話 一切れのパン

1時間も塔を見上げていただろうか。螺旋の階段が塔の裏側に回り込んだところを最後に彼の姿は見えなくなってしまった。その後にはやり場のない喪失感だけが残った。コノンさんも最後に長いため息をつくとすべてが終わったとでも言うようにうつむいたまま押し黙ってしまった。

「きっと彼の思いは届きますよ」慰めになるのかどうかもわからなかったけれど、声をかけずにはいられなかった。

「オルターさん、よければ寄っていかれますか」ヨシユアさんが言った。

このままコノンさんを置いて行くこともできないので、スレイトンケープに戻るのを夕方まで伸ばすことにした。

家族の家は前と同じで、何も変わるところはなかった。ミオ君を書いた絵を探したけれど、彼が居場所にしていたところにはなかった。すばらしい絵でもなかったからどこかに片付けてしまったのだろう。

もしどこかにあったら、彼のことを忘れないためにも自分に戻していただけないかとコノンさんをお願いすると、「ミオが持って行ったと思います」という答えが返ってきた。迂闊にも涙が出そうになってしまって、咳をしてでごまかした。彼も親友とっていてくれたのだろうか。あんな絵でも一緒に持って行ってくれたのだと思うとそれが彼の支えになることを祈らずにはいられなかった。

「気に入ってくれたのですね」と言うとコノンさんはうなづいて彼が会いたがっていたことを教えてくれた。返す言葉が見つからなくて口をつむいでしまうと、コノンさんの目からまた涙がこぼれ落ちた。

彼は自分を書いた絵を手にして、ねじれながら天に向かって伸びる塔にたった一人で登っている。その気持ちを支えているものは何だろう。そう思った時に彼の姿が光に包まれていくように感じられた。赤い髪が彼の思いを表すかのように大きくなびいて、帰ってくるから待っていてほしいと言っているように思えた。彼が子供達の未来をきっとみつけてくれるはずだ。その勇気が無駄になることがあってはいけない。

家族の家の子供達はミオ君がいないこと以外に特に変わった様子もなかった。なかったというよりないように振舞っているというのが正しいのだろう。

「話さない方がいいのですね」と言うと、ヨシユアさんが目でそうだと言った。そう言われてしまうとここで何をしていればいいのかかわからなくなる。頭の中には彼のことしかないのでから

。

気がつくときコノンさんがいつもと変わらない様子で子供達の遊び相手をしていた。彼女も両親に忘れられた子供だったとしたら、この家族の家というのはなんのためにできたのだろうと考えずにはいられなかった。親に忘れられた子供達が一緒に暮らし、年長の子供が下の子供の面倒を見る。でも、その中からは家族の家を出て雲の上まで伸びる塔を目指して登って行く子供が後を絶たない。これはどうみても家族ではないし、家族の代わりにもなっていない。それが一番下層のレイヤーに置かれ、黒服のボルトンの目を避けるように暮らしている。それを主催するヨシュアさんの考えることなど想像もつかない。個人の思いから始めた慈善事業であるなら、彼が目指しているのは何なのだろう。聞けば、親に忘れられた子供を救いたいからというのかもしれない。それは否定もできないし、至極当然の答えだ。ただ、感じるのは何かがおかしいという感覚だけだ。その答えは塔に登る子供達しか知らないのだろう。

「あの、コノンさん」

コノンさんは子供の手を取ったままこちらを振り返った。

「あの、私がああ塔に登って見ましようか？」

自分でもなんでそんなことを言ったのかわからなかった。コノンさんは少し微笑むとまた子供の相手をはじめた。

「オルターさん、やめられたほうがいいです」ヨシュアさんの声が後ろからした。

「あ、ヨシュアさん……」

心を落ち着かせてくださいと窘められるように言われた。ヨシュアさんの言うことが正しい。何の準備もしないでいい年をした大人が言うことではないのはわかっている。自分の口から出た言葉とも思えないけれど、それを言わないといたたまれない気持ちであったことは間違いなかった。

「そうやってまた一人消えていくことになるのですよ」ヨシュアさんが言葉を続けた。

確かにそうだけれど、それでいいとは思えない。ウォーターランドのみんながいたらどうだろう。ノーキョさんだって、スロウさんだって、もしかするとノルシーさんだって同じことを言うような気がする。どうしてそれを口にして言うてはいけないのか。リアヌシティがどんどん自分の中で霞んでいくように感じる。

奥の部屋に入っていたコノンさんが大きな皿を持って戻ってきた。乗せられていたのは小さく切り分けられたブレドールだった。子供の数に切り分けられたブレドールはオールドリアヌの温もりを子供達と分かち合っているように思えた。

「オルターさんもおひとつどうぞ」

何処かで食べたことがあると思いながら2口目を口にしたとき、エモカさんの作った長時間発酵の酵母を使ったパンと同じ味だということに気づいた。

ノートさんが忘れられなかった小麦の焼ける香り、ノーキョさんの料理してくれたパン、お婆さんの持たせてくれたブレドール。どれもやさしきでいっぱいパンに思えた。

みんなのところを回ったあとの皿には一切れのパンが残った。

「コノンさんは食べましたか？」と聞くと、コノンさんは「私はいつでも食べられるので、これはミオにとっておきます」と言って保存用のケースに移し替えはじめた。みんなの祈りはミオ君に届くだろうか。

外に出てあらためて塔を見上げて見たけれど、ミオ君の姿は見えなかった。いつかナーシュさんとミオ君を探して、あの塔に登らなければいけないかもしれないと思った。

第12話 タワーの理由

足元に目を向けると、リアヌシティでも雪が地面を覆い始めていた。このドームの中での寒波は珍しいことだと言う。まるでミオ君を追うことを拒むかのように降り続く雪をただただ見るばかりだった。タワーの上のほうはやはり気温が低いのだろうか。そんなことさえわからないのに一人でも登るなどと軽はずみなことを言えるわけもない。窓に映る自分の姿を見て着のみ着のまままで飛び出してきたことに気づく。この雪ではオールドリアヌに戻ることもむずかしいかもしれない。

「オルターさん、今夜はここでお休みになりませんか」

気づくと後ろに肩掛けを持ったコノンさんが立っていた。その周りを子供たちが囲んでいる。

「いやいや、こんなときにご迷惑をおかけするわけには」

「これは私からのお願いですし、子供たちも同じ気持ちだと思ってもらえれば」

コノンさんは返事を待たずに、泊まるのが決まったとでもいうように肩掛けをかけてくれた。手編みのようだった。

「これはどなたの？」

「お祖父さんに編んでいたものなので、オルターさんに使ってもらえれば、お祖父さんも喜んでくれると思います」

「いっしょに遊ぼ、遊ぼ」という声子供たちから上がった。

こうなるとみんな黙っているわけもなく、あっという間にもみくちやにされてしまった。お祖母さんたちが心配しないか気になりながらも、気持ちは家族の家で一晩お世話になるほうに傾いていた。便りのないのはよいことと思ってもらおう。

そのあとの時間は、ウサギの餌やりをする子供たちを手伝うことになった、実のない葉だけのこととはいえユイローの覚醒作用は子供たちに悪い影響がないのか心配だった。それでも、新参者がこの土地の習慣にとやかく言うのはばかれると思ひ、見よう見まねで作業を手伝った。しばらくうさぎはぎを見ているうちに一匹のうさぎが食事もせずはこちらを見ているのに気づいた。

「あのウサギは餌を食べないのですか」

「あ、あの子は新鮮なものが好きなので、今日の餌には不満があるのかもしれません。新しいユイローがきたときには仲間を押しよけるようにして食べますから」

「あれ、もしかしてウォーターランドに来たのはあの子ですか？」

「そうです。あの時のピールです。わかりましたか」

「なんだか話しかけてきそうな目が印象的だったので」

この話をはじめるとにぎやかだった子供たちが静かになった。

「ピールは、ミオが一番かわいがっていた子なんです」

どうもいけない。気を付けないとここで話すことはミオ君のことを思い出させてしまう。余計な話はしないで、早めに休んだほうがよさそうだ。

「オルターさん、お部屋にご案内を」

ヨシュアさんが、あの抑揚のない話し方で声をかけてきた。通された部屋はベッドと水差しがあるだけの場所で、外からの客人用に用意されているものだという。夕食の時間を告げられて、それまではゆっくりおくつろぎくださいと言われた。子供たちも同じような部屋で寝起きしているのか気になったけれど、大きくない家族の家で個室があるとも思えない、そう考えると申しわけない気持ちでいっぱいになった。自分は何をするためにここに来たのだろう。

「何か私にできることはないでしょうか」

「オルターさんはここにいていただけるだけで結構です」

何もしないでよいと言われると、なおさらよそ者扱いされているようで、気がめいってしまう。ミオ君のことを考えるといたたまれないし、ウォーターランドを出て以来これほど無力感を感じたことはない。

「タワーに登ることはやはり無謀なことなのでしょうね」

「そうですね」

駄目出しをされたような重苦しい気分になった。

「あの、ヨシュアさん、タワーの上にはなにがあるとお考えですか。何かわかっていることはないのでしょうか」

「この町を守るためのドームの心臓部であることだけは知られていますが、危険も伴う場所なので誰も近づいてはいけないことになっています」

どうしてドームで町を守れるのかの質問はここではあまりにも非常識に思えて、言葉に出来ないまま飲み込んでしまった。

「でも、なぜ子供たちはそこに行くのでしょうか」こらえきれず口をついて出てしまった。

「私にもわかりません。彼らに聞いても、逆にオルターさんと同じ質問を返されるだけです」

そう言われると、まるで自分が聞き分けのない子供と同じだと言われているように感じた。わからないから登るのだと言われているのかもしれない。誰も戻ってこないのはご存知のとおりですとヨシュアさんの目が言っている。

呼ばれもしないで来たよそ者でしかない自分にできることには限りがある。ウォーターランドを訪ねて来てくれたコノンさんと同じわけにはいかないのだろう。

みんなのためにあるものでも危険なものはたくさんある。暖を取ったり料理に使う火にしても、使い方を間違えればすべてを無に返し生命さえも奪う。タワーの上にあるものは町を滅ぼしかねないもの。それがドーム世界を守っているという。タワーを持たないオールドリアヌは取り残されて滅びる運命にあると本当に言えるのだろうか。ノート氏がこの光景を目にしたなら、どう感じるのだろうか。

みんなが悲しみに暮れていないか気になって、食事前に子供たちの部屋に戻ると思いのほか明るいのに驚いた。聞くとタワーを書いた絵を見せてくれた。タワーの先には虹や天使が描かれる。どうやら子供たちにとってはタワーは夢に近いもののようだ。それでも家族の家を守るヨシュアさんやコノンさんは地上にとどまることを良しとしている。何が正しいのか頭が混乱してきた。漆黒の闇夜に夜空を透過し淡くたたずむ巨大なタワーがのしかかるように存在感を放っている。

第13話 晩餐

その夜は何か特別な日に当たるということで晩餐会が開かれた。ヨシュアさんが神の言葉でも伝えてるいるかのような挨拶をした。知らない言葉がたくさん出てきて、それらが物のことなのか人のことなのか、行動のことなのか、よくわからないままに時間が過ぎた。繰り返された感謝、祈るという言葉からすると、その対象がなんであれ、親元から離れた子供たちには心の支えになるのかもしれないと感じた。この境遇を思えば何かしらの支えは必要だろうから悪意のないものであれば良しとすべきなのだろう。悪意を感じることはできないというコノンさんのことも気にはなったけれど、決して何かを扇動するような悪い話には聞こえなかった。お祖母さんも自分も少し心配しすぎなのかもしれない。

食事はとてもつつましやかなものだったけれど、家族の家の誠意を感じさせるようなものだった。子供たちにしても必要で十分なものだろう。主宰者が誰かもわからないままに家族の家の思いやりを感じはじめる自分がいた。子供たちがそれぞれにおしゃべりをしながら楽しい時間を過ごしているのを見ていると安堵感さえ覚えた。

「みんなはタワーが好きなの？」

「高くて大きいから好き」

「君も塔に登ってみたいのかな」

「わからない。おじいさんは登りたい？」

「いつか登りたいかな」

「どうして」

「遠くが見えるだろうから」

「遠くって何？」

「...そうだねえ...見たことのないところかなあ」

子供と話しているうちに、少しずつ彼らの素直な気持ちを垣間見れたような気もしてきた。どうしてもタワーに登らなくてはいけないという義務感や脅迫感のようなものはないようだ。知らないものを見たいという好奇心や冒険心であれば救いもあるというものだ。怪我をするわけでも

なく、不満があるわけでもなく、気持ちの赴くままにであるならば。わからないことを理由に悪いことと決めつけることもおかしい話かもしれない。リアヌシティの成り立ちやつながり方は、見当違いの辺境の島から来た者には考え及ばないものかもしれない。それより、遠くって何という問いかけが、逆に自分の見たい遠くがどこなのかを自問自答することになってしまった。

「オルターさん、おかわりはいかがですか」

「おいしいスープですね。ありがたく頂戴します」

コノンさんは給仕でせわしなく動いている。子供の世話をする姿を見ると、早く悲しみが癒されていくことを願わずにはられない。

晚餐の後、部屋へ戻る途中にウサギたちのいる庭があったので、夜はどうしているのか気になって覗いてみた。明かりも消されているので最初は小屋に入っているように見えたけれど、よくよくみると耳を立てたうさぎが隅のほうでこちらに目を向けているのが見えた。

「君はウォーターランドでお話できた子だね。ここではお話ししないのかな」

ウサギの目が少し輝いたようにみえた。

「ミオ君はもう着いたかな」と誰にも言い出せなかった言葉を呟いてみた。耳が少し動いたけれど、当然返事はなかった。

「ユイローの食べ過ぎに注意だよ」と気休めに言ってみた。

部屋に戻って休んでいると子供たちの騒いでいる声が離れた部屋のほうから聞こえてきた。耳を澄ませてみると、うさぎのことで何かもめているようだった。ただ、その言い争う声が子供本来の姿のように思えて微笑ましくもあった。エゴラインで感情まで調整コントロールされているリアヌシティでは言葉さえ失われているように感じる一方で、家族の家やサーカスのような昔ながらの場所も少なからず残っている。つくられた自然であっても息を呑むような美しさで広がる。何かがおかしいと思いたいけれど、どこにも破綻の兆しはなく、何事もなく日々の生活が進んでいく世界。これこそがリアヌシティの選んだ道なのだ。

第14話 召された子供たち

外はまだ雪が降っているのだろうか。作り物の自然であっても心が動かされるのは、自分もリアシティに慣らされてきたということか。いつもと違う場所に寝付かれず、外の風に当たろうと部屋を出ると、礼拝室の闇の中でひそひそと話す声が聞こえてきた。

「お祈りしましょう」

こんな時間に誰がお祈りをするのだろうか。良くないと思いながらも気になって聞き耳を立てると、なだめる様な話し声が聞こえてきた。

「そうです。彼は天に召されたのです。それは自らが望んだことです。喜んで受け入れましょう」

どうやら話しているのはヨシュアさんのようだ。相手のほうは声が小さくてだれだかわからない。家族の家というのは少なからず宗教的などころもあるとは感じていたものの、こんな時間にその片鱗を感じるようになるとは思わなかった。ヨシュアさん自身の言葉をはじめて聞いたような気もする。

「天の主も喜んで迎えられているのだと思ひましょう。私たちがそのお手伝いをできているのであれば、善い行いといえるのではないのでしょうか」

言っていることは慰めかもしれないけど、ミオ君のことだとしたらあまりにあきらめが良すぎる。召されるという言葉にも違和感を感じざるを得ない。話している相手がコノンさんだとしたら、こんな説教で彼女の気持ちが癒されるのだろうかと思わずにはいられなかった。

「78人の子供たちの幸せを祈って...」

背筋が寒くなった。78人もの子供たちがタワー上に消えていったということだろうか。もしそうだとしたら、ただごとではない話だ。家族の家というのはここ以外にもあるのだろうか。いったい何人の子供が天に召されているのか、気が動転してめまいがした。ウテラスドームのグランドレイヤーはいったいどうなっているのか。親たちはいったいどこで何をしているのだろうか。はじめてリアシティの駅に立ったときの無機質な雰囲気やお祖母さんの言っていたコノンさんの疑いを持たず信じやすい性格の話などが走馬灯のように現れては消えた。

「あ、オルターさん。こんな時間にどうされましたか」

暗がりの先にいたヨシユアさんから突然声をかけられた。後ろにはうつむくコノンさんの姿が見えた。

「いやちょっと、寝付けなくて」

「お疲れなんでしょう。何か暖かいものでもいかがですか」

「ああ、だいじょうぶです。いつものことなので」

コノンさんは目を伏せたままやりとりを聞いている。暗闇の静けさが重くのしかかってくる。ヨシユアさんは次の言葉を発することなく、こちらの言葉を待っているようだった。

「明日はオールドリアヌに戻ろうと思いますので、床につくことにします」

「それがよさそうですね。くれぐれもタワーに登るなどというようなことをお考えにならないことです」

「でも、子供たちが」思わず口をついて出てしまった。

表情ははっきりは見えないものの、コノンさんの頬を涙が伝うのがわかった。またよけいなことを言ってしまった。ヨシユアさんは少しうなずくようなしぐさをしながら何も言わずその場を去った。

コノンさんも、ありがとうございますという言葉を残して静かにその場を離れていった。

ヨシユアさんがほんとうにコノンさんを慰めていただけだとしたら、また余計なことをしてしまったのだろうけど、自分にはこどもが消えていくのを簡単に受け入れることはしない。こんなことになるのがわかっていたら、ミオ君ともう少し話しておけばよかったと思った。現実を受け入れられず、彼が戻るのを一番望んでいるのは自分自身なのかもしれない。

第15話 天気計画

目覚めると土壁の小さな窓から柔らかな光が差し込んでいた。まわりをぐるりと眺め、昨日と同じ場所で目覚めたかどうかを確認する。意識をなくして戻ったときと、朝の目覚めの時がどう違うのかは判然としないので、自分なりの方法として、緑鮫を見たかどうかを思い出してみるのが習慣になってきた。ただし、夢の中で緑鮫を見ていたらということは考えないことにしている。まずはここが灯台でもノイヤール湖でもないことがわかりまずは胸をなでおろした。今日は昨日とつながっている。

廊下に出て中庭に出ると、雪はすっかりやんで、澄み渡る空が広がっている。かすみのように浮かぶ月の姿を見ていると前日の大雪の中で起きた事件が遠い過去ののように思えた。すべては、夢だったのだと言ってほしいという思いがこみ上げてきた。タワーを透過して見えているのだろう空を見ていると、ミオ君がタワーにのぼってリアヌシティを大雪の災害から救ってくれたようにも思えてきた。透き通る空を包む光が彼の未来を照らす啓示のようにも感じられ悲しみが和らぐ。そして、金色に輝く太陽の眩い光がミオ君の髪の色と重なった。今日のような天気であっても彼はタワーを登っただろうか。それは昨日でなければならなかったのだろうか。どうしてあんな雪の日だという思いは拭えない。

部屋に戻り寢床を片づけていると、食事を用意をする音が聞こえた。子供たちが歩き回る気配を感じるけれど、話し声は聞こえない。家族の家の朝は静かにはじまっていく。それをいいことに朝寝してしまい、その間にコノンさんたちの一日が始まっていたかと思うと彼女の奉仕の大変さをあらためて感じ頭が下がるばかりだ。中庭ではたくさんの白い下着が干され風に揺れていた。しばらくすると年長の子供が食事の用意ができたことを知らせに来てくれた。

朝の子供たちとの食事はなにごとにもなかったかのようなにぎやかなもので、コノンさんのふるまいまで別人のように感じられた。子供たちの中ではミオ君はヒーローとなっているようで、タワーの最上部に立つ彼を描いたと思える絵まであった。子供の立ち直りが早いのか、もともと悲しいできごとと感じていないのか、いずれにしても前日との違いを見ていると、年寄りの自分にはとてもできない芸当だと思った。若さの柔軟さには驚くばかりだ。彼らの今を生きる力強さに見習うことは多い。それでもこの子供たちの将来を考えたとき、家族の家とリアヌシティの本当の家族との関係についての疑問が消えることはない。いつか彼らはライブラインの壁を越えて本当の家族のもとに戻れるのだろうか。

「オルターさん、おはようございます。昨日はありがとうございました。よく眠れましたか」

まるで何もなかったかのようなコノンさんのすがすがしい挨拶。今日の気分を聞くことさえためられるような明るさがうれしくもあり、悲しくもある変な気分だ。ヨシユアさんの慰めが

よかったのだとしたら悪い話ではなかったのだろうけど、子供の前で無理をしていないことを祈りたくもなる。

「個室まで用意していただき、ゆっくり休めました。ヨシュアさんにもお礼を言わないと」

「ご心配ないです。ヨシュアさんも夜明け前には出かけて、朝の集まりのほうへ行かれたので」

「早いですね」

「家族の家の集まりがある日は早いです」

どうやら家族の家はひとつではないということらしい。いったいドーム内にどれくらいあるのだろうか。曖昧にうなづいている自分が齒がゆい。

「そうなんですね。お帰りになったら御礼を言っていたとお伝えください」

「お泊りになる方は少ないので、子供たちも喜んでました。こちらこそお礼をいわないと。ありがとうございました」

何の手伝いもできなかったことに後ろめたさを感じていただけに、少し救われたような気分になった。

「それにしても昨日が嘘のように晴れ渡りましたね」

「オルターさんをご存じないのですね。ドーム内の天気はタワーでコントロールされているので、災害が起きるような悪天候にはならないのです」

「ということは、天気は計画的につくられていると……」

「そうですね。昨日はたまたまオールドリアのほうも大雪でしたが、ドーム内は天気計画通りですね。私の子供のころからドームの天気はそういうものとされています。そのおかげで豊かな自然もありますし、災害が起きるようなこともないですし」

天気が人工的なものだと言われると、ミオ君の行動と天気の関係は偶然ではなく選ばれた日だったということになる。それともこのドームでは天気まで使って人の感情をコントロールしているという話なのだろうか。今朝から感じていた天気にかかわる感情のすべてが人工的に生まれてきたものだったような、なんとも言えない後味の悪さを感じるようになってしまった。

「コノンさんもそれでよいと」

「昔はこのあたりも水霊の棲む沼地と言われ、洪水などの災害も多かったようですから、それが無いことをよいと思っている人は多いですね」

「実際、オールドリアヌの自然と遜色ないですね」

「私はあとユイローさえあれば……」

「なるほど、ユイローはドーム内にはないということですか。それも計画通りなのでしょうか」

「ウサギたちにとっては悲しいことかもしれませんが、巣穴で溺れてしまう心配をしなくてよいですし、ユイローなら私がオールドリアヌに餌集めに行けばよいだけなので」

自然のコントロールで災害がないことと、タワーに子供が消えていくことがなにかの裏表になっているような気がしてちょっと納得しかねる気がしたものの、とても今日のコノンさんに言えるような話でもない。

「予定では、このあと5日は晴れて、その後2日が雨ですから、一週間後にはまたユイローを採りにお祖母さんの家に戻ります。オルターさんはそのころまでいらっしゃいますか」

「ノートのほうの状況しだいなので、なんとも言えないのですが、あまり長いとスレイトンケープの知人を心配させることになりますし」

話をしながらマリーさんの心配する顔が頭に浮かんだ。あまり長いどころか、今日も帰ってこないと思っているかもしれない。

「とりあえず、一度オールドリアヌに戻ってから先のことは考えることにします。ノートも置いたままですし」

「そうしてもらえると、お祖母さんも喜ぶと思います。できれば私のことも伝えてください。もう大丈夫なので。ウサギは元気だったと……」

話を周りで聞いていた子供たちが、もう帰るのかと言いながらまとわりついてくる。いつかこの子達もタワーを登る日が来るのかと思うと複雑な気持ちになる。何が問題かわからず、何をすればいいのか、目的もないままノートの謎にこだわっていていいのかさえもわからなくなって

くる。リアヌシティがこうなってしまった今、ノート氏の旅はどこに向かっていったというのだろうか。

第16話 水の約束

オールドリアヌへの帰り道は予想した通りで、ドームを出るとすぐに雪が降りだした。乗客は自分を除いて一人もいないから、こんな日に外を歩いている人もいないだろう。この寒さを考えるとノイヤール湖も氷で覆われて、運河も閉ざされてしまったかもしれない。そうなると思ふこともままならないだろう。雪に深く沈んでいる村の光景が目には浮かぶ。

木々にも雪がかぶるように降り積もっている。ドームの中と外の樹木を比べてみても植生に大きな違いは見られないものの、よくよく見るとドーム外のほうが枯れている枝が目立つような印象も受ける。当然ドーム内は自然を完全に管理しているのだから温度や水の管理はもとより農薬や肥料の散布もされているのだろう。見た目だけで判断する限りは必ずしも手付かずの自然のほうがよいということでもないのではないかとも思えてくる。それでも枯れることの意味もあるはずと言いたい気分にもなる。薬効と薬害のどちらに価値があるのかもほんとうのところはわからない。島にいるときにはこんなことは考えもしなかった、リアヌシティに来てからはどうあるのがよいのかという問が常につきまとっている気がする。そんなことを人間に考えられるのだろうか。勝手に良かれと思うだけなら簡単だろうけれど、結局答えを出すのは過ぎ去った時間だけということになりそうな気がする。時間は先の予測はできず過去を教えてくれるだけとしたら、将来のためにどうあるべきかの答えは延々とでないままに繰り返される。あるがままでよかった島のところが遠く懐かしく思われる。

ドームを出てしばらくしたところで、小さな動物が雪の中で立ち往生してうずくまっているのが見えた。彼らはドームには入れず取り残されたということだろうか。巣穴は遠いのだろうか心配になった。

お祖母さんの家に近づくと窓からあたたかな光が漏れているのが見えた。一步ずつ雪を踏みしめる足がもどかしい。凍えた手で開けるドアはひどく重く感じられた。雪は膝あたりまで積もっていて、それを除かないとドアも開かないことに気づく。ドアをノックしてしばらくすると下からお湯が流れ出てきてドアを塞いでいた氷がゆっくり溶けて流れた。

「おかえり。寒かったかい」

家に入るといつもと同じようにお祖母さんとお祖父さんが待っていてくれた。外に出るような日でないことはわかってはいても、二人がいるのを見るとほっとする。ドームで感じていた緊張感が消えていくのがわかった。室内は薪のストーブに暖められていて、思ったよりは暖かい。薪の爆ぜる音ややかんの湯気の音が静かに流れるのを聞いていると、時間の流れるスピードが緩やかに感じられるから不思議だ。

「そういう事情で、昨日はかえって来られませんでした。ご心配おかけしました」

ミオ君の話をするわけにはいけないので、ウサギ逃げた話にしてその場を取り繕った。それでいいのかどうかはわからないけれど、コノンさんが無事なのはまちがいないということで自分を納得させた。

「オルターさんからコノンが元気だと聞いただけで、それで、それだけで安心だよ」

「祖母さんは自分がなんでも見ていないと気が済まない性分だからな」

お祖父さんは網のほつれを直す手を止めて、眼鏡越しにこちらを見た。

「あんた、タワーのあるところなんて何がおきるかわかりやしないんだから」

お祖母さんの持ち上げたやかんがひゅうううという音をたてた。

「なにも起きやしないさ」少し間をおいてお祖父さんがぼそりと言った。

「何も起きないんですか」

「あんたナーシュを知ってたな。約束は守るやつだよ」

約束について聞くと、お祖父さんは村とリアルシティの両方の約束だと言った。

「悪くはしないさ」と言うと、直し終わった網を壁に掛けた。

「どんな約束かは知らないけど、こうして村は変わらずにあるからねえ。水がなくなったわけでもないし」

オールドリアヌを守るためにどういう条件を出して、何を受け入れたのかはわからないけど、オールドリアヌは前とほとんど変わらないのはほんとうなのだろう。リアヌシティのあの状況が目指されたものであれば、オールドリアヌを守りたいナーシュさんの知るところでもないだろう。

「明日は天気は回復するでしょうか」

「続くときもあれば、収まるときもあるよ。食べ物の心配はいらないからね」

お婆さんは干しものにするのだと言いながら、野菜の皮むきの準備をはじめている。

カーテンの間に見える小さな窓のガラスがやかんの湯気で曇っている。暖は取れていても、リアヌシティに比べれば寒さは身体に染みる。南のスレイトンケープともかなりの気温差がありそうだ。

「コノンさんは、タワーができてから水害がなくなったと言っていました、それも約束だったのでしょうか」

「確かにタワーが出来てからは水害はなくなったさ」

お祖母さんの向いた皮は話の調子をとるように、するすると途切れなく伸びていく。

「ずっと昔は、増水の後には疫病も流行して、村を逃げ出すものもいたそうだけど、もうそういうことはないよ。湖があふれてね、町の中まで水浸しになることもよくあったのさ。家ごとの舟は必ずあったし、家が流されてボートで暮らす人ものもいたもんだよ」

「実際ここは湿原の中の島に暮らしているようなものだから水域の境目なんてあってないようなものだ。タワーが地下水脈から水を吸い上げていることもみんな知っていることだし、水はこれ以上必要ないだろ」

お祖父さんが網を直す手を休めてこちらを見た。

「ノイヤール湖は水が湧き出してはいるけど、乾季が長引く年には水位も下がって、場所によっては運河がまれに干上がるようにはなったけどな」

湖が枯れるようなこともあるのかを聞くと、そんなひどいことにはならないということだった。湖底からの湧水の量は多少のことで動じる量ではないと。村人の湖に対する信頼はひとつやふたつのドーム程度で揺らぐものではないようだった。

「そうじゃなければ、祖先もここに住み着きはしなかつたらうしねえ。ノイヤールは私らの望むものを与えてくれるさ」

二人も心の底からノイヤール湖を無限の恵みと思っているようだ。この大雪の中ではなおさら湖が枯れるなんて想像はできないというものだろう。

「それでも、ロウンさんは運河が止まると困るだろうがね」

「止まれば石でも引き上げるだけのことだ」

「ロウンさんというのは運河でお仕事を？」はじめて聞く名前だった。

「うちの船もたまに見てもらっている。若いのに腕のやつだ。あんたが意識を失ったときにも船を出してくれたよ。覚えてないだろうがな。湖の足になる船をつくりながら運河の管理をしているんだが、気が向けば湖底の石を切り出しているやつだ」

「真冬の湖底の石...もしかして六角錐に使う石のことですか」

「街のほうではお土産にもなってるらしいよ。湧水だから、冬でも意外に冷たくないのさ」お婆さんの得意げな顔が印象的だった。

第17話 古地図

突然、思い出したようにお爺さんが椅子を立った。しばらくして戻ってくると手にノートと何枚かの紙をもっていた。

「祖母さん、それよりこの話をしないとだめだろ」と言うと、お祖母さんもあわてて野菜を片付け、机の上に燭台と数枚の地図が並べられた。

「この前見ていた宿帳の間にはさまっていたさ。昔の宿屋を書いたもののようだよ。Hの飾り文字がついているのがわかるかい。お祖父さんが偶然見つけたんだよ。この人もなかなか大したものだね」

「ここ以外にも探しているソダーって人が泊まったかもしれないし、何かの手掛かりになるんじゃないかと思ってな」

漁にしか興味がないと思っていたお祖父さんも少なからず、村の歴史には興味があるのがわかった。男の秘密でちょっとした絆ができたような気もしてうれしくなった。

「数百年前の地図となると、水没で失われたものも多いだろうし、偽の地図も多いからな。納屋から出てくるような古地図はあるだけでも多少の価値はあるだろうよ。ここが少し高い場所にあることがこの地図の水没を救ったということだろうな。あんたは運がいい。この地を守るために、正確な地図や本当の地図は表に出すな、作るなといういい伝えがある村だから。オルターさん、こいつはなかなかお目にかかれないものだぞ」

秘密の地下のある地域ならではの風習とも言えるし、小さな村であれば、地図を必要としないというのもわかる気がする。それをみつけて見せてくれたお祖父さんの気持ちがありがたかった。

「ナーシュさんがどれだけの地図を集められたかはわからないが、この地図は表には出されなかった本当の地図であることは間違いないだろうからな」

公書簡で見た地図を思い出しながら、机の上の地図を眺めた。公書簡では時間がほとんどなかったし、村のことを詳しく知る前だったこともあり、特に似たような地図を見た記憶もなかった。手に取って見ると、ノイヤール湖の下流側で川が消えているのだけは別の地図で見た覚えがあった。その先は地下水脈になっていると思って間違いなさそうだ。その水脈からリアヌシティが水を吸い上げているのだろう。地図にはユイローや空虫らしき絵も書き込まれていて、巡礼者にこの土地の風物を知らせようとしたものであることがわかる。お祖父さんのいうように旅人を迎

えるたけにつくられたのだろう。

「住む人は今とかなり違うでしょうね」

お祖母さんも拡大鏡を手にして小さな文字を懸命に見ている。

「ほら、お祖父さん、湖に魚が書かれているよ。これお祖父さんの好きなドットトラウトじゃないかね」

「そりゃ、昔からこの地に欠かせないものだからな」

「でもあれだね、鮫は書かれてないようだよ」

「描かなくてもよいものは描かないだけだ」

お祖父さんがお祖母さんのもっていた拡大鏡を取るようにして、同じあたりを睨むように見た。

雪で漁に出られないとなると、さすがのお祖父さんも手持無沙汰になるのかもしれない。今日はいつになく昔話に興じているようにも見える。雪に閉ざされた中での宝探しは、二人の記憶の糸を解きほぐすように続いた。

「この橋からよく湖に飛び込んだもんだ。いい時代だったよ。素潜りをするにもちょうどいいところだった。あのころは空虫の照らす青い光は、それはみごとだったからな」

「ほら、オルターさんの持ってきたノートに書かれていた場所はこの虫の絵が描かれているあたりじゃないかね。あそこなら夕日もよく見えただろうし、わたしらの子供のころもよく遊んでいたものさ。水害があっても空虫だけはずっとこの土地といっしょだったのに。いつからかね、いなくなりはじめたのは。コノンの子供のころもまだいたかね」

お祖母さんの話にお祖父さんは答えるわけでもなく、まだ湖のあたりを丹念に確認している。お祖父さんの思い出は湖とともにあるのだろう。

「この家がここだとすると、今も残っている新聞社の位置はこのあたりでしょうね。このスプーンの絵は食堂ですか」

「祖母さん、これはシナモンか」

「そうさ、あんたと出会ったところ。あのころはこの人もいい男でね。シナモンで言い寄られたのが運のつきってわけさ。シナモンにも困ったものだね。ほら、ノートを売っていたハロウさんの雑貨屋がこの羽ペンのところだから、これはシナモンに間違いはないね」

ノート氏が旅立つときに立ち寄った場所がここだとしたら、また一歩当時に近づけたことになる。そこが二人の出会いの場所だったとするとなんとという縁だろう。今はどうなっているのかが気になる。

「それよりこれはジノ婆が以前住んでいたところじゃないか」お祖父さんはシナモンの話をそらすように花の絵の描かれた場所を指さした。

「花が描かれてるからってかい。それはどうだかね」

「ジノ婆さんは今でも花が好きそうですね。冬も近かったのに庭が花でいっぱいでした」

「ああ見えて昔は器量のいい娘さんだったというからね。待ち人が帰ってこなくなってから、巫女みたいなことになっちゃったさ」

「そんな噂話当てになるものか」

「女の私にはわかるけどね。女の感というやつだよ。でなけりゃあんなところで一人暮らしなんかしやしないよ」

お祖父さんは聞き流すそぶりをしながら、その場所を指で差して教えてくれた。ジノ婆さんはやはり村にとっては特別な人なのだろう。ジノ婆さんが何をできる人なのかは未だにわからないけれど、この地の歴史に関しては公書館以上の知見があるということなのかもしれない。とにかく秘密は紙にしないというのがこの村の風習ということなのだから、生き証人としてのジノ婆の記憶はきっと何よりも頼れるものなのだろう。

この夜から丸一日雪は降り続けた。ノートと地図を眺めるばかりで前に進むこともできず、スレイトン・ケープに戻る日がさらに遠ざかるばかりだ。船長はまたウォーターランドに行ったかもしれない。待たせているコピヤミリルさんのことを思うと、心が痛む。

第19話 雪かき

雪のやんだ朝は思ったよりも暖かい日差しに包まれた。お祖父さんとお祖母さんの姿はない。外が騒がしいと思ったら、村人総出の雪かき作業になっているようだった。普段はひと気を感じないこの村でも、こういうときにはいろいろな人と会う機会になりオールドリアヌに仲間入りできたようでうれしい。雪かきをはじめて早々に公書館の場所を尋ねた女性にも会った。向こうから公書館はわかったかと声をかけられた。

山積みにされた雪は、馬の引くソリに乗せられて運ばれていく。聞くと湖に返すのだという。雪も雨も湖と同じで、繋がっているものだという事らしい。水に対する信仰心のようなものはこの土地ならではの、水神様という言葉も何度か聞こえてきた。水とともに村に生きた人々の長い歴史のつながりを感じるいい機会になった。少し気になることがあるとするなら、雪かきをする人たちにお年寄りが多いこと。この村がとんでもなく長寿の人ばかりというのもこの水と少なからず関係があるとは思うけれど、子供や壮年の少ない雪かきを見ていると、それもまた違和感をぬぐいえない。子供ばかりの家族の家から戻ったばかりなだけに、その違いには驚くばかりだ。長寿と失踪が水を共有する隣同志のところで起きているのだから。

大雪も災害のひとつだと思うと、それに応える村民の姿から怒りや悲しみは見て取れない。これがもし水害だったとしても同じなのだろうと思ってしまう。水が干上がるよりは大雪や洪水のほうがましだともいうように、みんな楽しそうに雪の片づけをしている。厳しい自然に寄り添うというのはこういうことなのだろうか。自然に抗うのではなく、うまく受け流しているしなやかさこそがほんとうの強さと言われているようだ。ウォーターランドのような温暖なところにいると、そのありがたさが当たり前をなっていた自分に気づく。雪を片づけた後には何かの花が芽吹いているのが見えた。冬を前に咲く花があることにも驚かされるが、どんな環境でもその土地にあった生き方があることを教えられているような気がした。

しばらくすると、雪かきをしたところから霧が立ち上り、あたりが白いベールに包まれ始めた。まわりの人の姿も霞んでいく。聞くと、霧は運河からも流れてくるが、多くは地下水脈により温められた地面からのものだという。そう言われて、お祖父さんの言っていた湿原という話を思い出した。もしかすると、この村自体が大きな水脈に浮かんでいる浮島のような地形になっているのかもしれない。地下が作れる湿原というのも何か特殊な地形でなければ考えられないことだ。かなりしっかりした岩盤の上に湖ができ、朽ちた草木が体積したのか、岩盤の周囲に湿原ができたのか。湿原という自然の堀を持つ城塞だとしたら、不思議な地形にいろいろな想像が広がっていく。

1時間もすると、村道の大部分が雪の下から現れた。この地の長寿者の力には目を見張るものがある。

「オルターさん、ここ、ここ」

少し離れたところから聞きなれた女性の声が聞こえた。ナミナさんだ。

「よかったー、やっと会えた」というトラピさんの声も聞こえた。

「あー、元気そうだね。公演はうまく終わられましたか」

「オルターさんも冷たいよねー、朝一番で来たんだからね」ナミナさんが笑っている。

言われてみるとドームから帰る前にサーカスに立ち寄ることをすっかり忘れていた。二人に申し訳なくて頭が上がらない。

「オルターさん、吉報ですよ。ホーラーと話せる人がみつかりました」

「え、公書館の番人のですか」

「そうですよー。あの偏屈なホーラー」というとナミナさんが笑い出した。

「船大工の人が知り合いなんだそうですよ」トラピさんの息がはずんでいる。

「それはすごい！ 雪かきが終わったら行ってみましょう」

「ほんと、ホーラーに友達がいたなんて驚きますよね。今、その場所に行ってきたんですが、不在みたいで。どこかの雪かきで出かけているのかもしれないですね」

「これがその人のいる場所です。公書館に近い湖畔ですよ」と言うと、トラピさんがポケットからメモ書きを取り出して渡してくれた。

「それでねオルターさん、私たちもこの後サーカスに戻って、そのあとは次の巡業地に移動しないとイケないの。そこが終わればまた春が来る前にはウォーターランドに戻るから」

「リアヌシティの公演のほうはうまくいきましたか」

「まあまあかなあ。なんだか反応にずれを感じて。ライブラインおそるべし。それより、オールドリアヌのサークルがほうがよかったかな。教えてくれたのもそこに来ていた人だよ」

「ナミナは、クラウドタワーの人工的な街を毛嫌いしているからどうしようもないしね」

「オルターさん、あそこはノートさんとは関係ないよ。ウォーターランドを知っている人が戻るような場所じゃない」

ナミナさんの言うことが、いちいち納得のいく話で困ってしまった。ナミナさんに家族の家を見せたら何と言うのだろうか。コノンさんも村に連れ帰るのが目に見えるようだ。

「オルターさん、僕らは急いで戻らないといけないので、ノートの答えが聞けるのを楽しみにしていますよ。そうそう、ぼくも六角錐もつくりましたからね。願懸けも完璧！」

トラピさんは本当に六角錐をつくってしまったようだ。僕らということはナミナさんもつきあって作ったのだろう。彼らのオールドリアヌに対する思いは自分よりはるかに強いのかもしれない。サークルでの公演で二人を知る人も多いようで、雪かきをする人たちから声をかけられている。また戻ることを約束しながら残念そうに帰って行った。彼らの素直な人柄が芸そのものよりも人気なのだとわかった。

それにしても、こんなうれしい話が聞けることになるとは思ってもいなかった。地図の場所が続く道の雪かきもされるようならすぐにでも船大工の人に会いに行きたいところだけれど、不在とのことだったので、もう少し日が高くなってから行くことにした。

「オルターさん、祖母さんが朝飯ができてるから帰って来いってよ」

お祖父さんの声が聞こえた。

第20話 期待

お祖母さんのところに戻ると近所の人何人か集まってお茶を飲んでいた。雪かきが村人にとってはお祭り行事のように思えてきた。ウォーターランドの火事の時もそうだったけれど、何か起きた時のご近所さんのつながりは本当に心強いものだ。ライブラインでなくてもよいと思うのは、昔の人間の考えることなのだろうか。

村人たちはお茶をのみながらのおしゃべりが終わるとお祖父さんの渡したドットトラウトの燻製を手におごはんに帰って行った。雪かきの後の朝ごはんもふいだんよりもおいしいに違いない。

「お祖父さん、こんな雪が降ると、ジノ婆も大変ではないですか」

「まあ、みんな考えることは同じだから、だれかしらが手伝いに行っていると思うがな」

「もしよかったら、見てきましょうか」

「今日はドットトラウトも出ないだろうから、湖畔の道の雪かきさえ間に合えばだけどな」

「あんた、こんな日にオルターさん行かせちゃだめに決まってるよ」

お祖母さんの了解は得られそうにない。お祖父さんに頼めば、船大工のところまでなら許してもらえるかもしれないと思い作戦を変更することにした。

「お祖父さん、この場所わかりますか」

「こりゃ、あいつのところじゃないかな。祖母さんそうだろ」

「オルターさん、昨日話していたロウンさんだよ」

「ロウン……」

公書館を見るためにホーナーさんを説得できる可能性があることを話すと、二人は驚いて顔を見合わせた。

「ロウンさんとあのホーナーが知り合いなのかい。こりゃあ驚きだ。ロウンさんのところならあんたが案内してあげればいいよ」

お祖母さんも二人の関係に興味があるのか、出かけるのを認めてくれそうな口ぶりだ。

「ちょうど見てもらいところもあったから、今日ならいいぞ」

地図を見ると、自分でも行けそうなところだったけれど、お祖父さんがいっしょならなおさらお祖母さんも反対する話ではない。それに、こんな日なら湖も氷が張って、きっとドットトラウトの群れに出会うこともないから、この前のような失態は避けられる。お祖父さんもそう思っているに違いない。

「じゃあ、腹ごしらえして、日が高くなったところで雪中行軍とするか」

外からは鳥たちの元気なさえずりが聞こえている。

それにしても、あのホーラーと仲良くなれるスロウさんという人は、どういう人なのだろうか。船大工ならば職人氣質で頑固な人なのかもしれない。堅物同士の相性があったということか。トラピさんとナミナさんが作ってくれた機会を無駄にしないようにと考えると行き当たりばったりで行くことの不安もあったけれど、お祖父さんの知り合いと思うと変な話にはならないはずだ。うまくいかないようであれば、今日はお祖父さんの舟の修理の話だけにしてもよい。

「うまくすれば図書館の本にお目にかかれるってことだね、お祖父さん。ちょっとわくわくするね」

ナーシュさんが消えてから閉ざされてきた開かずの扉が開くので、これは村にとっても事件なのかもしれないとやっと気づいた。扉の向こうには何が隠されているのだろうか。ノート的全貌がわかるかもしれないと思うと、トラピさんたちもさぞやいっしょに行きたかったことだろう。これはますます失敗は許されない。

「しかし、ロウンさんも、冷たいね。そんな話聞いたこともなかったな」

「そりゃ、ホーラーとのことだから、話すにしても慎重にもなるだろうさ。ホーラーの機嫌だっであるだろうから。あんたもうまく話したほうがいいよ」

お祖父さんが、責任を押し付けられたとでもいうような顔をした。

「まあ、舟のことで行くわけだしな」とこちらを気遣ってくれた。

「そうですよ。お祖父さんそうしてください。公書館のことはついでに聞けたらいいですから。急がずにいきましょう」

第21話 氷上の舟

舟小屋にはロウンさんの姿はなかった。軒先で勇ましい犬たちが歓迎してくれている。この様子だとまだ戻って来てなさそうだ。小屋の中に犬ゾリがあるのが見えた。氷で閉ざされるようになると、船からソリに仕事を変えるのだろうか。舟大工にとってはソリぐらいならお手の物ということかもしれない。おじいさんは裏手の運河側に回って行く。

「舟がないな。湖だ」

お祖父さんに無理を言って、挨拶だけでもさせてほしいと頼んだ。

「また、何かあると祖母さんに言われるから、湖はやめたほうがいい。明日も天気はいいようだしな……」

「今日はドットトラウトも出ないでしょうし、明日の方が危ないですよね」

お祖父さんは少しためらうように押し黙り運河を見つめた。水の様子を見ているようだった。

「湖畔まででいいので、少しだけ行ってみませんか」

顔を上げて、もう一度運河が流れてくる湖の方向を見た。

「そうだな、せっかくだしな。新雪の朝の湖畔は神聖でかけがえのない場所だから一度は見ておくといい。ノイヤールの力ももらえるだろう」

運河沿いは水温のせい、雪の溶け方も早いようで、人や犬が歩いたあとはぬかるみになっているところもあった。

「オルターさん、足を取られるな。運河に落ちないようにしないと。こんな日は誰も助けてくれないぞ」

お祖父さんは、大きな枝を拾って転ばないように持たせてくれた。お祖父さんといっしょにいる安心感で、つつい無理を言ってしまう。それに答えてくれるのは、ロマンのつながりということだろう。男の冒険心だけはどうにも抑えられないということはお互いによくわかっている。

湖まではさほどの距離もなく、以前舟でトラピさんたちと通った運河に近い林間の道をしばらく歩いた。原生林に近いような木々は、人が関わっていないということを感じさせてくれる。光

の取り合いをした結果、整然とは言えない無数の植物が入り乱れて光の取り合いをしている。厳しい環境で生き抜くということはきれいごとではない。雪を背負う木もあればその下で降雪を凌ぐ木もある。力尽き地面に倒れ朽ちる木、その木を住処にするコケ、その横に転がる木の実からは小さな芽が顔を出す時を伺う。こんな混沌とした生命の息吹をリアリティでは作れるのだろうか。人の力がどれほどのものかと思わずにはいられない。

木々の間からノイヤール湖の見えるところまで来ると、湖面が雪で真っ白に埋め尽くされているのがわかった。想像していた通り、湖も氷で覆われてしまったようだ。林間を抜けて出ると、果てしなく広がる白い平原のような真っ平らな湖が広がった。雪化粧をした湖は、その大きさをより感じられる。湖畔からほど近いところに舟が浮かんでいるのが見えた。氷が張ってはいるもののその上を歩けるほどの厚さではないようだ。

舟の上の人影はなにか作業をしているように見えるけれど、離れすぎていて何をしているのかよくわからない。目を凝らしてみると、どこかで見た覚えのある人にも思えた。助けてもらったときの舟で見た記憶が残っているのかもしれない。

おじいさんが、大きな声で呼ぶと、それに気づいて手を振るのが見える。帆を上げてこちらに来ようとしているようだ。

「気づいたな」

氷は薄そうですねというと、お祖父さんは湖の氷を枝で割ってみせた。氷の下にいた小さな魚が慌てて泳ぎ去るのが見えた。

「ドットトラウトの稚魚ですか」

「やつらはここでは産卵をしない。湖に稚魚なんていないさ」

「こんないいところなのに不思議ですね。自然はわからないことだらけだ」

「そうだな。人間だけがわかるなんて思い上がりにすぎないからな」というと湖に向かって目を細めた。

舟に乗ったロウンさんが少しずつこちらに近づいてくる。氷の割りながらなので、前に進むのも大変そうだ。舳先で割れた氷が光を反射し、一瞬逆光になっていたロウンさんの顔を照らした。

「あ！ スロウさんだ.....もうここまで来ていたんだ.....」

まさか、スロウさんがノイヤールまで来ていたとは思ひもしなかった。トラピさんたちも人が悪い。

「スロウさん、お久しぶりです！」

お祖父さんが変な顔をしてこっちを振り返った。

「オルターさん、しっかりしろ。ロウンさんだぞ」

「ロウンさん.....ロウン.....？」

目眩がして、また景色が揺らぎ始めるように感じた。舟がゆっくりと揺れるのにあわせて湖面がキラキラと輝く。今日はドットトラウトはいないはずなのに。まさか緑鮫が...。また、意識が遠のいていく。スロウさんがウォーターランドを出たのが現実なのか、意識世界のことだったのか記憶が混濁してまったくわからなくなってくる。ハトポステルで連絡が来ていたのではなかったか。いや、きっとスロウさんはわかってくれるはずだ。

第22話 生き写し

「オルターさん！ オルターさん！」

辛うじてこちらの世界に踏みとどまれたのか。お祖父さんの呼ぶ声が聞こえる。

「雪かきでがんばりすぎたか。お、大丈夫そうだな」

徐々に焦点が合って、見えてきたのはまぎれもないスロウさんその人だった。

「スロウさん、どうして……」

「よっぽど似ている人がいるようだな。世界には同じ顔の人が何人かいるというからな」

「だいじょうぶですね」というスロウさんの声を聞くとまた頭が混乱してくる。

「水を飲みなさい。軽いめまいだろう」

お祖父さんの横で心配そうな顔をしているのは間違いなくスロウさんだと確信した。他人の空似というにはあまりに似過ぎている。どう考えても本人に間違いない。これが同一人物でなければ双子がいたとでもいうのだろうか。スロウさんからそんな話を聞いたことはない。もしかして本人があえて他人のふりをしているなら、関係を明かせない理由でもあるのかもしれない。ここはことを荒立てないほうがいいのかもしれない。二人きりになるのを待とう。

「スロウさんじゃなくてロウンさんだから、オルターさん頼むぞ」

「あはは、どちらでもいいですよ。おいらのほうは」

この現実として簡単に受け入れるわけにはいかない。自分がどこにいるのかのわからないほど深刻な状況なのだ。ドットトラウトも緑鮫も見た覚えがなくて、スロウさんだけが突然目の前に現れた。わからない。どうにもわからない。二人はこちらの気持ちを知ってか知らずか、勝手に話をはじめた。

「ロウンさん、また舟の滑りがわるくてな。時間のあるときに見てくれないか」

「お安い御用ですよ」

「それと、あんたはホーラーと知り合いなんだって聞いたが」

「ああ、普通に話しているだけです、おかしいかなあ」

ロウンさんと呼ばれているスロウさんは不思議そうな顔をした。スロウさんがホーラーを知っているわけではないと心の中で叫んでいた。

「そのホーラーにオルターさんを紹介してもらいたくてな」

「へえ、何かあったんですか」

「あいつが公書館の門番になっているものだから、誰も中に入れなくなってな。このオルターさんが調べ物をしたいというわけなんだがね」

「あそこの書庫はかなり複雑ですからね」

「ロウンさんも知っているのかい」

「というより、ホーラーも知らないんじゃないかなあ」

「それは、地下のことか」

「そうです。そうです。あそこの地下はかなり特殊ですよ。おいらは乾季に緑石を彫り上げていたときに気づいたんですけど、普通ならわからないですよ」

「なるほど。何かありそうだな。まあそちらのほうはオルターさんの話を聞いてもらってからだな。なあ、オルターさんそうしたほうがいだろう」

「そ、そうですね。スロウじゃなくて、ロウンさん、よろしくお願いします」なんとか声を絞りだした。

丁寧に自己紹介をはじめたロウンさんを見ていると、最初からかわれているのではないかという気にもなったが、不自然さのまったくない落ち着き払った様子を見ているうちに、だんだんとロウンさんとして受け入れざるを得なくなっている自分がいた。

「あとでゆっくり島の話聞いて...ください。あの、最近どこかの島に行っていたとか、最近ここに移ってきたということはないですか？」

「オルターさん、ロウンさんが来たのは十年以上も前の話だし、それ以降はどこにも行ってはいないからな」

「あはは、でも南の島に行っている夢はたまに見ますよ。そういう意味では島に行ってるかな」

夢で島に行っている...でも、こちらは夢の話をしているのではない。ダルビー船長の船で来たし、それこそダルビー船長はスロウさんにかけている。船長がいてくれればすぐにわかる話だ。

「戻ったら、舟を見に行くので」

「今日は石切か」

「いや、氷の具合と水路の定点ですね。水量を調べているので。雪も雨も関係なく」

湖底の石の切り出しもこのロウンさんがしているというなら、スロウさんでもロウンさんでももうどちらでもよいから話を聞かせてもらいたいものだと思い始めた。二人のやること、やっていること、考え方や話し方まで似ているならば、どちらでも同じことではないかと自分に言い聞かせた。

第23話 島の話

「オルターさん、お祖母さんには内緒だぞ」

先を歩くお祖父さんは、振り返って念を押すように言った。

「ドットトラウトとの関係なんてお祖母さんは何もわかっちゃいないから、とにかく何もなかったことにな」

今回は疲れのめまいだから嘘をついているわけではない。当然、今この時が現実世界のままだという前提ではあるけれど。ドットトラウトも鮫も見えてないことが、自分にしかわからない自信となっている。それでもお祖父さんにまで気を使わせているのが申し訳なく思う。

スロウさんは夕方近くに訪ねてきた。簡単な道具が入った袋を肩から掛けている。直せるものならその場で直してしまおうということなのだろう。

「水漏れしているわけではないですよね」とお祖父さんの要望を再確認しながら、すぐに舟を見たいというと、舟置き場に二人で向かった。さすがに今回は自宅で待つようにと言われてしまった。

お祖母さんもスロウさんを信頼しているようで、スロウさんを見る目が優しいのがわかる。

「あの人はほんとに器用だね。ここの窓がこわれたときも助けてもらったんだよ。船大工というのはなんでもできるんだね。うちの人は漁にかけちゃ村一番だけど、そのほかのことはてんでだめだからね」

「ロウルさんとは長い付き合いなんですか」

「来たときは流れ者だと言っていたけど、あれだけの腕を持っていたら村の人間が話すわけないさ。本人もノイヤール湖に一目ぼれしちまったわけだし、さすがにこの先どこかに行くということはないだろうね」

「実はロウルさんにそっくりな人を知っていて、会ったときは腰を抜かしてしまいそうになりました」

「そうなのかい。コノンのウサギとおんなじだね。みんなおんなじ顔をしてるだろ。模様のないのなんか瓜二つだって思わないかい」

お祖母さんの話は、あらぬ方向に進んでしまって、ロウンさんのことはどこかに行ってしまった。似ていると言ってもその程度にしか受け取られないのだと思った。

お祖母さんの話を聞いているうちにロウンさんたちが戻ってきた。

「舟は修理に一週間ほどかかるので、また預かれる日を教えてください」

「そうか。その間、別の舟を頼むな」

「もちろんです。ご心配なく」

それを聞くとお祖父さんは何か用を思い出したように席を離れた。その隙をみてロウンさんに小さな声で話しかけてみた。

「スロウさんですよ？」

しばらく目を大きく開いたまま沈黙の時間が流れた。

「え？ 私はその人ではないですよ。困ったな。そんなにそっくりなんですか？」

あまりにつれない答えに返す言葉もなかった。ふりをしているのでなく、ほんとうに別人らしい。

「失礼ですが、ロウンさんのご兄弟は？」

「一人っ子です。でも子供のころに両親と生き別れになったので確証はないですが。オルターさんにスロウさんと呼ばれて、もしかして知らない兄弟がいたのかもって思いましたよ」

「ほんとうにスロウさんじゃないですよ？」

「あはは、おいらはそう思ってるけど。その似てる人に会ってみたいものですね」

「オルターさんの言うスロウさんという人は島にいるのかい？」

台所にいたお祖母さんに聞こえてしまったらしく、お祖母さんが興味ありげに話に入ってきた

。

「そうだ、もしかするとコノンさんは会ったことがあるかもしれないです」

「コノンさんはその島に行ったことがあるわけですね。彼女が会っているならどれぐらい似ているか聞いてみることにしよう」

お祖母さんもコノンさんの行った島の話詳しく聞きたいというので、お祖父さんが戻るのを待って、ウォーターランのことを少し詳しく説明することにした。温暖な気候、平坦な地形、真っ赤な大きな月のこと、ナツヨビのこと、同じ名前の川のこと、跳魚、船長の定期船のこと、自由に入ったりして干渉しない住民生活のこと。それに、ウィローがあることもわずれずに話した。お金もないし、税金もないことでは、メインランドの都市との違いを説得力のある言葉で伝えるむずかしさを感じた。暮らしている本人でさえ、メインランドに来てみるとありえない島に思ってしまうのだからどうにもならない。聞かされている側からするとそんな環境で何の問題もなく生活できているのが信じられないだろう。

「共同体というかほんとうに自給自足のようなところなんですね。おいらに合いそうだな」

そのあと、自分かノートさんのことを知りたくてリアヌシティを訪ねて来たことを話そうとしたときにロウンさんが突然思い出したように言った。

「オルターさん、お話の途中なんですけど、その島の話、おいらの夢で出てくる島に似てますよ。おもしろいなあ」

「え？ 夢にですか？」

「昔、オールドリアヌに来る前にいろいろな島をめぐる旅をしていたことがあって、そのころの記憶が断片的に出てくるのかなと思っていますが」

「夢の中でだれかに合いませんでしたか。まさか本屋はなかったですよ」

「うーん、いつも同じように島の周りをぐるぐる回っている夢で、ほんとうに島を船で回っているだけなんです。他に人はいなかったかな。朝目覚めるとほとんど忘れていきますから確かではないですけどね。夢ってそんなもんですよ」

こうして話していても、スロウさんとほんとうによく似ていると思う。スロウさんだって船で島の周りをまわっていると言えなくないし。

「あの、ロウンさんも自分の六角錐を作っているんですか」

「もちろん、その石を掘り起こしていますから、自らが作らないとだめかなと思って。緑石は見たことありますか」

「ナーシュさんのつくったものとかはジノ婆さんの家の近くで」

「そうそう、ナーシュさんはおいらに仕事をくれた人ですからね」

ロウンさんがナーシュさんとも知り合いだったことに驚いた。そうであれば、ホーラーとも話せるということにも納得がいく。ナーシュさんの失踪前に六角錐で関係していたとなると、いよいよノートの核心に近づいてきた気がした。スロウさんに生き写しな人に会えたのは、偶然ではなく何かに引き寄せられたのかもしれないと考えはじめた。

話を終えたころにはロウンさんのほうも自分にとっても親近感を感じてくれているのがわかった。スロウさんとも気が合うのだから、ロウンさんと合わないわけがないのだ。

「オルターさん、もしよければ、公書館のことを案内するときに緑石のこともいっしょにお話ししますよ。2、3日中に時間をつくりましょう。何か発見があるといいですね」

お祖母さんとお祖父さんもロウンさんがいるなら安心という顔をしている。いよいよノートの核心に踏み込む日が来たようだ。

第24話 花と待ち人

ロウンさんと約束した日までの数日はとても長く感じられた。お祖父さんも結局翌日も漁に出られず、家の中でゆっくりと男のロマンの時間を楽しんだ。お祖父さんはみつけた地図にドットトラウトが書かれていたことが読み直しほどうれしかったらしく、何度も机に広げては見ている。日にかざしてみているのは、ミドリ鮫の透かし絵でも探しているのかもしれない。自分のほうはノートに地図と関係した記述がなかったかを読み直しながら再確認している。ノート氏がいろいろなヒントを文章の中に紛れ込ませているのではないかと思うのだけれど、それらしいものはなかなかみつけれない。ほんとうに紀行文であるなら、そんなものはないのだろうけど、この記録がそれだけで終わっているとは思えない。時間がゆるりと動くことの答えなりヒントがどこかに残されているのではないだろうか。それは自分の思い出せない記憶と何かしら関係あるという思いは消えない。

***** ノート *****

潮が満ちるときには海面が上がり、川の下流は海とひとつになるように広がっていきます。そしてそんな日には海から群れをなした魚が川に抗うように遡上してくるのです。魚が一斉に飛び跳ねると日の光を受けて金色に輝き、上へ上へと先を争うように向かう姿は、まるで川の水面があふれるように見え、それを見ていたナツヨビは歓喜の乱舞をはじめます。これを目印にするかのように魚や鳥を追うミドリ鮫の群れを海面下の影で見ることがあります。その光景は生き物たちの命をかけた競演ともいえるもので、海の中ではさらにさまざまな生き物が生を謳歌するための生存競争や共存生活に加わっているのではないかと想像してしまうのです。突然集まる魚たちはどこから来るのでしょうか。海の深い底にはまだまだ見たこともない生き物がいるのかもしれない。

***** ノート *****

「オルターさん、ここに書かれてい跳魚という魚はドットトラウトとは違うのかい」

「そうは書かれてないんですね。跳魚は今でも釣れます。あ、そう言えば、つい最近光る魚がウォーターランドにもいることがわかって。もしかするとそちらのほうに近いかもしれないですね」

言ったあとに、それを見たのは意識を失っていたときではなかったかと思った。

「書いた人がこの村出身なら、ドットトラウトを知らないと思えないが、新聞社に勤めていたようだ、魚には興味がなかったか」

「そうですねえ。ドットトラウトも死ぬと別の魚のようになりますから、漁をしない人にはあの輝く姿を見ても同じものと思えないかもしれないですね」

「確かにそうかもしれないな。ということは、ウォーターランドにはドットトラウトがいる可能性もあるということか」

ドットトラウトがウォーターランドにいるという可能性は低いかもしれない。それでもこういう話は永遠に続く夢のようで楽しい。お祖父さんは地図を横に置いて、ノートの本のほうに目を移し一枚一枚めくりはじめている。

「はっきりはしませんが、どうも光る魚が島のそばの洞穴のようなところに潜んでいるようなんですよ」

「その島のあたりで産卵しているとしたらどうだ。これはおもしろくなるぞ」

自分の記憶にもノートを読んだお祖父さんの推測にも根拠はないが、もしそうであればノイヤール湖とウォーターランドがドットトラウトの回遊でつながっているという夢のような話になる。環境が似ていることを考えるとそれもありえなくもないのではにかと思った。以前はたくさんの跳魚がいたと思っていたが、今読み直してみるとドットトラウトのことだったと考えたほうがはるかに説得力がある。ノート氏は名前を知らなかっただけで、それを見ていたのかもしれない。なによりも水玉模様はウォーターランドの動物に共通する模様なのだから。お祖父さんとの間にミドリ鮫だけでなく、ドットトラウトのつながりが日に日に強くなっていく。このつながりはオールドリアヌでのかけがえのないものになりはじめている。二人でいつかドットトラウトの一生を解明しようという話で盛り上がっていく。

ひとしきり話をしたところで、お祖父さんのみつけた地図に書かれていたジギ祖母さんの昔住んでいたというところに行ってみることにした。ハロウズと同じで、石の建物は残っているものの、家具等は長年の年月の経過で元の形がわからないほどに崩れてしまっている。玄関先にはだれかが活けているのか、古いガラス瓶に入れられた小さな花が置かれていた。ジギ婆さんがわざわざ戻ってきているとも思えないから、その昔の記憶を残そうとしている人がいるのかもしれない。しばらく敷地内の置き去りにされたものを見ていると、通りがかった人がいたので呼び止めて話しかけてみた。

「すみません。ちょっとお尋ねしますが、この場所は何があったところでしょうか」

「聞いた話だと、以前は花屋だったこともあるらしいが……」

「そうなんですか。今はどなたが花を置かれていますか」

「そのつきあたりの家の人だと思うよ。理由はわからないけど、何もない廃屋は殺風景だからね」

お礼を言って、ジギ婆さんとなにか関係のある人かもしれないと思い、その家を訪ねてみることにした。

「どなたかいらっしゃいますか」

返事はなく、しばらく部屋からの物音もしなかった。不在かと思い家の中を覗き込むようにしていると不意に窓が開き、ジギ祖母さんに劣らず歳を召した女性が顔を見せた。

「あ、突然ですいません。ちょっとお尋ねしていいですか。あそこの花を置かれていますのはこちらですか」

「それがどうかしたか？」

「いや、その、きれいだなあって思ったもので」

「あんだ、ここのもんじゃないね」

どうやら不審者と思われてしまったようだ。怪訝な顔でこちらを見ている。

「ちょっと人を探してまして。村を探して歩いていたときに偶然見かけたもので」

「あれは、ジギ婆さんに頼まれてやってるだけだ。生家の花屋だったこと目印にな」

「目印ですか」

「村もどんどん変わっていくもんでな。戻り待ちの人がいるっていうが、いつの話になるんだかね」

ジギ祖母さんがずっと誰かを待っているというコノンさんの話は正しかった。よほど大切な人

なのだろう。

「これからもずっと花を？」

「そりゃ、ジギ婆さんの頼みだからな」とだけ言うとお礼も聞かずにそそくさと窓を閉めてしまった。もしかすると待ち人が来たとでも思ったのだろうか。そうであればよかったのに残念だっただろう。閉まった窓に向かって頭を下げてから生家跡に戻った。

花に頭を下げながら、待ち人が戻ることを心から祈った。自分がノート氏を探すように、誰しも会いたいと思う人はいるものだろう。そう思うとジギ婆さんに少し親近感を感じた。花を見ているとふと、リブロールで待たせているミリルさんのことを思い出した。考えてみればマリーさんとナーシュさんだってそうだし、船長やお祖父さんはミドリ鮫を待っていると言えなくもない。待っている人と戻れない人の関係というのも不思議なつながりだ。ここにいると、会えない心のつながりのほうが強いと言われているような気がする。それこそ記憶のなせる業なのだろうか。なぜ、待つのか、どうして離れてしまうのか。そんなことが頭の中にぼんやりと浮かんで消えていく。どうして戻れなくなるのか。戻りたいけど戻れないのか、戻りたくないのか……戻れない旅とはなにか。自分の旅も戻れない何かが起こりうるのだろうか。花の前でしばらく立ちすくんでしまった。

しばらくいるうちに、さすがに寒さが堪えられなくなってきたので、答えの出ない考えごとに見切りをつけて、ジギ祖母さんの旧宅を離れた。地図の花の絵が書かれた場所はやはりジギ祖母さんのいたところで正しかった。そこであらためて村人のジギ婆さんに寄せる気持ちを知ることになった。村人たちの思いには並々ならぬものを感じる。ジギ婆さんの人望は巫女であり長老であり、若き日の美しさであり、花そのものであり、ノイヤール湖とともに村の生きた伝承そのものになっているようだ。

第25話 書庫の入口

ロウルさんとは、シナモン跡地を使った公共の場所で待ち合わせをした。開口一番、私だけに教えると言って、誰にも言わない約束をすることになった。ロウンさんもナーシュさんの失踪以来、そのことが頭から離れないらしく、こちらから話したノートのことでお互いに共通する問題を感じたのだろう。そうでなければ島の生活などから同じ外ものである自分に親近感を感じてくれたのかもしれない。もちろん、お祖父さんとの紹介もあってのことだろう。

小屋の中は公共の場として殺風景なほどに片付けられているものの、利用する人は少ないらしく、今日も自分たち以外に誰もいない。中から鍵もかけられるようになっているから個人的にも使える公共スペースというところだろうか。主に月に一度の村の集会で使われる場所ということだった。カウンターには営業していた当時のカフェのメニューが書かれた板や骨董ものの食器などが置かれている。今は当然誰かがお茶を入れてくれるわけでもなく、自分で火をおこして持参したものを飲むという利用方法になっていた。カフェというよりも炊事場のついた打ち合わせ部屋という感じだ。それがこの村には合っていると思った。

ロウルさんは、今日はこちらがお客さんだと笑顔で言うと、準備してきたお茶を入れてくれた。手作りで水草を使って試作中のものだそうだ。うまくいけばサークルに出す予定だとうことらしく、味についての感想を聞かれた。水草のお茶は飲んだことはないけど、なんだか懐かしい気分になれる味がした。

「このことはご存知かもしれませんが、シナモンティーが有名だったようですよ。昨日見せていただいたノートにも出ていたけれど、それが後に店名になったようです。そうか、シナモンティーにすればよかったかな」

それを聞いて、まさにここがノート氏が旅立ちの日に立ち寄った場所だということに気がついた。数百年前の店と当時の暮らしが蘇ってくるような気がした。使っている骨董のカップさえもノート氏が使っていたものかもしれない。当時の彼の痕跡を見つけることはむずかしいけれど、ノート氏の旅と重なるように、今からほんとうに自分探しの旅が始まるのかもしれないと思った。

ロウルさんは机に座るとカップを横に置いて、紙にさらさらと絵を書き始めた。やはり手先の器用な人だけあって、絵も立体的で製図を見ているような綺麗な線が印象的だった。なにか迷路のようなものを書いているように見えた。

「これが地上の建物で、これがノイヤール湖。ここから横穴があって、この先から一度下がって上に、下がったところで湖の水面下とつながる通路に。あがったところは行き止まりの書庫で、

ひと部屋ほどの空間になっているというわけです」

どうして公書館から離れたところに入口を会っているのか理解できなかった。別々に描いて説明しようとしているのだろうか。

「ということは、この絵でいうと下がったところは水の中を抜けて行くということですか」

「そうです。わかりますか？ 部屋も水面下の高さなのですが、空気は常時入っているの水は上がってこないわけです。空気穴がどこかは今でもわからないですが」

「公書館のほうの入口はどのあたりになるわけですか？ 裏庭の地下は通路があるということですか？」

「そちらはダミーでしょうね。ホーラーが手伝って作った隠し部屋だと思います。

「ということは、入口は湖のほうだけということですか」

「そうなんです。なので、実はそこには本はないんですよ。ナーシュさんの手書きの資料はたくさんありますが、おいらには学がないのでそのほとんどは何を書いているのかも理解できないようなものばかりで」

「ノート氏が書いたノートの残りはありそうですか」

「なんとも言えないですね。ナーシュさんもいつか戻るだろうから、あまり触らないようにしていますし。おいらたちは留守番をしているだけと思っているので」

たしかに、ナーシュさんの隠れ書斎のようなものであれば、勝手に見るのもはばかれるような気がしないでもない。

「そこへは私もいけそうですか」

「オルターさん、水のほうは？」

「潜るようなことはあまりやったことはないですが……」

「数分がまんができれば」というと頬を膨らませてみせた。

「心配いりません。ロウル特性の潜水具もあるので、それを被ればだいじょうぶでしょう」

ロウルさんもスロウさんと同じように発明をできる人なのだろう。素潜りや潜水はすぐには無理にしてもその入口だけは見ておきたいと思った。場合によっては中のものは皮の袋にでも入れて持ち出してもらえばなんとかなるだろう。

「まずは、公書館のほうを先に見てもいいかもしれないですね。ナーシュさんが集めたものはすべてあそこにあるので。地下は手稿中心でなかなか難解ですし」

手稿という言葉が気になって、地下の入口を一度は見ておきたいと思った。見るだけでも先という熱意をわかってくれて案内してもらうことになった。もしかすると、まだ場所を教えるほど信頼されていないのかもしれないとも思ったが、それはんなかったようだ。

「行く前に、緑石のほうの話もしておきましょうか」

信頼してないどころか、ロウルさんはなんでも話すつもりらしい。お願いすると、石切を始めた経緯を話し始めた。もともとスロウさんにそういう技術があったわけではなく、ナーシュさんが自分で切り出していたのだということだった。仕事もなく食べるのもままならない水上生活を見て不憫に感じたのか、手伝わないかとナーシュさんのほうから誘われたのだそうだ。切り出した石は、昔からの風習に習って六角錐にしてジノ婆さんの近くにもいくつか置いたけど、そのためにわざわざ湖底から切り出す必要があったのかどうかはわからないとのことだった。後になって、石窟を知られないための偽装として切り出しをしていたのではないかと感じたとも言った。スレイトンケープの骨董市で見たものもハロウさんからの提案か依頼に応じてつくられたものだったのかもしれない。骨董市にはいい品になるだろう。もしかすると、ダルビー船長がリアヌシティから締め出されたのは、緑石の持ち出しが原因だったと想像できなくもない。

「最初から石窟のことはすぐに教えてもらったのですか」

「いやいや、ナーシュさんもそこまでお人好しじゃないですよ。聞いたのは失踪する直前でしたから、よほどの覚悟をした後に、何かあったらという思いだったのではないかな」

戻れないかもしれないという気持ちで、何をい残そうとしていたのか。きっと石窟に答えがあるに違いない。それが何か行かなければわからないことがあると思った。

「じゃあ、早速入口にご案内しましょう」

外に出るとまわりをぐるりと見渡して誰もいないことを確認して、すばやく船着場に向かった

第26話 地下迷路

「今日はお祖父さんも大漁になるかもしれませんね。漁にはうってつけの日ですよ」

まったくその通りだ。最高の日が最低の日にならないことを祈りたい。

「スロウさんも漁をされますか」

「いやあ、漁はお祖父さんにはかなわないですから、石の切り出しに精を出していますよ。お陰であの石を欲しがる人もいて」

船大工が仕事という話でなかったのが意外だった。

「船大工は村に何人かいますし、百年近く続けている腕のいい人はいますから、私なんか新参ものですよ。お祖父さんが鼻根にしてくれているのでがんばってますが」

ノート氏が見ていたという舟大工の家系も続いているのいるのかもしれない。戻ったらお祖父さんに聞いてみよう。

「石の切り出しのほうが本職なんですね」

「そうですよ。ナーシュさんのおかげですね。とくに湖底の緑石を切り出す人はほかにいませんから、これだけは自慢できますね」

「六角錐は誰が作っているんですか」

「それは石工さんがいるので、そちらにまかせてます。オルターさんも興味あればまた紹介しますよ」

「私も作ったほうがいいのかなあ」

「うーん、ここに戻れることを願うものなので、どうですかね。お土産ぐらいいいかも」

話をしながら、ロウンさんは何かしら様々な機材を舟に乗せ始めた。

「今日も石切りですか」

「ああ、そういうことではなくて……でも、そうとも言えるかな」

「あの、こんな質問もおかしいですが、どうして私には入口を教えていいと思われたのですか」

「お祖父さんの知り合いだし、遠くからわざわざここを訪ねてきて人を探しているわけですよね。公書館を本当に必要としているのはすぐにわかりましたよ。もともと、自分もオルターさんのような立場だったわけだから、お手伝いできるならと思って。なんだか同じなにかを探しているような気がしたのかな」

やはり昨日話したことが伝わったのだと感じられてうれしかった。

「それに、失踪してしまったナーシュさんのこともあるし。スレイトンケープで待つマリーさんという人のためにもなりますよね」

言われてみてはじめて、この旅が自分探しというだけでなく、いろいろな人の気持ちを背負っているのだということに気づいた。もしかすると知らないうちにノート氏の成し遂げられなかったことを引き継いでいるのかもしれない。

「オルターさんこそがキーマンかもしれないですよ」と言うと、意味ありげにこちらを見て同意を求められた。自分が何のキーマンだというのだろうか。ただ、気の向くままにその場の状況にまかせているのに、みんなの期待を裏切るのではないかという不安がよぎった。

公書館を通りすぎて、湖の淵のあたりまで来たときにロウルさんは舟を止めた。そこは一昨日気候の調査をしていたところだった。到着するなりすぐに潜水の装備を説明しながら身に着け始めた。それほど複雑なものではなく、皮で作られた服のようなものとホースがつながる頭にかぶるものだった。こんな簡単なもので大丈夫かと思うが、もう何年も使いながら手を加えてきたものなので心配はないという。この地で暮らす人たちの伝統的な装備も参考にしているそうだ。草原で馬と暮らす人の馬具と同じで、湖で暮らす人たちの知恵を集めたものなのだろう。背中には石切りの道具まで背負っている。聞くと、石切りだけでなく重しの役割になるそうで、持たないと湖底に降りれないのだということだった。

「ここですよ」

一瞬、ロウルさんが何を言っているのかがわからなかった。

「あはは、公書館の隠し書庫」

ロウルさんはこちらの顔を見てうれしそうに笑っている。こちらは意味がわからず呆然とするだけだった。公書館の書庫が湖の中にあるという現実には受け入れられなかった。それもここは緑石の切り出しをしているところだ。

「じゃあ、ちょっと見てきますね。このパイプが命綱なので絶対踏まないでくださいね」そう言い残すと湖にゆっくり身体を沈めていった。皮に何かの動物の脂を塗ったパイプが水面下に生き物のようにするすると伸びていく。どのぐらい潜るのだろうか。

第27話 潜水

湖の水はきれいでも、呼吸の泡のせいでロウルさんの姿は見えない。時々小さな魚たちが興味ありげに泡と戯れ泳ぐ姿が見える。ずっと一人で湖を見ていると、突然ミドリ鮫が現れるのではないかと、不安な気持ちにならなくもない。ロウルさんからはミドリ鮫の話聞いていないけど、この湖で見たことがあると言われたら、落ち着いて舟に乗ってなんかいられたものではない。そんなことを考えながら時間が過ぎていった。

しばらくして湖底からの泡が大きくなったと思ったら、ぽこんとスロウさんの頭が水面に飛び出してきた。手で大丈夫ですよという合図をしている。無事書庫まで行けたようだ。舟に這い上がるようにして乗り込むと頭にかぶっていたものを取り、ふーっと大きく息を吐いた。

「どうですかねえ。行けそうですか？」

「というと？」

「オルターさん、やってみます？」

誰でも簡単にできますよと言いたげな笑顔で聞かれた。まさか、いきなり自分に潜れと言われるとは思ってしなかった。そうしないと秘密の書庫に行けないと言っているのはすぐに理解できたけれど、さすがに自分のような素人がやることとは思えなかった。

「あの、実は泳ぎが苦手で…」

「泳げなくてもだいじょうぶですよ」と屈託のない笑顔を返された。

ミドリ鮫に囲まれながら浮遊しているときと同じような感じなのかと想像しながらも、現実はそのようなものではないということはだれでもわかることだ。

「心配ないですよ。これをかぶればだれでもできますから」

これと言われてもかぶり方もわからないし、どういうふうに呼吸するのもわからない。それでもロウルさんの待つ様子からは自信しか感じられない。そんなに簡単なことなのだろうか。こうなると覚悟を決めるしかない。公書館に入れなかったでは、さすがにトラピさんやナミナさんに申し訳が立たないだろう。

「あの……水は冷たいですよ」

「おいらは素潜りで行くので、これを着てください。温泉気分でだいじょうぶです」そう言うと、着ていたものをするすると脱いで手渡された。裏にはゴムのようなものが貼られていた。ロウルさんの勢いに押されるままに潜水の準備が整っていく。その間にも、こんなことがほんとうにできるのかという不安感は消えない。装備を着け終わると早速練習ということで、何度か水面に頭までつけながら少しずつ水中にいる時間を伸ばしていった。ロウルさんは素潜りでいっしょにいてくれるので、言われるがままに1時間も潜水を繰り返していると、湖底のほうに横穴があるのが見えてきた。そうなると逆に早く行きたいと気がせいてきて、練習にも自ずと気合が入っていく。徐々にまわりを泳ぐ魚見て楽しむ余裕も出てきた。

「オルターさん、なかなか上手です」

「いやいや、道具をつけると地上と同じようになるだけで、私の力ではないですよ」

「はじめてでここまでできれば、大したものですよ。ちょっと休憩しながら石窟の話をしましょう」

湖畔で薪をすると火照った身体がさらに温まる。こんな寒い日なのにおかしな気分だ。冷水を浴びると身体の芯から温まる感じがするのと同じようなことなのだろうか。水の中のほうが暖かく感じるのも新鮮な経験だった。地下も気温差を受けにくいけど、水中も同じなのかもしれない。

「それで、書庫にはどういうものがありますか」

「おいらにもわからないものが多いので、ナーシュさんの手稿のようなものばかりなんです。村の資料は公書館のほうにあるので、それだけみても秘密はわからないよと言わんばかりですよ」

「ナーシュさんの書いたもので何かわかることはないですか」

「なんだか一見は村と関係のないようなものばかりで、数式や記号のような記録ものもたくさんあるんです」

「何かを計算していたとか。ノート氏を書いたようなものはありませんか」

「どうでしょうか。おいらは何かを探して見たわけではないので、あれが宝の山であつてもなんのことだかわからないのかもしれない」

確かに興味のない人にとっては、あってもなくてもいいものなのかもしれない。はたして自分にその価値がわかるのかは行ってみるまでわからない。ナーシュさんだけが知る知識か経験を通してみないと理解できないことも多いのだろう。博識な人の考えることは凡人には理解しえないということか。

話は石窟の構造の説明となった。ロウルさんは話を聞かせることによって興味を持たせようとしているようだ。はじめての潜水も楽しみがあればはずみがつくと考えているようだ。穴は途中藻のようなものがカーテンのようになっていてその先で一旦下に下がって上がったとことに水のない空間があるのだという。寝起きするのに十分な広さがあるらしい。空洞の先はさらに水の中に伸びているけれど、その先はどこにくかっているのかわからないとのこと。そもそも人が通るような大きさが無いのだと説明してくれた。

聞いていると、水中の通路を使って紙の本が持っていくのは簡単ではないと思い始めた。

「ナーシュさんはどうやって紙を持ち込んだのでしょうかね」

「たぶん、向こうで紙を漉いたんだと思いますよ」

「紙を漉く……」

言われて気がついた。ハロウさんもユイローでノートの紙を漉くと言っていた。紙漉き簀桁（すけた）さえあれば、石窟の中で紙が作れるというわけだ。

「ロウルさんも、紙を漉いたことがあるんですか」と尋ねると、あるという答えが帰ってきた。石窟で試してみたというのだ。この人は人一倍好奇心が旺盛なようだ。なんでも自分で試してみたいのだという。

「でも、石窟の中で作業をしていると意識が遠のくようなこともあって、やめてしまいましたけど」

「意識が遠のく？」

「オルターさんと同じですよ。おいらも体験者」と言いながら片目を閉じて笑ったと思うと、先を急ぐように潜る準備を始めた。スロウさんもミドリ鮫を見たことがあるのだろうか。

第28話 石窟

意を決して石窟に身体を押し込んだ。とは言っても、人が立ったままでも十分余裕のある高さがあり、圧迫感はまったくない。余計な心配がひとつ減ってほっとした。穴の中は真っ暗闇かと思っていたら、壁がぼんやり緑色に光っていた。以前、ノーキョさんのところで見たものと同じ種類の苔だろう。そこを少し進んだところで頭上から光が射し込んでいた。気がつくとも部屋に出られるように足元は階段状になっている。地上からの光かと思って、ロウルさんに従って上がってみると思った以上に広い空洞に出た。暗闇にならないよう事前に明かりをつけてくれていたようだ。空洞は石の壁に囲まれていたので、閉じられた密室での火は危険ではないかと尋ねてみると、どこかから空気は流れ込んでいるという話だった。少なくとも酸欠になるような密室ではないようだ。自然がつくった完璧な部屋がそこに現れた。

「ようこそ、ナーシュの部屋に」おどけるように言うロウルさんに握手を求められた。

「お陰でなんとかかたどり着きました。ありがとうございました」

「秘密結社への入会を祝って」と言いながら、手を強く握り返された。

ここを知る人はナーシュさんを含めても3人だけということに身が引き締まるような思いがした。あのホーラーでさえ知らないし、おそらくお祖父さんやお祖母さんも聞いていない。もしかするとジノ婆さんでさえ知らない場所かもしれないと考えると、秘密結社という言葉もあながち間違いではない。当然、この話は誰にも言わないという約束を求められていることもわかった。

「お祖父さんたちにも言わないほうがいいですよね」一応確認してみた。

「そうですね、しばらくは二人の間だけに留めておきましょうか。この部屋の意味がわかってからの判断でも遅くはないでしょう」

そうなる、マリーさんや船長にも言えないということになる。せつかくの収穫と思いながらも、今の状況では納得せざるを得ないだろう。ロウルさんは部屋のものがなくなっていないかどうかを確認するように丁寧に見回している。置いてあった位置も変えないように気を使っているように見える。隅のほうには衣類も干してあり、今でも誰かが出入りしているように思える。盗難をさけるために不在を感じさせないようにしているのかもしれない。まるで、ナーシュさんがどこかに隠れているのではないかと思えてくるほどの気配を感じさせる。ひとつひとつがナーシュさんがいたときの痕跡だと思うと、静かな興奮に満たされていくのがわかる。

部屋に出てきた穴に溜まっている水が部屋の床すれすれの位置まできている。部屋の中に水の入口があるというのもなんとも不思議なものだ。そこを魚が泳ぐのを見ると、隠れ潜んで何日でも過ごせるだろうということは容易に想像できる。水の村ならではの構造に驚かされる。要塞としてのこの土地の真価を見たような思いだ。のんびりした表向きの生活と裏腹に緻密な生き残り策が寝られていたのだろう。

ロウルさんとは別に、自分でも部屋にあるものを見てみたが、事前に聞いていた通り、書庫というにしてはまったく本がないということに驚いた。その代わりというわけではないだろうが、ノートのように綴じられた紙もあれば、綴じられないままの紙片でいくつかにわけられて重ねられている紙の山もある。机の代わりにしていたと思われる石の棚には書きかけのメモのようなものとペン、おそらくこれもここで作ったのだろうと思われるインクが石の窪みに入れられている。

目を壁の隅に移すと暗がりの中に紙漉き道具の簀桁（すけた）が置いてあった。見ているうちに、ここは保管する場所ではなく、なにかを作ったり、まとめたりする場所だったということがわかってきた。スレイトンケープの書齋が趣味を楽しんでいるような部屋だったのに比べて、この石窟の部屋は何かを成し遂げる使命を感じさせる空気が漂っている。ナーシュさんはここで何を書き残そうとしていたのだろうか。机の上を見ていた時に、きれいな緑石の六角錐を文鎮にした一枚の手紙のようなものがあるのに気がついた。書き出しには「親愛なるあなたへ」と書かれていた。

「ロウルさん、これは？」

「オルターさん、心当たりありますか。少なくともおいら宛ではないようなので。ナーシュさんが消えた後に残されていたんです」

手に取って見ると、書かれている文に思わず目を奪われた。

親愛なる君へ

私がオールドリアヌに身を置いて数年がたちました。その間、この土地で起こる自然の災い、多くの未見のできごとことなどを知りました。そしてそれらは受け入れるにはあまりにも理不尽で不可解なものであり、愛すべき村を守るには多くの苦難を伴うことになるだろうことを知るに至りました。人知の及ばないことはいつの世にもあり、人が知らないほうがよいことも多くあります。しかし、私はその困難を克服すべく、理想の地を目指して自らの得た知と力を尽くすこと

を心に決めました。そして、そのためにはこの世界から姿を隠すことが最善と考えることとしました。詳細を語ることは災いを広げるばかりになると思われるため、この書置きではあえて伏せることにします。いずれ、この手紙をみつけた人があなたの手元に届ける日が来ると思います。その人が私をみつけ出さないことを祈りつつ筆をおきます。

ナーシュさんの生の声をはじめて聞いた気がした。同時にマリーさんの顔が目には浮かんだ。マリーさん宛というより、そうあってほしいという思いが強かったからかもしれない。ナーシュさんは人に言えない苦悩を抱えたまま、人知れず姿を消す思いをこの石窟の中でしたためたということだ。あとはこのメモや公書館の資料から推し量ってほしいとでも言わんかのような簡単な書き残しに、こちらの大きな期待が闇の中に封じられていくように思われた。一帯何が起きているというのだろうか。

「ナーシュさん、どこに……」思わず口をついて出てしまった。

「オルターさんの探しているものとのつながりはみつけれそうですか」

「ああ、なんとも言えないというか、接点があるのかどうかさえ……」

ロウルさんが少し残念そうな顔をするのがわかった。

「手紙では見つけてくれるなどなっていますが、みつけるのはオルターさんではないかと……」

どうしてロウルさんがそう思ったのかはわからない。それでも自分がナーシュさんを探していることは間違いなし、マリーさんは自分の比ではないだろう。これが誰かに強要されて書いたものでなければ、村のために何かに身を投じたということなのだろう。それがリアヌシティとの約束と関係していて、お祖父さんのいう悪くなしないという話ということだろうか。

「あの、ロウルさん、気になったことをお聞きしていいですか。ロウルさんも意識をなくしたことがあるということですか？」

「たぶん、ユイローのなにかの作用だと思ってるんですが」

「やはりそうですか」

「ミドリ鮫は見たことはありますか」

「見たような気がするってところでしょうか。お祖父さんから散々聞いていたので、ほんとうにみたのかどうかもおいらにはわからない」と言いながらメモ用紙を探り、中から、ミドリ鮫とドットトラウトは対になって弧を描く絵を見せてくれた。

まさにハロウズの透かしになっていた紋章と同じだ。絵に添えて、善悪という文字が書き添えられていた。ナーシュさんは何を知っているのだろう。

第29話 知らない言葉

こんなところで、人知れず思索と研究に没頭していたナーシュさんという人はどういう人だったのだろう。マリーさんやダルビー船長に慕われ、村人から尊敬される人。石窟に引き籠る孤高の生活と、ホーラーやロウルさんに託した願い……。そもそもノート氏のノートを読んでいたのかどうか、ノートと関係あることをしていたのかどうかもわからないままに時間が過ぎていく。

部屋にはいくつかの器や容器や実験に使うような器具も置かれていた。あきらかに調理器具とは違う種類のもので、それだけを見るとまるで実験室のようでもあった。容器には液体や粉のようなものも残されたままで何かを配合していたように見える。化学記号のような書き残しもあるので、何らかの調合をしていたのかもしれない。残った粉を恐る恐る嗅いでみると、過去の記憶と結びついてきた。すぐにコピの顔が頭に浮かんだ。そうだ、ユロミの粉末に間違いない。ナーシュさんもユロミの覚醒効果について気がついていたのだろう。それを何に使っていたのかはわからないけれど、自分の旅にはいつもユイローが関わっているように思っていたので、ここでもかと思わずにはいられなかった。ユイロー、ユロミ、ドットトラウト、ミドリ鮫、ノイヤール湖、緑石、六角錐……。

「オルターさんもその粉をご存知でしたか」こちらが興味を持っているのに気がついたロウルさんが聞いてきた。

「ユイローの実ですね。ウォーターランドにもあるので。ノイヤール湖にもあるのを知って、ノート氏が持ち帰ったのか、島の方へ持ち込んだのかのいずれかではないかと思っているんですが。もちろん鳥が運んだということも考えられはしますが」

「へえ、島にもあるんだ。種子が飛ぶのはさすがに考えられないから、誰かが持ち込んでしまったということですかね。鳥が食べる実もないですしね。覚醒が必要だったのかもしれないな」

覚醒という言葉にいろいろな意味が込められていると思った。どちらかというとならぬロウルさんは良くないものという印象を持っているようだ。ユイロー風呂を楽しんでいたということは話さないほうがよさそうな雰囲気だった。

「もしかして、ユイローとナーシュさんの失踪も関係している？」

「確信はないですが、無関係ということはないかな」

そう言うと壁の上のほうを指さした。よく見るとそこにかけていたのは乾燥したユイローの葉だった。

「あ、そうだ。ユイローを噛んで素潜りをすると息継ぎ時間を伸ばせるのはご存知ですか」

それはナーシュさんから教えられたことだという前置きをして、覚醒作用のひとつとして、呼吸が深くなるという話を説明してくれた。結果として潜水の時間が長くなり、石窟に来る時もよく使っていたとの話だった。お祖父さんも子供のころに素潜りをしていたという話をしていたけれど、この地域ではよく知られたことなのかもしれない。水の村ならではの生活の知恵だったのだろう。乾燥した葉やユロミの粉末もそのために用意されたものだったのかもしれない。紙漉きにも使われていたことも考えれば、石窟には必要不可欠なものだった可能性も考えられる。

「私にも効果はありますかね」

「たぶん。でも、あまり自然ではない気もするので、注意して使ったほうがよいでしょうね」

「ユイローの潜水ができれば、いつでもここに来られるということですよね」

「あはは、そういうことですね。オルターさん、来る前とぜんぜん違う」と言って笑った。

確かに、ここにいると水に対する恐怖心が薄れていくような気がする。もともと人間だって水の中で生まれてくるわけだから、おかしくないと思い始めた。オールドリアヌを知れば知るほど水に対する意識が変わってくる。ウォーターランドでは意識もしていなかった水が、なにか特別なものに思えてきた。

「この魚はドットトラウトですね。水の村の守護神のようだなあ」

「そうですね。ホルマリンに入れてあると、生きている時の輝きが失われないですしね。美しい」

「ナーシュさんは、この地の自然をかなり研究していたようですね。ここも図書館の書庫というか、博物館のような印象があります」

「博物館かあ。おいらも博物館員のほうが向いているかな。公書館はホーラーにまかせて」ロウルさんはうれしそうに手にした瓶を眺めている。

「これは湖底の湧き出し位置を書いた固定図だと思います」

見るとノイヤール湖の形に等高線のような線が引かれていて、ジノ婆さんの棲む近くが深く堀

去がっているのがはっきりわかる。

「ここにドットトラウトが潜んでいるんでしょうか」

ロウルさんはこちらの質問の意図がよくわからないとでもいうようにあいまいな答えをした。ドットトラウトがどこで産卵をしているかが問題の核心につながるかもしれないとは想像もしていないだろう。

しばらく手書きのメモの中にノート氏の記録が含まれていないか探しててみたが、それとわかるものはなかった。書き残しから自分にわかることは限られているが、その中にあった「ファントリア」という文字だけが目を引いた。同じ紙には原子の結合のような図で、N、F、Wの文字が書かれていた。今まで目にしたことのないことばだった。ロウルさんに聞いても、ナーシュさんから聞いたことはないということだった。気になったのは言葉そのものというよりも前後の文からすると、オールドリアヌと関係するどこかの場所を示す言葉のように読み取れたことだった。ファントリアとの関係を特別視するような記述がされている。オールドリアヌの上流地域だろうか、それともリアヌシティのどこかにある場所のことだろうか。あるいはナーシュさんの描く理想郷をそう呼んだのだろうか。ナーシュさんは、ファントリアというところに向かったのではないかという妄想が膨らんだ。公書館に行けばなにかの記録があるのかもしれない。よくよく見るとその紙には鮫とドットトラウトの透かしが入っているのがわかった。他の紙も見ると透かしの入ったものが多いことに気がついた。ハロウズのノートに入っていた透かしが、ここの紙にも入れられている。ハロウさんと知り合いだったというから、ナーシュさんが紋章と伝統を引き継いでここで漉いていたのかもしれない。この透かしは村への愛情だろうと思う一方で、ノート氏が旅に出た時に使われていたものではなかったかとも思った。この一致は偶然ではない気がする。ナーシュさんはノート氏の記録を見たに違いない。

第30話 再会

ロウルさんが、公書館のほうにホーラーを呼んでいる時間だと言うので、残念ではあったけれど、石窟をいったん離れることにした。公書館を見ることによってわかることもあるのではないかという期待もあった。念の為に、またすぐに来られると思って良いかと聞くと、石の切り出しはいつでもしているので、見かけたときに声をかけてもらえばだいじょうぶとことだった。この歳になってやることではないかもしれないけど、ユイローの素潜りを試してみたい気もしている。それほどに水の中にいるのは心地よい体験だった。母体の羊水の中にいるようななんとも言えない不思議なやわらかさを味わう経験になった。ノイヤール湖の水は計り知れない力と豊かさを感じさせる。リアヌシティの名ばかりのウテラストームとは似ても似つかないものだと思いつつながら、石窟を後にした。

舟に戻ると冬間近だったことを思い出させられることになった。石窟との気温差は10度以上はあるのではないかというほどで、水を出たあとの寒さが身に堪えた。気が高ぶっているせいでもなんとか凌いでいるものの、気をつけないと体調を崩したお祖母さんたちに迷惑をかけることにもなりかねない寒さだ。こんな日に無茶なことをしたものだと思つて自分の身勝手さを呆れた。それでも得られた満足感は何にもものにも変えがたく、今日の無謀な潜水がいつかすべての謎を繋ぎ、答えを出す起点になるのではないかという期待が膨らんでいった。

公書館へ移動する時間を利用して、気になっている公書館の地下の話を知ると、時間があるときに案内をしてもいいけど、実際には席靴を隠すダミーとしてつくられたものとの答えだった。なにかありそうだけど、誰も入れないという場所にしてあるけれど、今そこには何も特別なものもなく、ホーラーの控え室のようなものだと話した。公書館という建前から閉鎖するわけにもいかず、かといってホーラーは自由な立ち入るのを嫌うので、半分ホーラーの隠れ家のようになっているのだとことだった。裏への抜け道とあわせて知らない人間への牽制ということだろう。ただ、この話は内緒にしておいて欲しいと頼まれた。それが番人ホーラーへの心遣いのようなのだ。この話は石窟の話も含めて、申し訳ないけどナミナさんたちにはしばらく話さないでおくしかないようだ。

地下の話聞きながらの移動だったので、公書館に見えるところまではすぐだった。土地勘がつくほどに村が小さく思え、愛おしくもなってくるから不思議だ。

「ほら、ホーラーが待ってますよ。ほら、ほら、ホーラー！」

手を振った公書館のほうを見ると人影があるのがわかった。大柄な体は遠くからでもわかる。また、辛辣なことを言われるのではないかと思うと、中に入りたい気持ちと裏腹に再会には正直あまり気が進まない。公書館に近づくと、岸にある木に舟をロープで結びつけて飛び降りた。い

よいよ気難しいホーラーさんにご対面だ。

「悪かったねホーラー」

「なんのことはねえ。とっとと見てくれ」

「こちらオルターさん、覚えてる？」

「わかんねえな。俺はホーラーだ」

覚えていないのはありがたかった。変な印象を持たれてないほうがいい。ホーラーは粗野な雰囲気は変わらないが、一切を受け付けないという偏屈な態度はあまり感じなかった。ロウルさんがいると落ち着くのかもかもしれないけれど、根は生真面目なだけで悪い人ではなかったようだ。そうでなければナーシュさんだってホーラーを信じたりはしなかっただろう。うまくすれば、仲間として受け入れてもらえるかもしれないと思った。

「中を見せてもらっていいですか」

「かまわねえけど、持ち出しはだめだ。位置も変えてはだめだ」

ナーシュさんは、この責任感がここの管理にはうってつけだと思っただろう。いろいろ知っていると、力持ちの生真面目な大男はなかなかいい図書館員だ。もう少し本好きで繊細なところがあると、言うところなしというところか。横でやりとりを見ていたロウルさんがうれしそうに笑っている。

中に入ると石窟とまったく逆に、本の多さにあらためて目を奪われる。どこからこれだけの本を集めてきたのか驚くばかりだ。この中に謎を解く鍵となった記述があったに違いないと思いつつも、それをみつけられるのかどうかという心配は残る。一人で読んでいてはいつのことになるか想像もつかない。まずはノート氏の書き残したものがないかどうか、ミドリ鮫の記録はないか、ユイローの効能の説明はないか。村の治水や水系も見てみたい。歴史書にも何かの糸口があるかもしれない。戸籍や紳士録があればもっと話は早いのもかもしれない。それとナーシュさんの残したファントリアという言葉に関する本がないか……。気になるものだけでも上げると切りがない。

「ここはいつでも入らせてもらえるものですか」

「俺がいるときならいつでもいい」

ホーラーから、いるときならという制約を聞くとちょっと気が重くなるけど、入れるだけいいと考えることにしよう。ついでに楽しみにしているお祖母さんも入れそうかどうかを聞いてみると、他の人間はだめだということだった。この図書館員はなかなか手ごわい。逆にロウルさんへの信頼は特別なものというのがよくわかった。ナーシュさんとの直接のつながりはなにものにも変えがたく強い絆となっているのだろう。

「オルターさん、とりあえず入ってみませんか」

ロウルさんに促されるようにして中に入った。トラピさんとナミナさんへの感謝は言葉で表せられない。

書架がどういう並びになっているかもわからないのでは、目的の本の探しようもない。前回の記憶を思い出しながら蔵書の分類と配置を確認することからはじめた。最初に歴史関係が自然史といっしょになっているのがわかった。一方で人に関するものはないようだ。その代わりに著作や紀行文のようなものはまとまっているようだった。半分ほどは書かれている文字の現代のものとは違うから、ナーシュさんほどの情報がここから得られないことは容易に判断できる。おそらくロウルさんも同じだろう。

日は傾きはじめているので、あまり時間はないという話になったので、今日はホーラーとの顔合わせということで、またあらためてゆっくり来ることにした。石窟も公書館も入れたという程度で終わったけれど、明日以降どういう順番で調べていけばよいか考えるのに頭を悩ませそうだ。ウォーターランドかスレイトンケープの誰かの手助けが必要なことは容易に判断できることだった。

第31話 夜の時間

お祖父さんの家に戻って、夕食を頂きながら今日の報告をした。ただ、石窟のことは言わない方がよいと思った。おそらくロウルさんも話していないと思ったし、少なくとも話す了解を得てからのほうがよさそうだ。

お祖父さんのほうは久しぶりの漁も釣果があったようでいつになく上機嫌だった。家の中に閉じこもるのは性に合わないと言顔に書いてある。

今日はドットトラウトは見なかったかというお祖父さんの言葉から、こちらの心配をしてくれていたことがわかった。お祖父さんはナーシュさんの消えた日とドットトラウトに何かの関係があると確信している。もしかするとお祖父さんにも同じような体験があるのかもしれない。お祖母さんが心配するから言えないのか、あるいはミドリ鮫と同じように、村の男たちの心の中にだけ秘められているのかもしれない。

「稚魚はみましたが、群れには合わなかったですね」

「まあ、場所があそこじゃな」とドットトラウトがいるところではないということを再確認するように言った。

「しかし、ホーラーも愛嬌がないねえ。本を独り占めして何の役に立つんだか」

お祖母さんは期待を裏切られたのにちょっと納得がいかないようだった。その気持ちはよくわかる。自分だけが入れるようになったことを申し訳なく感じた。

「いいじゃないか、オルターさんがそのうちみんなに公開してくれるさ」

一宿一飯のお返しをいつかすることを心に誓いながら、村のためにも今後ホーラーとうまくやらないといけないと思った。とはいうものの彼の胸襟をどうすれば開けるのか。なかなか悩ましい話ではある。

「ホーラーのことだから、簡単じゃないだろうけどねえ」

お祖母さんは半ば諦めぎみに溜息をつくとき、夕食のスープをスプーンですくい口に運んだ。

「シナモンズの方はいつでも入りたければ入れるがな。当時のものもほとんどないからな」

「あそこの子孫がまだどこかにいるということはないですか」

「聞いたことないねえ。もう何百年も前のことだし、それこそ公書館で調べたいぐらいさ」

お祖母さんは公書館に入れないことがよほど納得いかないと見える。それでも今を淡々と生きることには精を出すのがこの村のよいところで、ウォーターランドとも共通している点のひとつだと思った。過去と未来から切り離されたような暮らしは、高齢者が多いからなのかもしれない。

「まあ、わかるとしたらジノ祖母ぐらいだろうな」お祖父さんがあまり興味なさそうに言った。

お祖父さんの言うことももつともで、歴史の事実を見てきたジノ祖母さんの話ほど貴重なものはないのは間違いない。本を見てもナーシュさんの手稿を見ても、最後はジノ祖母さん頼みになるのではないかという予感が頭をよぎった。生き字引のジノ婆さんから聞ける話が一番正確に違いないのだ。明日にでも図書館に行ったついでに立ち寄れたら顔を見に行ってみよう。雪のこともちょっと気がかりだった。

「オルターさん、一人でいくのはまだだめだよ」心配性のお祖母さんが釘を刺すように言った。

そうだ、コノンさんが帰ってきたらユイロー採りのついでにつきあってもらおう。家族の家の話をするのにもちようどいいだろう。

食事を終わると今日は疲れただろうから、ゆっくり休むといいと言われ早めに寝室に入らせてもらうことになった。寝床に横になると、今日一日の出来事が走馬灯のように頭の中をぐるぐると回った。わからないことが増えただけのようで、前に進んだのか、進んでないのかさえよくわからない一日だった。身体の疲れだけが今日の出来事を忘れさせてくれなさそうだ。

ナーシュさんの漉いた紙の透かしがノート氏の書いた紙と同じかどうかを急に確認したくなって、持ってきているノートで写しでないものがあつたはずだと思い明かりにかざしながら探した。みつけたノートにあつた透かしは間違いなく同じものだった。できるならハロウさんに見てもらいたいところだけれど、石窟から持ち出すのはむずかしいだろう。それにしても数百年前の紙と数年前に漉いた紙が同じものであるというのは不思議な気分になる。書かれているインクまで同じなら違うのは何だろう。流れた時間ということだろうか。オールドリアヌに来てからというもの時間が流れたという感覚がどんどんなくなっている。書いた人が違うだけで、違う人が同じ何かについて書いているとしたら、いよいよ何が違うのかがわからなくなってくる。時間の後先さえあるのかどうか怪しいと思えてくる。ほんとうに謎の答えを知っているのはノート氏なのかナーシュさんなのか、どれともジノ婆さんなのか.....。

うつらうつらしながら考えているうちに、閉じたまぶたの裏にミドリ鮫が現れた。ついて来い
というように、頭の奥のほうに向かって泳いでいく。ミドリ鮫はどこで待っているというのだ
ろう。

第32話 洪水の周期

翌日はホーラーにお礼を持って行くことにした。お祖父さんお手製の村でも人気のドットトラウトの燻製だ。ウォーターランドへ帰るときの土産として用意してくれていたものだったが、事情を話すと快く了解してくれた。ホーラーの心を開くことは、村にとっても悪いことではないはずだ。お祖母さんは暖かいお茶を入れたからと持たせてくれた。筒状のヤカンのような携帯容器でお茶を油で温める仕組みになっているものだった。めずらしい水筒を肩にかけると子供の遠足のような浮かれた気分になっている自分がわかった。

公書館への道のりはすでに勝手知ったる庭のようなもので、たくさんの未知の本に出会えると思うと足取りも軽くなる。雪解けあとの木々のきらめきも新たな始まりを祝ってくれているように感じられた。

公書館に近づくと、門前に大きなホーラーが仁王立ちになっているのがわかった。初めての人が見れば威嚇されているとしか思えないだろうけれど、本人にはまったくそういう自覚はない。ナーシュさんもいい門番をみつけたものだとあらためて思う。

開口一番、「これ、お祖父さんからの土産です」と切り出して、用意した燻製を手渡した。

「うまそうだ」

お礼もなにもないが、それがホーラーならではの感謝の言葉だというのはわかる。朴訥な人柄に徐々に親しみを感じるようになってきていた。ホーラーとロウルさんと3人で旅にでも出られたら、なかなか楽しいものになるかもしれない。ナーシュさんもそういう親しみと信頼を感じたに違いない。自分探しの旅の仲間がまた一人増えたようでうれしかった。いざという時に頼りになるホーラーの姿を勝手に想像してほくそ笑んでしてしまった。

いっしょに入らないのかと聞くと、外で待つという答えが返ってきた。日差しは温かいものの寒空なので中で待つことをすすめたけれど、変な人間も来るので外で見張るのだと言う。それが前回の自分たちへの対応だったと思うとなんだか心苦しい気分になる。それでも、あのときのナミナさんを思い出すと笑いがこみ上げてしまう。ホーラーは何がおかしいのかと言わんばかりの顔で睨んでいるけど、それが怒りではないことはもう十分に理解できる。彼の使命感の邪魔をするのはいただけないと思い、ここは一人で入らせてもらうことにした。

公書館の中に入ると、いつも時間を超えた神聖な場所に足を踏み入れた感じを覚える。音も匂いも空気も外と隔絶された世界に神経が研ぎ澄まされる不思議な感覚だ。オールドリアヌの数百年、いや数千年の歴史が封じ込められていると思うと身震いするような感動を覚える。本から呼びかけられているようにも感じるけれど、それがどの本から発せられているのかはわからない。この蔵書をお祖母さんに見せてあげられたらどれほど喜んでくれるだろう。持たせてくれた、まだ暖かい水筒を手を包みながら必ずいつかナーシュさんを探し出し、村人に公書館を公開することを心に誓った。

昨日の続きでしばらく分類の確認をしていくうちに気になる本も目にとまりはじめた。とは言うもののあまりに年代が古すぎて、何を書いてあるかわからないものが多い。それではホーラー

の門番とさほど変わらないのではないかとちょっと情けない気分になってくる。それでも諦めずに順に見ているうちに辞書があることもわかり、時間さえかければ徐々に本が心を開いてくれそうな期待も感じられた。きっとナーシュさんもこの辞書をめぐりながら多くの月日をかけて読みすすめたに違いないのだ。そうは言ってもみんなを待たせている身としては悠長なことも言っていられないので、まずは辞書を使わないでもよさそうな年代の浅いものから手に取ってみることにした。

最初に昨日も気になっていた、オールドリアヌの治水に関係した本を開いた。そこには地下水脈の図とともに灌漑技術の遍歴や運河の延伸記録など、水の都と呼ばれた時代からの歴史が詳細に書かれていた。ノート氏が暮らしていたころは水上貿易や遠洋での漁が盛んだったということも再確認することになった。一方では増水による水難事故や干ばつによる飢饉などもあり、その都度甚大な被害が発生したようだ。水の都でも干ばつが起きてきたことには驚かされた。そこから、今の村のおだやかさが常態ではないことが読み取れた。水の恩恵を十分に受けているように見えるこの村も、必ずしもいいことばかりではないことがわかる。近くに洪水だけについて書かれた本があったので開いてみると、最初に洪水の年表があることに気づいた。洪水が年表になるというのはどういうことだろう。どうやら鉄壁の要塞は自滅と裏腹の賭けだったようだ。生きるか死ぬかの自然との攻防が洪水の記述から読んで取れた。その被害の大きさから見ても、この村の水量は想像をはるかにしのぐもので、それが山域から流れ込んでくるのではなく、ノイヤール湖の湧水だというのだからその水量たるやただ事ではない。まるで村の下に水のマグマが横たわっているかのようなイメージが頭に浮かんだ。一度洪水が起きると村は壊滅することを免れない。それでも生き残る人はいる。たとえそれが少数であっても村の選んだ生き残り術ということなのだろう。ジノ婆さんは何度の洪水を乗り越えてきたのかと思うと、今すぐにでもそのときの話を知りたい衝動にかられた。最後のページまで目を通して洪水の起こった年が一覧になっているのに気づいた。よく見るとその周期はほぼ100年ごとになっている。次の100年後はいつになるか計算してみて驚いた。周期通りならここ数年のうちに大洪水が起きることになるのだ。もしそうなれば、この美しい村は水没し、そこからまた新たな歴史がスタートする。その時もジノ婆さんは生き残れるのか、公書館は大丈夫か、いやそれより自分の命はどうなっているのだろうか。ナーシュさんを動かした答えのひとつがここにあったということは想像に難くない。何をすべきかわからなければリアヌシティに頼れと言われていたような気がした。自然の刻む制限時間が想像以上に近づいていることに気づくと何をすべきかもわからないままにさらに焦りが募る。

急いで地形に関する本を探した。どうも運河の間の土地は浮島のようになっているようだ。地下の水系というよりも巨大な湖に浮く島のような土地で、ノイヤール湖が独立しているのではなく、運河や水路を含めたすべてが湖の全体のように見えなくもない。ノイヤール湖はその一部が地表に現れていると考え、土地がまったく違ったものに見えてくる。もともと島状だったのか、湧水が吹き出し島のようになってしまったのかはわからない。地下の巨大な水のかたまりの中にミドリ鮫が潜む様子が頭に浮かんだ。その水溜りは海につながっているようにも海そのものにも見えてくる。ミドリ鮫が何かの警鐘をしているのではと思い、関連の本を探したけれど、ここでもミドリ鮫の関連書を見つけることはできなかった。ミドリ鮫漁の記録を見たというノート氏の記述とは裏腹に、ミドリ鮫は村から消し去られたように身を隠している。彼らは大洪水の日が来るのを待っているのだろうか。

動植物史の本からドットトラウトの生体やユイローの植生などについての本もみつけることができた。いずれもこの地特有のもので、他の土地で見られることのない固有種だと書かれている。それでも、産卵の回遊や覚醒作用についての詳細は得られなかった。料理や活用法の中で、ユ

イローを使った温浴が書かれていて驚いた。自分の楽しみ方が数百年前からの伝統と同じだったということだ。そして、ここではその実であるユロミは香辛料として紹介されている。香辛料としての歴史のあったユロミは今の食卓からは消えている。食も嗜好や効能にあわせて変わっていくのが歴史だろう。もしかすると覚醒作用の弊害があったのかもしれないと思いコピのことが少し心配になった。早くコピに会いに戻らないと。

帰り際に、ホーラーに握手を求めお礼をいうと、ぎこちなく顔をゆがめた。はじめてホーラーの私情を受け取った気がする。苦虫を潰したような表情が不器用なホーラーらしい。

このまま公書館通いを続けたい気持ちもあるものの、ホーラーやロウルさんとの交流ができたことで少し肩の荷を下ろせたような気もしている。あと一度だけでもジノ婆さんあって歴史のことを聞ければ、一度ここでスレイトンケープに戻りいろいろな相談をしたいとも思う。ほんの数日の予定が思わぬ長期にわたっていることもそろそろ考えなければいけない。

第33話 共生

「オルターさん、コノンが戻ってきてるよ」

玄関先で掃除をしていたお祖母さんに声をかけられた。予定通りユイローを採りに戻ってきたのだろう。いっしょに行く約束していると言うと、明日行くようだと教えてくれた。

家の中に入ってみてもコノンさんの姿はなかった。家族の家での一件でかなり疲れているのではないかと心配だったけれど、部屋で休んでいるのだろうと思い声はかけないことにした。家族の家では気の休まる時間などないから、ここに帰った時にしっかり疲れを取ったほうがいい。こちらはコノンさんがいない間に勝手な話をするわけにもいかないのだから、部屋から出てくるまでの間に気になっている洪水の話についてお祖父さんに聞いてみることにした。

「あまりいい話ではないですが、昔起きたという洪水のことをおちょっと聞きしたいのですが」

お祖父さんは目を落とし手先をじっと見たままで、何も聞こえてないように押し黙っている。家の中の静けさがお互いの気持ちを丸裸にしているようで辛い。やはり触れたくない記憶だったのだろう。

「オルターさん、洪水の話は公書館で見たのか」顔をあげたお祖父さんは心を決めたような表情でこちらを見た。

それを見ていたお祖母さんが、隠したって仕方ないじゃないかという、お祖父さんは隠しているわけじゃないだとすぐに言い返した。ちょっと雲息が怪しくなってきた。

「あのう、話したくないようであれば……忘れてもらっていいので」

「オルターさん、洪水は何度かあったんだよ。私らが生まれてからもね。この人はね、洪水の話は好きじゃないから」

「好きとか、嫌いじゃなくて、そんな話をしたって仕方ないってことを言ってるだけだ」

「まあ、兄弟も親もみんないなくなってしまうとさみしいもんだけどね」

「この村には墓もない。水の中で永遠に生きると考えられているから寂しいとかいうようなことじゃないぞ」

お祖父さんの言葉から人はどこかで生き続けていると言われてるように感じられる。本当にそう思っているのかどうかは別として、村にお墓がないというのは事実だった。そういう風習なのかどうかはわからないけど、その代わりになっているのが六角錐のように思えなくもない。生前墓ということなのだろうか。

「だいたい、魚や水鳥にとっては洪水なんか知ったことじゃないってことだ。人間だけが特別扱いなわけじゃないだろ。この地に住まわせてもらってるだけだしな。生かされていると思えば、それだけの話だ」

「でも、家ごとに舟もありますし……」とあまりに身も蓋もない話になってしまいそうなので助け舟を出してみた。

「オルターさん、舟で逃げた人もいたけど、結局どうなったんだか、帰ってこなかったさ。でもね、残った私らのほうが長生きになって今でも元気なんだからおかしなもんだね」

「洪水の代償が長寿だったということですか」

「そうじゃなくて、ノイヤール湖のあるがままに生かされている結果が、たまたま長寿ということになっているということだな。とは言っても、洪水を乗り切れればの話だから、生かされない場合も受け入れるということだがな」

「魚も鳥も人も同じという理解でいいですか」

「そういうことだ。この村では動物も草木も補い合う関係にあるし、それぞれの役割を持って生きていると考えられているから、洪水も大雪も嵐もすべてそのまま受け入れる。人間も自然の摂理に従うだけのことだ」

「もし、また洪水があるとしてもですか」思わず追い打ちをかけるような質問をしてしまった。

「もちろん。ノイヤールとともにだな」

二人の話を聞いているうちにリアヌシティのことを思い出していた。もしかすると人間は神になろうとしているのだろうか。この世界の物語を書く神になろうとしている。なるようにしかならないと考えるオールドリアヌと、あるべきようになろうとするリアヌシティ。リアヌシティが長寿という話は聞いたことがない。とはいえ、ほんとうに長寿が幸せと言えるのかとも思う。オールドリアヌにしても長寿を目指したわけでもないから。どちらがほんとうに幸せなのかはむずかしい。現にコノンさんはそのいずれでもない。

「でも、洪水は村を流してしまうかもしれないですよ」

「この家もな」

お祖父さんは達観しているかのように言った。お祖母さんの方を見ると、めずらしく大きく頷いて賛同しているように見えた。

「オルターさん、こればかりは心配しても誰にもわからないことだからね。それより今日もご飯は美味しいし、コノンもいるし、何もわるいことはないさね」

「ドームに閉じ込められと生かされるのを好きな輩もいるようだが、わしらには理解できないし、魚や鳥たちはどう思っているんだかな」

リアヌシティと同じように見える草木も内心はどう思っているのかはわからない。都合の悪いものや調和に適さないものは排除されている可能性も否定できない。おそらく蚊のようなものはいないだろうし、猛獣もないはずだ。人にとって害になるものはいないということだ。洪水は起きないはずだし、だからこそ街は中空にあり天気は完全にコントロールされているのだ。

この日コノンさんは部屋から出てくることはなかった。身体が疲れているのか、心が疲れているのか。いずれであっても、ここでゆっくり休んで元気を取り戻して欲しいと願う。お祖母さんたちも考えは同じようで、夕食の用意も残されたまま、翌朝までテーブルの上に置かれたままになった。

第34話 二人だけの話

翌日も天気恵まれ、絶好のユイロー日和になった。コノンさんはいつもと同じように朝から元気そうに見えて安心した。お祖母さんの家事の手伝いをしながら、ユイロー採りの準備をしている。それを見ていると、オールドリアヌとリアヌシティの二重生活は大変ではないかと思わずにはいられない。ただ、彼女にとっては子供たちもお祖父さん、お祖母さんもかけがえのないものであるのはよくわかる。どちらかだけにするというのは考えられないだろう。

昨日と同じように、水筒にお茶を入れてもらい、ジノ婆さんへも差し入れを持って行くことになった。やはりみんな気にかかっているのだろう。いつもなら舟で行くところだけど、まだ氷の残るところもあるので、歩いて行くことになった。小型の荷車をコノンさんと交代で引きながらユイロー畑を目指すことにした。

道すがら二人だけで話す時間がたっぷりあった。周りに気を使わないで話せる貴重な時だ。これも雪のおかげと考えることにした。

「オルターさんはいつまで村にいるご予定ですか」

「もうそろそろ帰らないといけないのですが、知りたいことが多くて」

「公書館で何かわかったことはありましたか」

コノンさんもノートのことについては気になっているのだろう。興味深そうに聞いてくる。そんな話で気分転換になるのであれば、お安い御用だ。ホーラーと友達になれそうだとすると、自分のことのように喜んでくれた。洪水の話については、お祖父さんと同じで既知のことだったようだ。村人なら口にはしないでも誰でも知っていることなのだろう。

いろいろ聞くつもりでいたのが、気が付くと聞かれる側になったまま話が続いていた。コノンさんがあえてそうしているのではないかと思うほどに質問は尽きなかった。しばらくは村での体験を報告しながら、こちらが話すタイミングを待った。

「そういえば、コノンさんはウォーターランドでスロウさんに会いましたか」

「知らない方だと思います」

ロウルさんについても知っているけどあまり面識はないとのことだった。そうになると、そっくりな二人を知る人間は自分だけということになる。スロウさん本人が来るのを待つしかない。

ただ、スロウさんがメインランドに向かったのは意識世界での話だったようにも思うので、実際はウォーターランドを出ていないのかもしれない。記憶が曖昧に薄れていく。

ここでも湖底の石窟のことを話すのはやめにした。もう少しいろいろなことがわかってからのほうがいだろう。それはスロウさんへの礼儀でもある。

「ウサギを島へ連れて行くのが楽しみです」

この話題ならなんでも気兼ねなくなんでも話せるだろう。

「早く、行きたいです。子供たちもきっと喜ぶと思います」

ウサギだけの話とか思っていたけれど、コノンさんの中では子供たちも含めての話だったことに驚いた。もしかすると、家族の家をウォーターランドに作ろうとしているのだろうか。子供たちをリアヌシティから救い出そうと考えているのかもしれない。洪水の起こるオールドリアヌでも、感情の交流のないリアヌシティでもない新天地、ウォーターランドをそういう風に見ているとしてもおかしくはない。

「話せなければいいですけど、コノンさんはボルトンとの関係を教えてもらうことはできます」

「家族の家の主催者なので、関係というより支援者ということになります」

「もしかして、あのヨシュアさんもボルトンの人なのですか」

コノンさんは不思議そうな顔をしながら小さく頷いた。家族の家で何か気になることがありましたかと聞かれたけれど、具体的に話せることがあるわけではなかった。ただ、薄々感じてはいたけれど、家族の家もリアヌシティのコントロールの元にあるということにちょっとショックを受けた。原因を作ったところからの支援で本当の意味の救済になるのか気になる。悪くすると問題隠しにならないだろうか。ボルトンのもとでコノンさんの思いはどこまで伝わるのだろうか。子供たちはほんとうに救われるのだろうか。コノンさんの純真さはどこまで疑いを持たない。

「深入りして申し訳ないですが、ご両親はリアヌシティに？」

コノンさんはためらいもなく、あの子たちと同じですと答えた。一瞬何を言っているのかわからなかった。

「私たちはライブラインに入れたいんです。適性がないらしくて」

「感情の交流ができないということですか」

「詳しいことはわかりませんが、リアヌシティのライブラインに入れないと、家族との関係も消えてしまうらしいです」

そんな馬鹿な話があるかと耳を疑った。はじき出された子供たちが家族の家で昔ながらの交流をしているというのはどういうことなのだろう。家族の家という名前が皮肉としか思えない。

「それでウォーターランドに子供たちと行こうと？」

「そうですね。それはボルトンも賛同してくれています」

コノンさんの口からボルトンという言葉は初めて聞いた気がする。サーカス小屋でボルトンと話している記憶が蘇ってきた。見えなかった話が一本の線につながっていくのを感じた。ネイコノミーとボルトン、水の革命、クラウドタワー、家族の家、ウォーターランドの水、ばらばらだったピースがひとつの絵になろうとしている。リアヌシティの完成に向けたロードマップに合わせすべてが進んでいるのだ。クラウドタワーの中核の計画通りに。

「彼らはどうしてタワーに登るのでしょうか」

コノンさんがいつになく元気そうなのをいいことに、避けていた質問を大人げもなく口にしてしまった。

「私にもわかりませんが、オルターさんが、オールドリアヌに来られ、私がウォーターランドに行くのと同じなのではと」

コノンさんは、家族の家に足りないものがあるということを言っているのだろうか。ただ、それがコノンさんの言葉でなく、ヨシユアさんの言葉のようにも聞こえた。コノンさんの心中を察するのは簡単なことではないかもしれない。

「ノート之谜が解けるといいですね」と話を戻された。

コノンさんの気遣いを感じたが、リアヌシティを知れば知るほど、その答えを知らない方が良かったということになる不安が過ぎる。ノート氏の向かった先と自分の過去が悪い方につながらないことだけを祈る気持ちになる。雪解けでぬかるみ、固まった道は荷車の車輪を滑らせ思うように進ませてくれない。自分の辿る道ははたして希望の道になるのだろうか。

湖畔の道を歩くうちに、二人の考えは、先にジノ婆さんを訪ねることで一致した。まずは元気な顔を見ないと落ち着いてユイロー採りもできない。

第35話 昏睡

小屋は雪に閉ざされていた。雪かきをした気配もない。中に人がいるとは思えない佇まいに以前来たとき以上の驚きを感じた。さすがにこれではあの歌うように揺れていた草花も枯れてしまったかもしれない。

コノンさんが中に入ると言ったかと思うと、一刻を争うような勢いで雪を書き出しはじめた。すぐに手伝ってドアをこじ開けた。この雪で閉じ込められたとしか思えなかった。小屋の中に入ると、ジノ祖母さんは寝床で横になってまったく動きそうな気配がない。雪かきに来なかったことを後悔した。だれかが来ているというのは誰も来ないということではなかったかと今更思ってみてもすべては遅すぎた。

コノンさんがお祖母さんの顔に耳を近づけて呼吸を確認している。青白い顔からは息の音は聞こえない。コノンさんの気丈さをこういうときに感じる。こちらが慌てているのに落ち着き払って対処しているのだから大したものだ。しばらくすると腕を取って脈をみはじめた。すべてを知っている村一番の長寿の人を失うことになれば、先行きにも暗雲がたちこめるのは間違いない。

そんなことより、まず目の前に起こっていることへの対処をどうするのが気になりはじめた。急いで医者を呼んでくる必要があるかもしれない。その前に暖房を入れるべきか。そのとき、コノンさんがこちらを向いて微笑んだ。

「ジノ祖母さんはよく寝る人だからだいじょうぶです」

寝ているという言葉に耳を疑った。死んだように寝ているというのか。この寒さで寝ていられるというのはとても尋常ではない。

「え、冬眠をしているということ？」

この場合、冬眠という言葉が合うとは思えなかったが、どう見ても冬眠にしか見えないのだから仕方がない。

「うさぎもここでは冬眠します」

うさぎと同じというコノンさんの言葉に耳を疑った。

「でも、人間が冬眠するのでしょうか」

「ジノ婆は普通の人ではないですから。そうじゃないと何百年も生きられないかもしれません」

そんな話に納得できるわけではないと思いながらも、そうやって生きてきたのだと言われると信じないわけにはいかなかった。答えは目覚めたときにわかるということか。

「じゃあ、起こさない方がよいですか？」

「とりあえず、ユイローを集めてからもう一度来てみましょうか」

納得できない話だったけれど、ジノ婆さんと長い付き合いのコノンさんの意見にしたがって、ユイロー集めを先にすることにした。何も知らない自分が口を出すことはよくない結果をもたらすかも知れない。後ろ髪を引かれる思いをなんとか押さえて小屋を後にした。途中、六角錐を見に行くと、トラピさんとナミナさんのものがあるのがわかった。それはひとつの六角錐に二人の名前が刻まれていた。二人はこの地を終の棲家にしたようだ。あの二人が新しくオールドリアヌの住人になるということは、とても心強いものの、ウォーターランドからすると寂しいこととも言えなくもない。それでも、二人の幸せそうな姿はこの村にぴったりだし、それこそ村の未来として大いに歓迎されることだろうと思うとうれしさがこみ上げてきた。ほんとうによかった。スロウさんではなく、ロウルさんとの関係が強くなることもあわせて、自分自身も少しずつオールドリアヌに吸い寄せられていく気がしないでもない。

そこまで考えたときに、洪水の話思い出してしまった。あの二人は洪水のことを知っているのだろうか。ナーシュさんが本当に約束を守るというなら、リアヌシティとの約束をしたときに洪水を回避することまで考えているのかもしれないと勝手な期待をしてしまった。

ユイローはこんな寒い季節でも枯れることもなく青々と茂っていた。寒暖のどちらにでも対応できる植物というのもめずらしい。ウサギたちも餌の心配をしなくてすむというものだ。コノンさんと手分けして刈り取りはじめた。こういう作業をするとユイロー湯のことを思い出してしまう。こんな季節であれば身体も温まるし、最高の時間が過ごせるのにとすると残念で仕方がない。

草の間でこそこそという音がすると思ったらウサギが隠れていた。コノンさんのほうを見ると気がついていてようで、指を口にあて静かにというしぐさをしていた。息をこらして様子を見てみると、ぴよんぴよんと跳ねて離れていくのがわかった。二人でそっとその後を追うと、消えたあたりにウサギの穴があった。なんとも言えずむき出しで無防備に見えて思わず笑ってしまった。彼らもこの土地の仲間なのだと思うと愛おしく思えた。いつまでもこの自然が守られる方法はないものなのだろうか。

「コノンさんは、この子たちを救うためにリアヌシティに連れて行ったのですか？」

「いえ、あれは子供たちのためです。ウサギたちには申し訳ないと思っています」

「それでみんなウォーターランドへということですか」

「そうですね。そうすればみんな幸せになれるので」

コノンさんの考えていることがわかった。彼女は自然豊かで洪水のないところを望んでいるのだろう。そうすればみんな幸せに暮らせる。その気持ちはわからなくない。ただ、そこにボルトンが絡んでいるから話が面倒なことになっているだけなのだ。それにしてもこの話の根っこに何があってこんな複雑なことになっているのか、考えれば考えるほどにわからなくなってくる。

「オルターさん、もうこれぐらいで大丈夫です。ありがとうございました」

ユイロー集めをいつもはコノンさん一人でやっていると思うと、ほんとうに彼女の努力には頭が下がる。ホーラーにでも手伝ってもらえないものかと思ってしまう。あれでは力の持ち腐れというものではないか。

ユイローの葉は刈り取りなので、ユイローの実を見ることはなかった。それでも気になって掘り起こしてみると根の周りにたっぷりとユロミが生っているのがわかった。なにかの役に役に立つかもしれないと思い、掴み取るようにしてポケットに入れた。このユロミでナーシュさんが何かのきっかけをつかんだのかもしれないのだ。コピの好きなユロミが何かを教えてくれるかもしれない。

第36話 夢想

小屋に戻ると、ジノ婆さんは出る前と同じようにこんこんと眠ったままだった。ジノ婆さんは冬眠すると言われても、はいはいと信じられるような話ではない。それがコノンさんの言葉であったとしてもだ。目の前で寝たきりのジノ婆さんを見ると心配な気持ちはさらに増すことになった。

「コノンさん、だいじょうぶなのですか？」

コノンさんはジノ婆さんに目を向けたまま小さくうなづいた。これまでと同じように目覚めの時を待っているのか。

「熱もないですし」

人は死ぬときには熱を出さないのではないかとも思うけれど、この場合は熱のないのがほんとうに良いことなのだろうか。いざという時、この村には医者はいるのかも心配になってくる。いないのは健康で長寿である証だなど言ってもらえない。

「ジノ婆さんは、いつまで眠ているのでしょうか？」

「1日のときもあれば、一週間のことも」

そうか、冬眠と言っても数ヶ月も寝るわけではないのだ、冬眠自体が自分の勝手な思い込みだとわかって少し気が楽になった。人は7時間しか寝られないというのも決めつけかもしれないし、ひどく疲れると24時間ぐらいなら寝てしまうこともある。ジノ婆さんがよく寝るのは特殊な代謝のせいで、そのおかげで寿命が伸びているとしたらわからない話でもない。余分なエネルギーを使わなければ、通常の数倍も寿命が延びるということだ。考えてみるとコノンさんのお祖父さんやお祖母さんも時間さえあれば寝ている。寿命を細く長くすることは村の生き方そのものかもしれない。余分な力を使わず、ゆったりした時間にあわせれば、身体に余計な負担もかからず、消耗を最小限にできるのだろう。

閉じられた小さな小屋の中でそんなことをつらつら考えていると、それまでまったく動かなかったジノ婆さんが不意に寝返りを打った。

「ううう、どこに……いる……の、か」

「どこにいるのかと言いましたよ、ジノ婆さん」コノンさんの顔を伺った。

「いつもなんです」

ただ、何を探しているかはわからない。誰を待っているのかもわからないと。

「ジノ婆さんが帰りを待っているという人でしょうか」

「私はそう思うのですけど……」

旧宅に置かれていた花を思い出した。ジノ婆さんは村を出て生き別れになったままの誰かをずっと待っているのだろう。きっとそれは冬眠の間も忘れることができないほどに大切な記憶なのだ。

「オルターさんは意識のなかったときはどうでした？」

一瞬なんのことを言われているのかわからなかった。

「あの時も数日間お目覚めにならなかったですよ」

そうか、この状態は自分が湖畔で意識を失ったときと同じということを言っているのだ。コノンさんに言われてはじめて、ジノ婆さんも意識世界に行っているのかもしれないと疑い始めた。もしかすると、向こうの世界にいる誰かを探しているのだろうか。それがノート氏だとしたら、いやナーシュさんかもしれない。それとも若い時に生き別れた人だろうか。

「あの、私もあの時何かうわ言を言っていましたか」

コノンさんは微笑みながら何も聞いてないと言った。

意識世界は夢の世界と何が違うのだろうか。ジノ婆さんが夢占いでお告げと伝える巫女だとしたら、寝るのが商売ということだ。夢を見るように意識世界を行き来する術を知っているのだろうか。いずれにしても、ジノ婆さんが起きないことにはすべては推測の話だし、無事に起きてはじめて、何日も寝る話の信ぴょう性を得られるというものだ。

しばらくジノ婆さんの様子を見守っていたが、うわ言のあとはまた死んだように身じろぎもせず、眠りの淵に沈み込んで行った。

「コノンさんも、長く寝たことはありますか」

「昨日は久しぶりに」

それは、そうだ。家族の家の手伝いを考えればゆっくり寝てなどいられないのはわかりきったことだった。疲れて寝ていれば夢を見ることもないだろう。

「想像することはあります」

「寝ていることをですか」

「あ、そうではなく、起きている時に夢をみるというか。子供たちとどこか幸せな土地へ移り住むような」

コノンさんが言っているのは、寝ているときの夢ではなく、目覚めている時に夢をいろいろ考えるという話だった。寝ているときの夢と起きているときの夢がつかず離れず形になっていくようななんとも言えない気分になった。ジノ婆さんの見た夢は明日起こることを予見することになるのだろうか。

第37話 二匹の猫

ジノ婆さんの様態を見ながら1、2時間が過ぎただろうか。

「コノンか？」

ジノ婆さんは何事もなかったように静かに目覚めた。

「雪たいへんだったね。寒くなかった？」コノンさんが聞いた。

「ふほほ、なんのことはない。これもノイヤールの思し召しだ」

こちらの心配を知る由もなく、まるで課されたものか、天の恵みでもあるかのような口ぶりだ。過去の洪水を経験してきた身からすれば恐るに足らずというところなのだろうか。コノンさんの言うとおりの心配は取り越し苦労だったようだ。

コノンさんがいるとジノ婆さんが饒舌なのになんと驚いた。知らない人間が来た時と大違いだ。

「うぬは？」

ベッドから身体を起こしながら、不吉なものを避けるような目で見られた。前回来たことを覚えていないのか、話をしてないのであらためて確認されているのかはわからない。

「オルターと申します。今日は、コノンさんとユイローを……」

「ユイロー……か」

そう言うと、事情がわかったとでもいうように首を左右に振りながら頭を下げた。寝覚めた直後でまだ意識が不安定なのかもしれない。それでも、コノンさんのおかげで警戒心が少しずつ解かれていくのがわかる。

お茶を入れると言いながらコノンさんが立ち上がった。そちらに目を向けると窓の外にノイヤール湖の水面のきらめきが見えた。まだ、氷の張っているところも多いだろうけど、あの下にドットトラウトが息を潜めているかと思うとどうにも気持ちが落ち着かなくなる。意識を失いそうな予兆を感じるわけではないけれど、ジノ婆さんの目覚めを見たことで、その入口が大きく口を開けているように思えなくもない。

そんなことをつらつら考えていると唐突に「なにも、心配はない」と独り言のようにジノ婆さんが言った。雪のことを言っているようにも、意識世界へ落ち込む恐れのことを言っているようにも聞こえた。表情を読まれたのだろうかとも思ったけれど、すぐに目が不自由なことを思い出した。

ジノ婆さんはベッドから起き上がると、手探りで椅子を探しゆっくりと腰掛けた。

「どこからか」

多少なりともこちらを気にしてくれているようだ。悪いことではない。

「ウォーターランドという南の島から来ました。灯台がある小さな島です。うたた寝のできる本屋をやっています」

ジノ婆さんは天を仰ぎ、しばらく考え事をするように押し黙ってしまった。なにか気に障ることも言ったのではないかと、自分の言ったことを反芻してみたが、嫌な気分になるようなことは言っていない。気持ちを落ちつかせて次の言葉を待ったが、二人向かい合って座っているうちに間が持たなくなってしまう。場つなぎと思い横にいた猫の話をしてみた。

「猫がいるんですね」

「気まぐれな居候よ」ジノ婆さんが足元にいた猫を撫でながら言った。

気まぐれ.....猫はいつでもそうだ。ジノ婆さんにも飼っているという意識はなさそうだ。勝手に居着いただけなのだろう。それにしても見れば見るほどにインクと瓜二つだ。名前を聞いてみたけれどないという。猫のほうはそれを知ってか知らずか、飼い主でもないジノ婆さんに身体を押し付けている。もしやと思いインクと呼んでみると、ゆっくりと歩み寄って来た。近くまで来たところでぐるりと背を向けて座った。その瞬間ウォーターランドの灯台に戻ったような錯覚にとらわれた。ウォーターランドとオールドリアヌは遠い、そのふたつの点を結ぶように同じ色の猫が居ついている。青い色の艶っぽくなめらかな毛並みだけが真実を物語っているかのように目を捕らえて離さない。

それを見ていたコノンさんが、オルターさんはともだちみたいですねと言った。インクであれば、間違いなく友達なのだけれど、この離れた土地にいる猫なのだからそうとも言えない。

ジノ婆さんは無表情のまま、猫のほうを見ている。ジノ婆さんにつかず離れず寄り添い生活す

る猫は妙に存在感を感じさせるけれど、それを感じているのは自分だけなのだろうか。

「ふほほほ、近いな」

ジノ婆さんが猫に話しかけるかのように言った。あえて聞き手に判断をまかせるような言い回しをしているのか、何かの確信をもって言っているのか判然としない。洪水が近いと言っているのだろうか、あるいは意識世界が近いと言っているのか。それとも単に猫との距離か。それを質問しようとしても、心を見透かされているような気がして言葉が出てこない。近いという言葉が時間と距離の両方を言い表しているのだとしたら、時空を超えているなにかともとれる。いや、たぶんジノ婆さんはそのことを言っているに違いない。きっと、それをわかるかどうかを試されているのだ。気がつくまでジノ婆さんの世界に取り込まれているような気がしてきた。これが村を守ってきたジノ婆さんの力ということか。

ジノ婆さんに心を読まれているような感覚を感じているうちに、リアヌシティのライブラインもこういうコミュニケーションになっているのかもしれないと思いだした。しゃべらずともわかり、感情さえもコントロールされる世界はあるのかもしれない。

ジノ婆さんの膝の上ではインクに似た猫が喉を鳴らしている。二匹の青い猫は遠くて近い一匹の猫ではないかと考えると、背筋を冷たいものが走るのを感じた。インクは赤い灯台にもいたはずだ。世界が二重、三重に重なって見え始めた。

第38話 水の声

コノンさんが淹れたてのお茶を進めてくれた。ジノ婆さんの話しに気を取られて寒さすら忘れていた。おいしいですねという、カルミーナティだと教えてくれた。このお茶を飲むときはいつもノートのことを思い出す。あのノートが何を教えてくれようとしたのか未だにはっきりしない。それでも、何か少しずつではあるけど解きほぐされていくのは感じられる。はたしてジノ婆さんはその答えを持っているのだろうか。鍵を握っているのはナーシュさんではないのだろうか。ゆるりと動く時間を追ったノートさんはいったい何を見たのだろうか。モザイクのように散り散りになった世界の記憶が一枚の絵になるときは来るのだろうか。

コノンさんも戻り、お茶の飲んで落ち着いたところで、洪水の話を持ち出してみた。

「洪水はまた来ますか？」

ジノ婆さんは答える気がないように見えた。

「聞こえないか」

そう言うと、耳を澄ませるような仕草をした。こちらにもそれを促した。

「水の声が聞こえただろう」

ジノ婆さんの表情がにやりと緩んだように見えたが、こちらにはなにも聞こえない。聞こえるのは湖畔に寄せる水音ぐらいだ。それを水の声と言っているのであれば、だれもが耳にしている水音と変わらない。

「ジノ婆には聞こえるらしいです」とコノンさんが言った。

「地の底の水が、呻き、ドットのざわめきを受け止めておるだろう」

ドットという言葉に驚いた。コピに以前どこから来たのか聞いたときにドットがいる場所と言ったはずだ。これは偶然の一致だろうか。

「ドットというのは？」

「ノイヤールに自分で感じるものじゃ」

そういうと目を閉じて、また静寂が訪れた。瞑想をしているような静かな時間が過ぎていく。心を湖に集中すると水の声が聞こえるのだろうか。その先にあるドットというのは水の神のようなものを言っているのかもしれない。自分の知らない世界が開けていくような気がした。そのとき、ポケットの中にユロミが入っているのを思い出した。指先でいくつかのユロミを潰すとユイローの香りが微かに漂った。しばらくすると、意識の中にドットトラウトの群れが押し寄せてくるのを感じた。もしここで意識世界に行ってしまったとしても、目の前にはジノ婆さんがいる。そう思うとなぜかしら不安な気持ちは払拭される。必ず戻ってこられるはずだ。自分の意思で意識世界に行くことができるのだろうか。すべての条件は整っているように思う。

閉じたまぶたを通してノイヤール湖が輝きを増してきているのがわかる、それに合わせるように座っているはずの椅子の感触がなくなっていく。すべての音が意識世界に吸い取られていくようだ。輝きが立ち上がり天を目指し始めているのがわかる。目を開こうとしても力が抜けてしまって思うようにならない。前に座っているのがジノ婆さんかどうかもわからなくなってきた。その身体が陽炎のように揺れている。顔が笑っているように見える。ジノ婆さんからはどう見えているのだろう。コノンさんの気配はすでに消えてしまった。時間が徐々にスピードを落とし始めた。水音の繰り返しが緩慢になっていく。しばらくするとどこからか漆黒の闇が迫ってきているのがわかった。その先にはミドリ鮫が待っているはずだ。

「会いたいか……ぶくぶく……そこに……」

闇の中からまたあの声が聞こえた。間違いなく意識世界に入ろうとしている。それも自分の意思でだ。ノイヤール湖、ユロミ、それと……ドットトラウト……。もしかすると、そこがフオントリアではないのかと思った瞬間に、六角錐が弾け飛び、無数のミドリ鮫がその隙間を縫うように乱舞するのが見えた。自分の六角錐はまだない。それでも現実世界に戻ってきている。オルターではない自分がつくった六角錐があるはず。私は誰なのだろうか。

第39話 時間の重さ

散りばめられた六角錐が浮遊する境界域を潜り抜け、ミドリ鮫が先を争うように泳ぎ去ってしまうと闇に閉ざされた世界が徐々に明けていく。身体の内は効かないから、何者かの意思か法則にまかせて導かれていくだけだ。行先になんらかの理由があるのかどうかさえもわからない。しばらくすると微かな水音が聞こえてきた。ノイヤール湖の水音とは違う波長だ。目を開けた世界が自分の知っている場所であることを祈りたい気持ちになる。

耳元で水音が聞こえていても、身体の内はすぐには戻ってこない。呼吸を整えてまぶたを開くことに神経を集中させる。かろうじて視界に捉えることができたのは少し離れたところに佇む灯台だった。ただ、それは赤い灯台のほうで、自分が暮らすウォーターランドにある白い灯台ではなかった。ノルシーさんもミリルさんも信じてくれない赤い灯台が目の前にある。ここはいったいどこなのだろうかとあらためて思う。ここでの唯一の構造物と言える灯台を凝視して見るものの、前に来た時と同じようであり、違うようでもあり記憶ははっきりしない。海のほうに目を向けても大海原が広がるだけで、そこにミドリ鮫が見えるわけでもなかった。

現実と意識世界の行き来には身体に相応の負荷がかかる。力を込めてやっとの思いで立ち上がった。冬眠からジノ婆さんが目覚めたときを追体験しているような気分だ。もしジノ婆さんの冬眠の時の行き先もここであったならどれほどすばらしいかと思う。同じ世界を共有できる人がいればこれほど心強いことはない。もちろん前に来た時に気配を感じたノート氏がどこかにいるのではないかという期待もなくはないけれど、現実世界で会ったこともない人がいるのを想像するのはなかなかむずかしい。

しばらくするうちに、防寒の服を着ているのに暑くも寒くもないことに気がついた。見た目の気候は春のように見えなくても、気温や気候をまったく感じられない。以前来た時もそうだったのだろうか。夢には色はないという話があるけれど、この世界には色はあるけど温度というものが無い。暑くも寒くもないし、暖かくも冷たくもない。まるで環境を受け止めるための感覚がなくなってしまったように感じられる。自分の身体に触れてもまるで死者のように体温を感じられない。色のない夢の世界と気温のない意識世界という違いは考えられるのだろうか。うまくするとそれが夢と意識世界の違いを見極める手立てになるのかもしれないと思った。

灯台を起点にした地形をみると、どう見てもウォーターランドにそっくりだ。平坦で今にも海に水没しそうなほど低い地形で、島中が緑に覆われている。少し歩いていると、そこかしこにユイローがあることに気がついた。というより、島中にユイローがあるというほうが正しいかも知れない。そう思うと島全体がユロミの匂いに包まれているような気さえしてくる。人の気配か動物の気配はないか、その痕跡を探してみるものの手がかりになるようなものを見つけることはできなかった。記憶と同じように立ち去る時にすべて消し去ったかのようなのだ。なにも持ち込まず、

なにも持ち出せない、そんな気配すら感じた。誰もいないし、何もないことに焦燥感を感じていたとき、灯台にノートがあったことを思い出し、そこでインクに会った記憶が蘇ってきた。あのとき感じた人の気配は、やはりノート氏ではなかったのかという期待が募る。

その後、急いで灯台のほうに向かった。そうしないと、ノートも消えてしまうのではないかと思えたのだ。悪くすると灯台さえもがなくなるのではないかという予感もしてきた。走っていると、灯台がかすかに振動しはじめた。それと同時にその後ろに隠れるようにして白い灯台があるのが見え始めた。灯台が二重写しになっているかのような不安定な視界に足が空回りしてくる。地面を蹴っているはずが、思うように前に進まない。何かが灯台を遠ざけているように感じる。足を緩めると、後ろに引き戻されていくような強迫観念を感じた。ウォーターランドにはない力を感じるのはいか。時間そのものに重力がかかっているような妙な重さを感じる。まるで時間が膨大なエネルギーを溜め込んでうねっているようだ。前回ここに来たときにはこれほどの違和感を感じなかった。時間に手で触れられる物ののような存在感を感じたのは初めてかも知れない。

疲れてその場にへたり込み、乾いた喉を潤そうと川から水をすくおうとしたときに、また自分ではない顔が水面に写った。それもそこにいるのは前とも違う人間だった。予想はしていたものの、この世界には自分さえもなく、自分であることの原因を見失ってしまいそうだ。形あるものはすべて変わるとでも言われているような不安定な感覚に襲われる。意識の世界だからそういうものだと思いながらも、自分であることによりどころがなくなっていくことの恐怖感想像を超える。自分の意識が揺らいでいることの結果としてこの世界の自分の姿が移ろっている気さえしてくる。

悲観的な気持ちが頭をもたげると、そもそもこの世界に来ることの意味や目的すらもよくわからなくなってくる。もしジノ婆さんもここに来ているとしたら、ここで何をするというのだろう。コピのいうドットのいる場所がここだとしたら、ますますこの場所の意味がとらえどころのないものになってくる。眠っているときに見る夢には結論がないままに延々と続く徒労感があるのと同じように、この世界もどこにもたどり着かないのではないかという思いもぬぐえない。なにも起こらず、何もはじまらない、ただあるだけの世界だとしたら、意味も目的も無用となってしまうのだろうか。

深い呼吸を繰り返し、少し気持ちを落ち着かせたところで、ゆっくりと一步一步を確かめるようにして灯台に向けて歩いた。ゆっくりであれば、引き戻されそうな力は感じなかった。30分ほどかけて灯台までなんとかたどり着き、文字はかなり見えにくくはなっているものの前と同じSODA YEAHAVEと書かれた六角錐があるのも確かめられた。前と同じ場所の証と思ってまちがない。これさえあればノイヤール湖にも帰れるという安心を得られる。たとえそれが自分の名前前でなくてもと自分に言い聞かせる。ドアを開くと、机の上にノートがあるのが見えた。その瞬間に全身の力が抜けてその場にへたり込んでしまった。唯一のよりどころは消えてなかった。

ノートを開き、しばらくめくっていくとこれまで目にしたことのない記述があることに気がついた。驚くことにそのひとつがこの島でも洪水が起きたというものだった。

***** ノート *****

この数日は海から溢れるように湧き出した水ですっかり島は水没してしまいました。大海原に灯台だけがかろうじて海面に姿を残すという恐ろしい体験でした。満月の時期ではあったのですが、満潮になるよりもさらに水面が上がるということが私の知識の範囲を超えて起きたことにただただ驚くばかりでした。その水が引いたあとには前となにも変わらない島が戻ってきて、水没した跡形さえもなくなってしまいました。それはまるですべての増水した水が一瞬にして蒸発してしまったようです。水の中に見えていたたくさんの魚影も幻だったかのように、一匹の魚も打ち上げられることなく消え去っていました。

***** ノート *****

現実世界と同じようなタイミングで洪水の記述が現れたことが不可思議に思えた。このノートがいつ書かれたものかはわからない。この場所では今がいつなのかということは重要ではないのだろうか。なによりも書いたその人が今どこにいるのかがわからない。

そして、もうひとつの新しい記述は、気まぐれと話をしたという内容だった。詳しいことは書かれていないけれど、何かの会話を交わしたのは間違いなさそうだ。これを読んだときに、インクのことを頭をよぎった。ジノ婆さんのように猫を気まぐれなやつと呼んでいたのではないだろうか。それにしても猫が口を聞いたとなるといよいよ何が起きたのかわからなくなる。詳しく書かれていないのは、それがあまりにも常識をはずれていることのため、ノート氏も常軌を逸したと思われる危険を感じたのかもしれない。実際、孤島に一人でいることの精神的なストレスの影響がなかったとは言えない。彼が楽園と思った島が徐々に心の負担になっていったということはなかっただろうか。

現実世界と関係するような出来事がこの世界でもノートに書かれている。まるで現実の記憶を組み直した夢でも見ているような気持ちになる。前は恐怖に襲われ時間をかけてじっくり見られなかったのを見落とした可能性はあるけれど、誰かによって加筆されたのではないかという疑念は拭えない。ノートが書き終わられてないのか、あるいは消えていたページが現れたのか。いずれにしても完全なノートではないことは間違いなさそうだ。ウォーターランドのノートもその一部を大水の際に失ったと聞いている。そしてこの地では今新しいページを目にしている。完全なノートというのは存在しないのかもしれない。そのとき、前回自分が書き残したページがここにはないことに気がついた。少なくともこの世界では常に存在するということが自体が常態ではないと考えたほうがよさそうだ。それにしても自分自身の顔も含めて絶対なものがないということはどういうことか。この世界では自分探しどころか、今の自分すら誰だかわからなくなってしまっただろう。自分を自分と言えるのはなぜかさえわからない。

ノートを読み終わり外に出ると景色が霞んでいて、淡くぼんやりとウォーターランドの建物が見えていた。ユイローの中を走っているコピの姿が見える。少し向こうにはダルビー船長の舟も停泊している。その景色は風に吹かれるようにゆらゆらと揺れて霧散していく。その後はもとのなにもない島に戻ってしまった。

第4 1話 内なること

ノートを読んでしまうと。この先ここで何かが起こるとも思えなくなってきた。唯一考えられるのは誰かが現れるのを待つということだけけれど、今のところその気配はまったくない。もしや時間がゆるりと動くことに遭遇しないか考えてみるものの、それがどうなることかもわからないので、その予兆を感じることもできない。何をすればいいのかわからず途方に暮れたまま時間が過ぎていく。

することがなくなると、この世界はどこにあるのかという疑問が頭をもたげてくる。夢と同じで内側にあるのであれば自分の頭の中というのがひとつの答えになりうるのだけど、ジノ婆あるいはノート氏が同じ場所を知っているなら身体を離れたところということになるだろう。そもそもノートを書く人がいるし、そのノートが現実世界にもあるのだから話が面倒になる。内と外が混ざり合っているような奇妙な世界だ。

いずれにしても、現実世界に戻る手立てを考えないといけない。あわよくばジノ婆さんが気づいてくれて、呼び戻してもらえないかと考えもするけれど、それも勝手な願いでしかなく、何の根拠もない妄想でしかない。なんとかしてこちらからも自分の意思で戻る方法を探さないといけない。最初に思いついたのはやはりユロミだった。ポケットの中を探るとまだノイヤールで採ったユロミが残っていた。何も考えずに指で潰してみた。神経を集中してなにかが起きるのを待った。

ことは簡単ではないらしく、待てども待てども何も起こりそうにない。前回戻れたときはどうしたかを考えてみると、ボートで海に出てミドリ鮫と遭遇したことしか思い出さない。海に出ればミドリ鮫のほうから迎えに来てくれるという話なのだろうか。前回見た赤いボートは今のところ見当たらない。どこかにあるのだろうか。考えられることはすべて試したほうがよいと思い、もう一度赤いボートを探してみることにした。

ところが、海に飲み込まれてしまったままなのか、努力の甲斐もなく赤いボートはどこにもみつからなかった。こうなると後はミドリ鮫を探すしかないけど、彼らはきっと海の中にいるのかと思ったときに、こちらに来るときには湖で鮫に会ったわけではなかったことに気づいた。ジノ婆さんが目覚めたときに入口が開いているのを感じて、ミドリ鮫を無意識のうちに呼んでいたような気がする。鮫は頭の中に現れたのではなかったか。

「入口」で、ウォーターランドの南にある海底の大きな穴を思い出した。地形が同じならこの赤い灯台のほうにも同じ穴が口を開いているのではないかと思えた。新しく見たノートの大水の話も少なからず関係しているかもしれない。ミドリ鮫がめぐりこんだのはあの穴ではなかったかとも思いはじめた。念のためユロミを少し掘り出してポケットに入れておいた。

ウォーターランドなら南の端にある海底の穴のある場所を目指した。あいかわらず時間の重さに歩みを妨げられ、思うように前に進めない。やっとのことで着いてみると、想像したとおり海の下に大きな穴が開いているのが見えた。ノートに書かれていた大水もこの穴から流れ出た水が原因に違いない。みつけたのはそれだけでなかった。穴の横には海底に沈む赤いボートの残骸が見えた。最後の望みに賭けて、近くに腰を下ろし変化が起きるのを待つことにした。

太陽は西から東へと周り時間が流れていく。ところが待てど暮らせどミドリ鮫も現れず、夕暮れ近くになっても何もおきそうになかった。自分の意思でこの世界に来るという無謀を戒められている気分になる。絶望感に打ちひしがれるのも時間の問題かと思われた。

そのときだ、突然どこからともなくインクが現れた。もはやなぜここにいるのかということはどうでもよくなっていた。相棒がいるだけで気が楽になるのを感じた。

「おまえが気まぐれなのかい？ そうなんだね？」

顔を覗き込むと、ユロミカンデ、ミドリザメライノルという声が聞こえた気がした。インクが話したようにも、頭の中から聞こえてきたような気もする。それさえもどちらでもよいほどになんとかしたかった。急いでポケットからあるだけのユロミをつかみ口に含んだ。力をこめて噛むと砂利を噛むようなザラザラした感じとともに痺れが口いっぱいに広がり、その後は古い本の匂いに似た香りが鼻を突いた。一心にミドリ鮫に心を集中して会いたいと繰り返した。気持ちが鼻腔の上のあたりに集中しているのがわかる。ユロミの覚醒作用が急速に効き始めたようだ。するとどうだろう、穴から光輝く水が湧き出してくるのがまぶたの後ろに見えてきた。交錯している光はドットトラウトに違いない。お爺さんのいう大漁の時間が突然訪れたかのようだ。そうしているうちに待ちに待ったミドリ鮫の明滅する大きな身体が寝返るようにして目の前に現れた。穴から来たのか、自分の頭の中から来たのかわからない現れ方に驚いた。感情を感じさせない大きな黒い目が見えたと思ったら、その漆黒の目がどんどん広がり、世界が暗闇に取り込まれてしまった。まるでミドリ鮫に飲み込まれていくような感覚だ。

身体から力が抜けて、大きな闇の境界域に身を任せる。時間を戻すようにミドリ鮫が後ろ向きに泳ぎ、六角錐が一点に修練していく。そこを過ぎるとかすかな光が見えてきた。抜け出せた。帰りも自分の意思で切り抜けられた。意識世界を現実世界に寄せることに成功した満足感が全身を包んでいるのがわかる。

「ブクブク……キコエナイカ……」

聞こえる。ノイヤールの水の音だ。

第42話 戻り道

時間の回転が現実世界に合わせ早まっているのがわかる。時間も希薄したような軽さを感じる。そうしているうちに明かりで満たされた世界が開けていった。前と同じ場所のようだ。意識の中から戻ったのであれば、自分の身体のあるところに戻るのは当たり前ということなのだろう。それでも、なんとか戻ることができたことに胸を撫で下ろした。

目の前の人の影が少しずつ輪郭を表して、しばらくするとそれがジノ婆さんだということがわかった。その間に時間はさらに回転を上げていった。ジノ婆さんが戻してくれたのであれば感謝しないといけない。ポケットを探ってみたけれどユロミは一粒も残っていなかった。

ジノ婆さんが何かを聞くような仕草をしていた。

「水の声が聞こえただろう」

ジノ婆さんの表情がにやりと緩んだように見えた。今、戻ってきたことをわかっているとでもいうような表情だ。向こうで聞こえた水の音はこちらとは違ったが、それがなにかを知らせているとは思えなかった。もしかするとノートに書いてあった大水のことが水の声とでも言っているのだろうか。

「ジノ婆には聞こえるらしいです」とコノンさんが言った。

「地の底の水が、呻き、ドットのざわめきを受け止めておるだろう」

「ドットというのは？」

あらためてドットが何かを聞いてみた。聞かないですますわけにはいかない気がした。

「ノイヤールに自分で感じるものじゃ」

答えは前と変わらなかった。ノイヤールの先にある意識世界で感じたのは.....気温のないことが最初に頭に浮かんだ。そのあと思い出すのは、時間の重さだろうか。それがドットだということだろうか。そうだとしたら空気をドットというようなものではないのかと思う。コピが言った、”いる”という対象にはなりえない。どちらも、いるとかいないとか言えるようなものではない。ドットが仮に水の神であったとしてもその姿や気配を感じることはなかった。

意識世界が自分の頭の中で創造されている世界だとしたなら、ジノ婆さんの言っていることは

、自分で想像して考えなさいと言っているとも考えられる。目を閉じているジノ婆さんはこちらが意識世界にいたことをわかっていて、自分で答えを出すのを待っているのだろうか。これではまるで精神修養でもしているのと同じだ。

答えも出ないうちに、コノンさんがリアヌシティに戻らないといけないので、そろそろ戻りますと言った。こちらも時間があればもう一度公書館に立ち寄りたいたいと考えていたので、いっしょにお暇することにした。ジノ婆さんが元気なのを確認できて、ユイローも集められたからできることはやった。なによりジノ婆さんと面識が持てたことは大きな収穫だった。そして自分の意思で意識世界に行けたのは何ものにも変えがたい体験になった。ジノ婆さんともきっといつかお互いの本音で話せる日が来るだろうと思いながら家を出た。

「コノンさん、ジノ婆さんはどういう巫女なんですか」

「どういう？」

「何ができるとか、どんなことを言うとか……」

「なにかおかしかったですか」

「いや、その、なんというか、こちらの心を読まれているというか……」

「オルターさんも感じましたか。みなさんそう言われますよ」

嘘はつけないですねといううれしそうに微笑みながらこちらを見た。

「前世かなにかが見えるとか、予言のようなことを言うこともあるという話も聞いたことがありますけど」

「聞けば私も教えてもらえますか」

「ジノ婆ははっきり言わない巫女ですね。言わないのが幸せだと思っているのか。言っても何も変わらないと思っているのか」

そう聞くと、お祖父さんの言っていた、なるようになるという話に近い感じもしてくる。村にとっては何でも知っているジノ婆がいること自体に意味を感じているのかもしれない。答えを求めているわけではないのだろう。

「ユイロー採りを手伝いに来たと言ったら、納得していましたよ」

「私にはよく気をつけるようにといたしますけど」

コノンさんの話を聞くと、ユイローの功罪についての話をしているようだ。簡単に言うと使いすぎに注意しろとのことらしい。やはり幻覚症状が出ることもあるのだろう。

「今度はオルターさん一人でも大丈夫そうですね」

「ユイローに気をつけながらですね」と言うと、くれぐれもという言葉が返ってきた。

荷車に山積みになったユイローの葉を見ていると赤い灯台のユイローを思い出す。あと何度あの場所に行くことになるのだろう。行く目的もわからず、終わりのない旅を続けているような徒労感を感じていた。

公書館への分岐点でコノンさんと分かれることにした。

「オルターさん、また遊びにきてください」

手を振って、荷車を押すコノンさんを見送り、こちらは公書館への小道に入った。木々に囲まれたこの場所に戻ると心の底から落ち着きを取り戻せる。

第43話 図書目録

公書簡に立ち寄ったのは、意識世界のことについて何か書いたものはないかという期待からだった。鉄は厚いうちに打ての精神だ。門前には頼もしいホーラーが待ち構えるように立っていた。

「ホーラーさん、こんにちは」

「ホーラーでいい」

「ありがとうございます。今日は、ジノ婆さんのところからの帰りです。また、少し見せてください」

「ジノ婆は元気だったか」と言うなり、何も聞かずにドアを開けて中に通してくれた。ホーラーにとってもジノ婆さんは特別の人ようだ。

ぼんやりした頭でどこからはじめるか漠然と館内を眺めていると、様子が気になったのかホーラーのほうから声をかけてきた。

「どうした」

「うーん、いろいろと……たとえば、ファントリアというような……」

意識世界に関するものがないか見たい思ったけれど、それに見合ったタイトルを思いつかなかった。咄嗟に出たのがファントリアという言葉だった。

「ない」

即答だった。いきなり否定しないで、少しは見てみないとわからないだろうと思った。石窟にナーシュさんが残した言葉なのだからないはずはない。

「少し見てみますね」多少の不満も込めて言った。

「ないものはない。名前は全部知っている」

無駄なことはするなと言わんばかりの言い方で駄目出しされてしまった。ほんとうは早く帰りたいかたかったのかもしれないと疑いたくなった。

「本のタイトルをすべて覚えているということ？」と苦言のつもりで言ってみた。

すると目次ぐらいまでは覚えていると平然とした顔で言った。もしかすると、ホーラーの力を侮っていたかもしれない。どうやら蔵書内容を把握している司書のような役割までこなしているらしい。もしかするとかなり読んでいるのかもしれないとさえ思えてきた。内容まではわからないにしても記憶だけは飛びぬけて高い可能性がある。

ためしにミドリ鮫の本はあるか聞いてみると、『漁師の伝承』という本が1冊あると即答した。恐ろしい記憶力だ。ただの気難しい力持ちとだと思っていたのが、とんでもない思い違いだった。書名や著者名、目次、章などまですべて覚えているという。これは番人なんかでなく、ナーシュさんの秘書になりうる力を持っていたかもしれない。過去に起きたできごとの日にちや天気までも完全に記憶しているようだった。当然、自分たちが最初に来た日やその時間までもしっかり覚えていた。人は見かけによらないとはよく言ったものだ。

着いて早々、図書館に来たのか、ホーラーに会いに来たのかわからなくなってしまった。チャルド川の記録やドットトラウトの生態、果てはソダーという名前の出ている本まで、何でも瞬時に答えてくれた。ただただ、その記憶力に驚くばかりだ。彼がいれば目録カードも不要だし、棚の分類さえ不要というわけだ。

早速、ミドリ鮫の出ているという本を出してもらった。表紙の絵はまさにミドリ鮫そのものだった。それだけで実際に見た人がいることがわかる。内容は漁をしたり目撃した人の体験談がまとめられていて、その多さに驚いた。見た場所はさまざま、中には信憑性を疑うような内容まで含まれていた。読み込んでいくと、お祖父さんの話にも通じる、村の男たちの証言記録になっていることがわかった。それぞれには本人の署名がされていた。奥付にはミドリ鮫を深追いすることなかれと書かれている。そこから当時から特別なものと見られていたことがわかる。洪水をミドリ鮫漁のたたりのように考えたのかもしれない。実際、読んでみると、漁といっても必ずしも食用のためというわけではなく、精神的な関係を持つようとしていたように感じられた。ミドリ鮫を崇めていたようなふしすら読み取れる。彼らも意識世界で見たのだろうか。もしそうだとしたら、赤い灯台にあれほどまで痕跡が残されていないのに違和感を感じる。現実の世界にいたと考えるとほうがいいのかもしれないけど、記録されている場所が今となってはどこなのかわからない。

ミドリ鮫の本を見ているうちに、ウォーターランドに船長が持ってきた水の本のことを思い出し、ホーラーに聞くと、すぐに棚から取り出した。同じ本があったことに驚き、急いでミドリ鮫に関する記述を探した。さすがのホーラーもこの本にミドリ鮫漁を記述する一文があるところまでは気がつかなかったようだ。そうなるとファントリアの若干の記述がどこかにあって、まだホーラーの目にとまっていないだけかもしれないという可能性も捨てられなくなる。

水のご利益で命を救われたというミドリ鮫漁の漁師の話から、ウオーターランドの湧き出る水を手に入れようとする人が絶えない。一部では聖水だと言う人まで現れて、その水を得たものはすべての災いから解放されるとまで言われた。そして、同じ地域に生息するミドリ鮫も神の使いとして崇められるようになった……そうだ、神の使いと思われていたのだった。姿を隠し続けていたミドリ鮫の背びれがほんの少し見えてきた。次に遭遇したときには、どうにかして彼らと心を通わせてみたいと思い、それができそうな気分になってきた。

第44話 旅の途上の小説

次にソダーという名前が出ている本をみせてもらったが、こちらは紳士録か出生記録と思われた。茶色く色あせた紙が経年を感じさせる。気になっているソダー・ヤイハブを見てみると。確かにその名前の人物が数名いて、いずれにも生年月日と人によっては没年まで書かれていた。100年前の水害以降の記録は途絶えてしまったようだ。生きていれば、いずれも年齢は優に200歳を超えているはずだ。

その中の一人の欄に「南方綺譚」と書き添えられている人がいた。それをホーラーに見せると、驚くことにその本がここにあるという。すぐに奥から探し出してきてくれた。色あせた白い表紙にはタイトルもなにもない。パラパラとめくって見ると、期待した紀行文ではなく、小説のようだった。まるでロビンソンクルーソーを真似た冒険談のようだ。ところどころ飛ばし読みしてみると、ウォーターランドと共通するところも多いし、とくに旅立ちから島に着くまでの書き出しがノートの記事に酷似している。ノート自体の冒頭部分もあとから書きたされた小説のような体裁をとっていたことを考えると、このソダーという人がノート氏だったのではないかと考えて間違いないと思えてくる。ソダーという六角錐まであるのだからその可能性は極めて高いだろう。

「南方綺譚」を後世への記録とするつもりであったなら、この本こそがノートの完成版ということになる。ただ、小説という体裁をとられると、何が事実なのかがわからなくなる。水玉模様の動物や木になる野菜が言葉をしゃべるといふところや、サメとの共同生活など作り話と思えるところも多い。逆にゆるりと動く時間のことは具体的に何も書かれていないようだった。ジギ婆さんの誰にも言うなという言葉を守ったのだろうか。

そして最終ページには「南方綺譚」という文字とともに、なぜか旅の途上でと書かれていた。まだ旅は終わっていないのにこの本がここにある。ノートをなぜ紀行文として残していないのだろうか。あったけれど、なくなったのなら残念なことだが。あまりに現実離れをした経験であったために紀行文として残せなかったという推論もできる。

「この本の続編はあるのかな」

「同じタイトルの本はない」

ホーラーのそっけない答えにはいつもやる気をそがれる。悪気はないのだろうけど、疲れが増すのも事実だ。

なんとか気を取り直して、ウォーターランドという本はあるか聞いてみたが、こちらもないとあっさり片付けられてしまった。

「南方綺譚」にはいくつか紙片がはさまれていた。それをホーラーに聞くと、はずさないようにとの注意を受けた。理由はナーシュさんが入れたものだからということだった。ナーシュさんもこの物語に何か気になることがあったに違いない。

もしやと思い、この本にファントリアは出てこないかと聞くと、前と同じでファントリアはないと言い切った。時間をかけて読んでみたいと思い貸し出しを頼んでみたけど、案の定駄目だと一括されてしまった。

融通のきかないホーラーだけれど、その記憶力のおかげで思わぬ進展を得られたわけだから文句も言えない。ただ、今日は忙しすぎた。少し身体を休めないと。意識世界の重さに今頃になって身体が悲鳴をあげている。疲れてない日にまた来ることを伝えて公書館を後にした。ホーラーの体力と記憶が少し恨めしく思える時間だった。

第45話 あたらしい船

お祖父さんとお祖母さんの家に戻ると疲れもピークになっていた。

ジノ婆さんの話はもうコノンさんから聞いたとのことだったけれど、あいかわらず元気だという話でひとしきり盛り上がることになった。

「寝るのがね、長生の秘訣だよ」

「村の人はみんなそうなんですか？」

「どうだかわからないけど、ほら、外に出ている人も少ないだろ？」

窓の外を見ながらお祖母さんが言った。

「100歳もすぎれば、みんなおんなじだ。ジノ婆なんか、ほとんど寝てるからな」お祖父さん寝るのが当然だというような口ぶりだ。

「お二人は、寝ているときに夢は見られますか？」

いい機会だと思ったので聞いてみた。

「若いころはよく見たもんだけど、このごろはそうでもないね」

話を聞く限りでは、お祖父さんとお祖母さんが意識世界に行っているということはなさそうだ。

「オルターさん、夢と言えばな、ロウルさんが新しい舟の絵を持って来てな。みんなの意見を聞いているんだそうだ」

お祖父さんはそう言うと、隣の部屋から丸めた紙を大事そうに持ってきて、テーブルの上に広げた。

「これは？」

「どうだ、大きいだろ？ 大きい船を作りたいんだと。ほら、この前言ってた洪水のときな」

「ロウルさんがですか？」

「オルターさんと公書館に行ったときに、暖めていたアイデアを話す気になったんだと。見てくれと言って置いてったさ」

ロウルさんも石窟に行っていて思うことがあるのだろう。同じように洪水のことが気になっているに違いない。もしかすると、公書館に船の設計図もあったのかもしれない。

「それにしても、これはなかり大きくないですか？」

「そうさ、村人全員を乗せるんだと張り切ってた。若いというのはいいもんだな」

お祖父さんも洪水を受け入れると言いながらも、ロウルさんの気持ちはうれしいようだ。人間の心は複雑なものだ。自然の摂理をすべて受け入れるのは必ずしも本位ではないのかもしれない。自然に抗わず幸せになれるのであれば、それがいいに決まっている。

「何か意見があったら、今度会ったときに話してやってくれ」

「今度、公書館に言ったときに、関連する本があれば見てみますね」

「じゃあ、この絵はオルターさんに預けておくから。この船の前にうちの舟を直してもらおうほうが先だからな」

そう言うと、お祖父さんは絵をもとのように丸めて、大事そうに棚の上に置いた。その扱いを見れば、なんだかんだ言いながらも、ロウルさんに感謝しているのがわかる。

「そう言えば、ホーラーの記憶はすごいですね。ミドリ鮫の本もすぐにわかりましたよ」

「あのホーラーがかい？ ほんとうかね」

お祖母さんは疑心暗鬼のような顔をしている。お祖父さんのほうはミドリ鮫と聞いて、興味を持ったようだった。

「何が書いてあった？」

「遭遇した証言というか」

「村のものにとっては、見つけるのが成人の証だったからな。自分らより前の方は記録も残していたんだろうな。そういやあ、オルターさんはまだ鮫塚に行っていないな。今度教えてやろうな」

「鮫塚？」

「ジノ婆の小屋の近くにある。そこで祈ると鮫に会えるという言い伝えだ」

「飢饉のときは鮫に助けられたこともあったらしくて、村の守り神として祭られているらしいよ。ただ、男神と言ってわたしらは女人禁制さ。証言録っていうのもどうだかねえ」

お祖母さんは不満もあってか、あまり興味なさげに言った。

「この村がミドリ鮫に守られているのは間違いない話だ」

お祖父さんはミドリ鮫に対するお祖母さんの言い方が気に入らないようだ。この信頼感は信仰と同じなのだろうか。それとも、自分と同じ意識世界への案内人としての信頼なのだろうか。

「オルターさん、ミドリ鮫なんてほんとにいるのかね」

お祖母さんに言われて言葉に詰まった。いると言いたいけど、どこにいるといえればいいのかわからない。自分ならあの証言録に何と書き残すだろうか。村の男たちがどういう気持ちで書いていたのか。もう一度ゆっくり読んでみようと思った。

「いるに決まってるだろ」

お祖父さんが困っているのを察してくれてか、代わりに答えてくれた。それはこちらにも信じることを求めているようでもあった。

「それより、ロウルさんは船のことを何と言っているんですか」

自分にとっては船の話のほうが気になる。洪水が近いのだからまずこちらが優先だろう。

「過去の話を知りたいというのと、材料になる大きな木がないかとか、みんな乗ってくれそうかとか、いろいろだな」

「作るとするとどれぐらいかかりそうなんですか」

「まあ、2、3年ってところじゃないか。手伝える人も多くないからな」

間に合うかという質問はしなかった。そう聞くと間に合わなくてもいいという話になるだろう。図面を見ると、乗り心地より荒波でも沈まないことを優先しているように見えた。それでいいと思った。

「土地が水没してしまったら、この船で別の土地に移るのかね。そこまでしないといけないのかね」

お祖母さんもこの地を離れてまで、生きることに関心はないようだ。増水した水が引くまでの退避場所にもなりますよねと言うと、それがいいねとうれしそうに言った。

ナーシュさんのいない今でも、ロウルさんも、ホーラーもしっかりこの村を守ろうとしている。彼らの思いはきっとこの村を救ってくれるはずだ。自分もそのためにこの村に来たのではないかと思えてきた。そして、この村を救うことが意識世界との繋がりまでも救うことになるのかもしれない。

ロウルさんの描いた船の絵には本はもとより、ウサギやユイローの束までも描かれていた。まるで村のすべてを載せようとしているようだ。ナーシュさんの志を別の形で追いかけるつもりなのかもしれない。自分にもできることはあるだろうか。

第46話 つづく

長いあいだ連載におつきあいいただきありがとうございました。

こちらのサイトの閉鎖が正式に告知されましたので、『仮想の水』は下記のサイトにて継続させていただくことにしました。

9月まではこちらも残しておきますが、更新はすべて新しいサイトで行うこととなりますのでよろしく願いいたします。

<https://ncode.syosetu.com/n8156fl/>

この物語は、現実世界の流れと同じように、終わりのない物語となっています。

1週1話のペースで進んでいきますので、ごゆっくりお楽しみ下さい。

仮想の水 - Waterland of Inworld -



<http://p.booklog.jp/book/39348>

著者 : uota noel

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/uota/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://waterland123novel.wordpress.com/>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39348>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.